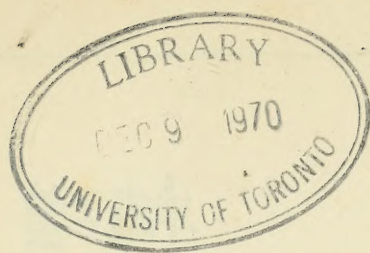
佐伯有義校訂標注

增補

六國史

卷七

朝日新聞社藏版

装畫・・田中咄哉州

續日本後紀

續日本後紀

解説

一、書名

續日本後紀は、仁明天皇御一代の記錄にて、天長十年二月より嘉祥三年三月に至るまで、十八年間の事を前史の體に倣ひて編修せり。序文に起レ自二天長十年二月乙酉一、訖二于嘉祥三年三月己亥一、惣十八年、據二春秋之正體一、聯二甲子一以銓次、考以二始終一、分二其首尾一、都爲二廿卷一、名曰二續日本後紀一と見え、書名及卷數に就きて、釋日本紀・本朝書籍目錄等、諸書の記載するところ何れも同じ。

二、編修

此書は、文德天皇齊衡二年二月勅撰の詔を下され、淸和天皇貞觀十一年八月撰修功成りて奏上せり。今其の沿革を考ふるに、序文に

伏惟先皇帝（中略）承和撫運、歷稔惟長、善政森羅、嘉暮猥藉、未レ編二簡牘一、恐或湮淪、爰詔二太政

大臣從一位臣藤原朝臣良房、右大臣從二位兼左近衞大將臣藤原朝臣良相、大納言從三位民部卿兼太皇太后宮大夫臣伴宿禰善男、參議正四位下行式部大輔臣春澄朝臣善繩、散位從五位下臣縣犬養大宿禰貞守等、因二循故實一、令三以撰二修

と見えて、勅命せられし氏名は明かなれど、其の年月を記されざるが、文德實錄卷七に、

齊衡二年二月丁卯、詔二右大臣正二位兼左近衞大將藤原朝臣良房、參議從三位兼行中宮大夫讃岐守伴宿禰善男、從四位下行刑部大輔春澄朝臣善繩、正六位上行少外記安野宿禰豐道等、修二國史一、

と見え、之に依りて此書撰修の勅命ありし年月は明かなり。實錄に據るに良房・善男・善繩の名は見ゆれど、良相・貞守の名のもれたるは、此の二人は是より以後に此の事に與らしめられしならむ。文德天皇は、此の勅命ありし後五年にて崩御あらせられしかば、御在位中には未だ完成に至らず。尋いで淸和天皇御卽位あらせられ、先旨の未だ竟へざるを恨み、速に之を成すべしと重ねて勅ありしが、善男は貞觀八年九月應天門を燒きし罪によりて、伊豆國に配流せられ、右大臣良相は同九年十月薨去あり、貞守は是より先同五年駿河守となりて赴任せしかば、良房・善繩の二人、少外記安

野豊道以下を指揮して編修を急ぎ、十一年八月に至り、始めて功成りて奏上せり、此の史奏上の事は、三代實錄にも記載すべきに、其の事の見えざるはいかゞせしにか、貞觀格式奏上の事は詳かに載せられ、本史奏上の記錄の少しも見えざるは、蓋し不審しき事なりと云ふべし。

三、撰者

此の書物撰の命を蒙りしは、

太政大臣　藤原朝臣良房
右大臣　藤原朝臣良相
大納言　伴宿禰善男
參議　春澄朝臣善繩
散位　縣犬養宿禰貞守
少外記　安野宿禰豊道

以上の人々なるが、參議以上の顯職に在りし人は、此にあらためて贅せず、其の他の人々が官途に於ける閱歷を述べむに、

縣犬養宿禰貞守は、姓氏錄左京神別に、縣犬養宿禰、神魂命八世孫、阿居太都命之後也と見えて、左京に住み天神の裔なるが、漢籍に通じ、文筆に達したるを以て、少内記に任せられ、散位頭、駿河守等を歷任せり。此の人の文筆に長じたることは、嘉祥二年二月丙戌紀に以少内記正七位上縣犬養大宿禰貞守、爲存問渤海使、發遣於能登國同三月壬午紀に以存問使少内記正七位下縣犬養大宿禰貞守、爲兼領渤海客使など見えたるにて知らる。國史編修の事に與らしめ給ひしも、内記として其の道に通じたるに因れるなるべし。然るに本史編修の半途にして、地方官に任じたることは、貞觀五年二月十日癸卯紀に、散位頭從五位下縣犬養大宿禰貞守爲駿河守とあるにて明かなり。又此の人の從五位下に敍せられしことは、文德紀齊衡二年正月戊子紀に見え、本史勅撰の命ありし前月なり。

安野宿禰豐道は、初め内記に任せられ、後外記に轉じたり。少内記たりし事は、嘉祥二年五月乙丑紀に、遣少内記從七位下安野宿禰豐道等於鴻臚館、賜勅書并太政官牒と見えたるが、後外記に轉じ、位階は從七位下より漸次昇進して、齊衡二年には正六位上に至れり。

四、異本

續日本後紀の寫本はいと多し。されど現存するものは、いづれも天文本の複寫にて、其の年代に多少の差あれど、同一系統のものなり。唯こゝに東山御文庫本の十五・十六の兩卷のみは、些か系統を異にせりと思はる。依りて其の由を少しく述べむに、天文本は天文中三條西公條公が書寫せられし本なるが、其の原本は、大治の古寫本にて、神祇伯顯仲の子源忠季の所持せしものなり。其の證は內閣本・谷森本等の奧書を考ふるに

卷三、本云保丶二年二月三日未時、梳二頭髮一間、偃見之畢、宮內大輔源忠季、(閣本)

卷四、本云保延二年三月二日未時見了、(閣本・尾本)

卷五、保延二年三月二日酉刻見、于時雨降、(閣本)

卷七、本云保延四年七月披閱了、(西本)

卷十、本云大治元年四月十七日、以二巳剋一書寫了、

保延二年七月廿九日見了、司農侍郎源判、(西本・谷本)

右の如く見えたり、但し谷森本は大治の治を始と誤り、七月廿九日の九を六とせり、卷十に司農侍郎源判とある司農侍郎は宮內大輔の唐名なり、されば卷三に宮內大

輔源忠季とあると同人なること疑なく、忠季は尊卑分脈に據るに、神祇伯顯仲の子にして、金葉及詞花集の撰者の一人なり。今其の系譜を左に示さむ、

具平親王―師房(右大臣)―顯房(右大臣)―顯仲(顯房公子(二男)雅實公舍弟 神祇伯從三位、金葉以下作者イ 母肥前守藤定成女 保延四三廿九薨)―忠季(金詞作者一イ 正五下 宮内大輔 母安藝守俊輔女)

此に擧げたる五卷以外には、保延云々の奥書無ければ、忠季所傳の本なりとは斷定し難けれど、其の他の十五卷も恐くは忠季所傳の本にて、大治元年或は其の前後に亘りて書寫せしものなるべし。大治・保延は幷に崇德天皇の御宇の年號にて、大治元年は保延二年より十一年前なり。忠季の父顯仲は神祇伯にて、金葉集以下の作者なるが、其の妹には待賢門院堀川・大夫典侍・待賢門院兵衞等女流の歌人輩出し、其の弟にして天台座主權僧正俊尭あり。文學に秀でたる血統の人なるは大方疑ひなきものゝ如く、此書も恐らくは父顯仲より讓られしものなるべし。

斯くて其の後幾度か轉變して、天文中三條西公條公が、國史古寫本の蒐集に苦心せられし際に、之を原本として謄寫せられしもの卽ち天文本なり。今諸本の奥書を閱するに

卷一三、天文二六廿日卒馳筆(閣本)

卷四、天文二八十六未時終書了(閣本・尾本、終書了の三字は尾本のみにあり)

卷五、天文二十月五日終書(閣本)

卷六、天文二年小春廿六日直禁中小番於灯下馳筆終書功了(西本)

卷七、天文二十一廿二夜了(西本)

卷八、天文三上元日書功了(西本)

卷九、天文三正廿八了(西本)

卷十、天文三閏正月六日於禁中番衆所灯下終書了、今夜甚雨(西本・谷本)

卷十一、天文三閏正月九日夜於灯下終功了(西本)

卷十二、天文三九四了此間數月懈怠(西本)

卷十六、天文四二八日於灯下終(宮本・谷本・中本・安本)

卷十七、天文四二十五書寫了(宮本・谷本・中本・安本)

卷十八、天文四三二了(版本・閣本・前本・宮本・中本・淀本・安本)

卷十九、天文四三六日(谷本・中本、但中本には二日とす)

卷二十、天文四年三月七日巳刻立筆中廻終功了(中本・谷本・安本)

とあり、此の奥書に據るに、卷一及二には奥書見えねど、三以下を通覽して、天文二年

より始め、四年三月までに書寫を終られしこと明かなり。是卽ち天文の原本にて、三條西家に之を傳へられたり。公條は實隆の子にて、天文二年には四十七歳にて權大納言正二位たりき。同十年内大臣に任じ、十一年右大臣に轉ず。十二年辭官、十三年二月落飾す。內閣慶長寫本を始め、尾州本・前田本・谷森本・中原本・宮崎本・安田本等何れも此の天文本の複寫なること、此の奧書にて明かなるが、以下現存の古寫本版本等に就きて、其の概要を述べむ。

(一) 寫　本

(一) 三條西本

卽ち天文本の原本なるが、今三條西家に存せずといふ。谷森翁校合本に、嘉永六年二月二日以稱名院右大臣眞蹟御本、遂ニ批校了、平種案とあり、當時尙ほ同家に存せしこと明かなるが、其の後いかになりしか詳ならず。此の外に高柳光壽氏所藏の本二卷あり、卷五と卷八となり。卷八の首端に、保延二卷之內壹卷、三條西傳來、弘化二寫とあり。されば此の二卷は弘化二年に三條西家本を寫せるものにて、眞本の面影を傳へたるものといふべし。

(二) 一條家本

三條西本と酷類せる良本なりと思へど、今一條公爵家に存せずといふ。井上賴圀翁校合本卷一奧書に天保十五年六月廿日以二桃華本三條西本一校合了、文會堂主人とありて、卷六に至るまで桃華本の名見ゆ。蓋桃華は一條家なり。

(三) 內閣本　二十卷十册

慶長の寫本にて、來歷志本と稱し、天文本の複寫なり。纂話には慶長二年寫本とあり。

(四) 尾州家本　二十卷十册

內閣本に能く相似たり。同じく天文本の複寫なり。內藤廣前之を校合して同志に示したるより、學者間に大いに之を尊重せり。

(五) 前田家本　二十卷四册

內閣本・尾州家本と能く類似せり。書寫の年代詳ならざれど、寛永を下らざるべし。松雲公時代に蒐集せられし寫本の一なり。

(六) 中原本　二十卷四册

中原職忠の藏本にて、谷森善臣翁の手に歸し、現に其の令息建男氏所藏せらる。職忠は寛永頃の人なれば、書寫の年代も是より下らざるべし。體裁其の他前田本とよく

相似たれど奥書は無し。

(七)谷森本　二十卷四册

谷森翁の蒐集せられしものにて、堂上華族の家にありしものなるべし。中原本とよく相似たり。

(八)石山本　二十卷十册

是も谷森翁の蒐められし本にて、石山氏閑齋の印あり。よりて假に石山本と名づく。書寫の年代は古からざれど、內容前揭の諸本と相似たり。

(九)林崎文庫本　三卷卷一・二・三

天明四年村井古巖の林崎文庫に奉納せし本にて、書寫の年代詳ならざれど善本なり。唯惜むらくは卷一以下僅に三卷を存するのみ。

(一〇)宮崎文庫本　二十卷二十册

慶安二年荒木田盛澄以下十名の有志自ら書寫して奉納せし本なり。出口延佳を始め岩出末清・與村弘正等類史・紀略等を以て校合せり。水戶校訂本と似類せる所多きは此の故なるべし。

(二)淀本　二十卷十册

舊淀藩主稻葉子爵家の藏本にて、今神道本局の所藏となる。奥書なし。

(三) 塙本 二十卷十冊

一も奥書なく、書寫の年代詳ならざれど、石山本と彷彿たり。和學講談所及淺草文庫の印あり。内閣文庫に所藏せらる。

(三) 堀本

近江の人堀杏庵の藏本なり、山崎氏校合本に天保癸卯五月廿六日以堀氏本一校、元融とあり、村尾元融親しく原本に就きて校合せりといふ。今其の所在詳ならず。

(四) 細井本

細井昌阿の藏本なり。狩谷棭齋の校合本に、文政七甲申年十月十五日、友人細井昌阿所遺古鈔本を以て校合すとあり。山崎氏も亦細本を以て親しく校合せりといふ。今所在詳ならず。以下脇坂本に至るまで何れも同じ。

(五) 安田本

安田躬弦の藏本なり。同じく棭齋の校合本に、寛政八年八月安田躬弦の藏本を以て校合すと見ゆ。

(六) 井上本

井上作左衞門の藏本なり。狩谷校本に寛政八年之を以て校合せりといふ。

(七) **大橋本**

大橋正樹の藏本なり。狩谷校本に大本とあるもの是なり。但し校合の年月を記さず。

(八) **脇坂本**

八雲軒脇坂淡路守安元の遺本なり。十七卷以下は缺けたりといふ。伴氏校合本に天保十三年十月本書を以て校合すとあり。

(二) 版本

(一) **寛文版本**　二十卷

寛文八年十月立野春節の跋あり。但し塙本には春節の書ける明暦四年の跋文あり。之に據れば、明暦三年續日本紀出版の翌年之に續きて出版せむとせしが、故ありて遷延し、寛文八年に至りて上梓せしものなるべし。

(二) **寛政再刻本**　二十卷十冊

卷二十の卷尾に、天明八申春燒失寛政七乙卯春再刻、洛三條出雲寺林元章とあり再刻なれば原版と同一なるべきに、誤字いと多し。山崎氏之を知らずして底本とせし

が故に、同氏校訂本には徒勞頗る多し。

（三）　校　訂　本

（一）水戸校訂本　二十卷十册

奥書に元祿肆年歳次辛未正月貳拾陸日前中納言從三位水戸侯源朝臣光圀謹識とあり。

（二）山崎知雄校訂本　二十卷十册

本書凡例に安政四年孟冬望後一日とあれど、卷四に安政改元歳次甲寅十二月七日書寫成、知雄。同五に安政三年歳次丙辰正月三日起筆同月廿七日成、知雄とあり以下毎册書寫の年月日を書し、卷二十の終に安政四年歳次丁巳後五月書寫卒業、同五年歳次戊午夏六月廿七日一校了、全部卒業、山崎知雄時年六十一とあり。されば安政元年より起業、其の事の全く成りしは同五年六月なり。無窮會に現存のものは知雄自筆の原本にて、之を閲覽するに、其の勞苦の跡歴々たり。

（三）續日本後紀纂詁　二十卷十册　村岡良弼

明治三十七年一月に成り、之を刊行したるは四十五年三月なり。

五、錯簡と脫漏

日本書紀を始め、其の他にも多少の錯簡なきにあらざれど、本史の如く甚しきはよし。就中卷一の如きは殆ど亂麻の如く、手を束ねて茫然たらしむるものあり。いかにして斯く錯亂せしか、徵すべきものなけれど、應仁の亂、若しくは其の他の事變に遭ひて、毎紙飛散し、或は寸斷せられしものありしを、拾ひ集めて卷册となせるより、斯くの如き錯亂を來せるなるべし。

次に本書には脫文頗る多し。類聚國史及日本紀略と對照するに、事實の干支と共に缺けたるもの少からず。或は云々と書して本文を略したるものあり、是は傳寫の際に勞を厭ひて省きしものなり。此の例は三代實錄にも多し。省略の年代は詳ならざれど、蓋天文以前なるべし。其は天文中三條西公條卿が書寫せられしは、此の書の散逸せむことを恐れ、勞苦を厭はずして精勵せられしを見れば、一字一句と雖も之を省略せらるゝことあるまじ。又大治・保延は延喜以後既に二百餘年を經たれど、日本紀略の成りし時代とは、さまで距たらず、然るに紀略には本書に缺けたる文を摘錄せるに徵すれば、當時は未だ省略せられざりしなるべし。されば保延以後、天文以前

書寫の際に省略したりと見るを穩當とすべし。之に據りて考ふるに、現在の本史及三代實錄は完本なりといふを得ずされど日本後紀の四十卷中三十卷を失へるに比すれば幸なりといふべし。

校訂標注 續日本後紀

凡例

一、本書は六國史中錯亂誤脫最も多く、何人も之を通讀するに苦しまざるはなし。故に之を校訂して、其の勞を省かむとしたる人少からず。元祿中已に德川光圀卿の校訂本あり、(但し水戶校訂本は續後紀のみならず、書紀以下の五國史を通じて校訂せられたれば自ら異なる所あり)、安政中山崎知雄氏の校訂續日本後紀あり(解說を參看すべし)、近くは村岡良弼氏の纂詁あり、其の他諸氏の校合本も、一二に止まらず、依りて其の先蹤を尋ね、諸書を通覽するに、錯簡を訂すに當りて、各、其の所見を異にし適從する所を知らざるもの多し。故に予はまた予の見る所を以て、之を決したり。第二に脫文を補ふに當りて、類聚國史・日本紀略の文は悉く之を採りたれど、紀略中某日任官とあるものは除けり。其は任官の文字は全く紀略編纂者の補文にして、本史の原文に非ざればなり。されど之に據りて任官ありし事を知るに便なれば、標注には一々之を擧げたり。又纂詁には類聚三代格・公卿補任等

を採りて、文を成したるもの多けれど、予は山崎校本の例に倣ひて之を採らず、第三に十五・十六の兩卷中古寫本に據りて補ひしもの十數箇條あり、其の補綴の文は、私記には悉く之を載せたるが、一云として書名を記さず、纂詁は一云とせずして、所據の書名を擧げたれど的確ならざるものなり、然るに其の逸文は某文庫祕本には悉く存す、故に標注には祕本と稱して之を注せり。

二、本書刊本は寛文八年の本と、寛政七年の再刻本とあり、山崎校本は、再刻本を底本としたれど、舊本に比して誤謬頗る甚し、依りて寛文本を底本とし、左の諸本を以て校訂せり。

一、古寫本

			符號
一 内閣本	内閣文庫所藏	二十卷	(閣本)
一 三條西本	谷森翁書入本に據る		(西本)
一 一條本	井上翁書入本に據る		(條本)
一 高柳本	高柳光壽氏所藏	卷五・八	(柳本)
一 尾張本	尾張德川侯爵所藏	二十卷	(尾本)

一 前田本　前田侯爵所藏　二十卷　（前本）

一 中原本　谷森建男氏所藏　二十卷　（中本）

一 谷森本　同上　二十卷　（谷本）

一 石山本　同上　二十卷　（石本）

一 塙本　内閣文庫所藏　二十卷　（塙本）

一 林崎文庫本　神宮文庫所藏　卷一・二・三　（林本）

一 宮崎文庫本　同上　二十卷　（宮本）

一 淀本　神道本局所藏　二十卷　（淀本）

一 細井本　狩谷自筆校本に據る　（細本）

一 安田本　同上　（安本）

一 井上本　同上　（井本）

一 大橋本　同上　（大本）

一 堀本　山崎校本に據る　（堀本）

二、校合本

一　水戶校訂本　內閣文庫所藏　(水戶校本)
一　伴信友校合本　(伴校本)
一　狩谷棭齋校合本　無窮會神習文庫所藏　(狩谷校本)
一　校訂續日本紀　同上山崎知雄校訂　(山崎校本)
一　井上賴圀翁校合本　同上　(井上校本)
一　谷森善臣翁校合本　谷森建男氏所藏　(谷森校本)

二、注釋書

一　續日本後紀私記　矢野玄道著　(私記)
一　續日本後紀纂詁　村岡良弼著　(纂詁)

三、本書の校訂に當りて底本と校合し、或は參照したる諸書は大略續日本紀に同じ、故に此には之を略す。

昭和四年十二月

佐伯有義識

【續日本後紀序】序、閣本此字なし
○史官記事云々、史官は記錄を司る官なり禮記玉藻に動則左史書之言則右史書之とあり司典は左傳昭十五年に見え典籍即ち史書を司る官なり以下數句は唐高祖敕中書令蕭瑀等修史詔に司典序言史官記事考論得失究盡變通所以裁成義類懲惡勸善多識前古貽鑑將來云々とあるに據れるなるべし
○憲章稽古、文選東都賦に出づ憲は法也章は明也稽古は單に古の意
○沮勸、沮は原本阻に作る類史に據て改む左傳襄廿七年に賞罰無章何以沮勸、注に沮は止也とあり惡を止めて善を勸むるなり
○變通、易繫辭傳に化而裁之謂之變推而行之謂之通とあり
○體元、左傳隱元年注に凡人君卽位欲其體元以居正とあり
○膺籙、籙は原本錄に作る閣本兩本等に據て改む文選應貞の詩に五德更運膺籙受符とあり

續日本後紀序

臣良房等、竊惟、史官記事、帝王之跡攢興、司典序言、得失之論對出、憲章稽古、設沮勸而備遠圖、貽鑒將來、存變通而垂不朽者也、伏惟、先皇帝(文德)體元膺籙、司契脩機、夢想華胥之疆、拱默大庭之觀、以爲、承和撫運、歷稔惟長、善政森羅、嘉蓂猥藉、未編簡牘、恐或湮淪、爰詔太政大臣從一位臣藤原朝臣良房、右大臣從二位兼左近衛大將臣藤原朝臣良相、大納言從三位民部卿兼太皇太后宮大夫臣伴宿禰善男、參議正四位下行式部大輔臣春澄朝臣善繩、散位從五位下臣縣犬養大宿禰貞守等、因循故實、令以撰修、筆削之初、宮車晏駕、白雲之馭不返、蒼梧之望已遙、今上陛下、河淸而後興、社鳴而乃出、其道德則堯與舜、其城郭則義將仁、四海當夷、萬機多暇、校文芸閣、嫌舊史之有虧、留睠蘭臺、恨先旨之未竟、重勅臣

○司契、老子七十九章に有徳司契無徳司徹とあるに出づ
○脩機、承和元年十二月辛巳紀の詔に脩機之玄扈云々とあり
○夢想華胥之疆云々、列子黃帝篇に黃帝憂天下之不治於是放萬機退而閒居大庭之館齋心服形三月不親政事晝寢而夢遊於華胥氏之國既覺怡然自得(節略)とあるに據れり疆は原本壃に作る類史に據て改む
○承和撫運云々、仁明天皇は御治世長く善政多かりしことを稱贊し奉れるなり撫運は御宇に同じ
○嘉模猥積、嘉模は原本嘉譽に作る西本及類史に據て改む善謀也善政に對して云森羅猥積は共に盛多なるを云ふ
○未編簡牘云々、其事を史に記さゞれば善言美事も埋れ失せむかとなり
○爰詔云々、文德實錄齊衡二年二月丁卯紀に見ゆ
○臣藤原朝臣良房、原本藤上に臣字を脫す西本林本及類史に據て補ふ
○良相、良房の弟
○太皇太后宮大夫、后上

等、責以亟成、臣等奉勅迴遑、不敢懈緩、事多差互、尙致淹延、其間、右大臣良相朝臣嬰痾里第、收影北邙、大納言善男宿禰犯罪公門、竄身東裔、散位貞守日參其事、不遂斯功、出吏邊州、沒蹤京兆、唯臣良房、與式部大輔善縄、辛勤是執、以得撰成、起自天長十年二月乙酉、訖于嘉祥三年三月己亥、惣十八年、據春秋之正體、聯甲子以銓次、考以始終、分其首尾、都爲廿卷、名曰續日本後紀、夫尋常砕事、爲其米鹽、或略弃而不收、至人君擧動、不論巨細、猶牢籠而載之矣、臣等識非南董、才謝馬班、謬忝撰修、伏慙淺短、謹詣朝堂、奉進以聞、謹序、

貞觀十一年八月十四日

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房

參議正四位下行式部大輔臣春澄朝臣善縄

の太字は原本大に作る閣本西本林本に據て改む　○行式部大輔、行字は原本なし林本及類史に據て補ふ　○善繩、繩は淀本綱に作る　○縣犬養大宿禰、大字は諸本及類史に據て補ふ　○筆削之初、筆削は史記孔子世家に孔子爲二春秋一筆則筆削則削子夏之徒不レ能レ贊二一辭一とあるに出づ　○宮車晏駕、文德天皇の崩御を申す史記范雎傳、注に凡初崩爲二晏駕一者臣子之心猶謂二宮車當一レ駕而晚出一とあり　○白雲之馭不返云々、莊子天地篇に聖人千歲厭レ世去而上僊乘二彼白雲一至二於帝鄉一また史記五帝本紀に舜踐二帝位一三十九年南巡狩崩二於蒼梧之野一とあるに據れり　○河清而後興云々、文選運命論に黃河清而聖人生里社鳴而聖人出とあるに據れり　○校文芸閣云々、天皇御親ら秘閣の書を閱し給ひて舊史の定からざるを嫌はせ給ふさなり芸閣は書を藏する閣を云芸は香草にて以て紙魚の蠹を辟くべしと云　○留聰蘭臺云々、先帝修史の大御心の未た遂せざるを恨ませ給ふなり蘭臺は漢書百官表に御史大夫秦官有二兩丞一一曰中丞在二殿中蘭臺一掌二圖籍祕書一と見え祕書を藏する所なり聰は原本聽に作る諸本及類史に據て改む　○貴以亟成、原本貴を貫に亟を函に作る諸本に據て改む類史亟を遂に作る　○差互、闕誤するをいふ、原本互を牙に作るは互の俗體より訛せるなり故に改む　○嬰痾里第、第は原本弟に作る類史に據て改む林本痾を病に作る　○歳影北邙、良相の薨去を云良相は貞觀九年十月十日薨す北邙は文選張載七哀詩の注に北邙山名とあり後漢の王侯公卿の葬地なり、邙は原本功に作る諸本及類史に據て改む　○犯罪公門云々、貞觀八年九月廿二日應天門を燒ける罪に依て伊豆國に配流せられしを云　○出吏邊州云々、貞守は貞觀五年二月十日駿河守と爲りて任に赴けるを云、蹤は原本從に作る山崎校本に據て改む　○春秋之正體、編年體を云　○銓次、銓は原本詮に作る類史に據て改む　○米鹽、漢書黃霸傳注に米鹽言二碎而且細一とあり瑣細なる事を云　○不收、閣イ本尾イ本及類史收を取に作る　○牢籠、一切を包括する意なり、牢は原本窂に作る林本及類史に據て改む　○識非南董、南は南史なり左傳襄廿五年に大史書曰崔杼弑二其君一崔子殺レ之其弟嗣書而死者二人其弟又書乃舍レ之南史氏聞二大史盡死一執レ簡以往聞二既書一矣乃還とあり董は董狐なり左傳宣二年に出づ修史上の識見は南史氏董狐の輩に及ばずさなり　○才謝馬班、馬は司馬遷班は班固にて史筆は此兩人に及ばずさなり　○謹序、此二字は纂詁に蓋淺人所レ益今刪といひて削れり　○行式部大輔臣、行及臣の二字は林本及類史に據て補ふ

校訂標注 六國史第七卷目次

續日本後紀卷第一

起天長十年二月盡五月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

仁明天皇

天皇諱正良、先太上天皇（嵯峨）之第二子也、母太皇太后、贈太政大臣正一位橘朝臣清友之女也、太后嘗夢、自引圓座、積累之、其高不知極、毎一加累、且誦言卅三天、因誕天皇云、弘仁十四年夏四月甲午、（乙酉朔十）皇太弟（淳和）諱（大作）受禪即帝位、（十八）壬寅、立諱（仁明）爲皇太子、天長十年春二月戊午朔乙酉、皇帝於淳和院、讓位于皇太子、詔曰、現神止大八洲國所知倭根子天皇我詔良万止勅御命乎、親王諸王諸臣百官乃人等、天下公民、衆諸聞食止宣、太上天皇我朕乎不德乎不棄賜志天、寶位乎授賜閉理、忝美鍾重岐、日日畏愼太麻布、春秋乃往隨爾舊疹毛稍發流、故機務乃暫毛虧怠牟許止乎恐賜天、朝夕煩懷念須許止久矣、今念行佐久、皇太子止定太流正良親王、賢明夙彰、禮仁孝毛兼

○仁明、周書謚法照臨四方曰明、諝許不行曰明、文選顔延之陽瓚誄に苟有懷於貞孝者實事感於仁明とあり一代要記皇年代略記紹運録等に國風の御謚號を日本根子天璽豐聰慧尊と申奉る

【即位前紀】太皇太后、原本に上の太字闕く紀略に據て補ふ御諱は嘉智子世に檀林皇后と申す

○圓座、原本座を坐に作る閣本西本尾本及紀略に據て改む抄調度部坐臥具に圓座孫愐曰䕘（俗云圓座二云和良布太）圓草褥也とあり

○卅三天、忉利天を云佛家にて帝釋の居處とす此は帝位に喩ふ

○甲午、原本甲子に作れど是月乙酉朔にて甲子なし甲午の誤なるべし紀略弘仁十四年四月條には甲午帝遷于冷然院庚子帝御前殿引今上曰云々

詔曰現神止大八洲所知云々とあり受禪卽位は四月庚子なれど紀略仁明紀には甲子とあり午を子と誤る例多ければ改む
○皇太弟、原本太の下に后字あり衍なり紀略に據て削る
○諱大伴、原本本文とす閣本及紀略に據て注とす
【天長十年】淳和院、拾芥抄中末に淳和院天長ト上皇離宮今西院或云橘大后宮とあり淳和天皇の離宮なり後寺となる舊趾葛野郡西院村大字西院にあり
○忝鍾重贈、贈は原本賸に作る閣本西本尾本等に據て改む
○舊疹、紀略弘仁十四年三月庚子條に身嬰疹疾彌留不瘳と見ゆ字書に疹は熱病也とあり
○久灸、宣命にかくの如き用字珍らし
○於太比之久、御心の穩かに坐すを云
○上多支時爾波云々、藤原冬嗣の奏言に若奉一帝二太上皇天下難堪とあるに同じ意なり
○己氏門云々、氏門は家門と云に同じ

厚久之天、太能毛之久於太比之久在、是以撫安國家牟止之天、此位乎授賜布、諸此狀乎悟天、淸直心乎毛知弖、此皇子乎輔導支仕奉天、天下乎平介久令有余、又古人有言利、上多支時爾波下苦止奈毛所聞、是以太上天皇止伊布號停米、亦諸乃服御乃物毛停賜布、皇后宮毛如是有倍之、又如此時爾當都都、人人不好留謀懷天、天下乎毛亂利、己氏門乎毛滅人等毛前前有、若毛如此有牟人乎波、己我教諭訓直天、各乃己祖祖門不滅、彌高仁仕奉、彌繼爾繼止思愼天、无二心志天仕奉倍志止詔天皇我勅旨乎、衆聞食止宣、是夕、今上抗表、辭寶位曰、臣某言、照以明鏡、姸蚩難逃、逼以恩綸、喜懼失據、臣某誠恐誠惶頓首頓首死罪死罪、臣道德兩蕪、進退多躓、　情性双昧、執守无常、誰昔屆先皇於姑射、優遊霜雪之光、順聖后於後園、匍匐章珮之陰、而皇帝陛下、枉恩紫霄、延登分外、啓榮耀於欲隱、導慈訓於未知、悲深而父、愛鍾猶子、辭不獲免、久辱洊雷、露往霜來、十載於此、德誘不倦、顧恤殊甚、思欲隨形逐聲、心神是役、終天畢地、身命不疲、今亦推大寶、以錫昭華、避

○照以明鏡云々、漢書韓安國傳に清水明鏡不可以形逃とあるに據れり
○遏以恩綸云々、愚なる我身に皇位を繼げと詔給へることは且は喜び且は懼れて爲す所を知らずとなり
○道德兩蕪、道德は道と德とにて兩蕪とは兩ながら闕けたりとなり
○情性双昧、情も性も雙びに昧しとなり
○誰昔、毛詩陳風墓門章に誰昔然矣、箋に誰昔昔也とあり、閣本西本尾本等昔謂に作る恐くは非
○屈先皇於姑射云々、姑射は藐姑射の山にて神仙の居所、上皇の居させ給ふ仙洞を云
○章珮、皇后の御服寶帶を云
○枉恩紫霄云々、紫は紫宸紫微の紫、霄は天空の境、天恩を垂れて分外に高く引上げ給へる意
○悲深而父、慈悲深くして父の如しとなり而は孟子荀子左傳等に如字に用ひし例多し閣本西本等而父を所天に作る漢書に臣以君爲天とあれば其意

樞極、以授乾象、前愧未已、後懼更頻、實以纒纖塗重、轉徹任博、施之人事、尚有負乘之慙、求之天途、何无害盈之覺、伏願日月貞明之景、每煦蒼生、雲雨行施之恩、永潤品彙、然則世寢喧譁、臣免譴誚、若不蒙允容、悉縲衆譴、君臣之議、謂天下何、不勝傾戰憂懼之至、拜表以聞、後太上天皇不聽、○丙戌、今上重抗表曰、臣某言、人之所願、天必隨、道之所通、物不擁、臣承恩詔、伏瀝血誠、既踰匝辰、未蒙允亮、臣某、中謝 夫大陽方照、空履將泮之氷、悚汗頻流、猶臨不測之底、蹈焦非懼、涉呂須傾、大道无私、冀垂鑒許、若不獲已、猶御閑蹤、則民猒善仁、世倦聖治、然後逐洞庭之野、於尊纔宜也、當今群品得所、黔首繫心、覆燾之恩、江海可謝、亭毒之德、乾坤惟均、加以雷門之下、布鼓失聲、朝陽之餘、螢火難照、意窮詞盡、不知所爲、君擧必書、恐違物議、伏申丹誠、非敢矯飾、懇懃之深、重表陳請、後太上天皇遂亦不許、於是天皇乃命車駕、拜謁先太上天皇、及太皇太后宮於冷然院、還御東宮、○丁亥、立恒貞親王爲皇太子、詔曰、天皇我詔旨良万止勅御命乎、親王等王等諸臣等百官人等、天下公民、衆聞食止宣、朕以拙弱弖、掛畏支

倭根子天皇我朝廷乃厚慈乎蒙天、皇太子止成禮利、因畏万利貴比賜己止晝夜止无之、然乎慮外爾、天日嗣乎授賜布、依天不堪流狀乎再比三比畏利申賜戸止毛、容賜比許賜波須、今思行佐久、厚恩乎蒙人波、必報倍支理利有、故是以正嗣止有戸支恒貞親王乎皇太子止定賜布、故此之狀乎悟天、百官乃人等仕奉止宣布天皇我御命乎、衆聞食止宣、以參議從四位上文室朝臣秋津爲春宮大夫、左大辨左近衞中將武藏守如故、從五位上藤原朝臣貞守爲亮、讃岐介如故、後太上天皇遣權中納言從三位藤原朝臣吉野、奉書天皇、辭立皇太子曰、恭觀今日詔、册立愚子恒貞、爲皇太子、叡旨謬降、盛典曲施、夫洊雷位重、承祧事貴、非德不昇、非賢何守、恒貞年實蒙幼、器非夙慧、安可妄鍾大禮、猥主七鬯、肅奉周邉、內知云莫、請停嚴命、更擇賢才、在於重情、寔知兗喈、縱使天綸不駐、上令必行、則失萬國以貞之望、虧三辰日敬之職、從五位下藤原朝臣良房爲左近衞權少將、加賀守如故、侍從從五位上藤原朝臣長良爲左兵衞權佐、是日賜典藏從四位下大宅水取臣繼主等三人朝臣姓、繼主臣八腹木事命後

は異ならず
○鍾愛猶子、鍾愛猶は子の如しとなり
○久爲洊雷、易震卦の象傳に洊雷震、說卦傳に震謂之長男とあり皇太子と爲すを云
○露往霜來、露往の二字は諸本に據て補ふ
○大寶、易繫辭傳に聖人之大寶曰位とあり天位を云
○錫昭華、淮南子に堯贈舜以昭華之玉とあるに據れり乾象と對して共に皇位を云り
○避樞極以授乾象、御位を避て皇太子に授け給ふを云樞極は極は北極星樞は天樞なり其紐星を云
○纕纖塗重云々、其任に堪へざるを云纕は馬腹帶也、纖は細きを云轅は車轅也徹は毀也細き腹帶毀れたる轅にて重き荷を遠く運ぶが如しとなり
○有負乘之懸、易解卦の六三に負且乘致寇至とあるに據れり負は原本賈に作る閣本に據て改む
○害盈之釁、易謙卦の象傳に鬼神害盈而福謙とあるに據れり釁は原本覺に作るは俗字なり

○日月貞明之景云々、易繫辭傳下に日月之道貞明者也とあるに據り雲雨云々は乾卦彖傳に雲行雨施品物流形とあるに據れり煦は原本照に作るを閣本西本等に據て改む字書に煦は熱也又溫潤也とあり品彙とは萬物を云

○衆議、議は誹謗也

○人之所願云々、尙書泰誓に民之所欲天必從之とあるに出づ

○物不擁、擁は壅に同じ

○既踰匝辰、匝は浹に同じ左傳成九年に出つ疏に浹辰謂周子亥十二辰故爲十二日也とあり。

○(注)中謝、上表文には必す誠惶誠懼頓首頓首と書くを文集等に之を略して中謝の二字を分注にするなり

○空履將泮之氷、漢書宣帝紀に猶踐薄冰以待白日豈不殆哉とあるに據れり泮は散也

○猶臨不測之底、毛詩小雅小旻章に如臨深淵とある意を取りて句を成せり

○蹈焦非懼云々、水火を避けざるを云塙本呂を河に作ると云

也」庚午、右京人上野權少掾從八位上尾張連年長、位子无位尾張連豐野、留省无位尾張連豐山等賜姓忠宗宿禰」改多治比眞人氏賜姓丹墀眞人」左京人圖書頭從五位上秋篠朝臣雄繼、右京人散位從七位上秋篠朝臣雄繼、右京人散位從七位上秋篠朝臣吉雄、賜姓菅原朝臣」癸酉、右京人音博士從五位下六人部連門繼、弟六人部連大宗、六人部連秋主、妹六人部連鷹刀自、六人部連磐子等、男女五人賜姓高貞宿禰」甲戌、攝津國人散位從六位上凡河內忌寸紀主、兄留省從八位上凡河內忌寸紀麿、弟留省大初位下凡河內忌寸福長等三人、賜姓清內宿禰」攝津國豐嶋郡人散位從七位下出雲連男山、河邊郡人正六位上出雲連雄公、出雲連伊都岐麿等、男女廿二人賜姓於出雲宿禰」丙子、常陸國筑波郡人散位正六位上丈部長道、一品式部卿親王家令外從五位下丈部氏道、下總少目從七位下丈部繼道、左近衞大初位上丈部福道四人、賜姓有道宿禰」己卯、左京人左大史正六位上秦忌寸貞仲賜姓宿禰」甲申、左京人上毛野公道信賜姓上毛野朝臣」丙戌、右近衞將曹

○大道无私、原本无を天に作る諸本に據て改む大は恐らくは天の誤なるべし晉語に天道無親唯德是授とあり　○偃聖治、原本聖を全に作る諸本に據て改む　○張洞庭之野云々、莊子天運篇に黃帝張咸池之樂於洞庭之野とあるに據れり　○群品得所云々、群品は萬物、黔首は人民なり萬物各其所を得て安するを云原本群を郡に作る閣本に據て改む　○霑濡之恩、霑は字書に與霑同覆也普覆照也とあり此句中庸に出づ　○亭毒之德、老子注に亭謂品其形毒謂成其質とあり　○雷門之下云々、漢書王尊傳に毋持布鼓過雷門注に師古曰雷門會稽城門也有大鼓越擊此鼓聲聞洛陽云々布鼓謂以布爲鼓故無聲とあるに據れり　○意窮、原本窮を究に作る閣本西本等に據て改む　○若擧必書、原本書を盡に作る條本に據て改む　○恐違物議、原本違を遺に作る宮本に據て改む　○伏申丹誠、原本申を用に作るは申の訛なれば改む　○乃命車駕、乃字は閣本西本及類史紀略に據て補ふ　○太皇太后宮、紀略に宮字なし　○冷然院、拾芥抄中末に冷泉院大炊御門南堀川西嵯峨天皇御宇此院累代後院弘仁亭本名冷然院云々而依火災改然字爲泉云々とあり　○恒貞親王、淳和天皇第二皇子御母は皇后正子内親王、時に御年九歳承和九年七月廢せられ給ふ　○王等、諸本に據て補ふ　○朕、仁明天皇　○倭根子天皇、淳和天皇　○厚慈、閣本西本條本等慈を受に作るは愛の訛ならむ　○貴比賜已止、賜已止の三字は閣本西本尾本宮本等に據て補ふ　○必報倍支理利有、厚恩を蒙る人は云々とは淳和天皇未だ寶算に富ませ給ひ且皇子も坐し乍ら御弟仁明天皇に御位を讓り給ひし故か、申させ給へり原本報を敬に作る閣本西本等に據て改む　○忝視、原本忝を纂に作る山崎校本に據て改む　○册立、原本册を再に作る閣本西本等に據て改む　○謬降、原本降を隆に作る隆にても通ずれど西本に據て改む　○承祧宗尊、祧は遠祖の廟なり祖宗の統を承くるを云　○夙慧、原本慧を惠に作る閣本西本に據て改む　○猥主匕鬯、易震卦に不喪匕鬯朱注に匕所以擧鼎實鬯以秬黍酒和鬱金所以灌地降神者也不喪匕鬯以長子言也とあるに據れり、原本匕を亡に作るは訛なり易に據て改む下同じ　○周遑、文選潘岳悼亡詩注に周章惶懼とあり　○云冥、暗愚なるを云謙遜の辭、閣本宮本等冥を寅に作る纂詁に沈約爲長城公主謝表徽命降臨懇懼妄寘云冥疑妄寘之譌と云り　○在於重情、纂詁重を量に改め西本尾本在を存に作る　○免嗜、字書に嗜本作諧、諧は相惡也妄言也とあり　○縱使天綸云々、天綸は綸言、上令は上よりの命令を云強ひて上令を行ひ給はゞ萬國の望を失はむとなり以貞は禮記文王世子篇に一有元良萬國以貞世子之謂也と云に據れり　○虧三辰日敬之職、漢書律歷志に太極運三辰五星於上而元氣轉三統五行於下其於人皇極統三德五事故三辰之合於三統也とあるに據れり、原本此下に戊子以の三字あり閣本西本尾本林本に據て削る　○良房、原本房を方に作る林本水本及卷二八月丙戌條に據て改む　○藤原朝臣長良、朝臣の二字は尾本宮本に據て補ふ　○是日云々、尾本是日以下後也に至る卅二字下文丙戌條の次に丁亥賜與藏云々とあり　○大宅水取臣、小野朝臣等と同祖　○庚午、以下丙戌に至る七條錯簡にして此にあるべきにあらず庚午を二月十三日癸酉を同十六日とし以下丙戌に至る各條を天長十年二月の記事なりとするものあれど序文に起自天長十年二月乙酉とあり乙酉は廿八日なれば其以前の記事の此にあるべきにあらず或は庚午を四月十三日とし以下七條を四月中の記事なりとする說もあれど四月とすれば干支は合へど他に確證あるにあらず水戸校訂本に改丹治比氏爲丹墀三代實錄以爲天長九年四月山田古嗣天長六年任少外記九年轉大見文德實錄而此猶爲少外記據此等文斷不可繫是年故削此附卷末とあり錯簡なることは疑なけれど諸本同じければ姑く此に存して他日の考定を俟つ　○尾張連年長、錄左京神別尾張連火明命之男天賀吾山命之後也とあり　○位子、六位以下八位以上の人の子を云既に注す　○忠宗宿禰、何に據れるか詳ならず　○六人部連、錄山城神別六人部連火明命之後也とあり　○高貞宿禰、高貞氏他史に見えず　○凡河内忌寸、錄河內神別凡河內忌寸天穗日命十三世孫可美乾飯根命之後也とあり　○清内宿禰、據る所詳ならず　○丈部、錄左京皇別丈部天足彥國押人命孫比古意祁豆命後也とあり　○一品式部卿親王、葛原親王なり天長八

伴林宿禰御園等四人賜姓伴宿禰、

年一品に叙せらる　○家令、家令職員令に家令一人掌レ知二家事一とあり　○左近衛、原本左を下に作る諸本に據て改む纂詁に衛下恐脱二府生等字一と云り　○有道宿禰、姓氏録に載せず　○上毛野公、公字は諸本に據て補ふ　○伴林宿禰、大伴宿禰同祖、録河内神別に林宿禰は室屋大連公男御物宿禰之後也とあり

（三月）伏覽詔旨、原本覽を顧に作る諸本に據て改む西本顧に作る　○夙慧、原本慧を悪に作る閣本西本に據て改む　○魏宮岐嶷、魏志明帝紀注に帝生數歲而有二岐嶷之姿一とあるに據れり岐は峻、嶷は識なり幼にして怜悧峻茂なるを云　○晉儲神姿、淵鑑類函所引王隱晉書に初武帝未レ爲二世子一文帝問二裴秀一人有レ相否秀曰中撫軍（武帝）立髮至レ地手過二於膝一云々此非二人臣之相一とあるに據れるなるべし卽ち晉の世祖なり　○猗誰爲助、猗は原本猗に作る尾本水本に據て改む字彙に猗は嘆辭又語辭又與レ倚同とあり　○重明、易離卦の象傳に見ゆ日月を云　○至愚、閣本尾本等至を專に作り大本安本悪に作るに據れば僉の訛なるべきか　○聖衷、原本衷を哀に作る閣本西本に據て改む

○三月戊子朔、日有レ蝕之、天皇緣下後太上天皇辭レ立二太子一、奉二答表一曰、臣某言、伏覽二詔旨一曰、恒貞年實蒙幼、器非二夙慧一、安可レ妄鍾二大禮一、猥主中七鬯上、夫輕者重之端、小者大之本、故魏宮岐嶷、非二老大之情一、晉儲神姿、是幼稚之謂、然則聰慧在レ性、不レ限二年齡一、伏稽二前言一、既有二故實一、臣頻表二懷抱一、心事共違、家賓之慙、猗誰爲レ助、伏願、假二彼重明一照二朦昧一、賚二其寬博一備二遺忘一、臣之至愚、聖衷所レ驗、雖レ云レ无レ德、庶幾有レ隣、冀垂二矜憐一、賜レ綏二憒憒一、至誠不レ飾、至敬无レ文、伏表二丹愿一、无レ地取レ喩、後太上天皇重復奉レ書曰、內揆已審、請レ易二太子一、沖鑒未レ迴、憂心如レ灼、易曰、主レ器、莫レ若二長子一、禮曰、登レ餕則以二上嗣一、斯皆溫レ文既習、聖敬克躋、然後正二位前星一、贊二業東序一者也、今恒貞漢莊難レ擬、周儲不レ追、將何以裨二光聖明一、助二聰天扆一、而恩哀逾屆、血訴不レ成、獨謂レ非レ宜、與談孰許、恐龍樓之守爰墜、鮑俎之譏有レ聞、望昭二丹辭一、必收二紫渙一、山朝事隔、无レ可レ關レ言、父子體同、理當二分疏一、異二於嫠不レ恤レ緯、尸不レ越レ樽之義一、是以重復鋪陳、佇レ蒙二

矜聽、天皇不許、奉還其書、僧綱以下、高僧數十人、來會闕庭、奉賀踐祚、
○己丑、詔曰、朕不免叡託、馭朽乘奔、瞻公卿而兢懷、顧兆庶而軫念、思弘國憲、无虧成規、後太上天皇、（淳和）憲章千古、含育萬邦、仁化未饒、機事遄脫、今檢詔旨云、天下多尊、百姓所苦、避位之號、勿隨舊典、夫太上尊號、非唯一時、秦日漢年、稱謂尙矣、朕以禮之爲用、所以達天道順人情之大寶也、其在人也、如竹箭之有筠也、如松栢之有心也、故貫四時不改柯易葉、是以聖人知禮之不可以已也、冀脩先王之禮制、不私至公之典要、朕先日重表、遂蒙拒逆、空庸之軀、謗讟惣集、若猶奉順聖慮、改易正名、天下仰瞻、何用取信、宜上尊號爲太上天皇、皇太后曰太皇太后、（嵯峨皇后）皇后爲皇太后、（淳和皇后）普告天下、令知朕意、後太上天皇辭尊號曰、今摹古典、猶加尊號、已違本圖、翻孤元誓、何者事期自足、老聃杜企跨之塗、量不可强、莊叟開性分之域、謬以太上天皇之授也、經理萬機、夕惕多稔、神勞于用、形倦于勤、至於將攝之方、眇邈其遠、所以釋彼負重、保茲閑放、揖風月而爲友、偶煙蘿而遺日、然則收視反聽、煩不嬰心、峻號崇名、貪豈攸樂、況大道之行、稟性咸遂、

○有隣、論語里仁篇に德不孤必有鄰とあるに據れり
○憤憤、憤は怒滿也憒は心亂也
○丹悤、丹は赤心、悤は敬也愼也
○重復奉書、重字は西本尾本等に據て補ふ
○內揆、揆は度也
○沖鑒、深く鑒るを云
○主器云々、易序卦傳に出づ
○登餕云々、禮記文王世子篇に宗人授事以官尊賢也登餕受爵以上嗣云々とあり說文に餕食之餘也とあり祭畢りて神の餘を食するなり原本則を受爵の二字に作る閣本西本等に據て改む
○溫文旣習、禮記文王世子に凡三王敎世子必以禮樂云々禮樂交錯於中發形於外是故其成也懌恭敬而溫文とあるに據れり
○聖敬克躋、毛詩商頌長發章に聖敬日躋、箋に其聖敬之德日進とあるに據れり、原本聖を致に作る閣本尾本等に據て改む
○前星、原本星を皇に作る諸本に據て改む漢書五

行志に星傳曰心大星天王也其前星太子後星庶子也とあるに據れり
○東序、禮記文王世子篇に凡學世子及學士必時云々皆於東序とあるに據れり東序は大學在王宮之東とさ注す
○漢莊難擬云々、梁簡文帝謝立爲皇太子表に魏平非擬漢莊扉繼とあり漢莊は後漢の孝明帝諱莊なり十歲能く春秋に通すといふ周儲は周武王を云
○天表、禮記明堂位に天子負斧扆南鄕而立、注に斧扆爲斧文屛風於戶牖之間とあり
○思裛、裛は褱に同じ湯美也
○血誠、原本誠を謝に作る諸本に據て改む
○與談、與に左傳僖廿八年輿人の注に衆也とあり衆人の談之を許さすとなり、原本輿を興に作る諸本に據て改む
○龍樓之守、漢書成帝紀に上嘗急召太子（成帝）出龍樓門不敢絶馳道西至直城門得絶乃度還入作室門上遲之問其故以狀對上大說とある馳道は天子專用の道

去邁悠然、蓋有之矣、請廻先後詔、必允所辭、深閉固距、言匪矯飾、天皇不聽、是日以正五位下賀茂朝臣今子、從五位下大和宿禰舘子、並爲掌侍、外從五位下海直家繼爲掌膳、○辛卯、天皇御大極殿、奉幣伊勢大神宮、爲應卽位也、○壬辰、須遣中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣愛發、從三位行權中納言藤原朝臣吉野、從四位下因幡守高枝王、從四位下式部大輔安倍朝臣吉人等於柏原長岡二山陵、豫告可卽位之狀曰、天皇恐恐毛申賜部止申久、後太上天皇厚矜乎垂賜天、天之日嗣乎授賜閇利、不堪流狀再比三比申賜閇止許賜波須、故是以大御座處乎掃潔侍而、天之日嗣乎戴荷知、守仕奉倍支事乎、恐恐毛申賜久止奏、又申久、掛畏支柏原御門乃天朝矜賜波乎厚慈乎蒙戴天之天之日嗣乃政者平久天地日月止共爾、守仕奉部之止思食事乎、恐恐毛申賜久止奏、辭別申久、正嗣止有閇支恒貞親王乎、皇太子止定賜布狀、恐美恐美毛申賜止奏、○癸巳、天皇卽位於大極殿、詔曰、明神止大八洲國所知天皇我詔旨良万止宣勅乎、親王諸

なれば敢て之を横切らざりしなり
○鮑俎之識、賈誼新書に周太子發嗜鮑魚、大公望曰鮑不登于俎、安有非禮之物可以養太子哉、釋名に鮑魚鮑腐也とあり
○紫澳、柳宗元鑄樊左丞讓官表に乖收紫澳、俯矜丹誠、注に紫澳謂詔書也とあり、原本澳を漁に作る諸本に據て改む
○山朝事隔云々、山は仙洞、朝は朝廷を云、關は通也とあり言語を通じ難しとなり、原本關を開に作る西本に據て改む
○嫠不恤緯云々、左傳昭廿四年に嫠不恤其緯、注に嫠寡婦也織者常苦緯少、寡婦所宜憂恐、禍及己とあり尸不越樽は莊子逍遙遊篇に庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣とあるに據れり庖人は料理人、尸祝は神を祀る人即ち他人の職權を犯さずと云なり
○奉賀踐祚、原本此下に三月庚子出雲連賜宿禰、四月庚辰山代忌寸賜宿禰丙戌賜姓紀直、五月甲寅賜姓清原眞人、八月甲午賜姓菅原宿禰、戊戌賜

王諸臣百官人等、天下公民衆諸聞食止宣、掛畏支倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業乎、掛畏支近江大津乃宮爾御宇之天皇乃初賜比定賜部留法隨爾仕奉止、仰賜比授賜布大命乎受賜利、恐美受賜利懼利、進毋不知爾退毛不知爾、恐美坐久止宣布勅乎、衆聞食止宣、然皇止坐天、天下治賜君波、賢人乃良佐乎得弖之、天下乎波平久安久治賜爾在止奈毛聞行須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等乎始氐、王等臣等乃相穴奈比奉利相扶奉牟事依天之、此乃仰賜比授賜閇留食國乃天下之政波、平久安久仕奉倍之止所念行、是以以正直之心天、天皇朝庭乎衆助仕奉止宣天皇勅、衆聞食止宣、辭別宣久、仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜比治賜布、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾、給位一階、又僧綱及京畿內乃諸寺僧尼乃智行有聞流、幷年八十已上爾施物太万布、又五位已上子孫乃年廿已上奈留爾賜當蔭之階布、左右京五畿內乃鰥寡孤獨不能自存人等爾給御物天、天下給侍留高年爾給御物布、力田之輩乃、其業超衆者爾

賜ニ爵一階一布、孝子順孫義夫節婦乎波、終レ身爾勿レ事禮、又外國僧尼乃年八十已上奈留爾施物之賜波久止勅天皇大命乎、衆聞食止宣、授四品阿保親王、賀陽親王、並三品、從二位藤原朝臣緒嗣正二位、正三位清原眞人夏野、藤原朝臣三守、並從二位、從三位源朝臣常、藤原朝臣吉野、並正三位、正四位下源朝臣信從三位、无位正行王從四位下、從五位下岡屋王從五位上、正四位下小野朝臣野主正四位上、從四位下安倍朝臣吉人正四位下、從四位下藤原朝臣文山、橘朝臣弟氏、並從四位上、正五位下伴宿禰友足從四位下、從五位上滋野朝臣貞主正五位上、從五位上甘南備眞人高繼、伴宿禰宅麻呂、伴宿禰氏上、橘朝臣氏人、橘朝臣永名、從五位下藤原朝臣助、並正五位下、從五位下伴宿禰清世、安野宿禰眞繼、佐伯宿禰春海、並從五位上、正六位上良岑朝臣高行、藤原朝臣勢多雄、藤原朝臣高仁、藤原朝臣富士麻呂、藤原朝臣宗吉、橘朝臣常道、縣犬養宿禰廣濱、外從五位下清岑宿禰門繼、飯高宿禰全雄、並從五位下、正六位上山邊宿禰岑麻呂外從五位下、是日授三品有智子內親王二

姓眞道宿禰一、十二月己丑賜ニ姓清原眞人一、戊申山田造等賜ニ宿禰姓一の八條二百八十三字あり錯簡なること明なり閣本尾本に據り之を削りて各其所に移す

○不係叡武、仁明天皇皇位を辭し給ひしも淳和天皇の之を免し給はざるを云

○馭朽乘奔、尚書五子之歌に予臨ニ兆民一、懍乎若ニ朽索之馭ニ六馬一、爲ニ人上一者奈何不敬とあるに據れり

○仁化未饒云々、御仁政未だ洽らざるに速くも御讓位ありしを云、原本饒を澆に作る伴イ本類史に據て改む

○避位之號云々、御讓位の後太上天皇と稱し奉るは舊典なるを其尊號を避け給はむとし給ふを云、勿に原本而に作る両本及類史に據て改む

○太上尊號、老子に太上立レ德、禮記に太上貴レ德、漢書匡衡傳に太上者民之父母等見ゆるに據れるか

○秦日漢年云々、史記秦始皇紀に追ニ尊莊襄王一爲ニ太上皇一(廿六年紀)、同く漢高祖紀に高祖乃尊ニ太

品、河內國人大外記外從五位下長岑宿禰茂智麻呂等五人、改本居貫附右京、○甲午、天皇遷自東宮、權御松本院、遣使解關門警固、○乙未、天皇始臨朝、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表、請辭官職、不許、是日頒使諸國、奉幣天神地祇、以有卽位事也、○丙申、肥後國葦北郡少領外從八位上他田繼道叙三階、同郡白丁眞髮部福益賜出身焉、以各輸私物濟飢民也、○戊戌、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣乞歸、不許、以三品秀良親王爲中務卿、中納言從三位直世王爲兼彈正尹、從二位行大納言藤原朝臣三守爲兼皇太子傅、○庚子、以從五位上丹墀眞人清貞爲右少弁、云云、正五位上滋野朝臣貞主爲內藏頭、下總守如故、云云、從五位下小野朝臣篁、從五位下春澄宿禰善繩、並爲東宮學士、善繩所帶大內記如故、云云、左衞門醫師從七位上出雲連永嗣改連賜宿禰、○辛丑、左大臣緒嗣上表、請減職封五百戶、不聽、○壬寅、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、有圍碁之興、訖賜親王以下御衣被、各有差、是日罷權中納言藤原朝臣吉野所兼右大將之任、令以陪奉淳和院、○乙巳、天皇御紫宸殿、皇太

公爲太上皇（六年紀）等見ゆるを云
○禮之爲用云々、禮記禮運篇に禮義也者云々所以達天道順人情之大竇也、注に竇孔穴也とあり物の通る穴の義也
○其在人也云々、禮記禮器篇に出づ箭は竹の小なる者、筠は竹の靑皮、栢は柏の俗字柏には扁柏側柏檜柏等の別あり心は樹心、柯は枝なり
○先日、原本日を自に作る類史に據て改む
○本圖、本よりの謀なり原本圖を面に作る諸本及類史に據て改む
○元誓、元の誓なり本圖に對して云
○老聃杜企跨之塗、老聃は老子、其言に知足不辱知止不殆とあり字書に企は挙踵望也跨は越也とあり
○莊叟閒性分之域、莊叟は莊子、其書概ね寓言にして物皆其性能に安すべきを說けり閒性分之域は卽ち其意なり
○夕惕多愆、夕惕は易乾卦九二に君子終日乾々夕惕若と見え愆は年なり終日勤め夕に之を省みて愆

るゝこと多年なりとなり
○將攝之方、將は養なり將攝は休息するを云唐書裴度傳に春時俗說難於將攝宜加調護速就和平とさ見ゆ
○釋位負重、負重は任重き太上天皇の稱號を云
○閑放、類史閑散に作る
○揖風月、揖は聚也、原本揖を楫に作る閣本林本及類史に據て改む
○收視反聽、文選文賦に出づ注に言不視聽也とあり原本聽を能に作る閣本尾本宮本及類史に據る
○去邁、年老ゆるを云、閣本尾本西本及類史去を去に作る恐くは非
○蓋有之矣、原本蓋を憲に作る閣本西本に據て改む
○先後詔、原本先後を光從に作る類史に據て改む
○必允、原本必を心に作る諸本及類史に據て改む
○不聽、原本不下に能字あり閣本宮本及類史紀略に據て削る
○掌侍、後宮職員令に掌侍掌同尙侍唯不得奏請宣傳
○掌膳、同令に掌膳掌知御膳進食先嘗總摂膳

子始朝覲、拜舞昇殿、東宮采女羞饌、未及下箸、勅賜御衣、受之拜舞、早退、以當日須拜謁兩太上天皇也、于時皇太子春秋九齡矣、而其容儀禮數、如老成人、賜學士及坊官進以上幷乳母衣被、各有差、又以商布五千段、賜見參五位以上、各有差、皇太子及坊官亦預焉、○丁未、延百口僧於大極殿、轉讀大般若經、以祈年穀兼攘疫氣也、普告天下、禁斷殺生、限以三箇日、○己酉、卜定大嘗會事、以近江國高嶋郡爲悠紀、備中國下道郡爲主基、○辛亥、以中納言從三位直世王爲兼中務卿、三品秀良親王爲彈正尹、參議從三位橘朝臣氏公爲右近衞大將、正五位下伴宿禰氏上爲右中弁、云云、從五位下小野朝臣篁爲彈正少弼、正五位下藤原朝臣助爲右近衞權中將、從五位下長田王爲伊勢守、從五位下藤原朝臣貞雄爲甲斐守、從四位上源朝臣弘爲信濃守、宮內卿如故、云云、○癸丑、以久子內親王爲伊勢齋宮、高子內親王爲賀茂齋院、○甲寅、遠江國飢疫、賑恤之、○乙卯、詔曰、盛德无沫、必資加等之榮、徽烈惟昭、聿修崇號之制、故使敬宗尊祖、義煥囊篇、追遠飾終、不隔異代、朕外祖父從三位橘朝臣(淸友)疏

基顯族、驤首高衢、外祖母從三位田口氏、鍾彩芝田、騰芳蕙圃、但屬運謝、已從閲川、朕以菲薄、丕承洪業、緬尋既往、想清渾之眇焉、乃詢舊章、宜縟禮而有貴、宜外祖父及外祖母並追贈正一位也、橘朝臣位記狀曰、地居貴戚、爵既隆而加榮、德蘊餘芳、人雖謝而追遠、宜申朝典、式賁泉扃、田口氏位記狀曰、曾慶潛行、誕茲婉嫟、粉川行閲、蘭郁猶流、欽若舊章、睦親斯在、宜崇寵贈、允迪追榮、勅、山城國相樂郡拝山墓、河內國交野郡小山墓、並宜置守冢一烟、○丁巳、授正五位下橘朝臣井手子從四位下、

羞酒醴諸餅蔬菓之事上　○爲應郎位、紀略應を可に作る　○從三位兼行民部卿、原本兼を廣に作る諸本に據て改む　○從三位行、原本從を正に作る西本に據て改む　○從四位下式部大輔、原本從を正に作る下文に據て改む　○安倍朝臣、原本倍を陪に作る閣本細本に據て改む　○柏原長岡二陵、柏原は桓武天皇山陵山城國紀伊郡堀內村大字堀內にあり長岡は桓武天皇の皇后乙牟漏の陵にて同郡乙訓郡向日町にあり　○恐恐毛、原本毛の上に已字あり諸本に據て削る　○後太上天皇、淳和天皇を申す原本後を復に作る西本に據て改む　○蒙戴天之、原本戴を載に作る西本條本に據て改む　○天之日嗣乃政者、原本乃字なく政を岐に作る閣本西本及文德紀深草陵卽位奉告策命に據て改め補ふ　○諸王、原本なし西本條本宮本等に據て補ふ　○百官人、人字は諸本に據て補ふ　○高座、原本座を坐に作る諸本に據て改む　○近江大津乃宮云々、天智天皇　○賜利懼利、懼利の二字は文德天皇卽位の詔に據て補ふ　○恐美坐久止、原本久を世に作る諸本に據て改む　○宜布勅乎、細本勅上に天字あり下文及文德紀の詔に據るに天皇勅とあるべきなり　○治賜君波、原本波字なし諸本に據て補ふ　○拙劣、原本劣を幼に作る堀本に據て改む　○相穴奈比・穴奈比は助くる意原本比を利に作る西本に據て改む　○扶奉牟、原本牟を乎に作る西本に據て改む　○智行、原本知行に作る文德紀及桓武天皇卽位詔に據て改む　○當蔭之階、當蔭とは五位以上の人の子は父祖の餘慶に依て叙位せらるゝを云、蔭は原本陰に作る諸本に據て改む　○給御物天、天字衍なるべし　○天下給侍留高年、戶令に凡年八十及篤疾給侍一人九十二人百歲五人皆先盡子孫とある是なり　○力田、農耕に特に力を用ふる人を云　○義夫、寡詰大を芝に作り芝は僕字の譌なるべしされど賦役令に義夫節婦志行聞於國郡者申太政官奏聞表其門閭云々とあり義夫は譌にあらず　○阿保親王、平城天皇の皇子　○賀陽親王、桓武天皇の皇子　○藤原朝臣三守、三守の二字は諸本及類史に據て補ふ　○並正三位、原本三を二に作る諸本及類史に據て改む　○正行王、萬多親王の御子　○從四位下安倍朝臣、原本倍を陪に作る閣本宮本及類史に據て改む下は上の誤なるべし　○弟氏並、並字は宮本に據て補ふ　○友足、原本友を支に作る林本宮本及類史に據て改む　○淸世、諸本世を臣に作る類史は此に同じ　○宗吉、宮本閣本吉を能に作る　○全雄、原本全を今に作る宮本及類史に據て改む　○有智子內親王、嵯峨天皇の皇女賀茂の齋院　○外從五位下長岑宿禰、原本外字なし山崎校本に據て補ふ、承和三年十月紀に左京人民首氏主に此姓を

賜はりし事見ゆ　○甲午、原本午を子に作る林本宮本及類史紀略に據て改む　○松本院、紀略に寛弘元年四月十日癸亥右少辨輔尹以下向二松本曹
司一ぞ見え又小右記に長和三年二月十日丙寅にも見ゆれご所在は詳ならず　○關門、鈴鹿不破愛發の三關なり此時三關既に廢せられしも朝廷に大事あ
れば關使を立つることゝ令制に同じ、原本關を開に作る林本宮本及紀略に據て改む　○他田繼道、錄和泉皇別に他田、勝臣同祖大彥命之後也とあり
○眞髮部、錄右京皇別眞髮部稚武彥命男吉備武彥命之後也とあり　○出身、選敍令に詳なり　○乞歸、官職を辭することを云　○秀良親王、嵯峨天
皇の皇子　○直世王、長田王の孫にて淨原王の子　○淸貞、原本淸を諸に作る西本宮本及紀略に據て改む　○爲右少辨云々、此に云々の二字あるは
便寫の時本文を省略せしものなり以下之に同じ此例三代實錄にも見ゆ墓誌には此を始め以下悉く削りたれご之を存せざれば省略せしこと明ならず故
に之を存す　○滋野朝臣貞主、文德紀仁壽二年二月乙巳紀に傳あり　○小野朝臣篁、同年十二月癸未紀に傳あり　○左衛門醫師云々、以下賜宿禰に
至る十九字原本に三月庚子を逓して戊子朔條奉賀踐祚の下に置けり尾本林本に據て此に移す　○左大臣緒嗣、林本臣の下七字空白とす正二位藤原朝
臣の七字を補ふべきか　○職封、祿令に左右大臣各職封二千戶と見ゆ　○不聽、原本不下に能字あり宮本及紀略に據て削る　○圍碁、抄術藝部に博
物志云堯造二圍碁一（音䀐字亦作レ棊此間云五）一云舜之所レ造也とあり　○御衣被、御字疑くは衍　○右大將、原本大を少に作る諸本及類史に據て改む
○朝覲、禮記曲禮に天子當レ依而立諸侯北面而見二天子一曰レ覲、周禮大宗伯の注に覲之言勤也欲二其勤一レ王之事一とあり其儀禮は西宮記江次第に詳なり　○學
士及坊官、職原抄に傳及學士を東宮官といひ大夫亮進屬を坊官と爲すとあり　○商布、抄布帛部に商布本朝式云商布（多邇）とあり調庸に納むる外自
川とし又交易に用ふる布なり　○參議從三位橘朝臣氏公、淸友三男是年六月癸亥參議に拜す此に參議とあるは追書せるなり　○久子內親王、仁明天
皇の皇女　○高子內親王、久子內親王の御妹條本及類史紀略高を亮に作る　○賀茂齋院、嵯峨天皇藤原藥子の事ありしより平城上皇との御中らひよ
からざるを以て皇女有智子內親王を賀茂の齋院とし上皇の大御心を和げ奉らむと祈請せさせ給ひしに昉まりし者なり、原本院字を脫す西本及類史に
據て補ふ　○遠江國飢疫賑恤之、此條原本乙卯の次にありしを林本及紀略に據て此に移す　○无㳗、離騷注に㳗已也とあり盛德止むことなきをいふ
○敬宗尊祖、禮記大傳に尊レ祖故敬レ宗敬レ宗尊レ祖之義也とあるに據れり　○煥曩篇、古書に明なりとなり　○追遠飾終、論語學而篇に愼レ終追レ遠民德
歸レ厚矣とあるに出づ　○疏基顯族、疏は分也橘氏は敏達天皇の裔孫なる故に顯族と云り、原本顯を頭に作る諸本に據て改む　○曠首高衢、曠は擧
也晉書孔愉傳贊に策二名衢府一騁二足高衢一歷二試淸階一遂登二顯要一とあるに據れり　○田口氏、神祇伯田口朝臣佐波主の女　○毓彩芝田云々、拾遺記に崑
崙山下有二芝田蕙圃一皆數百頃群仙種耨焉とあり毓は育に同じ女性なれば彩といひ芳と云り原本毓を敏に蕙を薫に作る毓は水戶校本蕙は西本尾本に據
て改む　○渾謝、時運の遷謝を云　○從閱川、文選歎逝賦に悲夫川閱レ水以成レ川水滔々而日度世閱レ人而爲レ世人冉々而行暮とあるに據れり注に閱
也滔々水流貌閱二衆水一而成二其川一終日流去而後水續とあり　○淸渾、渾は此にては當らず或は暉の誤か　○宜繰禮、繰は說文に繁采色也とあり、原
本宜を宜に繰を繹に作る諸本に據て改む　○餘芳、西本條本等芳を芬に作る　○式賁泉扃、泉扃は墓なり、原本扃を扁に作る諸本に據て改む　○誕
茲婉嫕、嫕は嫕の誤か婉嫕は晉書武悼楊后傳に婉嫕有二婦德一と見え柔順貌、婦德を云誕は大也　○粉川行閱、上文閱川の文字を潤飾し女性なるを以
て粉川と云り卒去の事を云　○蘭郁猶流、郁は芳也遺芳の尙殘る意　○拝山墓、諸陵式に加勢山墓贈太政大臣正一位橘朝臣淸友仁明天皇外祖父と見
ゆ今木津村鹿背山にあり、原本墓を葉に作る諸本及紀略に據て改む下同じ　○小山墓、同式に小山墓贈正一位田口氏仁明天皇外祖母と見ゆ、今北河
內郡山田村田口の南に荒墳あり此處なるべし　○守冢、原本冢を家に作る諸本及紀略に據て改む　○井手子、原本手子倒置諸本に據て改む、橘氏の
祖諸兄相樂郡井手里に居れるに據り世に井手左大臣とよび淸友の子氏公亦井手右大臣と稱するに據れば井手子は蓋氏公の姉妹などにや

〔四月〕賜侍臣酒、孟夏旬宴なり公事根源に是は天子夏冬の季のあらたまる始に臣下に御酒をたび政をきこしめす義なりとあり
○隕霜、原本隕を降に作る諸本に據て改む
○伊豫權守、類史豫を勢に作る
○眞綱、淸麻呂の子是れ和氣使の始なり
○宜子女王、仲野親王女天長五年二月齋宮に卜定
○賀茂大神宮、原本大を太に作る諸本及類史に據て改む宮字は類史になし從ふべし
○告以高子內親王云々、原本以告と倒置す類史に據て改む
○奏樂、原本奏を秦に作る諸本及類史に據て改む
○身長、長字は諸本に據て補ふ
○奉獻奏吳樂、原本奏字を脫す西本尾本及類史に據て補ふ
○十禪師、戒律智德高き僧を宮中の內道場に供奉せしむる者なり其數十人なるを以て十禪師と云續紀寶龜三年三月丁亥紀を參看すべし

○夏四月戊午朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、音樂之次、右京大夫從四位下百濟王勝義奏百濟國風俗舞、晩頭洒罷、賜四位已上御被、五位御衣、○庚申、隕霜、○壬戌、遣從四位下行伊豫權守和氣朝臣眞綱、奉御劔幣帛於八幡大菩薩宮及香椎廟、告新即位也、○甲子、遣內匠頭正五位下楠野王於伊勢大神宮、告齋宮宜子女王之替定久子內親王之狀、○乙丑、授化新羅人金禮眞等男女十人貫附左京五條、○丁卯、遣參議從四位下右大弁藤原朝臣常嗣、奉幣於賀茂大神宮、告以高子內親王定齋院之狀、○丙子、左近衞府奉獻奏樂、夕暮而止、賜群臣御衣及商布各有差、是日、勅、喚大舍人穴太馬麻呂與內豎橘吉雄、双立量其身長、吉雄甚短而其頭首不及馬麻呂腋下焉、○丁丑、授常陸國鹿嶋大神祝外從八位上勳八等中臣鹿嶋連川上外從五位下、○戊寅、左衞門左兵衞二府奉獻奏吳樂、賜群臣祿有差、是日延十禪師於內裏轉經、爲可遷御故、先鎭之焉、爲嵯峨院下詔曰、鷄觀之上、日照先被、龍軺所過、恩典便降、嵯峨院者、先太上天皇光臨之地、第宮聳構、分東西之名區、芝蓋駐蔭、追汾

陽之高賞、宣遊斯在、引年其深、然則當邑之甿、須霑慶幸、近壤之戶、豈无優恤、時惟長嬴、方申亭育、思順天序、式施惠澤、宜山城國葛野郡貧民、去年借貸未入者、及雜賦未進等、特免之、從五位下菅野朝臣人數爲掌侍、天長元年有詔、廢五月五日節、爲隣近皇太后（正子）昇遐之日也、但事在練武、不可闕如、所以改用四月廿七日、至是太政官論奏、停彼權制、仍舊宣遊、許之、○己卯、天皇遷御內裏、以攝津國百濟郡荒廢田卅七町野賜源朝臣勝、○庚辰、奉授伊勢國從五位下多度大神正五位下、皇太子始讀孝經、參議已上、會集東宮有宴焉、山城國人山代忌寸淨足、同姓五百川等八人、改忌寸賜宿禰、淨足等、天津彥根命之苗裔也、○壬午、出雲國司率國造出雲豐持等奏神壽、幷獻白馬一疋、生鵠一翼、高机四前、倉代物五十荷、天皇御大極殿、受其神壽、授國造豐持外從五位下、○丙戌、紀伊國名草郡人正七位上湯直國立、同姓眞針、國作等三人、賜姓紀直、

○鷄觀之上云々、泰山記に山頂東南巖爲日觀日觀者雞一鳴時見日始欲出叉玄中記に桃都山有大樹上有天雞日初出照此木卽鳴天下雞皆隨之とあるを云り

○龍轄所過云々、文選東京賦に龍輅充庭、注に龍輅太子之車也とあり車駕の過ぐる所は恩典を下さるゝを云、便は類史曲に作る亦通ず

○嵯峨院、嵯峨天皇の離宮、貞觀十八年二月癸酉淳和太后請以嵯峨院爲大覺寺とあり今山城國葛野郡嵯峨村大覺寺卽是なり

○第宮締構、原本第を弟に作る閣本西本及類史に據て改む

○分東西之名區、殿舍多く東西に分立するを云

○芝蓋駐蔭云々、文選西京賦注に芝蓋は以芝爲蓋とあり、芝形蓋の如くなる故なり汾陽之高賞とは莊子逍遙遊篇に堯往見四子（注云王倪齧缺被衣許由）藐姑射之山汾水之陽とあるに出づ

○宣遊斯在、文選顏延之侍讌蒜山作の注に宣は徧とあり、原本宣を宜に作る西本宮本及類史に據て改む　○引年其深、引年の文字は禮記王制に凡

三王養老皆引年とあるに出づ此には年老て隱退する意に用ひたり　〇當邑之吪、吪は田民也、原本畝に作る西本條本及類史に據て改む　〇時惟長贏、爾雅釋天に春爲發生、夏爲長贏とあり、原本惟を帳に、贏を羸に作る閣本淀本に據て改む　〇方申亭育、亭育は化育するを云申は致也、原本申を甲に作る宮本及類史紀略に據て改む　〇式施懸澤、原本式を或に作る閣本西本及類史に據て改む　〇貧民、原本貧を貪に作り民字なし諸本及類史に據て補訂す　〇雜賦、原本雜を雖に作る宮本及類史紀略に據て改む　〇五月五日節、端午節なり既に注せり　〇皇太后、桓武天皇の夫人藤原旅子なり延暦七年五月四日薨　淳和天皇卽位後贈皇太后とし詔して五月節を停む　〇權制、一時の假りの制詔なり　〇宜遊、原本宜を宣に作る上文及閣本西本に據て改む　〇百濟郡、後廢郡となり住吉東生の兩郡に入る　〇源朝臣勝、嵯峨天皇の皇子後剃髮して由蓮竹田禪師と稱す　〇多度大神、神名式に桑名郡多度神社とあり今官幣中社に列す所在多度村　〇山城國人云々、以下苗裔也に至る三十六字原本及諸本上文三月戊子朔下三月庚子記事の次に置けるを林本尾本に據て此に移す　〇出雲國司、此下姓名を闕く　〇率國造出雲豐持等、率は原本卒に作る諸本及類史に據て改む出雲の下恐くは宿禰の二字を脫す　〇奏神壽、既に注す　〇生鵠、原本鵠を雉に作る宮本及類史に據て改む　〇倉代物、倉は庫(クラ)にて庫代物なるべし　〇紀伊國名草郡人云々、以下賜姓紀直に至る二十八字原本上文三月戊子朔下四月庚辰記事の次に之を載せ亦此に出づ尾本に上になくして此にあるは是なり、今之に據りて彼を除き之を存す　〇賜姓紀直、姓字は林本宮本に據て補ふ

（五月）御武德殿觀馬射、端午節なり

〇多磨、原本磨を麻呂の二字に作る林本宮本に據て改む今豐多摩及南北西の三多摩となれり

〇悲田處、光明皇后悲田院を置きて孤兒病者を養ふ所に充てられたれど仁慈の及ぶ所京及其附近に止まりしが此に倣ひて地方に及ぼせるなり支那にては唐書武宗紀に見ゆ處は所に作るべし

〇六箇人、民部式に據るに武藏は大國なり大國には守介大少掾大少目各一人を置けるを寶龜六年三月乙未に少目を二員とす故に介以下六人なり

〇五月丁亥朔、以右少弁從五位下丹墀眞人淸貞爲左少弁、勘解由次官從五位下藤原朝臣諸成爲右少弁、大監物從五位下藤原朝臣大津爲散位頭、〇辛卯、（五）天皇御武德殿、觀馬射、〇壬辰、（六）亦御同殿、閱覽種種馬藝、〇甲午、（八）叙左衞門少尉正六位上田中朝臣許侶繼從五位下、〇丙申、（十）以從五位下氷上眞人井作爲大監物、云云、〇丁酉、（十一）武藏國言、管內曠遠、行路多難、公私行旅、飢病者衆、仍於多磨入間兩郡界、置悲田處、建屋五宇、介從五位下當宗宿禰家主以下、少目從七位上大丘秋主已上六箇人、各割公廨、以備御口之資、須附帳出擧、以其息利充用、相承受領、輪轉

○出擧以其息利充用、主税式に武藏國悲田料稻四千五百束と見ゆ
○相撲、垂仁紀七年及天平六年七月辛丑紀に見ゆ
○簡練、原本練を陳に作る纂詁に據て改む
○玄雲、黑雲を云
○襖子、抄裝束部衣服類に唐令云諸給時服冬則白襖子一領（阿乎之）とあり今俗に所謂綿入なり
○例擧、例年の如く出擧するを云
○周急憐絕、論語雍也篇に周急不繼富とあるに出づ絕は乏絕なり貧窶せるものを憐むを云
○一穀不贍云々、贍は給也足也嗛は慊と通すあき足る也
○遵救乏之典、遵は原本導に作る諸本及類史に據て改む
○勸穡之義、文選藉田賦に勸穡以足百姓所以固本也とあり原本穡を構に作る林本宮本及類史に據て改む
○救瘼恤隱、原本瘼を廣に作る水戶校本及類史に據て改む瘼は病也隱は痛也病に惱み憂ふるものを救恤するを云

不斷、許之、勅、相撲之節、非啻娛遊、簡練武力、最在此中、宜令越前、加賀、能登、佐渡、上野、下野、甲斐、相摸、武藏、上總、下總、安房等國、搜求膂力人貢進、○辛丑、北山玄雲黯靄、山嶺不見、終日天寒、衆人多著襖子、○戊申、主計寮言、寮中置厨、苦於愼火、賜散位寮東面地廣七丈、長十丈、將爲置厨之處、許之、○辛亥、聖躬不豫、○壬子、大和國言、頻年不登、例擧有欠、准弘仁十年官符、借國中富人稻三萬八千束、將賑飢民、許之、仍勅曰、夫富豪所貯、是貧窶之資也、如聞、先來所行、吏非其人、只事借用、无意返給、所以貧富俱弊、周急憐絕、宜至秋收、特遣使者、悉令返給、○甲寅、京師五畿內、七道諸國、並飢疫焉、下詔曰、夫一穀不贍、百姓不嗛、必遵救乏之典、兼明勸穡之義、是則救瘼恤隱、固本厚生、雖沿革有時、而斯塗莫爽者也、朕虔膺明命、撫字黔黎、思脩和平之猷、以登仁壽之域、如聞諸國、去年穀稼頗乖豐稔、今茲元元阻飢且疫、朕爲之司牧、未克綏之、靖言念焉、憮然何弭、況小暑甫至、藝殖鼎盛、不有矜情、恐失肆力、宜京畿內七道諸國飢民、量加賑給、令獲支濟、事委守宰、必也審察、務崇簡惠、允副朕意、六世長岡、

岡於王等男女廿七人、賜姓清原眞人、太政官處分、課左右京戸、令輸椅柱一万五千株、以充東西堀河杭料、○乙卯（廿九）、皇子年六歳者殤焉、侍女滋（繩子）氏所產育也、

續日本後紀卷第一

○固本厚生、尙書五子之歌に民惟邦本本固邦寧また大禹謨に正德利用厚生惟和、注に厚生謂薄征徭輕賦稅不奪農時令民生計溫厚衣食豐足と見え國の本たる人民の生活を安定にし鞏固ならしむるを云
○虔膺明命、尙書太甲に顧諟天之明命とあるに出づ、虔は原本虚に作る宮本に據て改む
○撫字、字は愛育する意
○脩和平之猷云々、毛詩小雅伐木章に神之聽之終和且平また漢書禮樂志に驅一世之民濟之仁壽之域とあるに出で民心を平和ならしむる謀を脩め幸福にして長く壽を保つ境涯に登らしめむことを思ふとなり、域は原本城に作るを諸本及類史に據て改む宮本水戸校本及類史脩を緝に作る
○元元阻飢、元々は人民をいひ阻飢は飢に惱むを云　○司牧、君を云　○小暑甫至、原本小暑の二字を只農時の三字に作る類史に據て改む　○蕃殖鼎盛、種蒔き植付けの方に盛なるを云、宮本及類史鼎を斯に作る　○失肆力、爾雅疏に肆極力也とあり　○事委守宰、守宰は國司を云委は任也委任するを云、原本宰を寄に作る諸本及類史に據て改む　○六世長岡云々、以下眞人に至る十九字原本に上文三月戊子朔の次に出で亦此には錯簡なれば彼を削りて此を存す　○長岡岡於王、共に世系詳ならず　○一万五千株、原本千を十に作る諸本に據て改む　○充東西堀河杭料、充字は原本なし紀略に據て補ふ堀河は東西にあり故に東西堀河と云杭は字類抄に杭クヒ、杭俗用之非也とあり　○皇子、名闕く　○殤、短折せるをいふ字書に未成人喪也とあり八歲以下は無服の殤なり　○滋氏、滋野氏を修して滋氏と云り滋氏は女御從四位上滋野朝臣繩子にして參議貞主の女なり

續日本後紀卷第二

起天長十年六月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

六月丙辰朔丁巳、禁斷山城近江丹波等國近都之山施作坑穽機槍、○庚申、彈正臺言、天長三年減巡察二員加屬二員、既有典員、何無史生、許之、令置二員、○壬戌、天皇不豫、公卿陪候殿上、西山苾蒭、其名仙樹、以咒驗稱、與僧都等、倶奉加持聖躬也、分遣被七條、綿七百屯於七寺、轉經薫修、以祈翌日之瘳、○癸亥、公卿率衆僧、共侍殿上、勅引右近衛大將從三位橘朝臣氏公、并前大宰大貳從四位上朝野宿禰鹿取於御床下、拜爲參議、是日爲聖體有聞、使神祇伯從四位下大中臣朝臣淵魚、奉幣於賀茂大神、又令天下諸國、修理寺塔破壞者及神社、勅曰、如聞、諸國疫癘、夭亡者衆、自非修善、何以攘災、宜令諸國、各請練行僧、大國廿人、上國十七人、中國十四人、下國十八人、三箇日內、晝轉金剛般若經、夜修藥師

○起天長十年、天長の二字原本及諸本なし各巻を通考するに初巻のみ年號を擧げ次巻以下にはこれを略する例なれど今宮本水戸校本に據て補ふ

【天長十年】丙辰朔、紀略に據て補ふ

○丁巳、以下機槍に至る二十二字は類史百八十二及紀略に據て補ふ

○坑穽、落し穴なり

○機槍、雜令に凡作檻穽及施機槍云々と見え天武紀四年四月紀（紀下二七一頁）に機槍をフムハナチと訓り蹈發の意なるべし紀略に此次に已未任官の四字あれど人名詳ならざれば取らず

○庚申、以下二員に至る三十三字水戸校本及類史百七に據て補ふ

○典員、主典なり巡察の屬には主典に當ればかく云

○苾蒭、釋氏要覽上に苾蒭梵語也是西天草名具五德故將喩出家人とあり

○加持、一種の咒法なり

○聖躬、紀略躬を躰に作る

○綿七百屯、賦役令に綿二斤曰屯也とあり

悔過、其布施者、三寶穀十斛、僧三斛、以正稅充行、俾致精進、○甲子、詔曰、雲行雨施、穹蒼所以宣慈、含垢匿瑕、元后於焉播澤、朕肅承不構、詢以政塗、大庇生靈、期於寧濟、夫赦令者、本稱姦人之幸、亦有奔馬之喩、朕非不知之、但欲令其悔惡自新、變舊迁善、加之特有所念、感事興懷、宜流肆告之恩、式暢作解之典、可大赦天下、自天長十年六月八日昧爽以前、大辟以下、罪无輕重、已發覺未發覺、已結正未結正、繫囚見徒、咸赦除之、唯犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不原者、不在赦限、又去弘仁元年坐事配流者、雖自陷朝憲、而久憐淪翳、安倍朝臣清繼、百濟王愛筌、故藤原朝臣仲成男等、並量徙入近國、從五位下藤原朝臣貞本、殊放還京、速告赤縣、莫後靑衣、敢以赦前事告言者、以其罪罪之、○勅、比來疫癘間發、夭折屢聞、宜令天下諸國、謝彼疫氣、攘此不祥、但加藥致齋、須依前格、○乙丑、聖體平復、○己巳、罪人安倍朝臣清繼、元配伯耆國、今移美作國、百濟王愛岑、元安房國、今移參河國、○庚午、兵部省奏、造兵司雜工卄人之中、割二人、鼓吹々部卅四人之中、割大小角鼓生各一人、將爲省書生、

○七寺、東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆寺を云
○新翌日之瘳、尙書金縢に公歸乃納冊于金縢之匱中、王翌日乃瘳とあるに據れり原本之の字新下にあり諸本に據て改む
○擧體有間、原本體を休に作る諸本に據て改む
○從四位下大中臣朝臣淵魚、原本從を正に作り大中臣を藤原に作る從は宮本及下文に據り大中臣は宮本及類史紀略に據て改む
○賀茂大神、原本大を太に作る諸本及類史三十四に據て改む下同じ
○令天下諸國、原本令を命に作る類史百八十二及紀略に據て改む
○三箇日内、紀略内を間に作る
○般若經、經字は類史百七十三及紀略に據て補ふ
○藥師悔過、聖武天皇の御時始めて行ひ給ひしより後諸國國分寺にて行はるゝに至れり
○正稅、租は田賦なり之を貯積するを稅と云正稅は一に大稅と云之を出擧して諸般の公費に充つる

許㆑之、○[廿六]辛未、罪人藤原永主、同山主、藤主等、天長二年、從㆓日向國㆒迁㆓配豐前國㆒、今移㆓備前國㆒、永野淨津、元配㆓越前國㆒、伊勢安麻呂、元配㆓能登國㆒、今並移㆓若狹國㆒、○[廿三]戊寅、山城國民、卷㆑藻爲㆑漁、勅、豺獺已祭、虞人入㆑澤、鷹隼初擊、獵者因㆑山、是故殺不㆑以㆑禮、曰㆑暴㆓天物㆒、取不㆑以㆑義、爲㆑逆㆓時候㆒、如聞、藻卷之爲㆑體也、惠㆓薄潛鱗㆒、害及㆓昆蟲㆒、微物失㆑所、既非㆓德政之美㆒、下民夭㆑命、殆是濫殺之報、嚴加㆓禁斷㆒、莫㆑令㆓更然㆒、○[廿七]壬午、詔奉㆑授㆓坐㆓尾張國㆒從三位熱田大神正三位㆒、幷納㆓封十五戶㆒、○[廿八]癸未、地震、○[三十]乙酉、因幡國言、百姓之係、卅日爲㆑限、至㆓于事力㆒、竟年駈使、比㆓之平民㆒、受㆑弊殊重、請停㆓差調丁㆒、駈㆓使係人㆒、許㆑之、

なり　○精進、煩惱の心を雜へず專一に道に進むこと　○雲行雨施、易乾卦の彖傳に雲行雨施品物流㆑形とあるに據れり　○含垢匿瑕、左傳宣十五年に諺曰高下在㆑心川澤納㆑汙山藪藏㆑疾瑾瑜匿㆑瑕國君含㆑垢天之道也とあるに據れり　○元后云々、元后は君なり衆庶に罪あれども之を宥め赦して德澤を天下に播き施すを云　○承丕構、父祖の大業を繼承するを云尙書大誥の肯堂肯構の語に據れり原本丕を本に作る宮本に據て改む　○大鹿生靈、原本大を陰に作る水戶校本に據て改む　○寧濟、安じ救ふを云　○稱姦人之幸、潛夫論に今日賊㆓良民㆒之甚者莫㆑大㆓於數赦㆒赦贖數則惡人昌而善人傷矣、舊唐書太宗紀に凡赦宥之恩唯及㆓不軌之輩㆒古語曰小人之幸君子之不幸と云　○有奔馬之喩、管子法々篇に凡赦者小利而大害者也故久而不㆑勝㆓其禍㆒云々故赦者犇馬之委轡とあり　○變舊、原本舊を音に作る宮本伴イ本に據て改む　○加之、之字は宮本に據て補ふ　○特有所念、原本特を持に作る西本宮本及類史に據て改む　○感事興懷、事に感じて思を興すなり原本感を盛に、懷を壞に作る、感は閣本及類史に據り懷は類史に據て改む　○肆眚之恩、尙書舜典に眚災肆赦とあるに據れり、注に肆は緩也眚は過也とあり、原本眚を靑に作る西本尾本及類史に據て改む　○式暢作解之典、易解卦の象傳に雷雨作解君子以赦㆑過宥㆑罪とあるに據れり式は原本或に作る諸本及類史に據て改む　○弘仁元年坐事配流者、藤原藥子の亂に連坐せし人々を云　○淪翳、俗にいふ日蔭者なり　○愛筌、原本筌を堅に作る諸本及類史に據る宮本岑に作る孰れか是なるを知らず　○從入近國、流罪に遠流中流近流あり從入㆓近國㆒とは遠流を中流に中流を近流とするを云原本從を徒に作る西本宮本及類史に據て改む　○還京、原本還を週に作る諸本及類史に據て改む　○赤縣、史記孟荀傳に中國日㆓赤縣神州㆒とあるに據れり此には天下と云ふべきに赤縣の文字を用ひしは下に靑衣と云るより其對句としたるなり　○靑衣、支那にては古へ靑衣を賤者の服とす故に賤者を靑衣と云　○勅比來疫癘間發云々、勅以下須依前格に至る卅四字は類史百七十三に據て補ふ　○加藥、服藥療養せしむるを云　○致齋、潔齋を致すを云　○乙丑、原本己丑に作る宮本水戶校本及紀略に據て改む　○愛岑、上文愛筌に作る　○庚午、此條は宮本及類史百七に據て補ふ　○雜工、鍛工甲作弓削矢作等八色の工を云　○鼓吹々部卅四人、職員令に鼓吹司吹部三十人とあ

り延暦十五年十月四人を加へ卌四人とす　○大小角、抄調度部征戰具に角兼名苑注云角（楊氏漢語抄云大角波良乃布江小角久太之布江）本出胡中或云出呉越以象龍吟也　○戊寅、此條は類史百八十二に據て補ふ紀略に亦見ゆ　○豺獺已祭云々、禮記王制に獺祭魚然後虞人入澤梁豺祭獸然後田獵鳩化爲鷹然後設罻羅とあるに據れり疏に獺祭魚則十月中也豺祭獸則九月末十月之初とあり鷹隼初撃は月令に孟秋之月鷹乃祭鳥とある時、則ち八月中なり虞人は山澤及苑囿田獵を主る官を云　○殺不以禮云々、同く王制に田不以禮曰暴天物とあり　○熱田大神、熱田神宮なり原本大を太に作る諸本に據て改む　○卅日爲限、傭は人夫に出づるを云賦役令に凡正丁歳役十日須留役者滿三十日租調俱免、慶雲三年二月格に凡身役十日以上免庸廿日以上調庸俱免役日雖多不過卅日とあり　○事力、軍防令に上戶より正丁一人を採り其庸を免じて職分田の耕作に力を致さしむるを云

（七月）文殊會、文殊菩薩を供養する法會なり　○公家、朝廷を申す　○便安置綱所、綱所は僧綱の居所なり原本便を使に作る諸本及類史紀略に據て改む　○開請、開字は類史百七十七及紀略に據て補ふ　○佐伯王卒、大同元年四月右兵庫頭從五位下、同三年十月大監物四年二月再び右兵庫頭弘仁元年九月又大監物となる　○伊夜比古神、神名式に越後國蒲原郡伊夜比古神社（名神大）、西蒲原郡彌彥村に祀り國幣中社に列す　○有觸諱者云々、桓武天皇御諱山部因て山部氏を山氏と改め平城天皇御諱安殿因て紀伊國阿提郡を在田郡と改めし類是なり　○相撲節、天平六年より毎年七月七日に行はれし

○秋七月丙戌朔、先是傳燈大法師位泰善設文殊會、公家相助而行之、至是甫造文殊影像、備之瞻仰、會事畢、便安置綱所、臨會開請、永爲恒例、○丁亥、[二]散位從四位下佐伯王卒、正五位下水內王男也、○戊子、[三]越後國蒲原郡伊夜比古神預之名神、以彼部每有旱疫、致雨救病也、○癸巳、[八]天下諸國、人民姓名及郡鄕山川等號、有觸諱者、皆令改易、○乙未、[十]第一親王（田邑）朝覲、于時春秋纔是七歲、而動止端審、有若成人、觀者異之、○辛丑、[十六]天皇幸神泉苑、觀相撲節、○壬寅、[十七]御紫宸殿、令盡昨節之餘、將夕乃罷、是日左馬寮走卒將門奏板杙、入自春華門、比至延政門、頓仆而死、○閏七月乙卯朔、勅、至于秋序、洪水敗稼、大風害物、古來尙在、宜令天下諸國、奉幣名神、豫爲攘防、勿損年穀、○戊寅、[廿四]越後國言、去年疫癘旁發、蠶耕失

が天長三年以後國忌（平城）を避て十六日を用ふ、
○昨節之餘、之を拔出さ云
○將夕乃罷、原本將を性に作る閣本西本及類史七十三に據て改む
○春華門、宮城南面の外門なり
○比至延政門、延政門は東面の門なり原本比を北に作る宮本に據て改む
○賴仆、原本仆を爾に作る閣本西本に據て改む
（閏七月）豫爲撲防、爲字は諸本及類史紀略に據て補ふ
○藝耕、原本藝を華に作る宮本に據て改む藝は蓺と通じ種なり
○秋稼、原本此二字倒置す類史に據て改む
○窮民許之、窮は原本究に作る諸本及類史に據て改む許は閣本西本等窮に作る
○仍令大和山城云々、以下祈霽焉に至る三十八字は紀略に據て補ふ
○丹生川上雨師神、神名式に大和國吉野郡丹生川上神社とあり
○松尾、同式に山城國葛

時、寒氣早侵、秋稼不稔、今茲飢疫相仍、死亡者衆、凶年之弊、雖賑猶乏、望請被許糶糴資此窮民、許之、○壬午、霖雨渉旬不息、仍令大和山城二國介已上、親奉幣帛於丹生川上雨師神、松尾、賀茂上下、及貴布禰社、以祈霽焉、○癸未、勅、弘仁年中、犯罪僧藥師寺良勝、被配多褹嶋、西大寺泰山隱岐國、興福寺康信石見國、元興寺永繼信濃國、今並特放還入京都、太政官處分、在大和國廣瀨郡西安寺、（俗號久度）宜令僧綱攝之、○八月甲申朔、日有蝕之、○丙戌、勅、穀倉院西南角地、東西各廿丈、南北各卅丈、宜爲內藏寮染作之處、○辛卯、叙從五位下藤原朝臣良房正五位下、從四位下和氣朝臣眞綱爲木工頭、伊豫權守如故云云、○癸巳、天皇謁覲先太上天皇及太皇太后於冷然院、賜扈從五位已上祿、有差、是日太上天皇幸姫大原眞人全子、橘朝臣春子、阿保親王母氏葛井宿禰藤子、並叙從五位下云云、○甲午、散位從六位上土師連豐道、從六位上同姓道吉等四人、賜姓菅原宿禰、○乙未、有狐、走入內裏、到清涼殿下、近衛等打殺之、○丙申、天皇御紫宸殿、供常膳間、有魚虎鳥、飛入集殿梁上、羅得之、○

野郡松尾神社
○貴布禰社、同式に山城國愛宕郡貴布禰神社、鞍馬村貴船にあり官幣中社に列す
○眞勝、以下四人は蓋藥子の亂に坐して流されしなるべし
○特放還入、西本尾本放を令に作る
○京都、宮本京師に作る
○太政官處分、以下攝之に至る二十一字及分注四字類史及紀略に據て補ふ但し紀略に七月癸未とあれど癸未は閏七月廿九日なり故に干支を推して此に收む
○西安寺、大和志に定林寺在河合村爲廣瀬神宮寺とあり是か
(八月)穀倉院、拾芥抄中末に二條南朱雀西在大學西
○卅丈、卅は原本廿に作る今閣本西本及類史百七に據る
○冷然院、嵯峨上皇の始に坐しし宮なり
○大原眞人全子、嵯峨天皇に仕へて源融勤等を生む原本全を金に作る諸本及類史紀略に據て改む
○橘朝臣眷子、詳ならず

戊戌(十五)、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表辭職、不許之、備前國人直講博士正六位上韓部廣公、賜姓眞道宿禰也、廣公之先百濟國人也、○庚子(十七)、河內國人戶主外從五位下御船宿禰氏主等、改本居貫附右京六條、攝津國人戶主外從五位下菅原宿禰梶吉等、貫附右京二條、○丙午(廿三)、奉幣伊勢大神宮、○戊申(廿五)、先太上天皇御淳和院、與後太上天皇(淳和)遊讌、親王以下咸萃於彼、命文人令賦詩幽居山水之題、兩太上天皇俱有御製、以大藏省綿一萬屯賜群臣祿、是日以從三位源朝臣定爲參議、美作守如故、○辛亥(廿八)、飛驒國貢松實御贄、○九月甲寅朔、辛酉(八)、以在近江國栗太郡金勝山大菩提寺、預定額寺、○壬戌(九)、是重陽節也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、令文人同賦秋風歌之題、宴訖賜祿、○壬申(十九)、參議刑部卿從三位兼信濃守南淵朝臣弘貞薨、年五十七、○戊寅(廿五)、天皇幸栗栖野遊獵、右大臣清原眞人夏野在御輿前、勅令著笠、便幸綿子池、令神祇少副從五位下大中臣朝臣礒守、放所調養隼拂水禽、仙輿臨覽而樂之、日暮還宮、賜扈從者祿、

○阿保親王、平城天皇の皇子　○葛井宿禰藤子、正五位下道依の女　○甲午、此條原本巻一三月戊子と己丑の間に收む林本尾本に據て此に移す　○紫宸殿、原本殿下に下字あり林本水戸校本及紀略に據て、削る　○魚虎鳥、抄羽族部に鴒爾雅集注云鴒（和名曾比今按魚虎見㆓兼名苑等㆒）小鳥也色青翠而食㆑魚とあり今俗にかはせみと云原本魚を燕に作り鳥字なし諸本及類史紀略に據て改め補ふ　○羅得之、羅は鳥網　○備前國人云々、以下百濟國人也に至る三十二字は原本巻一三月戊子と己丑の間に收む尾本林本に據て此に移す　○攝津國人戸主、主原本王に作る諸本に據て改む　○奉幣、類史幣下に帛於の字あり　○成萃於彼、原本成字なく萃を卒に作る成は閣本西本宮本及類史に據て補ひ萃は類史に據て改む　○松實御贄、抄果蓏部に五粒松子楊氏漢語抄云五粒松子（五粒五葉也松子末都乃美）、倭訓栞に今も飛驒に大木ありと云り今朝鮮松といふ和名抄に五葉松とあれど別種にて今いふ日向松なるべしと云　（九月）大菩提寺、興福寺官務帳に大菩提寺在㆓栗太郡㆒號㆓金勝山㆒養老二年金蕭菩薩開基後定爲㆓平城宮鎮鬼門㆒承和聖帝特施㆓燈分㆒賜㆓額金勝㆒とあり今も現存す　○定額寺、官寺を云　○重陽節、類書纂要に九爲㆓陽數㆒九日與㆓九月㆒竝應故曰㆓重陽㆒と見ゆ天武天皇九年九月行㆓幸朝嬬㆒乃俾㆓馬的射㆒と見えしが始なるべきか大同二年九月幸㆓神泉苑㆒觀㆑射詔停㆓正月射禮㆒移㆓于是日㆒と見え天長八年以後は紫宸殿にて行はせらる　○壬申、此條は紀略に據て補ふ　○兼信濃守、此四字は補任に據て補ふ　○弘貞薨、弘貞は從四位下坂田朝臣奈良麻呂の子弘仁十四年今の姓を賜はる　○令着笠、着前に笠を著るは異數なり原本著を差に作る諸本に據て改む　○便幸綿子池、便は便宜によりてなり綿子池は子は手の誤なるべし山田氏は葛野郡縣代（アガタ）なりと云綿手は今葛野郡花園村及衣笠村の邊なりと云　○隼、仁德紀四十年に見え抄羽族部に隼（和名八夜布佐）鷙鳥也と云

（十月）賜侍臣酒、孟冬旬宴なり　○内命婦、職員令義解に婦人帶㆓五位以上㆒曰㆓内命婦㆒とあり　○辛卯勅、勅以下爲圓提寺地に至る十七字は類史百八十二に據て補ふ　○區毗岳、神名式に綴喜郡咋岡神社見ゆ其地なり今草内村飯岡なりと云　○圓提寺、相樂郡拚山にあり　○富麿、原本富を審に作る閣本西本に據て改む　○禊事、大嘗祭の御禊なり　○鹵簿、宮衛令義解に鹵者楯也簿文籍也言簿列㆓

○冬十月癸未朔、天皇御㆓紫宸殿㆒、賜㆓侍臣酒㆒、至㆓大臣以下五位已上及内命婦㆒、賜㆓祿綿㆒各有㆑差、○辛卯（九）、勅、山城國綴喜郡區毗岳一處爲㆓圓提寺地㆒、安藝國言、賀茂郡人風早富麿、德行懿美、孝養自厚、父母歿後、口絶㆓五味㆒、哀慕之情、无㆓暫忘時㆒、勅叙㆓三階㆒、免㆓戸田租㆒、又言、力田佐伯郡人伊福部五百足、同姓豐公、若櫻部繼常等、所㆓耕作㆒田各卅町已上、貯積之稻亦各四萬束已上、並立性寬厚、周施困乏、往還粮絶、風雨寄宿之輩、皆得㆑賴焉、詔各叙㆓一階㆒、○辛丑（十九）、爲㆓大嘗會將㆑修㆓禊事㆒、行㆓幸賀茂河㆒、鹵簿之儀、具如㆓式文㆒、皇太子先在㆓禊處㆒、及㆑聞㆓蹕聲㆒、出㆑幄而立、迎㆓謁天皇㆒、禊事畢、御㆓直相（ナホラヒノ）幄㆒、

楯鹵以爲部隊也とあり
○如式文、文の字は諸本及紀略に據て補ふ
○直相、祭事終りて會宴するを云
○賜從五位已上大官饌、原本賜字なく大官を天皇に作る諸本及類史に據て改む大官饌は大膳職より供する御饌なり
○著當色、原本著を差に作る諸本に據て改む
○圓澄卒、元亨釋書二にも傳見ゆ
○年六十二、釋書に六十六とあり
○延暦十七年、以下大戒之初也に至る迄は類史百七十八灌頂に據て補ふ釋書に據るに類史載する所は其一節にて此前後にも文あること明かなり宜しく釋書を參看すべし
○灌頂、菩薩等覺究竟して妙覺に遷る時諸佛大悲の水を以て頂に灌ぎ自行圓滿して佛果を證するを得しむ是即ち灌頂の義なり
○清瀧峯、山城國葛野郡にあり即ち高雄山なり
○高雄寺、後神護寺と改む下文に見ゆ
○止觀院、俗に根本中堂

賜從五位已上大官饌焉、三四盃後、賜五位及神祇官長上以上、山城國司、并非侍從著當色者祿、各有差、○壬寅、二十延暦寺座主僧傳燈大法師位圓澄卒、時年六十二、云々、延暦十七年、陟到叡山寂澄法師、々々大悅、即落髮爲弟子、取自名一號、爲圓澄、時年二十七焉、廿四年春、寂澄師入唐以後、法師依詔、於紫宸殿、修念五佛頂法、即預得度、其夏四月、就唐泰信大僧都受具戒、六月大唐使歸朝、秋八月宣勅、令寂澄師修入唐所受灌頂秘法、是大法師修圓勤操等七人、爲受法弟子、於清瀧峯高雄寺、奉爲桓武天皇、修毗盧遮那秘法、法師亦在其中、共禀灌頂三摩耶戒、是則本朝灌頂始興之日也、大同元年冬十一月、於叡山止觀院、法師爲上首、與百餘人、受圓頓菩薩大戒、此亦天臺師々相傳大戒之初也、○乙巳、山城國綴喜郡空閑地五町賜正三位中納言源朝臣常、○丁未、以從四位下大中臣朝臣淵魚爲兼攝津守、神祇伯如故云云、○戊申、廿八緣景雲六年八幡大菩薩所告、至天長年中、仰大宰府、寫得一切經、至是便安置彌勒寺、今更復令寫一通、置之神護寺、授正六位上大川王從五位下、正五位

○云山門堂舍記に延暦七年傳教大師建立とあり
○源朝臣常、嵯峨天皇の皇子
○爲兼攝津守、爲字は闕本西本に據て補ふ
○戊申、此二字原本には下文神護寺の下に置けるを類史五及紀略に據て此に移せり
○景雲六年、原本六を之に作る宮本に據て改む
○寫得、原本得寫に作る諸本及類史に據て改む
○便安置彌勒寺、便字諸本及類史紀略に據て補ふ彌勒寺は宇佐神宮の傍にあり
○神護寺、高雄山にあり初め和氣清麿河内國に神願寺を建立す天長元年其子仲世等此地に移す翌年空海を住持とし尋いで神護寺と改む
○文操、原本文授に作る類史九十九に據て改む
（十一月）癸丑朔、朔字は林本宮本に據て補ふ
○美作守如故、纂詁は補任に據て此下に從四位上參議清原眞人長谷爲兼信濃守、正四位下右京大夫百濟王勝義爲左衞門督の卅五字を補ふ

下百濟王安義從四位下、正六位上百濟王文操從五位下、○十一月癸丑朔、以參議從四位上朝野宿禰鹿取爲式部大輔、參議從三位源朝臣定爲治部卿、美作守如故、云云、左近衞權少將正五位下藤原朝臣良房爲權中將、加賀守如故云云、○甲寅、雷、○丙辰、雷電良久、○庚申、爲行大嘗會事、奉伊勢大神宮幣帛、○辛酉、雷電、○丁卯、天皇御八省院、修禋祀之禮、○戊辰、御豐樂院、終日宴樂、悠紀主基共立標、其標悠紀則山上栽梧桐、兩鳳集其上、從其樹中起五色雲、雲上懸悠紀近江四字、其上有日像、日上有半月像、其山前有天老及麟像、其後有連理吳竹、主基則慶山之上、栽恒春樹、樹上泛五色卿雲、雲上有霞、霞中掛主基備中四字、且其山上有西王母獻益地圖、及偸王母仙桃童子、鸞鳳麒麟等像、其下鶴立矣、於是悠紀標、忽被風吹折、工人扶持、乃興復之、悠紀樂標、則大象之背、結構小臺、命兩童子、擎書障子、其書曰、周禮曰、旄人掌樂也、禮記曰、民勞其舞綴短、民逸其舞綴遠、故觀舞而知民治不、其障子後起煙霞、霞中造機、隨舞人之出進、而擧其舞名、其象之左、有一胡人而馭象、○己巳、悠紀

○辛酉、原本酉を丑に作る林本宮本に據て改む
○丁卯、原本卯を癸に作る林本宮本乃類史八に據て改む
○修禋祀之禮、大嘗祭を唐めかして斯く云り尙書舜典に禋于六宗と見え說文に精意以享爲禋と云
○立標、代始和抄に之を標山と云り
○山上、主基の例に據らば慶山之上とあるべきなり類史八も原本に同じ
○五色雲、色字は西本宮本及類史に據て補ふ
○半月像、原本此下に其山上有半月像の七字あるは衍なり諸本及類史に據て削る
○天老、後漢書張衡傳注に帝王紀曰黃帝以風后配上台、天老配中台、五聖配下台、謂之三公とあり列子雲笈七籤にも見ゆ、黃帝の臣下の名なり
○吳竹、抄草木部竹類に筰竹文字集略云筰（楊氏漢語抄云吳竹也和語久禮太計）似䈽而下節茂葉者也とあり
○卿雲、史記天官書に若

獻屛風四十帖、主基獻御挿頭華二机、和琴二机、厨子十基、屛風廿帖、是日親王已下、五位以上、朝賜悠紀祿、夕主基祿、各有差、○庚午(十八)、天皇御豐樂殿、宴于群臣、詔授正三位紀朝臣百繼從二位、從四位下藤原朝臣常嗣從四位上、從四位下磐田王從四位上、從五位上峯成王正五位下、正六位上氏雄王、豐前王、並從五位下、從四位下大中臣朝臣淵魚、長岡朝臣岡成、並從四位上、正五位下甘南備眞人高繼、橘朝臣氏人、橘朝臣永名、藤原朝臣良房、並從四位下、正五位下紀朝臣深江正五位上、從五位上藤原朝臣長良、安倍朝臣安仁、藤原朝臣清澄、並正五位下、從五位下高道宿禰鯛釣、大中臣朝臣永嗣、藤原朝臣春津、良岑朝臣高行、並從五位上、外從五位下良岑宿禰茂知麻呂、正六位上藤原朝臣秋常、坂上大宿禰廣雄、藤原朝臣高扶、小野朝臣千株、坂上大宿禰河内麻呂、橘朝臣宅繼、大原眞人眞甘、惟良宿禰貞道、並從五位下、正六位上余河成、豐岡宿禰眞黑麻呂、並外從五位下、宴畢賜祿各有差、夜闌還宮、○辛未(十九)、授從三位繼子女王正二位、无位藤原朝臣貞子從四位下、无位菅野朝臣

○煙非煙若雲非雲郁々紛々蕭索輪囷是謂卿雲卿雲見喜氣也とあり原本卿を慶に作る諸本に據て改む

○括地圖、西王母傳に舜即位(王母)又授地圖遂廣黄帝之九州爲十有二州とあるは是なるべし

○偷王母桃童子、道藏本漢武外傳に東郡送一短人朔(東方朔)至短人因指謂帝曰王母種桃三千年一作子此兒不良已三過偷之失王母意故被謫來此帝知朔非世上人也、(節略)とあり

○周禮曰、周禮春官に旄人掌教舞散樂舞夷樂とあり旄は原本旌に作る水戸校本及周禮に據て改む

○禮記曰、禮記樂記に其治民勞者其舞行綴遠其治民逸者其舞行綴短故觀其舞知其德云々とあり、本文と相反せり

○其舞名、原本名を各に作る閣本谷本宮本等に據て改む此次に主基の樂標あるべきが脱ちたるべし

○御挿頭華、抄衛藝部雑藝具に楊氏漢語抄云挿頭花(賀佐之俗用挿頭花)

人數從五位下云云、賜女王及命婦祿有差、○癸酉、於本宮有悠紀之奉獻、終日奏樂舞、賜親王以下、次侍從已上祿、○十二月癸未朔、道場一處在山城國愛宕郡賀茂社以東一許里、本號岡本堂、是神戸百姓奉爲賀茂大神所建立也、天長年中、撿非違使盡從毀廢、至是勅曰、佛力神威、相須尚矣、今尋本意、事緣神分、宜彼堂宇特聽改建、○乙酉、天皇御建禮門分使者奉唐物於後田原、八嶋、楊梅、柏原等山陵、○丁亥、外從五位下大宅臣宮鷹麻呂爲近江掾、○戊子、陰陽寮進御曆幷頒曆也、恒例在十一月朔、而曆博士外從五位下刀伎直淨濱卒後、忽无相繼之人、遣召識曆術者遠江介正六位上大春日良棟、乃令造之、所以于今延引、○己丑、右衞門權佐從四位下橘朝臣永名爲刑部大輔、內藏頭正五位上滋野朝臣貞主爲宮內大輔、下總守如故、云云、左京人六世王豐宗豐方等七人賜姓清原眞人、○辛卯、大宰府言、陰陽師土師雄成言、幸沐天恩、已霑厚祿、但有宿心、猶未得果、解所帶職、出俗歸眞、勅許之、詔曰、如聞諸國羅纏、有利於民、无損於公、自今以後、不立年限、永俾行之、○乙未、行幸芹川野

栗隈山遊獵、賜扈從者祿各有差、○庚子、天皇御建禮門、奉唐物於長岡山陵、爲漏先日之頒幣也、○戊申、左京人少外記山田造古嗣、紀伊國介外從五位下大藏忌寸橫佩、大外記從六位上內藏忌寸秀嗣等、並賜宿禰姓、就中橫佩秀嗣之先、出自後漢靈帝曾孫阿智王、消譽田天皇馭寓之年、歸化者也、

續日本後紀卷第二

さありカザシは頭挿にて頭髪の飾りの義御字は閣本西本及類史に據て補ふ　○和琴、抄音樂部に日本琴萬葉集云梧桐日本琴一面（天平元年十月云々體似箏而短小有六絃俗用倭琴二字夜萬止古止大歌所有鴟尾琴）　○厨子、抄器皿部に辨色立成云竪櫃厨子別名也　○主基祿、祿字は西本條本宮本及類史に據て補ふ　○天皇御豐樂殿、天皇の二字は宮本及類史紀略に據て補ふ　○深江、原本深を漾に作る諸本に據て改む　○從五位上藤原朝臣長良、從五位上の四字は尾本宮本及類史に據て補ふ　○並從五位上、原本上を下に作る林本宮本及類史に據て改む　○良岑宿禰、西本良を長に作る　○秋常、秋字は諸本及類史に據て補ふ　○高扶、原本扶を快に作る宮本及類史に據て改む　○眞卄、諸本及類史卄を耳に作る　○余河成、承和七年六月紀に余河成等賜姓百濟朝臣と見ゆ河は原本阿に作る宮本及類史に據て改む　○寞畢、閣本西本等畢を了に作る　○各有差、各字は宮本及類史に據て補ふ　○還宮、原本還を歸に作る類史に據て改む　○繼子女王、女字は宮本に據て補ふ　○无位藤原朝臣貞子從四位下、此十二字宮本に據て補ふ　○无位菅野朝臣人數從五位下、此十二字西本に據て補ふ　（十二月）閣本堂、山城志に閣本廢堂在上賀茂閣本町今稱藥師堂者是とあり　○奉爲賀茂大神、奉字は諸本及類史に據て補ふ　○盡從毀廢、原本從を徒に作る西本及類史に據て改む　○緣神分、原本分を力に作る諸本及類史に據て改む　○乙酉、原本辛酉に作る尾本宮本に據て改む　○天皇云々、纂詁に按原丁亥上有辛酉奉唐物於山陵之一條然是月無辛酉又無唐使來貢事源義公以爲承和六年十二月辛酉事似是故姑刪之と云り　○丁亥、此條原本戊子條の次にあり尾本及紀略に據て改移す　○戊子、原本甲子に作れど是月癸未朔にて甲子なし尾本水戸校本に據て改む　○外從五位下刀伎直、刀伎直は錄に載せず類史に天長十年正月授外從五位下とあれば此從は正の誤なるべし刀は原本力に作る宮本に據て訂す　○遺召、原本遺言に作る閣本西本等に據て改む　○大春日眞棟、林本日下二字空白とす姓氏錄に據るに恐くは朝臣の二字なるべし　○左京人、以下淸原眞人に至る十九字原本卷一三月己丑條の上に載す今尾本林本に據る　○陰陽師、大宰府の陰陽師なり　○諸國羅羅云々、寶字三年紀及寶龜四年三月紀等を參照すべし　○栗隈山、山城國久世郡にあり　○庚子、原本庚午に作る條本宮本に據て改む林本此條無し　○戊申、此條原本卷一三月己丑條の上にあり尾本林本は彼處になくして此處にあり今兩本に據る

續日本後紀卷第三

起承和元年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

承和元年（甲寅）春正月壬子朔、天皇御大極殿受朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被。○癸丑、天皇朝覲後太上天皇（淳和）於淳和院、太上天皇逢迎、各於中庭拜舞、乃共昇殿、賜群臣酒、兼奏音樂、左右近衞府更奏舞、既而太上天皇、以鷹鶬各二聯、嗅鳥犬四牙、獻于天皇、天皇欲還宮、降自殿、太上天皇相送、到南屛下也。○甲寅、後太上天皇賀先太上天皇（嵯峨）於冷然院、以入新年也、先太上天皇乍驚、逢迎中庭、是日改年號、下詔曰、三徵迭代、必制之以嘉名、五運因循、終甄之以徽號、是知正始重本之典、千帝同符、履端建號之規、百王合契、朕恭膺明命、纘守鴻基、分至推遷、節候亟換、方今攝提發歲、天紀更始之辰、大簇報春、品彙惟新之日、宜有草創、以光舊章、其改天長十一年、爲承和元年。○乙卯、天皇朝謁先太上天皇、及太皇

○從一位臣、原本臣字なし諸本に據て補ふ

【承和元年】鶬、抄羽族部に鶬鶊名苑云鶬一名鶬鶊也野王案鶬（漢語抄云波之太加又兄鶬古能利）似鷹而小也とあり

○二聯、聯は字書に對偶謂之聯とあり

○嗅鳥犬、所謂獵犬なり

○三徵、白虎通に正朔有三何本天有三統謂三徵之月也三徵者何謂也陽氣始施黃泉萬物動微而未著也十一月之時陽氣始養萬物皆赤故周爲天正色尙赤也十二月之時萬物始牙而白故殷爲地正色尙白也十三月之時萬物始達皆黑故夏爲人正色尙黑（節略）とあり十一月は仲冬にて周の正月十二月は季冬にて殷の正月十三月は孟春にて夏の正月なり迭は原本遞に作る諸本に據て改む

○五運、木火土金水の五德の運行なり

○以徽號、原本以を次に作る諸本に據て改む

〇履端、左傳文元年に先王之正時也、履端於始、擧正於中、歸餘於終、とあり
〇分至推遷、分は春分秋分、至は夏至冬至にて四時の推移るを云
〇亟換、原本亟摸に作る諸本に據て改む亟は疾也
〇攝提紀歲、爾雅に太歲在寅曰攝提格とあり今年は寅年なればかく云り
〇天紀更始之辰、歲は甲寅なるを以て元とす故にかく云り
〇大簇報春、禮記月令に孟春之月律中大簇とあり正月を云
〇宜有革創云々、舊き制に從ひて年號を新にするを云
〇共改、原本共を宜に作る諸本に據て改む
〇及太皇太后、以下先太上天皇に至る十六字は類史二十八に據て補ふ
〇中納言從三位、以下年五十八に至る十八字は紀略に據て補ふ但兼中務卿の四字は補任に據る
〇觀靑馬、靑馬節始て此に見ゆ公事根源に白馬の節會を或は靑馬の節會とも申なり其故は馬は陽の

太后於冷然院、是日先太上天皇、亦御淳和院、以相賀也、中納言從三位兼中務卿直世王薨、年五十八、〇戊午、天皇御豐樂殿、觀靑馬、宴群臣、詔授正五位下岑成王從四位下、正六位上助雄王從五位下、從四位上源朝臣弘正四位下、正五位上滋野朝臣貞主、紀朝臣深江、正五位下藤原朝臣眞川、藤原朝臣助、並從四位下、從五位上安倍朝臣高繼、從五位下田口朝臣佐波主、並正五位下、從五位下眞苑宿禰雜物、從五位上、外從五位下御船宿禰氏主、正六位上藤原朝臣岳守、藤原朝臣諸氏、大中臣朝臣磯守、橘朝臣本繼、並從五位下、外從五位下紀朝臣國守外正五位下、正六位上淸村宿禰淨豐、春宗連繼縄、朝妻造淸主、秦宿禰眞仲、讃岐公永直、風早直豐宗、並外從五位下、〇己未、天皇御大極殿、聽講最勝王經、皇太子侍焉、崇朝之講竟而還御内裏、是日授正六位上大神朝臣船公從五位下、正六位上卜部嶋繼外從五位下、无位爲奈眞人乙刀自、菅生朝臣氏刀自、並從五位下、〇癸亥、以從五位下丹墀眞人興宗爲左少弁、從五位下田中朝臣許侶繼爲左衞門權佐、從五位上長田王爲

大和守、從五位下春澄宿禰善繩爲兼攝津介、東宮學士大内記如故、正五位下安倍朝臣高繼爲山城守、從五位上丹墀眞人清貞爲伊勢守、從五位下小野朝臣千株爲尾張介、從五位下百濟公繩繼爲參河介、駿河介從五位下賀茂朝臣伊勢麻呂爲守、從五位下清岑宿禰門繼爲介、外從五位下上毛野公清湍爲伊豆守、參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼相摸守、右大弁如故、從五位下藤原朝臣眞繩爲安房守、四品葛井親王爲常陸大守、云云、正五位下藤原朝臣長良爲兼加賀守、左衞門佐如故、從五位下石川朝臣越智人爲越中介、從五位上眞苑宿禰雑物爲因幡守、云云、○丁卯、十六 月有蝕之、先是大宰府上言、慶雲見於筑前國、至是太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位兼行左近衞大將臣清原眞人夏野、從二位行大納言兼皇太子傅臣藤原朝臣三守、正三位行中納言兼兵部卿臣源朝臣常、正三位行權中納言臣藤原朝臣吉野、中納言從三位兼行民部卿臣藤原朝臣愛發、參議從三位行治部卿兼美作守臣源朝臣定、參議右近衞大將從三位臣橘朝臣氏公、參議正

獸なり青は春の色なり是によりて正月七日に青馬を見れば年中の邪氣を除くといふ本文侍なり云々とあり
○從四位上源朝臣弘、類史上を下に作る
○眞苑宿禰 系詳ならず
○藤原朝臣岳守、朝臣の二字は類史に據て補ふ岳は原本兵に作る宮本水戸校本及類史に據て改む
○外從五位下紀朝臣國守、外從五位下の五字は類史に據て補ふ
○外正五位下、原本正を從に作る諸本及類史に據て改む
○清村宿禰淨豐、淨字は性靈集に據て補ふ
○永直、原本直を眞に作る諸本及類史に據て改む
○秋篠早直、原本直を眞人の二字に作る諸本及類史に據て改む
○惟良宿禰王經、是御齋會なり延暦廿一年正月庚午紀に始見
○崇朝、崇は終なり旦より食時に至るを云毛詩鄘風蝃蝀章に出づ
○大神朝臣、朝字は諸本及類史に據て補ふ
○興宗、原本興を貞に作

る諸本に據て改む
○駿河介、原本河を何に作る諸本に據て改む
○眞繩、原本繩を綱に作る閣本中本等に據て改む
○西本谷本等眞を直に作る
○葛井親王、桓武天皇の第十二皇子、文德實錄嘉祥三年四月條に傳見ゆ
○長良、良字は水戸校本及上文に據て補ふ
○城智人　智は原本知に作る諸本に據て改む
○月有蝕之、原本月を日に作るされど十六日は日蝕せず故に改む
○緒嗣、原本緒を諸に作る諸本及類史紀略に據る
○正三位行權中納言、原本三を二に作る林本宮本及類史に據て改む
○橘朝臣氏公、補任に據るに此下參議從三位行左兵衞督源朝臣信の十四字あるべし
○春上、狩谷氏曰是月癸亥條藤原常嗣爲相摸守、而此春上曰相摸守、常嗣爲下野守、共可疑
○泰以應而爲象云々、易泰卦の象に泰小往大來吉亨則是天地交而萬物通也上下交而其志同也また咸卦の象傳に咸感也云々天

四位下行相摸守臣三原朝臣春上、參議從四位上行式部大輔勳六等臣朝野宿禰鹿取、參議左大弁從四位上兼行左近衞中將春宮大夫武藏守臣文室朝臣秋津、參議從四位上行下野守臣藤原朝臣常嗣等上表言、臣聞、泰以應而爲象、咸以感而成卦、明聖人在上、鬼神不能違其感、至德傍通、天地有以從其應、伏惟皇帝陛下、承累聖之皇基、纂重光之寶祚、握鏡揚蕤、燭貞輝於就日、懷珠韜慶、褰景曜於望雲、道冠二儀、跡功先德、化孚四表、推美神宗、伏見大宰大貳從四位下藤原朝臣廣敏等奏偁、慶雲見於筑前國那珂郡、玄黃蕭索之光、丹紫輪囷之釆、豈止唐帝沉璧、氣合於金方、姬后望河、形摸於車蓋而已哉、臣等謹撿孫氏瑞應圖曰、慶雲太平之應、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、孝經援神契曰、天子孝亦德至山陵、景雲出、夫自非仁霑幽顯、德配乾坤、亦何上符絪縕、呈茲靈祉、臣等時屬休明、恩叨簪紱、預聞嘉氣、非常洗心、蓋韶夏發曲、而不嗟至美者、誠非賞音之客也、靈符舒彩、而不稱神功者、恐非叶贊之臣也、無任抃躍鳧藻之至、謹詣闕奉表陳賀、勅報曰、禎符之應、不肯虛行、靈貺攸臻、

地感而萬物化生、聖人感人心而天下和平とあり
○聖人在上、原本聖を至に、在を右に作る諸本及類史に據て改む
○重光、尙書顧命に次日武王宣重光、注に言文武布其重光累聖之德とあり
○握鏡揚蕤、握鏡は南齊書明帝紀に握鏡臨宸とあり揚蕤は唐楊炯碑文に四德揚蕤藏闡中闈之訓とあり原本蕤を蕤に作る閣本西本及類史に據て改む字書に蕤は草木華垂貌と注す
○就日、家語五帝德篇に高辛氏之子曰陶唐云々就之如日望之如雲とあるに出づ
○懷珠韞慶、懷珠は藝文類聚(十一)引雜書淮南に齊、注有推神珠、注に懷神珠喻有聖智也とあり韞は原本稱に作る諸本及類史に據て改む
○道冠二儀、文選任昉到大司馬記室牋に出づ注に延濟、高也二儀天地也とあり
○播美神宗、列聖の御德に歸し給ふなり
○那珂鄕、今筑紫郡に入

必鍾寶德、所以唐堯上聖、猶讓而不矜、漢光中興、固拒而鮮記、朕不承寶曆、司牧寰區、化謝聲幽、感乖動物、而今景雲著見、公卿表賀、朕之菲薄、何以當之、諭不云乎、百姓寧輯、風雨調和、此亦瑞也、然則安危在乎人事、吉凶繫於政術、政術或忒、休祥未能成其美、王道欽明、咎徵不能致其惡、以此談之、策勵爲可冀也、日愼一日、雖休勿休、賀瑞之言、閉而不聽、○戊辰、天皇御豐樂院觀射、○己巳、亦御同院、閱覽四衞府賭射、○庚午、山城國葛野郡上林鄕地方一町賜伴宿禰等、爲祭氏神處、是日任遣唐使、以參議從四位上右大弁兼行相摸守藤原朝臣常嗣爲持節大使、從五位下彈正少弼兼行美作介小野朝臣篁爲副使、判官四人、錄事三人、○辛未、主上內宴於仁壽殿、教坊奏態、中貴陪觀、殊喚五位已上詞客兩三人幷內史等、同賦早春花月之題、是夕勅授正六位上大戶首淸上外從五位下、淸上能吹橫笛、故鍾此恩獎、○甲戌、於永安門裏西掖廊前、新作堋、備于御射、紫宸殿西南端廊被徹毀、以礙箭道也、○丙子、加賀國疫癘、賑給之、○庚辰、勅、維摩會立義得第僧、宜依舊例、請爲諸寺安居講師、

る、原本珂を河に作る閣本西本及類史に據て改む　○玄黃蕭索之光云々、玄黃は易說卦傳に震爲玄黃疏に爲玄黃取其相雜而成蒼色とあり蕭索輪囷は史記天官書に若煙非煙若雲非雲郁々紛々蕭索輪囷是謂卿雲とあるに據れり囷は原本困に作る諸本及類史に據て改む　○豈止帝嘗沉璧云々　尙書中候(學津本)に堯沈璧於河禮備至于日稷榮光出河休氣四塞白雲起回風搖と云に據れり唐帝は堯を云止は原本上に作る諸本及類史に據て改む　○姬后望河云々、同く尙書中候(學津本)に武王觀于河沈璧禮畢且退至于日昧榮光竝塞河靑雲浮洛云々と見ゆ　○孫氏瑞應圖、既に出づ　○禮斗威儀、原本禮を札に作る林本及類史に據て改む　○政和平云々、太平御覽卷八所引に人君乘水而王其政和平則景雲見とあり　○天子孝云々　同卷五十三所引に天子孝則景雲見、また卷八所引に德至山陵則景雲出とあり　○絪縕、易繫辭傳に天地絪縕、注に絪縕相附著之義とあり天地の氣の合するなり原本烟煴に作る水戸校本に據て改む　○恩叨簪紱　衣冠を著けて朝臣に列するを云紱は原本綏に作る諸本及類史に據て改む　○洗心、易繫辭傳に出づ　○韶夏發曲云々、韶は舜の樂、夏は禹の樂なり左傳襄廿九年に吳公子札來聘見舞大夏者曰美哉非禹其誰能脩之見舞韶箾者曰德至矣哉大矣云々(節略)とあるに據れり原本韶を詔に作る諸本及類史に據て改む　○靈符舒彩、慶雲を云　○神功、天皇の聖德を云　○叶賛、叶は協の古字賛を贊くる意なり　○鳧藻、後漢書杜詩傳に出で和睦歡悅するを云既に注す原本鳧を烏に作る宮本及類史に據て改む　○禎符、原本禎符に作る西本林本に據て改む　○攸躋、原本攸を彼に作る西本宮本及類史に據て改む　○上聖、原本聖を堊に作る諸本及類史に據て改む　○不矜　原本矜を稍に作る諸本及類史に據て改む　○漢光、後漢光武帝、原本光を先に作る諸本及類史に據て改む　○固拒、諸本拒を距に作る拒距相通す　○司牧寰區、天下に君たるを云　○化謝聲幽云々、事物を感動すべき德なきを云　○政術或武、政術の二字は諸本及類史に據り武は宮本水戸校本に據て補ふ山崎校本忒を差に作る　○不能致其惡、原本其惡を于茲に作る宮本水戸校本及類史に據て改む、閣本西本惡を慝に作る　○策勵、原本策を榮に作る諸本及類史に據て改む　○日愼一日、淮南子人閒訓に出づ　○雖休勿休、尙書呂刑に出づ　○觀射、是を大射又は射禮と云其儀內裏式儀式等に詳なり　○四衞府賭射、四衞は左右近衞兵衞、賭射は俗に云カケ的なり　○上林鄕、拾芥抄郡鄕部山城國葛野郡上林加無波也之山城志に上林已廢存平野及龍安寺二と見ゆ　○氏神、神名式葛野郡伴氏神社(大月次新嘗)是なり山城志に在龍安寺村今稱住吉とあり　○內宴、公事根源に內宴と申はうち〱の節會なり仁壽殿にて行はる云々とあり　○敎坊奏態、敎坊は內敎坊を云態は歌舞なり　○中貴陪觀、史記李將軍傳注に中貴は內官之幸貴者とあり原本觀を歡に作る纂詁に從て改む　○花月、原本花月を華同に作る諸本及類史に據て改む　○恩獎、原本獎を弉に作る諸本及類史に據て改む　○正六位上大戸首、下文に據るに正上に外字あるべし大戸首は錄河內皇別大彥命男比毛由比命之後也云々とあり　○永安門、拾芥抄中末に永安門謂之右廂門承明西とあり　○西掖、原本西を兩に作る諸本に據て改む　○埒、原本棚に作る諸本及類史に據て改む埒は射埒也弓射る爲の的を掛る處　○立義、立字は諸本及紀略に據て補ふ　○舊例、原本舊を山に作る諸本及類史紀略に據て改む　○安居、又結夏と云一夏九旬の間禁足籠居するを云、釋氏要覽に南山鈔云形心攝靜曰安、要期此住曰居、偏約夏月云々と見ゆ

(二月)彎弓、弓字は閣本西本及紀略に據て補ふ　○傷痍、原本痍を疾に作る諸本に據て改む　○遣唐裝束司、原本唐下に使字あり閣本西本中本に據て削る

○二月壬午朔、日有蝕之、○癸未、新羅人等、遠涉滄波、泊著大宰海涯、而百姓惡之、彎弓射傷、由是太政官譴責府司、其射傷者、隨犯科罪、被傷痍者、遣醫療治、給糧放還、是日任造舶使、以正五位下丹墀眞人貞成爲

長官、主稅助外從五位下朝原宿禰嶋主爲次官、且以左中弁從四位下笠朝臣仲守、右少弁從五位下伴宿禰成益、並爲遣唐裝束司、○甲申、伯者國會見郡荒廢田百廿町賜有智子內親王、○乙酉、山城國葛野郡人從八位上物集廣永、同姓豐守等、賜姓秦忌寸、○丙戌、正三位權中納言藤原朝臣吉野爲正、從三位源朝臣定爲中務卿、美作守如故、云云、三品阿保親王爲治部卿、云云、○己丑、行幸芹川野、遞放鷂隼、覽其接擊、○辛卯、勅曰、万民安樂、五穀垂穎、不如最勝希有之力、宜令諸寺有封戶及田園、堪資供者、勤修最勝王經法、○壬辰、從四位上磐田王卒、○癸巳、勅曰、金銀薄泥、用之公私、有費无益、宜禁斷之、○甲午、上始御射場、左右衞府相共奉獻、兼設賭物、上先射之、一箭中鵠、獻新錢二万文、大臣已下至近習、以次射之、隨其能不、分賜賭物、各有差、今夜、三品明日香親王薨焉、桓武天皇第七皇子也、母紀氏、贈正二位右大臣船守朝臣之女、從四位下若子是也、親王天資質朴、不尙浮華、弘仁年中、世風奢麗、王公貴人頗好鮮衣、親王獨至夏日、朝衣再三澣濯、或亦賣却櫪上走馬、以支藩邸費

○會見郡、抄國郡部伯耆國會見、安不美とあり今西伯郡に入る
○有智子內親王、嵯峨天皇の皇女、母は交野女王
○乙酉、原本乙を丁に作る宮本に據て改む
○物集、集下疑くは連字を脫す
○從三位源朝臣定、纂詁は補任に據て從上に參議の二字を補へり
○遞放、放字は諸本及類史紀略に據て補ふ
○勤修、西本中本宮本勤修に作る
○壬辰、此條紀略に據て補ふ
○磐田王卒、天長十年十一月庚午紀に從四位下磐田王敍從四位上と見ゆ
○金銀薄泥、薄は箔なり狩谷氏曰薄俗作箔品字箋箔薄也金銀銅之錘之極薄故曰薄
○設賭物、原本設を詔に作る諸本及類史に據て改む
○中鵠、鵠は的なり
○明日香親王薨焉、焉字は衍なるべし
○朝衣、卽ち朝服なり
○櫪上走馬、原本櫪を櫪に作る閣本尾本に據て改

用、其省約節儉皆此類也、先太上天皇在祚時、親王上表、自請除親王號同之諸臣、不見許、更祈所生男女賜朝臣姓、感其懇誠、乃聽之、孫王賜姓、從此競效之、當于薨時、朝廷悼之、遣刑部大輔從四位下紀朝臣深江、治部大輔從四位下和氣朝臣仲世、并五位二人、監護喪事、加賀國石川郡人財逆女一產三男、給正稅三百束、及乳母一人公粮、令以育養、遠江國敷智郡古荒田卅三町、賜阿保親王、○乙未、忠良親王冠也、卽叙四品、先太上天皇第四子也、母百濟氏、從四位下勳三等俊哲之女、從四位下貴命是也、○戊戌、武藏國播羅郡荒廢田百廿三町奉充冷然院、○庚子、伊勢守從五位上丹墀眞人清貞之官、喚於殿上、賜御襖子、令參議正四位下行彈正大弼三原朝臣春上傳勅語云、拜舞退出、○辛丑、越後國飢、振給之、○小野氏神社在近江國滋賀郡、勅聽彼氏五位已上、每至春秋之祭、不待官符、永以往還、○丁未、忠良親王朝覲拜舞、以新冠也、天皇御紫宸殿、賜親王酒、大臣以下侍從已上陪焉、酣暢之後、賜御被及襖子、○石見國言、去年不登、百姓飢饉、賑給之、○三月壬子朔丁巳、勅、女官

む募請に走は眞字の譌かと云り
○藩邸、原本邸を部に作る諸本に據て改む
○祈、原本析に作る諸本に據て改む
○財逆女、堀本逆を道に作るさ云
○敷智、原本到置、林本及抄に據て訂す
○冠也、加冠卽ち元服するな云
○俊哲、原本俊を後に作る諸本に據て改む
○貴命、仁壽元年九月甲戌紀に傳見ゆ
○播羅郡、抄郡鄕部に播羅(原)あり今大里郡に入る、閣本尾本幡羅に作る
○之官、之は往也赴任するを云
○御襖子、御字は諸本に據て補ふ、襖子は天長十年五月辛丑紀に注す
○三原朝臣春上、狩谷氏曰春上是年七月爲彈正大弼按公卿補任天長八年再兼彈正大弼九年十一月罷至是年七月三兼之而此書曰彈正大弼蓋誤
○振給、振は賑に通ず
○小野氏神社、神名式滋賀郡小野神社(名神大)是

なり同郡和邇村大字小野にあり
○彼氏、原本氏を民に作る林本宮本水戸校本及類史に據て改む
○陪馬、紀略陪宴に作る
(二月)壬子朔、此月記事錯簡多し原本壬子を丙申に作り尾本辛亥に作る今長曆に二月小壬子朔とあるに從へり
○丁巳、原本丁酉に作る此月壬子朔なれば丁酉なし尾本宮本に據て改む此條林本になし
○丙寅、此條原本二月丙戌の次にあり林本及紀略に據て此に移す
○丁卯、此條原本二月丁未の次にあり林本及紀略に據て此に移す
○使令、原本使令に作る諸本に據て改む
○辛未、原本此條亦前條に續きて二月に出づ今林本及紀略に據て此に移す
○是日、以下褒造曆之才也に至る廿四字原本辛未の下に重出す彼を削りて之を存す
○中禁、原本禁中に作る脇本西本中本等に據て改む
○鴨女、抄羽族部に[illegible]

別當、雖非職員所掌之物、不異諸司、宜准侍從厨、四年爲限、遷代之日、責解由狀、○丙寅、始充穀倉院印一面、○丁卯、勅、在大宰府唐人張繼明、便令肥後守從五位下粟田朝臣飽田麻呂相率入京、○辛未、從五位上藤原朝臣長岡爲兼右馬頭、但馬守如故、三品阿保親王爲上野大守、治部卿如故、是日授正六位上大春日朝臣良棟從五位下、褒造曆之才也、是夕當于中禁之上、有飛鳴者、其聲似世俗所謂海鳥鴨女者、其類數百群、或言非海鳥、是天狐也、宿衞人等、仰天窺望、夜色冥朦、唯聞其聲、不弁其貌焉、○夏四月辛巳朔、天皇御大極殿聽告朔、○壬午、公卿重上賀慶表曰、臣聞、叡道格宇、靈貺所以自臻、皇德動天、禎應由其方降、故靈烏集社、姬周延歷運之期、甘露凝階、陶唐照休明之德、伏惟皇帝陛下、宅三才而子物、參四大而君臨、德化被於乾坤、仁風扇於幽顯、解網而流恩、懸旌而佇善、國遘偃伯之期、家溢思皇之頌、天以不愛其祥、地以不藏其瑞、可謂應圖合牒之符、史无虛記者也、陛下謙讓而不當、徒拒休徵、天鑒孔明、珍符何辭焉、伏望鴻恩照顧、下惟納群臣之丹款、上則叶皇天之玄

云鴫（加毛米ノ水鳥也兼名苑云一名江鷺とあり
○剏百群　原本群を郡に作る諸本に據て改む
○天狐、原本天を夭に作る諸本及紀略に據て改む
天狐は西陽雜俎に天狐九尾金色役於日月宮有符有醮日可洞達陰陽又相應傳に染殿皇后被擾天狐諸寺有驗之僧無敢能降之者天狐放言云自非三世諸佛出現者誰敢降我和尚（相應）依召參入兩三日候無其驗還本山對明王啓白事由愁恨祈禱明王像背面向西和尚隨坐西明王復背云々和尚流涙彈指稽首白言乞願垂悲愍幸告示明王告曰昔紀僧正存生之日持我明呪而今以邪執故墮天狐道著擾皇后今汝到宮中密告天狐言非汝是紀僧正後身柿本天狐哉後低頭之頃以大威德呪加持將得結縛（節略）とありなほ今妖魅考天狗論等に出づ
○不弁其臭焉、原本此下辛酉鑄錢司言云々の文あり二年三月辛酉條に重出す故に之を削りて彼を存す

旣制可之、○丙戌、勅、防災未萠、兼致豐稔、修善之力、職此之由、宜令畿內七道諸國、擇國內行者、於國分僧寺、三箇日內、晝則轉金剛般若經、夜則修藥師悔過、迄于事畢、禁斷殺生、又如有疫癘處、各於國界攘祭、務存精誠、必期靈感、○庚子、勅、宜停紀傳博士、加置文章博士一員、其紀傳得業及生徒亦停之、○辛丑、先太上天皇降臨右大臣淸原眞人夏野双岡山莊、愛賞水木、大臣奉獻慇懃、用展情禮、是日勅、增授大臣男息三人榮爵、從五位下瀧雄從四位下、正六位上澤雄、秋雄、並從五位下、○丙午、疫癘頗發、疾苦稍多、仍令京城諸寺、爲天神地祇、轉讀大般若經一部、金剛般若經十万卷、以攘災氣也、勅賜美濃國荒廢田幷空閑地五十町於諱、田邑

○五月辛亥朔乙卯、天皇御武德殿、閱覽四衛府馬射、○丙辰、亦御同殿、觀親王以下五位已上所貢競馳馬、○戊午、亦御同殿、令四衛府騁盡種種馬藝及打毬之態、○癸亥、以遣唐大使參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼備中權守、右大弁如故、大工外從五位下三嶋公嶋繼爲造舶次官、遣唐使判官錄事、及知乘船事等、兼外任者九人、大宰府司、公廨、元來

（四月）聽告朔、太政官式に、凡天皇孟月臨軒視朔、大臣預點殿上侍從四人奏事者二人所司各供其事、其日辨一人執公文函、擧諸司五位以上執函者就版、各署案上云々とあり、又儀制令にも見ゆ、山崎校本に聽塤氏曰宜作視とあり

○格字、格は至也、字は天地四方なり

○靈鳥集社、呂氏春秋卷十三名類に周文王時天先見火赤烏銜丹書集於周社とあり

○姬周云々、姬は周王の姓、周朝八百年の歷運を保ちしを云

○甘露凝陌、帝王世紀に堯時天下大和景星曜於天甘露降於地とあり

○陶唐、堯を云、原本陶君に作る諸本及類史に據る

○宅三才而子物、三才は天地人、子は字也養也、物は群品を云

○四大、老子第二十五章に見ゆ道大天大地大王大是なり

○解網、史記殷本紀に見え、湯王の故事、神護二年（續紀下一三三頁）に注す

○懸旌、管子に舜有告

班給六國、至天長八年、依民部省起請、停給六國、混給肥後國、至是勅曰、如聞、轉送之勞、民受其費、混給一國、事乖穩便、宜復舊給之、○乙丑（十五）、勅、令相摸、上總、下總、常陸、上野、下野等國司、勠力寫取一切經一部、來年九月以前奉進、其經本在上野國綠野郡綠野寺、○己巳（十九）、授主殿允正六位上物部匝瑳連熊猪外從五位下、爲鎭守府將軍、○壬申（廿二）、无品貞子內親王薨、後太上天皇第一皇女而贈皇后所誕育也、遣勅解由長官從四位下藤原朝臣雄敏、兵部少輔正五位下安倍朝臣安仁、常陸介從五位上永野王、左京亮從五位下吉田宿禰書主等、監護喪事、○丙子（廿六）、賜右京人外從五位下菅原宿禰梶吉、大初位下梶成等二人朝臣姓、伊豫國人正六位上浮穴直千繼、大初位下同姓眞德等、賜姓春江宿禰、千繼之先、大久米命也、近江國人從五位下志賀忌寸田舍麻呂等四人、賜姓下毛野朝臣、五十瓊殖（垂仁）天皇皇子、豐城入彦命之苗裔也、左京人正七位下文忌寸歲主、无位同姓三雄等、賜姓淨野宿禰、河內國人正六位上文忌寸繼立、改忌寸賜宿禰焉、歲主、三雄、繼立等之先、並百濟國人也、

旌ヶ旗而主不敵也とあり　○偃伯之期、後漢書馬融傳註に司馬法曰古者武軍三年不興則凱樂凱歌偃伯靈臺答民之勞苦不興也偃休也伯謂師節也とあり和平にして兵を動かさざるを云　○思皇之頌、毛詩大雅文王章に思皇多士生此王國とあり注に思願也皇天也とあり　○不愛、原本愛を受に作る諸本に據て改む　○谷牒、原本牒を諜に作る山崎校本に據て改む　○玄覽、原本玄を法に作る西本宮本及類史に據て改む　○制可之、原本此下に辛丑丙午の二條あり錯簡なり類史に據て下文庚子の次に移せり　○丙戌、原本此上に四月の二字あり衍なり故に削る　○又、原本亦に作る類史に據て改む　○務存精誠、原本存を在に、誠を進に作る類史に據る　○庚子、此條林本宮本及類史紀略に據て補ふ　○生徒、類史生字なし紀略に據る　○双岡山莊、山城志に雙岡在葛野郡仁和寺南三丘相連とあり今葛野郡花園村に屬す　○愛賞、賞字は西本及類史に據て補ふ　○正六位上澤雄、原本正及上の二字なし貞觀五年正月十一日の條瀧雄傳に據て補ふ　○并空閑地、并字は諸本に據て補ふ　（五月）辛亥朔、此三字宮本に據て補ふ　○騁盡、原本馳盡に作る諸本及月令に據て改む　○打毬、抄衞禁部に打毬唐韻云毬（師說云万利宇知）毛丸打者也とあり　○外任、國司を云　○班給、原本班を斑に作る類史に據て改む　○六國、筑前筑後豐前豐後肥前肥後なるべし　○起請、原本起を所に作る閣本西本中本及類史に據て改む　○綠野寺、寺名は今鬼石町の大字となりて寺は淨法寺と稱す　○己巳、此條原本下文丙子の次にあり林本に據て此に移す　○鎭守府將軍、府字は山崎校本に據て補ふ　○贈皇后、高志内親王なり　○書主、原本主を生に作る諸本に據て改む　○丙子、原本壬子に作る尾本條本に據て改む山崎校本には壬子として五月の最初に收む壬子は二日なり　○眞德、原本德を能に作る閣本中本宮本等に據て改む　○春江宿禰、春江は伊豫國久米郡の地名なるべし　○志賀忌寸、姓氏錄に蕃別に見ゆれど此に豐城入彥命之裔とあれは異族なり　○歲主三雄繼立等之先、姓氏錄に漢高帝の後とせり此に百濟人と云るは同國を經て歸化せしに因れるなるべし

（六月）庚辰朔、此三字宮本及類史に據て補ふ　○講說、諸本及類史講を呪に作る　○八省院諸堂、八省院は大極殿なり諸堂は昌福、含章、承光、明章、康樂、朝集堂等を云　○東西寺、纂詁に恐東西市之譌と云り　○惣是百講座也、御一代一度の仁王會なり齊明天皇の御世始て行ひ給ふ　○祈甘雨、延喜の制祈雨

○六月庚辰朔甲午、講說仁王經於紫宸殿、常寧殿、及建禮門、八省院諸堂、宮城諸司諸局、東西寺、幷羅城門、惣是百講座也、○丙申、奉幣群神、以祈甘雨、旱也、○丁酉、地震、○庚子、從四位下紀朝臣興道卒、故中納言從三位勝長朝臣男也、弘仁四年叙從五位下、天長九年累加四位、歷職兵部大輔左中弁右兵衞督、興道門風相承、能傳射禮之容儀、大同年中、有從五位上伴宿禰和武多麻呂、亦傳此法、由是後生武士長效兩家之法、

神八十五座、其社名及幣物の制は臨時祭式に見ゆ
○紀朝臣興道卒、興は原本眞に作る諸本及類史に據て改む
○勝長、初名梶長、贈右大臣船守の長子
○從五位下、原本從及下の二字を脫す西本及類史に據て補ふ
○門風相承云々、父勝長は補任に歩射容儀應「爲二師撰一」と見ゆ
○伴宿禰和武多麻呂、大同四年正月左近衛少將兼常陸權介たり後武藏權介日向權守となる
○兩家、紀氏伴氏を云
○大和國人云々、以下左京に至る廿五字は原本和泉國人云々の條の次にあり尾本山崎校本に據て移し易ふ
○眞足、原本直足に作る宮本及下文に據て改む
○文主、主字は閣本西本尾本に據て補ふ
○其先百濟國人也、其先の二字は伴本考異に據て補ふ
○乙巳、此條原本丁未の次にあり尾本林本に據て此に移す
（七月）安義、紀略安を

頗有異同、大體惟一也、○辛丑、大和國人外從五位下伴宿禰眞足等卅五人、改本居貫附左京、和泉國人正六位上蜂田藥師文主、從八位下同姓安遊寶、賜姓深根宿禰、其先百濟國人也、○乙巳、丹後國飢、賑給之、○丁未、奉伊勢大神宮、及畿內七道、名神幣、以祈雨也、○戊申、伊勢國飢、賑給之、○己酉、延百僧於大極殿、限三箇日、轉讀大般若經、爲祈澍雨兼防風災也、○秋七月庚戌朔、以參議從四位上朝野宿禰鹿取爲左大弁、參議正四位下三原朝臣春上爲彈正大弼、云云、從四位下百濟王安義爲右兵衛督、丹波守如故、云云、遣唐大使參議右大弁從四位上藤原朝臣常嗣爲兼近江權守、云云、○辛亥、初爲祈雨、轉讀大般若經、期日已滿、晴而無應、由是轉經更延二日、以効精誠、○丁巳、天无片雲、炎氣如熏、比及晡辰、天陰雨零、從此漸至滂沛、○戊午、以左近衛權中將從四位下藤原朝臣良房爲參議、勅聽穀倉院預人等、寓棲其院西南區地、長廿丈廣十二丈之內、○庚申、是中旬之初也、上御紫宸殿、賜侍臣酒、乃至設親王大臣座於御床下、令以圍碁焉、夕暮而罷、賜親王大臣御衣、次侍從已上

勝に作る下文十一月辛亥紀此に同じ或はまた拳に作るものあり
○如熏、原本熏を煉に作る諸本及紀略に據る
○晡辰、晡は申時にて今の午後四時
○寓棲、原本棲を樓に作る關本西本に據て改む
○賜侍臣酒、旬宴なり
○設親王大臣座、原本設を促に作る水戸校本及類史に據て改む
○汎溢、原本汎を況に作る諸本に據て改む
○壬戌、紀略壬子に作る
○辛未、此條原本甲戌の次にあり尾本林本に據て此に移す
○元用國印、原本元を无に作る林本谷本等に據て改む國印は陸奥國印なり
○陳力就列云々、論語季氏篇に出づ
○故劒、漢書外戚傳許皇后の條に霍將軍有小女公卿議更立皇后皆心儀霍將軍女亦未有言上乃詔求微時故劍大臣知指白立許倢伃爲皇后とあり此故事を指せるか山崎校本は奈佐勝皐の說に據て故叙に作り纂詁故叙に作る

禄、各有差、○辛酉、雨水汎溢、○壬戌、走幣畿内名神、亦命諸大寺及諸國講師修法、以防淫霖、○甲子、左大舍人寮、廢來已久、徒爲空閑處、勅中分其地、以西賜式部省、以東賜主税寮、○乙丑、右京人正七位上和邇子眞麻呂等十二人、賜姓大神朝臣、○丙寅、天皇御紫宸殿、觀相撲節、越前、出雲二國飢、賑給之、○辛未、賜陸奥鎭守府印一面、元用國印、今殊賜之、○甲戌、右大臣從二位兼行左近衞大將清原眞人夏野、抗表請褫宿衞職曰、臣聞、守分有地、益之則損、陳力就列、不能者止、臣才略无聞、度量有缺、後太上天皇愛憐故劒、枉賜殊私、拔自同班、忝斯上將、警陳侍衞、九載于今、鬢髮變衰、非帶兵之像、瞳眼朦暗、無講武之明、而陛下御曆、寶命惟新、喘息跂行、无不歆化、是則臣之一心百君、竭力之秋也、屬此時來、寔難自退、所以欲謝不能、僶俛從事也、夫近衞者、禁兵攸存、任要折衝、義切禦侮、臣之衰邁、何可久堪、若論腰下之佩刀、豈異蟷蜋之擧斧、白顧多媿、誰云厥宜、況乃大臣之務、統理爲宗、所希解免此職、專勤一官、退食之間、服餌自養、伏願特廻昭鑒、垂賜允矜、則私志得申、朝章無紊、在於微臣、良爲

○杔賜殊私、杔は原本侍に作る脇本西本尾本に據て改む
○無□武之明、諸本無を寧に作る
○御暦、御宇に同じ
○喘息跋行、文選洞簫賦注に引く書曰跋行喘息說文曰跋徐行とあり原本跋を跂に作るは誤なり
○飲化、全唐文李子卿飲至賦に遐荒の通飲化向風とあり
○一心百君、晏子春秋に一心可以事百君三心不可以事一君云々とあるに據れり
○僶俛、黽勉と同じ
○任要折衝、任は原本仕に作る諸本に據て改む折衝は晏子春秋に出で敵を拒ぐをいふ
○切禦侮、毛詩大雅緜章に予曰有禦侮、傳に武臣折衝曰禦侮とあり原本切を功に侮を傳に作る諸本に據て改む
○衰邁、邁は老也
○佩刀、原本刀を力に作る諸本に據て改む
○螳蜋之鼻斧、文選陳琳檄に欲下以螳蜋之斧禦隆車之隧上とあるに據る莊子韓詩外傳等にも出づ

幸甚、不許之、○八月己卯朔辛巳、上爲先太上天皇、及太皇太后、置酒於冷然院、上自奉玉巵、伶官奏樂、令源氏兒童舞于殿上、極歡而罷、以綿一万屯賜五位已上幷院司祿、各有差、太上天皇及太皇太后將遷御嵯峨新院、故有此讌設也、○壬午、授无位益野女王從五位下、以右中弁正五位下伴宿禰氏上爲造船使長官、○乙酉、宗康親王始謁覲焉、于時春秋七歲也、○丙戌、賜攝津國西成郡閑地一百町於諱、（諱之所指已見於上）○丁亥、先太上天皇遷御嵯峨院、○戊子、任遣唐錄事、准錄事、知乘船事各一人、以外從五位下三嶋公嶋繼爲造舶都匠、○庚寅、上內宴淸涼殿、號曰芳宜華讌、賜近習以下至近衞將監祿、有差、○壬辰、以遣唐都匠外從五位下三嶋公嶋繼爲兼阿波權掾、准錄事兼外國介者一人、○戊戌、遣使平城七大寺、始自當日一七日夜、令轉讀大般若經、（其由不詳）○己亥、暴風大雨相幷、折拔樹木、壞民廬舍、由是走幣畿內名神、祈止風雨、○庚子、夜裏風雨猶切、達旦不罷、城中人家往往倒壞、賜紀伊國人從七位下紀臣國奈須等五人朝臣姓、○甲辰、左大臣藤原朝臣緒嗣抗表曰、云々、不許之、○乙巳、

○退食之間、毛詩召南羔羊章に退食自公箋に退食謂減膳也とあり
○服餌、餌は藥餌なり
○允矜、原本危矜に作る。諸本に據て改む
(八月)己卯朔、此三字宮本に據て補ふ
○自奉、原本奉白に作る諸本に據て改む
○玉巵、巵は酒器也
○源氏兒童、弘仁中嵯峨天皇皇子女の未だ親王たらざる者卅餘人に源朝臣の姓を賜ふ其兒童を云
○院司、仙洞の職員を云
○嵯峨新院、葛野郡嵯峨にあり大覺寺は其舊趾なり
○宗康親王、天皇の皇子御母は贈皇太后藤原澤子なり
○諱、文德天皇に坐す諱道康と申せり諱下の注は後人の加ふる所なるべし
○內宴、諸本及類史曲宴に作る
○芳宜、萩なり佳字を借用ひたるにて漢名に非ず抄草木部に鹿鳴草爾雅集注云萩一名蕭(和名波木)とあり
○平城七大寺、東大、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆の七寺を云

久子內親王爲可侍伊勢齋宮、先禊祓賀茂川、始入野宮。○九月戊申朔乙卯、左大臣藤原朝臣緒嗣重復上表曰、云云、優詔不許。○丙辰、是重陽節也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、自外非侍從、及諸司綠衫官人、堪應詔者、幷文章生等侍焉、同賦秋風歌之題、宴訖賜祿。○戊午、天皇御大極殿、奉幣帛於伊勢大神宮。是日僧正傳灯大法師位護命卒、法師俗姓秦氏、美濃國各務郡人、年十五、以元興寺萬耀大法師爲依止、入吉野山、而苦行焉、十七得度、便就同寺勝虞大僧都、學習法相大乘也、月之上半入深山、修虛空藏法、下半在本寺、研精宗旨、教授之道、遂得先鳴、弘仁六年擢任少僧都、七年轉大僧都、僧統之職、非其好尙、上表曰、不能者止、曩哲之格言、前而不休、前修之所誡、雖教有眞俗、緇素之趣非同、而旣曰綱維、止足之義何異、護命戒緒多紊、定惠或虧、譬大地之一塵、有之不增其重、如鄧林之片葉、无之未減其茂、而夙稟恩緒、忝掌法務、叨均宋棘、四衆之望已違、聲混齊竽、三輩之心不服、況乎甲子荏苒、年七十四、蒲柳之形先衰、桑楡之景復促、浮生若此、前途幾何、當今甘露之門、鵞鷺成列、旃檀之

○壞民廬舍、原本壞字を脱し廬下に房字あり壞は紀略に據て補ひ房は諸本に據て削る
○城中、城は恐くは城の誤ならむか
○紀臣洫奈須、原本臣國を郡臣に作る諸本に據て改む
○甲辰、此條紀略に據て補ふ
○乙巳、此條九月丙辰の次にありしを紀略並に類史に據て此に移す
○久子內親王、齋宮記に久子內親王仁明皇女在任十四年さあり
(二九月三)戊申朔、此三字宮本に據て補ふ
○上表曰云々、云々の二字は紀略に據て補ふ
○綠衫官人、綠衫は六位の朝服なり六位の官人を云
○侍焉、原本焉を爲に作る西本及類史に據て改む
○奉幣帛於伊勢大神宮、帛字は諸本及類史に據て補ふ狩谷氏曰九月奉幣元正帝養老五年始見此後率在他日是年已後在九月且七年九年並云例也據此爲永例可知さ
○是日、此一字紀略に據

苑、龍象比肩、豈可叨竊非據、綿歷年序、伏望免茲所職、栖託山林、持四旬
而終年、向一人而奉禱、儻迴神鑒、俯允愚衷、則片瓊殘魂、不妨賢路、提綱
要職、更得良材、天皇不許、然而屏居古京山田寺、喫飯口中得佛舍利一
粒、復在普光寺、講唯識論疏、時於頂上亦得一粒、靈異頻彰、使人驚感、天
長四年特任僧正、年八十五、終于元興寺少塔院、未及氣絕、時同寺僧善
守欲致問訊、自石上寺尋向、比到少塔院、忽聞微細音聲髣髴院裏、可謂
浮刹所迎天人之樂也、○辛酉、河內國古市郡人從六位下縣犬養宿禰
小成、改本居貫附右京一條、○壬申、勘解由主典阿直史福吉、散位同姓
核公等三人、賜姓清根宿禰、核公之先、百濟國人也、○冬十月戊寅朔、己
卯、佐渡國言、慶雲見焉、於是下詔曰、朕恭臨紫宙、撫字蒼元、化異成平、道
慙交泰、將何以繼明前燭、通感上靈、去年景雲見筑前國、演九玄之潛貺、
綴五彩而擒章、朕之菲虛、推而不處、前距公卿之奏、寢慶賀之言、而復有
同瑞、出佐渡國、公卿重表、稱慶洊陳、朕固辭不免、詳求諸己、豈伊寡德克
致此乎、祇由宗廟之靈、載効肸蠁之應、今者嘉茲休祉、用答昊穹、冀以湛

恩、普露寰縣、其初見人五位者、進位一階、六位已下二階、正六位上廻授一子二階、白丁免當戶今年調庸、又內外文武官主典已上、加位一級、但正六位上廻授一子二階、若無子者、宜量賜物、五位以上子孫年廿已上者、亦叙當蔭之階、天下老人百歲已上、賜穀三斛、九十已上二斛、八十已上一斛、鰥寡孤獨不能自存者、量加賑恤、孝子順孫義夫節婦、旌表門閭、終身勿事、○辛巳、以昔被沒官橘朝臣奈良麻呂家書四百八十餘卷、賜彈正尹三品秀良親王、以外戚之財也、○壬午、後太上天皇幸雲林院、遊獵北郊、有內裏藏人所隼從之、○甲申、嵯峨院寢殿新成、今上遣使奉獻、以賀之、○乙酉、從四位下高階眞人淨階卒、○戊子、車駕幸栗隈野、放鷹鶉、日暮還宮、○壬寅、山城國愛宕郡閑地六町、賜從四位下滋野朝臣貞主、

て補ふ　○護命卒、傳は元亨釋書高僧傳にも見ゆ　○各務郡、和名抄國郡部各務加々美とあり今稻葉郡に入る　○依止、釋氏要覽上に師有二種、一親教師即是依之出家授經剃髮之者、二依止師即是依之稟受三學者とあり　○先鳴、尸子に戰如鬪鷄、勝者先鳴とあるに據れり　○擢任、原本擢を權に作る隆本西本中本に據る　○不能者止、論語季氏篇周任の言に出づ　○删修、彙哲に同じ　○綱維、即ち僧綱なり　○止足之義、老子第四十四章に出づ　○護命、原本唯命に作る閣本西本尾本に據て改む　○戒緒多紊定惠或虧、戒定慧之を三學と云ふ三學の或は缺るを恐るとなり西本尾本等或は戒に作る　○鄧林、列子に鄧林彌廣數千里焉とあり　○忝掌法務、原本忝を參に作る西本に據て改む　○四衆之望已違、四衆は比丘比丘尼優婆塞優婆夷を云ふ違は原本達に作る諸本に據て改む　○聲混齊竽、韓非子七術に齊宣王使人吹竽、必三百人南郭處士請爲王吹竽、宣王說之云々宣王死湣王立好一一聽之、處士逃とあるに出づ　○三輩、淨土に往生を願ふ人の行業に上中下の三類あり之を三輩と云ふ無量壽經に出づ　○蒲柳、其質の弱きを云ふ　○桑楡之景復促、文選劉鑠擬古詩注に日在桑楡以喻人之將老とあり促は原本沒に作る諸本に據て改む　○浮生云々、此二句李白宴桃李園序に出づ原本幾を況に作る閣本宮本に據りて改む　○甘露之門、智度論に一切衆生甘露門開如何不出とあり　○鵞鷺成列、鵞は原本鸞に作る西本中本に據て改む祖庭事苑に鵞鷺梵云舍利弗此言鶖鷺子　○旃檀之苑、旃檀は香木なり藉りて僧苑の名とす　○龍象、僧侶の俊秀なるものを

云中阿含經に出づ　○非據、易繫辭傳に非レ所レ據而據焉身必危とあるに出づ　○四句、偈を云偈は必ず四句なるが故に四句と云　○一人、至尊を云
○片瓊殘魂、原本片を夢に作る山崎校本に據て改む　○古京、原本右京に作る西本谷本等に據て改む　○山田寺、大和國十市郡山田村にあり一名華嚴寺　○普光寺、河內志に普光廢寺在二大縣郡高井田村一　○少塔院、大和志に元興寺院有レ三一曰二少塔院一在二奈良西新屋町一僧正護命所レ住持とあり
○問訊、原本問說に作る諸本に據て改む　○石上寺、大和國山邊郡石上布留村にあり　○比到、原本比を此に作る西本中本に據て改む　○髣髴、原本髴を髣に作る諸本に據て改む　○辛酉、此條原本壬申の次にありしを閣本尾本林本に據て移す　○淸根宿禰、姓氏錄に見えず　○百濟國人也、原本此下に癸酉能登國氣多禰宜祝把笏の一條あり類史に據て十一月に移す　(十月)冬十月、冬字は宮本に據て補ふ　○戊寅朔、此三字は伴イ本に據て補ふ　○恭臨紫宙云々、以下終身勿事に至る二百六十九字は原本之を略して云々の二字に作る林本及類史に據て補ふ　○紫宙、徐彥伯南郊賦に告二紫宙之成功一定二皇天之寶位一とあり　○化異成平、尙書大禹謨に地平天成六府三事允治とあるに據れり　○道鬯交泰、易泰卦の象傳に天地交泰后以財二成天地之道一輔二相天地之宜一以左二右民一とあるに出づ　○演九玄之潛覞、九玄は九天なり、演は長流貌、攄は舒也、天より賜はれる美しく五色に彩れる雲は空に文章を成せりとなり　○肸蠁之應、漢書司馬相如傳補註に蠁知レ聲蟲也凡言二肸蠁一者蓋聲入則此蟲知レ之其應最捷故以喩二靈威通一レ微之義一とあり　○昊穹、天なり　○湛恩、湛は浮貌　深恩と云に同じ　○寓縣、寓は籀文の宇なり宇宙の意、縣は赤縣にて天下と云に同じ　○孤獨、林本孤を惸に作る　○勿事、調庸を免ずるを云　○奈良麻呂、諸兄の子なり寶字中押勝を除かむとして流罪に處せらる其子淸友の女卽ち檀林皇后なり　○秀良親王、嵯峨天皇第三皇子、御母檀林皇后　○雲林院、字類抄に仁明天皇皇子常康親王の舊居とあり　○內裏藏人所、原本內裏を內園に作る閣本西本及類史に據て改む　○寢殿、一家の正殿を云　○滋野朝臣貞主、原本此下に癸丑及甲寅の二條ありしを十一月の條に移す

(十一月)丁未朔、此三字類史に據て補ふ原本此に丁巳の條ありしを下に移せり
○辛亥、此條原本丁巳の次にあり林本に據り干支を推して此に移す
○安義、諸本及類史安を奉に作る
○授從五位下、原本此次に丙子條あり下に移せり
○癸丑、此條及次の甲寅條は原本十月壬寅の次にあり林本に據て此に移す
○蕃良朝臣、貞觀六年八月辛未紀に蕃良朝臣豐村等に菅野朝臣を賜ふと見

○十一月丁未朔。五 辛亥、正六位上百濟王安義、正六位上百濟王慶仁、並授二從五位下一。○七 癸丑、右京人陰陽寮允正六位上葛井宿禰石雄、兵部省少錄正六位上同姓鮎川、賜二姓蕃良朝臣一。○八 甲寅、改二常陸國人外從五位下有道宿禰氏道本居一、貫二附左京七條一。○十一 丁巳、左近衞將曹佐伯宮成獻二白烏一。女孺河內國若江郡人浮穴直永子、賜二姓春江宿禰一。○十五 辛酉、加二置施樂院主典一員一。○十七 癸亥、依二兵部省所一レ請、以二國造田廿町地稅一、永充二親王已下五位已上廿人、調二習內射一之資一。○十九 乙丑、以二從五位下清原眞人秋雄一

え菅野朝臣と同祖なり
○丁巳、此條原本十一月朔の次にありて己未に作る今閣本及類史に據て丁巳に改め此に移す
○宮成、紀略宮を重に作る
○白鳥、原本鳥を馬に作る諸本及類史紀略に據て改む
○若江郡人、人字は閣本西本に據て補ふ
○辛酉、此條原本なし西本林本宮本及類史に據て補ふ
○癸亥、此條二年十一月に重出す類史に據て此を存し彼を削る
○國造田、政事要略所載延喜十四年八月八日太政官符に諸國國造田四百十一町五段を載す其内なり
○調習、原本調を試に作る西本及類史に據て改む
○兵部大輔、原本兵を刑に作る諸本に據て改む
○己巳、十一月廿三日なり原本此上に十二月の三字あるは衍なり林本及類史に據て削る
○勘備、原本助備に作る諸本に據て改む
○夏日、西本尾本夏月に作る

爲侍從、從四位下紀朝臣深江爲兵部大輔、從五位下藤原朝臣貞公爲出雲守、從五位上紀朝臣良門爲紀伊守、○（廿三）己巳、佐渡國言、國例每郡郡司一人、專當貢賦、冬中勘備、夏日上道、而或遭風波、留連海上、或供相撲節、不得早歸、此際無人充用、郡政擁滯、請正員外每郡置權任員、支配雜務、許之、○（廿六）壬申、制囚獄司物部刀緒、用胡桃染、從四位上勳七等淸原眞人長谷卒、年六十一、○（廿七）癸酉、坐能登國正三位勳一等氣多大神宮禰宜祝二人、始令把笏、○（三十）丙子、以越前國坂井郡荒田廿町賜基貞親王、○十二月丁丑朔（五）辛巳、施行天長年中所新撰令義解、下詔曰、納諸軌物、王道所先、制以度量、皇猷斯在、故知弼成五教、銜勒万方、垂拱而理、其法令乎、後太上天皇（淳和）修機玄扆、比德丹陵、事勤遠圖、慮在長策、以爲、法令文義、隱約難詳、前儒註釋、方圓遞執、豈使三家異說、輕重參差、二門殊躅、舞文弄法、永言於此、固切宸冲、爰勅在朝、迺令討覈、稽之於典籍、參之以古今、迄于滯疑、祇稟聖斷、咸加辨析、已盡會通、裁爲十卷、名令義解、屈飛龍之眇譽、顧汾陽之窅然、未有施行、藏之祕府、朕以寡昧、臨馭寰宇、思遹明謨、

導揚景業、宜頒天下、普使遵用晝一之訓、垂於萬葉、○十九乙未、大僧都傳灯大法師位空海上奏曰、空海聞、如來說法、有二種趣、一淺略趣、二祕密趣、言淺略趣者、諸經中長行偈頌是也、言祕密趣者、諸經中陀羅尼是也、淺略趣者、如大素本草等經、論說病源、分別藥性、陀羅尼祕法者、如依方合藥、服食除病、若對病人、披談方經、无由療痾、必須當病合藥、依方服藥、乃得消除疾患、保持性命、然今所奉講最勝王經、但讀其文、空談其義、不曾依法畫像、結壇修行、雖聞演說甘露之美、恐闕嘗醍醐之味、伏乞、自今以後、一依經法、講經七日之間、特擇解法僧二七人、沙彌二七人、別莊嚴一室、陳列諸尊像、奠布供具、持誦眞言、然則顯密二趣、契如來之本意、現當福聚、獲諸尊之悲願、勅依請修之、永爲恒例、○散位外從五位下大戶首清上、雅樂笙師正六位上同姓朝生等十三人、賜姓良枝宿禰、安倍氏之枝別也、諸陵少允正六位上中科宿禰直門、左少史從七位下同姓繼門等、賜姓菅野朝臣、津速之別姓也、散位從七位下川上造吉備成賜姓春道宿禰、伊香我色雄命之後也、○廿五辛丑、雷聲鼓動、

○胡桃染、類史胡を呉に作る抄飲食部鹽梅類に胡桃(久留美)博物志云張騫使西域還得之さあり、胡桃を以て染めたるを胡桃染さ云

○從四位上、以下年六十一に至る十八字紀略に據て補ふ

○淸原眞人長谷卒、補任に一品舍人親王三世孫石浦王二男延暦十七年月初賜長谷淸原眞人姓さあり天長八年七月參議に任じ在官四年卒年六十二さ見ゆ

○癸酉、此條原本九月辛酉の次にありしを類史に據て此に移す

○氣多大神宮、神名式羽咋郡氣多神社名神大さあり同郡一宮村に鎭座國幣大社に列す

○丙子、此條原本上文辛亥の次にありしを尾本林本に據て此に移す

○以越前國坂井郡、原本以を改に坂を板に作る以は宮本に據り坂は諸本に據て改む

○基貞親王、淳和天皇の皇子

(十二月)十二月、此三字原本十一月己巳上にあ

り干支を推して此に移す ○丁丑朔、此三字は宮本に據て補ふ ○所新撰令義解、天長三年十一月詔して之を作らしめ十年十二月書成りて奏進す施行は此に五日とあれど義解には十八日とす蓋奏可と施行の日とによりて異同あるなるべし撰は原本擇に作る諸本に據て改む ○執物、左傳隱五年の注に見ゆ法則を云 ○五教、五常の教を云尙書舜に出づ ○銜勒万方、大戴禮に法御レ人銜勒也とあり、原本銜を衡に勒を勤に作る林本及類史令義解に據て改む ○修機玄扈、機は萬機なり藝文類聚に黄帝坐二元扈洛水上一云々とあり元扈は山の名なり ○丹陵、帝王世紀に堯生二於丹陵一とあり堯を云なり ○慮在長策、原本慮を廣に在を存に作る慮は諸本に據り在は西本林本及義解に據て改む ○隱約、文章簡約にして意義の隱れ明ならざるを云 ○三家、後漢書陳寵傳に律有二三家一其説各異とあり ○會通、原本會を倫に作る西本及類史に據て改む會通は易繫辭傳に出づ ○爲十卷、原本爲を卷に作る諸本及類史に據て改む ○屈飛龍之眇嚮云々、藝文類聚所載沈約賀齊帝登祚啓に屈二飛龍之眇嚮一紆二汾陽之遠情一とあり飛龍は易乾卦に飛龍在レ天とあり天子に譬ふ眇は遠也微也汾陽は莊子逍遙遊に堯見二四子藐姑射之山汾水之陽一窅然喪二其天下一焉とあるに出づ窅然は深遠貌なり淳和帝の脫屣を云なるべし ○寰宇、令義解及類史宇を區に作る ○遵用、原本導用に作る條本林本及義解に據て改む ○畫一、漢書注に言二整齊一也 ○萬葉、原本葉を業に作る諸本に據て改む、萬葉は萬世に同じ ○長行偈頌、長行は偈頌に對して經文中の散文の部分を云 ○陀羅尼、梵語なり漢譯して總持と云 ○大素本草等經、日本現在書目に内經大素卅卷、隋書經籍志に神農本草經三卷とあり ○服藥、類史服食に作る ○疾患、類史性靈集病患に作る ○不曾依法畫像云々、徒に經のみ講說し本尊以下の畫像を懸けず祭壇を設けて行法を修することなしとなり ○甘露之美、性靈集美を義に作る ○醍醐、抄飮食部に本草注蘇敬曰醍醐是酥之精液也とあり酥は同云酥(音與レ蘇同俗音曾)牛羊乳所レ爲也と見ゆ ○擇解法僧、原本擇を釋に作り解下に之字あり諸本類史性靈集に據て改め削る解法とは修法を解するを云 ○雅樂笙師、雅字は諸本に據て補ふ ○朝生、原本朝下に臣字あるは衍なり林本宮本に據て削る ○散位、原本散上に乙未の二字あるは衍なり尾本林本に據て削る ○川上造、姓氏錄に見えず右京神別に川上首見ゆれど火明命の後にて異姓なり

續日本後紀卷第三

○承和、此の二字は宮本水戸校本に據て補ふ
○臣、原本脱す諸本に據て補ふ
【承和二年】童小、時に御年十歳に坐す
○傳燈大法師、燈は原本灯に作る閣本西本及類史に據る下同じ灯は燈の俗字
○五十人、原本十を千に作る諸本及類史に據て改む
○東寺、山城志に東寺在九條大宮西、河海抄曰遷都之始東西大宮置玄蕃寮、弘仁以來東鴻臚爲東寺賜空海とあり
○三密門、身密・語密・意密を三密と云
○利濟人天、原本此下に皇字あり諸本及類史百七十九紀略に據て削る
○卌餘町、卌は原本册に作る今諸本及紀略に據る
○高岳親王、紹運錄に法名眞如大同四年四月十三日立太子弘仁元年九月十二日廢之貞觀三年入唐元慶五年十月十三日自唐中遷化之由母伊勢繼子贈從三位、從四位下老人女也とあり
○第三子、紹運錄歷代皇記並に長子とす

續日本後紀卷第四

起承和二年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

二年春正月丁未朔、天皇御大極殿、受群臣朝賀、皇太子不朝、以童小也、還御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○己酉、天皇謁覲先太上天皇、及太皇太后於嵯峨院、○壬子、大僧都傳燈大法師位空海奏曰、依弘仁十四年詔、欲令眞言宗僧五十人、住東寺修三密門、今堂舍已建、修講未創、願且割被入東寺官家功德料封千戸之內二百戸、甲斐國五十戸、下總國百五十戸以充僧供、爲國家薰修、利濟人天、許之、○平城舊宮處水陸地卌餘町、永賜高岳親王、親王者、天推國高彥天皇第三子也、大同年末、少登儲貳、世人號曰蹲居太子、遂遭時變失位、落髮披緇、住于東寺、○癸丑、天皇御豐樂院、宴百官於朝堂、詔授從三位源朝臣信正三位、從四位下藤原朝臣良房從四位上、從五位上永野王正五位下、從五位下三繼王、津守王、並從五位上、无位

○大同年末、原本年下に中字あり諸本に據て删る

○遭時變失位云々、弘仁元年九月藥子の亂に依て皇太子を廢せられ東寺に入て空海の弟子となり給ふ

○披緇、披は字彙に荷レ衣曰レ披とあり

○住于東寺、原本住を位に作る閣本西本居本及紀略に據て改む

○癸丑、以下院に至る八字類史九十九及紀略に據て補ふ

○宴百官於朝堂、以下是首名之孫也に至る三百五十字原本には癸亥天皇御二豐樂院一觀レ射焉の下に收む類史及紀略に據て此に移す

○津守王並、原本王字なく並を兼に作る王は宮本類史に據て補ひ並は閣本西本宮本等に據て改む

○門繼、門字は宮本及類史に據て補ふ

○邑樂、原本邑を色に作る類史に據て改む

○藤原朝臣豐仲、朝臣の二字は宮本及類史に據て補ふ

○鷹守、原本鷹を應に作る諸本及類史に據て改む

嶋江王、正六位上廣坂王、並從五位下、從四位下藤原朝臣廣敏、紀朝臣善岑、百濟王勝義、並從四位上、正五位下田口朝臣佐波主從四位下、從五位上藤原朝臣長岡、當宗宿禰家主、並正五位下、從五位下藤原朝臣行道、紀朝臣名虎、高階眞人石川、永原朝臣門繼、小野朝臣篁、並從五位上、正六位上藤原朝臣廣野、文室朝臣邑樂、橘朝臣宗雄、藤原朝臣豐仲、伴宿禰諸山、安倍朝臣濱成、紀朝臣鷹守、出雲宿禰岑嗣、並從五位下、外從五位下御船宿禰賀祜外正五位下、正六位上廣井宿禰弟名、長岑宿禰高名、刈田首種繼、宍人朝臣垣麻呂、春岑朝臣廣津麻呂、門部連貞宗、大村直福吉、並外從五位下、宴畢賜祿、各有差、左京人遣唐史生道公廣持、賜姓當道朝臣、和銅年中、肥後守正五位下道君首名、治迹有聲、永存遺愛、廣持是首名之孫也、○乙卯、授正六位上永原朝臣貞主從五位下、○丁巳、正三位源朝臣信爲近江守、左兵衛督如故、正四位下源朝臣弘爲信濃守、宮內卿如故、從五位上小野朝臣篁爲備前權守、遣唐副使彈正少弼如故、三品秀良親王爲大宰帥、彈正尹如故、○庚申、去年有勅、令

相撲、上總、下總、常陸、上野、下野等國奉寫一切經、今亦貞元弁梵釋寺目錄所載律論疏章紀傳集抄、每國均分、令加寫之、○癸亥、天皇御豐樂院觀射焉、○丙寅、天皇內宴於仁壽殿、公卿近習以外、內記及直校書殿文章生一兩人、殊蒙恩昇、共賦春色半暄寒之題、宴訖賜祿、是日授正六位上壬生公永繼外從五位下、○戊辰、令鑄新錢、下詔曰、懋遷之軌、標自昌言、交貿而退、取諸噬嗑、則知龜文人幣、興於曠時、蝸影栖緡、彰於舊術、姬王圜法、有無以之化居、漢室泉刀、斂散由斯不匱、斯固邦家所要、配地馬而无疆、公私攸宜、擬天龍而自遠、然而權輕作重、沿世或慘、子去母隨、適時開務、況年祀浸久、賫幣已賤、不有平量、何救流弊、是以今制新錢、以叶通變、文曰承和昌寶、以新幣之一、當舊錢之十、新之與舊、宜令並用、大僧都傳燈大法師位空海、上表請度眞言宗年分僧三人、許之、是日雷三聲、○己巳、天皇御射場、常陸大守葛井親王、右大臣清原眞人夏野等侍焉、至中鵠之人、及取御箭內豎大舍人、賜布有差、是日後太上天皇(淳和)幸姬橋氏所誕育皇子爲親王、左京人右馬寮權大允淸友宿禰眞岡、散

○賀祜、祜は原本枯に作り諸本及類史祐に作る祐は祜の訛なること明なれば改む
○正六位上廣井宿禰弟名、原本六を五に作り弟を第に作る六は閣本前本宮本及類史に據り弟は諸本及類史に據て改む
○刈田首、原本刈を川に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
○宍人朝臣垣麻呂、原本宍を宮に作る宮本及類史に據て改む垣は閣本西本及類史恒に作る
○寞畢、畢は原本了に作る類史及紀略に據て改む
○當道朝臣、他に見えず
○首名、養老二年四月紀(續紀上一三四頁)に傳見ゆ
○乙卯、此條類史九十九に據て補ふ
○丁巳、此條原本壬子の次にあり閣本前本に據て此に移す
○正三位源朝臣信、按正三位の上疑くは參議の二字を脫せしならむ
○正四位下源朝臣弘云々、纂詁に按天長十年三月紀、從四位上源朝臣弘爲信濃守、宮內卿如故與

位同姓魚引等、賜姓笠品宿禰、非其願也、公家避贈太政大臣橘氏之名耳、左近衛戸嶋守、右兵衛同姓眞魚等、賜姓安岑連焉、嶋守之先、百濟國人也、○甲戌、（廿八）行幸芹川野遊獵、日暮車駕還宮、

此相同但從四位上作正五位下、爲異、据三代實錄此恐衍文とあり　○從五位上小野朝臣篁、上は原本下に作る癸丑條及宮本に據て改む　○庚申、此條原本癸亥の次にあり西本前本に據て此に移す　○下總、此二字は宮本及元年五月乙丑紀に據て補ふ　○貞元井梵釋寺、貞元寺は詳ならず梵釋寺は續紀下（四四九頁）に注す　○癸亥、此條原本庚申の前にあり類史七十二に據て此に移す　○仁壽殿、拾芥抄中末に南殿（紫宸殿也）北とあり　○按書殿、同に月花門北とあり　○殊蒙恩昇、特に昇殿を許さるゝを云　○春色云々、白居易の詩句なり　○永繼、繼字は中本宮本及類史に據て補ふ　○懋遷之軌云々、尙書益稷に帝曰來禹汝亦昌言禹曰云々懋遷有無化居云々皐陶曰兪師汝昌言とあるに出づ昌は美、懋は勉也交易して有無を相通ずる法は禹の言によりて立てられたりとなり　○交貿而退云々、易繫辭傳に日中爲市云々交易而退各得其所蓋取諸噬嗑とあるに出づ噬嗑は卦の名なり　○龜文人幣、史記平準書に有司以爲天用莫如龍地用莫如馬人用莫如龜故白金三品其三曰復小橢之其文龜直三百、注に皆隱起龜甲文とあり幣は原本弊に作る諸本に據て改む人は入の誤なるべし　○蝸影栖緡、蝸は廣雅に蝶蝸魚伯靑蚨也淮南子注に用母血塗八十一錢子血塗八十一錢置母用子置子用母皆自還故謂錢爲靑蚨とあり蝸影は錢を云なるべし緡は錢貫なり　○姬王圜法、漢書食貨志に太公爲周立九府圜法、注に掌財幣之官有九故云九府圜謂均而通也、補注に圜法二字統金錢布帛言之とあり　○有無以之化居、尙書益稷の文に出で上に引けり注に交易變化其所居積之貨也とあり　○漢室泉刀云々、漢書食貨志に凡貨寶於金利於刀流於泉、注に名錢爲刀者以其利於民也泉者流行如泉也また民有餘則輕之故人君斂之以輕民不足則重之故人君散之以重凡輕重斂散之以時則準平とあるに出づ原本斯を其に匱を遺に作る並に宮本に據て改む　○地馬、龜文の下に注す　○天龍、同上　○或悛、原本悛を挼に作る宮本に據て改む　○子去母隨、漢書食貨志に量資幣權輕重以救民民患輕則爲之作重幣以行之於是有母權子而行民皆得焉若不堪重則多作輕而行之亦不廢重於是乎有子權母而行小大利之注に母重也其大倍故爲母子輕也其輕少半故爲子也とあり　○所要、所は原本取に作る宮本に據て改む　○年祀、祀は年也　○通變、通は原本適に作る閣本西本に據て改む　○新幣、幣は原本錢に作り閣本西本前本帝に作る帝は幣の譌なるべし今紀略に據て改む　○眞言宗年分僧、三代格卷二太政官符に之を廿三日とす類史百八十七に正月二日とするは誤なるべし　○葛井親王、桓武天皇皇子　○內豎、原本內竪に作る西本に據て改む下同じ　○橘氏、纂詁に一代要記を引き氏は氏子なりとし氏下疑脫子字とさ云り　○皇子、名闕く　○橘氏、檀林皇后の父淸友を云　○戸嶋守、戸上恐脫橘字とさ纂詁に云　○眞魚、魚は原本兼に作る諸本に據て改む

（二月）准判官、准は宮本に據て補ふ　○松川造、詳ならず　○吉彌侯宇加奴、原本侯を雙に加を如に作る西本

○二月丙子朔丁丑、（二）以外從五位下長岑宿禰高名爲遣唐准判官、從七位上松川造貞嗣爲錄事、從八位下大和眞人耳主、大初位下廬原公有

宮本等に據て改む
○朝野宿禰、延暦十年正月紀(續紀下五〇三頁)に見ゆ
○襲津彦、津字は宮本に據て補ふ
○授无位源朝臣、以下從四位上に至る十一字は類史九十九に據て補ふ
○善世宿禰、錄に見えず
○天忍人命之後也、原本此下壬寅丹後國人云々の三十字あり下文壬寅條に重出す此を削て彼を存す
○庚寅、此條類史百七に據て補ふ
○秩歷、秩、類史に琳曆に作る今纂詁に據て改む
○前格、類史百七に天長八年三月癸卯周防鑄錢司に命じて秩期一準諸國とあり是なるべし
○芝草、治部式に下瑞とす
○武茂神、神名式に下野國那須郡健武山神社とある是なり今同郡健部村武部にあり
○採沙金之山、下野國より沙金を出すこと民部式內藏式に見ゆ
○日暮還宮、此四字は類史卅二に據て補ふ
○全氏、原本全を金に作

守、並爲譯語、○己卯、俘囚勳五等吉彌侯宇加奴、勳五等吉彌侯志波宇志、勳五等吉彌侯億可太等、賜姓物部斯波連、○庚辰、大和國人正六位上忍海原連嶋依、同姓百吉等、賜姓朝野宿禰、葛城襲津彦之後也、○戊子、授无位源朝臣鎭從四位上、河內國人右少史掃守連豐永、少典鑄同姓豐上等、賜姓善世宿禰、天忍人命之後也、○庚寅、勅、鑄錢司職異於國司、而秩歷限四年、每煩交替、宜改前格、更定六年、○丙申、天皇御紫宸殿、右大臣從二位淸原眞人夏野、獻芝草一莖有兩枝者、(一枝長一尺六寸、一枝長一尺)其色紫緋相雜、每莖之末有菌、而產于大臣山莊双岳之下、是日賜酒侍臣、以賀祥芝、賜祿有差、○戊戌、坐越前國正三位勳一等氣比大神祝禰宜、准鹿嶋能登兩大神祝禰宜、令以把笏、下野國武茂神奉授從五位下、此神坐採沙金之山、○壬寅、行幸水生瀨野遊獵、賜扈從者祿、日暮還宮、丹後國人從八位上久美公全氏賜姓時統宿禰、伊枳速日命之苗裔也、賜大學寮印一面、○三月丙午朔、天皇御紫宸殿、侍從廚獻御贄、設酒饌、侍臣具醉、賜祿有差、○丁未、地震、○庚戌、出雲國言、災于官舍、○癸丑、以

備前國御野郡空閑地百町、爲後(淳和)院勅旨田、右京人近江少目從七位下伊蘇志臣廣成、大和國人正六位上同姓人麻呂、紀伊國人外正八位上紀直繼成等十三人、賜姓紀宿禰、○(十二)丙辰、豐安法師爲大僧都、明福法師爲少僧都、泰景法師、善海法師、並爲律師、○(十三)丁巳、勅、後太上天皇御封二千戸、皇太后御封一千戸、准冷然院御封行之、若當有損年、以公相補、令全進之、仰大宰府、綿甲一百領、冑一百口、袴四百腰、充遣唐舶不虞之備、山城國拝山一處、爲內藏寮所領之地、○(十四)己未、大宰府言、壹伎嶋遙居海中、地勢隘狹、人數寡少、難支機急、頃年新羅商人來窺不絕、非置防人、何備非常、請令嶋傜人三百卅人、帶兵仗、戍十四處要害之埼、許之、甲斐國言、灾于不動倉二宇、及器仗屋一宇、皆悉爛燼、○(十五)庚申、鑄印一面、充冷然院、○(十六)辛酉、下總國人陸奥鎮守將軍外從五位下勳六等物部匝瑳連熊猪、改連賜宿禰、又改本居貫附左京二條、昔物部小事大連、錫節天朝、出征坂東、凱歌歸報、藉此功勳、令得於下總國始建匝瑳郡、仍以爲氏、是則熊猪等祖也、鑄錢司言、被給俸料一分之人、唯一千束、僅支朝

る諸本に據て改む
○時統宿禰、他に見えず
(三月)侍從廚、拾芥抄中末に侍從所在厨美福門內東掖也とあり
○庚戌、此條類史百七十三に據て補ふ
○以備前國、以下勅旨田に至る十八字類史百五十九及紀略に據て補ふ
○豐安法師、元亨釋書十三に見ゆ
○大僧都、山田以文曰此時空海大僧都たり疑くは權字を脫すと
○並爲律師、並は原本直に作る諸本に據て改む
○皇太后、紀略此下に宮字あり
○冷然院、嵯峨上皇の始に坐しゝ宮なり拾芥抄中末に大炊御門南堀川西、此院累代後院弘仁亭本名冷然院云々而依火災改然字爲泉とあり
○令全進之、全字は諸本に據て補ふ
○仰大宰府、仰は原本師に作る閣本西本及紀略に據て改む
○四百腰、紀略四を一に作る
○山城國拝山、以下十五字は宮本及類史百七に據

夕、不足衣服、遷替之日、无糧還京、右大臣(夏野)處分、班擧正税十六万束於備後、安藝、周防、長門、豐前等國、各三万二千束、以其息利、毎人倍給之、下總國言、民飢、賑給之、○丙寅(廿一)、大僧都傳燈大法師位空海、終于紀伊國禪居、○庚午(廿五)、勅、遣内舍人一人、弔法師喪、并施喪料、後太上天皇(淳和)有弔書曰、眞言洪匠、密教宗師、邦家憑其護持、動植荷其攝念、豈圖崦嵫未逼、无常遽侵、仁舟廢棹、弱喪失歸、嗟呼哀哉、禪關僻左、凶問晩傳、不能使者奔赴、相助茶毘、言之爲恨、悵恨曷已、思忖舊窟、悲凉可料、今者遙寄單書弔之、著錄弟子、入室桑門、悽愴奈何、兼以達旨、法師者、讚岐國多度郡人、俗姓佐伯直、年十五就舅從五位下阿刀宿禰大足、讀習文書、十八遊學槐市、時有一沙門、呈示虛空藏聞持法、其經說、若人依法、讀此眞言一百万遍、即得一切教法文義諳記、於是信大聖之誠言、望飛焰於鑽燧、攀躋阿波國大瀧之嶽、勤念土左國室戸之崎、幽谷應聲、明星來影、自此慧解日新、下筆成文、世傳三教論、是信宿間所撰也、在於書法、最得其妙、與張芝齊名、見稱草聖、年卅一得度、延曆廿三年、入唐留學、遇青龍寺惠果和尚、稟

て補ふ拵は宮本類史共に拵に作れるを天長十年三月紀に據て改む拵山は相樂郡にあり
○壹伎嶋、伎は原本岐に作る閣本西本前本等に據て改む
○隘狹、隘は原本溢に作る諸本に據て改む
○戊十四處、戊は原本戎に作る宮本に據て改む
○甲斐國言、以下二十一字は類史百七十三に據て補ふ
○辛酉、此條三年三月紀に重出す此を存して彼を削る
○鎭守將軍、將軍の二字は宮本及下文に據て補ふ
○物部小事大連、舊事紀に物部小事連公志陁連等祖とあり
○賜節、節刀を賜なり
○匝瑳郡、抄國郡部に下總國匝瑳(佐布佐)とあり
○鑄錢司言、以下倍給之まで元年三月紀に出づ類史八十三に據り彼を削りて此を存す
○處分、類史八十四には處の上に奉安の二字あり同八十三には無し
○下總國云々、紀略之を丁巳に係け上に出す

學眞言、其宗旨義味、莫レ不二該通一、遂懷二法寶一、歸二來本朝一、啓二祕密之門一、弘二大日之化一、天長元年、任二少僧都一、七年轉二大僧都一、自有二終焉之志一、隱二居紀伊國金剛山寺一、化去之時年六十三、

○禪居、金剛峯寺を云　○動植荷共攝念、動物植物に至るまで共慈悲を蒙れりとなり　○崦嵫未遍、崦嵫は離騷注に日所レ入之山也とあり死期に譬ふ山海經に出づ未遍は未だ迫近せざるなり遍は原本遒に作る諸本に據て改む　○遼侵、遼は原本處に作る閣本前本に據て改む　○弱喪失歸、沈約佛記序に行迷レ復レ路弱喪知レ歸とあるに據れり足弱く路に踏迷ひしもの、歸する所を知らずなりしを云　○禪關僻左、金剛峯寺の都より遠く隔れるを云　○凶問、問は聞の誤なるべし　○荼毘、釋氏要覽下に荼毗梵云二闍鼻多一此云二焚燒一とあり　○單書、書は原本言に作る閣本中本宮本に據て改む　○著錄弟子、著錄は記簿に載せらるゝ弟子を云か　○入室桑門、高足の弟子を云　○槐市、大學を云三輔黃圖に禮小學在二公宮之南一大學在レ東去レ城七里東爲二常滿倉一倉之北爲二槐市一列二槐樹數百行一爲レ隧無二墻屋一諸生朔望會且市云々とあり　○時有一沙門云々、大師傳に延曆十二年勤操虛空藏求聞持法授二大師一とあり、聞持法は大集經虛空藏菩薩所問品に出づ原本聞上に求字あれど諸本及寬平七年空海傳記にもなし故に削る　○諸記、諸は原本謫に作る諸本に據て改む　○大聖、釋迦を云　○望飛焰於鑽燧、修道研鑽の大勇猛心を起すを云　○大瀧之嶽、那賀郡加茂谷村大字加茂にあり寺は大瀧寺と稱す　○勤念、勤は宮本に觀歎と云り　○室戶之崎、安藝郡にあり今室戶町大字室津　○明星來影、廣傳に明星落二入口中一彰二佛法之奇異一とあり　○慧解、慧は原本專に作る閣本西本に據て改む　○三敎論、三敎指歸を云　○信宿、信處と云に同じ二泊を云左傳莊三年に一宿爲レ舍再宿爲レ信とあり　○張芝、後漢書張奐傳注に芝號二張有道一尤好二草書一學二崔杜之法一爲二世所一レ寶寸紙不レ遺韋仲將謂二之草聖一也とあり　○年卅一得度、行狀集記廣傳に空海の得度せしは延曆十四年四月にて廿二歲とあれば廿二歲とすべきなり然るに寬平七年傳記に延曆廿三年四月九日東大寺戒壇院受二具足戒一時年卅一とあるに據れば誤と云べからず故に改めず　○延曆廿三年、唐貞元二十年、空海時に年三十一歲　○懷法寶歸來、歸朝は大同元年十月にて携帶せし經律論疏章紀傳影像佛具等は傳記に詳なり　○金剛山寺、山は峯の誤か拾芥抄中末に高野寺紀伊國傳法院在二此內一號二金剛峯寺一とあり　○六十三、編年記行狀等に六十二とあれど寬平傳記には承和二年三月廿一日卒去時六十三臈卅三とあれば輙く改めず

(四月)夏四月乙亥朔、夏字及乙亥朔の四字は宮本に據て補ふ　○象著損上、象は易の象なり益卦の象傳に損レ上益レ下民說無レ疆とあり　○禮存寧儉、論語八佾に禮與二其奢一也寧儉とある

○夏四月乙亥朔丙子、勅曰、象著二損上一、禮存二寧儉一、王者則レ之、古今合レ契、朕雖レ非レ昧、跂二予思一レ齊、去レ泰就レ約、夙闕二情慮一、如今所レ有、朕之兒息、除二親王之號一、賜二朝臣之姓一、先太上天皇、丕恩罔レ極、玄澤更加、不レ令二別姓一、被下以二源氏一使上レ與二

曾枝而同蔭、共渭派而混流、其前號親王、仍舊不改、同母後產、猶復一例等制、准弘仁五年天長九年兩度勅書、宜告中外咸俾聞知、甲斐國巨麻郡馬相野空閑地五百町、賜一品式部卿葛原親王、○丁丑、勅曰、如聞、諸國疫癘流行、病苦者衆、其病從鬼神來、須以祈禱治之、又般若之力不可思議、宜令十五大寺轉讀大般若經、拯夫沉病、兼防未然焉、○己卯、勅、令天下諸國修文殊會、其會料者、每年割取救急稻利三分之一充用、○辛巳、叙從四位上藤原朝臣良房從三位、爲權中納言、○戊子、无品叡努內親王薨、天皇爲之不視事三日、親王者平城天皇第二皇女、母紀氏、從三位木津魚朝臣之女、從五位下魚員是也、○庚寅、以參議正三位源朝臣信爲左近衛中將、近江守如故、權中納言從三位藤原朝臣良房爲兼左兵衛督、參議從四位上文室朝臣秋津爲右近衛中將、春宮大夫武藏守如故、大和國人正七位上仲丸子連乙成、同姓從八位上眞當等、賜姓仲宿禰、○甲午、高子內親王禊于賀茂川、始入齋院、○丁酉、右大臣從二位兼行左近衛大將清原眞人夏野上表、請辭大將之任、不許、○戊戌、先

に據れり
○跂予思齊、毛詩衛風河廣章に跂予望之、傳に跂足則可以望見之、また論語里仁篇に見賢思齊焉とあり跂は企と同じ
○去秦、秦は修也
○不恩罔極、原本恩を息に、罔を閔に作る恩は水戸校本、罔は閣本前本及格に據て改む
○與曾枝而同蔭云々、枝も幹も同じ蔭にあり本流も分派も同じ河を流れしむる意にて世々別姓を設けず何れも源氏を冒さしむるを云原本枝を稱に作る閣本西本に據て改む渭は三代格濬に作る
○弘仁五年、三代格卷十七に八月八日の詔とし紀略は五月に係く
○天長九年、同十七に出で二月十五日の詔なり
○馬相野、纂詁に甲斐叢記を引て御敕使川南有駒場有野二村、有野或馬相野之遺名、蓋謂八田御牧邪と云り
○葛原親王、桓武天皇皇子
○丁丑、此條類史百七十三に據て補ふ
○仲丸子連、錄大和神別

太上天皇不豫也、中使輪轉、候問起居、尋亦平復、○己亥、授正六位上文室朝臣茂道從五位下、外從五位下賀茂縣主廣友外從五位上、正六位上賀茂縣主廣雄外從五位下、○庚子、越前國飢、賑給之、○癸卯、攝津國嶋上郡荒廢田三町、賜左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、○甲辰、天皇御武德殿、閲覽左右馬寮御馬也、應供奉五日節者、惣牽於此、○五月乙巳朔丁未、近江國飢、賑給之、○己酉、天皇御武德殿、觀馬射、○庚戌、亦御同殿、覽種種馬藝、○壬子、伊勢、加賀、長門等國飢、並賑給之、○甲寅、叙從五位上紀朝臣名虎正五位下、外從五位下善世宿禰遠繼從五位下、○乙卯、天皇幸神泉苑、追涼酣暢、于侍臣賜祿，商布、各有差、是日便令捕池魚奉嵯峨淳和兩院、○丁巳、以美作權掾外從五位下長岑宿禰高名、轉任權介、遣唐判官如故、正四位下永原朝臣子伊太比卒、○甲子、宮內卿正四位下源朝臣弘爲刑部卿、信濃守如故、○辛未、正七位上勳七等伴刈田臣繼守、外從八位上眞髮部公吉人、並授外從五位下、○癸酉、右京人丹波權大目昆解宮繼、內豎同姓河繼等、賜姓廣野宿禰、百濟國人夫子之

に仲九子日臣命九世孫金村大連之後也とあり
○高子內親王、高は原本亮に作る類史及紹運錄に據て改む仁明天皇第十二皇女天長十年三月卜定
○中使輪轉、類に御使を遣さるゝを云
○授正六位上、正は原本從に作る西本宮本及類史九十九に據て改む
○嶋上郡、今三嶋郡
○緒嗣、原本緒を諸に作る閣本前本等に據て改む
(〔五月〕)五月、原本月を日に作る諸本に據て改む
○乙巳朔、此三字宮本水戸校本及紀略に據て補ふ
○壬子、此條甲寅の次にありしを干支を推して此に移す
○長門等國、等字は諸本に據て補ふ
○于侍臣、水戸校本于の下に時字あり
○永原朝臣子伊太比卒、太は原本大に作る諸本に據て改む、子伊太比は大同四年四月戊辰紀に典侍從五位上とあり
○河繼、河は原本阿に作る山崎校本に據て改む
○廣野宿禰、他に見えず
○備前備中、備前は原本

備中の下にありしを換改めたり

○生絲、生は原本上に作る諸本に據て改む

(二六八月)百繼、補任に木津魚一男と見え弘仁十三年十一月從三位に叙す

○大膳職、以下二員に至る十三字は宮本及類史百七に據て補ふ

○藤原朝臣松子卒　弘仁元年十一月己未(後紀一四五頁)正五位下を授く

○紀朝臣田村子卒、大同三年十一月(同一二二頁)无位より從四位下を授く

○辛丑、此條類史百九十に據て補ふ

○宇漢米公、弘仁三年正月乙酉紀に夷外從五位上宇漢米公色男見ゆ

○爾散南公、同紀に外從五位下爾散南公獨伎特聽衛會入京と見ゆ

○中務省、省は原本少輔の二字に作る諸本及紀略に據て改む

○勅如聞、以下用救急稻に至る八十字は類史八十三及河海抄(篝木卷)に據て補ふ亦三代格十六に見え文異同あり參看すべし

○東海東山兩道河津、河は墨俣。僞海。矢作。大井。

後也。太政官處分、伊賀、尾張、出雲、美作、備前、備中、備後、安藝、紀伊、阿波等國、年料貢賦練絲等、宜減其色、令進生絲。○六月乙亥朔丁丑、從二位右衞門督紀朝臣百繼上表辭職、不許。大膳職職掌、准之諸職、加置二員。○己卯、從四位下藤原朝臣松子卒。○癸未、從四位下紀朝臣田村子卒。○辛丑、俘囚第二等宇漢米公何毛伊、從八位下爾散南公志禮初、並授外從五位下、賞其不從逆類也。○壬寅、令中務省、進佛舍利七粒於内裏、不知其所從來。○癸卯、勅、當今嘉穀初秀、秋稼方實、如風雨失時、恐致損害、宜令十五大寺常住僧、各於本寺、轉讀大般若經、憑其靈護、必致豐稔。勅、如聞、東海、東山兩道、河津之處、或渡舟數少、或橋梁不備、由是貢調擔夫、來集河邊、累日經旬、不得利涉。宜每河加增渡舟二艘、其價直者、須正税、又造浮橋、令得通行、及建布施屋、備橋造作料者、用救急稻。○秋七月甲辰朔、天皇宴群臣於紫宸殿、左右近衞、遞奏音樂、勅令四位已上開襟、至夕宴罷、賜祿有差。○乙巳、走幣於天下名神、預攘風雨之災。○丙午、漕讃岐國正税穀、以賑淡路國飢民。○戊申、奉幣於伊勢大神宮、亦爲防風雨

阿倍・太日・石瀨・住田、渡は草津なり
○浮橋、後の船橋、浮橋は富士河鮎川二處に設く
○布施屋、旅人の宿泊する家なと云倭訓栞に臥屋の義なるべしと云墨俣河の左右兩岸に設く渡船故障の時宿泊に便ならしめむが爲なり
（七月）宴群臣、旬宴
○後漢書、一百廿卷宋太子詹事范曄撰す後漢十二帝のことを紀す
○有所以也、所字は紀略に據て補ふ
○爲參議、原本參議の二字を云々に作る尾本宮本に據て改む
○近江國、以下禁其私採に至る十九字は紀略に據て補ふ
（八月）甲戌朔、戌は原本辰に作る宮本及紀略に據て改む
○負籌、類史七十三籌下に也字あり、籌は算也
○輪物、正韻に俗謂勝負爲輸贏とある輸なり
○先是稟貸云々、以下更延三年也に至る三十三字は類史八十四之を七月甲子の條に係く
○貧民、原本貪民に作る

之災也、○辛亥、行幸神泉苑、觀相撲節、○乙卯、賜讃岐國三野郡空閑地百餘町時子內親王、○丁巳、天皇御紫宸殿、正四位下菅原朝臣淸公侍讀後漢書、數日之後不遂而輟、有所以也、○癸亥、以從二位紀朝臣百繼爲參議、近江國所出雲母、殊是精好、爲充公用、禁其私採、○甲子、以空閑地山城國愛宕郡二町、上野國山田郡八十町賜諱、田邑○八月甲戌朔、天皇御紫宸殿、先是左右四衞府、相撲於殿庭、右方負籌、今日獻其輪物、各奏音樂、是日霖雨霽焉、頒幣畿內名神、以賽子禱、其丹生川上社、殊奉白馬一疋、佐渡國言、去歲風雨爲灾、年穀不登、今茲飢疫相仍、死亡者多、詔賑恤之、先是稟貸筑前國貧民正稅一萬束、限以五年、而窮乏之輩、餘弊未復、因更延三年也、○乙亥、且禁京畿之內、來月供北辰灯、以齋內親王可入伊勢也、○戊寅、是釋奠後朝也、天皇御紫宸殿、喚明經碩儒鴻生、昇殿遞令論義、畢賜祿有差、○丁亥、從四位下滋野朝臣貞主爲兵部大輔、相摸守如故、○甲午、天皇御紫宸殿、侍從廚獻御贄、爲侍臣設酒饌、賜見參五位已上祿、各有差、○己亥、內侍臨東檻、計見陪五位已上、

西本宮本に據て改む
○窮乏之輩、之字は類史八十四に據て補ふ
○且禁、纂詁に按字典且姑且也、且禁猶二權停一也
○可入伊勢也、宮本伊勢の下齋宮の二字あれど類史にもなければ採らず
○是釋奠後朝也、釋奠は上丁即ち四日に行はれ其翌朝宮中にて論義せしめらる後朝は釋奠の翌朝の意なり、原本是下に日字あるは後人の私意を以て加ふる所にて諸本及紀略になし故に之を刪る
○論義、論は原本講に作る紀略に據て改む是內論義なり
○東檻、紫宸殿の東方の檻なり
○見陪、現在陪從せる人々を云
○源朝臣信、嵯峨天皇皇子母は廣井氏
（九月）朝謁、山崎校本及纂詁謁を覲に作る
○所番、番は原本蕃に作る水戸校本に據て改む
○才巧、類史百七巧を功に作る
○轆轤工、抄調度部造作具に四聲字苑云轆轤（俗云二六路一）圓轉木機也と

賜大宰府所貢染綾各一疋、色隨其人位、○（廿八）辛丑、天皇御紫宸殿、左近衛中將源朝臣信、聊有奉獻、賜侍從已上衣被、外從五位下廣井宿禰弟名授從五位下、信朝臣之舅也、齋內親王祓于賀茂川、爲可入伊勢齋宮也、是日自嵯峨院、御馬十疋奉內裏、○九月癸卯朔、天皇御紫宸殿、皇太子朝謁、賜群臣酒、具醉而罷、先是木工寮中所番長上雜工、隨其才巧各有品數、而承前考文、惣注長上木工、不別其品色、至是長上及工品選其人、每色辨置、隨闕補之、木工八人、土工二人、瓦工二人、轆轤工一人、檜皮工二人、鍛冶工二人、石灰工一人、○（三）乙巳、右京人散位宇自可臣良宗賜姓春庭宿禰、彥狹嶋命之苗裔也、○（四）丙午、授正五位下藤原朝臣長岡從四位下、○（五）丁未、天皇御大極殿、發遣齋內親王於伊勢大神宮、○（九）辛亥、天皇御紫宸殿、賜菊醑宴於侍從已上、但召非侍從、及諸司綠衫官人堪應詔者、幷文章生等如常、同賦秋氣搖落、効梁元帝體之題、宴訖賜祿、○（十三）乙卯、外從五位下嶋木史眞、機巧之思、頗超群匠、欲備邊近兵、自製新弩、縱令四面可射、廻轉易發、是日大臣以下執政、於朱雀門、召集諸衛府、以新弩

あり今俗に云挽物師なり
○石灰、抄居處部墻壁具に兼名苑云石灰一名堊灰(以之波比)燒青白石成熟冷竟澆之碎成灰也とあり今俗に漆食と云
○宇自可臣、錄右京皇別に宇自可臣孝靈天皇皇子彥狹嶋命之後也とあり
○丙午、原本丙子に作る類史九十九に據て改む
○丁未、原本乙未に作る紀略に據て改む
○發遣、遣は原本道に作る閣本尾本宮本及類史紀略に據て改む
○菊酺宴、酺は原本醋に作る水戶校本に據て改む閣本醴に尾本類史醋に作るは共に訛なり酺は美酒にて是卽ち菊花宴なり天長十年九月壬戌紀に見ゆ
○秋氣、纂詁氣など風に改む
○元帝、帝字は諸本及類史七十四に據て補ふ
○嶋木史、錄河內諸蕃に嶋木高麗國人伊理和須使主之後也とあり
○邊近兵、纂詁に癸本(大江本)に近字なしと云是なるに似たり
○新弩、抄調度部征戰具に兼名苑注云弩(和名於

試射之、向南而發、唯聞機發之聲、不視矢去之影、亦其矢所止、不得的知、河內國人左近衞將監伊吉史豐宗、及其同族惣十二人、賜姓滋生宿禰、唐人楊雍之孫、貴仁之苗裔也、○辛未、以上野國群馬郡伊賀保社、預之名神、○冬十月壬申朔、賜親王以下侍從已上祿、綿有差、以寒服之初也、○乙亥、丹波國人右近衞醫師外從五位下大村直福吉、及其同族幷五人、賜姓紀宿禰焉、武內宿禰之支別也、福吉妙得療瘡之術、當時諸醫不得間然、天皇寵愛、至賜宅居、遂據其口訣、令撰治瘡記、勘解由使言、使局、雜使十二人之中、給服食者二人、便以此二人、號爲使掌、准省掌令把笏、許之、○甲申、行幸箕津野、遞放鷹鷂、賜扈從者祿、日暮還宮、○丁亥、賜右京人遣唐譯語廬原公有子、兄散位栢守等朝臣姓、春宮坊小屬佐太忌寸道成、兄散位道純等、賜姓滋原宿禰、八多眞人同族也、○戊子、攝津國人從五位下長我孫葛城、及其同族合三人、賜姓長宗宿禰、事代主命八世孫、忌毛宿禰苗裔也、○己丑、延曆寺僧傳灯大法師位義眞奏言、天台一門、已立圓宗、大乘三學、流傳未周、伏請宜簡堪爲講讀師者各一人、

保由美）黄帝造也とあり
原本弩を努に作る諸本に據て改む
○亦其矢、亦は原本迹に作る諸本及紀略に據て改む
○伊吉史、錄左京諸蕃に伊吉連出自長安人劉楊雍也とあり
○群馬郡、神名式傍訓にクルマと訓り
○伊賀保社、神名式に群馬郡伊加保神社（名神大）とあり今伊香保町にあり縣社に列す
（十月）支別、支は原本枝に作る閣本西本前本等に據て改む
○許之、許は原本行に作る類史百七に據て改む
○箕津野、山城國綴喜郡にあり今美豆村と稱す淀町に近し
○丁亥、此條原本十一月癸亥の次にありしを閣本尾本に據て此に移す
○植守、植は原本柏に作る閣本西本前本等に據る
○道純、純は原本繼に作る中本前本に據て改む
○八多眞人、錄左京皇別に出自諡應神皇子稚野毛二俣王也とあり
○長我孫、原本我を茂に

毎年申官補之、演傳此宗、然則皇風遠振、慧日再明、宣揚像教、弘闡妙法、作菩提之由漸、爲彼岸之良因、勅許之、○庚寅、以從六位下藤原朝臣貞敏爲遣唐准判官、○壬辰、先是五月六日、左右馬寮、於武德殿前、競馳御馬、以決勝負、右御馬負焉、至是右方三衞府、及右馬寮、共奉輸物、兼奏雜樂、宴竟賜祿有差、○癸巳、河內國人散位正六位上林連馬主、賜姓伴宿禰、又改本居貫附右京、○甲午、令大藏省進新錢、分賜見參親王以下五位已上、又奉嵯峨淳和兩院各十萬、又賜皇太子二萬、○丁酉、雷電殊切、四衞府陣于淸涼殿前、計見參賜祿、賜讃岐國人從六位上秦部福依、弟福益等三烟秦公姓、攝津國人散位矢田部造聰耳、弟從八位上貞成等、賜姓興野宿禰、○戊戌、遣唐錄事松川造貞嗣、散位同姓家繼等、賜姓高岑宿禰、其先高麗人也、賜左京人內竪從六位上上毛野公諸兄朝臣姓、近江國人彈正大疏嶋朝臣眞行、賜姓高生朝臣、其先觀松彦香殖（孝昭）稻天皇之後也、左京人正六位上秦忌寸、賜姓朝原宿禰、○己亥、勅、以新錢四萬文、分之供施京城及平城有名之寺佛僧也、毎寺內舍人爲其使、

左京人道公安野、賜姓當道朝臣。〇庚子(廿九)、勅、左京人從六位下民首氏主、賜姓長岑宿禰焉、氏主等與白鳥村主同祖、出自魯公伯禽云、〇辛丑(三十)、河內國荒廢田八十五町、賜時子內親王。〇十一月壬寅朔戊申(七)、賜主計頭從五位上宮道宿禰吉備麻呂、玄蕃少允同姓吉備繼等朝臣姓。〇甲寅(十三)、左京人正六位上越智直年足、伊豫國越智郡人正六位上越智直廣成等七人、改直賜宿禰。〇辛酉(二十)、遣唐使知乘船事從八位上香山連清貞兄二人、改連賜宿禰。其先百濟國人也。木工寮置寮掌二員。〇庚午(廿九)、以美濃□荒廢田十町、爲後院勅旨田。

作る諸本に據て改む長我孫に複姓なり、長は錄和泉神別に長公大奈牟智神兒積羽八重事代主命之後也と見ゆ我孫は網曳にて職掌を以て氏とす　〇共同族、共字は諸本に據て補ふ　〇忌毛、原本忌寸に作る諸本に據て改む　〇義眞、第一世天台座主なり天台座主記に天長十年七月四日歿とあれど此に奏言あれば誤なるべし　〇圓宗、圓は原本丹に作る諸本に據て改む圓宗は圓教(偏教の對)の宗旨の意　〇伏請、此二字類史に據て補ふ類史には請下の宜字なし　〇慧日、慧は原本惠に作る閣本西本に據て改む　〇菩提之由漸、由は因也漸は進也菩提に進むの因由なるを云　〇彼岸之良因、因は原本田に作る格に據て改む、彼岸は生死の海を超て涅槃の岸に達するを云　〇藤原朝臣貞敏、朝臣は宮本に據て補ふ　〇雜樂、紀略雅樂に作る　〇甲午、此條紀略に據て補ふ　〇丁酉、此條雷電殊切以下賜祿までは紀略に據て補ひ賜讃岐國人以下與野宿禰に至るまでは原本十一月丁亥の次に丁酉云々とありしを堀本山崎校本に據て此に移す　〇松川造、姓氏錄に見えず高岑宿禰も同じく載せず　〇賜左京人、以下朝原宿禰に至るまでは原本十一月丁酉の次にありしを此に移す　〇彈正大疏、疏は原本弼に作る諸本に據て改む　〇嶋朝臣、嶋は宮イ本に鳥とあり朝は諸本脚に作る按に或は鴨脚の誤か姓氏錄に嶋史(高麗種族)は見ゆれど嶋朝臣は見えず別系なるべし纂詁に或は脚身の誤かとも云り　〇秦忌寸賜姓朝原宿禰、矢野翁曰天長十年二月己卯左京人左大史正六位上秦忌寸眞仲賜姓宿禰與此文甚似蓋錯簡而此缺名未詳　〇己亥、以々下爲其使に至る迄は類史百八十六及紀略に據て補ひ左京人以下當道朝臣まで十三字は原本十一月戊戌の次にありしを尾本堀本に據て此に移す　〇庚子勅、諸本此下に旨曰の二字あり　〇民首、錄山城諸蕃に民首水海連同祖百濟國人努理使主之後也　〇焉氏主等、焉及等は衍　〇時子內親王、今上の皇女　(十一月)宮道宿禰、舊事紀に稚武王宮道君之祖也とあり　〇知乘船事、知は原本智に作る諸本に據て改む　〇兄二人、狩谷氏曰兄下恐脫弟字　〇百濟國人也、原本此下に癸亥兵部省云々の三十二字あり元年十一月紀に出でたれば彼を存して此を削る尙ほ此下に丁亥、丁酉、戊戌、己亥の四條あり何れも上文十月の條に移す　〇木工寮置寮掌二員、此八字類史百七に據て補ふ　〇庚午、此條類史百五十九に據て補ふ但類史庚午を庚子に作る誤なれば改む

(十二月)楓里第、山城志に桂別墅在葛野郡桂村(今同郡桂村上桂下桂)原本第を弟に作る宮本及類史に據て改む
○卿雲、卿は原本慶に作る諸本及類史紀略に據る
○奉覽、奉は原本奏に作る諸本及類史紀略に據る
○借遣唐使位、原本借を授に作り使位の二字なし閣本西本宮本等に據て補ふ借位は外國に使するに就きて假に授るなり
○前爲大宰大貳、弘仁十三年三月廿日なり
○續命院、大宰府の南廓にあり
○至疾病纏身、至疾の二字は宮本及格に據て補ふ
○官司、司は原本舍に作る宮本及格に據て改む
○主家、主は原本王に作る諸本及格に據て改む
○忌死之人、忌は原本惡に作る西本に據て改む
○十而七八矣、八は原本也に作り諸本九に作る宮本及格に據て改む
○十四町、四は宮本及格に據て補ふ
○以擬飢病、格(前田本)擬を救に作る是なるべし
○公力、公は原本心に作

○十二月辛未朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、先是右大臣淸原眞人夏野、在楓里第、見五彩卿雲、是日以其圖畫、幷相共見人姓名奉覽、且効慶賀之誠、左右近衞府遞奏音樂、既而賜見參親王以下五位已上祿、各有差、○壬申、借遣唐使位、大使從四位上藤原朝臣常嗣正二位、副使從五位上小野朝臣篁正四位上、並大臣口宣、不授告身、○癸酉、故參議刑部卿從四位上小野朝臣岑守、前爲大宰大貳、時建續命院一處、以備往來之舍宿、但不藉公力、恐不得長存、乃叙本意、具修解文曰、管九國二嶋之民、或公或私、往來相續、其求輕者、暫經時月、其事重者、竟歲始還、客宿於府倉之下、賃寄於閭閻之間、若至疾病纏身、手足不隨、官司督察、非養病之處、主家爭趁、皆忌死之人、遂使露臥道路、暴死風霜、縱有時得痊愈、亦以飢寒死者、十而七八矣、見其如此、心深救恤、聊建續命院一處、檜皮葺屋七宇、鼎一口、墾田百十四町、以擬飢病、有志無力、庶幾萬一、地隔人遠、執撿難周、轉以屬人、更增疎廢、若遂不因公力、恨心願之徒已、伏望、令府監或典一人、及觀音寺講師、勾當其事、相替之日、一事已上、皆依實勘附、若

不加修理、令致破損、及非法費用之類、並以官法論、未及上聞、岑守物故、其家就大臣、追以陳請、勅報曰、思撫黎旼、不忘鑒寐、宇縣敻遠、无聞控告、見此奬納、爰知忠槩、宜速令所司俾允所請、勾當之官、遷替之日、與奪解由、一准國司、○甲戌、夷俘出境、禁制已久、而頃年任意入京、有徒、仍下官符、譴責陸奥出羽按察使幷國司鎭守府等、左中弁從四位下笠朝臣仲守卒、○壬午、尾張國日割御子神、孫若御子神、高座結御子神、惣三前奉預名神、並熱田大神御兒神也、○甲申、奉授阿耶賀大神從五位下、此神坐伊勢國壹志郡、○乙酉、行幸芹川野遊獵、○丙戌、四天王寺十禪師、進梵釋常住兩寺僧、每年一口、預宮中金光明會聽衆、○庚寅、聖上始於清涼殿、限三夜裏、禮拜佛名經、○能登國言、旱疫相仍、人民飢苦、賑給之、○壬辰、天皇幸神泉苑、放隼拂水禽、○乙未、以參議從四位上藤原朝臣常嗣爲兼左大弁、近江守如故、云云、

續日本後紀卷第四

る格に據て改む
○徒已、徒は原本從に作る諸本及格に據て改む
○勸附、附は原本謝に作る諸本及格に據て改む
○奬納、奬は原本非に作る諸本及格に據て改む
○宜速令所司、宜字は宮本及格に據て補ふ
○解由、由は原本田に訛れる在諸本及格に據る
○按察使、使字は諸本及類史百九十に據て補ふ
○日割御子神云々、神名式尾張國愛智郡日割御子神社（名神大）孫若御子神社（名神大）高座結御子神社（名神大）日割御子神は熱田神宮南八劍神社の東に、孫若御子神は神宮境内に、高座結御子神は神宮の北十町幡綾村に坐す
○奉預名神、奉は原本擧に作る諸本に據て改む
○阿耶賀大神、神名式伊勢國壹志郡阿射加神社（名神大）、祭神猨田彦神、同郡阿坂村
○丙戌、此條類史百七十七に據て補ふ
○聖上、原本主上とす諸本及類史紀略に據て改む
○旱疫、疫は原本疲に作る諸本及紀略に據て改む

○承和、此二字は宮本水戸校本に據て補ふ
【承和三年】御杖、剛卯杖なり倭訓栞に正月上卯日桃梅椿柳などにて杖を作り五色の糸にて卷きて大やけに奉る也建武年中行事に作物所生氣の方獸のすがたを作りて卯杖をおはす云々さあり尙ほ公事根源・延喜式・內裏式・江次第等に詳なり
○時宗王、及大縣王の二の王字は諸本及類史九十九に據て補ふ
○弟綱王、原本弟を第に作る諸本及類史に據て改む
○正五位上源朝臣寛、諸本及類史に五を六に作るは非なり
○淸貞、貞は原本眞に作る宮本及類史に據て改む
○英多麻呂、英は原本美に作る諸本及類史に據て改む抄郡鄕部に河內國河內郡英多鄕をアガタさ訓めば此例にてよむべし
○木連、連は蓮に作るべきなり
○外從五位下廣宗宿禰、從は原本正に作る宮本に據て改む
○藤原朝臣俊繼、朝臣の

續日本後紀卷第五

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

起承和三年正月盡十二月

(丙辰)三年春正月辛丑朔、天皇御大極殿、受羣臣朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、○癸卯、(三)天皇御紫宸殿、皇太子獻御杖、是日天皇拜賀先太上天皇及太皇太后於嵯峨院、○丁未、(七)天皇御豐樂院、宴百官於朝堂、詔授從四位上藤原朝臣常嗣正四位下、无位時宗王從四位下、從五位上大縣王正五位下、正六位上弟綱王、愛宕王、並從五位下、正五位上源朝臣寛從四位上、正五位下坂上大宿禰淨野、藤原朝臣長良、安倍朝臣安仁、並從四位下、從五位上丹墀眞人清貞、小野朝臣篁、並正五位下、從五位下藤原朝臣眞主、丹墀眞人興宗、安倍朝臣濱主、石川朝臣英(アガ)多(タ)麻呂、良峯朝臣木(イタ)連(ビ)、橘朝臣峯繼、並從五位上、外從五位下廣宗宿禰糸繼、紀朝臣國守、正六位上藤原朝臣吉繼、藤原朝臣俊繼、文室朝臣笠科、紀朝

二字は類史に據て補ふ
○綱雄、綱は原本細に作る諸本及類史に據て改む
○天足、足は原本定に作る諸本及類史に據て改む
○且還御紫宸殿以禮佛、原本且下に以字あり類史に據て削り以禮佛の三字は水戸校本及類史に據て補ふ
○數子、數は原本敎に作る閣本西本宮本中本等に據て改む
○穎子、穎は原本額に作る閣本西本中本等に據て改む
○刑部卿、卿は原本鄕に作る閣本に據て改む
○延祥、元亨釋書卷三に傳あり
○勳十等、勳は原本動に作る閣本西本に據て改む
○永刀自、類史卌一に永貢の二字に作る
○八溝黃金神、神名式に陸奧國白河郡八溝嶺神社とある是なり今常陸國久慈郡上野宮村にあり
○沙金、原本沙を砂に作る紀略に據て改む和漢三才圖會金類に沙金所謂麩金是也、麩金卽如沙屑在江沙水中淘汰而得其色淺黃云々と見ゆ

臣綱雄、橘朝臣千枝、橘朝臣起奈理、藤原朝臣板野麻呂、淡海眞人眞淨、清瀧朝臣河根、大原眞人宗吉、大中臣朝臣天足、並從五位下、正六位上蕃良朝臣弟主、山田宿禰古嗣、住吉朝臣氏繼、御船宿禰清風、物部首廣國、並外從五位下、賜祿有差、○（八）戊申、天皇御大極殿、聽講最勝王經、且還御紫宸殿、以禮佛、授從五位下安倍朝臣室子、三原朝臣數子、並從五位上、无位紀朝臣清子、橘朝臣穎子、丹墀眞人冬子、並從五位下、○（十一）辛亥、以四品忠良親王爲上總大守、從四位下藤原朝臣長良爲右馬頭、云云、正四位下源朝臣弘爲兼美作守、刑部卿如故、云云、○（十四）甲寅、最勝會竟、引其講師及僧綱等、論義殿上、於是勅以元興寺傳灯大法師位延祥法師任權律師、○（十七）丁巳、天皇御豐樂殿、觀大射、○（二十）庚申、內宴於仁壽殿、以詩興爲先、同賦理殘粧之題、訖賜祿、是日叙從七位上飯高宿禰全繼子外從五位下、○（廿二）壬戌、天皇幸神泉苑遊賞、賜見參五位已上祿、叙无位飯高宿禰永刀自外從五位下、云云、○（廿五）乙丑、詔奉充陸奧國白河郡從五位下勳十等八溝黃金神封戸二烟、以應國司之禱、令採得沙金、其數倍常、能

助遣唐之資也、〇（廿八）戊辰、天皇幸神泉苑、放隼拂水禽、〇二月庚午朔、廢務、
爲遣唐使祠天神地祇於北野也、〇（七）丙子、遣唐使奉幣帛賀茂大神社、
是日以從四位上藤原朝臣文山爲內藏頭、云云、從四位下橘朝臣氏人
爲大藏大輔、云云、正四位下菅原朝臣淸公爲兼但馬守、左京大夫文章
博士如故、云云、〇（九）戊寅、天皇御紫宸殿、引見遣唐大使副使等、參議右近
衞大將橘朝臣氏公降殿宣詔、云云、其詞書筋、無黃紙文、賜祿有差、大使綵帛百疋、貲
布廿端、副使綵帛八十疋、貲布十端、判官幷准判官各綵帛十五疋、貲布
六端、錄事綵帛十疋、貲布四端、知乘船事譯語各綵帛五疋、貲布二端、還
學僧各綵帛十疋、和泉國人遣唐使准錄事縣主益雄、父散位文貞等、賜
姓和氣宿禰、又改本居貫附右京二條二坊、〇（十三）壬午、天皇幸神泉苑放鶺
隼、山城國綴喜郡空閑地四町、賜掌侍從五位上大和宿禰舘子、河內
國丹比郡荒廢田十三町、充皇太后宮後院、古市郡空閑地四町、賜繁子
內親王、〇（十七）丙戌、於八省院、賜遣唐使史生已下將從已上位記、〇（十九）戊子、先
太上天皇遊獵河內國交野、〇（二十）己丑、天皇幸神泉苑放隼、愛其逸氣橫生、

〇戊辰、辰は原本戌に作る宮本及紀略に據て改む
〇天皇幸神泉苑、天皇の二字は類史に據て補ふ
（二月）廢務、諸省職寮等の事務を廢するを云
〇祠天神地祇於北野、使を蕃國に遣す時神祇を祀ること臨時祭式に見ゆ
〇（注）其詞書筋云々、內記式に凡宣命文者、皆以黃紙書之とあり筋に書くとは筋紙に書きしなるべし
〇貲布、抄布帛部に貲布漢語抄云佐與美乃沼能とあり既に注す
〇譯語、原本譯を訣に作る諸本に據て改む
〇還學僧、山崎校本に還恐遊とあり纂詁遣に作る
〇益雄父、原本父を文に作る閣本西本尾本に據て改む
〇丹比郡、古市郡と共に今南河內郡に入る
〇繁子內親王、紹運錄に嵯峨天皇皇女依嬰病爲尼母文屋氏と見ゆ
〇將從、原本將を侍に作る閣本中本谷本に據て改む
〇交野、原本交を郊に作る宮本に據て改む交野は

交野郡（今北河內郡に入る）にあり
○愛其逕氣橫生、原本愛を受に橫を摸に作る愛は諸本及紀略に據り、橫は水戸校本及類史卅一に據て改む
○正六位上百濟王慶苑、正六位上の四字は類史九十九に據て補ふ慶は原本度に作るを諸本及類史に據て改む
（三月）算師、蒲生氏職官志に算師置未詳其始延喜木工式此准二寮算師二寮謂主計主税とあり
○彌繼、原本彌を弘に作る閣本西本尾本等に據て改む
○八戸史、錄河內諸蕃に八戸史後漢光武帝孫章帝之後也とあり
○職分資人、既に注す
○尸素、尸位素餐なり
○外從五位下飯高宿禰、全雄は天長十年三月（一一頁）從五位下に叙せらるゝこと見えたれば外字は衍なるべし
○弟高、諸本矛高に作る
○右少史、庚戌條には左大史とあり
○正六位上坂本臣、正六

麑則應機、招則易呼。是日授无位百濟王永琳從五位下。○癸巳[廿四]、授正六位上百濟王慶苑、百濟王元仁、並從五位下。（元仁是婦人也）○戊戌[廿九]、伊勢國飢、賑給之。○三月庚子朔、天皇御紫宸殿、賜侍從已上酒、具醉而罷。○壬寅[三]、木工寮算師八戸史礒益、同姓彌繼等廿人、賜姓常澄宿禰、其先高麗人也。○甲辰[五]、天皇御前殿、授无位藤原朝臣方子從四位下云云、以從五位下藤原朝臣泉子爲掌侍云云、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、請返上職田職分資人雜色考人衞士、以避尸素之譏、助國用之費、不許。○丙午[七]、左京人外從五位下飯高宿禰全雄、外從五位下同姓弟高等五烟、改宿禰賜朝臣。讃岐國人右少史正六位上坂本臣鷹野、請除讃岐之籍帳、復和泉舊墟、許之、其去就由、具于古記。○庚戌[十一]、是中旬之初也、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、至御床之下、促（モヨホノ）侍臣座、令以圍碁且彈琵琶、日斜酒罷、賜大臣御衣。是日左大史正六位上坂本臣鷹野等十三人、改臣賜朝臣、建內宿禰男紀角宿禰之後也。○辛亥[十二]、地震。○壬子[十三]、授造西寺勾當僧九口位各一階、但傳燈住位明遠二階。○癸丑[十四]、授擬遣唐僧傳燈法師位俊貞等

は原本從四に作る宮本及下文に據る又臣字は尾本宮本及下文に據て補ふ
○和泉舊墟、抄和泉國和泉郡坂本郷あり此地なるべし
○紀角宿禰、原本角を伊に作る諸本に據て改む
○壬子、此條宮本及類史百八十五に據て補ふ
○造西寺勾當、西寺は九條坊門南にあり東寺と對峙す勾當は寺務を司る人
○癸丑、此條も亦宮本及類史百八十五に據て補ふ
○丙辰、此條原本戊午の次にありしを干支を推して此に移せり
○右近衛、右字は閣本西本尾本に據て補ふ
○百濟國人也、原本此下に下總國人以下貫附左京二條に至る四十字あれど已に二年三月辛酉紀に出でたれば宮本に據て削る
○大錄、原本大丞に作る閣本西本中本に據て改む
○四條三坊、四條の上に某京の二字あるべし
○陸奥俘囚、以下以勳功足勸也に至る四十字類史百九十に據て補ふ
○以山城國願安寺云々、此十一字類史百八十に據

八口位各一階。○丙辰、大和國山邊郡荒廢田十町、賜宗康親王。○戊午、外從五位下大判事明法博士讃岐公永直、右少史兼明法博士同姓永成等合廿八烟、改公賜朝臣。永直是讃岐國寒川郡人、今與山田郡人外從七位上同姓全雄等二烟、改本居貫附右京三條二坊。永直等遠祖、景行天皇第十皇子神櫛命也。○己未、尾張國飢、賑給之。○辛酉、能登史生馬史眞主、右近衛同姓貞主等、賜姓春澤史。其先百濟國人也。○甲子、山城國人式部大錄秦宿禰氏繼、改本居貫附四條三坊。陸奥俘囚外從八位上勳五等吉彌侯部於加保、勳九等伴部子羊等、並授外從五位下。以勳功足勸也。○乙丑、石見國飢、賑給之。以山城國願安寺、爲眞言院。○己巳、飛驒國人散位三尾臣永主、右京史生同姓息長等、賜姓笠朝臣。貫附右京五條二坊。永主稚武彦命之後也。伯耆國人陰陽師宍人首玉成賜姓春苑宿禰。國宰天皇第一皇子大彦命苗裔也。○夏四月戊寅、遣唐使於八省院朝拜。天皇不御。例也。但大臣已下參議以上、各在其位。一如天皇視告朔之儀。○癸未、散位從四位下藤原朝臣眞川卒。○乙酉、天皇

て補ふ願安寺は所在詳ならず
○己巳、山崎校本に按長曆以三月爲小以四月爲大朔己巳與本史不合據本史則三月大四月小朔庚午戊寅九日也といひ纂詁には長曆に據て己巳を四月朔と改めたり
○笠朝臣云々、姓氏錄と合へり閣本西本中本等朝字なし宮本は原本に同じ
○稚武彥命、稚は原本雅に作る諸本に據て改む
○宍人首、宍は原本吳に作る諸本に據て改む
○賜姓春苑宿禰、姓字は例に據て補ふ
○國牽天皇、原本國牽を允恭に作る國は諸本に據り牽は宮本水戶校本に據て改む孝元天皇の御謚號を大日本根子彥國牽天皇と申し奉る
(四月)夏四月、宮本己巳を朔とすれど姑く原本に據て庚午を朔とし日數を注す
○藤原朝臣眞川卒、原本眞を直に作る閣本西本宮本及類史に據て改む
○永名權爲內藏頭、原本名の字を脫し權を雄に作る諸本に據て補ひ改む

御紫宸殿、閱覽賀茂祭使等鞍馬調飾幷從者容儀、賜使等祿、以播磨守從四位下橘朝臣永名權爲內藏頭、令供祭使、○丙戌(十七)、散位從四位下甘南備眞人高直卒、天渟名倉太玉敷天皇(敏達)之後、六世正五位下清野之第三子也、父清野、自文章生、任大內記、遷大學大允、寶龜年中、遣唐判官兼播磨大掾、歸朝之日、叙正五位下、任肥前守、遷兵部少輔武藏介、延曆十三年卒、高直身長六尺二寸、少爲文章生、能屬文、巧琴書、廿三年任少內記、大同元年歷大宰少監、西海道觀察使判官、弘仁之初、頒□左右近衞將監、六年叙從五位下、累任陸奥上野介、天長三年除常陸守、遭訪採使、緣前司犯、被停釐務、吏民感其德化、競遺資用、嵯峨太上天皇、復垂眷憐、便以莊家、物、任其所須、至六年、任攝津守、仁明天皇踐祚之初、叙正五位、尋授四位、明年居親母喪、殆至滅性、不幾而卒、年六十二、○辛卯(廿二)、備中國飢、賑給之、○壬辰(廿三)、天皇御紫宸殿、賜餞入唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁等、命五位已上、賦賜餞入唐使之題、于時大使常嗣朝臣欲上壽、先候進止、勅許訖、常嗣朝臣避座而進、喚采女二聲、采女擎御盃、來授

○天渟名倉、原本渟を停に作る柳本に據て改む
○叙正五位下、下字は宮本水戶校本に據て補ふ
○廿三年、原本廿二に作る諸本及類史に據て改む
○類口左右近衞、口は類史に據て補ふ
○便以莊家物、原本便を使に作る閣本柳本中本及類史に據て改む莊家は上皇の莊園なり
○叙正五位尋授四位、堀本には叙正五位上尋授從四位下とすと云蓋私意を以て補へるなり下旬年上に時字を補へるも亦同じ
○入唐使、使字は紀略に據て補ふ
○上壽、漢書叔孫通傳に上壽觴九行とあるに出づ壽觴を上ることにて今の乾盃に同じ
○先候進止、進退と云ふが如し上壽の御聽許を請ふを云
○唱平、錦所談に唱平は人に酒をすゝむるに其人の酒量に應じ平均に飲むべしと云義なるべしとあり宮本には平を壽に作る
○還座、座は原本坐に作る諸本に據て改む
○赤絹被、被上に御字あ

陪膳采女、常嗣朝臣跪唱平、天皇爲之擧訖、行酒人進賜常嗣朝臣酒、卽跪受飲竟、降自南階、拜舞還座、既而群臣獻詩、別有御製、大使賜而入懷、退而拜舞、賜大使御衣一襲、白絹御被二條、砂金二百兩、副使御衣一襲、赤絹被二條、砂金百兩、各淵醉而罷、○甲午、頒奉幣帛五畿內七道名神、爲有遣唐使事也、加賀國飢、賑給之、○丁酉、賜入唐使節刀、大臣口宣曰、天皇我大命良万止、遣唐國使人爾詔大命乎、聞食止詔布、大使共稱唯、今詔久波、藤原常嗣朝臣、小野朝臣篁、今汝等二人乎、遣唐國者、今始氐遣物爾波不在、本來朝使其國爾遣之、其國與利進渡祁里、依此氐使次止遣物曾、悟此意氐、其人等乃和美安美應爲久相言部、驚呂之伎事行奈世曾、亦所遣使人判官已下、有犯死罪已下者、順罪氐行止之氐、節刀給久止詔大命乎、聞食止宣布、賜大使副使各御衣被、遣唐醫師山城國葛野郡人朝原宿禰岡野、改本居貫附左京四條三坊、○戊戌、授遣唐判官外從五位下長岑宿禰高名從五位下、无位滋野朝臣繩子正五位下、无位菅野朝臣淨子從五位下也、淨子是遣唐大使藤原朝臣常嗣母氏、故准舊例叙之、遣

るべきか
○淵醉、深く醉ふを云
○大臣口宣曰、續紀寶龜七年四月壬申遣唐使に節刀を賜ふ詔を參考すべし
○聞食止詔布、原本聞上に衆字あり閣本柳本西本等に據て削る
○大使共稱唯、狩谷氏云此五字宜分行小字按に遣唐使に宣る詔なるが故に衆とは云はす聞食止宣と云を承る使人唯（ヲ、）と稱す例なるべし
○藤原常嗣朝臣、かく名を先にし姓を後に書けるは令制（公式）三位以上先名後姓とあるによれるなり
○使次止遣物曾、原本止を爾に作る諸本に據る
○應爲久、原本久を氐に作る諸本に據て改む
○鷲呂之伎、伎は原本岐に作る柳本西本に據る
○事行奈世曾、原本奈の下に者字あり諸本に據て削る
（五月）己亥朔、此三字宮本に據て補ふ
○垂緡、緡は釣糸
○陶暑、陶は淘に通す滌也
○伊波比主命、下總國香

唐錄事高岑宿禰貞繼、改宿禰賜朝臣、其先高麗人也、○五月己亥朔、庚子、授无位小野神從五位下、依遣唐副使小野朝臣篁申也、山城國人遣唐史生大宅臣福主、改臣賜朝臣、○辛丑、天皇御神泉苑釣臺、且以垂緡、且以陶暑、兒參五位已上、不論侍從非侍從、皆賜祿、○癸卯、天皇御武德殿、閱覽四衞府馬射、及五位已上所貢走馬、勝負、○甲辰、亦御同殿、觀種種馬藝、○丁未、奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位、常陸國鹿嶋郡從二位勳一等建御賀豆智命正二位、河內國河內郡從三位勳三等天兒屋根命正三位、從四位下比賣神從四位上、其詔曰、皇御孫命爾坐、四所大神爾申給波久、大神等乎彌高爾彌廣爾仕奉止奈毛思保志食、是以件等冠爾上獻狀乎、中務少輔從五位下藤原朝臣豐繼、內舍人正六位下藤原朝臣千葛等爾、令捧持氐奉出事乎申給久止申、辭別氐申給久、神那我良母皇御孫之御命乎、堅磐爾常磐爾護奉幸閇奉給部、又遣唐使參議正四位下藤原朝臣常嗣乎、路間无風波之難久、慈賜比矜賜比天、平久可太良可爾歸之賜倍止稱辭定奉久止申、是日勅、去歲冬雷、恐有水害

取郡香取神宮の祭神
○建御賀豆智命、常陸國鹿嶋郡鹿嶋神宮祭神
○河內國、此三字宮本に據て補ふ
○天兒屋根命、河內國河內郡枚岡神社祭神
○比賣神、兒屋根命の妃天美豆玉照比賣命を云景雲二年四神を大和三笠山に遷祀し春日四所大神さ申す
○從四位上、上字は諸本に據て補ふ
○四所大神、大は原本太に作る諸本に據て改む
○上獻狀乎、乎は原本爾に作る諸本に據て改む
○千葛、葛は原本万に作る諸本に據て改む
○皇御孫之御命乎、乎は諸本に據て補ふ
○常嗣乎、嗣下に等字あるべきか
○可太良可、堅固らかにてすこやかにの意
○稱辭定奉久止、原本稱を禰に久を之に作る稱は閣本柳本中本西本に據り久は諸本に據て改む定は狩谷氏の說に竟の誤なるべしさ云其意にて訓べし
○冬雷、原本冬雪に作る諸本に據て改む

疫氣之災、宜於東大寺眞言院、建立灌頂道場、置廿一僧、夏中及三長齋月、修息災增益之法、以鎭國家、永爲恒例、○戊申、便附聘唐使、贈遣往歲銜本朝命入唐使并留學等、在彼身歿者八人位記、以慰幽魂、其詔詞曰、故入唐大使贈正二位藤原朝臣清河可贈從一品、昔膺帝簡、遠効皇華、不利歸帆、還苦漂梗、終在殊域、俄從閱川、睠彼云亡、良深嗟悼、宜加異代之寵、以申追遠之恩、故留學問贈從二品安倍朝臣仲滿大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞北海郡開國公贈潞州大都督朝衡可贈正二品、身涉鯨波、業成麟角、詞峰聳峻、學海揚漪、顯位斯昇、英聲已播、如何不憖、莫遂言歸、唯有掞天之章、長傳擲地之響、追賁幽壤、既隆於前命、重叙崇班、俾洽於命詔、故入唐使贈從四品下石川朝臣道益可贈從四品上、忘軀徇節、奉使先朝、履義賫忠、修聘唐國、路嘗艱苦、泊遘沉痾、未達於中京、奄淪於下穸、興言及此、追以悼傷、傳道靈芝、產兮墳裏、蓋由幽感、克致之歟、宜錫寵章、式旌泉壤、故入唐判官贈從五品下紀朝臣馬主可贈從五品上、故入唐判官從五品下勳十二等田口朝臣養年富可贈從五品

上、餘如故、入唐判官從五品下甘南備眞人信影可贈從五品上、故入唐判官贈從五品下紀朝臣三寅可贈從五品上、故入唐判官從七品下掃守宿禰明可贈從五品上、馬主以下至明五人位記、共用同詞、徃參高還、出使大邦、俄淹泉臺、不歸本土、仁惻念舊、彝典无愆、義不忘勞、朝章斯在、宜申寵渥、用慰亡魂、是日以傳灯大法師位實惠爲律師、○己酉、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣愛發上表曰、云云、○庚戌、鶯鶩飛來、双集辨官東廳南端、是日、右近衛中將從四位下藤原朝臣助銜勅語、向攝津國難波海口、慰勞聘唐使發遣、其宣命曰、天皇詔旨良麻止宣大命乎聞食止宣、大使藤原常嗣朝臣等、奉命氐退罷以來、幾日母經須在禮止、旅情波遠志近志止波不言、苦之久在良牟止奈母所念行須、又遠出退良須在間波、心良母慰米遣給、路間母无恙久珍重久、退出今日乃己止、變顏容世須、早還參來止之氐奈母、御酒肴賜久止勅大命乎、聞食止宣、○辛亥、右少弁藤原朝臣當道、於濱頭、稱揚太政官宣曰、遣唐使判官以下、爲國家爾有犯事者、隨罪輕重、死罪以下科決止志氐、大使主小使主爾、節刀給部理、諸知此

○灌頂道場、道字は諸本及類史紀略に據て補ふ
○三長齋月、釋氏要覽に不空羂索經云諸佛神通之月と見え又涅槃經に年常三長月恒六齋蔬菜節味とあり正五九月を云
○增益、東大寺要錄に延命に作る
○留學、此下に生字あるべきなり
○入唐大使、大は閣本西本柳本及紀略に據て補ふ
○正二位、紀略位を品に作る
○藤原朝臣清河、續紀寶龜十年二月乙亥に傳見ゆ
○從一品、紀略品を位に作る從二品の條亦同じ
○昔膺帝簡云々、帝簡は尙書に惟簡在上帝之心とあるに據れり簡拔せられて異朝に使し皇威を海外に播けるを云
○還苦漂梗、漂梗は駱賓王晚度天山詩に旅思徒漂梗と見ゆ
○閼川、天長十年三月乙卯紀(一四頁)に出づ
○睠彼云亡、睠は原本勝に作る閣本柳本尾本西本に據て改む云は語助の辭
○仲滿、續紀仲麻呂に作り唐書日本傳此に同じ

○右散騎、唐書右を左に作る
○門衛、原本衛を衛に作る閣本柳本尾本に據る
○身涉鯨波、大洋を渡るを云
○業成麟角、北史文苑傳に學者如牛毛、成者如麟角とあるに出づ稀に見る學術の修得者なるを云
○如何不憖、毛詩小雅十月之交章に不憖遺一老、箋に心不欲自彊之辭也とあり
○掞天之章、文選蜀都賦に摛藻掞天庭、注に摛猶發也掞猶蓋也とあり
○擲地之響、晉書孫綽傳に綽嘗作天台山賦辭致甚工以示范榮期云卿試擲地當作金石聲也とあり此二句仲麻呂の詞藻文章の雄麗なるを形容せり
○隆於前命、曩に從二位を贈れるを云
○俾洽於命詔、洽は原本恰に作る閣本柳本中本等に據て改む命は纂詁諸本に據れりさて今に改むれど諸本何れも原本に同じ
○石川朝臣道益、紀略に延曆廿年八月庚子從四位下藤原葛野麻呂爲遣唐

狀、謹勤仕奉止宣、是日使等駕舶、○壬子、四船共解纜發去、○癸丑、以治部卿三品阿保親王爲宮內卿、上野大守如故、宮內卿正四位下安倍朝臣吉人爲治部卿、參議從四位上朝野宿禰鹿取爲民部卿、云云、參議從四位上民部卿朝野宿禰鹿取上表曰、臣屈計年算、頽仄已臻、當褫朝章、實有期矣、而今嚴旨忽降、以臣拜民部卿、恩貸不訾、懼慙惣萃、臣華顚朽叟、苦羸頓至、於劇官不堪自審、加以臣見中納言從三位藤原朝臣愛發抗表、以茲顯職、讓于愚臣、其文曰、鹿取智涉古今、此詞尤紕、臣器所乖、捫己多慙、竪毛何息、古之人士、不處空名、況臣之庸虛、豈須不避、再三惟忖、無或可安、伏望還收恩詔、免臣憂負、不許、○丙辰、夜裏大風暴雨交切、折樹發屋、城中人家、不壞者希、斯時入唐使舶寄宿攝津國輪田泊、遣看督、近衛一人於舶處、河水汎溢不得通行、更遣左兵衛少志田邊吉備成、問其安危、播磨國神埼郡荒廢田卅三町賜宗康親王、○丁巳、河內國人散位鴨部船主、武散位同姓氏成等、賜姓賀茂朝臣、速須佐之雄命之苗裔也、○戊午、地大震、○庚申、爲遣唐使奉山階(天智)、田原(光仁)、柏原(桓武)、神功皇后等

陵幣帛曰、天皇大命以、掛畏岐山階御陵爾恐美恐美毛申賜部止白久、參議正四位下藤原朝臣常嗣等乎爲大使氐、遣唐國使人止母、路間無風波之難久、慈賜比矜賜比氐、平久可太良可爾歸志賜止志氐、參議從四位上文室朝臣秋津、常陸權介正五位下永野王、內舍人正六位上良岑朝臣清風等乎差使氐、恐美恐美毛申賜久止申、○壬戌、東西兩京人民病苦、賑給之、○癸亥、以平城京內空閑地二百卅町、奉充太皇太后朱雀院、○甲子、皇太子入朝、問安而退、中使出傳勅答、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守、正三位行中納言藤原朝臣吉野、從三位藤原朝臣愛發、權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房、從四位下行勘解由長官藤原朝臣雄敏等上表言、臣聞、順風呼者易爲氣、因時行者易爲力、今之所祈、蓋此之謂矣、故左大臣贈正一位藤原朝臣冬嗣、情深謙挹、義貴能施、遂乃折割食封千戶、貯收於施藥勸學兩院、藤原氏諸親絕乏者、同氏子弟勤學之輩、量班與之、但封邑之賞、人歿則已、所以買置田業、散在諸國、創業之始、壞利所輸、不須督促、全入

大使一從五位下石川朝臣道益爲副、また廿四年七月壬辰故副使從五位上道益贈從四位下、道益頗有才幹美於風儀、卒於大唐明州、朝庭惜之、卒時四十三とあり

○下歿、墓穴なり

○追以悼傷、原本追を進に作る閣本中本宮本尾本等に據て改む

○導道、道は原本導に作る宮本水戸校本に據る禮記大學の注に道は言也とあり

○養年富可贈、贈字は水戸校本に據て補ふ

○餘如故、恐くは誤脫あらむ

○信影可贈從五品上、原本信を言に、品を位に作る諸本に據て改む信影は延曆廿四年七月壬辰遣唐使判官となる

○從七品下掃守宿禰、七は五の誤なるべし

○本土、原本本大に作る宮本水戸校本に據る

○仁側、原本仁則に作る宮本に據る孟子公孫丑上篇に惻隱之心仁之端也とあり

○實惠、原本實を闕に作る諸本に據て改む惠は水作

院稟、大臣歿後、巧遲多端、合輸不輸、十而八九、此則物色非公、人情不畏、州縣僻遠、按覈不由之所致也、伏以臣因舊績、永錫功封、悠悠眇身、靡不沾澤、夫毀家益國、臣節攸先、以此拜章、血誠奉返、於是遑恩者戢翼、赴賞者反蹤、憑力大臣、理固宜然、而墳土未乾、陵遲儵及、在於生者、不忍緘呑、伏冀乾慈殊賜接援、下知國司、令加撿送、然則勢易於走丸焉、事同於轉圓矣、擾公之妨細、而濟物之矜大也、緬彼幽魂、戴光寵於窀穸、凡厥眷屬、陶寶化而俯仰、詔報曰、情切仁義、事憑興復、宜依來請助彼周急焉、賜信濃國小縣郡公田十二町、彈正尹秀良親王、

戸校本慧に作る元亨釋書三に寶慧傳あり　○辨官東廳、辨官廳は太政官の東西にあり東廳はた辨官の廳なり東は原本なし諸本惠に作るは東字の訛なり故に之を補ふ　○慰米、原本米を未に作る諸本に據て改む　○御酒肴、原本肴を有に作る諸本に據て改む　○濱頭、難波津の海門御津埼なり　○爲國家爾有犯事者、纂詁に按爾有閒蓋有脫字也宜補丹誠乎竭世若等數字とさ云り　○大使主小使主、大使副使をかく記せり古語なるべし　○知此狀、原本知を如に作る諸本に據て改む　○解纜、抄舟車部に纜考聲切韻云纜（度毛豆奈）維舟索也とあり　○鹿取爲民部卿、鹿字は諸本に據て補ふ　○頽仄、頽齡仄景なり補任に據るに鹿取此時年六十三　○當禮朝章、禮は原本諸に諸本禮に作る水戸校本に據て改む禮朝章とは官儀を謂ふ事なり　○不眥、眥は量也　○華顛朽叟、華顚は白髮、朽叟は老翁なり原本華顚を萃顚に作る閣本柳本に據る但し諸本顚を顛に作るは訛なり故に之を改む　○苦羸頻至、苦み疲るゝことの卒に至るなり　○於閑官、於上に脫字あるべし　○愛發抗表、己酉條に愛發上表曰云々とある是ならむ　○讓于愚臣、于は原本兮に作る誤なれば改む　○智涉古今、智は原本知に作る諸本に據る　○尤觥、後漢書儒林傳注に觥栗不成喩義之乖僻也とあり誤れるを云　○摽已、摽は摸也はかるなり　○催忖、原本催を推に作る諸本に據て改む催は思也忖は度也　○夜裏、原本裏を暴に作る諸本に據て改む　○發垂、原本發を廢に作る諸本に據て改む　○輪田泊、原本泊を湶に作る紀略に據て改む古への務古兵庫津の別名なり　○看督、撿非違使廳に看督長六十六人あり諸國貢遺に充つ　○問其安危、原本問を取に、安危を完の一字に作る問は尾本に據り安危は閣本柳本水戸校本及紀略に據て改む　○宗康親王、仁明天皇皇子　○武散位、武官の散位　○遠須佐之雄命、之雄の二字は伴イ本に據て補ふ　○地大震、原本大地震に作る諸本に據て改む　○朱雀院、拾芥抄中末に累代後院或號四條後院三條北朱雀西四町四條北面坊城東　○入朝問安云々、禮記文王世子に文王之爲世子朝於王季日三雞初鳴而衣服至於寢門外問內豎之御者曰今日安否何如內豎曰安文王乃喜及日中又至亦如之及莫又至亦如之　○從三位藤原朝臣愛發、私記に從三位上或云據補任當有中納言三字　○上表言、紀略言を曰に作る　○順風呼

者云々、此の二句鹽鐵論論功篇に出づ　○所祈、祈は求也　○謙挹、挹は通抑退也　○折割、原本割を剖に作る諸本に據て改む　○食封千戸、養令に左右大臣食封二千戸とあり其半を割て施藥勸學の料に充つるなり　○於施藥勸學兩院、於字は柳本及紀略に據て補ふ施藥院は拾芥抄中末に藥院唐橋南室町西云々、施藥院同所也東五條藤氏先祖申請諸國藥種養病人所也有使辨別當主典及外記爲別當とあり天平二年始て之を置き藤原氏の一人を別當とし東西悲田院の別當を兼ねしめ飢餓病疫疾の人々を救濟する所とす勸學院は同抄に三條北壬生西（一丁）藤氏學生住也とあり弘仁十二年藤原冬嗣藤氏の子弟を敎育せむが爲に之を設く　○勸學之輩、原本勸を勤に作る閣本柳本宮本に據て改む　○封邑之賞云々、祿令に四等の區別あることを見ゆ　○買置田業、田業は田地と云が如し業は財產田地の屬を云、閣本柳本業を立に作る　○壊利、原本壊利に作る閣本條本柳本等に據て改む　○破後、原本破を沒に作る今諸本に據て改む　○合輪、原本合を令に作る文意を撿へて改む　○物色非公、原本公を分に作る諸本に據て改む私領の地子にして公の物にあらざるを云　○人情不畏、諸本人を之に作る　○功封、原本封を賞に作る諸本に據て改む　○以此拜章、拜章に以此以下恐有錯誤と云り　○逸思者、私記に按逸浴平と云り　○陵遲繇及、忽ちに衰ふるを云　○纖呑、纂詁に呑疑口字之訛と云、或に纖呑聲の略にもあるべし隋書王孝籍傳に風霜侵骨髓安可齰舌緘脣吞聲飮氣と見ゆ　○勢易於走丸焉、漢書蒯通傳に猶如阪上走丸とあるに出づ　○事同於轉圓矣、孫子に如轉圓石于千仭之峯者勢也とあるに出づ原本圓を閣に作る諸本に據て改む　○窀穸、葬を云窀は原本宅に作る諸本に據て改む　○陶寶化、寶化は皇化に同じ陶に陶冶也化育の意、藤氏一門皇化に浴して聖德を仰ぎ奉るべしとなり　○情切仁義、原本切を功に作る諸本に據て改む　○周急、既に注す急迫せるものより先づ救濟するを云　○秀良親王、嵯峨天皇々子

○閏五月己巳朔、皇太子朝覲、是日以越中介從五位下石川朝臣越智人爲大膳亮、大膳亮外從五位下吉田宿禰高世爲越中介、○庚午、伯耆國飢、賑給之、○丙子、以西大寺僧傳灯大法師位慈朝爲律師、河內國人遣唐音聲長外從五位下良枝宿禰清上、遣唐畫師雅樂答笙師同姓朝生、散位春道宿禰吉備成等、改本居貫附右京七條二坊、○戊寅、右京人內藏大屬百濟連清繼、賜姓多朝臣、清繼誤負後父之姓、今有落葉歸根之請、右京人左衛門權少志大原史河麻呂、改史賜宿禰、河麻呂

（閏五月）閏五月、按に此月庚午以下錯簡多く原本戊寅（十日）丙子（八日）壬戌（五月廿四日）壬午（十四日）壬辰（廿四日）癸巳（廿五）辛巳（十三日）壬午（十四日）乙酉（十七日）丁酉（廿九日）庚午（二日）戊寅（十日）辛卯（廿三日）以上の如く列叙す今宮本及紀略に據て訂正す　○越智人、原本智を知に作る諸本に據て改む　○庚午、原本下文丁酉の次に亦同文重出す彼を削て此を存す　○丙子、此條原本戊寅の

次にありしを此に移す
○遣唐音聲長、大藏省式に見ゆ
○答笙師、原本答を笛に作る閣本柳本中本等に據て改む令集解所引亦同じ纂詁に凡笙合二六管一成レ聲故曰二合笙一合レ咊吹レ之故曰二合笙一後世冠レ竹作レ答レ答蓋本邦會意字さ云り
○多朝臣、錄左京皇別に見ゆる多朝臣さは同名異系なり
○後父、原本父を文に作る柳本宮本に據て改む
○萬葉歸根之請、岑參詩に隱几閉二吹葉一乘レ秋眺二歸根一さあり
○大原史、錄左京及右京諸蕃に見ゆ
○河内邑之先、河字は諸本に據て補ふ
○若狹薩摩云々、此十二字原本下文辛卯條の上にあり宮本に據て此に移す
○鄰穆、玉篇に穆は和也又與レ睦同さあり隣邦さ和睦するを云
○皇華、原本華を帝に作る柳本に據て改む
○巨唐、大唐さ云に同じ
○雖知利渉、利渉は易需卦に利レ渉二大川一疏に不

之先、百濟國人也」若狹薩摩兩國飢、並賑給、云云、○辛巳(十三)、恐遣唐使船、風濤或變、漂著新羅境、所以太政官准舊例、牒彼國執事、先告喩之曰、不渝舊好、鄰穆彌新、廼發皇華、朝章自遠、仍今遣使修聘巨唐、海晏當時、雖知利渉、風濤或變、猶慮非常、脫有使船漂著彼境、則扶之送過、不俾滯閼」因以武藏權大掾紀三津爲使、賫牒發遣、賜三津御被」是日大安寺僧傳灯大法師位惠靈俗姓名紀朝臣春主、叙正六位上、爲遣唐譯語、兼但馬權掾、○壬午(十四)、右京少屬秦忌寸安麻呂、造檀林寺使主典同姓家繼等、賜姓朝原宿禰」染作遣唐料雜物處(權用皇后宮廳)、帛一匹、忽隨飄風飛揚卌許丈、須臾墮侍從所、○乙酉(十七)、美濃國人主殿寮少屬美見造貞繼、改本居貫附左京六條二坊、其先百濟國人也、○辛卯(廿三)、改大和國人大宰大典正七位下神服連清繼本居、貫附右京、○壬辰(廿四)、左京人從五位下清峯宿禰門繼、改宿禰賜朝臣、○癸巳(廿五)、河內國人美濃國少目下村主氏成、散位同姓三仲等、賜姓春瀧宿禰、其先遠祖出自後漢光武帝之後者也、○丙申(廿八)、授遣唐留學元興寺僧傳燈住位常曉滿位、○丁酉(廿九)、奉貴布禰、丹生川上等

神幣帛也、是日大崇城中、○六月戊戌朔、能登國飢、賑給、太政官牒僧綱曰、奉勅、日者陰雨不降、陽旱擲旬、不有預愼、恐損秋稼、宜告東西二寺、幷十三大寺、畿內諸寺、轉讀經王、令祈甘雨、○癸卯、奉松尾、賀茂御祖、住吉、垂水等社幣、祈雨也、○戊申、天皇於神嘉殿視神事、○庚戌、地震、○壬子、山城國人右大衣阿多隼人逆足、賜姓阿多忌寸、○戊午、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、且令圍碁、天皇依炎熱、脫御靴、勅侍臣同亦脫之、喚相撲司鼓、令奏音樂、侍臣具醉、賜親王已下五位已上御衣被有差、○壬戌、美濃國席田郡空閑地七十町、賜宗康親王、近江國荒廢田十七町、加賀國百九十町、備前國空閑地卌四町、賜三品彈正尹秀良親王、○秋七月戊辰朔、天皇御紫宸殿、皇太子朝謁、賜侍臣酒、是月、元據頒曆爲小月、而更據七耀曆、改爲大月、又八月大改爲小月、九月小改爲大、十月大改爲小、時有曆博士二人、其執見不同也、議者討論、以七耀之說爲得、故改從之、○癸酉、以文章博士從五位下惟良宿禰貞道爲圖書頭、是日東方白虹見、○乙亥、天皇於神泉苑、觀相撲節、○丙子、御紫宸殿、覽相撲司音樂奏

患於險とあるに據れり
○滯閣、原本閣を過に作る、閣本柳本中本等に據て改む、閣は遮壅也止也塞也
○紀三津、紀字は宮本及紀略に據て補ふ、山崎校本には堀本に據れりとて紀朝臣の三字を補へり
○是日大安寺僧云々、私記に日一作月或云以下三十七字疑當在前月中
○右京少屬、以下賜姓朝原宿禰に至る廿八字原本壬辰條の上にありしを此に移す
○檜林寺、嵯峨野にあり橘太后の所建なり
○颶風、抄天地部に颶文選詩云迴颶卷高樹(和名豆无之加世)兼名苑注云颶者暴風從下而上也とあり
○卌許丈、原本卌を廿に作る諸本に據て改む
○侍從所、原本所を前に作る閣本柳本中本等に據て改む
○美見造、續紀延曆七年九月丁未紀(下四七一頁)に見ゆ
○大宰大典、原本大を太に作る諸本に據て改む、
○神服連、神祇令神衣祭條に見ゆ

○壬辰、此條及癸巳條は原本辛巳條の上にありしを此に移せり
○下村主、錄左京諸蕃に見ゆ
○三仲等、原本仲を使に作る諸本に據て改む
○丙申、此條宮本及類史百八十五に據て補ふ宮本元興を興福に作る
○常曉、元亨釋書卷三に傳見ゆ
○丁酉、此條原本乙酉條の次にありしを此に移す
○幣帛也、也字は中本及紀略に據て補ふ
○是日大索城中、此六字閣本柳本中本宮本及紀略に據て補ふ
(二八月)能登國飢賑給、原本此六字下文甘雨の下に重出す此を存して彼を刪る
○日者、原本日を曰に訛れるを改む
○擲旬、私記云擲按涉乎
○秋稼、閣本柳本中本等秋を百に作る
○新甘雨、原本新を降に作る柳本に據て改む
○垂水、神名式に攝津國豐嶋郡垂水神社(名神大月次新嘗)とあり今豐能郡豐津村垂水にあり

舞、將夕乃罷、○辛巳、因幡國飢、賑給、伊勢國壹志郡空閑地百卅町、賜左近衞少將從五位下橘朝臣岑繼、○壬午、勅曰、方今時屬西成、五穀垂穗、如有風雨愆序、恐損秋稼、宜令五畿内七道諸國、奉幣名神、攘災未萠、其幣帛料用正稅、長官率僚屬、自親齋戒、祭以神在、必致徵應、大宰府馳驛言、今月二日、遣唐使四船共進發畢、是日大宰府馳驛、奏遣唐使第一第四兩船、漂蕩却廻之狀、兩船密封奏、同共到來、○癸未、復勅曰、如聞、諸國疫癘間發、夭死者衆、夫銷災皆招福祐者、唯般若冥助、名神嚴力而已、宜令五畿内七道諸國司、轉讀般若、走幣名神、○甲申、勅符大使藤原朝臣常嗣、判官菅原朝臣善主等、得今月六日九日二道飛驛奏狀、具知漂苦廻著肥前國也、使等忠貞之操、不敢告勞、蒙冒險難、廻涉蒼海、而事不諧偶、中路却廻、靖言念之、憂心何已、今案奏狀、兩舶並已無完、必須改營、宜俟修造畢、以遂渡海耳、其第二第三等舶、未知平不、鬱嗟于懷、又勅符大宰大貳藤原朝臣廣敏等、得今月十日飛驛奏、知遣唐使第一第四兩舶、廻著肥前國之狀、使等不利西飄、漂廻嘗艱、宜安置府館、迄于更發、依舊

○神嘉殿、拾芥抄中末に神嘉殿中院正殿とあり中院は一に中和院又神今食院と云武德門の西にあり
○庚戌、此條は宮本及類史紀略に據て補ふ
○右大衣、隼人司式に凡大衣者擇譜第內置左右各一人(大隅爲左阿多爲右)敎導隼人催造雜物云々とあり
○阿多隼人、錄山城神別に富乃須佐利乃命之後也
○相撲司皷、原本皷を幷に作る諸本に據て改む下文七月乙亥條參考すべし
○席田郡、抄國郡部美濃國席田(無之呂太)あり今本巢郡に入る
○卅四町、原本廿四町に作る諸本に據て改む
(七月)七耀曆、唐書藝文志に吳伯善陳七曜曆五卷あり是なり
○八月大改爲小月、閣本西本小月の月の字なし
○執見、紀略說の一字とす
○故改從之、原本故を放に作る宮本水戶校本及紀略に據て改む
○是日東方白虹見、東以下の五字紀略壬申に係く
○壹志郡、原本壹を堂に

供億、又案使奏、兩舶擢殘、更須改營、府宜便修造、令得渡海、其匠手者、復將擇遣、又第二第三兩舶、疑亦或廻著、宜値嘉嶋涯畔、可著船處、爲置斥候、以備接援、知有漂著、亟以上奏、是日安房國無位安房大神、奉授從五位下、○戊子、雷雨殊切、人皆讋伏、至于夜分、震朱雀柳樹、○己丑、遣唐持節大使藤原朝臣常嗣等上表言、伏奉今月十七日璽書、精守飛越、手足未厝、是知玄鑒無私、能照表裏、潢渥不匱、普霑巨細、臣常嗣等、自營艤甫畢、遠入大瀛、日夜漂簸、了無生頼、只待葅鍔於水波、占殯葬於魚腹、而天不殲人、裁泊舊壤、臣等固雖万禱靈祇、再延瞬息、猶傷給詔未達、心神半死、今特賚叡旨、慰喜非常、臣等顧躬庸櫟、曷答重厚、更煩天覽、伏增阽蕉、

○辛卯、大宰府馳驛、奏第二船漂廻之狀、○壬辰、勅符副使小野朝臣篁、得今月八日飛驛奏狀、知歸著肥前國松浦郡別嶋也、近聞第一第四兩隻船、半路漂廻、疾壞未弭、尋省茲奏、轉以驚嗟、本謂忠貞必蒙利往、不知此行何負幽明、雖无巨災、艱虞足患、今案來奏、舶船有損、艕艇亦失、還大宰府、繕補其不完不足者、然後與持節使等、共果國命、

作る諸本に據て改む　〇壬午、原本此二字なし類史十一及紀略に據て補ふ　〇時屬西成、時字は柳本及類史紀略に據て補ふ西成は尙書堯典に平二秩西成一とあり秋に物の成熟するを云　〇攘災、原本攘を壞に作る閣本柳本に據る　〇齋戒、原本戒を或に作る水戶校本に據て改む　〇祭以神在、祭字は柳本宮本水戶校本以を如に作る以は似と同じ論語八佾に祭レ神如二神在一とあるに據れり　〇兩船、原本船を般に作る諸本に據て改む

〇癸未、此條類史百七十三及紀略に據て補ふ　〇菅原朝臣、朝臣の二字は宮本に據て補ふ　〇漂苦廻著、原本漂廻共著に作る柳本に據て改む閣本苦を若に、中本共に作るは何れも苦の訛なり　〇廻涉蒼海、纂詁廻は迴の誤なりとて改む　〇侯修造畢、原本侯を候に作る閣本柳本宮本等に據て改む　〇嗟于懷、原本于を乎に作る柳本に據て改む　〇第一第四兩舶、兩字は柳本に據て補ふ　〇西颿、颿は帆の字なり玉篇に驪馬疾步也風吹船進也とあり　〇便修造、原本便を使に作る諸本に據て改む　〇安房大神、神名式に安房國安房郡安房坐神社（名神大月次新嘗）とあり今同郡神戶村大神宮に鎭座官幣大社に列す　〇朱雀柳樹、朱雀は朱雀門を云　〇潢漾不匱、纂詁に潢恐瀁字之譌と云 蔡襄謝レ官表に誕推二瀁漾一施及二愚蒙一と見え恩澤の淺からざるを云　〇巨細、原本巨を臣に作る諸本に據て改む　〇營艤、營は船を造ること艤は船を整ふるを云　〇蕭鍔、詳ならず　〇生賴、晉書に衆役煩興軍旅不レ息加以久旱穀貴百姓無二生賴一矣とあり生きむとする恃みなしとなり原本賴を類に作る諸本に據て改む　〇占殯葬於魚腹、原本葬を蕤に作る水戶校本に據て改む屈原懷沙賦に寧赴二常流一而葬二乎江魚之腹中一耳と見え水中に溺死するを云　〇裁泊舊壤、原本裁を截に作る閣本柳本中本等に據て改む裁は僅也僅かに死を免かれて本土に漂泊せりとなり　〇雖萬禱靈祇再延瞬息、靈祇は神明、瞬息は瞬間の生命なり原本雖を維に作る諸本に據て改む　〇給詔、山崎校本堀本に據て詔を詮に作る　〇今特、原本今持に作る諸本に據る　〇庸穢、凡庸不才なるを云魏書宗欽傳に伊余穢散才至庸微とあり　〇阽焦、文選思玄賦に阽二焦原一而跟とあるに據れり戰々兢々と云か如し　〇兩隻舶、原本隻を雙に作る閣本柳本中本に據て改む　〇漂廻疾壞、原本廻及壞字なく疾を疚に作る紀略に據て補ひ改む　〇尋省茲奏、原本省を有に作る諸本に據て改む　〇必蒙利往、易復卦等に利レ有レ攸レ往とあるに據れり　〇何負幽明、幽明は鬼神を云　〇艱戾、原本艱を難に作る柳本中本宮本等に據て改む閣本は原本に同じ　〇艕艇、抄舟車部に艇唐韵云艇（楊氏漢語抄云艇平夫禰游艇波師不禰）小船也釋名云二人所レ乘也とあり原本艕を艍に作る水戶校本に據て改む

〇八月戊戌朔、大宰府馳レ驛、奏下遣唐使第三船水手等十六人、駕二編板一漂著之狀上。〇己亥、勅二符遣唐大使藤原朝臣常嗣、省二大宰府去月廿日飛驛奏言、第三船水脚十六人、編レ板如レ桴（イカダ）、駕レ之漂著對馬嶋南浦、其水脚等申云、舶實依レ數解散者、翻水不レ收、悔而何及、言（コヽニ）念二災變一、永用惆傷、又案二同府別奏言、彫弊未レ復、旱疫相仍、使人等六百有餘不レ堪二供給一、伏望准二實字寶龜

（八月）戊戌朔、朔字は宮本水戶校本に據て補ふ　〇十六人、原本六を三に作る諸本及紀略に據る　〇編板、板を以て編める所謂筏なり　〇水脚十六人、水脚は水手に同じ原本六を三に作る諸本及紀略に據て改む　〇桴、抄舟車部に論語注云桴編二竹木一大曰レ筏小曰レ桴（以賀多）とあり　〇判官已上、山崎校本に

例、使人入京、水脚還鄉、又留判官錄事各一人、與府司共修造破舶者、並依來奏、使等宜知此情、判官已上、至于水手、惣自舟途入京還堵、脫有不欲更入都者、隨願駐之、但大使副使、去留任意、其緣修造事、應留判官并錄事者、任大使之簡定、○辛丑、遣唐第三舶人九人、駕桴漂著肥前國、○乙巳、勅曰、遣唐第三舶、未遂利涉、半途漂損、纔乘桴所著、使下之徒廿有五人、漂著之後、已經旬日、而判官錄事史生知乘船事等惣一百餘人、未知所去、存亡難量、宜仰大宰府、差海邊諳路之人、遣絕嶋無人之處、漂損人物、一向尋覓、募以穀帛、○辛亥、河內國人左少史善世宿禰豐上等、改本居貫附右京四條二坊、○癸丑、正三位百濟王慶命爲尙侍、○甲寅、伊勢大神宮禰宜正六位上神主繼麻呂、豐受神禰宜正六位上神主虎主、並授外從五位下、○丁巳、正五位上紀朝臣乙魚授從四位下、柏原天皇（桓武）女御〔也〕、是日大宰府奏言、問遣唐第三船漂蕩之由、眞言請益僧眞濟等、僅作書答云、柂折棚落、潮溢人溺、船頭已下百卅人、任波漂蕩、爰船頭判官丹墀文雄議云、我等空渴死船上、不如壞船作筏、各乘覓水、錄事已下、

上疑下と云り從ふべし
○還堵、說文に堵垣也また相安曰安堵とあり故鄉を云
○使下之徒、纂詁に下を丁に改るは非なり
○知乘船事、原本乘を來に作る諸本に據て改む
○諳路之人、原本諳路を諳居に作る閣本柳本に據て改む海路をよく知れる人なり
○善世宿禰、錄に見えず
○慶命、鎭守將軍敎俊の女、嵯峨天皇の後宮に入り二皇子源定源鎭を生む
○甲寅、此條は宮本及類史十九に據て補ふ
○乙魚、原本魚を兼に作る諸本に據て改む
○女御、女御の名正しく史に見えたるは之を始とす雄略紀七年に見えたるは天皇のめし給ふ御女（ミメ）といふ義なり此後令制の妃夫人を立てず女御益々貴くして皇后に亞げり
○眞濟、元亨釋書三に傳見ゆ
○柂折棚落、柂は抄舟車部に舵唐韻云舵正船木也漢語抄云柁（船尾也或作柂和語云太以之云々）

棚は同に棚野王案棚（不奈太那）大船旁板也
○百卌人、原本卌を卅に作る諸本に據て改む
○醋食、醋は類史醐に作る
○施布帛、原本布施の二字に作り帛字なし施布は閣本柳本中本及類史百八十七に據り帛は類史に據て補ふ
○慧解者、原本慧を惠に作る諸本に據て改む
○褂衣、抄裝束部に釋名云袿（音圭漢語抄作㆑褂云宇知岐）婦人上衣也とあり此は常の褂なり
（九月）○侍臣、原本侍を待に作る諸本に據て改む
○於敷政日華兩門、拾芥抄中末に敷政門は宜陽殿の北に在りて東向、日華門は春興殿宜陽殿の間に在りて同じく東向と云原本於字なく兩を西に作る於は類史七十五に據て補ひ兩は諸本に據て改む
○壬申、原本申を午に作る紀略に據て改む
○尙縫、後宮職員令に尙縫一人掌㆘裁㆓縫衣服㆒纂組之事㆖、兼知㆓女功及朝參㆒とあり
○和氣朝臣緒繼、氣字は

爭放㆓取舶板㆒、造㆑桴各去、自外无㆓復所㆒㆑言、○辛酉（廿四）、延㆓五十口禪僧於八省院㆒、轉㆓讀大般若經㆒、以禦㆓疫氣㆒、諸司醋食、○壬戌（廿五）、大宰府馳㆑驛、奏㆘遣新羅使進發、幷遣唐第三舶漂㆓著對馬嶋上縣郡南浦㆒、舶上唯有㆓三人㆒之狀㆖、○丙寅（廿九）、八省院禪僧轉經、竟施㆓布帛及度者各一人㆒、天皇御㆓紫宸殿㆒、引㆓禪僧中慧解者十人㆒、令㆓一一論義㆒、亦施㆓褂（ウチキ）衣幷御被㆒各有㆑差、○九月丁卯朔、天皇御㆓紫宸殿㆒、賜㆓侍臣酒㆒、遣㆓近衞官人於敷政日華兩門、闈外㆒、制㆓五位已上遲參者、唐突而入㆒也、計㆓闈内所㆑陪非侍從以上㆒、賜㆑綿有㆑差、○壬申（六）、尙縫從四位下和氣朝臣緒繼卒、○乙亥（九）、天皇御㆓紫宸殿㆒、宴㆓重陽節㆒、令㆔文人賦㆓蟪蛄吟之題㆒、日暮宴罷、賜㆑祿有㆑差、○丁丑（十一）、遣㆓左兵庫頭從五位上岡野王等於伊勢大神宮㆒、申㆘今月九日、宮中有㆑穢、神嘗幣帛、不㆑得㆓奉獻㆒之狀㆖、右京人造兵司大令史朴（サクワム）弟春、賜㆓姓貞宗連㆒、其先百濟國人也、○辛巳（十五）、遣唐大使副使等、自㆓大宰府㆒入京、奉㆑還㆓節刀㆒、○乙酉（十九）、參議從二位紀朝臣百繼薨、年七十三、○辛卯（廿五）、以㆓右中弁正五位下伴宿禰氏上㆒、爲㆓修理遣唐舶使長官㆒、大工外從五位下三嶋公嶋繼爲㆓次官㆒、○乙未（廿九）、山城國久世郡空閑地三町、

紀略に據て補ふ
○令文人、原本令を命に作る類史七十四に據る
○蟪蛄、戛ぜみ所謂蜩にして莊子逍遙遊篇及王維詩に出づるに據れり
○神嘗幣帛、神嘗は諸神に先だちて新穀を伊勢神宮に奉る祭なり
○奉獻、原本獻を致に作る紀略に據て改む
○朴弟春、閣本中本水戸校本等弟を矛に作り宮本第に作る今西本に據る
○奉還節刀、節刀を賜ふこと四月丁酉紀に出づ
○乙酉、此條紀略に據て補ふ
○次官、原本官を宮に作る柳本西本に據て改む
(十月)丁酉朔、此條類史百五十九に據て補ふ
○丙午、此條紀略に據て補ふ
○中使、宮中よりの使
○十三箇寺、十五大寺より二箇寺を除きたるものなるべし
○眞繼、眞字は閣本に據て補ふ
○鹿嶋神禰宜、神禰の二字は宮本水戸校本及類史十九に據て補ふ
○以山城國處之第一、平

賜无品時康(光孝天皇)親王、○丙申、備前國人外從八位上石生別公諸上等、改本居貫附右京八條三坊、美濃國人正親大令史勝廣吉等、改本居貫附左京四條三坊、○冬十月丁酉朔、出雲國出雲郡古荒地卌町、爲勅旨田、○丙午、遣中使於十三箇寺、令行讀經事、以綿千屯爲布施、緣內裏有物恠也、○己酉、讃岐國人散位佐伯直眞繼、同姓長人等二烟、改本居貫附左京六條二坊、○丙辰、下總國言、香取神禰宜、准常陸國鹿嶋神禰宜、遷代相續、同令把笏、許之、○戊午、遣新羅使紀三津還到大宰府、○己未、承前之例、畿內國次、以大和國處之第一、勅宜據新式改之、以山城國處之第一、○癸亥、肥前國神埼郡空閑地六百九十町、爲勅旨田、○十一月丙寅朔、勅、護持神道、不如一乘之力、轉禍作福、亦憑修善之功、宜遣五畿七道僧各一口、每國內名神社、令讀法華經一部、國司撿挍、務存潔信、必期靈驗、○丁卯、山城國綴喜郡乘田二町、河內國荒廢田卅三町、賜時子內親王、○戊辰、近江國野洲郡空閑地卅五町、賜本康親王、○己巳、美濃國不破郡仲山金山彥大神、奉授從五位下、卽預名神、○庚午、從四位上今木大

安に遷都し給へるによれり
○癸亥、此條宮本及類史百五十九に據て補ふ
（(十一月)）神道、神社及祭祀の意
○不如一乘之力、原本如を知に作る水戸校本西本中本に據て改む一乘とは大乘に權實の別あり法相三論等を權大乘とし華嚴天台眞言等を實大乘と稱す權大乘は三乘各別法を立つるが實大乘は之を立てずして一切衆生を成佛せしむるが故に一乘法と稱すといふ
○時子内親王、仁明天皇皇女
○仲山金山彥大神、神名式に美濃國不破郡仲山金山彥神社（名神大）、今同郡宮代村に鎭座南宮神社と稱し國幣大社に列す ○今木大神、神名式に山城國葛野郡平野祭神四座とある其の一座なり久度古開兩神亦同じ古開は柳本には古闕とあり ○酒解神、神名式に山城國葛野郡梅宮神四座（並名神大月次新嘗）とある四座の一座なり ○大若子神、梅宮四座の一なり大字は宮本に據て補ふ ○小若子神、同上 ○梅宮社、以上の三座に酒解子神を加へ四座とす同郡梅津村西梅津に鎭座官幣中社に列す ○水主神、神名式讃岐國大内郡水主神社、今大川郡譽水村水主に坐す ○高子内親王、仁明天皇皇女、原本高を亮に作る山崎校本に據て改む ○恠異之雲、之字は柳本に據て補ふ ○消滅、閣本中本銷滅に作る ○幹了、考課令義解に强幹慧了自能堪レ事也とあり ○道善宿禰、姓氏録に載せず山崎校本道善を善道に作る ○故從七位下我孫公諸成、錄攝津雜姓に我孫豐城入彦命男八綱多命之後とあり和泉雜姓には我孫公見ゆ、纂詁に故疑外字謁故殄故也故人賜レ姓於レ理無レ之と云り ○阿比古、原本比を北に作る諸本に據て改む ○癸巳、此條宮本及類史五十四に據て補ふ粟は類史栗に作る今宮本に據る

神奉レ授二正四位上一、從五位下久度古開兩神並從五位上。○[七]壬申、奉レ授二无位酒解神從五位上一、无位大若子神、小若子神並從五位下、此三前坐二山城國葛野郡梅宮社一、讃岐國水主神、奉レ授二從五位下一。○[八]癸酉、山城國久世郡空閑地二町、賜二高子内親王一。○[九]甲戌、有二恠異之雲一竟レ天、其端涯在二艮坤兩角一、經二二尅程一稍以消滅、○[十五]庚辰、仰二石見國一、選二幹了百姓四人一習レ採レ銅、免二其雜徭一。右京人散位正五位下道善宿禰眞貞一烟、改二宿禰一賜二朝臣一。○[廿七]壬辰、河内國人故從七位下我孫公諸成、散位同姓阿比古道成等、賜二姓秋原朝臣一。○[廿八]癸巳、因幡國八上郡人私部粟足女、一產二二男二女一、給二正稅三百束、及乳母一人公粮一、令二以養育一。

（(十二月)）乙未朔、此三字宮本に據て補ふ

○十二月乙未朔[三]丁酉、遣新羅國使紀三津復命、三津自失二使旨一、被二新羅

○誣劫、原本劫を却に作る閣本西本に據て改む
○何則、原本何を到に作る諸本に據て改む
○遣唐四箇舶、遣字は宮本に據て補ふ
○彼境、原本境を場に作る宮本に據て改む
○稱專來通好、原本稱を彌に作る柳本西本中本に據て改む
○畏怯婾媚、婾字は柳本に據て補ふ婾は齊美の貌
○託私自設辭、辭字は閣本柳本に據て補ふ
○故執事省、事字は宮本に據て補ふ
○專對、論語子路篇に使於四方不能專對とあり獨斷にて應對するを云
○使頭、大使を云
○而謂船帆飛已遠、船字は宮本に據て補ふ
○聞商帆浮說、柳本聞下に音字あり
○荷校滅耳、易噬嗑卦の上九に何校滅耳凶、象曰何校滅耳聰不明也、疏に何擔枷械滅沒於耳とあり何は荷なり
○綠衫、六位の著る袍なり三津は武藏權大掾にして六位なり故に綠衫と云

誣劫歸來、何則所以遣三津於新羅者、遣唐四箇舶、今欲渡海、恐或風變、漂著彼境、由是准之故實、先遣告喩、期其接援、而三津到彼、失本朝旨、稱專來通好、似畏怯婾媚託私自設辭、執事省疑與太政官牒相違、再三詰問、三津逾增迷惑、不能分疏、是則三津不文、而其口亦訥之所致也、故執事省牒中云、兩國相通、必无詭詐、使非專對、不足爲憑、但其牒中亦云、小野篁船、帆飛已遠、未必重遣三津聘于唐國、夫修聘大唐、既有使頭、篁其副介耳、何除其貴、輕擧其下、加以當爾之時、篁身在本朝、未及渡海、而謂船帆飛已遠、斯並聞商帆浮說、妄所言耳、荷校滅耳、蓋在玆歟、又三津一介綠衫、孤舟是駕、何擬爲入唐使哉、如此異論、近于誣罔、斯事若只存大略、不詳首尾、恐後之觀者、莫辨得失、因全寫執事省牒附載之、

新羅國執事省牒　日本國太政官、

紀三津詐稱朝聘、兼有贄賮、及撿公牒、假僞非實者、牒、得三津等狀偁、奉承王命、專來通好、及開函覽牒、但云修聘巨唐、脫有使船漂著彼界、則扶之送過、无俾滯遏者、主司再發星使、詰問丁寧、口與牒乖、虛實莫辨、既非

交隣之使、必匪由衷之賂、事无據實、豈令虛受、且太政官印、篆跡分明、小野篁船、帆飛已遠、未必重遣三津、聘于唐國、不知嶋嶼之人、東西窺利、偸學官印、假造公牒、用備斥候之難、自逞白水之遊、然兩國相通、必无詭詐、使非專對、不足爲憑、所司再三、請以政刑章、用沮姦類、主司務存大體、舍過責功、恕小人荒迫之罪、申大國寬弘之理、方今時屬大和、海不揚波、若求尋舊好、彼此何妨、況貞觀中、高表到彼之後、惟我是賴、脣齒相須、其來久矣、事須牒太政官、幷牒菁州、量事支給過海程粮、放還本國、請處分者、奉判准狀、牒太政官、請垂詳悉者、○己亥、和泉國人右大史正六位上山直池作、弟池永等、改本居貫附左京五條、○庚子、天皇御建禮門南、奉遣伊勢大神宮幣帛、是日勅、頃者霹靂于四天王寺、破壞塔廟、恐是咎徵、宜令東大、新藥、興福、元興、大安、四天王等十九寺、三日三夜、轉讀大般若經、番不絕音、○辛丑、安房國言、安房郡人伴直家主、立性肅默、常守孝道、父母沒後、口絕滋味、建廟設像、四時供養、事死如生、未嘗懈倦、量其因心、可謂孝子、勅、宜叙三階、終身免戸田租、且旌門閭、○丁未、淳和院皇太后(正子)

○不詳首尾、原本詳を許に作る閣本柳本宮本に據て改む
○新羅國執事省、原本省を者に作る諸本に據て改む
○賛責、原本責を賣に作る閣本柳本中本に據て改む宮本原本に同じ
○星使、原本專使に作る閣本中本に據て改む星使は勅使を云後漢書李郃傳に和帝使者を益州に分遣して風謠を觀採せしめたる時郃星を見て朝使なることを豫知せしこと云故事より此名稱起れり
○由衷之賂、左傳隱三年に信不由衷質無益也とあるに據れり賂は韻會に以財與人也とあり原本衷を裹に作る閣本西本に據て改む
○豈令虛受、纂詁に令恐合字譌と云
○嶋嶼之人、人字は紀略に據て補ふ
○白水之遊、白水は原本貨泉に作る諸本に據て改む抄人倫部に白水郎を阿万と訓り
○政刑章、宮本政を改に作る
○沮姦類、原本沮を但に作る

誕皇子也、○丙辰（廿二）、天皇於神泉苑放隼、獲水鳥百八十翼、是日侍從及非侍從見參者、賜祿有差、○丁巳（廿三）、奉授下野國從五位上勳四等二荒神正五位下、餘如故、三品秀良親王、奉獻清涼殿、以賀女御藤原朝臣貞子誕（成康）皇子也、

續日本後紀卷第五

作る閣本柳本に據て改む　宮本に阻歛とあり　○貞觀、唐太宗の年號、廿三年にて盡く、我推古天皇三十五年より大化五年に至る　○脣齒相須、左傳僖五年に諺所謂輔車相依脣亡齒寒者とあるに出で利害の最密なるを云原本脣を唇に、須を預に作る諸本に據て改む　○支給、原本支を與に作る閣本中本等に據て改む　○建禮門南、大内の南面の門なり宮本及類史三には南を面に作る　○因心、毛詩大雅皇矣章に出づ注に因親也親親とあり　○戸田租、原本租を祖に作る諸本に據て改む　○且旌門閭、原本旌を旗に作る閣本柳本等に據り且字は柳本に據て補ふ　○誕皇子、四年正月戊辰紀に淳和院皇太后所誕皇子殤焉とあり　○二荒神、神名式に下野國河内郡二荒山神社（名神大）とあり今國幣中社に列す　○餘如故、此三字恐衍文と山崎校本及私記に云り　○秀良親王、嵯峨天皇皇子　○奉獻清涼殿、私記に清涼殿一作物及酒三字とあれど未ださる本を見ざれば姑く舊に從ふ　○藤原朝臣貞子、右大臣三守の女、清和紀貞觀六年八月三日條に傳見え成康親王の外に親子平子の二皇女を誕育すとあり　○誕皇子、成康親王に坐す　○卷第五、卷第の二字は閣本柳本尾本宮本等に據て補ふ

○承和、此二字は宮本に據て補ふ

【承和四年】戊辰、原本辰を申に作る干支を推して改む

○皇子殤焉、三年十二月丁未に生れ給へる皇子に坐す殤は假寧令義解に謂未成人死曰殤也とあり

○聽講最勝王經、聽字は類史百七十七及紀略に據て補ふ

○崇朝之講竟而、崇朝は終朝也、而字は諸本に據て補ふ

○乘輿、乘は閣本西本前本等鑾に作り尾本鸞に作る

○右近衞中將如故、右字は諸本に據て補ふ

○豐樂殿、紀略殿を院に作る

○殿上所設、殿字は宮本及類史七十二に據て補ふ

○忽有物恠、忽字は水戸校本及類史に據て補ふ物恠はもののけなり

續日本後紀卷第六

起承和四年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

(丁巳)四年春正月乙丑朔、天皇御大極殿、受群臣朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、○丁卯、天皇朝覲先太上天皇、及太皇太后於嵯峨院、日暮賜扈從者祿、車駕還宮、○戊辰、淳和院皇太后所誕皇子殤焉、○庚午、恒例、内記今日預設明日可叙五位已上位記、而此般停之、應无叙位事也、是日勅、遣參議民部卿朝野宿禰鹿取於淳和院、奉弔皇子殤、○辛未、天皇御豐樂院、宴于群臣、賜祿有差、○壬申、天皇御大極殿、聽講最勝王經、皇太子侍焉、崇朝之講竟、而乘輿還宮、○癸酉、伊豫國人典藥權允物部首廣宗、其弟眞宗等、改本居貫附左京二條四坊、○丙子、以從五位上良岑朝臣木蓮爲右衞門佐、從五位下惟良宿禰春道爲伊勢介、從四位下藤原朝臣助爲兼尾張守、右近衞中將如故、云云、○戊寅、大極殿最勝會竟、

引其講師及智德僧於仁壽殿、遞令論義、訖施御被、○庚辰、天皇御紫宸殿、觀踏歌、皇太子侍焉、賜侍從已上祿、○辛巳、天皇御豐樂殿、觀射、○壬午、亦欲御同殿、殿上所設御座緣邊、忽有物恠、因停降臨、遣大臣閱視六衞府射昨日之餘、○甲申、天皇內宴於仁壽殿、令賦花欄聞鶯之題、賜獻詩大臣以下綿有差、○丙戌、河內國荒廢田卅町、賜本康親王、○辛卯、在石見國五箇郡中神、惣十五社、始預官社、以能應吏民之禱、久救旱疫之災也、其神名具在神祇官帳、○二月甲午朔、遣唐使祠天神地祇於當國愛宕郡家門前、諸司爲之廢務、○乙未、勅曰、令人主安穩、黎庶和樂、不如十一面大悲者祕密神咒之力、宜普告五畿內七道諸國、請淨行僧七口於國分寺、一七日夜、薰修十一面之法、○戊戌、伯耆國川村郡无位伯耆神、會見郡大山神、久米郡國坂神、及對馬嶋上縣郡无位和多都美神、胡簶御子神、下縣郡无位高御魂神、住吉神、和多都美神、多久都神、太祝詞神、並奉授從五位下、○辛丑、陸奧國言、劒戟者交戰之利器、弓弩者致遠之勁機、故知五兵更用、廢一不可、況復弓馬戰鬪、夷獠之生習、平民之十、不能敵其一、

○花欄聞鶯、原本花を苑に作る諸本及類史紀略に據て改む鶯は閣本西本鸎に作る
○賜獻詩大臣以下綿、賜字は類史七十二に據て補ひ綿字は原本給祿の二字に作れるを諸本及類史に據て改む
○五箇郡、安濃、邇摩、那賀、邑智、美濃郡なり神名式所載の神社三十四座あり此十五社は其中にあり
○(注)神祇官帳、即ち神名帳なり
(二月)愛宕郡家、愛宕は倭名抄に於多岐と訓り郡家は郡衙なり
○廢務、前に注す
○十一面大悲者、大悲者は觀世音菩薩の一名、者字は諸本及類史百七十八に據て補ふ
○伯耆神、神名式に川村郡波波伎神社、今東伯郡日下村福庭
○會見郡、此三字山崎校本に據て補ふ
○大山神、神名式に會見郡大神山神社、今西伯郡大高村尾高、國幣小社に列す
○久米郡、此三字山崎校

本に據て補ふ
○國坂神、神名式に久米郡國坂神社、今東伯郡中北條國坂
○和多都美神、神名式に對馬嶋上縣郡和多都美神社（名神大）同郡峯村木坂、國幣中社に列す
○胡籙御子神、同式に上縣郡胡籙御子神社、同郡琴村
○高御魂神、神字は諸本に據て補ふ同式に下縣郡高御魂神社（名神大）同郡豆酘村東神田
○住吉神、同式に同郡住吉神社（名神大）同郡鷄知村白江山
○和多都美神、同式に下縣郡和多都美神社、今住吉神社に合祀
○多久都神、同式に下縣郡多久頭神社、同郡豆酘村
○太祝詞神、同式に下縣郡太祝詞神社（名神大）今同郡鷄知村加志、太祝詞は原本大詞の二字に作る宮本に據て改む
○五兵、弓矢、殳、矛、戈、戟是なり（周禮夏官司右注に據る）
○夷獠、廣韻に西南夷謂之獠とあり

然至于弩穀、雖有万方之獷賊、不得對一弩之飛鏃、是卽威狄之至尤者也、今見庫中弩、或大體不調、或機牙差誤、又雖有生徒、无人督習、是不置其主司之費、望請准鎭守府置弩師、其公廨不更加擧、分所有准一分給、許之、○癸卯、以從五位上藤原朝臣貞雄爲左兵衞佐、是日勅聽大春日、布瑠、粟田三氏、五位已上、准小野氏、春秋二祠、時、不待官符、向在近江國滋賀郡氏神社、○甲辰、散位從四位下和氣朝臣綱繼卒、○丙午、授從五位下藤原朝臣高扶從五位上、以遣唐大使參議正四位下藤原朝臣常嗣爲兼大宰權帥、左大弁如故、云云、○庚戌、近江國人散位永野忌寸石友、散位同姓賀古麻呂等、改本居貫附左京五條三坊、石友之先、後漢獻帝苗裔也、○癸丑、備前國飢、賑給之、○庚申、從五位下菅野朝臣永岑言、亡父參議從三位眞道朝臣、奉爲桓武天皇所建立道場院一區、在山城國愛宕郡八坂鄕、雖其疆界接八坂寺、而其形勢猶宜別院、由是道俗號曰八坂東院、伏望限以四至、別爲一院、置僧一口、永俾護持、許之、○癸亥、近江國野洲郡公田、幷荒廢田二百八十五町、賜親子內親王、○三月甲

○万方之獷賊、獷は原本橫に作る諸本に據て改む集韻に獷は惡貌とあり
○機牙差誤、機は字書に凡發動所由皆謂之機とあり牙は弩牙卽ち弦を鉤して矢を發するものなり
○又、諸本に據て補ふ
○准一分給、主稅式に凡國司處分公解差法者大上國長官六分云々史生一分云々弩師准史生
○大春日布瑠粟田三氏、姓氏錄に並に同祖出自孝昭天皇皇子天足彥國忍人命也とあり小野氏と同祖なり
○准小野氏云々、承和元年二月辛丑紀に出づ
○甲辰、此條及丙午條は原本庚戌條の下にあり今干支を推して此に移せり
○和氣朝臣綱繼卒、氣字は紀略に據て補ふ綱は西本宮本繩に作る訓同じ
○高扶從五位上、原本高扶を常嗣に、從五位上を正五位下に作る西本及類史に據て改む原本此下に爲兼大宰權帥左大弁如故云々の十三字あり西本に據るに衍文なり故に削る
○兼大宰權帥、兼字は西本及紀略に據て補ふ

子朔丁卯、彗星見于東南、其光芒東至天涯、○戊辰、天皇御内裏射場、有右大臣從二位兼行左近衛大將清原眞人夏野奉獻之設、因賜侍臣酒、是日右大臣上表、請褫宿衛職言、臣再陳款心、兩隔天聰、祈請无驗、精爽有迷、臣聞、秉權兼二者、永難俱存、量力處一者、終得能全、臣文非專業、武非折衝、忝帶二官、恭奉三主、剛柔遞生、歲月稍深、夫近衛者、帝王之爪牙、國家之干城、守備不虞、義在禦侮、夙夜靡監、老臣難任者也、所以去夏瀝款、乞脫斯任、陛下特降渥恩、逾錫寵命、於是感戴昌運、猶冀終身、而頽齡行邁、眼眸暗矇、霜華雙鬢、風嚴兩耳、瞻聽之智、猶非先聰、侍衛之勤、亦異昔力、夫疲驂畏路、夕鳥懷歸、況臣厎腰帶劍、有煩步趍、弱手撫弓、無力弛張、揆己三省、無其一可、伏乞幸免警衛之任、避銳兵於賢將、專守宰衡之職、餌醫藥于公隙、若天鑒廻照、特賜稱力之矜、微臣知足、則免負乘之責、不許、右京人遺唐知乘船事槻本連良棟、民部少錄同姓豐額等、賜姓安墀宿禰、其先出自後漢獻帝後也、○庚午、詔、尾張國課口三分之一、特從優復、河流漲溢、民多病水、故降此□恩、○辛未、和泉淡路兩國飢、賑給之、

○道場院、雲居寺と號す要記字類抄並に雲居寺は承和四年菅野眞道建とあり山城志に廢雲居寺祇園南有地一名雲居寺と見ゆ今高臺寺の地なりと云
○八坂寺、字類抄に八坂寺法觀寺と號す天長中小野篁の建つる所と云山城志に法觀寺一名八坂寺今屬建仁寺とあり
○曰八坂東院、曰字は紀略類史に據て補ふ
○永俾護持、護字は諸本及類史に據て補ふ
○親子內親王、仁明天皇皇女
（三月）甲子朔、此三字宮本に據て補ふ
○彗星、彗は閣本西本宮本彗に作る
○光芒、原本光を先に作る諸本及紀略に據て改む
○因賜、因字は宮本水戸校本及類史に據て補ふ
○隔天聽、天皇の願み給はぬを云
○乘機、原本乘を乘に作る山崎校本に據て改む
○俱存、原本俱を具に作る閣本西本前本に據て改む
○二官、大臣と大將
○三主、嵯峨、淳和、仁

○[九]壬申、彗星猶見、但爲月光所奪、其光芒微少耳、○[十]癸酉、美作國飢、賑給之、○[十一]甲戌、賜餞入唐大使參議常嗣、副使篁、命五位以上、賦春晩陪餞入唐使之題、日暮群臣獻詩、副使同亦獻之、但大使醉而退出、○[十三]丙子、遣唐使朝拜、豐後國人外從五位下吉彌候龍麻呂、賜姓貞道連、授內舍人正六位上和朝臣豐永從五位下、○[十五]戊寅、賜入唐使節刀、大臣口宣、詞同去年、大使進賜節刀、擎當于左肩退出、副使趍在大使前、相連而退、○[十九]壬午、遣唐大使藤原朝臣常嗣出自鴻臚、發向大宰府、○[二十]癸未、美濃國言、二月廿五日、兵庫自鳴、至三月十五日亦鳴同前、丹波國人右近衛府將曹和邇臣龍人、改本居貫附左京五條二坊、○[廿一]甲申、近江國蒲生郡荒廢田卌三町、爲勅旨後院田、○[廿二]乙酉、依遣唐使進發、差內匠頭正五位下楠野王等、奉幣帛於伊勢大神宮、是日天皇不御大極殿、雨也、權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房、率諸司行事也、○[廿三]丙戌、以參議從四位下和氣朝臣眞綱、爲兼左近衛權中將、右大弁如故、云云、○[廿四]丁亥、遣唐副使小野朝臣篁發自鴻臚、向大宰府、○[廿五]戊子、常陸國新治郡佐志能神、

明天皇
○帝王之爪牙、毛詩小雅祈父章に祈父予王之爪牙とあり
○國家之干城、同周南兎罝章に赳々武夫公侯干城とあり原本干を扞に作る水戸校本に據て改む干扞共に盾にて外を扞ぐもの
○義在禦侮、同大雅緜章に予曰有禦侮、注に武臣折衝曰禦侮とあり
○靡盬、同小雅四牡章に王事靡盬、傳に盬不堅固也とあり
○去夏灑歎云々、本史に載せず
○霜華雙鬢、原本雙を長に作る閣本西本に據て改む華は西本條本萃に作る
○疲驂、疲は原本疫に作る閣本宮本水戸校本に據て改む驂は副馬なり
○歩趍、趍は趨の俗字
○三省、論語學而篇に吾日三省吾身とあり
○宰衡之職、宰衡は原本寄衡に作る宮本に據て改む漢書王莽傳に民上書者八千餘人咸曰伊尹爲阿衡周公爲太宰云々采伊尹周公稱號加公(王莽)爲宰衡とあり
○負乘之責、易の語、前

眞壁郡大國玉神、並預官社、以此之中特有靈驗也、○夏四月癸巳朔、天皇御紫宸殿、皇太子侍焉、賜群臣酒、酒罷賜祿、○丁酉、大和國人內藏史生大俣連福山、賜姓大貞連、○戊申、陸奧國言、玉造塞溫泉石神、雷響振動、晝夜不止、溫泉流河、其色如漿、加以山燒谷塞、石崩折木、更作新沼、沸聲如雷、如此奇恠、不可勝計、仍仰國司、鎭謝災異、教誘夷狄、○癸丑、陸奧出羽按察使從四位下坂上大宿禰淨野馳傳奏言、得鎭守將軍匝瑳宿禰末守牒偁、自去年春至今年春、百姓妖言、騷擾不止、奧邑之民、去居逃出、事須加添戍兵、靜騷赴農、又栗原賀美兩郡百姓逃出者多、不得抑留者、臣淨野商量、防禍靜騷、須愼未然、加以栗原桃生以北、俘囚控弦巨多、似從皇化、反覆不定、四五月、所謂馬肥虜驕之時也、儻有非常、難可支禦、伏望差發援兵一千人、四五月間、結般上下、暫候事變、其粮料者、用當處穀、依例支給、但上奏待報、恐失機事、仍且發且奏者、○乙卯、賜勅符曰、事緣愼機、依請許之、唯克制權變、威惠兼施、○丁巳、僧綱奏言、出家入道、爲保護國家、設寺供僧、爲滅禍致福、頃者天地災異、處處間奏、今須每月

三旬三箇日間、輪轉諸寺、晝讀大般若經、夜讃藥師寶號、以此奉答國恩、勑報曰、佛旨沖奧、大悲爲先、攘災致祥、諒在妙典、今省來奏、自叶心期、宜令梵釋、崇福、東西兩寺、東大寺、興福、新藥、元興、大安、藥師、西大寺、招提、本元興、弘福、法隆、四天王、延暦、神護、聖神、常住等廿箇寺、毎旬輪轉、自五月上旬迄八月上旬、誓願薫修、○戊午、天皇於清涼殿曲宴、奏音樂、侍臣具醉、賜祿有差、○庚申、天皇御武德殿、閲覽左右馬寮駒、後太上天皇附參議源朝臣定貢獻御馬二疋於天皇、○五月癸亥朔丁卯、天皇御武德殿、觀馬射、○己巳、近城諸寺、住持寂絶、淫濫屢聞、詔定別當、令其糺正、以文武官五位中明察鯁直者充之、○丁酉、授遣唐第一舶其號太平良從五位下、○癸未、上野國言、御馬疫死、遣使監察、○伊豫國飢、賑給之、○丁亥、賜正五位上伴宿禰益立本位從四位下、益立寶龜十一年爲征夷持節副使、發京之日、敍從四位下、厥後遭讒奪爵、其男越後大掾野繼、上書寃訴久矣、遂辨明得雪父耻、○庚寅、大宰大貳從四位下藤原朝臣廣敏卒、

に出づ貢は原本嘖に作る水戸校本に據て改む　○槻本連、朱鳥元年六月紀に槻本村主賜姓曰連と見ゆ　○優復、優は優賞、復は課役を免ずること　○故降此□恩、西本尾本谷本此下一字空白とす今之に據る恩は西本尾本前本息に作り閣本中本原本に同じ　○辛未、此條及癸酉の條原本下文戊子條の次にあり紀略に據て此に移す　○甲戌、此條紀略に據て補ふ　○吉彌侯、原本彌を弘に作る諸本に據て改む　○貞道連、原本貞を眞に作る諸本に據て改む　○授内舍人云々、此條印本類史九十九乙亥に係け同書乙本は本書に同じ　○詞同去年、同は原本月に作る紀略に據て改む閣本前本中本等周に作るも同の譌なり水戸校本には去年上下疑有脱字とさ云　○出自鴻臚、鴻臚館は拾芥抄中末に見ゆ宮本臚下に館字を補ふ下文亦同じ　○甲申、此條類史百五十九に據て補ふ　○後院、嵯峨天皇の皇后橘嘉智子　○眞綱、參議に任ずること補任は七年八月とす　○兼左近衛權中將、權字は宮本及下文に據て補ふ　○佐志能神、神名式常陸國新治郡佐志能神社、今西茨城郡笠間町　○大國玉神、同式常陸國眞壁郡大國玉神社、大國

村大國玉　○此之中、比年の誤か　(四月)大俣連、原本俣を保に作る閣本西本尾本に據て改む　○大貞連、前に注す　○温泉石神、神名式陸奥國玉造郡温泉石神社、川度村大口　○振動、動字は尾本及紀略に據て補ふ　○山燒、山字は紀略に據て補ふ　○折木、原本木字なく折を拆に作る諸本及紀略に據て改補ふ○新沼、原本沼を治に作る宮本及紀略に據て改む　○末守、原本末を未に作る西本宮本に據て改む　○栗原、原本栗を粟に作る宮本に據て改む下同じ　○控弦、漢書婁敬傳に控弦四十萬騎、注に控弦引レ弓也とあり辭源に猶後世彍騎弓手之類と云　○虜騎、原本虜を膚に作る西本宮本に據て改む○結般、原本般を番に作る諸本及紀略に據て改む般は玉篇に同レ班とあり　○事變、原本變を發に作る尾本及紀略に據て改む　○支給、原本支を與に作る諸本に據て改む　○乙卯、原本五月丁巳に作る水戸校本に按是月干支多レ誤乙卯作二丁巳一加二五月二字一丁巳作二丁丑一今據二類史紀略一改レ之といひ山崎校本も亦紀略に據り五月の二字を削りて乙卯に作る今之に據る　○丁巳、原本丁丑に作る類史紀略に據て改む　○沖奥、沖は深也奥は藏也　○東西兩寺、原本東西大寺に作る山崎校本に據て改む　○東大寺、原本大を北に作る尾本水戸校本及類史に據て改む　○新藥、新藥師寺なり　○聖神常住、二寺並に山城國にあり　○戊午、原本戊を戌に作る類史紀略に據て改む　○曲宴奏音樂、原本曲を内に音を奇に作る諸本及類史に據て改む　○左右馬寮駒、五月五日の馬射に用ふる馬を云　○貢献、原本貢を員に作る諸本及類史に據て改む献字は閣本中本等及類史にはなし

(五月)五月、原本四月丁巳の上にありしを此に移す　○癸亥朔、此三字宮本に據て補ふ○糺正、原本糺を紀に作る閣本西本尾本宮本等に據て改む　○丁酉、水戸校本に按是月無二丁酉一干支必有二一誤一と云り山崎校本及纂詁は之を四月丁酉とし四月に移したれど丁丑の誤ならむも計り難ければ水戸校本に從て改めず姑く此に置く　○上野國言云々、左馬寮式に上野國に御牧九所見ゆ御料の馬なれば御馬といひて兵部省に隷する諸牧の馬と區別せり　○賜正五位上云々、宮本賜を贈に作る　○辨明、辨字は閣本西本尾本に據て補ふ

(六月)壬辰朔、此三字宮本に據て補ふ此月原本錯亂多く丁未(十六日)庚戌(十九日)甲寅(廿三日)戊午(廿七日)己未(廿八日)辛酉(三十日)己巳(七月八日)丁酉(六月六日)以上の如く次第せり今干支を推して改め敍し己亥、甲辰、壬子、癸丑條は類史紀略に據て補へり
○乙未、此條原本己未條に係く紀略に據て此に移す
○丁酉、此條西本には低書別提す
○濟苦院、行旅飢病者を

○六月壬辰朔乙未、備後國飢、賑給之、○丁酉、依從五位下勳六等小野朝臣宗成請、勅聽出羽國寂上郡建立濟苦院一處、又宗成所同國分二寺、奉造佛菩薩像、并寫得雜經四千餘卷、並令附官帳、不紛失、事具官符、○己亥、右大臣夏野上表、詔、唯停大將之任、不令還食封、○甲辰、六虹一時見于內裏、○丁未、賜人康親王山城國葛野郡空閑地一町、○庚戌、地震、○壬子、勅、如聞、疫癘間發、疾苦者衆、夫銷殃未然、不如般若之力、宜令五畿內七道諸國內行者、廿口已下、十口已上、於國分僧寺、始自七月八日、三

救濟する處なり天長十年五月紀に武藏國多磨郡に悲田所を設くること見ゆ參考すべし
○所同、纂詁に龍野本に據れりとて同を司に改めたれど聞えず所字或は衍か然らざれば所下に脫字あるべし
○紛失、原本失を迷に作る西本中本前本等に據て改む
○己亥、此條紀略に據て補ふ
○甲辰、同上
○六虹、抄天地部に虹毛詩注云螮蝀（帝董二音螮又作蝃和名尒之）虹也兼名苑云虹一名蜺（今按雄曰虹雌曰蜺）とあり
○人康親王、仁明天皇々子
○一町、此下原本勅令云々の廿一字あり類史紀略に據て下文己未條に移す
○壬子、此條類史百七十八及紀略に據て補ふ
○癸丑、此條類史百七十三に據て補ふ
○鎭祭彼壇界、臨時祭式に畿內堺十處疫神祭見え其場所を詳に擧げたり
○時氣、抄形體部病類に疫說文云疫（衣夜美一云

箇日、晝讀金剛般若、夜修藥師悔過、迄于事竟、禁斷殺生、○[廿二]癸丑、遣使山城大和河內攝津近江伊賀丹波等七國、鎭祭彼壇界、以禦時氣、○[廿三]甲寅、宮內卿三品阿保親王爲兼兵部卿、上野大守如故、左衞門督從四位上百濟王勝義爲兼宮內卿、相摸守如故、中納言正三位源朝臣常爲左近衞大將、權中將從四位下和氣朝臣眞綱爲兼中將、右大弁如故、正三位源朝臣信爲兼左衞門督、近江守如故、○[廿七]戊午、散位正四位上小野朝臣野主卒、○[廿八]己未、勅云々、宜遣使山城大和等、奉幣名山、以祈甘雨、又勅、令五畿內七道諸國、奉幣名神、豫防風雨、莫損年穀、正三位行中納言兼左近衞大將源朝臣常、上表請解左大將職曰、云云、右京人左京亮從五位上吉田宿禰書主、越中介從五位下同姓高世等、賜姓興世朝臣、始祖鹽垂大倭人也、後順國命、往居三己汶地、其地遂隷百濟、鹽垂津八世孫、達率吉大尙、其弟少尙等、有懷土心、相尋來朝、世傳醫術、兼通文藝、子孫家居奈良京田村里、仍元賜姓吉田連、○[三十]辛酉、從四位下紀朝臣善岑卒、○秋七月壬戌朔、[三]甲子、延十五口僧於常寧殿、晝則讀經、夜便悔過、以內裏有

度岐乃介）民皆病也
○僞兼兵部卿、宮本に兼字なし
○正三位源朝臣常、三は原本二に作る宮本及八年十一月紀に據て改む
○爲左近衛大將、左上に兼字あるべし狩谷氏曰將下恐當有中納言如故五字、また曰將下原有權中將云々廿二字上文既出此衍文削之と云り
○權中將、山崎校本は依齋の說に從て權中將以下の廿二字を削りしが纂詁は三月丙戌以參議兼左近衛權中將至是卽眞也と云り今之に從ふ
○勅云々、以下又に至る廿一字は紀略に據て補ふ
○勅令五畿內七道云々、以下穀に至る廿一字は原本上文丁未條にあり類史及紀略に據て此に移す
○曰云々、原本曰下五字空白と爲せるを宮本に據て云々の二字を補ふ
○鹽垂、鹽は原本監に作る宮本に據て改む下同じ鹽垂郎ち鹽垂津彥なり
○三已汶地、初め任那國に屬す繼體紀七年六月條（書紀下一六頁）に見ゆ參看すべし

物恠也、○己巳、天皇御紫宸殿、觀相撲節、散位正六位上八多眞人淸雄言、姓氏錄所載始祖、錯謬非實、私門之大患也、詔令刊改之、○丁丑、地震、式部省言、大學寮言、去天平二年三月格、文章生廿人、簡取雜任及白丁聰慧者、今諸生等器少岐嶷、才多晩成、至應文章之選、皆及二毛之初、而人雖賢良、未必位蔭、望請、白丁文章生預之出身、勅許之、○庚辰、以從四位上南淵朝臣永河、爲大宰大貳、○癸未、大宰府馳傳言、遣唐三箇舶、共指松浦郡旻樂埼發行、第一第四舶、忽遇逆風、流著壹伎嶋、第二舶、左右方便、漂著値賀嶋、是日先太上天皇皇子從四位上源朝臣鎭、攀陟神護寺、剃頭入道、城中聞者、爲之隕涙、○丙戌、天皇御後庭、命左近衛府奏音聲、令弄玉及刀子、○庚寅、先太上天皇奉還源朝臣鎭位記於內裏、是日勅、以宮城北園池司地卅二町內荒廢地二町、充典藥寮、○辛卯、加賀國石川郡荒廢田卅九町、賜三品彈正尹秀良親王、近江國荒田六十四町、勅充太皇太后後院、○八月壬辰朔、日向國子湯郡都濃神、妻神、宮埼郡江田神、諸縣郡霧嶋岑神、並預官社、○丙申、勅曰、頃年眞言、法教、雖流

○達率吉大尙其弟少尙、達率は百濟の爵名、吉大尙は天智天皇十年正月紀に見ゆ原本弟を第に作る諸本に據て改む
○家居、居字は閣本尾本に據て補ふ
○元賜姓吉田連、元字恐は衍、連の下に原本備後國云々の條ありしを紀略に據て上に移す
(七月)壬戌朔、此三字宮本に據て補ふ
○常寧殿、拾芥抄中末に承香殿北とあり
○散位、以下令刊改之に至る卅五字は原本己巳の二字を冠して六月辛酉の次に置り干支を推して此に移す
○式部省言、以下勅許之に至るまでは紀略に據て補ふ
○晩成、老子に大器晩成とあり
○二毛之初、左傳僖廿二年に不禽二毛、注に二毛は頭白有二色也とあり
○位陸、選叙令に詳なり
○以從四位上南淵朝臣云々、以より下十六字は原本除目云々の四字に作る宮本に據て改む
○晏樂埼、萬葉十六に肥

傳京城、而未遍邊境、宜選彼宗僧堪講讀及修法者、毎年任諸國講讀師、依法薰修、其僧不限年臈、惟選堪之者、○戊戌、伊豫國從四位下大山積神、從五位下野間神、並預名神、○辛亥、大宰府奏遣唐使三箇船漂廻之狀、并上使等奏狀、○癸巳、勅使云々、○丁巳、无位正道王於殿上冠焉、即叙從四位下、正道王者、故中務卿三品恒世親王之子、而後太上天皇之孫也、後太上天皇殊鍾愛、令天皇爲子、毎陪殿上、因有此叙、○庚申、勅、陸奥國課丁三千二百六十九人給復五年、安慰其情、以國司言也、○九月辛酉朔壬戌、地震、○甲子、聖躬不豫、羞之御藥、頒遣中使、誦經於七箇寺、○戊辰、勅、令式部少輔良岑朝臣木連、奉幣帛、向八幡大神宮、天皇元有所禱、今以奉賽也、○己巳、天皇御紫宸殿、宴重陽節、命文人同賦露重菊花鮮之題、宴畢賜祿有差、○甲戌、攝津國人右衞門醫師辟秦眞身、武散位同姓仲主等三烟、改本姓賜秦勝、○辛巳、以從五位上藤原朝臣當道爲河內守、右少弁如故、散位從五位下丹墀眞人石雄爲伯耆守、豐前守從五位上石川朝臣橋繼爲修理舶使長官、筑前權守從五位下小野朝

臣末嗣、遣唐判官從五位下長岑宿禰高名、並爲次官、自從今月一日、至于卅日、五畿內七道、豫申損者、惣三十一國、○己丑、（廿九）聖體平復、金銀長上工正六位上丹波直廣主、年老還鄉、勅給正稅穀五十碩、○冬十月辛卯朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、是日喚左右京亮、右衞門、撿非違使佐幷四人於殿前、宣勅、遣勘錄東西兩京飢病百姓、特加賑恤、以陰霖經日、穀價踊貴也、○丁酉、（七）右大臣從二位淸原眞人夏野薨、遣使監護喪事、有賻物、天皇不聽朝三日、夏野、正三位御原王孫、正五位下小倉王之第五子也、薨時年五十六、○癸丑、（廿三）左京人從七位上佐伯直長人、正八位上同姓眞持等、賜姓佐伯宿禰、○乙卯、（廿五）授正六位上淸科朝臣弟主從五位下、○丙辰、（廿六）聽齋院司私養鷹二聯、○戊午、（廿八）授從五位上百濟王慶仲正五位下、正六位上百濟王忠誠從五位下、先太上天皇自交野遊獵處、有諷旨、因所叙也、○十一月辛酉朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、皇太子朝覲、○（八）戊辰、天皇於神泉苑放隼、○丁丑、（十七）加賀國言、管能美郡人財部造繼麻呂、父母存日、定省之禮、無失其節、沒後操行不變、朝夕哀慕、隣里鄉邑、莫不推

前國松浦縣美禰良久埼さ見ゆ往時對馬に渡る船及遣唐使の宿泊所なり今南松浦郡三井樂村の小澳なり
○壹伎嶋、伎は原本岐に作る諸本に據て改む
○値賀嶋、既に出づ肥前國南松浦郡に屬する五嶋列嶋を云
○奏音聲、卽ち音樂なり
○令弄玉及刀子、抄術藝部に弄丸梁武帝千字文注云宜遼者楚人也能弄丸（此間云多末斗利）八在空中一在手中令人之弄鈴是也、又弄槍楊氏漢語抄云弄槍（保古斗利）など見えたれば珠或は刀子を弄する一種の藝なり
○奉還源朝臣鎭位記、入道せしを以てなり
○秀良親王、嵯峨天皇皇子
○荒田、山崎校本に荒下恐脫廢字乎と云
○太皇太后、檀林皇后
（八月）壬辰朔、朔字は宮本に據て補ふ
○子湯郡、湯郡の三字は閣本西本中本に據て補ふ抄國郡部に日向國郡名兒湯古由とあり
○都濃神、神名式に日向

服、可ㇾ謂㆓孝子㆒、勅宜ㇾ叙㆓三階㆒、終ㇾ身免㆓其戸租㆒、旌㆓表門閭㆒、令㆓衆庶知㆒、○廿四甲申、山城國人造酒司史生秦忌寸伊勢麻呂等、改㆓本居㆒貫㆓附右京九條四坊㆒、○廿七丁亥、天皇於㆓神泉苑㆒放ㇾ隼、

國兒湯郡都農神社、都農村川北、國幣小社に列す　○妻神、同式兒湯郡都萬神社、今妻町字妻村　○江田神、神名式宮埼郡江田神社、檍村江田　○諸縣郡、抄國郡部日向國郡名諸縣牟良加多と訓り今東西北の三郡に分る　○霧嶋岑神、神名式諸縣郡霧嶋神社、今西諸縣郡小林町細野　○並預官社、並字は閣本前本中本等に據て補ふ　○丙申、此條類史百七十九に據て補ふ　○大山積神、神名式伊豫國越智郡大山積神社（名神大）、宮浦村宮浦、國幣大社　○野間神、同式野間郡野間神社（名神大）乃萬村野間神宮　○辛亥、此條紀略に據て補ふ前月癸未紀を參看すべし　○癸巳、此條も紀略に據て補ふ巳は丑の訛なるべし　○丁巳、此條原本庚申の次にありしを干支を推して此に移す　○子而、而字は紀略に據て補ふ　○以國司言、司字は宮本に據て補ふ、此月原本錯亂多く壬戌（二日）辛巳（廿一日）甲戌（十四日）甲子（四日）己丑（廿九日）己巳（九日）斯くの如く次第す今干支を推して改め叙し戊辰條を宮本及類史紀略に據て補へり　○羞之御藥、此四字諸本及類史に據て補ふ　○於七箇寺、於字は類史に據て補ふ　○戊辰、此條は宮本及類史（五）紀略に據て補ふ　○八幡大神宮、宇佐神宮　○宴畢、原本畢を了に作る類史紀略に據て改む　○賜祿、原本祿を錄に作る諸本に據て改む　○醫師、原本醫を督に作る諸本に據て改む　○辟秦眞身、辟秦氏は詳ならず辟字醫師の師字と字形相似たるより誤りて加へたるか然らば秦は氏にて眞身は名なるべし原本眞を直に作る諸本に據て改む　○長官、原本官を宮に作る諸本に據て改む　○末嗣、原本末を未に作る西本宮本に據て改む　○申損、賦役令に凡田有㆓水旱蟲霜不ㇾ熟之處㆒國司撿ㇾ實具錄申ㇾ官十分損㆓五分以上㆒免ㇾ租損㆓七分㆒免㆓租調㆒損㆓八分以上㆒課役俱免と見ゆ　○長上工、山崎校本に長上工當ㇾ作㆓工長上㆒と云　○五十碩、碩は字書に碩石通と云　（十月）辛卯朔、此月原本錯亂多く癸丑（廿三日）丙辰（廿六日）戊午（廿八日）乙卯（廿五日）丁酉（七日）斯くの如く次第せり今干支を推して改叙せり　○賜群臣酒、孟冬旬宴なり　○右衞門、山崎校本堀本に據れりとて右上に左字を補ふ　○幷四人、山崎校本宮本考語に據れりとて幷を廿に作る然るに廿とある本なく左右京亮右衞門撿非違使佐以上四人にて廿四人に非ず　○清原眞人夏野薨、眞人は原本朝臣に作る宮本及紀略に據て改む皇代略に承和四年六月左大將を辭し十月七日薨とあり　○遣使監護喪事云々、以下十六字は紀略に據て補ふ　○御原王、補任に舍人親王の曾孫とあり　○小倉王、此王右馬頭朝野朝臣鯛手女家主を娶りて夏野を生めり　○眞持、原本眞を直に作る諸本に據て改む　○有詔旨因所叙也、延曆二年十月戊午行㆓幸交野㆒放ㇾ鷹遊獵庚申百濟王等供㆓奉行在所㆒者一兩人進ㇾ階加ㇾ爵と見えたれば此度も其芳躅を紹がせ給ひて進階の事を嵯峨上皇の御詔旨あらせ給へるなるべし　（十一月）辛酉朔、原本十一月の上に冬字あり酉を丑に作る冬字は衍なれば之を削り酉は宮本及類史紀略に據て改む此月原本戊辰（八日）丁亥（廿七日）甲申（廿四日）丁丑（十七日）の次序とせるを干支を推して改め叙せり　○管能美郡、管は原本菅に作る諸本に據て訂す能美郡は今も同じ

（十二月）庚寅朔、朔字は宮本に據て補ふ　○春興殿、拾芥抄中末に

○十二月庚寅朔、日有ㇾ蝕之、○二辛卯、是夜、盗開㆓春興殿㆒、偸㆓取絹五十餘

○春興殿日華門南とあり
○志賀史、錄攝津諸蕃に志賀忌寸後漢獻帝之後也とあり志字は中本宮本に據て補ふ
○錦部村主、錄山城諸蕃に錦織村主同祖波能志之後也とあり部は原本なし姓氏錄に據て補ふ
○錦部忌寸、姓氏錄に見えず
○大友村主、姓氏錄に見えず原本友を支に、主を王に作る宮本に據て改む
○春良宿禰、春は原本審に作り宮イ本蕃に作る閣本西本尾本等に據て改む淸和紀貞觀六年八月壬戌近江國犬上郡人左近衛府生正七位下春良宿禰諸世改本居貫附山城國愛宕郡とあるは同族なり
○逐捕之、原本逐を遂に作る諸本に據て改む
○轆轤木壺、轆轤にて繰りたる木壺なり
○銅壺釦鏤、釦は說文に金飾器口也、鏤は彫刻也とあり彫刻して口の邊を飾れる銅壺を云木壺と銅壺と二重にして毛髮を納め奉るなり
○(注)監察、原本察を發に作る諸本に據て改む

正、宿衛之人不得見著。右兵衛督從四位下百濟王安義卒。○[四]癸巳、近江國人左兵衛權少志志賀史常繼、左衛門少志錦部村主藥麻呂、越中少目錦部忌寸人勝、太政官史生大友村主弟繼等、賜姓春良宿禰。常繼之先、後漢獻帝苗裔也。○[五]甲午、夜分女盜二人昇入淸涼殿。天皇愕然、命藏人等、告宿衛人、逐捕之、纔獲一人。其一人脱亡。○[八]丁酉、勅令造轆轤木壺一合、銅壺釦鏤者一合、備于奉納天王寺聖靈御髮。事由未詳、但口傳曰、聖德太子御髮四把、深藏于四天王寺塔心底下。去年冬、霹靂彼寺塔心時、遣使監察、而其使私偸靈髮、與之己妻。由是後日成祟。因更搜索、還藏本處云云。是日左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、臣年老病重、出入絶望。疾床引日、既過一紀。臣竊見、天下官庫空罄、國用闕乏。況今年不稔、衣食共損、倉廩不實。何知禮節。臣前以此義、去天長之初、上意見之日奏言、省不要之官、斷文華之費。而臣久沉疴疾、空積星霜、曠官之責、可謂其首。其文章者、歷代不朽也。豈口奏其言、久居職哉。加以陰陽不調、責在臣子。伏望停不當之號、開賢德之進。然則天道無災、自作中興。非敢逃天澤之榮、名餝之利。內侍宣久、國老止志氏波獨能美許曾坐世、朝夕政波不申給阿禮止毛、國家事波定申任爾止志氏、

○(同)與之、原本與を興に作る諸本に據て改む
○一紀、一年など云
○倉稟不實云々、管子に倉稟實則知禮節衣食足則知榮辱とあり
○疥疾、原本痾疾に作る諸本に據て改む水戸校本には疢に作る疥は疹の俗字、疹は熱病也疢と同じ
○天澤之榮、易履卦の象傳に上天下澤履君子以辯上下定民志とあり
○內侍宣久、原本宣を宜に作る西本に據て改む
○國老、國家の元老の意
○宜岐、岐は原本波に作る西本尾本前本に據て改む
○返給、返字は諸本に據て補ふ
○旭旦、旦は原本且に作る西本に據て改む早旦に同じ
○香春岑神、抄郡鄕部豐前國田河郡香春鄕あり風土記には鹿春に作る
○辛國息長火姬大日命、此神は神功皇后なりといひ或は比賣許曾神ならむとも云り火姬大日は宮本大姬大目に作る此社は元香春山の第一嶽に坐せり
○忍骨命、天忍穗根尊に

前前辭申事附氏、自今以後、如此久辭申事不得止宣岐、今毛又志賀奈毛思行須、然今進禮留辭書、非御意止志氏、左近衛中將從四位下和氣朝臣眞綱乎差使返給止宣、○庚子、自旭旦至戌時大風、京中屋舍往往破壞、大宰府言、管豐前國田河郡香春岑神、辛國息長火姬大日命、忍骨命、豐比咩命、惣是三社、元來是石山、而土木惣無、至延曆年中、遣唐請益僧最澄、躬到此山、祈云、願緣神力、平得渡海、卽於山下、爲神造寺讀經、爾來草木蓊鬱、神驗如在、每有水旱疾疫之災、郡司百姓就之祈禱、必蒙感應、年登人壽、異於他郡、望預官社、以表崇祠、許之、○庚戌、是夜、盜穿大藏省東長殿壁、竊取絁布等、不知幾匹端、○辛亥、遣六衞府、大索城中、○丙辰、以從四位下橘朝臣永名爲兼右兵衞督、播磨守如故、

坐ます同山第二嶽に坐せり

○豐比咩命、肥前止與日女神にして卽ち海神豐玉姬神なりと云第三嶽に坐せり

○惣是三社、三社並に神名式に豐前國田川郡三座（並小）辛國息長大姬大目命神社、忍骨命神社、豐比咩命神社と見え今田川郡香春町香春に祀る

○土木惣無、元來石山にして土も木も無しとなり寶誥は土を少の訛として艸也といひ宮本には木は人の誤とすれど舊の儘にて通ず

○請益僧、原本請を諸に作る諸本に據て改む

○神驗如在、論語八佾に祭レ神如二神在一とあり

○庚戌、原本戌を子に作る水戶校本に據て改む

○東長殿、標註職原抄別記下に省（大藏）中に長殿とて今の長屋の如く一棟に造つゞけたる數戶の藏いくつもありて一戶を一國と定めこれに調庸を納め入らるゝことなりとあり

○大索城中、賊を搜索するなり

續日本後紀卷第六

續日本後紀卷第七

起承和五年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

○承和、此二字は宮本に據て補ふ

【承和五年】

○眞貞正五位上、正五位上の四字は原本空白とす水戸校本及類史九十九に據て補ふ

○坂上大宿禰鷹主藤原朝臣嗣宗、原本禰字より宗に至る約八字は空白とす類史九十九に據て補ふ

○藤原朝臣良相藤原朝臣氏宗、朝臣は並に宮本及類史に據て補ふ

（戊午）五年春正月庚申朔、天皇御大極殿受朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被。○壬戌、天皇朝覲先太上天皇及太皇太后於嵯峨院、賜扈從五位已上祿有差。○丙寅、天皇御豐樂殿、覽青馬、宴百官、詔授從五位上豐江王正五位下、從五位下豐村王從五位上、正六位上高原王從五位下、從四位下和氣朝臣眞綱、笠朝臣梁麻呂、藤原朝臣雄敏、大枝朝臣總成、並從四位上、正五位下藤原朝臣豐主、紀朝臣名虎、丹墀眞人清貞、從五位上笠朝臣廣庭、並從四位下、正五位下善道朝臣眞貞正五位上、從五位上坂上大宿禰鷹主、藤原朝臣嗣宗、並正五位下、從五位下紀朝臣椿守、百濟王永豐、大藏宿禰横佩、並從五位上、外從五位下門部連貞宗、无位興我朝臣三夏、正六位上藤原朝臣良相、藤原朝臣氏宗、丹墀眞人貞

○橘朝臣、原本橘を林に作る諸本及類史に據て改む
○二腹、二は三に作るべきか下同じ
○高村宿禰、錄右京諸蕃に高村宿禰魯恭王之後とあり
○秦宿禰、秦字は原本二字空白とす宮本及類史に據て補ふ
○淸繼並外從五位下、繼並外の三字は原本空白とす宮本及類史に據て補ふ
○御杖、剛卯杖なり三年正月癸卯紀に注す原本杖を仗に作る閣本尾本前本に據て改む
○從二位藤原朝臣三守、原本二を三に作る諸本に據て改む
○當道爲□□辨、西本尾本爲の下二字空白とし尾本には辨字なく三字共に空白とす今西本尾本に據て辨上二字空白とす纂詁は源義公の說に據て爲右中辨に改む
○仲野親王、桓武天皇皇子
○忠良親王、嵯峨天皇皇子
○葛原親王、桓武天皇皇子

峰、橘朝臣諸成、小野朝臣興道、淨野宿禰二腹、林朝臣常繼、並從五位下、正六位上出雲朝臣全嗣、高村宿禰淸直、飯高公常比麿、秦宿禰氏繼、神服連淸繼、並外從五位下、宴畢賜祿有差、○(八)丁卯、天皇御紫宸殿、皇太子獻御杖、授正五位下田口朝臣善子從四位下、是日大極殿最勝會之初也、○(十)己巳、以從二位藤原朝臣三守爲右大臣、正三位源朝臣常爲大納言、從三位橘朝臣氏公爲中納言、從四位下安倍朝臣安仁爲參議、○(十三)壬申、從五位上藤原朝臣當道爲□□辨、河內守如故、從五位下藤原朝臣豐嗣爲左少弁、從五位下藤原朝臣氏宗爲式部少輔、云云、三品仲野親王爲上總大守、四品忠良親王爲常陸大守、從五位下藤原朝臣貞公爲介、一品葛原親王爲兼上野大守、式部卿如故、從五位下淨野宿禰二腹爲下野介、從四位上源朝臣明爲兼加賀守、大學頭如故、從五位下丹墀眞人貞峰爲介、云云、從三位源朝臣定爲兼播磨守、中務卿如故、云云、是日從四位下藤原朝臣河子卒、○(十四)癸酉、最勝會竟、更引其講師及名僧十餘口於禁中、令論議、訖施御被、○(十六)乙亥、天皇御紫宸殿覽踏歌、宴竟賜

○從五位下丹墀眞人貞峰爲介、此十二字宮本に據て補ふ
○源朝臣定、原本源を藤原に作る諸本に據て改む
○藤原朝臣河子卒、河は原本阿に作る諸本に據て改む河子の事は貞觀九年正月戊午紀仲野親王の傳に詳なり
○觀射云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
○才知文士、才字は諸本に闕く山崎校本には才知の二字を削る
○有差云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
○正六位上豐、原本此下約五字空白とす錄攝津諸蕃に豐津造見え續紀寶龜十一年五月紀攝津豐嶋郡人韓人稻村等豐津造を賜ふこと見ゆるに據れば空白は津造□とあるべきか
○二條、此下某坊の二字あるべし諸本には二條の二字をも缺く
○繼諸蕃歸化之餘種也、繼上一字脫せるなるべし西本には字ありて偏旁をのみ存せり
○乙酉、此條類史百九十に據て補ふ
(二月)己丑朔、此三字

侍從已上祿有差、○丙子、天皇御豐樂殿觀射、云云、○己卯、天皇內宴于仁壽殿、喚公卿及才知文士、令賦雜言遊春曲之題、宴畢賜祿有差、云々、○辛巳、攝津國豐嶋郡人正六位上豐［　　］嗣、民部史生同姓吉雄等廿八人、改本居貫附右京二條、繼諸蕃歸化之餘種也、○乙酉、授勳五等吉彌侯部東人麻呂、同姓玉岐、並外從五位下、以不從逆類久効功勳也、○二月己丑朔庚寅、丹波國桑田郡空閑地三十町賜諱(文德)田邑春宮坊主□、永聽把笏也、○癸巳、天皇御內裏射場、命侍臣射之、是日右大臣從二位藤原朝臣三守奉獻盡美、亦積置錢布、備于賭物、○乙未、從五位下藤原朝臣氏雄爲縫殿頭、云々、○丁酉、畿內諸國、群盜公行、放火殺人、下知國司、令以糺勘、○戊戌、令山陽南海道等諸國司、捕糺海賊、○庚子、行幸水生瀨野遊獵、賜扈從五位已上祿有差、日暮車駕還宮、云々、勅旨曰、分遣左右衞門府生看督等於畿內諸國、追捕姧盜、云云、○癸卯、勅、齋院雜使四人、宜准二宮并淳和院舍人等、與之公驗、嵯峨院勘籍廿人亦宜准此、詔授陸奥守從五位上良岑朝臣木連正五位下、○庚戌、武藏國都筑郡枌

宮本に據て補ふ
○春宮坊主□、原本春宮家令に作り諸本には家字なく令を宮に作る今類史百七に據て改む纂詁に按主□疑主典と云り
○永聽把笏、原本聽を預に作る類史に據て改む
○爲縫殿頭云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
○公行、原本横行に作る諸本に據て改む
○水生瀨野、攝津國三嶋郡島本村附近
○車駕還宮云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
○勅旨曰、諸本曰を田に作る纂詁には此三字を削りて蓋三月癸亥條錯出于此者と云り
○看督、看督長に作るが通例なり職原抄に補看督長六十六人此爲遣諸國也云々とあり撿非違使に屬す
○追捕、諸本追を逐に作る
○齋院、賀茂の齋院なり
○二宮、纂詁に按六年八月庚戌紀云三宮舍人幷雜勘人三宮謂春宮皇后宮中宮也據此二宮蓋三宮之譌と云り
○公驗、式部式に凡諸司

山神社、預之官幣、以靈驗也、○三月戊午朔[六]癸亥、以攝津國八部郡□田并乘田廿一町、爲後院勅旨田、○[八]乙丑、散位從四位下池田朝臣春野卒、春野者、天應以往之人也、至延暦十年、始預官班、補內舍人、十四年任左衞門少尉、轉大尉、十九年叙從五位下、除內藏助、兼丹波守、大同元年、加從五位上、職歷中務少輔彈正少弼、弘仁元年任大藏大輔、三年叙正五位下、頻兼遠江越中守、遷宮內大輔、天長三年遷圖書頭、四年叙正五位上、除掃部頭、六年正月授從四位下、春野宿禰、能說故事、或可採容、此十年冬、將有大嘗會事、天皇欲修禊祓、幸賀茂河、春野以掃部頭、奉鹵簿陣、看諸大夫所著當色、其裾曳地、大咲曰、是尋常之裝束、非神事之古體、便指自所著、爲古體之證、其裾離地差高、而袴襴露見矣、諸大夫皆驚云、古之儀制、應與唐同、後代當效之、春野衣冠古樣、身長六尺餘、稠人之中、揭焉而立、會集衆人、莫不駐眼、皤々國老如此者、今則不見也、卒時年八十二、○[十五]壬申、左京二條二坊十六町二分之一、賜掌侍正五位下大和宿禰舘子、○[十九]丙子、大法師靜安爲律師、授勳六等夷守志爲奈、深江枚

番上把笏者不與公驗、其舍人使部伴部之類皆與公驗とあり
〇宜准此、原本置於此に作る類史百七に據て改む
〇詔授陸奥守云々、詔以下正五位下に至る十九字は類史九十九に據て補ふ
〇都筑郡、倭名抄に都筑は豆々岐と訓り今都築郡に作る
〇枌山神社、神名式武藏國都筑郡杉山神社とあり枌は杉の草體より誤れるなるべし
（三月）戊午朔、此三字宮本に據て補ふ
〇癸亥、此條類史百五十九に據て補ふ□□字恐くは荒廢の二字ならむか
〇八部郡、倭名抄に八部夜多倍と訓り今武庫郡に入る
〇預官班、官吏となりしを云
〇任大藏大輔、原本任を仕に作る諸本に據て改む
〇春野宿禰、宿禰は誤なるべし宮本朝臣に作り纂詁は禰を老に改めたれど尙よく考ふべし
〇或可採容、纂詁或を式に改め類史可を有に作る
〇共構礎地差高云々、是

子等外從五位下、以有勳功也、〇戊寅、火于彌勒寺、焚堂舍五宇、〇癸未、勅曰、諸衞府及劇官雜色人、特聽著緋色袴、自餘諸人不聽著染袴、而特聽之徒、所著之袴、或用黑緋、或用淺緋、著人任意、不拘文法、大夫當色之服、還爲士庶之袴、知而不糺、事涉僭濫、宜自今以後、一切禁止、不得令著、但慮嚴制下入罪者衆、須六十日內皆令換却、其權宜行制、省弊爲貴、如今吳桃染、黃墨染、杉染、皂染等色、染作無貴、著服難汚、宜四色袴不謂色淺深、不論公私所、特聽著服、其參議已上、聽通著四色、自餘諸人、不得著吳桃染一色、〇甲申、勅曰、遣唐使頻年却迴、未遂過海、夫冥靈之道、至信乃應、神明之德、修善必祐、宜命大宰府監已上、每國一人、率國司講師、不論當國他國、擇年廿五以上精進持經心行無變者、度之九人、香襲宮二人、大臣一人、八幡大菩薩宮二人、宗像神社二人、阿蘇神社二人、於國分寺及神宮寺、安置供養、使等往還之間、專心行道、令得穩平云云、〇乙酉、授正六位上佐伯宿禰長人從五位下、〇丙戌、山城國葛野郡空地一町、賜春宮坊、〇夏四月戊子朔己丑、勅、遣使者於大和國、實錄富豪之貧、借

貸困窮之輩、至秋收時、依員俾報、○(五)壬辰、勅、自遣唐使進發之日、至歸朝之日、令五畿內七道諸國、讀海龍王經、○(七)甲午、勅、去歲年穀不稔、疫癘間發、夫般若之力、不可思議、宜令十五大寺、五畿七道諸國及大宰府、奉讀大般若經、一七箇日禁斷殺生、○(十三)庚子、勅、筑前、筑後、肥前、豐後等五箇國、頻年遭疫、死亡者半、蘇息之輩、既疲造舶、就中擇窮貧者、給復一年、○(十四)辛丑、大宰管內諸國飢、賑給之、○(十五)壬寅、右京人正六位上春男王、賜姓宗高眞人、○(廿一)戊申、備前國飢、賑給、○(廿八)乙卯、勅遣唐大使藤原朝臣常嗣、副使小野朝臣篁、使等本期鳳擧用涉鼇波、心事多睽、滯留逆旅、朕眷言艱節、憂念于懷、方今信風甫臻、嚴程已迫、如靡盬何、因雲軺往、付之示意、仍遣從四位下右近衞中將藤原朝臣助、勸發遲怠之由、是日天皇遷御常寧殿、以避暑也、

纔著なり神事の服にて唐制を倣へるものにはあらす
○揭焉、原本揭を揚に作る諸本及類史に據て改む揭は高擧也
○皤々國老、文選兩都賦に出づ注に皤皤老人貌也とあり鬢髮の白きを云
○左京二條二坊十六町二分之一、拾芥抄中末に凡一條之內有四坊、一坊之內有十六町、十六町之內有四保、一町之內有四行、一行之內有八門、一戶至長十丈弘五丈云々とあり
○靜安、元亨釋書卷九に見ゆ
○授勳六等夷守志爲奈、以下以有勳功也に至るまでは類史百九十に據て補ふ
○深江枝子、元慶三年正月十三日癸卯紀に授出羽國俘囚外正六位下深江三門外從五位下云々賞軍功也と見ゆ此族人なるべし　○彌勒寺、豐前國宇佐にあり天長十年十月紀に出づ　○黑緋、黑は色の深きを云　○不拘文法、文法は法律を云漢書酷吏傳に出づ　○大夫當色之服、大夫は五位以上の稱、衣服令諸臣禮服條に四位深緋衣五位淺緋衣以外並同一位服云々とあり　○吳桃染、元年十一月壬申紀には胡桃染に作る　○黃墨染、西本墨を熏に作る　○杉染、既に出づ　○皂染等色、皂は令にクリと訓り黑き色なり色は原本也に作る諸本に據て改む　○染作無貴、貴は西本尾本責に作る纂詁は疑費字と云　○特聽著服、原本特を待に作る西本尾本に據る　○過海、海字は閣本前本等空白とす山崎校本には海堀本作涉とあり是なるべし　○香襲宮、香椎宮　○大臣一人、大臣は香椎に祀れる武內宿禰を云　○八幡大菩薩宮、宇佐八幡宮　○宗像神社、神名式に筑前國宗像郡宗像神社三座(並名神大)とあり　○阿蘇神社、同に肥後國阿蘇郡健磐龍命神社(名神大)とあり　○令得穩

平云云、云云は諸本に據て補ふ　○丙戌、此條類史百七に據て補ふ　(四月)戊子朔、此三字宮本に據て補ふ　○己丑、此條原本辛丑條の次にあり干支を推して此に移せり　○進發之日、原本日を月に作る山崎校本に據て改む　○海龍王經、聖教目錄に佛說海龍王經四卷晉竺法護譯と云、王字は宮本及紀略に據て補ふ　○甲午、此條類史(百八十二)紀略に據て補ふ但し類史は去より議に至る十九字を云々に作り畿下に內字あり　○五箇國、五は四の誤か或は一ケ國を脫せしなるべし　○賑給之、此三字紀略に據て補ふ　○宗高眞人、姓氏錄に載せず　○備前國飢賑給、此六字紀略に據て補ふ　○乙卯、遣唐使勘發の事原本戊申に係く今紀略に據る下文遣唐使の上奏五月己未なり戊申にては緩慢の嫌あり乙卯を可とす　○本期、原本期を朝に作る尾本に據て改む　○鳳擧、文選演連珠に鳳擧之使、注に如鳳鳥之擧也とあり天子の使を云　○蠡波、東海の海中に神山あり蠡に支へらるゝと云因て海波の意に用ひしか　○多睽、原本睽を月偏に作る宮本に據て改む睽は違也　○逆旅、客舍なり　○信風、字書に東北風謂之信風とあり今所謂恒信風の吹く時期に至れりとなり　○嚴程已迫、出帆の期の迫れるを云　○靡盬、毛詩小雅四牡章に王事靡盬不遑啓處とあるに據れり盬は原本監に作る宮本に據て改む　○因雲軺徃、因は原本囙に作る閣本西本尾本に據て改む雲軺は雲は車に雲氣を畫けるをいひ軺は文選丘希範書に乘軺建節奉疆場之任、注に二馬爲軺傳使車也とあり　○付之示意、原本示を樂に作る諸本に據て改む使者に付して聖旨を示し給ふとなり　○勘發遣怠之由、原本勘發之の三字に作る紀略に據て改む山崎校本勅書と遣使勘發の事とを別項とし日を改めたるは非なり

(五月)丁巳朔、此三字宮本に據て補ふ　○無測、原本測を側に作る宮本水戶校本に據て改む諸本則に作るも亦測の訛なり　○利征、原本利徃に作る諸本に據て改む此條四月壬辰紀を參考すべし　○乙丑、此條類史八十三に據て補ふ　○驛家十一處、兵部式には安藝國十三驛を載す此後二驛を增せるなるべし　○大物忌神、神名式に出羽國飽海郡大物忌神社(名神大)、今羽後國鳥海山下藏岡村吹浦村の兩所に祀り國幣中社に列す　○徒加修理、原本徒を從

○五月丁巳朔己未[三]、遣唐使上奏言、使等漂廻、嚴綸未允、雖風信之愆、乃是天時、而重行之累、頗有冥妨、況亘海之程、艱虞無測、不資靈祐、何以利征、請令諸國轉讀大般若經、是日詔、令五畿內七道諸國、始自今月中旬、至使等歸朝之日、堅固講海龍王經、相幷轉讀大般若經、○辛酉[五]、天皇御武德殿、觀騎射、○乙丑[九]、安藝國言、管驛家十一處、驛家別驛子百廿人、山路險阻、送迎繁多、良倍他國、勞逸不等、始自今年、減公廨穎、加擧三万一千二百束、以彼息利、充給驛子等食、許之、○丁卯[十一]、奉授出羽國從五位上勳五等大物忌神正五位下、餘如故、美濃國言、古樣弓弩、不可中用、徒

加修理、何用之有、今須弃古様廿脚、更造新様四脚、許之、○[十八]甲戌、百僧於八省院、限五箇日、轉讀大般若經、爲令天下豐樂也、○[廿五]辛巳、山城國飢、以近江國正税穀賑給之、○[廿八]甲申、地震、●六月丁亥朔、[二]戊子、地震、○[八]甲午、勅、令貢雜藥之國、不論未進多少、拘留醫師公廨、待返抄畢、而後充行、以爲恒例、○[九]乙未、勅、諸所貢蔭子孫位子等、須式部民部丞勘籍之日、於其戸籍姓名之上、具注合否之狀、兩省之丞、署名其下、治部兵部省亦宜同之、自今以後、立爲恒例、○[十]丙申、治部卿正四位下安倍朝臣吉人卒、年五十八、○[十五]辛丑、勅、天平寶字元年勅書曰、諸學生等、被任諸國博士并醫師之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、夫全取一年俸、物情難和、分折之事、宜有節級、須不論在國秉任、大國二百束、上國百五十束、中國百束、下國五十束、毎年拘留、隨國所出、交易輕物、博士料送大學寮、醫師料送典藥寮、大學博士侍醫等秉任之類、不在此限、○[廿一]丁未、大宰府言、府吏公廨、雖有未納、猶被以正税全給之、彼代令國司徴塡、若當國正税數少者、管內通行、許之、授正六位上橘朝臣貞根從五位下、○[廿二]戊申、勘發遣

に作る諸本に據て改む
○甲戌、此條紀略に據て補ふ
○辛巳、此條原本七月甲申條の次にあり紀略に據て此に移す
○甲申、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
(六月)丁亥朔、此三字宮本に據て補ふ原本六月七月次序倒置し錯亂多く壬子(廿六日)丁未(廿一日)乙未(九日)甲午(八日)斯くの如く次第す今干支を推して改め叙し類史紀略に據て戊子(二日)丙申(十日)辛丑(十五日)戊申(廿二日)の四條を補ふ
○戊子、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○雜藥、原本藥を物に作る類史に據て改む閣本前本等には空白とす諸國貢進年料雜藥の種目は典藥式に之を舉ぐ
○不論未進多少、原本論を許に、多を及に作る類史に據て改む
○畢而後充行、原本畢を了に作り而字なし水戸校本及類史に據て改め補ふ
○丙申、此條紀略に據て補ふ

〇辛丑、此條類史八十四に據て補ふ
〇戊申、此條紀略に據て補ふ
〇篁依病不能進發、篁は不平あり病と稱して進發せざりしなり其事下文十二月己亥紀に見ゆ
〇群書治要、五十卷唐魏徵撰
〇五經文、五字は類史及紀略に據て補ふ
〇勘解由使言、以下許之に至る廿一字は類史百七に據て補ふ
（〈七月〉）丙辰朔、朔字は紀略に據て補ふ此月全文六月條の前にありて錯亂多く丙寅（十一日）戊辰（十三日）癸酉（十八日）甲申（廿九日）辛巳（五月廿五日）壬申（十七日）丁丑（廿二日）丙寅（十一日）丙辰（朔日）以上の如く次第す今干支を推して改め叙し紀略に據て辛巳條を五月に移し庚申（五日）乙亥（廿日）庚辰（廿五日）の三條を補へり
〇卑濕、原本卑を皐に作る閣本に據て改む
〇水葱、抄菜蔬部藻類に水葱唐韻云蔱（楊氏抄云水葱奈岐一云蔱菜）水菜

唐使右近衛中將藤原朝臣助奏、副使小野朝臣篁、依病不能進發、〇（廿六）壬子、天皇御清涼殿、令助教正六位上直道宿禰廣公讀群書治要第一卷、有五經文故也、勘解由使言、使局史[　]下名簿、不給監試、便被補任、許之、〇秋七月丙辰朔、勅、如聞、諸家京中、好營水田、自今以後、一切禁斷、但元來卑濕之地、聽殖水葱芹蓮之類、〇（五）庚申、大宰府奏、遣唐使第一第四船進發、〇（十一）丙寅、天皇幸葛野川觀魚、賜扈從五位已上祿有差、令僧沙彌各七口、讀經於柏原（桓武）山陵、以有物恠也、兵部省言、准式部省、置扶省掌二人、許之、大和國飢、賑給、〇（十三）戊辰以仕町地長廿四丈廣四丈、爲陰陽寮守辰丁廿二人廬一居、〇（十七）壬申、分幣内外諸國名神、以祈秋稼也、〇（十八）癸酉、有物如粉、從天散零、逢雨不銷、或降或止、〇（二十）乙亥、東方有聲、如伐大鼓、〇（廿二）丁丑、勅、從彼青春、終此朱夏、雲膚屢興、雨液應作、隴畝之苗、秋稼可期、宜奉幣帛於伊勢大神宮、以祈成熟、〇（廿五）庚辰、令七大寺僧卌口於紫宸殿、限三箇日講仁王經一百卷、以恠異也、〇（廿九）甲申、天皇御八省院、奉幣伊勢大神宮、以禱豐年也、大宰府奏、遣唐第二船進發、〇八月丙戌朔（二）丁

可食とあり
○芹、同に本草云水芹（勢利）味甘平無毒一名水英
○蓮之類、之字は諸本及類史に據て補ふ
○庚申、此條紀略に據て補ふ
○第四、第字は紀略になし上文に據て補ふ
○丙寅、原本天皇より有差までを一條とし令僧沙彌より有物恠也までを又別條として揭げたるを紀略に據て此に合せ收む
○葛野川、一名大堰川といひ上流を保津川と云
○兵部省言、以下許之に至る十六字は類史百七に據て補ふ
○大和國飢賑給、此六字は紀略に據て補ふ
○以仕町地、狩谷氏は町恐丁といひ宮本には仕下に丁字を脫する歟と云
○守辰丁、職員令に掌伺漏尅之節以時擊鐘鼓とあり
○廬一居、纂詁廬舍に作る是なるが如し
○內外諸國名神、名神の名は臨時祭式に詳なり
○乙亥、此條紀略に據て補ふ矢野玄道翁曰七年九月紀云去承和五年七月五

亥、釋奠文宣王也、○戊子、天皇御紫宸殿、召大學博士學生等十一人、遞令論難昨日所講尙書之義、賜祿有差、是日遣唐使表奏到來、其表曰、臣常嗣等言、伏奉四月廿八日勅書慰問、臣等捧戴顚倒、涯分不次、施無遠近、資生之道潛通、恩及客旅、感化之心更切、臣等自辭闕庭、載離寒暑、國命未宣、勞勤頻年、雖有一生、分當萬死、不悟運關三秋、嚴霜不行常殺之命、天爲一物、偏恩曲煦埋枯之根、是知、臣等年齊栢寢、酬恩何期、紙馨蘭臺、書罪空滿、謹拜表以聞、○庚寅、以刑部卿正四位下源朝臣弘爲治部卿、信濃守加故、參議正四位下安倍朝臣安仁爲兼刑部卿、云云、○壬辰、奉授美濃國多紀郡无位久久美雄彦神從五位下、勅、五畿內七道諸國勅旨、幷親王以下寺家所占墾田地、未開之間、公私共利、若不隨憲法、令民愁苦者、國宰郡司解却見任、專當莊長科違勅罪、○乙未、大舍人頭從四位下占野王卒、○己亥、霹靂於監物前柳樹、往還人休于樹下、一男震死、一女傷脛、一童纔存、一女無恙、○甲辰、奉幣帛幷白馬於貴布禰神、丹生河上雨師、以祈止雨也、○乙巳、暴風大雨、壞民廬舍、○戊申、備前

日伊豆國上津島神異瑣火是其聲響也
○青春、類書纂要に春曰二青陽一言氣清而温陽也亦曰二青春一とあり

國飢、賑二給之一、○癸丑（廿八）、降雨殊切、奉二幣賀茂上下、松尾、乙訓、垂水、住吉等名神一、以祈レ霽焉、

○雲膚、雲を云　○雨液應作、西本尾本等及類史雨を旬に作を候に作る　○庚辰、此條紀略に據て補ふ　（八月）丙戌朔、此三字宮本に據て補ふ　○文宣王、我國にて孔子を文宣王と稱するは神護景雲二年七月紀大學助教膳臣大丘の奏に據る　○大學博士、原本博を轉に作る諸本に據て改む　○四月廿八日勅書、四月戊申に賜ひしものなり　○捧戴、原本戴を載に作る諸本に據て改む　○涯分不次、身分不相應なるを云　○施無遠近云々、遠く離るゝ客旅の身にも天恩を施さるゝこと隔なく是を以て感激の心更に切なりとなり資生之道は易坤卦の象傳に至哉坤元萬物資生とあるに出づ　○離寒暑、離は歷也　○運鬪三秋云々、三秋は孟仲季の三秋を云古へ刑獄の事は秋を以て行ふ故に周禮刑官を秋官に入れたり卽ち幸にして臣等に對しては三秋行刑の時なく天皇の御寬宥に據て嚴罰を免れたりとなり常殺は纂詁に肅殺と改めたり　○天爲一物云々、一物は淮南子に樹二一物一而萬葉生とあり煦は字彙に烝也温也又熱也と云　○年齊柏寢云々、藝文類聚四十九所載隋江總の表文に年齊二栢寢一（栢は柏の俗字）豈報二恩榮一祇謬二蘭臺一未レ書二悚戴一とあるに據れり柏寢は詳ならず蘭臺は漢書百官表に御史大夫有二兩丞一一曰二中丞一在二殿中蘭臺一掌二圖籍秘書一とあり幾年を經るも恩を酬ゆる時なく罪多くして書き盡し難きを云　○刑部卿正四位下、卿の字は宮本に據て補ふ　○爲治部卿、原本には治の上に衆の字あり衍なれば宮本に據て削る　○參議正四位下、安仁は補任に從四位下とす　○多紀郡、今養老郡に入る　○久久美雄彥神、美雄の二字は宮本及神名式に據て補ふ式に美濃國多藝郡久久美雄彥神社、今養老郡養老村澤田に祀る　○未聞之間、之字は類史に據て補ふ　○不隨憲法、隨は類史愼に作る　○占野王卒、世系詳ならず　○監物前、纂詁に前上恐脫二所字一とあり前或は所の譌か　○甲辰、此條原本乙巳條の次にあり、干支を推して改め叙す紀略亦原本に同じ　○貴布禰神、神名式に山城國愛宕郡貴布禰神社（名神大月次新嘗）とあり貴船村に祀り官幣中社に列す祭神は罔象女神臨時祭式祈雨神祭の條に丹生川上社貴布禰社各加二黑毛馬一疋一其霖雨不レ止祭料亦同但馬用二白毛一と見え祈雨止雨には必す此神を祭る　○丹生河上雨師、寶字七年五月紀に注せり　○戊申、此條紀略に據て補ふ　○乙訓、神名式に山城國乙訓郡乙訓坐大雷神社（名神大月次新嘗）とあり後廢亡して今は向日町向神社の相殿に奉祀すと云り　○垂水、同式に攝津國豐嶋郡垂水神社（名神大月次新嘗）、今豐能郡豐津村垂水に祀る

○九月丙辰朔、辛酉（六）、下野國那須郡三和神、預二之官社一、○癸亥（八）、又奉二幣馬於貴布禰、丹生河上雨師一、以祈レ止二風雨一也、○甲子（九）、是重陽之日也、天皇不レ豫、停二廢節會一、但賜二菊醑一、見參親王已下侍從已上、於二廊下一賜レ祿有レ差、○乙（十）

（九月）丙辰朔、此三字宮本に據て補ふ　○三和神、神名式に下野國那須郡三和神社、今同郡那珂村三輪に祀る　○菊醑、原本菊醑に作る水戸校本に據て改む二年九月辛亥紀に注す

○親王已下、已下の二字宮本に據て補ふ
○壬申、此條類史百五十九に據て補ふ
○神祇、原本神社に作る類史に據て改む
○畿內七道、七の字は紀略に據て補ふ
○米華、華は諸本花に作る
((十月))乙酉朔、此三字宮本に據て補ふ此月原本錯亂多く戊子(四日)甲午(十日)甲寅(三十日)乙未(十一日)丁酉(十三日)癸巳(九日)戊戌(十四日)丙午(廿二日)以上の如く次第せり今干支を推して改め敍せり
○永大帳、民部式に凡京職諸國大帳者每至班田之年五歲已下男女顯注年紀とあり之を永大帳と云なるべし
○多丁之戶、戶字は西本に據て補ふ
○多課之烟、課口多き家を云烟は戶に同じ
○比奈麻治比賣神、神名式隱岐國知夫郡比奈麻治比賣命神社、黑大村宇賀に祀る比奈の比字は宮本及神名式に據て補ふ
○雜官、原本官を宮に作

丑、頒使七大寺誦經、以聖體未康平也、寺別御被一條、以充布施、○己巳(十四)、定大宰管內地子交易法、綿一屯直稻八束、○壬申(十七)、近江國愛智郡荒廢田百七十町爲勅旨田、○甲戌(十九)、勅、令修理天下定額寺堂舍、并佛像經論及神祇諸社、○甲申(廿九)、從七月至今月、河內、參河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武藏、上總、美濃、飛驒、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六國、一一相續言、有物如灰、從天而雨、累日不止、但雖似恠異、無有損害、今茲畿內七道、俱是豐稔、五穀價賤、老農名此物米華云、○冬十月乙酉朔戊子(四)、遣左兵庫頭從五位上岡野王等、奉神寶於伊勢大神宮、○癸巳(九)、民部省言、永大帳口率之數、或國戶到二三丁、或國戶到三四丁、而頃年撿損田使帳、多丁之戶定是遭損、多課之烟、必以爲得也、通計之率、理不可然、自今以後、損得戶丁、彼此同率、許之、○甲午(十)、奉授隱岐國无位比奈麻治比賣神從五位下、○乙未(十一)、勅、畿內諸國雜官稻代收錢、一切禁之、○丁酉(十三)、喚集諸司官人能書者五位已下卌人於冷然院、奉寫金剛壽命陀羅尼經一千軸、是日天皇遷自常寧殿、御清涼殿、詔曰、人之度量、器非一同、識鑒行能、各

る諸本及類史に據て改む
○卅人、原本卅人に作る閣本西本前本及紀略に據て改む
○金剛壽命陀羅尼經、大藏目錄に佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經一卷唐金剛智共智藏譯とあり
○還自常寧殿、常寧殿に御すること四月乙卯紀に見ゆ
○詔曰、以下爲例進之に至るまでは類史百七十九に據て補ふ
○翹楚、毛詩周南漢廣章に翹々錯薪言刈其楚とあるに出づ衆に卓出するを云
○道棟梁、漢書陳球傳に公爲國棟梁などあり此は佛道の統領たる人の義
○年臈、釋氏要覽下に夏臘卽釋氏法歲也凡序長幼必問夏臘多者爲長云々臘接也前安居入制至七月十五日爲受臘之日若俗歲除日也至十六日名新歲也とあり
○須綱一人、纂詁に須綱疑僧綱之云
○擧頭、一同より選擧せられたる人を云
○丙午、此條紀略壬寅に係く壬寅は十八日なり

有歸趣、宜智德翹楚、爲道棟梁者、無問隱顯、不限員數、同共選擧、其道業優潤、能堪傳燈、及精進苦行、衆所共知、每大寺、簡擇七人已下、具注年臈、若無此類、不可强擧、縱雖人多、同宗之人、不得專擧、遍詢諸業、仍須綱一人、每寺須顯對大衆而撰之、令別當三綱幷擧頭同署其帳、皆三年一度造簿、十月之內、爲例進之、○戊戌、酉剋、白虹竟西山南北、長卅許丈、廣四許丈、須臾而銷焉、○丙午、是夜彗星見東南、其氣赤白、竟天數許里、須臾而不見、授正六位上安倍朝臣綱繼從五位下、○庚戌、彗星猶見、○甲寅、太政官處分、大宰府例進緋綿紬一百端、今定紺紬十端、黑緋紬卅端、緋紬五十端、畫革五十枚、今定白革卅枚、畫革廿枚、○十一月乙卯朔辛酉、勅、廼者妖祥屢見、氛祲不息、思民與歲、忘寢與食、其令黎庶無疾疫之憂、農功有豐稔之喜、不如般若妙詮之力、大乘不二之德、普告京畿七道、令書寫供養般若心經、仍須國郡司幷百姓、人別俾出一文錢、若一合米、郡別於一定額寺若郡舘、收置之、國司講師惣加撿挍、所出之物、分爲二分、一分充寫經料、一分充供養料、其米來年二月十五日、各於本處、屈請精進

練行堪演說者、開設法筵、受持供養、當會前後幷三箇日內、禁斷殺生、公家所捨之物、每一會處、以正稅稻一百束充之、庶使普天之下、旁薰勝業、率土之民、共登仁壽、○丁卯（十三）、授正六位上百濟王教凝從五位下、又授外從六位下宇漢米公毛志外□五位下、以曾經征戰有勳功也、○辛未（十七）、彗星見東方、是星起十月廿二日、至今月十七日、每夜寅剋見東方、其長七八許丈、○甲戌（二十）、以從五位上眞國王爲大舍人頭、從五位下文室朝臣氏雄爲內匠頭、正五位下藤原朝臣嗣宗爲兼兵部大輔、少納言如故、從五位下岡於王爲內膳正、從四位下滋野朝臣貞主爲彈正大弼、從五位下藤原朝臣諸氏爲右衞門權佐、侍從從四位下正行王爲兼越中守、從四位下和氣朝臣仲世爲阿波守、從五位下在原朝臣仲平爲豐前守、右京人散位從七位上勳九等坂上忌寸豐雄、改忌寸賜宿禰、○辛巳（廿七）、皇太子於紫宸殿加元服、詔、皇太子恒貞、風標岐嶷、元稟溫潤、毓問東華、守器上序、離幼從長、日以躋昇、令月休辰、肇修元服、義兼四禮、道重三加、盛德以之克融、承祧由其逾楙（サカムナリ）、嘉慶之事、豈獨在予、宜洽愷澤、被之率土、可賜

○是夜、是字は紀略に據て補ふ
○數許里、里字は閣本西本前本に據て補ふ
○庚戌、此條紀略に據て補ふ
○黑緋紬、民部式大宰府別貢條には黑緋を深緋に作る
○晝革五十枚、原本革を華に、枚を枝に作る閣本尾本前本に據て改む下同じ
（十一月）乙卯朔、此三字宮本に據て補ふ
○廼者、原本廼を廻に作る閣本西本宮本に據て改む
○氛祲、氛は原本氣に作る諸本に據て改む字書に氛祲妖氣也とあり
○妙詮、詮は原本經に作る諸本に據て改む詮は字書に解喩也擇言也とあり
○共米、共は閣本西本前本等取に作る
○公家、朝廷を云
○丁卯、此條類史九十九に據て補ひ又授以下は同百九十に據る
○七八許丈、原本七尺許に作る紀略に據て改む
○侍從從四位下正行王、閣本前本中本等從一字な

天下爲父後者、六位已下爵一級、承和四年以往言上租稅未納、咸從免除、普告中外、俾知此意、无位佐伯宿禰貞子、紀朝臣是子、栗前眞人永子、吉野眞人高子、並授從五位下、以東宮侍女也、是日亦源朝臣融於內裏冠焉、天皇神筆叙正四位下、嵯峨太上天皇第八皇子、大原氏所產也、賜之天皇、令爲子、故有此叙、賜見參親王已下五位已上祿有差、○癸未、先太上天皇先御冷然院、次御神泉苑、放隼擊水禽、天皇獻御馬四疋、鷹鷂各四聯、嗅鳥犬、及御屛風、種々翫好物、授无位源朝臣生從四位上、從五位下滋野朝臣貞雄從五位上、從四位上笠朝臣繼子正四位下、從五位上內藏宿禰影子從四位下、无位菅原朝臣閑子、大中臣朝臣岑子並從五位下、以當日陪奉先太上天皇近臣侍女之類也、賜扈從諸臣、及外記官史內記等祿、各有差、○甲申、律師傳灯大法師位慈朝卒、俗姓長尾氏、右京人、神護景雲四年、得度法相宗、住西大寺、故少僧都常騰之入室也、卒時年八十二、嵯峨太皇太后御朱雀院、宴五位已上、賜祿有差、○十二月乙酉朔甲午、彈正臺奏、朝服之色、明在法條、而今會集之時、

し山崎校本には侍從の二字を衍文とす
○風標岐嶷、風標は風采なり嶷は原本山疑の二字に作る諸本に據て改む岐嶷は既に注す
○元稟溫潤、元稟は天稟に同じ溫潤は原本溫問に作る水戶校本に溫問疑溫潤之訛と云るに據て改む
○籠問東華云々、籠問の二字は閣本西本に據て補ふ藝文類聚十六所載宋（南北朝）謝莊皇太子元服表に籠問東華飛英上序とあるに據れり東華は宋史地理志に東京宮城東西面門曰東華西華とあり上序は上位と云に同じ守器は易序卦傳に主器者莫若長子とあるに據れり
○離幼從長、今年御年十四歲になり給ひしを云
○令月休辰、令は原本今に作る諸本に據て改む
○義兼四禮、白虎通に四禮謂君臣父子兄弟朋友也とあり
○道重三加、禮記冠義に三加彌尊、注に初加緇布冠次加皮弁次加爵弁とあり卽ち元服の儀式なり

有緣無縹、借上之弊、遂失致敬、稽之朝儀、理不可然、紫緋之品、其灼然、易就而正、緣縹之次、其類猥多、難得而紀、若非早糺正、恐流連忘返、望請、仰式兵兩省、俾文武諸司移八位以下人位姓名於臺、仍遣巡察等對勘位色、若猶不改、年五六月爲例令移奏、許之、〇丙申、山城國宇治郡公田一町五段三百歩、賜左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、〇丁酉、延名僧百口於八省院、令轉讀御願奉寫金剛壽命陀羅尼經千軸也、〇己亥、天皇於淸凉殿、修佛名懺悔、限以三日三夜、律師靜安、大法師願安、實敏、願定、道昌等、遞爲導師、内裏佛名懺悔自此而始、是日勅曰、小野篁、内含綸旨、出使外境、而稱病故、不遂國命、准據律條、可處絞刑、宜降死一等、處之遠流、仍配流隱岐國、初造舶使造舶之日、先自定其次第名之、非古例也、使等任之、各駕而去、一漂廻後、大使（常嗣）上奏、更復卜定、換其次第、第二舶改爲第一、大使駕之、於是副使篁怨懟、陽病而留、遂懷幽憤、作西道謠、以刺遣唐之役也、其詞牽興多犯忌諱、嵯峨太上天皇覽之、大怒令論其罪、故有此竄謫、〇壬寅、佛名懺悔竟、施導師僧五口、物及得度者各一人、〇甲辰、從

〇承祧由其塗歷、祧は始祖の廟なり之を承繼すべき德の彌盛なりとの意宮本其を斯に作る

〇嘉慶之事云々、孝經に一人有慶萬邦賴之とあるに出づ

〇陸澤、原本澤を決に作る諸本に據て改む

〇粟前眞人、原本粟を栗に眞人を直久に作る閣本西本前本等に據て改む

〇吉野眞人、原本眞を直に作る閣本に據て改む錄左京皇別に吉野眞人出自諡敏達孫百濟王之後也とあり

〇神筆、原本抽筆に作る諸本に據て改む宸筆と云に同じ

〇嵯峨太上天皇、太上の二字は諸本に據て補ふ

〇第八皇子、皇字は紀略に據て補ふ

〇大原氏、宮人、名は全子

〇嗅鳥犬、獵犬なり元年正月紀に見ゆ

〇源朝臣生、嵯峨天皇の皇子

〇慈朝卒、元亨釋書に載せず

〇故少僧都常騰之入室也、故は原本效に閣本前

本中本放に作る西本に據て改む常臘は弘仁六年九月紀（後紀二一五頁）に傳見ゆ入室は高弟を云
○嵯峨太皇太后、原本太皇を天皇に作る諸本に據て改む
○朱雀院、拾芥抄中末に累代後院或號西條後院三條北朱雀西とあり
（十二月）乙酉朔、此三字宮本に據て補ふ山崎校本に類史廿八云十二月辛酉朔乙丑天皇始御紫宸殿按此月乙酉朔非辛酉朔以朔爲辛酉乙丑五日也然與本史及通曆不合恐類史當有誤故今不取さ云り
○明在法條、衣服令を云
○有綠無縹、衣服令に朝服六位深綠衣七位淺綠衣八位深縹衣初位淺縹衣さ見ゆ綠さ縹さの區別は說文に綠帛青黃色、縹青白色也さあり
○其灼然、纂詁に其下に色字を補へり
○流連忘返、原本連を道に忘を忌に作る連は纂詁に據り忘は諸本に據て改む
○式兵兩省、式部兵部の二省

五位上藤原朝臣春津爲侍從、○乙巳、[廿一]山城國紀伊郡空閑地二町八段賜繁子內親王、○庚戌、[廿六]芳子內親王薨、嵯峨太皇太后所誕第五皇女也、依太后旨、停監護使、○辛亥、[廿七]追小野篁所帶正五位下之告身、大安寺僧傳灯大法師位壽遠卒、俗姓椋橋部氏、武藏國人也、延曆之末、出家得度、大法師安澄之入室、而三論之學有聲、最精因明、諸人推服、卒時年六十八、

○臺、彈正臺なり
○巡察等、職員令に巡察彈正十人、掌巡察內外糺彈非違とあり
○對勘位色、令制示す所の色と實物とを對比して勘檢するを云
○陀羅尼經、本寫の事十月丁酉紀に見ゆ
○佛名懺悔、公事根源に佛名といふは三世の諸佛の名號を唱て六根の罪を滅する心なりとあり
○靜安、元亨釋書九に靜安從西大寺常騰學法相、晉居比良山、讀十二佛名經、禮拜修懺、其聲聞帝闕、諸州間有聞者、因茲勅賜僧官、承和五年奏置宮中季冬佛名懺とあり
○自此而始、元亨釋書資治表に天長七年冬十有二月修佛名懺禮于宮中と見ゆ
○小野篁云々、六月戊申紀を參看すべし
○降死一等、原本死下に罪字あり諸本に據て削る　○仍配流隱岐國、仍字は諸本に據て補ふ刑部式に隱岐は遠流の國とす　○換其次第、原本換を損に作る諸本に據て改む
○西道謠、佚して傳はらず　○奉輿、原本牽輿に作る閣本尾本に據て改む牽は遵也循也輿に循ふ意か山崎校本には原文を改めずして狩谷氏曰輿恐當作而と注す　○有此篁謫、篁流謫のこと今昔物語古事談江談抄等に見ゆ　○導師僧五口、名は上に見ゆ　○得度者、山崎校本に得疑賜と云類史百七十八には者字なし　○繁子內親王、嵯峨天皇の皇女　○停監護使、親王の薨去には治部大輔喪事を監護すること喪葬令に見ゆ　○追小野篁云々告身、追は褫、告身は位記なり　○壽遠、元亨釋書に見えず　○椋橋部氏、錄攝津雜姓に椋椅部連伊香我色乎命之後とあり　○安澄、元亨釋書二に安澄善議之上足也とあり　○因明、翻譯名義集五(攝拖恣馱條)に大論言五明者云々四因明考定正邪研覈眞僞とあり今の論理學なり

續日本後紀卷第七

○承和、此二字宮本に據て補ふ

【承和六年】廢朝賀、朝野群載廿一中原師平寬治三年廢朝勘文に天皇是嵯峨天皇第二子也雖爲淳和天皇之養子若就本生被停朝賀歟とあり

○薨背、薨去と云に同じ

○弟河王、原本弟を第に作る前本及類史九十九に據て改む

○並從四位上、並字は宮本及類史に據て補ふ

○正五位上善道朝臣、原本上を下に、朝臣を宿禰に作る宮本及前後の文に據て改む

○濱雄、濱字は宮本及甲子條に據て補ふ水戶校本には闕に作る

續日本後紀卷第八

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

起承和六年正月盡十二月

(己未)六年春正月甲寅朔、廢朝賀、緣天皇之同産芳子內親王去月薨背也、是日、天皇不御紫宸殿、但於陣頭賜侍從已上酒及祿、○庚申、天皇御紫宸殿、覽靑馬、宴百官、詔授正四位下菅原朝臣淸公從三位、正五位下基棟王從四位下、從五位下有雄王、岡於王、並從五位上、正六位上弟河王、野長王、並從五位下、從四位下橘朝臣氏人、滋野朝臣貞主、藤原朝臣助、並從四位上、正五位上善道朝臣眞貞、百濟王慶仲、並從四位下、從五位上藤原朝臣貞雄、橘朝臣岑繼、高道宿禰鯛釣、並正五位下、從五位下藤原朝臣岳守、大春日朝臣公守、並從五位上、外從五位下御船宿禰淸風、正六位上藤原朝臣良方、藤原朝臣近主、藤原朝臣濱雄、朝野宿禰貞吉、藤原朝臣友長、佐伯宿禰三松、藤原朝臣正雄、橘朝臣枝主、丹墀眞人

○宮城、城は類史成に作る
○御園、原本園を圓に作る諸本に據て改む
○志紀、原本志を老に作る水戶校本に據て改む
○藤原朝臣貞子、臣字は諸本に據て補ふ貞子は今上の女御
○種子、種は原本穉に作る閣本西本に據て改む種子は今上の更衣
○鳳子並從五位下、原本下を上に作る誤りなること明なれば改む
○從四位上藤原朝臣雄敏、原本上を下に作る閣本西本中本に據て改む
○興道、原本眞道に作る水戶校本及前後の文に據て改む諸本與に作るは興の訛なり
○長良、良字は宮本に據て補ふ
○伊□守、原本伊豫守に作れど諸本には之を闕く今前後の文を考へて姑く諸本に從ひ缺字とす
○在原朝臣仲平、朝臣の二字は宮本に據て補ふ

氏永、高階眞人黑雄、佐伯宿禰宮成、吉野眞人宮城、紀朝臣松永、並從五位下、正六位上清內宿禰御園、志紀宿禰永成、直道宿禰廣公、物部首廣泉、春江宿禰安主、尾張連濱主、並外從五位下、○辛酉（八）、於大極殿始修最勝會、是日、授從四位下藤原朝臣貞子從三位、无位紀朝臣種子正五位下、從五位下橘朝臣枝子、无位藤原朝臣仲子、安倍朝臣貞子、並從五位上、无位橘朝臣小數、藤原朝臣鳳子、並從五位下、○甲子（十一）、以從五位下藤原朝臣秋常爲少納言、正五位下藤原朝臣嗣宗爲右中弁、從四位下百濟王慶仲爲民部大輔、從五位下藤原朝臣濱雄爲少輔、從四位上藤原朝臣雄敏爲兵部大輔、從四位上滋野朝臣貞主爲兼大和守、彈正大弼如故、從五位下小野朝臣興道爲左衞門佐、從四位下藤原朝臣長良爲左馬頭、正五位下高道宿禰鯛釣爲攝津守、從四位下大枝朝臣總成爲伊□守、從五位下惟良宿禰貞道爲兼伊勢介、圖書頭如故、從五位下在原朝臣仲平爲駿河守、從五位下藤原朝臣友永爲介、從五位下藤原朝臣伊勢雄爲甲斐守、從五位上藤原朝臣貞成爲相摸權守、外從五位

下出雲朝臣全嗣爲武藏介、從四位上源朝臣明爲兼近江守、大學頭如故、從五位上安倍朝臣濱主爲介、從五位下出雲朝臣岑嗣爲美濃權介、權中納言從三位藤原朝臣良房爲陸奥出羽按察使、左兵衞督如故、從五位下紀朝臣松永爲若狹守、從四位上源朝臣寛爲加賀守、從五位下藤原朝臣良方爲介、從五位下眞福良王爲能登守、從五位下丹墀眞人氏永爲越後守、從四位下正躬王爲丹波介、正五位下坂上大宿禰鷹主爲但馬守、外從五位下志紀宿禰永成爲伯耆介、從五位下藤原朝臣貞根爲出雲守、從五位下朝野宿禰貞吉爲美作介云云、從五位下菅野朝臣永岑爲兼豐前守、主殿頭齋院長官如故、○[十四]丁卯、最勝會竟、更引名僧十餘人於禁中、令論義、訖施御被云云○[十六]己巳、天皇御紫宸殿、覽踏歌、宴侍從已上、賜祿有差、○[十七]庚午、天皇觀大射於豐樂院、○[二十]癸酉、天皇內宴于仁壽殿、公卿及知文者三四人得昇殿、同賦雪裏梅之題、訖賜祿有差、○[廿三]丙子、彗星見兌方、長一許丈、參議從四位上民部卿勳六等朝野宿禰鹿取抗表乞老、優詔不許、伊勢守從四位下丹墀眞人清貞卒、○[廿六]己卯、

○全嗣、原本全を金に作る西本尾本前本及五年正月丙寅紀に據て改む
○源朝臣明、原本源を藤原の二字に作る諸本に據て改む
○良方、原本良房に作る諸本に據て改む
○正躬王爲丹波介、七年八月辛亥紀に據るに介は守の誤なるべし
○令論義訖施御被云々、原本義を議に作り訖字なし柳本水戸校本に據て改め補ふ又云々の二字は諸本に據て補ふ
○雪裏梅、裏字は原本裡に作る閣本柳本宮本及紀略に據て改む
○兌方、西方なり
○一許丈、原本一丈許に作る閣本柳本及紀略に據て改む

以伊勢國桑名郡多度大神宮寺爲天台一院、〇閏正月甲申朔乙酉、天皇朝覲先太上天皇於嵯峨院、是日、以正四位下源朝臣融、從四位下正道王、並爲侍從、賜扈從群臣祿有差、〇丁亥、奉授周防國無位三坂神從五位下、〇甲午、內藏助從五位上藤原朝臣良相爲頭、〇戊戌、織部司織手町災、燒百姓廬舍數烟、〇己亥、行幸美都野、山城國獻御贄、賜親王已下國司判官已上祿、各有差、日暮還宮、〇丙午、勅、如坻之貯由有年、多稌之穫在務業、去年勸農、諸國致稔、今茲不勸、習俗猶怠、宜令諸道諸國勸課農桑、必期豐衍、上野國言、前年綱領郡司等、稱塡調庸欠、并減直物借取諸司諸家出擧錢、其手實云、附來年使將報上、而不令後年綱領知情、而封家諸司等、便割調物、先補錢代、廻利爲本、動成數倍、年中所報、殆及萬貫、官物未進、大率由此、望請、下知諸家以除此煩者、仰下諸司諸家七道諸國禁制之、勅、如聞、諸國疾疫、百姓夭折、宜令天下國分寺、限七ケ日、轉讀般若、兼遣僧醫、隨道治養、又令鄕邑每季敬祀疫神、〇辛丑、行幸水成瀨野遊獵、山城攝津兩國獻御贄、賜親王已下侍從及國司

〇多度大神宮寺、多度神社は神名式伊勢國桑名郡多度神社(名神大)是なり同寺資財帳に天平寶字七年僧滿願の創立せし所なりとあり

(閏正月)先太上天皇、先字は類史廿八及紀略に據て補ふ

〇三坂神、神名式周防國佐婆郡御坂神社、出雲村岸見

〇織手町、拾芥抄中末に織部町鷹司北猪熊西とあり

〇美都野、左馬寮式に山城國美豆厩あり今久世郡佐山村御牧村及木津川を隔て綴喜郡美豆村あり並に古の美都野なり

〇如坻之貯、毛詩小雅甫田章に曾孫之庾如坻如京、注に坻水中之高地也とあり倉庫に山の如く粟を貯ふるを云原本坻を坦に西本中本前本坵に作るは坦の訛なれば改む

〇多稌之穫在務業、同周頌豐年章に豐年多黍多稌、注に稌は稻也とあり收穫の多きは農民の勤勉に據れりとなり原本在上に之字あり山崎校本に據て削る

已上祿有差。○二月癸丑朔乙丑、天皇先幸神泉苑、次遊覽北野、皇太子從駕、山城國獻御贄、便駐蹕於右近衛馬埒、命先驅近衛等、騁試御馬之遲疾、日暮還宮、○丁卯、令東西兩寺講讀般若心經、以彗星頻見也、○庚午、以從五位下文室朝臣助雄爲玄蕃頭、從四位下和氣朝臣仲世爲刑部大輔、從五位下豐前王爲大膳大夫、外從五位下大岡宿禰豐繼爲木工助、從四位上紀朝臣名虎爲兼掃部頭、備前守如故、從五位下愛宕王爲內膳正、外從五位下秦宿禰氏繼爲造酒正、從五位上岡於王爲齋宮長官、從四位下坂上大宿禰清野爲右馬頭、從五位下佐伯宿禰宮成爲助、正五位下永野王爲下野守、從五位上山名王爲阿波守、從五位下文室朝臣笠科爲土左守、○丁丑、授從四位上百濟王勝義從三位、正六位上百濟王永仁從五位下、○戊寅、播磨國印南郡佐突驛家、依舊建立、越前國氣比大神宮雜務、停預國司、隷神祇官、○三月壬午朔、勅、遣唐三艘舶、恐有風波之變、宜令五畿內七道諸國及十五大寺、轉讀大般若經及海龍王經、待使者歸朝、爲轉經之終、○乙酉、陸奧國百姓三万八百五

○去年、原本去上に得字あり諸本に據て削る
○豐衍、原本豐年に作る西本柳本尾本及紀略に據て改む衍は饒也
○綱領郡司、民部式に凡官物運京應差綱領者米三百石已上差國司史生已上勝任者充、不滿此數差郡司及子弟並百姓殷富家口重大者云々とあり
○手實、戶令義解に手實者戶頭所造之帳とあり手づから書ける帳簿なり
○下知諸家以除此煩者、諸家以下勅知聞に至るまでは閣本柳本水戶校本及類史七十九に據て補ふ
○致祀疫神、原本祀を禮に作る諸本に據て改む原本神下に伊勢守以下十四字あり柳本なし既に正月丙子條に出でたれば削る
○辛丑、類史紀略も亦同じければ紀略に閏正月の最末に置けば辛亥の誤なるべし故に此に存して改めず辛亥は二十八日なり
○國司已上、國司の下主典の二字を脫せるか
（二月）駐蹕、原本蹕を驛に作る閣本前本及類史卅一に據て改む、

○右近衛馬埒、右近衛馬場は一條大宮にありと河海抄に見ゆ
○騁試、原本騁を駛に作る諸本に據て改む
○豐前王、原本王を守貞成の三字に作る諸本に據て改む
○齋宮長官、原本宮を官に作る諸本に據て改む
○山名王爲阿波守、七年六月甲寅紀に再び見ゆ
○佐突驛家、兵部式に載せず倭名抄鄕名にも見えねど今同郡別所村大字に佐土、佐土新あり是佐突驛家の址ならむと地理志料に云り
（三月）窮弊、原本窮を究に作る諸本に據て改む
○下野、諸本に據て補ふ
○通爲同色云々、爲字は閣本柳本に據て補ひ云々の二字は諸本に據て補ふ
○長訓、文德紀齊衡二年九月己巳紀に傳見え亦釋書にも出づ
○修理坊城使、標注職原抄に三代格天長元年の官符に左右坊城使あり坊は京內諸坊、城は宮城にて大內の外郭又は左右京の坊門など修理の職ならん歟云々とあり

十八人給復三年、爲濟窮弊也、勅、令相摸、武藏、上總、下總、常陸、上野、下野七國、相分卷數、寫進一切經一部、其經修飾、通爲同色、云云、○壬辰、授掌侍正五位下大和宿禰館子從四位下、從五位下菅原朝臣閑子爲掌侍、○乙未、大法師長訓爲律師、○丙申、修理坊城使員、左右各二員、今省定置各一員、停給內外權任郡司職田、云云、○丁酉、遣唐三箇船所分配、知乘船事從七位上伴宿禰有仁、暦請益從六位下刀岐直雄貞、暦留學生少初位下佐伯直安道、天文留學生少初位下志斐連永世等、不遂王命、相共亡匿、稽之古典、罪當斬刑、勅、特降死罪一等、配流佐渡國、○己亥、授從四位下百濟王惠信從三位、○庚戌、奉幣貴布禰雨師二神、以祈雨也、比及晩頭、雷雨、賜諸衛府等祿有差、云云、加賀國高雄山寺爲眞言別院、○夏四月壬子朔、癸丑、遣右近衛將監正六位上坂上大宿禰當宗、近衛及俘夷等於伊賀國、索捕名張郡山中私鑄錢群盜凡十七人、進鑄錢作具及錢等、○甲寅、中納言兼右近衛大將從三位橘朝臣氏公、上表請辭大將職、優詔不許、云云、○乙卯、授

從五位下淨野宿禰良山從五位上○戊午、地震、改越前國人造兵司正六位上味眞公御助麻呂本居、貫附左京五條一坊、美濃國惠奈郡飢、賑給之、○庚申、右京人正六位上次田連魚麻呂等七人賜姓忠宗朝臣、○辛酉、遣使祈雨於丹生雨師神、以從四位下云云、○壬戌、天皇曲宴于紫宸殿、賜大臣御衣、自外群臣、祿各有差、○甲子、奉授无位白玉手祭來酒解神從五位下、○乙丑、授正六位上大神朝臣野主從五位下、○丙寅、火于左馬寮國飼町、其燼飛落中院細殿之上、撲滅焉、○丁卯、兵部省言、頻年王臣、幷非參議四位已上、走馬不據召計、越次競入、或由人情、或在馬力、前後倒錯、難禁亂奔、望請、走馬到埒南頭、令各從者攝其馬銜、卽應召計、隨序放進、亂奔埒中、抑留其次、先糺亂馬、依止奏訖、然則甲乙分明、朝禮儼然、依請許之、○戊辰、誦經于都下七寺、以天皇不豫也、勅頒幣於松尾、賀茂上下、貴布禰、丹生川上雨師、住吉諸社、令祈澍雨、又限七箇日、令讀仁王經於十五大寺、兼通城外崇山有驗之寺、同俾轉經、並以自春迄今不雨也、○辛未、一向令七道諸國宰、奠幣名神、雩致甘雨、○

○內外權任郡司職田云々、內は畿內、外は畿外の諸國なり郡司の職田は田令に大領六町少領四町主政主帳各二町とある是なり職田下の云々の二字は諸本に據て補ふ
○曆請益、原本請なし諸に作る諸本に據て改む
○刀岐直、原本岐を波に作る諸本に據て改む
○亡匿、原本亡を巳に作る水戶校本に據て改む
○庚戌、原本戌を成に作る諸本に據て改む
○貴布禰雨師二神、雨師は丹生川上神社を云
○永原朝臣眞殿、水戶校本殿を敏に作る
○加賀國高雄山寺云々、加賀以下は類史百八十に據て補ふ高雄山寺の所在詳ならず
（四月）俘夷、原本俘を浮に作る諸本に據て改む
○伊賀國、賀は原本勢に作る柳本宮本に據て改む
○進鑄錢作具及錢等、此八字柳本前本等分注さす
○優詔不許云々、云々の二字は諸本に據て補ふ
○良山從五位上、原本此下に女御藤原朝臣淨子（澤子の誤）の傳見え六月

壬申、遣從五位下高原王等、奉幣於伊勢大神宮、令祈雨、是日發遣寄使等於山城國宇治、綴喜、大和國石成、須知等社、自餘之國、便令國司寄焉、○丙子、遣勅使於神功皇后山陵、宣詔曰、天皇我詔旨良万止、恐美恐美毛申賜閉止申久、比日御陵乃木伐止聞食爾依天、差使天撿見爾實爾有氣利、因茲天、恐畏己止無極、御陵守等乎波犯狀乃隨爾勘爾勘賜牟止定太利、此過爾依天也、比日之間、旱災有良牟止畏天、左右爾念賜爾、掛畏支天朝乃護賜比矜賜爾依旦之、此災波滅天、國家波平介久、無事久可有止思賜天奈毛、參議從四位下守刑部卿安倍朝臣安仁、從四位下中務大輔兼備前守紀朝臣名虎等乎差使天、護賜比矜賜閉支狀乎申賜久止申、是日終日密雲、○丁丑、勅符陸奥守正五位下良岑朝臣木連、鎭守將軍外從五位下匝瑳宿禰末守等、得今月十三日奏狀、知調發援兵一千人、案奏狀、倂災星屢見、地震是頻、奥縣百姓多以畏逃、又膽澤多賀兩城之間、異類延蔓、控弦數千、如有驚急、難可支禦、須徴發援兵、靜民赴農、又多賀城者、爲膽澤之後援、不益兵數、何以救急、伏願、依件加配、四五月間、結般上下、暫候時變、其粮料者、

己卯條にも見ゆ狩谷氏云、澤子事見三代實錄元慶八年六月十九日條、又按本朝月令六月晦日文宜以六月己卯爲正さ水戸校本山崎校本等此を删て彼を存す今之に據る

○味眞公、倭名抄に越前國今立郡味眞(阿知末)郷あり味眞は此に因れり

○美濃國云々、此十字柳本になし

○次田連、原本次を茨に作る閣本柳本前本等に據て改む錄河內神別に次田連火明命兒天香山命之後也さあり靈異記に河內人鋤田沙門某姓鋤田連など見えスキタさ訓べし

○以從四位下云々、原本以の下に奉授の二字あり諸本になし故に之を削り柳本に據て云々の二字を加ふ纂詁に按日本紀略弘仁九年四月吉野郡雨師神授從五位下以祈雨也本史明年十月授正五位下丹生川上神正五位上八年九月晉從四位下可知此云授從四位下者謬故删之さ云

○曲宴、原本曲を內に作る諸本及類史に據て改む

○白玉手祭來酒解神、神

用當處穀、但上奏待報、恐失機事、仍且發且奏者、兵不豫備、不可應機、今依請許之、宜能守要害、察制權變、○戊寅、會百法師於八省院、限三箇日、轉大般若經、以祈雨焉、諸司爲之醋食、是日晚來雨降、終宵不休、

○五月辛巳朔癸未、和泉國言、以在和泉郡安樂寺、爲國分寺、置講師一員、僧十口、但不置讀師、依請許之、○乙酉、是端五之節也、天皇御武德殿、觀騎射、○辛卯、云々、右兵庫頭從五位上藤原朝臣貞吉爲上野介、從五位下小野朝臣末繼爲安藝權守、從五位下藤原朝臣正雄爲肥前介、始自今日、限三箇日、爲賀茂大神、轉讀金剛般若經一千卷、○壬辰、河內

名式に山城國乙訓郡自玉手祭來酒解神社(名神大月次新嘗元名山埼社)原本に自を白に祭を奈に作る自は宮本に據り祭は諸本及神名式に據て改む

○大神朝臣、原本大を太に作る諸本に據て改む　○左馬寮國飼町、御馬に寮飼(㮶飼と云)國飼の別あること左馬寮式に見ゆ　○中院、神嘉殿を云細殿は抄居處部に寢也韻云殿(漢語抄云保曾度能)殿下外屋也とあり類史には細を納に作る　○馬銜、原本銜を御に作る柳本及類史に據て改む　○依止奏託、原本止奏を正美に作る正は山崎校本に據り奏は諸本に據て改む　○儼然、然は諸本に據て補ふ　○依請、請は諸本に據て補ふ　○城外、外字は閣本柳本尾本等に據て補ふ　○辛未、原本未を丑に作る干支を推すに此月辛丑なし山崎校本に據て改む　○雩、雨を請ふ祭　○是日、原本此日に作る諸本に據て改む　○宇治、神名式山城國宇治郡宇治神社二座(鍬靫)是か　○石成須知、石成は續紀神龜三年七月乙未紀に奉幣帛於石成一と見え倭名抄に大和國山邊郡石成郷あれば此地に祀れる神なるべし須知は大和には見えず伊賀國阿拜郡須知荒木神社或は是ならむか倚よく考ふべし　○神功皇后山陵、狹城盾列池上陵、今生駒郡平城村山陵にあり　○比日、原本比を此に作る諸本に據て改む　○恐畏已止、止字は山崎校本に據て補ふ　○勘爾勘與平止、原本爾を科に作るも閣本前本等空白とす今柳本に據て改む同語を二つ重ねたるは其意を強からしめむとてなり　○平介久、原本久を支に作る諸本に據て改む　○安倍朝臣、原本倍を陪に作る諸本に據て改む　○膽澤多賀兩城、共に既に注す多賀は今陸前國宮城郡多賀城村、膽澤は今陸中國膽澤郡佐倉河村鎭守府八幡宮の地是なり　○驚急、驚は水戸校本警に作る是なるが如し　○支櫱、原本支を與に作る諸本に據て改む　○結綏、綏は番に同じ　○且發且奏、且發の二字は閣本柳本中本等に據て補ふ　○醋食、上に出づ

(五月)國分寺、和泉志に國分寺在和泉郡國分村今稱福德寺とあり今泉北郡南池田村國分に東堂僅に存す

○端五、類史紀略端午に作る

○辛卯、云々、云々の二字は諸本に據て補ふ、辛卯と右兵庫頭との間に脫文あるべし

○志紀郡、原本志上に河

字あり諸本に據て削る志紀郡は今南河内郡に屬す
○延曆寺、近江國滋賀郡比叡山にあり天台宗の大本山なり
○高天彥神、神名式大和國葛上郡高天彥神社（名神大月次相嘗新嘗）、今南葛城郡葛城村北窪
○戊申、此條柳本及類史九十九に據て補ふ
○宮田麿、類史富田麿に作るは非なり
〔六月〕庚戌朔、此條及癸丑、甲寅、乙卯の四條は紀略に據て補ふ
○丹貴二社、丹生川上及貴布禰神社なり
○亢旱、亢は本書兕に作るは誤なり故に改むべし
○臨東西市人云々、纂詁臨を驅に改む朱雀路は京城の正中朱雀門より南極羅城門に達する最大道路なり市人を此に集めて雨を祈らしむるなり
○己卯、此條山崎校本には推干支移于月末己卯條之下といひ水戶校本には今推前後干支己卯當作乙卯と云り乙卯は六日なり今姑く舊に依り此に存して後考を俟つ
○彼此一同、原本一を亦

國志紀郡志紀鄕百姓志紀松取宅中、所生橘樹、其高僅二寸餘而花發者、殖于土器進之、○丁酉、於延曆寺轉讀仁王經五千卷、御願也、○丙午、大和國葛上郡從三位高天彥神爲名神、○戊申、授從五位下文室朝臣宮田麿從五位上、○六月庚戌朔、遣使於丹貴二社祈雨、○癸丑、勅、頃者亢旱涉旬、宜告諸寺、三日三夜讀經悔過、念致甘雨、○甲寅、詔曰、朕外祖父贈正一位橘朝臣清友宜贈太政大臣、○乙卯、臨東西市人於朱雀路中令雩、○己卯、勅、彈正臺及撿非違使、雖配置各異、而糺彈違犯、彼此一同、但至犯人逃走、姦盜隱遁、彈正之職、不堪追捕、自今以後、緣糺違犯、有可追捕者、臺使相通、遣撿非違長等、隨事追捕、立爲永例、○甲子、公卿咸會東寺、緣御願諸佛開眼也、○乙丑、勅、頃緣旱涸、頒使祈雨、頗似有應、未能普潤、宜請七大寺僧於東大寺、三日三夜間、令稱讚龍自在王如來名號、○壬申、奉授上野國无位拔鋒神、赤城神、伊賀保神、並從五位下、○丁丑、勅、國分二寺、建立自遠、一則名爲金光明護國寺、一則號爲法華滅罪寺、先帝救世利物之法、遠傳不朽者也、而頃年僧寺安居之會、獨

に作る柳本及類史に據て改む
○緣紀違犯、原本紀を紀に作る柳本宮本及類史百七に據て改む
○撿非違長、看督長なり
○稱讚、讚字は柳本及紀略に據て補ふ此事東大寺要錄にも見ゆ但し五月乙丑とするは非なり
○壬申、原本甲申に作る水戸校本に是月無甲申、甲當作壬と云るに從ふ
○拔鋒神、神名式上野國甘樂郡貫前神社(名神大)北甘樂郡一宮町、國幣中社に列す
○赤城神、同式同國勢多郡赤城神社(名神大)、宮城村三夜澤
○伊賀保神、同式同國群馬郡伊加保神社(名神大)伊香保村伊香保
○國分二寺云々、國毎に國分二寺を置くこと聖武天皇天平十三年紀に出づ
○無二無三之勝理、法華經方便品に十方佛土中唯有一乘法無二亦無三とあるに據れり
○方卌丈、原本卌を卅に作る諸本に據て改む
○藤原朝臣澤子卒、原本澤を淨に作る柳本水戸校

講最勝王經、尼寺滅罪之場、無說法華妙典、所設法藏、用有不同、是忍而不行、恐修善闕如、宜令五畿內七道諸國、安居之會、先於僧寺講最勝王經、次於尼寺講法華經、所願無二無三之勝理、開示國家、除災植福之大善、廣被衆庶、是夜、有赤氣、方卌丈、從坤方來、至紫宸殿之上、去地廿許丈、光如炬火、須臾而滅、○三十己卯、授无位藤原朝臣數子從五位下、女御從四位下藤原朝臣澤子卒、故紀伊守從五位下總繼之女也、天皇納之、誕三皇子一皇女也、宗康、時康、人康、新子是也、寵愛之隆、獨冠後宮、俄病而困篤、載之小車、出自禁中、纔到里第便絕矣、天皇聞之哀悼、遣中使贈從三位也、右京大夫從四位下藤原朝臣文山、少納言從五位下藤原朝臣秋常等、並監護喪事、○秋七月庚辰朔、四癸未、右京人散事從四位下內藏宿禰影子、右衛門大尉正六位上內藏宿禰高守、散位從六位上非門忌寸諸足、山口忌寸永嗣、大藏宿禰雄繼、大藏忌寸繼長、從八位下檜原宿禰聰通等男女十二人、賜姓內藏朝臣也、高守遠祖後漢靈帝之苗裔云々、○五甲申、延僧六十口於紫宸殿、常寧殿、令轉讀大般若經、以禁中有物恠也、○八丁亥、地震

是日讀經訖、施物各有差、復施大法師僧度者各一人、法師位以下僧各授一階、○己丑、勅、令撿非違使等、當色之外著雜色袍、○壬辰、令左右京職并五畿內七道諸國、寫進庚午年籍、以收之中務省庫、○丙申、令大宰府造新羅船、以能堪風波也、大和國人酒人眞人廣公等一烟、改本居貫附右京五條二坊、○庚子、令畿內國司勸種蕎麥、以其所生土地、不論沃瘠、播種收穫、共在秋中、稻梁之外、足爲人天也、○甲辰、左京人外從五位下安倍宿禰眞男等賜姓御輔朝臣、○八月庚戌朔、嵯峨太上天皇不豫、天皇爲之朝覲、黃昏還宮、左近衞府言、補近衞事、春宮坊、皇后宮、中宮舍人、內匠、木工、雅樂寮考人等、並是內考、至有才能、府自試補、而今兵部省勘返云、大同元年格偁、蔭子孫、式部兵部散位、位子、留省、勳位等之類、聽本府試補、外考白丁者、勅使覆試、然後補之、件人等非格所指、須准外考白丁、勅使覆試者、其三宮舍人、并雜勘籍人、已預內考、何准白丁、又格擧大例、不勞細色、而兵部省偏執格文、還乖舊貫、太政官處分、便弓馬者因循舊例、本府試補之、是日勅曰、文殊會事、起自天長之年、（十年七月）而今

本に據て改む澤子卒去の事原本四月乙卯條にも載す柳本には此にのみ見ゆ三代實錄にも贈皇太后承和六年六月晦崩とあり故に彼を削て之を存す
○總繼、原本總を綱に作る諸本に據て改む
○里第、原本第を弟に作る柳本宮本に據て改む
○監護喪事、此下原本女御已下至喪事重出の九字を分注す諸本になく後人の加注なること明なれば削る
（七月）庚辰朔、此三字宮本に據て補ふ
○散事從四位下、原本事を位に作る諸本に據て改む散事は職事に對して云
○聽通、原本聽を總に作る閣本柳本前本等に據て改む
○賜姓內藏朝臣也、原本朝臣を宿禰に作り禰下に雄繼の二字あり閣本柳本尾本に據て朝臣に改め雄繼を削る山崎校本及纂詁にも說あれど採らず
○苗裔云々、云々の二字は柳本に據て補ふ內藏山口檜原諸氏は並に姓氏錄右京諸蕃に載せ井門大藏は載せず

○施物、原本賜物に作る水戸校本に據て改む柳本施を於に作るは誤なり
○庚午年籍、庚午は天智天皇九年なり
○中務省庫、職員令に中務卿掌云々諸國戸籍租調帳僧尼名籍事」とあり
○新羅船、新羅の風に造れる船なり
○大和國人、人字は諸本に據て補ふ
○酒人眞人、錄大和皇別に酒人眞人繼體天皇皇子兎王之後也とあり
○蕎麥、抄稻穀部に孟詵食經云蕎麥（曾波牟岐一云久呂無木）性寒者也とあり
○足爲人天、原本人天を食の一字に作る諸本に據て改む人天は管子に王以民人爲天民人以食爲天とあるに據れり
（八月）黃曛、曛は玉篇に黃昏時と注す原本誤せるを諸本に據て訂せり
○兵部省勸返、狩谷氏云返恐文
○位子、位字は閣本柳本に據て補ふ
○三宮舍人、三宮は太皇太后皇太后皇后を云ふ
○預內考、原本預を豫に

聞諸國或乖官符旨、不有遵行、宜重下知令以修之、○癸丑、嵯峨太上天皇、聖躬未平復、天皇重亦朝覲、奉爲太上天皇、讀經于延暦寺、祈翌日之瘳、○丙辰、遣使奉幣丹生川上雨師、祈止雨也、云云、○壬戌、勅、令內外諸國奉幣神祇、以期西成焉、○己巳、勅大宰大貳從四位上南淵朝臣永河等、得今月十四日飛驛所奏遣唐錄事大神宗雄送大宰府牒狀、知入唐三箇船、嫌本舶之不完、傭駕楚州新羅船九隻、傍新羅南以歸朝、其第六船、宗雄所駕是也、餘八箇船、或隱或見、前後相失、未有到著、艱虞之變、不可不備、宜每方面重戒防人、不絶炬火、贏貯糧水、令後著船共得安穩、其宗雄等安置客館、得待後船、是日、令十五大寺讀經祈願、以船到著、爲修法之終、遣神祇少副從五位下大中臣朝臣礒守、少祐正七位上中臣朝臣薭守、奉幣帛於攝津國住吉神、越前國氣比神、並祈船舶歸著、○辛酉、以東鴻臚院地二町、充典藥寮、爲御藥園、○壬申、請眞言僧廿六口於常寧殿、令修息災之法、依有物恠也、○癸酉、以攝津國嶋上郡荒田九段、賜明經碩儒從四位下善道朝臣眞貞、大宰府飛驛、上奏入

〇作る柳本宮本に據て改む
〇天長之年、水戶校本之を元に作る天長十年七月丙戌條參看すべし
〇乖官符旨、原本旨を而に作る水戶校本及類史紀略に據て改む諸本百に作るは旨の訛なり
〇新翌日之㦖、原本之字新の下にあり諸本及類史に據て改替ふ翌日之㦖は直に㦖るを云既に注す
〇遣使奉幣丹生川上、遣使以下十六字は柳本に據て補ふ紀略には丹生川上雨師を丹貴二社に作り之を癸丑に係く
〇壬戌、此二字柳本に據て補ふ
〇勅令內外諸國云々、原本之を丙辰に係く今柳本に據て壬戌に係く
〇期西成、堀氏曰期當作新
〇西成、秋の收穫を云
〇入唐、原本大唐に作る諸本に據て改む
〇九隻、原本隻を雙に作る諸本に據て改む下同じ
〇重戒防人、原本戒を戎に作り重字なし諸本に據て改め補ふ
〇贏貯、原本贏を羸に作るは誤なれば改む漢書刑

唐大使藤原朝臣常嗣等歸著之由、兼使等奏狀、〇甲戌、(廿五)勅參議大宰權帥正四位下兼左大辨藤原朝臣常嗣、大貳從四位上南淵朝臣永河等、得今月十九日奏狀、知遣唐大使藤原常嗣朝臣等、率七隻船、廻著肥前國松浦郡生屬嶋、與先到錄事大神宗雄船、摠是八艘、宜依例勞來、式寛旅思、但自陸入京、事須省約、何則時屬秋穫、恐妨民業、宜以大使常嗣朝臣爲第一般、令備後權掾伴須賀雄、知乘船事春道永藏兩人相隨之、其判官長岑宿禰高名、菅原善主、准判官藤原貞敏、錄事大神宗雄、准錄事高丘百興、讃岐權掾丹墀高主、知乘船事槻本良棟、深根文主、舌人大和耳主、陰陽師春苑玉成等十人、各造般聯次入都耳、就中如有大使常嗣朝臣引之共發者、任聽之、又信物要藥等、差撿挍使、取陸路遞運、自餘人物等、陸行水漕可有議定、宜待後勅、又未到第二舶、并一隻船、復能覘候、來輙奏聞、〇(廿九)戊寅、改加賀國人正六位上百濟公豐貞本居、貫附左京四條三坊、豐貞之先、百濟國人也、以庚午年(天智九年)被貫河內國大鳥郡、以乙未年、被貫加賀國江沼郡也、

法志に贏は謂擔負也とあり　○中臣朝臣葬守、山崎校本堀本に據れりとて中上に大の字を補ふ　○辛酉、水戸校本に辛酉十二日當在二十日己巳上蓋二十二日辛未之誤也といふ今之に據て改移さず後考を俟つ　○生屬嶋、兵部式諸國馬牛牧に肥前國生屬馬牧見ゆ今肥前國北松浦郡生月村とある是なり平戸嶋の西北にあり　○爲第一般、原本般を艘に作る諸本に據て改む般は番に同じ箋註に甲庚辛本に依りて舶に改むとあれど諸本何れも般とあり船に作れるはなし　○令備後權掾、原本令を幷に作る諸本に據て改む　○長岑宿禰高名、原本禰の下に高禰の二字あり宮本山崎校本に據て削る　○菅原善主、原本主を立に作る諸本に據て改む宮本には原の下に朝臣の二字を補へり　○槻本良棟、內藤廣前說に四年三月戊辰紀遣唐知乘船事槻本連良棟賜姓安墀宿禰此云槻本蓋史官之失也と云　○深根文主、文主は本姓蜂田藥師、元年六月辛丑紀に見ゆ　○舌人、周語に使舌人體委與之、韋昭注に舌人能達異方之志象胥之官也とあり今の通譯なり　○各造般、原本般を船に作る諸本に據て改む　○遞運、原本遞を通に作る諸本に據て改む　○一隻船、柳本船上に舶字あり是なるが如し　○以庚午年、以字は柳本尾本に據て補ふ

（九月）伊豫親王墓、諸陵式に巨幡墓贈一品伊豫親王在山城國宇治郡、今紀伊郡堀內村大字六地藏にあり親王は桓武天皇の皇子、大同二年十月事に坐して河原寺に幽死す　○捐柘館云々、原本館を棺に作る水戸校本に據て改む柘館は漢書班倢伃賦注に館名也とあり上林苑にありと云損館にて薨去の意、泉臺は春秋文十六年に見ゆる臺名なれど此には墳墓の意なり　○悲倚伏之難測、老子に禍兮福之所倚福兮禍之所伏とあるに據れり原本測を側に作る閣本柳本に據て改む　○追榮於前詔、贈二品の御事ありしを云　○欲增餝、閣本柳本前本等增字なく柳本には餝下

○九月己卯朔癸未[五]、中使就故贈二品伊豫親王墓、詔曰、早捐柘館、長掩泉臺、悼福祿之不融、悲倚伏之難測、雖既追榮於前詔、遂欲增餝於當年、宜贈榮班、以賁幽窀、可贈一品、又詔曰、親王母故无位藤原朝臣吉子屬遇轗軻、墜失爵位、時移事貿(カハリ)、追悼營魂、宜贈本班照之窀穸、可贈從三位、是日、授无位吉岡女王從四位下、○乙酉[七]、從五位上永原朝臣門繼爲神祇大副、從五位下藤原朝臣諸成爲治部少輔、從五位下田中朝臣眞成爲玄蕃頭、從四位上大枝朝臣總成爲刑部大輔、從五位下文室朝臣助雄爲少輔、從五位上文室朝臣永年爲宮內少輔、從五位下嶋田朝臣清田爲伊賀守、從四位下和氣朝臣仲世爲伊勢守、從五位上藤原朝臣貞主爲近江權介、從五位下小野朝臣千株爲備中守、○丁亥[九]、是重陽之節

也、天皇御紫宸殿、宴公卿已下及文人、同賦菊潭引之題、宴畢賜祿有差、○甲午、遣唐持節大使參議正四位下行左大弁兼大宰權帥藤原朝臣常嗣進節刀、○乙未、天皇御紫宸殿、右大臣從二位兼行皇太子傅藤原朝臣三守、奏大唐勅書、獨召大使藤原朝臣常嗣、昇自東階、天顏咫尺、勅曰、遠渉危難之途、平安參來乎、嘉賜都々大坐、常嗣朝臣稱唯、拜舞庭中、更召殿上置酒焉、于時使旨及路中艱難、一一以聞、內侍持御被一條御衣一襲佇立、大臣命常嗣朝臣云、今勅久、汝銜國命、遠渉滄海、毎聞險難、憐愍殊深、仍賜纏頭物、卽稱唯、賜御被、拜舞退出、○丙申、權中納言從三位兼行左兵衞督陸奥出羽按察使藤原朝臣良房召內記、賜大唐勅書、令以藏之、○己亥、勅、如聞、所以神護景雲二年以還、令諸國國分寺、毎年起正月八日、至于十四日、奉讀最勝王經、幷修吉祥悔過者、爲消除不祥、保安國家也、而今講讀師等、不必其人、僧尼懈怠、周旋乖法、國司撿挍、亦不存心、徒有修福之名、都無殊勝之利、此則緇素異處、不相監察之所致也、宜停行國分寺、而於廳事修之、自今以後、立爲恒例、○辛丑、紀伊國

に終字あり
○幽竁、墳墓なり
○吉子、右大臣是公の女延暦二年從三位を授けられ夫人となり親王を生む
○轆轤、原本轆を軾に作る閣本柳本尾本に據て改む轆轤は車の進行の自由を失ふことより轉じて人の志を得ざるに喩ふ吉子は親王の事に坐して大同中河原寺に幽死す
○事貿、貿に原本貸に、閣本前本中本等貿に作る貿は貿と同じければ之に據て改む貿は易なり
○營魂、文選文賦に覽營魂以深賾、注に營謂心府中也とあり
○本班、本位なり
○吉岡女王、原本岡を國に作る諸本に據て改む
○玄蕃頭、原本蕃を番に作る諸本に據て改む
○從四位上大枝朝臣、尾本上を下に作る纂詁は丁巳諸本に據りて改めたり
○菊潭引之題、原本菊を兼に作り之字なし諸本に據て改め補ふ菊潭は風俗通（藝文類聚所引）に南陽酈縣有甘谷、谷水甘美云其山有大菊、水從山上流下、得其滋液、谷中有三

人直講正六位上名草直豐成、少外記從六位上名草直安成等、賜姓宿禰、兼貫附右京四條四坊、元右京人宗形横根、娶紀伊國人名草直弟日之女、生男嶋守、養老五年、冒母姓隷名草氏、嶋守卽豐成之祖父也、是日令大宰府進上自大唐所奉請大元帥畫像、○癸卯、制、選叙令、帳內資人者、並以八年爲限、神龜五年格、外五位資人、十年成選、自今而後、外五位資人還限者、宜依令行之、唯神宮司禰宜、祝、國造、外散位、郡司、及俘夷之類、不在此限、○丙午、詔曰、天皇我詔旨良万止宣大命乎衆聞食世止宣、遣唐使藤原常嗣朝臣等、朝乃遣乃道爾、遠路荒海乎歷苦美、大唐天子止毛治勞禮、返事毛早速申賜倍利、是乎念行久波、常嗣朝臣良我勤仕奉禮留勇止奈毛喜賜大坐須、故是以常嗣乎始天、水手爾至万天爾、冠位上賜比治賜不、在唐天身罷太留判官藤原豐並乎毛哀愍賜比、追天冠位賜久度詔不天皇我大命乎衆聞食止宣、授大使正四位下藤原朝臣常嗣從三位、判官從五位下長岑宿禰高名從五位上、判官正六位上菅原朝臣善主從五位下、贈在唐身亡判官正六位上藤原朝臣豐並從五位上、○冬十月己酉朔、

十餘家不復穿井悉飲此水上壽百二三十中百餘七八十者名之天之云

○天顏咫尺、左傳僖九年に天威不違顏咫尺、注に八寸曰咫とあり

○嘉賜都々、紀略嘉を喜に作る

○使旨、原本使者に作る諸本及紀略に據て改む

○御被一條御衣一襲、閣本に一條御衣の四字なし

○今勅久、山崎校本には久字一本になしとて削りたれど汝衛國命以下も古語なりしを撰者が漢文に譯せしかと思はる故に削らず

○賜纒頭物、原本頭字なし諸本及紀略に據て補ふ閣本柳本等賜を贈に作る

○召內記云々、內記は職員令に掌造詔勅凡御所記錄事とあり故に之を藏せしめらる

○所以、此二字類史紀略になし

○諸國分寺、原本國字一字なし類史百七十八及紀略に據て補ふ

○廳事、官府治事之處即ち國衙を云此語隋書鄭譯傳に見ゆ

○弟日、原本弟を第に作

天皇御紫宸殿、賜群臣酒、召散位從五位下伴宿禰雄堅魚、備後權掾正六位上伴宿禰須賀雄於御床下、令圍碁、並當時上手也、（雄堅魚下石二路、）賭物新錢廿貫文、一局所賭四貫、所約惣五局、（須賀雄輸四籌、贏一籌、）亦令遣唐准判官正六位上藤原朝臣貞敏彈琵琶、群臣具醉、賜祿有差、越前國言、慶雲見焉、山城國宇治郡荒田一町賜无品秀子內親王、○甲寅（六）、遣唐大使已下朝拜於八省院、無有天臨、唯大臣行事、例也、○乙卯（七）、贈從三位藤原朝臣吉子、更贈從二位、以有祟也、○丙辰（八）、制、大小兩麥、耕種勞少、而夏月早熟、支急力多、若不刈青苗、令其成熟、貧賤之民、將以療飢、屢下禁制、不聽爲蒭、而頃年奢侈之俗、收青苗以飼馬、庶民之愚、利得直以暫用、積習至今、不畏憲法、宜令左右京、五畿內諸國、不得更然、其百姓不改悛、及所容隱（アラバ）、准大同三年格、隨狀科處、○丁巳（九）、遣唐使錄事正六位上山代宿禰氏益所駕新羅船一隻、歸著筑前國博多津、○辛酉（十三）、奉唐物於伊勢大神宮、○乙丑（十七）、出羽國言、去八月廿九日、管田川郡司解偁、此郡西濱達（イタル）府之程五十餘里、本自無石、而從今月三日、霖雨無止、雷電鬪聲、經十餘日、乃見晴天、時

る諸本に據て改む
○大元帥畫像、帥は原本師に作る柳本に據て改む　大元帥法は公事根源に小栗栖常曉律師仁明天皇承和五年に入唐して華林寺の元照といふ人に逢て此太元帥法を傳ふ其後歸朝して小栗栖の法琳寺と云所にて修しける也（節略）と見ゆ
○帳內資人者云々、選叙令集解に釋云慶雲三年格帳內以六考爲限職分資人亦同神龜五年三月廿六日格位分資人內位資人以八考爲限外位資人以十考爲限云々とあり
○宣大命乎、原本宣を宜に作る山崎校本に據て改む
○衆聞食世止宣、原本食字なく世を與に作る食は山崎校本に據り世は狩谷氏の說に衆聞世止宣云々續紀文例也今作與止恐以世誤訓與而作與歟と云るに據て改む
○朝乃遺乃道爾、纂詁は道を隨に改む
○天子止毛、止は爾の誤か或は衍なるべし
○是乎念行久波、纂詁乎を爾に改む

向海畔、自然隕石、其數不少、或似鏃、或似鋒、或白或黑、或青或赤、凡厥狀體、鋭皆向西、莖則向東、詢于故老、所未曾見、國司商量、此濱沙地、而徑寸之石、自古無有、仍上言者、其所進上兵象之石數十枚、收之外記局、勅曰、陸奥出羽并大宰府等、若有機變、隨宜行之、且以上言、克制權變、令禦不虞、又轉禍爲福、佛神是先、宜修法奉幣、○丁卯[十九]、攝津國人直講博士從六位下佐夜部首穎主賜姓善友朝臣、編附左京四條二坊、○癸酉[廿五]、以右中弁正五位下藤原朝臣嗣宗爲左中辨、從五位上良岑朝臣高行爲兼右中弁、右近衛少將如故、從四位下和氣朝臣仲世爲治部大輔、正五位下小野朝臣眞野爲諸陵頭、從五位下橘朝臣起奈理爲大藏大輔、外從五位下御輔朝臣眞雄爲大膳亮、從四位上橘朝臣弟氏爲右京大夫、參議正四位下三原朝臣春上爲兼伊勢守、從五位上長岑宿禰高名爲權介、從五位下紀朝臣盛麻呂爲常陸介、是日、建禮門前、張立三幄、雜置唐物、內藏寮官人及內侍等交易、名曰宮市、○丁丑[廿九]、奉授坐下總國香取郡正二位伊波比主命、坐常陸國鹿嶋郡正二位勳一等建御加都智命、

○勇止奈毛、原本勇を曾に作る前本宮本中本等に據て改む勇はイサヲにて功績なり
(十月)賜群臣酒、孟冬旬宴なり公事根源に先御衣かへあり掃部寮夏の御裝束を撤して冬のに更め給ふ天皇南殿に出御有て節會あり云々と見ゆ
○須賀雄、西宮記に遣唐使碁師伴菅雄とあり
○令圍碁、此事同記十月旬記に詳なり
○新錢、承和昌寶を云
○一局、一の字は紀略に據て補ふ
○(注)羸、原本羸に作るは誤なれば改む
○秀子内親王、嵯峨天皇皇女
○以有祟也、原本祟を祟に作る西本宮本に據て改む下同じ
○大小兩麥、抄稻穀部に大麥蘇敬曰大麥一名靑科麥(布度牟岐一云加知加太)、小麥周禮注云九穀者稷黍稻粱苽麻大豆小豆小麥(古无岐一云万牟岐)
○支急、原本支を與に作る諸本に據て改む
○頃年、原本累年に作る西本に據て改む

並從一位、坐河内國河内郡正三位勳二等天兒屋根命從二位、從四位上比賣神正四位下、散事從四位下丹墀眞人祖子卒、

○收青苗、原本收を怯に作る山崎校本に據て改む　○氏益、原本氏を武に作る宮本及下文十年正月庚子紀に據て改む　○西濱、原本濱を廣に作る諸本に據る　○達府之程、府は國府、拾芥抄中末に出羽國府は出羽郡にありと云　○月三日、山崎校本に月上恐當脱一字と云り　○或亦、或の字は宮本に據て補ふ　○厥狀、原本狀を壯に作る諸本に據て改む　○兵象之石、兵器の形せる石を云原本象を家に作る諸本に據て改む　○克制權變、原本克を充に作る諸本に據る權變は後漢書賈逵傳に出で臨機の謀略を云　○佐夜部首、錄攝津神別に佐夜部首伊香我色雄命之後也　○眞雄、原本直雄に作る西本前本宮本に據て改む　○權介、權字は脩本宮本に據て補ふ天安元年九月丁酉紀に傳見ゆ參看すべし　○雜置唐物、原本雜置を置雜に作る諸本及紀略に據て改む　○宮市、建禮門前に幄を立て内藏寮の官人及内侍等をして交易の任に當らしめたればしか稱せしなるべし唐鑑卷十六貞元十三年の條に宮市の文字見ゆれど此と意義異なり　○散事、原本散位に作る諸本に據て改む

○十一月己卯朔庚辰、天皇御大極殿、遣使奉幣於伊勢大神宮、○癸未、災于伊勢齋宮、燒官舍一百餘宇、遣左衞門佐從五位下田口朝臣房富賚絹百疋、綿三百屯、調布五十端、存問齋内親王、左京人左大史正六位上山直池作等十人、改直字賜宿禰、池作之先、出自天穗日命之後也、左京人正六位上御春宿禰春長等十一人、改宿禰賜朝臣、是百濟王之種、飛鳥戸等之後也、文章得業生從六位下菅原朝臣是善對策、處之中上、進叙三階、伊豫國人外從五位下風早直豐宗等一烟、賜姓善友朝臣、兼除邊籍、貫附左京四條二坊、天神饒速日命之後也、○十二月己酉

（十一月）官舍、原本宮舍に作る前本中本及紀略に據て改む　○左衞門佐、房富は七年五月癸未紀に左衞門權佐とあり　○齋内親王、皇女久子内親王に坐す　○左大史、原本史を夫に作る諸本に據て改む　○改直字、纂詁に字疑衍と云　○飛鳥戸、錄河内諸蕃に飛鳥戸造百濟國末多王之後也とあり　○對策、文官採用試驗の如きものなり　○處之中上、紀略之を于に作る　○叙三階、原本叙を取に

朔庚戌、遣參議從四位上行春宮大夫兼右衞門督文室朝臣秋津、奉珍幣於伊勢大神、以齋宮燒損也、又去天長元年九月、依多氣齋宮遠離大神宮、每事無便、卜定度會離宮、以爲齋宮焉、今依火災、卜定多氣宮地可爲常齋宮之狀、同令此使祈申於大神宮、○丙辰、太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位兼皇太子傅臣藤原朝臣三守、大納言正三位兼左近衞大將臣源朝臣常、中納言正三位臣藤原朝臣吉野、中納言從三位臣藤原朝臣愛發、中納言從三位兼右近衞大將臣橘朝臣氏公、權中納言從三位兼行左兵衞督陸奧出羽按察使臣藤原朝臣良房、參議正三位行左衞門督臣源朝臣信、參議從三位行中務卿兼播磨守臣源朝臣定、參議大宰權帥從三位兼行左大弁臣藤原朝臣常嗣、參議正四位下行伊勢守臣三原朝臣春上、參議從四位上守民部卿勳六等臣朝野宿禰鹿取、參議從四位上行春宮大夫兼右衞門督臣文室朝臣秋津、參議從四位下守刑部卿臣安倍朝臣安仁等奏言、臣聞、惟天玄默、匪德不動、惟神著明、有誠必感、故人君孝治、昊穹不能愛其靈貺、至德

作る水戸校本及紀略に據て改む
○風早直、國造本紀に風速國造輕嶋豐明朝物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定鵤國造とあり其裔なるべし
（十二月）奉珍幣、珍字は宮本及類史に據て補ふ
○天長元年、原本元を九に作る宮本及類史四に據て改む
○多氣齋宮云々、類史四所載天長元年九月乙卯詔に多氣の齋宮は大神宮と遠離れて每事無便茲に因て度會の離宮を卜定めて常の齋宮とすとあり
○多氣宮地、後醍醐天皇の御代まで此地に齋宮あり後廢す其址は今多氣郡齋宮村齋宮の地なるべし
○伊勢守、原本伊豫守に作る宮本及上下の文に據て改む
○惟天玄默、惟神著明と對句にて天は幽玄にして默然たるを云
○匪德不動、天は人の德にあらざれば感動せざるの意原本匪を遂に作る西本宮本及類史に據て改む
○惟神著明、神德の顯著にして明かなるを云

○昊穹不能違其靈貺、昊穹は天、靈貺は神の賜物なり人君德あれば天神賜物を惜ますさなり下文の慶雲の事を云

○岳瀆云々、岳瀆は山岳河川を云上文の昊穹に對して山も川も瑞祥をあらはすさなり原本岳瀆を丘瀆に作る西本水戸校本等及類史に據て改む

○徇齊侔德云々、徇齊は史記五帝本紀に黄帝生而神靈幼而徇齊、注に徇疾齊速也さあり允恭は尙書堯典に允恭克讓さあり天皇の聖德の聰明なるこさ黄帝にひさしく恭謙なるこさ堯に比すべしさなり徇は原本洵に作る閣本水戸校本に據て改む

○纂洪基於累聖、列聖の大統を承け繼がせ給ふさなり

○弘前烈於重光、列聖の御德を彌々耀かし益々弘め給ふさなり

○浹宇淪和云々、浹は周、宇は天下也淪は玉篇に吞也俗淪字又嘆也さあり環瀛は瀛は大海にて四海の内を云、天下平和に海内道を樂しむさなり

○寶飫郡、飫は原本飯に

潛通、岳瀆以之効其禎祥、伏惟、皇帝陛下、徇齊侔德、允恭配美、纂洪基於累聖、弘前烈於重光、浹宇淪和、環瀛樂道、凡厥群生、孰不霑仁、伏見參河國守從五位下橘朝臣本繼等奏偁、去年十一月三日、五色雲見寶飫郡形原鄕、又越中國介外從五位下興世朝臣高世等奏偁、去六月廿八日、慶雲見新川郡若佐野村、並皆彩色奇麗、形象非常、臣等謹撿、孫子瑞應圖曰、慶雲太平之應也、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、又孝經援神契曰、德至山陵、則慶雲出、普閲囊篇、緬尋夐牒、兩國上奏、事叶古典、夫白非道格區宇、仁覃海隅、何亦降斯玄符、錫彼景福、臣等幸屬生涯、榮叨謇紱、見未見於今日、遇未遇於茲晨、不任抃躍之至、謹拜表陳賀以聞、勅、上靈施貺、允歸神功、玄鑒降休、必佇茂烈、是以德佩就日、猶揚克讓之謙光、化揮仁風、逾發靡記之挹損、朕祇承丕緒、嗣守宗祧、履薄以想邕熙、馭朽以求至道、而誠慙經遠、明謝動天、何以致景雲之禎祥、當槐棘之奏賀、若嘉穀栖畝、穜稑亘原、雖匪郁々之非烟、而朕之往寄也、古人不云乎、見祥增戒、則休徵應機至也、人貢忠誠、以輔不逮、重賀之事、都所不允、○丁巳、奉

授越前國正三位勳一等氣比大神從二位、餘如故、伊勢國正五位下多度大神正五位上、○辛酉(十三)、天皇御建禮門、分遣使者、奉唐物於後田原(光仁)、八嶋(崇道)、楊梅(平城)、柏原(桓武)等山陵、○癸亥(十五)、勅、以經于興福寺維摩會講師之僧、宜爲宮中最勝會講師、自今以後、永爲恒例、○乙丑(十七)、車駕遊獵於水成瀨野(ミナセノ)、山城、攝津、河內等國司獻御贄、賜扈從群臣、及國司等祿、各有差、○庚午(廿二)、天皇御建禮門、奉唐物於長岡山陵(藤乙牟漏)、爲謝先日之頒幣也、

作る閣本西本前本等に據て改む寶飫は抄國郡部參河國郡名寶飫(穗)とあり今ホイと呼べり形原は倭名抄に見え今も形原村存す山崎校本に見下寶上に于參河國の四字を補へるは蛇足なり諸本になきがよし
○外從五位下興世朝臣、外字は山崎校本に據て補ふ
○新川郡、新川は倭名抄に邇布加波と訓り今上中下の三郡に分れニヒカハと呼べり山崎校本新上にも于越中國の四字を補へり採らず
○若佐野村、中新川郡立山村栃津より流るゝ栃津川を一名若狹川と云其西岸は古は一面の曠野なりき是卽ち若佐野村なるべし
○瑞應圖、及禮斗威儀は元年四月紀に出づ
○孝經援神契、同上
○鼈篇、古書を云ふ鼈蝶も亦同じ天より降す祥瑞にして宋書樂志に出づ
○玄符、天符に同じ
○簪紱、高位高官を云ふ元年正月紀に出づ
○抃躍、原本抃を拚に作

る宮本に據て改む　○上靈施覡云々、上靈は上帝、玄鑒は天鑒なり神功は神の如き功、茂烈は盛なる功烈なり原本休を狀に作る水戸校本に據て改む諸本伏に作るは休の訛なり　○德佩就日、就日は其の德太陽の如く盛なるを云既に注せり　○發瘞記之挹損、瘞記は文選封禪文に或曰且天爲ニ質闇一示ニ珍符一固不レ可レ辭若然辭レ之是泰山靡レ記而梁父罔レ幾也、注に泰山之上無レ所ニ表記一とあり挹損は挹は退損は減なり聖化を記載して後世に傳ふるを欲し給はざる謙遜を云原本挹を樞に作る諸本に據て改む

○宗祧、宗廟に同じ祧は承祧（四頁）に注す　○履薄以礿邕熙、履薄は既に注す邕熙は文選東京賦に上下共ニ其雍熙一注に雍和熙盛也とあり邕は雍に同じ原本邕に作る諸本に據て改む　○馭朽以求至道、馭朽は既に注す至道は天下を太平ならしむべき政道を云　○誠懇經遠云々、經遠は魏志毛玠傳に出づ誠明或は位階顛倒せるにや　○槐棘・三槐九棘の略、周禮秋官朝士條に面ニ三槐一三公位焉また左ニ九棘一孤卿大夫位焉とあり三公九卿を云　○穜稑、原本種種に作る穜は水戸校本に據り稑は尾本西本前本等に據て改む穜は晩稻稑は早稻　○郁々之非烟、即ち慶雲を云原本兆烟に作る諸本に據て改む　○往寧、寧は寧に同じ願也往寧は素願の意　○輔不逮、原本輔を轉に逮を遠に作る宮本水戸校本に據て改む史記文帝紀に直言極諫匡ニ朕之不一レ逮とあり　○都所不允、原本允を牟に作る類史に據て改む　○從二位、原本二を三に作る宮本に據て改む　○多度大神、正月紀に出づ　○辛酉、此條全文天長十年十二月紀に出づ纂詁に推ニ長曆一天長十年十二月無ニ辛酉一又無ニ唐國使聘事一故刪レ彼而存レ此と云り　○後田原、光仁天皇田原東陵、大和國添上郡田原村日笠　○八嶋、光仁天皇皇子崇道天皇御陵、大和國添上郡東市村八嶋　○楊梅、大和國生駒郡都跡村佐紀　○柏原、山城國紀伊郡堀内村堀内　○水成瀬野、攝津國三嶋郡嶋本村一帶の地、閣本西本前本成字なし　○庚午、此條も天長十年十二月紀に重出す　○長岡山陵、式に高畠陵在ニ山城國乙訓郡一とあり今向日町寺戸にあり

續日本後紀卷第八

續日本後紀卷第九

起承和七年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

七年(庚申)春正月戊寅朔、天皇御大極殿受朝賀、禮畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、○七甲申、天皇御紫宸殿、垂珠簾覽青馬、詔授三品秀良親王二品、從三位藤原朝臣愛發正三位、從四位上朝野宿禰鹿取正四位下、無位世宗王從四位下、正六位上美志眞王、長川王並從五位下、正五位下橘朝臣岑繼從四位下、從五位上宮道朝臣吉備麻呂、長岑宿禰高名並正五位下、從五位下伴宿禰成益、佐伯宿禰利世、並從五位上、外從五位下山田宿禰古嗣、正六位上平朝臣春香、橘朝臣眞直、藤原朝臣春岡、橘朝臣貞雄、藤原朝臣行繩、丹墀眞人雄濱、田口朝臣門長、下毛野朝臣文繼、當麻眞人松成、大神朝臣宗雄、長岑宿禰秀名、菅原宿禰豐道、並從五位下、正六位上山宿禰池作、額田部湯坐連長良、並外從五位下、宴竟賜

○承和、此二字は宮本水戸校本に據て補ふ

【承和七年】珠簾、始て見ゆ、襄詁に晉書符堅載記及裴元略諫を引て帝好華美蓋紀實也と云

○春香、尾本香を雪に作る

○眞直、直字は諸本及類史九十九に據て補ふ

○行繩、原本繩を綱に作る諸本及類史に據て改む下同じ

○長良、良は類史吉に作り閣本前本等空白とす

祿有差。○乙酉、於大極殿始修最勝會也。是日授正六位上御春朝臣濱主從五位下、無位高宗女王從五位上、正五位下橘朝臣影子從四位下、從五位上紀朝臣清子正五位下、無位藤原朝臣潔子、和氣朝臣數子、並從五位上、無位甘南備眞人眞數、清科朝臣殿子、並從五位下。○戊子、天皇不豫也。○庚寅、地震。○辛卯、冣勝會畢、引名僧於內裏令論義、訖施御被。○癸巳、天皇御紫宸殿、不卷珠簾、而宴侍從已上、覽踏歌、畢賜祿有差。○甲午、大納言正三位源朝臣常、奉勅閱視六衛府射於豐樂院。○丁酉、內宴罷焉、以聖躬龍蟠也。○丁未、以從五位下清原眞人秋雄爲侍從、從五位下藤原朝臣仲統爲右兵衞佐、從五位下百濟王慶苑爲河內介、從五位下豐前王爲參河守、從五位下文室朝臣助雄爲遠江守、外從五位下飯高公常比麻呂爲伊豆守、從四位下正道王爲武藏守、四品葛井親王爲常陸太守、從五位上興世朝臣書主爲信濃守、從五位下御春朝臣濱主爲鎭守將軍、從五位上藤原朝臣宮房爲出羽守、從五位上有雄王爲越前守、外從五位下山宿禰池作爲介、從五位下長岑宿禰秀名爲

○御春朝臣、前に見ゆ

○甘南備眞人、錄左京皇別に出自謚敏達皇子難波王也とあり

○清科朝臣、姓氏錄に見えず

○正三位源朝臣常、原本正を從に作る上文に據て改む常は天長十年三月癸巳(一一頁)正三位に叙す

○閱視、紀略觀の一字に作る

○龍蟠、聖體の不豫なるを云原本蟠を幡に作る諸本及類史卅四に據て改む

○秋雄爲侍從、右大臣夏野の子なり侍從となれること已に元年紀(五一頁)に見ゆ三代實錄に秋雄承和四年十月父の喪に遭て解官、五年正月本官を以て起つと見えたれど本史に其事なし此に爲侍從とあるは疑ふべし

○慶苑、原本苑を宛に作る諸本に據て改む

○飯高公、原本公を宿禰に作る山崎校本及上下の文に據て改む

○葛井親王、此親王常陸太守に任ぜらるゝこと已に元年正月癸亥紀に見ゆ重任せられしにや

○書主、原本主を王に作

ろ諸本に據て改む
○濱主、原本主を王に作る諸本に據て改む
(二月)先太上天皇、先字は山崎校本に據て補ふ
○太皇太后、上の太字は類史廿八に據て補ふ
○久賀朝臣三夏、紀略弘仁九年八月甲戌紀に四品明日香親王之男女四人賜姓久賀朝臣と見ゆ
○仲平、原本仲を永に作る水戸校本に據て改む仲平は阿保親王の子天長中姓を賜ふ
○都努朝臣、錄左京皇別角朝臣紀角宿禰之後也とあり天武紀十三年十一月朝臣を賜ふ
○六衞府、原本六を左に作る閣本西本尾本に據る
○朴消、消石なり天應元年六月壬子紀（續紀下三七六頁）に注す
○柴田郡、今陸前國に屬す
○丈部豐主、原本丈を大に作る宮本に據て改む錄左京皇別に丈部天足彦國押人命孫比古意祁豆命後也とあり
○伊具郡、今磐城國に屬す
○擬大毅、纂詁は十五年

越中介、外從五位下高田宿禰家守爲越後介、參議從四位上文室朝臣秋津爲兼丹後守、春宮大夫右衞門督如故、從五位下藤原朝臣良相爲兼因幡守、內藏頭如故、從五位下藤原朝臣行繩爲石見守、從四位下清原眞人瀧雄爲美作守、外從五位下紀宿禰福吉爲掾、從四位上藤原朝臣濱主爲安藝守、從五位下菅野朝臣永岑爲兼伊豫介、主殿頭如故、三品賀陽親王爲大宰帥、從五位下紀朝臣綱麻呂爲筑前守、從五位下藤原朝臣板野麻呂爲肥前守、從五位上藤原朝臣貞守爲兼豐前守、春宮亮如故、○二月戊申朔己酉、天皇朝覲先太上天皇及太皇太后於嵯峨院、賜扈從群臣并院司祿有差、○壬子、以從五位下久賀朝臣三夏爲雅樂頭、從五位下小野朝臣宗成爲民部少輔、從五位下在原朝臣仲平爲兼刑部少輔、駿河守如故、從五位上清原眞人遠賀爲大膳大夫、從五位下近棟王爲正親正、從五位下都努朝臣福人爲左京亮、○己未、殊令六衞府夜行京城、緣群盜遍起也、○庚申、令大宰府停止例進朴消、○辛酉、召流人小野篁、○癸亥、陸奧國柴田郡權大領丈部豐主、伊具郡擬大毅

五月紀に陸奥國磐城團擬少毅陸奥丈部臣繼嶋伊具郡麻續郷戸主磐城團擬主帳陸奥臣善福等八烟賜ニ姓阿倍陸奥臣一とあるに據て伊具郡の下に人磐城團の四字を補へり
○丈部繼成、原本丈を大に作る西本尾本谷別本等に據て改む
○勅喚流人云々、此人等佐渡に配流せられしこと六年三月丁酉紀に見ゆ
○奸宄、原本宄を穴に作る尾本水戸校本に據る
○寔蕃有徒、左傳昭廿八年に惡直醜正實蕃有徒とあり三代格蕃を繁に作る
○靜言流弊云々、言は思也納隍は寶龜元年六月紀に注す三代格は文少しく異同あり參看すべし
○賑恤、原本振恤に作る紀略に據て改む
○壬生直、原本壬を王に作る閣本西本宮本に據る
○假外從五位下、假は借に同じ假りに授くるなり
○耕耘時必致京坻之蓄云々、六年閏正月丙午紀に注す坻は原本柢に作る諸本に據て改む
○候違、原本違を還に作

陸奥眞成等戸二烟、賜姓阿倍陸奥臣、同國人丈部繼成等卅六人、賜姓下毛野陸奥公、勅喚流人伴有仁、刀伎雄貞、○戊辰、參議左大辨從三位藤原朝臣常嗣、去年遭母喪、今日有勅、起觀事、○庚午、勅、如聞、奸宄之賊、寔蕃有徒、或暗夜放火、或白晝奪物、靜言流弊、情切納隍、宜下知左右京職五畿内七道諸國、嚴加督察、搜認閭里、隨獲且進、莫作留連、○辛未、勅、京中高年隱居、幷飢病百姓等加賑恤、○壬申、相摸國大住郡大領外從七位上壬生直廣主、代窮民輸私稻一万六千束、戸口増益五千三百五十人、褒此善狀、假外從五位下、○癸酉、勅、國家隆泰、要在富民、倉廩充實、良由有年、故耕耘時、必致京坻之蓄、稼穡候違、招飢饉之憂、農之爲道、豈不勗歟、去年炎旱作灾、嘉穀彫萎、百姓阻飢、國用闕乏、雖灾異之臻、則是天道、而庶民之愚、恐有倦惰、方今青陽入序、俶載南畝、勸課之事、適在此時、宜告五畿内諸國、戒以農事、隨時催勤、莫致懈怠、○甲戌、夜中雷雨交切、遣中使左近衛少將橘朝臣岑繼於嵯峨院、右近衛中將藤原朝臣助於淳和院、祇候先後太上天皇起居、○三月丁丑朔己卯、勅、遣唐

る山崎校本に據て改む
○青陽入序、青陽は春なり序は四時の序なり
○假載南畝、毛詩小雅大田章に以我覃耜假載南畝とあるに出づ假は始載は事なり
○戒以農事、戒字は水戸校本及紀略に據て補ふ
○岑繼、原本岑を助に作る諸本に據て改む
(三月)進發、進字は閣本西本尾本に據て補ふ
○第二舶、原本舶を船に作る諸本に據て改む
○耶麻郡、倭名抄耶麻に作る今岩代國に屬す
○人麿、原本麿を磨に作る諸本に據て改む
○上毛野陸奥公、神護景雲元年七月丙寅紀に見ゆ
○因授外從五位下、原本下を上に作る類史百九十に據て改む
○磐城郡、今磐城國に屬し石城郡に作る
○假外從五位下、山崎校本假を叙に改作る
○庚寅、此勅は三代格十四に見ゆ
○所施、類史百七十七所充に作り同八十三は本書に同じ
○澆醨、原本澆漓に作る

三箇船、去年夏六月進發、今諸船廻來、稍經年月、伺候之事、恐有懈怠、宜命大宰府及緣海諸國、爲未廻來第二舶、依例擧火候之、○庚辰、陸奥國耶麻郡大領外正八位上勳八等丈部人麿戶一烟、賜姓上毛野陸奥公、○辛巳、以從五位下藤原朝臣氏雄爲縫殿頭、四品忠良親王爲兵部卿、從四位下橘朝臣岑繼爲兼兵部大輔、左近衞少將如故、從五位上藤原朝臣宮房爲少輔、從五位下高原王爲伊豆守、授正六位上和氣朝臣眞菅從五位下、卽爲出羽守、良吏之選也、○壬午、分遣六衞府、搜捕京中盜竊、○戊子、俘夷物部斯波連宇賀奴、不從逆類、久效功勳、因授外從五位下、陸奥國磐城郡大領外正六位上勳八等磐城臣雄公、遙卽戎途、忘身決勝、居職以來、勤修大橋廿四處、溝池堰廿六處、官舍正倉一百九十宇、宮城郡權大領外從六位上勳七等物部已波美、造私池漑公田八十餘町、輸私稻一万一千束賑公民、依此公平、並假外從五位下、○庚寅、勅、去承和二年、文殊會料所施之稻、不足周急、宜加擧正稅、以其息利、加之先數、大上國各二千束、中小國各千束、永充會料、○乙未、勅、頃者風俗澆醨、

凋弊相屬、省費之術、儉約是憑、宜自今以後、女所服裳、夏之表紗、冬之中裙、不論貴賤、一切禁斷、一裳之外、不得重著、京畿七道准制禁斷、○辛丑(廿五)、陸奥國上奏發援兵之狀、○壬寅(廿六)、勅符陸奥守正五位下良岑朝臣木連、前鎭守將軍外從五位下匝瑳宿禰末守等、省今月十八日奏、知發援兵二千人、案奏狀云、奥邑之民、共稱庚申、潰出之徒、不能抑制、是則懲乂往事之所爲也、自非國威、何靜騷民、事須調發援兵、將候物情、其粮料者、用當處穀、但上奏待報、恐失機事、仍且奏且發者、夫預備不虞、古今不易之道也、是以依請許之、宜能制民夷、兼施威德、○夏四月丙午朔、日有蝕之、○丁未(二)、以從五位下橘朝臣逸勢爲但馬權守、○庚戌(五)、右京大夫從四位下橘朝臣弟氏卒、○辛亥(六)、從五位下紀朝臣綱麿爲但馬守、從五位上文室朝臣宮田麻呂爲筑前守、○癸丑(八)、請律師傳灯大法師位靜安於清涼殿、始行灌佛之事、○大宰府上奏、遣唐知乘船事菅原梶成等所駕第二舶廻著於大隅國、○庚申(十五)、勅符大宰大貳從四位上南淵朝臣永河、少貳從五位下文屋朝臣眞屋等、得今月八日飛驛奏狀、知遣唐知乘船事菅

諸本に據て改む字彙に澆は薄也醨は薄酒也とあり
○紗、抄布帛部に四聲字苑云紗(俗云レ射)似レ絹太輕薄也とあり
○冬之中裙、之字は諸本に據て補ふ
○共稱庚申、庚申の文字詳ならず纂詁に辛本庚上空二白一格一癸本作二守庚申一似レ是按庚申祭見二源氏及榮花物語一眞俗佛事編庚申本地爲二青面金剛一佛家祭レ之云々と云り
○懲乂往事、原本乂を於に作り諸本又に作る又は乂の訛なること明なれば改む乂は艾に通じ懲す意なり
○且奏且發者、且發の二字原本なし四年四月癸丑紀に據て補ふ
(四月)夏四月、夏字は水戸校本に據て補ふ
○從四位下橘朝臣弟氏卒、弟氏は贈太政大臣清友の第二子なり山崎校本に堀氏曰下當レ作レ上とあり
○大法師位、位字は例に據て補ふ
○灌佛、公事根源に此佛生會は推古天皇より始る釋迦如來の俱毘藍城にて

むまれ給ひける時天龍下りて水をそゝぎて釋尊にあぶせ奉し事を申なりさ見ゆ
○庚申、原本此上に四月の二字あり衍なり故に削る
○飛驛、原本驛を驒に作る西本宮本に據て改む
○一隻、原本隻を雙に作る諸本に據て改む
○言念苦節、原本言上に久字ありて念字なし諸本に據て久を削り念を補ふ
○鬱陶于懷、尙書五子之歌に鬱陶乎予心、注に鬱陶言哀思也とあり
○奉授、奉字は閣本尾本前本等に據て補ふ
○健磐龍神、神名式肥後國阿蘇郡健磐龍命神社（名神大）、今阿蘇郡宮地町に祀り阿蘇神社と稱し官幣大社に列す原本龍を籠に作る諸本に據て改む
○竈門神、同式筑前國御笠郡竈門神社（名神大）、今筑紫郡大宰府町北谷御笠村大石に祀り官幣小社に列す
○高良玉垂神、同式に筑後國三井郡高良玉垂命神社（名神大）、今同郡御井町高良山に祀り高良神社

原梶成等、分駕一隻小船、廻著大隅國海畔、梶成等漂入異域、万死更生、言念苦節、誠可矜恤、迄于入都、依舊勞來、量賜布帛、以資衣裳、又准判官良峯長松所駕之船、全否未期、鬱陶于懷、宜遞戒邊面、無絶候伺、若有來著、俾得安穩、○丙寅、奉授肥後國從四位下勳五等健磐龍神從四位上、餘如故、筑前國從五位下竈門神、筑後國從五位下高良玉垂神、並從五位上、又勳八等宗像神從五位下、餘如故、○丁卯、頒行諸司百官改正遺漏紕繆格式、○戊辰、太政官奏、去承和五年十一月二日、美濃國言、管惠奈郡無人任使、郡司暗拙、是以大井驛家、人馬共疲、官倉顚仆、因茲坂本驛子悉逃、諸使擁塞、國司遣席田郡人國造眞祖父、令加教喩、於是逃民更歸、連蹤不絶、遂率妻子、各有本土、夫見善不褒、何以責成、望請、停史生一員、特置驛吏、預于把笏、令得威勢、至得其人、爲終身任、其公廨者、給史生料、勅、減省官員、頗非穩便、宜史生數猶復舊例、眞祖父一身、特聽任用、從此而後、不得更補、其俸料者、分折公廨、給史生半分、事力公廨田不在給限、是日勅、敬神如在、視民如子、國宰能事、古今通規、是以屢施條章、

さ稱し國幣大社に列す
○又、此下に筑前國の三字を脱したるか
○宗像神、同式に筑前國宗像郡宗像神社三座（並名神大）、今同郡田嶋村田嶋大岸大嶋村沖嶋に祀り官幣大社に列す
○頒行改正遺漏紕繆格式、享祿本三代格十七に詳に見ゆ
○惠奈郡、今惠那郡に作る
○大井驛家、兵部式に美濃國驛馬大井驛十疋とあり今大井町是なり
○官倉、山崎校本倉を舎に改む
○坂本驛、兵部式に美濃國驛馬坂本三十疋とあり倭名抄に惠奈郡坂本鄉見ゆ今同郡坂本村是なり
○擁塞、原本塞を基に作る閣本前本尾本水戸校本に據て改む
○席田郡、抄國郡部に席田は無之呂太と訓り今本巣郡に入る
○把笏、笏字は原本訛るを諸本に據て訂す
○復舊例、纂詁に復疑仍字訛と云
○事力、既に注す
○敬神如在、論語八佾に

觀彼治道、而吏乖公平、民苦疾疫、年穀不登、飢饉荐臻、論之政迹、理合懲肅、夫事之則懈、人之情也、宜更下知五畿內七道諸國、改既往之怠、成方來之勤、巡行所部、修造神社、禰宜祝等、若有怠者、解却決罸、一依前格、年中修造之數、別錄言上、若三年之內、遣使覆撿、猶有破壞者、國司郡司科違勅罪、○參議左大弁從三位藤原朝臣常嗣薨、去延曆廿年遣唐持節大使中納言正三位葛野麻呂第七子也、少遊大學、涉獵史漢、諳誦文選、又好屬文、兼能隷書、立性明幹、威儀可稱、弘仁十一年、初任右京少進、尋遷式部大丞、十四年叙從五位下、出下野守、不之任、留任春宮亮、俄遷右少弁、天長元年、遷式部少輔、尋兼勘解由次官、三年叙從五位上、五年叙正五位下、七年坐公事、左遷刑部少輔、八年叙從四位下、遷勘解由長官、九年兼下野守、累兼右大弁、加從四位上、承和元年、改兼近江權守、尋遷左大弁、授正四位下、四年兼大宰權帥、五年夏六月、奉修聘持節使、入巨唐、六年八月至自大唐、近代父子相襲、預專對之選、唯一門而已、九月授從三位、薨時年卌五、○廿五庚午、勅、頃者、炎旱未幾、嘉苗殆枯、宜奉幣松尾、賀

祭如在祭神如神在とあるに出づ
○視民如子、左傳襄卅五年に出づ
○觀彼治道、觀は示也
○夫事之則悟人之情也、夫事は原本事天に作る閣本西本尾本等に據て改む之は久の誤なるべし山崎校本には事上に堀本細本大本に據れりとて夫字を補ひて夫事天之則悟人之情也と訓み纂詁は失事天之則悟治人之情也と改めたるも證なし
○藤原朝臣常嗣薨、叙任年月補任に詳なり
○坐公事左遷云々、名例律に縁公事致罪而無私曲者謂之公罪以官當流とあり其事實は詳ならず
○專對之選、專對は續紀下(四六頁)に注す遣唐大使に選ばれたるを云
○卌五、原本卅五に作る諸本に據て改む
○宜奉幣、宜字は西本前本中本に據て補ふ
○松尾、以下諸神は臨時祭式祈雨祭の條に見ゆ
○風災、原本夙災に作る西本宮本に據て改む
(五月)○養父郡、倭名抄

茂、乙訓、貴布禰、丹生川上雨師、垂水等社、祈甘雨、防風災焉、○五月丙子朔丁丑、但馬國言、養父郡兵庫鼓、無故夜鳴、聲聞數里、又氣多郡兵庫鼓夜自鳴、聲如行鼓、勅、內外之吏、無祿之人、夙夜服事、身乏衣食、因玆或兼牧宰、猶直本任、或拜外吏、留身京華、皆將潤以俸料、令得代耕、而諸國皆忘舊貫、便附遙授人、諸使遂使公文惑於失錯、貢物煩於麁惡、非唯一身兩營、復失辨成雜務、宜下知五畿內七道諸國、播殖黍稷稗麥大小豆、及胡麻等類、爲救民急也、○庚辰、停五日節、以後太上天皇不豫也、散事從四位下紀朝臣乙魚卒、○辛巳、後太上天皇顧命皇太子曰、予素不尚華餝、況擾耗人物乎、斂葬之具、一切從薄、朝例凶具、固辭奉還、葬畢釋縗、莫煩國人、葬者藏也、欲人不觀、送葬之辰、宜用夜漏、追福之事、同須儉約、又國忌者、雖義在追遠、而絆苦有司、又歲竟分綵、號曰荷前、論之幽明、有煩無益、並須停狀、必達朝家、夫人子之道、遵教爲先、奉以行之、不得違失、重命曰、予聞、人歿精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉、散之山中、於是中納言藤原朝臣吉野奏言、昔宇

に養父は夜不と訓り
○氣多郡、今城崎郡
○勅內外之吏云々、此勅は三代格十二に出づ內外は格に內官に作る
○皆忘舊貫、皆は原本背に作る尾本及格に據る
○便附遙授人諸使、格には便附二使政一とあり諸國調庸專當の歷名をば大帳使に附して申送る例なるが使人豫め物の麁惡なるを知り責任を遁れむが爲に在京の國司郎ち遙授の人に其事を附するを云
○非唯一身兩營云々、纂詁雜務に至る十二字を削り諸使壅塞職此之由宜下符諸道一勿令更然一の十七字を補へりされど非唯一身云々も誤なりとも認め難し按に五畿七道諸國の下に勿令更然の四字又は其意味の文字脫ちしなるべし
○播殖黍稷云々、以下は又同日に下されし別勅なり此勅は三代格八及政事要略五十三に見ゆ按に播殖の上に又令諸國の四字脫ちしか纂詁には下知の上に又を諸國の下に令を補ひ以下別勅とす
○顧命、尙書顧命篇序注

治稚彦皇子者、我朝之賢明也、此皇子遺教、自使散骨、後世效之、然是親王之事、而非帝王之迹、我國自上古、不起山陵、所未聞也、山陵猶宗廟也、縱無宗廟者、臣子何處仰、於是更報命曰、予氣力綿惙、不能論決、卿等奏聞嵯峨聖皇、以蒙裁耳、○癸未、後太上天皇崩于淳和院、春秋五十五、勅遣左近衛少將從五位下佐伯宿禰利世於近江國、左衛門權佐從五位下田口朝臣房富於伊勢國、右近衛府生大初位下常澄宿禰氏繼於美濃國、固守三關、但美濃國命守從四位下笠朝臣廣庭、便固關門、以正三位藤原朝臣吉野、從三位源朝臣定、正四位下三原朝臣春上、正四位下源朝臣弘、從四位上藤原朝臣衞、從四位下紀朝臣長江、正五位下藤原朝臣輔嗣、正五位下藤原朝臣嗣宗、外從五位下淸內宿禰御園、六位已下三人、爲裝束司、正三位藤原朝臣愛發、從三位藤原朝臣繼業、從四位上文室朝臣秋津、從四位上源朝臣明、從四位上源朝臣寬、從四位下和氣朝臣仲世、從五位下林朝臣常繼、六位已下四人、爲山作司、從四位下岑成王、從五位下廣宗宿禰糸繼、六位已下三人、爲養役夫司、

に臨終之命曰二顧命一とあり
○釋緂、抄調度部葬送具に緂衣唐韻云緂（不知古路毛）喪衣也とあり釋緂は喪服を除くを云
○葬者藏也云々、禮記檀弓に葬也者藏也藏也者欲二人之弗一レ得レ見也とあり
○夜漏、夜分なり漏は漏刻なり
○國忌、儀制令義解に謂下先皇崩日依二別式一合二廢務一者上とあり國忌の事治部式及式部式に見ゆ
○荷前、諸國より貢進する御調の物を先づ陵墓に獻るを云
○人歿精魂歸天、原本歿を沒に作る今諸本及類史廿五に據て改む禮記郊特牲に魂氣歸二于天一形魄歸二于地一とあり
○宇治稚彥皇子、卽ち菟道稚郎皇子なり散骨の事は古書に見えず
○山陵猶宗廟、宗廟は祖先の靈を祀る處なり支那にては必ず廟を立てゝ祖先を祀れど我國にては其制行はれず主として山陵を祀る故に山陵は猶宗廟の如しと云り
○綿憿、世說德行篇に臨

從五位下近棟王、外從五位下秦宿禰眞仲、六位已下二人、爲二作路司一、正三位藤原朝臣愛發爲二御前次第司長官一、從五位上藤原朝臣宗成爲二次官一、判官二人、主典二人一、從四位上文室朝臣秋津爲二御後次第司長官一、從四位下文室朝臣名繼爲二次官一、判官二人、主典二人一、以二絹五百匹、細布百端、調布千端、商布二千段、錢五百貫、鐵八十廷、鍫二百口、白米百斛、黑米百斛一奉レ充二御葬料一、發二五畿內及近江丹波等國夫一千五百人一、以供二御葬所一、是日、於二建禮門南庭一、放二弃鷹鷂籠中小鳥等一、令二五畿內七道諸國一、始レ自二九日未四剋一、國郡官司著二素服一、於二廳前一擧レ哀三日、每日三度、○甲申、令三參議從四位下刑部卿安倍朝臣安仁上二後太上天皇誄諡一、誄曰、畏哉、讓レ國而御坐志天皇乃天津日嗣乃御名乃事乎、恐美恐毋誄白、臣恭、畏哉、日本根子天皇乃天地乃共長久、日月乃共遠久、所白將往御諡止稱白久、日本根子天高讓彌遠尊止稱白久止、恐美恐毋誄白、臣恭、天皇於二淸涼殿一著二素服一、以二遠江貲布一奉レ著二御冠一、哀泣殊甚、爲二人之後一者、爲二其子一故也、近習臣權中納言藤原朝臣良房等以下、於二殿下一擧レ哀、右大臣藤原朝臣三守、率二公卿百

終綿儗とあるに出づ集韻に綿は弱也儗は疲也とあり
○以蒙裁、原本以を次に作る閣本西本尾本に據る
○五十五、原本五を九に作り紀略にも九とありされど歷代皇紀紹運錄等何れも五に作り大日本史注に據續日本後紀類聚國史日本紀略並作五十九然據嵯峨帝禪讓之詔曰太弟與朕春秋亦同則帝以延曆五年生至是實年五十五故今訂之と云り之に據て改む
○固守三關、原本固を同に三を之に作る諸本に據て改む
○宗成爲次官、爲字は宮本及類史卅五に據て補ふ
○從四位下文室朝臣名繼、文德紀仁壽元年十一月甲午從五位下文室朝臣名繼敘從五位上とあるに據れば四は五の誤なるべし
○細布、原本細を紬に作る諸本に據て改む
○御葬所、類史葬を墓に作る
○後太上天皇誄、後字は山崎校本に據て補ふ
○讓國、原本讓を護に作

官及刀禰等、於會昌門前庭、擧哀三日、毎日三度、○戊子、勅、遣右近衛少將從四位下橘朝臣岑繼、及四衛府監尉志已下三十二人於淳和院、監護裝束、山作、養民司等、遺詔不受矣、此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村、御骨碎粉、奉散大原野西山嶺上、○己丑、修後太上天皇初七、誦經於京邊七箇寺、○庚寅、固近江國關使復命、○壬辰、右大臣從二位藤原朝臣三守已下十一人奏言、臣聞、天下大器、群生重畜、一日万機、不可暫曠、是以周、誓牧野、猶抑荼毒之心、漢、聽德陽、復綏斬縗之慟、伏惟陛下、至孝過禮、痛深衣冠、泣血攀號、不莅朝位、臣等謹見遺制曰、葬畢釋縗、莫煩國人者、伏願、釋凶服而垂冕旒、割哀襟而褰黈纊、則上遵遺詔、下叶舊章、豫承綸旨、宣告內外、不任懇情之至、謹詣闕奉表以聞、○癸巳、固伊勢美濃關使等復命、○甲午、詔曰、比者、昊穹不弔、後太上天皇登遐、龍髯之駕方遙、鳳紼之行靡反、朕甫鍾鞠疚、痛結荒衿、懷荼蓼以纏悲、制苴菜而展禮、夫愼終追遠、自有通規、以日易月、唯稱權變、而葬訖釋縗、載在遺訓、群公虔奉、確請莫違、憑几之言、理難拒忤、至公之議、抑當有徇、故今

屈因心、以従権奪、宣告中外、俾知此意、○乙未、京中飢病、以飯米錢振給之、○丙申、遣使於左右京振給、以當後太上天皇二七日也、○丁酉、勅、後太上天皇崩後、國忌、荷前、陵戸等事、宜遵遺制、以停奉行焉、○戊戌、天皇除素服、著堅絹御冠、橡染御衣、以臨朝也、御簾及屏風之縁、並用墨染細布、但御座者、施簟於砥礪之上、不立御榻、○庚子、攝津國飢、賑給之、

る水戸校本及類史卅五に據て改む ○天津日嗣乃御名、天皇さしての御名の義 ○臣末、原本末を來に作り宮本等に作る西本及類史に據て改む末は某なり ○天地乃共、原本乃を止に作る諸本及類史に據て改む次の日月乃の乃字亦同じ ○天高讓彌遠尊、原本讓を壤に作る諸本及類史に據て改む高讓は天皇春秋に富ませ乍らはやく御位を皇太弟に讓らせ給ひしを稱へ奉れるなるべく彌遠は聖慮の深遠に坐す意なるべし ○恐母誄白、原本誄を誅に作る諸本に據て改む ○臣末、此二字諸本及類史に據て補ふ ○(注)遠江貲布、原本遠を近に貲布を紫野に作る遠は類史卅三に據り貲は水戸校本及類史、布は諸本及類史に據て改む主計式に遠江國調貲布十二端さあるにても近江は遠江の誤なる事を證すべし貲布は既に注す ○刀禰等、官位令に散位頭をトネノカミさ訓みたれば此も廣く散位までこめて云 ○會昌門、八省院の南正門 ○物集村、抄郡鄕部山城國乙訓郡物集(毛豆女)さあり今向日町物集女に淳和天皇御火葬塚あり ○大原野西山嶺上、山城國乙訓郡大原野村大原野字清塚を淳和天皇大原野西嶺上陵さ定め奉らる ○從二位藤原朝臣三守、原本從を正に作る上下の文に據て改む ○天下大器云々、晉書愍帝紀に天下大器也群生重畜也さあり原本大を天に作る諸本及類史に據る ○一日万機、尙書皐陶謨に出づ ○周誓牧野云々、周武王文王の喪中木主を奉じて牧野に誓ひ商を伐てるを云荼毒之心は父王を哀悼する悲痛の念なり史記周本紀に見ゆ ○漢聽德陽云々、此故事詳ならず德陽は史記景帝紀中四年に見え注に景帝廟也さ云り斬縗は親喪に服する喪服なり ○冕旒、禮冠の最貴なるもの人君の冠なり旒は冠の前に珠玉を貫きし纓を垂れたるを云大戴禮に古者冕而前旒所以蔽明さあり ○黈纊、漢書東方朔傳に黈纊充耳所以塞聰、注に黈黄色也纊緜也以黄緜爲丸用組懸之於冕垂兩耳旁示不外聽さあり天子の禮冠に附する飾なり ○昊穹不弔、昊穹は昊天、弔は愍也 ○龍髯之駕、史記封禪書に黄帝采首山銅鑄鼎於荊山下鼎既成有龍垂胡髯下迎黄帝黄帝上騎龍乃上去さあるに出づ ○鳳紼之行、紼は字書に引棺索曰紼さあり ○甫鍾煢疚、煢疚は左傳哀十六年に煢々余在疚さあり煢々は憂思の貌、疚は病也原本煢を災に作る水戸校本及類史に據て改む ○荼蓼、荼は苦菜、蓼は辛菜なり以て苦痛に譬ふ ○纏悲、原本悲上に心字あり閣本中本前本等に據て削る ○制苴菒、苴は禮記喪服小記苴杖の注に苴者黯也心如斬斫故貌必蒼苴所以縗裳経杖倶備苴色さあり菒は正字通に俗の枲字さ見ゆ枲は麻也苴菒にて喪服を云なるべし原本菒を菓に作る諸本に據て改む ○自有通規、原本自を曰に作る水戸校本及類史に據て改む ○以日易月、晉書禮樂志に杜預等言孝文權制三十六日之服以日易月さあり此事漢書文帝紀の遺詔に詳なり ○憑几之言、尙書顧命に王(成王)被冕服憑玉几曰云々さあるに出づ遺詔を云なり ○因心、孝心さ云に同じ續紀下(二九六頁)に注す ○堅絹御冠、御冠は紗を用ふべきを諒闇を以ての故に堅絹を用ひさせ給ふなり ○簟、抄調度部坐臥具に見ゆ竹又は葦を編みたる竹席(タカムシロ)なり ○砥礪、何れも磨石なり ○御榻、倭名抄に見ゆシヂさ訓む腰掛なり

(二六月)礒原朝臣、他に見えず
○文室眞人、錄右京皇別に天武天皇々子二品長王之後也と見ゆ
○法琳寺、拾芥抄下本に法琳寺太元堂是也文德御時常曉律師入唐之後造之在小栗栖と見ゆ
○閑燥、水戶校本及紀略閑を高に作る
○大元帥、六年九月辛丑紀に注す原本太元師に作る類史百七十八に據る
○箭一隻、原本隻を雙に作る諸本に據て改む
○妖祥、原本妖を祓に作る尾本宮本及類史百七十七に據て改む
○布施法有差、私記に法下一有師各二字と云
○(注)外記日記云々、後人の補注なるべし
○亢陽、字書に旱曰亢陽とあり原本亢を冗に作る水戶校本に據て改む
○陰雨、毛詩小雅黍苗篇に芃々黍苗陰雨膏之と見ゆ
○霈澤、澍雨なり
○行繩、原本繩を綱に作る諸本に據て改む下同じ

○六月乙巳朔、右京人正六位上礒原朝臣諸宗等廿八人、賜姓文室眞人。○丁未、入唐請益僧傳灯大法師位常曉言、山城國宇治郡法琳寺、地勢閑燥、足修大法、望請、今般自大唐奉請大元帥靈像祕法、安置此處、爲修法院、保護國家、不關講讀師之攝、許之。○己酉、物恠見于內裏、栢原山(桓武)陵爲祟、遣中納言正三位藤原朝臣愛發等於山陵祈禱焉、遣唐第二舶知乘船事正六位上菅原朝臣梶成等、海中遇逆風、漂著南海賊地、相戰之時、所得兵器、五尺鉾一枚、片蓋鞘横佩一柄、箭一隻、賚來獻之、並不似中國兵仗。○辛亥、設百高座於宮中、令講仁王經、爲攘中外妖祥也、晩頭講畢、布施法有差、（外記日記云、不行衆僧布施、所謂無所得者也、）○癸丑、勅、比來亢陽涉旬、陰雨不下、不預祈禱、恐損國家、宜奉幣於貴布禰、丹生川上雨師諸社、祈霈澤於名山大川、若狹國人外從五位下宍人朝臣恒麿、散位正六位上宍人朝臣繼成等、改本居貫附左京七條二坊。○甲寅、以參議從四位下安倍朝臣安仁爲兼左大弁、刑部卿如故、從四位上笠朝臣梁麿爲大舍人頭、從五位下藤原朝臣行繩爲縫殿頭、從五位下藤原朝臣諸成爲式部少輔、

〇少弼、原本少を小に作る西本宮本前本に據て改む
〇爲勘解由長官、爲字は宮本に據て補ふ
〇丹後國人、以下二條二坊に至る三十四字下文丙寅條に重出す是非を決め難けれど姑く彼を削りて此を存す水戶校本には此を刪りて彼を存し山崎校本及纂詁は此を存せり
〇武散位、武字は諸本に據て補ふ
〇男諸兄、男字は宮本及下文に據て補ふ
〇右京二條、右京の二字は宮本及下文に據て補ふ
〇疫癘、原本癘を病に作る諸本に據て改む
〇擬焳、水戶校本擬燋に作る
〇受祐、受字は諸本に缺く恐くは意を以て補ひしなるべし
〇七箇日間、間字は紀略に據て補ふ
〇並城外、並は原本兼に作る山崎校本に據て改む

從五位上藤原朝臣菊池麿爲治部大輔、從五位上藤原朝臣宮房爲民部少輔、從五位下菅原朝臣善主爲兵部少輔、從五位上小野朝臣宗成爲大藏大輔、從五位上岡野王爲宮內大輔、從五位下淸瀧朝臣河根爲少輔、三品阿保親王爲彈正尹、從五位下丹墀眞人雄濱爲少弼、從四位下田口朝臣佐波主爲右京大夫、從四位下和氣朝臣仲世爲勘解由長官、從四位下橘朝臣岑繼爲兼左近衞中將、兵部大輔如故、從五位下藤原朝臣良相爲兼左近衞少將、內藏頭如故、從五位下藤原朝臣氏宗爲右近衞少將、從五位下野長王爲左兵庫頭、外從五位下飯高公常比麿爲遠江介、從五位下橘朝臣宗雄爲下總介、從五位下小野朝臣千株爲出羽守、從五位下藤原朝臣氏雄爲石見守、從五位上山名王爲阿波守、丹後國人武散位從八位上時統宿禰全氏男諸兄等廿人、改本居貫附右京二條二坊。〇丁巳、勅、去年秋稼不登、諸國告饑、今茲疫癘間發、夭傷未弭、加以季夏不雨、嘉苗擬焳、夫銷殃受祐、必資般若之力、護國安民、事由修善之功、宜命五畿內七箇日間、晝轉大般若經、夜修藥師悔過、長宮

精進、必致靈感、修善之間、禁斷殺生、○戊午、同亦行讀經悔過於十五大寺並城外崇山諸有驗之寺、皆悉通傳修之、一七日夜爲限、若山寺大般若經不在之處、令轉金剛般若經、○己未、奉幣帛於伊勢大神宮、及賀茂上下、松尾等社、祈霈澤、又令內外諸國、奉幣神祇、祈請甘雨、○庚申、詔曰、哲后撫運、寔約己而臨人、明王會昌、必推心而濟物、是以羲農隔代、同期於勤勞、勛華殊時、共均於愛育、朕祇膺景命、嗣守丕基、日愼寒懷、不以九重自樂、夕惕興想、每以億兆爲憂、而政化未孚、至誠靡達、去年陰陽幷隔、秋稼弗登、頃者偏亢淹旬、藝殖或損、如聞、諸國飢疫、往々喪亡、朕之菲虛、黎元何罪、仰稽前烈、德是除邪、內求諸心、抑可挹損、其朕服御物、幷常膳等、並宜省減、左右馬寮秣穀、一切擁絕、諸作役非要者、量事且停、犴圄之中、恐有寃者、速命所司、申慮放出、加之天下諸國有水之處、任命百姓灌漑、先貧後富、鰥寡孤獨不能自存者、量加賑贍、其臥病之徒、無人視養、多致夭折、凡國郡司爲民父母、而不顧念、豈稱子育、宜就班穀藥、令得存濟、又免除五畿內七道諸國、去承和二年以往調庸未進、在民身者、但東海

○會昌、文選蜀都賦注に昌は慶也とあり
○羲農隔代云々、羲は伏羲農は神農、兩帝は代を隔て、天下に君たれとも共に自ら勤勞して民を安んじたりとなり
○勛華殊時、勛は放勛即ち堯華は重華にて舜、堯舜は時代を殊にすれとも共に民を愛育したりとなり
○偏亢、原本偏穴に作る宮本水戶校本に據て改む亢は亢陽の亢なり類史には旱に作る
○前烈、尚書に出で先代の遺勲を云
○挹損、魏志甄皇后傳注に后寵愈隆而彌自挹損とあるに出で挹は退也抑損するを云
○左右馬寮、原本寮を察に作る諸本に據て改む
○擁絕、原本擁を權に作る宮本に據て改む擁絕は塞ぎ絕つを云
○犴圄、獄舍を云原本梐圄に作る諸本に據て改む
○天下諸國有水之處云々、雜令に凡取水漑田皆從下始依次而用とあり
○多致夭折、致字は閣本尾本に據て補ふ

○東海東山山陽三道云々、此三道は使命繁ければ特に田租をも免ぜられしなり
○油雲布族、油雲は西京雜記に雨雲曰油雲とあり族は字書に叢也とありむらがるなり
○京坻、二月癸酉紀に出づ原本坻を城に作る諸本に據て改む
○篁入京、二月辛酉罪を赦さる
○黃衣、衣服令に无位皆皂縵頭巾黃袍云々とあり無位の人の服なり
○歷名、官位氏姓を記載したるものなり
○令除、除は官に任ずるを云漢書景帝中二年二月紀注に凡言除者除故官就新官也とあり
○耄、釋名に七十曰耄とあり
○揖保郡、今も存す
○家嶋神、神名式播磨國揖保郡家嶋神社(名神大)播磨郡家嶋村宮浦
○赤穗郡、今も存す
○八保神、神名式播磨國赤穗郡八保神社、船阪村八保
○恩渙、渙は易渙卦に出で詔勅を云

東山山陽三道、驛戶田租、限三箇年、殊從原免、庶油雲布族、施甘澤於十旬、嘉苗亘原、貯京坻於萬畝、普告遐邇、俾知朕意、○辛酉、流人小野篁入京、披黃衣以拜謝、是日、夜分雨稍降、○壬戌、大雨快降、大宰府馳驛奏、遣唐第二舶准判官從六位下良岑朝臣長松等廻著大隅國、○甲子、以陰陽頭從五位上大春日朝臣公守、爲土左權守、又擇諸司史生高年者七人、其歷名賜式部省、令除近江、播磨、備前等國權史生、恤耄也、播磨國揖保郡家嶋神、赤穗郡八保神、並爲官社、○丙寅、太政官左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、右大臣從二位皇太子傅藤原朝臣三守等奏曰、伏奉今月十六日詔書、偁、去年陰陽并隔、秋稼不登、頃者偏亢淹旬、藝殖或損、御物并常膳等、並宜減省者、群臣跪讀、不勝感歎、但恩渙俄出、甘澤平施、鳳畛收黃、龍原布綠、神明不遠、感應孔昭、率土之濱、誰不歡慶、昔夏帝之解陽旴、殷王之禱桑林、以古況今、抑須懃德、臣等忝以散樗、叨厠槐棘、道非匡贊、功謝緝熙、覗懼之至、倍百恒情、今者帝念猶勞於上、臣心何安於下、埃塵不讓、泰山居仰止之庭、涓滄无辭、亘海作朝宗之府、伏望暫減五位

已上封祿、以支万一焉、伏聽天裁、丹後國人武散位從八位上時統宿禰全氏男諸兄等廿人、改本居、貫附右京二條二坊、備中介外從五位下余河成、右京大屬正六位下余福成等三人、賜姓百濟朝臣、其先百濟國人也、○廿四戊辰、奉授遠江國周智郡無位小國天神、磐田郡無位矢奈比賣天神、並從五位下、○廿六庚午、勅報公卿論奏曰、運鍾季俗、道謝潜通、內求諸己、政術多昧、去年炎旱、鳴蟬之稔不昇、今夏騫陽、封蟻之徵欲缺、而上天反異、惟神降休、雨師俄奔於四溟、甘澤終遍於八極、是則卿等能施變復、以申弼諧、感動彼蒼、用招燮理之所致也、卿等贊揚嘉應、歸于朕躬、朕之涼德、何以當之、且夫年豐不効、職朕之由、菑害仍臻、何關輔相、況大夫等、或在屢空之地、不能濟家、或絕兼遂之心、所恃唯秩、所以此般省撤、獨止一人、而卿等輸以丹誠、折減祿、驅之朱紱、蹙私助公、雖知雅懷、固乖予意、是以來表之請、特以不容、是日制、住西寺僧等、自今以後、簡廿臘以上熟學之僧、智行兼備、衆所推讓者、令住寺家、永爲恒例、○廿八壬申、公卿等重奏曰、伏奉綸旨、恩發紫庭、損上之美獨遠、德重黃屋、益下之道愈光、所

○甘澤、大雨を云
○鳳眕收黃云々、田畠の黃色を帶び已に枯れむとせしが綠色を現せるを云
○神明不遠云々、傳咸喜雨賦に執謂神遠、厥應孔昭とあるに據れり原本昭を照に作る今諸本に據る
○昔夏帝之解陽旰云々、文選應璩與岑文瑜書に昔夏禹之解陽旰、殷湯之禱桑林、言未發而水旋流、辭未卒而澤滂沛とあるに據れり解は身を神に捧げて祈るを云陽旰は河名、桑林は地名なり此故事は淮南子及呂氏春秋に見ゆ、原本旰を肝に作るは訛なれば改む
○散樗、樗は散木、大材にして用途なき木なれば不才の人を云
○槐棘、公卿大夫を云六年十二月丙辰條に注す
○道非匡贊云々、輔弼の任に堪へざるを云匡は輔助、緝熙は光明也毛詩大雅文王章に出づ
○靦懼、原本靦を覥に作る諸本に據て改む靦は慙也
○埃塵不讓云々、史記李斯傳に太山不讓土壤故能成其大、河海不擇細

レ請祿封、未レ被二減省一、夫周后雲漢、鄭伯桑山、空聞二其祈一、不レ見二其驗一、今皇天報應、離畢滂沱、動植飛沉、無レ不二霑潤一、猶且乾々在レ慮、納隍之勞良深、孳々責レ躬、濟物之仁至廣、臣等伏惟、斗筲謬叨二匪據一、覩レ天猶レ暗、在レ陸如レ沉、何賛二皇猷一、應レ備二彼相一、而運遇二昌期一、覿二聖化之無一レ外、時屬二交泰一、禱レ民天之有レ年、但君唱臣隨、上行下化、古今一揆、寧得二闕如一、未レ有二主上憂勤、臣下逸樂者一也、伏望、五レ位已上封祿、暫從二省約一、導二涓流一而添二溟海一、持二爝火一而助二大陽一、權中納言從三位藤原朝臣良房奉二綸旨一報命曰、頻省二來表一、具レ之懇情、宜レ食レ封之家、依レ請減レ之、人別四分之一、但四位五位秩祿惟薄、今年之間、不レ可二減省一、○癸酉、廿九勅、頃者澍雨頻降、嘉穀滋茂、如有二風災一、恐損二農業一、宜レ令三五畿內七道諸國奉二幣於名神一、豫防二風雨一焉、

流一故能就二其深一王者不レ却二衆庶一故能明二其德一さある意を採りて句を成せり臣等が奏請を鄙陋さして却けらるゝこさなく聽許せさせ給へさ云なり御止は毛詩小雅車牽章に高山仰止さあり止は語助の辭、朝宗は尙書禹貢に江漢朝二宗于海一さあり

○伏聽天裁、原本此下に丹後國人云々の卅四字重出す上文甲寅條に同じ

○余河成、河は原本及諸本何に作る文德紀仁壽三年八月壬午條に據て改む

○余福成、原本福を禍に作る水戶校本に據て改む

○百濟朝臣、錄左京諸蕃に見ゆ寶字二年六月甲辰紀に余益人等四人賜二百濟朝臣姓一さ見ゆ

○小國天神、神名式遠江國周智郡小國神社、一宮村五川に祀り國幣小社に列す　○矢奈比賣天神、同式同國磐田郡矢奈比賣神社、見付町見付宿　○運鍾季俗云々、世の中澆季になりて政道洽く行はれずさなり原本鍾を鐘に季を李に作る鍾は尾本前本に據り季は閣本に據て改む　○鳴蟬之稔、鳴蟬は詳ならず纂詁に蟬或鳩字訛さ云り鳴鳩は其聲五穀可二布種一さ云が若し故に布穀又は穫穀さ云さ云り或は然るべし　○亢陽、亢陽に同じ炎旱を云　○封蟻之徵、易林に蟻封二穴戶一大雨將レ集さあり　○上天反異云々、上天が禍さなるべきを轉換して幸運を降せりさなり　○四溟、四海を云　○八極、八方の極遠の國を云　○變復、聖賢群輔錄黃帝七輔の條に窺レ紀受二變復一注に有二禍變一能補復也さあり　○弼諧、尙書皐陶謨に讓明弼諧さあり諧は和也　○彼蒼、天を云　○燮理、職員令義解に燮は和也理は治也さあり　○凉德、薄德に同じ　○菑害、菑は災に同じ原本蓄に作る山崎校本に據る　○屢空之地、論語先進篇に回也其庶乎屢空さあるに出づ貯蓄なきを云　○兼遂之心、富貴を兼有せむさの心　○所恃唯秩、秩は秩祿なり原本恃を持に秩を釋に作る諸本に據て改む　○一人、天子を云　○驅之朱紱、朱紱は天子の著する物故に天子の意に用ふ、卽ち私家の用を割きて公家の助さして奉するを云　○雖知雅懷、原本惟雖知懷に作る諸本に據て改め

討す　○之請、原本顚倒す閣本前本等に據て改換ふ　○西寺、九條に在りて東寺と東西相對す　○紫庭、朝廷を云宋書符瑞志に出づ　○損上之美、上御一人のみ大に節約を守らせ給ふを云、損上益下は易益卦の象傳に損レ上益レ下民說无レ疆とあるに據る　○黃屋、天子の車を稱し史記項羽紀に出づ　○周后雲漢、周后は周の宣王を云宣王の時大旱あり王身を正し行を修めて災を銷去せむとす詩人之を美して雲漢章を作れり毛詩大雅に載す　○鄭伯桑山、左傳昭十六年に鄭大旱使二屠擊祝款豎柎一（注、三子鄭大夫）一有二事於桑山一とあるを云　○離畢滂沱、毛詩小雅漸々之石章に月離二于畢一俾二滂沱一矣、傳に月離陰星（畢を云）一則雨とあるに出づ離は歷也、畢は星名、滂沱は雨盛貌、月此畢星に近づき歷れば大雨降ると云なり　○動植飛沈、飛沈は禽鳥魚鼈を云　○莫不霑潤、原本無下に水字あり閣本西本尾本に據て削る　○乾々在慮、易乾卦に君子終日乾々とあるに據れり生民を思はせ給ふ御心の終日やまざるを云　○孳々、孜々に同じ勤て倦まざる意孟子盡心章に出づ　○斗筲、論語子路篇に出づ人の器量の小なるを云　○覩天猶暗云々、光明なる天を見て暗しとなし水なくして沈むが如き道理に暗き人と云なり在レ陸如レ沈は莊子則陽篇に方且與レ世違而心不レ屑二與レ之俱一是陸沈者也とあるに據れり原本沈を泥に作る山崎校本に據る　○應備彼相、彼相は論語季氏篇に危而不レ持顚而不レ扶則將焉用二彼相一矣とあるに出づ輔弼の臣を云　○時屬交泰、易泰卦の象傳に天地交泰とあり　○禱民天之有年、漢書酈食其傳に王者以レ民爲レ天而民以レ食爲レ天とあるに出づ農民の耕作せる年穀の豐饒ならむ事を祈るなり　○闕如、論語子路篇君子於二其所一レ不レ知蓋闕如とあるに出づ　○導涓流而添溟海、僅少の物を捧げ國費の萬分の一にも充てむとの意次句亦同じ、涓流は後漢書周紆傳にまた爝火は莊子逍遙遊篇に出づ原本導を遵に作る閣本西本中本に據て改む

○秋七月甲戌朔戊寅、奉二幣帛於伊勢大神宮一、以レ祈二秋實一也、以二播磨國揖保郡大道寺、賀茂郡淸妙寺、觀音寺一、並爲二天台別院一、○庚辰、右大臣從二位皇太子傅藤原朝臣三守薨、使三參議從四位下左大辨安倍朝臣安仁、式部大輔從四位下藤原朝臣衞、散位從五位上藤原朝臣宗成、中務少輔從五位下笠朝臣數道等、監二護喪事一、大臣者、參議從三位巨勢麿朝臣之孫、而阿波守從五位上眞作之第五子也、大同元年、自二主藏正一、累遷美作權掾、權介、內藏助、四年敍二從五位下一、拜二右近衞少將一、弘仁元年、加二從五位上一、尋任二內藏頭、春宮亮一、四五年累加二授從四位下一、拜二式部大輔一、累遷

（七月）大道寺、纂詁に加西郡男上村にあり四鄕長者寺と云とあり
○淸妙寺、詳ならず
○觀音寺、纂詁に觀音寺一名願成寺加西郡弘山鄕松山村にありと云
○藤原朝臣三守薨、敍任の年月補任に詳なり但し本書と合はざるものあり參看すべし
○巨勢麿朝臣、原本朝臣の二字は麿の上にあり諸本に據て改む
○主藏正、主藏監は春宮坊に隷す
○弘仁元年加從五位上云々、公卿補任に弘仁二年とす補任の誤か

○四五年累加云々、弘仁四年正月正五位下に、五年正月從四位下に、同月式部大輔兼右兵衞督に、八月左兵衞督に遷れり故に四五年累加さ云
○皇太后宮大夫、太字は補任に據て補ふ

○遣參議、原本遣な遺に作る諸本に據て改む
○慶仲、原本仲な中に作る諸本及八年四月庚申紀に據て改む
○蕃邸、蕃は藩に通す春宮坊な云

○一兩學徒、原本兩な雨に作る諸本に據て改む
○諸操、操は操行なり
○公卿傳、私記に左丞抄所謂貞觀六年所纂公卿列傳蓋是さあり

左兵衞督、七年兼但馬守、俄拜參議、九年兼春宮大夫、十一年授從四位上、是歲加正四位下、十二年授從三位權中納言、十三年兼皇太后宮大夫、十四年補中納言、加正三位、天皇禪國之後、辭退侍于嵯峨院、天長三年除刑部卿、五年拜大納言、兼兵部卿、七年兼彈正尹、十年授從二位、兼皇太子傅、承和五年拜右大臣、年五十六、薨于位、遣參議從四位上春宮大夫右衞門督文屋朝臣秋津、民部大輔從四位下百濟王慶仲等、就第宣詔、贈從一位、三守早入大學、受習五經、暨先太上天皇踐祚之日、以蕃邸之舊臣、殊賜榮寵焉、立性溫恭、兼明決斷、招引詩人、接杯促席、參朝之次、有一兩學徒、遇諸塗、必下馬而過之、以此當時著稱、至于諸操、見公卿傳矣、○[十]癸未、令五畿內七道諸國、諒闇之間、停釋奠祭、○[廿一]甲午、天皇御紫宸殿、始覽万機、○[廿二]乙未、奉授肥後國阿蘇郡從四位上勳五等健磐龍神從三位、餘如故、以正五位下楠野王爲中務大輔、從五位下藤原朝臣並藤爲陰陽頭、從五位下高階眞人淸上爲治部少輔、正五位下藤原朝臣輔嗣爲越前守、從四位下紀朝臣長江爲備中守、○[廿六]己亥、奉授出羽國飽

○頃、原本須に作る宮本に據て改む
○聞作戰聲、山崎校本堀本に據れりさて聞を間に改め纂詁亦これに倣ふ
○石兵、原本兵石に作る閣本前本中本等に據て改む
○申賜波久止、止字は例に據て補ふ
○玉名郡、倭名抄に玉名は多萬伊奈と訓り郡名今も存す
○疋石神、神名式肥後國玉名郡疋野神社是なり同郡彌富村立願寺に祀る式に據るに石は野に改むべきなり
○講師、原本講を讀に作る水戶校本及類史百七十七に據て改む
○久修練行、久字は水戶校本及類史に據て補ふ
○參議中務卿職依請許之、補任に許參木猶爲中務卿兼播磨守とあり大日本史は補任に據れり

海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下、餘如故、兼充神封二戶、詔曰、天皇我詔旨爾坐、大物忌大神爾申賜波久、頃皇朝爾緣有物恠天下卜詢爾、大神爲祟賜倍利、加以遣唐使第二舶人等廻來申久、去年八月爾、南賊境爾漂落氐相戰時、彼衆我寡氐、力甚不敵奈利、儻而克敵留波、似有神助止申、今依此事氐臆量爾、去年出羽國言上太留、大神乃於雲裏氐、十日聞作戰聲、後爾石兵零利止申世利之月日、與彼南海戰間、正是符契世利、大神乃威稜令遠被太留事乎、且奉驚異、且奉歡喜、故以從四位爵乎奉授、兩戶之封奉充良久乎申賜波久止申、○庚子廿七、以肥後國玉名郡疋石神預官社焉、○辛丑廿八、勅、正月金光明會講師、以持律持經及久修練行、禪師、輪轉請用、○八月甲辰朔辛亥八、詔以大納言正三位源朝臣常爲右大臣、中納言正三位藤原朝臣愛發爲大納言、權中納言從三位藤原朝臣良房爲中納言、丹波守從四位下正躬王、右大弁從四位上和氣朝臣眞綱、並爲參議、先是參議從三位中務卿源朝臣定、上表乞退所職、是日參議中務卿職依請許之、但別勅令食封百戶、○戊午十五、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表辭

○舘子、五年二月壬申紀に出づ

○爲兵部少輔、爲字は宮本に據て補ふ

○平朝臣、姓氏錄卷尾に桓武天皇男葛原親王男高棟王、天長二年閏七月賜平朝臣姓貫左京云々と見ゆ

○從五位下菅原朝臣、原本五を四に作る諸本に據て改む

○千株爲備中守、千株の備中守たる事去年九月乙酉紀に見ゆ此は誤ならむ

（九月）令左右京職云々、原本令を命に作る類史百七に據て改む

職、不許、其表文多不載、○己未、大和國人戶主從八位上大和宿禰吉繼、戶口掌侍從四位下大和宿禰舘子等、賜姓朝臣、貫附左京二條一坊、中納言兼右近衛大將從三位橘朝臣氏公上表、請褫宿衛職、不許、○甲子、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、重抗表辭退、不許、○乙丑、授正五位下藤原朝臣嗣宗從四位下、正六位上文室朝臣有眞從五位下、以從五位上良岑朝臣高行爲左中弁、從五位上伴宿禰成益爲兼右中弁、美濃介如故、從四位下紀朝臣長江爲民部大輔、外從五位下伴宿禰眞足爲主計助、從五位下藤原朝臣安永爲兵部少輔、從四位上平朝臣高棟爲刑部卿、從五位下小野朝臣永道爲少輔、從四位上滋野朝臣貞主爲大藏卿、正三位源朝臣常爲東宮傅、右大臣左近衛大將如故、正五位下長岑宿禰高名爲山城守、從五位下菅原朝臣善主爲伊勢權介、從五位下文室朝臣有眞爲出羽守、從四位下藤原朝臣嗣宗爲越前守、從四位上笠朝臣梁麻呂爲丹波守、從五位下小野朝臣千株爲備中守、○九月癸酉朔丁丑、太政官議奏、彈正臺巡撿之日、令左右京職祇承官人下馬事、臺言、

巡察之日、祇承官人被勘當時下馬者、其來尙矣、而比年左下、右不下、因問明法博士、答曰、勘與見勘、何無分別、但無正文、可請官裁者、今案職員令、弼以下巡察彈正已上、掌巡察內外、糺彈非違、又京職式云、彈正巡撿之日、官人一人、史生、將坊長兵士等祇承者、右大臣宣、奉勅、忠及巡察彈正巡撿之日、京職進屬、勿勞下馬、並須馬上承其勘當、弼如行事者、六位已下職司等、一切下馬、但史生坊令、身帶六位、雖逢忠已下、猶尙下馬、○庚辰、以伊豫國溫泉郡定額寺爲天台別院、○辛巳、廢重陽節、諒闇也、○癸未、遣使奉幣帛於伊勢大神宮、例也、○乙酉、奉授越前國從二位勳一等氣比大神之御子、無位天利劔神、天比女若御子神、天伊佐奈彥神、並從五位下、○丁亥、大宰府言、對馬嶋司言、遙海之事、風波危險、年中貢調、四度公文、屢逢漂沒、傳聞、新羅船能凌波行、望請新羅船六隻之中、分給一隻、聽之、○辛卯、授正六位上三國眞人永繼從五位下、○壬辰、近江國人美濃國大掾正六位上安吉勝眞道、男澤雄等五人、貫附右京三條、廢大宰府大主城一員、更置主廚主船二員、○癸巳、大宰府言、在肥後國阿

○左下右不下、左京は下馬し右京は下馬せずとなり
○其來尙矣、其は諸本及類史行に作る
○巡察彈正、職員令彈正臺に巡察彈正十人掌巡察內外糺彈非違とあり彈正の二字は諸本及類史に據て補ふ下同じ
○糺彈、原本糺を紀に作る諸本及類史に據て改む
○京職式云、同式に凡京路皆令當家每月掃除彈正巡撿之日官人一人史生一人將坊令坊長兵士等祇承とあるを略して引けるなるべし
○京職進屬、職員令左右京職に大進少進大屬少屬倂せて各六人あり
○定額寺、類史百八十に天長五年伊豫國彌勒寺預定額寺云々とある是なり同郡湯山村に今も彌勒山寺と云地名殘れりと
○天利劔神云々、神名式に越前國敦賀郡天利劔神社、天比女若御子神社、伊佐奈彥神社とありて三社共に今敦賀町氣比神宮境內に祀る
○四度公文、正稅帳使、大帳使、貢調使、朝集使

以上四度の使を云
○漂没、原本潭没に作る諸本に據て改む
○新羅船六隻、原本隻を雙に作る諸本に據て改む下同じ造新羅船の事去年七月丙申紀に見ゆ
○安吉勝眞道、近江國蒲生郡安吉郷あり安吉は之に據れり勝は姓氏錄山城攝津及河內諸蕃に多く見ゆ何れも同祖なり
○廢大宰府大主城云々、大主城は令外官なり主厨主船は職員令に主船一人掌修理舟檝、主厨一人掌醯醢葅醬豉鮭等事と見ゆ廢云々の事三代格五に見え廿三日に係く原本厨を尉に作る閣本西本に據て改む
○涸渴、渴は原本端に作るを紀略に據て改む諸本竭に作るは渴の訛なり
○本名上津嶋、伊豆七嶋志に下田港より南方十八里にあり周圍五里餘中央の高峯を天井山と云とあり原本本を大に作る水戸校本及紀略に據て改む奈良本紀略原本に同じ
○阿波神、神名式伊豆國賀茂郡阿波命社(名神大)今神津嶋字本續山にあり

蘇郡健磐龍命神、靈池、洪水大旱未嘗增減、而涸渴卅丈、○乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作嶋、本名上津嶋、此嶋坐阿波神、是三嶋大社本后也、又坐物忌奈乃命、卽前社御子神也、新作神宮四院、石室二間、屋二間、閣室十三基、上津嶋、本體、草木繁茂、東南北方巖峻峭崒、人船不到、纔西面有泊宿之濱、今咸燒崩、與海共成陸地幷沙濱二千許町、其嶋東北角、有新造神院、其中有壟、高五百許丈、基周八百許丈、其形如伏鉢、東方片岸有階四重、靑黃赤白色沙、次第敷之、其上有一閣室、高四許丈、次南海邊有二石室、各長十許丈、廣四許丈、高三許丈、其裏五色稜石、屛風立之、巖壁伐波、山川飛雲、其形微妙難名、其前懸夾纈軟障、卽有美麗濱、以五色沙成修、次南傍有一礒、如立屛風、其色三分之二、悉金色矣、眩曜之狀、不可敢記、亦東南角有新造院、周垣二重、以墼築固、各高二許丈、廣一許丈、南面有二門、其中央有一壟、周六百許丈、高五百許丈、其南片岸有十二閣室、八基、南面、四基西面、周各廿許丈、高十二許丈、其上階、東有屋一基、瓷主瓦形葺造之、長十許丈、廣四許丈、高六許丈、其壁以白石立固、則南面

祭神は阿波咩命
○三嶋大社、同式伊豆國賀茂郡伊豆三嶋神社（名神大月次新嘗）とあり官幣大社三嶋神社是なり
○物忌奈乃命、神名式に伊豆國賀茂郡物忌奈命神社（名神大）、神津嶋
○前社、阿波神社を指す
○神宮四院、神字は紀略に據て補ふ
○閣室十三基、原本閣を閤に、基を臺に作る閣は下文に有二閣室一とある に據り基は諸本に據て改む
○巖峻、原本巖を嚴に作るを山崎校本に據て改む
○嶒峰、玉篇に山長而高貌とあり
○有龍、玉篇に龍は冢也通作レ隴とあり
○二石室、原本二を一に作る諸本に據て改む
○五色稜石、諸本稜を綾に作る
○巖壁伐波、壁字は諸本に據て補ふ
○其形、閣本西本中本尾本前本には其字なし
○夾纈軟障、夾纈は板に模樣を彫り布帛を其の間に夾みて染むるを云軟障はゼシヤウと訓む抄調度

有一戸、其西方有一屋、以黑瓦葺作之、其壁塗赤土、東面有一戸、院裏礫砂皆悉金色、又西北角有新作院、周垣未究作、其中有二龕、基周各八百許丈、高六百許丈、其體如瓮伏、南片岸有階二重、以白沙敷之、其頂平麗也、從北角至于未申角、長十二許里、廣五許里、皆悉成沙濱、從戌亥角至于丑寅角、長八許里、廣五許里、同成沙濱、此二院、元是大海、又山岑有一院一門、其頂有如人坐形石、高十許丈、右手把劔、左手持桙、其後有侍者、跪瞻貴主、其邊嵯峨不可通達、自餘雜物、燎燄未止、不能具注、去承和五年七月五日夜出火、上津嶋左右海中燒、炎如野火、十二童子相接取炬、下海附火、諸童子履潮如地、入地如水、震上大石、以火燒摧、炎煬達天、其狀朦朧、所々燄飛、其間經旬、雨灰滿部、仍召集諸祝刀禰等、卜求其祟云、阿波神者、三嶋大社本后、五子相生、而後后授賜冠位、我本后未預其色、因茲我殊示恠異、將預冠位、若禰宜祝等不申此祟者、出麁火將亡禰宜等、國郡司不勞者、將亡國郡司、勞成我所欲者、天下國郡平安、令產業豐登、今年七月十二日、眇望彼雲嶋、烟覆四面、都不見狀、漸比戻近、雲霧霽

部屛障具に軟障本朝式云
軟障一條とあり
○成修、山崎校本に成修
恐當倒と云り
○壐、抄天地部水土類に
壐唐韻云壐（和名之良豆
知）白土也
○十二閤室、原本閤を闇
に作る上例に據て改む
○八基、原本八臺に作る
諸本に據て改む
○四基西面、原本西面の
下に四基の二字あるは衍
なり諸本に據て刪る
○瓷玉、瓷は說文に瓦器
也とあり
○立固、原本固を周に作
る諸本に據て改む
○究作、纂詁に究疑完字
と云
○瓮伏、山崎校本に瓮伏
恐當倒と云
○嵯峨、山の峻しきを云
○承和五年七月五日夜云
々、紀略に承和五年七月
乙亥（二十日）東方有聲
如伐大鼓とあるは此噴
火の聲響を云るか同月癸
酉紀（十八日）には有物
如灰從天散零、逢雨不
消と見ゆるのみ
○炎煬達天、炎の熾なる
狀
○經旬、原本旬を句に作

朗、神作院岳等之類、露見其貌、斯乃神明之所感也、○戊戌、定入唐廻使判官已下、水手已上、三百九十一人之等第、九階十二人、八階卅九人、七階五十九人、六階百廿九人、五階百卅四人、四階二人、三階一人、不加階五人、○庚子、贈大僧都傳灯大法師位豐安僧正、以少僧都傳灯法師位泰景爲大僧都、律師傳灯大法師位實惠爲少僧都、○辛丑、奉授越中國礪波郡從四位下高瀨神、射水郡二上神、並從四位上、○冬十月癸卯朔甲辰、日有蝕之、○丙午、皇太子御膳、准弘仁九年例、毎物減四分之一、以旱也、○丁未、伊豫國守從四位上紀朝臣深江卒、右京人也、贈右大臣從二位船守朝臣之孫、從四位下田上之子也、少遊大學、略涉史書、自文章生爲大學少允、主稅助、式部少丞、弘仁末、叙從五位下、天長中、拜左兵衞權佐、俄轉佐、漸至左近衞少將、兼備中守、尋授正五位上、承和初、叙從四位下、遷兵部大輔、後出伊豫守、任季入京、有治名、擢授從四位上、性寬和不動於事、所履行、百姓安之、遠近稱之爲循吏、未得替而卒、于時年五十一、○己酉、奉授正五位下丹生川上雨師神正五位上、无位水分神從五

を閣本前本宮本に據て改む

○滿部、部は伊豆國司管掌の部內を云

○其崇　原本其祟に作る　諸本に據て改む

○五子部生、其名三宅記に見ゆ

○後后授賜冠位、後后は神名式に伊古奈比咩命神社（名神大）とある神にて天長九年五月庚戌伊古奈比咩命神預名神を云るなるべし

○將預冠位、授位のこと十月丙辰紀に見ゆ

○勞成我所欲、原本勞を著に作る閣本西本尾本前本等に據て改む

○卑彼雲嶋、狩谷氏は雲嶋恐倒と云り

○八階卌九人、纂詁は卌を四十に改めて今從甲本癸本訂正則與上文三百九十一人不符といへど未だ其證を得ず

○豐安、元亨釋書十三に釋豐安參州人招提寺如寶之徒也大同帝貴爲師とあり

○傳灯法師位泰景、法の上に大字を脫せしか泰景の傳は詳ならず

○實惠、三年五月戊申律

位下、○甲寅、地震、○丙辰、奉授無位阿波神、物忌奈乃命、並從五位下、以伊豆國造嶋靈驗也、○戊午、以參議正四位下三原朝臣春上爲兼彈正大弼、伊勢守如故、從四位下高枝王爲大舍人頭、從五位下文室朝臣氏雄爲兼駿河守、內匠頭如故、○癸亥、分遣御被誦經於京下七寺、以聖躬不豫也、○甲子、授无位藤原朝臣平雄從五位下、○戊辰、天中西方有聲、如鼓、一聲而止、○十一月癸酉朔、丁丑、以從四位上刑部大輔大枝朝臣總成爲伊豫守、○庚辰、對馬嶋和多都美御子神、波良波神、都都知神、銀山神、並預官社、○辛巳、勅、橘戶、蝮橘、橘連、伴橘連、橘守、橘等六姓、與橘朝臣相涉、宜賜椿戶、蝮椿、椿連、伴椿連、椿守、椿等、自餘以橘字爲姓之類、亦以椿換之、○癸未、從五位下丹墀眞人雄濱爲美作介、○戊子、以在志摩國答志嶋、賜無位常康親王、○辛卯、新嘗會也、不御中院齋場、令諸司行神今食事、○辛丑、以從五位下安倍朝臣濱成爲散位頭、從五位下丹墀眞人門成爲彈正少弼、從四位下百濟王教法卒、桓武天皇之女御也、○十二月癸卯朔、改駿河國駿河郡永藏驛家、遷置于伊豆國田方郡、以

師となる空海の弟子にて東寺第二代なり
〇高瀬神、神名式越中國礪波郡高瀬神社、東礪波郡高瀬村高瀬、國幣小社に列す
〇二上神、神名式に越中國射水郡射水神社とあるは是なり今國幣中社に列す
〔十月〕准弘仁九年例云々、紀略に弘仁九年夏四月丙辰遣二使京畿一祈レ雨、丙子詔曰云々其朕及后服御物幷常膳等並宜二省減一云々とあるを指せり
〇深江卒、山崎校本に村尾氏曰卒下恐脫二深江二字一とあり
〇任季、任期の季なるべし尾本宮本には季を年に作る
〇循吏、原本順吏に作る山崎校本に據て改む
〇未得替而卒、遷替の年期あり未だ其期に達せざるに死せるを云
〇正五位下丹生川上雨師神云々、既に從四位下たること六年四月申酉紀に見ゆ誤あるべし
〇水分神、神名式大和國吉野郡吉野水分神社（名神大月次新嘗）、吉野の水分山に祀る

駿河郡特帶二二驛一、百姓殊苦中重役上也、〇己酉[七]、遣二使於伊勢大神宮一、宣二詔曰、
頃月之間、御心有レ所レ思、將レ奉レ供二幣帛一、而國家諒闇、不レ果二御意一、加レ之今年在二
肥後國一神靈池、涸盡卌餘丈、足三以爲二國異一、因レ玆令レ祈二禱之一、先レ是伊勢國
桑名郡多度神宮寺爲二天台別院一、令レ停レ之、〇庚申[十八]、授二正六位上良岑朝臣
長松從五位下一、〇己巳[廿七]、武藏國加美郡人散位正七位上勳七等檜前舍
人直由加麿男女十人、貫二附左京六條一、與二土師氏一同祖也、大宰府言、蕃外
新羅臣張寶高、遣レ使獻二方物一、卽從二鎭西一追却焉、爲二人臣一無二境外之交一也、

續日本後紀卷第九

(十一月)和多都美御子神、神名式對馬嶋上縣郡和多都美御子神社(名神大)、下縣郡仁位村仁位
○波良波神、同式同郡波良波神社、仁位村和多都美神社境內
○都都知神、同式同國下縣郡都都智神社、佐須村久根田舍
○銀山神、同式同郡銀山神社、佐須村樫根
○橘戶、以下蝮橘、橘連、伴橘連、橘の五氏は同族ならむも出自詳ならず橘守は錄左京諸蕃に三宅連同祖天日梓命之後也とあり
○橘朝臣、橘朝臣は敏達天皇の玄孫葛城王の後なり葛城王賜姓左大臣に至る即ち諸兄なり然るに藤原氏に壓せられて振はざりしが其孫淸友の女嘉智子仁明天皇を生み奉りしより勢を得學館院を建てゝ一族の人材を養成し世に重きをなしければ此度の事ありしにて藤原氏が藤原部の己が姓と相涉るを忌て葛原部と改めしめしに同じ　○戊子、此條原本辛卯の次にあり干支を推して改め移す　○答志嶋、志摩國答志郡にあり今志摩郡鳥羽町小濱の東北にあり　○常康親王、仁明天皇の皇子　○中院齋場、即ち神嘉殿なり儀式に神今食院といひ西宮記は齋院と云　○神今食事、神今食即ち新嘗祭なり音讀してジンゴンジキと云　○百濟王敎法卒、敎法は從四位下敎德の女、紹運錄は貞香に作る駿河内親王を生めり　(十二月)癸卯朔、朔字は宮本に據て補ふ　○永藏驛、原本永を水に作る抄郡鄕部駿河國駿河郡永倉とあり兵部式にも駿河郡永倉驛馬十匹とあれば水は永の誤なること明なり故に今改む驛址は駿東郡長泉村上長窪下長窪の地なりと云　○三驛、橫走、永倉、柏原なり貞觀六年十二月癸亥條に見ゆ　○頃月之間、宮本月を日に作る　○今年云々、九月癸巳紀に見ゆ　○先是云々　六年正月己卯(一三五頁)なり　○令停之、原本令を今に作る閣本に據て改む　○庚申、原本庚午廿八日に作る閣本西本及類史九十九に據て改む　○加美郡、倭名抄に賀美とあり今兒玉郡に入る　○檜前舍人直由加麿、兵部式に武藏國檜前馬牧あり此氏の居りし所にや、原本麿を磨に作る諸本に據る纂詁は麻呂の下に等字を補ふ　○張寶高、原本寶を室に作る閣本宮本前本に據て改む　○鎭西、筑紫を云天平十五年十二月辛卯紀に鎭西府の名見ゆれば此文字も古より用ひしなるべし　○爲人臣云々、禮記郊特牲に爲人臣者無外交不敢貳君也とあるに出づ

○承和、此二字は宮本に據て補ふ
○臣藤原、臣字は諸本に據て補ふ
【承和八年】朝賀、賀字は類史七十一に據て補ふ
○(注)請僧、纂詁に請疑諸字と云
○結界、原本結典に作る諸本及類史に據て改む
○源朝臣貞姫、嵯峨天皇皇女弘仁五年諸妹と共に姓を賜はる
○更姫、貞姫の妹に坐す
○藤原朝臣好雄、朝臣の二字は宮本及類史九十九に據て補ふ
○鷹野並從五位下、原本此下に癸巳授正六位下御長眞人近人從五位下の十七字あり下文に重出す類史に據て此を削り彼を存す又按に紀略に甲申授位任官とあり正躬王以下任官の事は前文叙位の後に續くべきなり然るに山崎校本癸巳の條に收めたるは非なり今水戸校本に據る
○左大弁如故、九年正月戊申紀に正躬王爲兼左大弁大和守如故とあれば左大弁如故は疑はし
○諸綱、原本綱を繼に作

續日本後紀卷第十

起承和八年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

(辛酉)八年春正月壬申朔、廢朝賀、諒闇也、○乙亥、天皇御紫宸殿、皇太子入覲、是日延五十八僧於清涼殿、請僧卅九口、自外僧綱、晝讀藥師經、夜結界悔過、○戊寅、讀經畢、施衆僧物及度者各一人、○己卯、大極殿最勝會之初也、○壬午、授無位源朝臣貞姫、源朝臣更姫、並從四位上、○甲申、授從五位上良岑朝臣高行正五位下、正六位上弘宗王、橘朝臣永範、南淵朝臣年名、藤原朝臣好雄、清瀧朝臣藤根、坂本朝臣鷹野、並從五位下、以參議從四位下正躬王爲兼大和守、左大弁如故、從四位上橘朝臣氏人爲兼尾張守、左京大夫如故、正四位下文室眞人名繼爲下總介、從五位上紀朝臣諸綱爲美濃守、從五位下藤原朝臣氏宗爲兼介、右少弁右近衛少將如故、從五位上藤原朝臣貞守爲兼信濃介、春宮亮如故、正五位下良岑朝臣高

行爲陸奥守、從五位下坂本朝臣鷹野爲越中介、從五位下近棟王爲丹波權守、從五位下藤原朝臣好雄爲因幡權介、從五位下清岑朝臣門繼爲備後守、從五位下都努朝臣福人爲周防守、從五位下弘宗王爲長門守、從四位上滋野朝臣貞主爲兼讃岐守、大藏卿如故、從五位下長岑宿禰秀名爲兼介、從五位下南淵朝臣年名爲筑前守、從五位下清瀧朝臣藤根爲筑後守、從五位下藤原朝臣正雄爲肥前守、從五位下大春日朝臣良棟爲豐前守、外從五位下秦宿禰氏繼爲日向守、○乙酉[十四]、最勝會訖、更引其會名僧十餘人於禁中、令論義、畢施御被、左右兵衞府言、撿舊例、夜行御馬、本寮飼丁控持朱雀門下、待時乘騎、巡撿城中、而去弘仁年中被配此府、其後所行御馬、隨死請替、請替之間、徒經數日、望請、依舊例復本寮者、許之、○癸巳[廿二]、奉授坐陸奥國白河郡勳十等都々古和氣神從五位下、餘如故、授正六位上御長眞人近人從五位下、○甲午[廿三]、遣唐陰陽師兼陰陽請益正八位上春苑宿禰玉成、在唐間得難義一卷、令陰陽寮諸生傳學、○二月壬寅朔、丁未[六]、以從五位下嶋江王爲大監物、從五位上

る諸本に據て改む
○秀名爲兼介、兼字は西本尾本に據て補ふ
○年名、原本名年と倒置せるを閣本尾本及上文に據て訂す
○大春日朝臣、日字は宮本及上文に據て補ふ
○夜行御馬、夜間巡行の時に乘る御廐の馬なり
○本寮飼丁、本寮は左右馬寮なり
○隨死請替請替之間、閣本請替二字なし
○都々古和氣神、神名式陸奥國白河郡都都古和氣神社（名神大）、今磐城國東白河郡棚倉町棚倉及同郡近津村に祀り共に國幣中社に列す、氣は宮本及神名式に據て補ふ、都都古和氣神に神位奉授の事下文三月癸巳條に重出す此を存して彼を削る
○春苑宿禰玉成、原本苑を花に作る諸本に據て改む
○陰陽寮諸生、職員令に陰陽生十人掌習陰陽と見ゆる陰陽生を云
（二月）壬寅朔、此三字は宮本に據て補ふ

○眞足、原本足を定に作る諸本に據て改む
○善道、原本道を通に作る諸本に據て改む
○金剛峯寺、前に見ゆ峯は諸本峇に作る
○二月卅日、紀略卅を廿に作る
○定額、紀略此下に寺の字あり
○望也、原本望を料に作る諸本に據て改む山崎校本也を乞に改作る、也はマタと訓むべきか
○被施灯分幷供養佛聖二座許之、主稅式に紀伊國金剛峯寺燈五千六百十六束同寺燈分幷佛聖料二千八百束とあり
○邑久郡、抄國郡部備前國邑久(於保久)とあり
○安仁神、神名式備前國邑久郡安仁神社(名神大)今同郡大宮村藤井、國幣中社に列す
○清友墓地、諸陵式に加勢山墓贈太政大臣正一位橘朝臣清友仁明天皇外祖父在山城國相樂郡」と見ゆ
○相仍、仍は字書に重也類也とあり
○凡十四度、類史百七十一には十上に九の字あり

石作王爲諸陵頭、從五位下橘朝臣海雄爲民部少輔、外從五位下伴宿禰眞足爲主稅頭、從五位上藤原朝臣宮房爲刑部大輔、從五位下御長眞人近人爲木工頭、從五位下高階眞人黑雄爲造酒正、從五位上佐伯宿禰春海爲左京亮、從四位下善道朝臣眞貞爲東宮學士、從五位下都努朝臣福人爲兼鑄錢長官、周防守如故、從五位上藤原朝臣貞主爲近江介、外從五位下御輔朝臣眞男爲淡路守、外從五位下讃岐朝臣永直爲兼阿波權掾、大判事勘解由次官如故、○戊申、少僧都大法師位實惠言、在紀伊國伊都郡高野山金剛峯寺、去承和二年二月卅日、預定額畢、今在深山、無有灯明、望也准定額諸寺、被施灯分、幷供養佛聖二座、許之、○己酉、備前國邑久郡安仁神預名神焉、以山城國相樂郡山四町、爲贈太政大臣正一位橘朝臣清友墓地、武藏國田五百七町奉充嵯峨院、○甲寅、出羽國百姓二万六百六十八人賜復一年、以年穀不登、飢饉相仍也、信濃國言、地震、其聲如雷、一夜間凡十四度、墻屋倒頽、公私共損、○乙卯、勅、天平勝寶四年騰勅符云、先禁斷寺邊殺生畢、今如聞、時序

○謄勅符、謄寫せる勅符なり公式令に見ゆ原本謄を騰に作るは誤なれば改む
○春蒐秋獮、爾雅に春獵爲蒐秋獵爲獮とあり蒐は擇取不孕者也獮は殺也順殺氣也と注す
○釣而不綱、論語述而篇に出づ原本綱を鋼に作る閣本西本宮本に據て改む
○期于止殺、原本于を兮に作る水戸校本及類史百八十二に據て改む
○仁祠、後漢書楚王英傳に誦黃老之微言尙浮屠之仁祠とあり寺院を云
○可爲大息、原本大を太に作る水戸校本及類史に據て改む
○各還本司、原本各を名に作る西本尾本中本に據て改む本司は大學典藥の二寮を云
○曠職、北史薛端傳に出で曠は空也
○奪情、今の除服出仕を云
○張寶高、原本寶を室に作る今諸本に據る下同じ
○馬鞍、原本鞍を鞭に作る閣本西本前本等に據て改む
○宜以禮防閑、宜字は諸

稍遠、禁斷遂薄、若違犯者、卽以違勅論者、春蒐秋獮、釣而不綱、事不得已、期于止殺、況乎仁祠之邊、精舍之前、從來解脫之界、非是漁獵之地、如聞、勢家豪民、無憚憲章、國宰講師、不存撿挍、遂使寺內馳馬、佛前屠禽、如此淫濫、不可勝言、夫妖孽之臻、不必自天、民自取焉、可爲大息、宜重下知五畿內七道諸國司、嚴令禁斷寺邊二里殺生、如有犯者、六位已下科違勅罪、五位已上錄名言上、不得阿容、式部省言、式云、諸國博士醫師、解任之後、各還本司、令熟本業、若望更任者聽之、不勞覆試、其被試及第、既任遭喪者、服闋之後、復任滿歷、但不經試者、不在此限、省依式文、喪解之所、不補他人、服闋之後、令遂其歷、因玆教授醫療、一年曠職、謹案式云、官省判補雜色之輩、遭喪解任、若有才用者、聽奪情、望請、不待服闋、特從復任者、許之、可其先得試復更任者、亦同此例、○丙寅、太政官處分、以西市東北角空閑地方十五丈、爲右坊城出擧錢所、○戊辰、太政官仰大宰府云、新羅人張寶高、去年十二月進馬鞍等、寶高是爲他臣、敢輙致貢、稽之舊章、不合物宜、宜以禮防閑、早從返却、其隨身物者、任聽民間、令得交關、但

本に據て補ふ、玉篇に防に禦也又禁也、閑は防也禦也とあり
○家資、原本資を貨に作る、水戸校本に據て改む
○承前之例、原本此下戊寅・庚辰の二條あり干支を推して下三月に移せり
（三月）壬申朔、原本朔を判に作る、宮本に據る
○春日大神々山之内狩獵伐木、此勅は三代格一に載す
○阿倍陸奥臣、神護景雲三年三月辛巳紀に見ゆ
○黒川郡大領、大字は十年十一月己亥紀に據て補ふ
○靫伴連、神護景雲三年三月紀に靫大伴連と見ゆ
○江刺郡、江刺は倭名抄に衣佐志と訓り今陸中國に屬す原本刺を判に作る、宮本水戸校本に據て改む
○上毛野膽澤公、他に見えず
○衣縫造金繼、衣縫造は錄左京神別に饒速日命の後とあり河内志に孝女衣縫氏墓在二志紀郡國府村一と出づ今南河内郡道明寺村國府なり
○泣血、禮記檀弓に泣血

莫令人民違失沽價、競傾家資、亦加優恤、給程粮、並依承前之例。○三月壬申朔、勅、大和國添上郡春日大神々山之内、狩獵伐木等事、令當國郡司、殊加禁制。○癸酉、陸奥國柴田郡權大領外從六位下勳七等阿倍陸奥臣豐主、黒川郡大領外從六位下勳八等靫伴連黒成、江刺郡擬大領外從八位下勳八等上毛野膽澤公毛人等、並借授外從五位下、皆由國司褒擧也。右京人孝子衣縫造金繼女、居住河内國志紀郡、年十二歲、始失親父、泣血過人、服闋之後、親母許嫁、而竊出住於父墓、旦夕哀慟、母不復謂嫁事、其後還來定省、毎父忌日、齋食誦經、累年不息、至冬節、則母子買雜材、惠賀河搆借橋、惣十五箇年、母年八十而死、哀聲不絕、常守墳墓、深信佛法、焚香送終、勅敘三階、終身免戸内租、旌表門閭、令知衆庶。○戊寅、勅、蔭孫正七位上和氣朝臣貞臣、宜特補文章得業生。○庚辰、置采女司史生二員。○辛卯、以大納言正三位藤原朝臣愛發爲兼民部卿、從五位下藤原朝臣板野麻呂爲散位頭、從五位下安倍朝臣濱成爲典藥頭、從五位下美志眞王爲正親正、從五位下惟良宿禰貞道爲兼伊勢介、圖

書頭如故、○壬辰、散位從四位上藤原朝臣文山卒、○丙申、散事從三位大原眞人淨子薨、○己亥、詔曰、聖哲凝範、應天心以運行、昊穹演鑒、隨人事而通感、故殷王修德、桑穀自枯、宋景崇善、法星遽退、朕以寡昧、祇膺寶圖、虛己勵精、日愼一日、先王經國之道、永言涉求、列聖綏民之方、載深追採、期所以人無疵癘、世致雍熙、而明信未孚、咎徵斯應、大宰府言、肥後國阿蘇郡神靈池、涵一定之水、盈科歷水旱以自若、而今無故涸減卅丈、靜思厥咎、朕甚懼焉、詢之蓍龜、告以旱疫、今欲因循往烈、則象前規、施以德政、防玆災眚、宜每寺齋戒、共致薰修、每社奉幣、式祈靈祐、天下蒸民、今年雜徭、縱雖事多、莫過廿日、至於有閑、遂亦省之、鰥寡惸獨、不能自存者、量加賑濟、凡厥國宰、咸自策勉、詳求人瘼、使無寃滯、且夫旱暵之來、或闕恒數、自非巨變、唯在勤救而已、宜修理陂池、勿乏漑灌、又大宰府者、匪直古來鎭遏之區、兼復當時恠見之地也、最須先愼以備不虞、布告遐邇、俾知朕意、○庚子、民部省言、主計寮解偁、貢調之期、越前國元十一月爲期、依承和三年十一月廿三日符、明年二月爲期、越中國元十一月爲期、依大

三年未嘗見衡とあり
○定省、禮記曲禮に爲人子之禮冬溫而夏凊昏定而晨省とあり
○誦經、原本誦を讀に作る諸本に據て改む
○惠賀河、河内志に古市郡惠我川一名石川自石川郡渉至古市郡曰惠我川經碓井達安宿志紀兩郡界とあり今も石川とも大和川とも云
○戶内租、原本租を相に作る諸本に據て改む
○令知衆庶、原本知字は庶下にあり西本前本中本等に據て改む
○戊寅、此條及庚辰條は共に二月戊辰條の次にありしを干支を推して此に移す
○文章得業生、生字は諸本に據て補ふ
○美志眞王、原本王を王に作る宮本永戶校本に據て改む
○播良宿禰貞道、貞觀九年四月甲午紀錦部連三宗麻呂等賜姓惟良宿禰其先百濟國人也と見ゆ貞は宮イ本眞に作る
○藤原朝臣文山卒、是公の孫、雄友の子なり原本

辛下に癸巳奉授陸奥國云々の廿二字あり巳に正月癸巳條に出たれば削れり
○大原眞人淨子薨、嵯峨天皇の女御にて仁子内親王を生めり
○凝範、凝は玉篇に成也定也とあり
○演鑒、演は玉篇に長流也又引也とあり
○殷王云々、史記殷本紀に亳有祥桑穀共生於朝一暮大拱帝太戊懼問伊陟伊陟曰臣聞妖不勝徳帝之政其有闕與帝其修徳太戊從之而祥桑枯死而去とあるを云
○宋景云々、宋の景公人に君たるの善言ありしを以て星妖退けりとの故事なり史記宋世家に見ゆ
○期所以人無疵癘世致雍熙、疵は病也癘は疫氣也雍熙は和平康樂の狀なり原本所を可に、疵癘を疵務に世を也に作る、所は諸本に疵は兩本及類史に癘は諸本及類史に世は宮本及類史に據て改む
○未孚、原本未を來に作る類史十一に據て改む
○涵一定之水、原本涵を洪に作り一定之の三字なし諸本及類史に據て改補

長八年十月十五日符、明年二月爲期、能登國元十一月爲期、依天長十年十月十六日符、明年二月爲期、讃岐國元十一月爲期、依天長七年十一月十七日符、明年二月爲期、長門國元正月爲期、依天長四年二月十二日符、四月爲期、件五箇國、不據令條、中改常期、遂致延墮、既虧國用、望請、復舊定限、依期令貢者、許之、○夏四月辛丑朔、日有蝕之、○壬寅、勅、神明之感、非信不通、帝王之功、非道何達、宜仰五畿內七道諸國、令國司講師、相共齋戒、於部內諸寺、轉讀金剛般若經、庶使紫宸增寶竿之長、赤縣絕夭折之患、兼復風雨調適、年穀豐登、○癸卯、日色赤如血、須臾復常、○乙巳、以從五位上佐伯宿禰春海爲刑部少輔、從五位下小野朝臣永道爲左京亮、從五位下橘朝臣海雄爲右衛門權佐、從五位下藤原朝臣春岡爲常陸介、從五位下勳七等紀朝臣綱麿爲信濃權守、從五位下藤原朝臣諸氏爲但馬守、右京人勘解由主典正六位上縣主前利連氏益賜姓縣連、神倭磐余彥天皇第三皇子神八井耳命之後也、○甲寅、奉授筑後國從五位上高良玉垂神正五位下、○乙卯、奉授下野國正五位下

勳四等二荒神正五位上、餘如故、○丁巳、三品高津內親王薨、遣從五位下美志眞王、從四位下坂上大宿禰淸野、從五位下藤原朝臣氏宗、從五位下林朝臣當繼等、監護喪事、親王者、桓武天皇第十二皇女、納從三位坂上大宿禰刈田麻呂女從五位下全子所誕也、嵯峨太上天皇踐祚之初、大同四年六月授親王三品、卽立爲妃、未幾而廢、良有以也、○庚申、從四位下百濟王慶仲卒、慶仲者、百濟氏中適用之人也、雖非大器、有吏幹聲、出爲武藏守、入任民部大輔、世人謂爲有詹公之術、衆人漁者、與慶仲臨川沉緡、魚之唫喁、專呑慶仲之鉤、瞬息間引得百餘喉、又諸大夫中以壯健稱、嘗自東國入都、路到渡頭爭船處、有傑黠人、率黨而來、驅逐諸人、不許倶渡、諸人畏之、不敢抗論、慶仲一揚鞭打之、額皮剝垂而覆面、惑而仆伏、其黨亦退、諸人大悅、棹舟競渡、○己巳、勅、頃者時雨不降、農夫輟耕、如非禱祈、恐傷嘉苗、宜奉幣松尾、賀茂、乙訓、貴布禰、垂水、住吉、雨師神、令祈甘雨、兼防風灾、

ふ涵は玉篇に容也とあり
○盈科、盈は充滿すること科は坎なり、孟子離婁篇に原泉混々不舍晝夜盈科而後進と見ゆ
○淵減、原本減を滅に作る類史に據て改む下同じ
○因循、原本循を脩に作る諸本及類史に據て改む
○則象前規、原本則を明に前を所に作る水戸校本及類史に據て改む往烈前規は並に御歷代の布き給ひし法度を云
○防茲災眚、原本可除災眚に作る防茲は宮本及類史に據り、眚は諸本及類史に據て改む
○每社、原本社を私に作る宮本及類史に據て改む
○賑濟、原本賑を振に作る宮本に據て改む
○人瘼、瘼は病也人の惱むを云
○旱暵、原本暵を膜に作る尾本及類史に據て改む暵は乾也曝也旱するを云
○陂池、原本陂を波に作る諸本及類史に據て改む
○匪亶古來鎭遏之勗、亶は但に同じ遏は原本邊に訛れるを諸本に據て改む鎭遏は北史薛孝通傳に出で單に外夷を鎭壓防止するのみの地にあらずとなり　○廿三日符、原本符を府に作る西本尾本宮本に據て改む下同じ　○貴

岐國云々、原本此上に讃岐國云々の廿六字あり、但七年十一月十七日符を十年十月十六日符に作る重複なること明なれば前本中本谷本等に據て削る

○中改常期、原本改を政に作る諸本に據て改む　○延墮、原本墮を隨に作る閣本前本中本尾本に據て改む、墮は惰に通じ懈るなり調庸の納期は賦役令に近國十月卅日中國十一月卅日遠國十二月卅日以前納訖とあり、民部式に據るに讃岐以上は中國、長門は遠國なり長門國元正月爲レ期とあるは令條に合はず　(四月)紫宸增寶竿之長、紫宸は天皇を申す竿は原本管に作る閣本西本尾本及類史に據て改む竿は算なり　○赤縣、紫宸に對して天下を云　○勘解由主典、原本由を田に作る諸本に據て改む　○前利連、神名式尾張國丹羽郡前利神社あり祭神は神八井耳命にして前利氏の祖神なり前利は是に據れるなるべし　○神倭磐余彦天皇、神字は諸本に據て補ふ　○高良玉垂神、去年四月丙寅紀に見ゆ　○勳四等二荒神正五位上、原本四を七に上を下に作る三年十二月丁巳紀及嘉祥元年八月甲寅紀に據る　○藤原朝臣氏宗、氏は宮本に據て補ふ水戸校本に當時又有ニ從五位下藤原宗吉一未レ知ニ孰是一今暫據ニ中本一補ニ氏字一と云　○全子、原本金子に作る諸本に據て改む　○良首以也、事由詳ならず　○吏幹、幹は字書に能レ事也とあり官吏として事務を執る才能あるを云　○詹公之術、淮南子覽冥訓に詹何之鶩ニ魚於大淵之中一此皆得ニ清淨之道太浩之和一也、注に詹何楚人知ニ道術一者也言其善レ釣令ニ魚馳鶩來趣ニ鈎餌一とあり　○喩喁、魚水中に羣りて口を出す貌　○鈎、原本釣に作る類史に據て改む　○百餘喉、原本喉を唯に作る西本尾本に據て改む類史は隻に作る　○傑黠人、原本黠を默に作る類史に據て改む　○驅逐、原本驅遂に作る諸本及類史に據て改む

○五月庚午朔、從五位上藤原朝臣宮房爲ニ治部大輔一、從五位下淸瀧朝臣河根爲ニ民部少輔一、外從五位下大岡宿禰豐繼爲ニ主稅頭一、從五位上藤原朝臣菊池麻呂爲ニ刑部大輔一、○壬申、詔曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏支神功皇后乃御陵爾申賜倍止申久、頃者在ニ肥後國阿蘇郡一神靈池、無レ故涸減卅丈、又伊豆國爾有ニ地震之變一、乍驚問求禮波、旱疫之災及兵事可レ有止卜申、自レ此之外爾毛物恠亦多、依レ此左右爾念行爾、掛畏支神功皇后乃護賜比助賜牟爾依天、無レ事久可レ有止思食天、參議大和守從四位下正躬王乎差使氏、奉出狀乎聞食天、天皇朝廷乎無レ動久大坐シ米、國家乎平遣久、護賜比助

(五月)菊池麻呂、原本菊を鞠に作る諸本に據て改む下同じ

○申賜倍止、原本倍をへに作る西本に據て改む

○涸減、原本減を滅に作る水戸校本に據て改む

○卅丈、記傳に丈をツエと云はもと杖を以て物の長さを度りしより出たる名なりと云り

○卜申、卜字は諸本に據て補ふ

○正躬王、原本王を玉に作る諸本に據て改む

○大坐シ米、シは尾本に據て補ふ諸本乙に作るはシの訛なり

○平遣久、原本遣を草體

にて書けり水戶校本に據て改む
○恐美恐美毛、原本上の美字なく、下の美をミに作る、上の美は諸本に據て補ひ下の美は宮本水戶校本に據て改む
○賽祟、祟に報賽せしむるなり
○大和國、國の下に人字脫せしなるべし
○辛巳、原本此二字なし諸本及紀略に據て補ふ
○爲祟賜倍理登、閣本西本前本等登を止に作る
○卜申、卜字は諸本に據て補ふ
○荷前乎便輙久、原本乎便なし乃使に作る、乎は中本前本に據り便は中本谷本に據て改む
○奉遣志與理、原本遣を遺に作る諸本に據て改む
○貞令進致、貞は宮本に直歟とあり纂詁は之に據て改む

賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申須」是日、遣宣命使於山科天智、柏原桓武兩山陵賽祟焉」大和國正六位上縵連道繼授外從五位下、以輸私稻四万束助國用也、○辛巳十二、重奉神功皇后御陵宣命曰、天皇我詔旨止、掛畏支山陵爾申賜倍止申久、頃者涉旬天不雨佐流波、如有祟天河止卜求禮波、山陵爾奉遣太流例貢之物闕怠禮流祟見由、香椎廟毛同爲祟賜倍理登卜申勢理、驚而尋撿爾、所司申久、自去年以往兩年間、荷前乎便輙久陵戶人爾付奉遣志與理、不必供致毛在箇无可止疑布止申、今恐畏天將來波不令然之天、貞令進致武、香椎廟爾毛當遣專使謝申武止、差參議從四位上和氣朝臣眞綱、謝申祈申狀乎、平久聞食天、時毛換左須甘雨令零賜倍止、恐美恐美毛申賜倍止申」是夜曉雨降、○壬午十三、以從五位上佐伯宿禰春海爲治部大輔、從五位下藤原朝臣關雄爲刑部少輔、從五位下安倍朝臣濱成爲宮內少輔、從五位下藤原朝臣氏範爲典藥頭、從五位上藤原朝臣宮房爲丹波守、○癸未十四、請名僧於八省院、讀經禱雨」是日雨降、○己丑二十、遣從四位下勘解由長

○八幡大神、宇佐神宮
○是爲令寶位云々、是以下十二字は宮本及類史五に據て補ふ
○曝露、曝は原本訛れり今諸本及類史百八十二に據て訂す
○三綱、上座・寺主・維那の稱
○疫癘間發、原本癘を務に作る諸本及類史に據て、改む
○彼咎、咎は原本名に作る諸本及類史に據て改む
○立可修理、立字は類史に據て補ふ
○附朝集使、原本附を付に作る類史に據て改む
○爲除後太上天皇之服、葬喪令に凡服紀者爲君一年とあり淳和天皇は昨年五月八日崩御此に至て滿一箇年なり
（六月）迄于秋收、原本迄を返に作る諸本及類史十一に據て改む
○率國分僧、原本率を卒に作る諸本及類史に據て改む僧上に寺字あるべきを略したるなり
○鍾寵愛、寵は諸本に據て補ふ
○具見於上、四年八月丁巳紀（一〇九頁）に出づ

官和氣朝臣仲世、奉幣八幡大神及香椎廟、是爲令寶位无動、國家太平也、勅、修福滅罪、佛道是先、傳法興教、人倫爲本、如聞、諸國定額寺、堂舍破壞、佛經曝露、三綱檀越、無心修理、頃年水旱不調、疫癘間發、靜言其由、恐緣彼咎、宜重下知五畿內七道諸國、修理莊嚴定額寺堂舍幷佛像經論、今須每寺立可修理之程、附朝集使言上、習常不革、並處重科、○乙未、以勘解由長官從四位下和氣朝臣仲世爲兼豐前守、○丙申、會諸司於朱雀門大祓、爲除後太上天皇之服也、○六月庚子朔、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣以上、一品葛原親王、右大臣正三位源朝臣常、殊賜御衣一襲、自外賜祿有差、是日勅、頃者甘雨屢降、苗稼滋茂、此則修善之功、時致感應、宜令內外諸道、准去四月二日格旨、迄于秋收、國司講師率國分僧、轉讀金剛般若經、令祈豐年、○庚戌、武藏守從四位下正道王卒、正道王三品中務卿恒世親王之一男也、緣後太上天皇之付屬、今帝亦鍾寵愛、具見於上、去年正月拜武藏守、不終秩而卒、時年廿、○辛酉、詔曰、天皇我詔旨止、掛畏支伊勢度會乃五十鈴之川上爾坐大神乃廣前爾申賜倍止申

久、先爾肥後國阿蘇郡爾在流神靈池、常與利涸竭卅丈、又伊豆國爾有地震之變、是乎卜求禮波、旱疫及兵事可有止卜申、自此之外爾毋物恠亦多、依此天左右爾念行爾掛畏支大神乃護賜比矜賜牟爾依天、無事天可有止思食天、令擇吉日良辰氐、大監物從五位下嶋江王、中臣民部大丞正六位上大中臣朝臣楹雄等乎差使天、禮代乃大幣乎令捧持天奉出、此狀乎聞食氐、國家乎平介久有志女天皇朝廷乎寶位無動久、護賜比助賜止恐美恐美毛申賜久止申、又遣使於賀茂御祖社、祈申亦同焉、○秋七月己巳朔癸酉、詔曰、上玄無私、運神功而下濟、至人忘己、推聖德而敷仁、是以四旪未乂、舜貽沉首之憂、一物有違、禹發阽危之軫、朕膺不命、祗守宗祧、詢万機而停食、睠人瘼而失寐、而惠化罔孚、至道猶鬱、咎徵之戒、不言而臻、如聞、伊豆國地震爲變、里落不完、人物損傷、或被壓沒、靈譴不虛、必應粃政、瞻言往躅、內媿于懷、傳不云乎、人惟邦本、本固邦寧、朕之中襟、諒切字育、故今殊發中使、就加慰撫、其人居散逸、生業陷失者、使等與所在國吏斟量、

○不終秩、原本秩を秋に作る諸本に據て改む秩は秩限なり
○廣前、伊勢大御神に廣前と申すこと始めて見ゆ
○申賜倍止、原本倍をへに作る宮本及類史十一に據て改む
○涸竭、上文に據るに竭は渴の訛なり
○旱疫、原本疫を疲に作る西本尾本に據て改む
○楹雄、宮本及類史楹を榲に作る
○有志女、原本女を奴に作る諸本に據て改む類史は米に作る
○無動久、原本久を天に作る類史に據て改む
○申賜久止申、賜以下の四字は西本前本宮本及類史に據て補ふ
○祈申亦同焉、原本此下に己巳の條あり閏九月に重出す此を削りて彼を存す山崎校本纂詁亦同じ
（七月）上玄無私、上玄は上天の意杜甫の詩に上天無偏頗と見え天に私なしとなり
○運神功而下濟、易謙卦の彖傳に天道下濟而光明とあるに據れり
○至人忘己云々、莊子逍

逍遊篇に出で至人は聖人なり聖人は我身を忘れて德を人に推及し仁政を行ふの意、原本忘を忌に作る宮本及類史に據て改む
○四叱未久、四叱は四凶を云左傳文十八年に舜臣ㇾ堯賓二于四門一流二四凶族渾敦窮奇檮杌饕餮一とあり原本久を又に作る宮本及類史に據て改む
○沉首之憂、劉向九歎に若二龍逢ㇾ之沉一首兮王子比干之逢ㇾ醢とあるに據れり
○一物有違云々、說文に阽壁危也とあり危きことさなり軫は動也痛也禹は一物も其處を得ざれば己が身の危きが如く痛心せりとなり原本物を切に作り阽を帖に作る物は諸本及類史に據り阽は類史百七十一に據て改む
○朕膺不命云々、大統を繼ぎて宗廟を守るを云
○詢萬機云々、萬機の政を聞食し人民の饑を顧念して寢食を忘れ給ふさなり睠は眷に同じ
○惠化罔孚云々、德化行はれずして大道の停滯するを云罔孚とはしるしなきなり原本罔を困に作る

除二當年租調一、幷開ㇾ倉賑救、助二修屋宇一、掄亡之徒、務從二葬埋一、夫化之所ㇾ被、無ㇾ隔二華夷一、惠之攸ㇾ覃、必該二中外一、宜ㇾ不ㇾ論二民夷一、普施二優恤一、詳暢二寬弘之愛一、副二朕推溝之懷一。○甲戌、左兵衛府駕輿丁町西北角失ㇾ火、燒二損百姓廬舍卅餘烟一、驅二追行人一、令二撲滅一矣。○己卯、右京人六世御津井王、是雄王、眞雄王、國雄王、本吉王、淨道王、稻雄王、多積王、安富王、伊賀雄王、三輪女王、坂子女王、七世新男王、春男王、三守王、並雄王等十六人、賜二姓有澤眞人一、一品長野親王五世孫正六位上乙雄王之男孫也。○癸未、雷震二于大極殿東樓南角柱一、雨ㇾ雹、大如二碁子一。是日、令ㇾ造二伊勢齋內親王離宮一、以二伊勢尾張兩國正稅稻一充ㇾ料。○戊子、天皇御二紫宸殿一、令二左右近衛兵衛相撲一。○己丑、勅、令下五畿內七道諸國、奠二幣名神一、務祈中嘉穀上。○甲午、天皇御二八省院一、奉二幣帛於伊勢大神宮一、以祈二豐年一。○丙申、以二參議正三位源朝臣信一爲二武藏守一、左衛門督如ㇾ故。○八月戊戌朔辛丑、假二河內國讃良郡大領從七位下茨田勝男泉外從五位下一、以二國司褒擧一也。復假二相摸國高座郡大領外從六位下勳八等壬生直黑成外從五位下一、代二貧民一塡二進調布三百六十端二丈

八尺、庸布三百四十五端二丈八尺、正稅一万一千一百七十二束二把、給飢民稻五千五百四束、戶口增益三千一百八十六人、就中不課二千九百四十七人、課二百三十九人、仍褒其身也、以土左國美良布神、石土神、並預官社、○丁未、釋奠也、公卿就大學行事、○戊申、天皇御紫宸殿、召大學博士學生等、令論難昨日所講孝經之義、訖賜祿有差、○辛亥、從五位下石川朝臣宗益爲大藏少輔、○丙辰、以大宰府曹百四口充對馬嶋、兼充防人、○戊午、奉授阿波國正八位上天石門和氣八倉比咩神、對馬嶋無位胡祿神、无位平神、並從五位下、○勅曰、聞、下大宰府驛傳官符、幷彼府言上解文、路次諸國、長門關司等、每各開見、縱國裏機急、境外消息、不可必令万民咸知、而解文委曲、未來京華、下符辭狀、無達宰府、載記之旨、諠譁民間、途說之輩、滿溢內外、寔是專輙開見所致之漸也、宜告山陽道諸國司、更莫令然、亦四畿六道之內、指一箇國所下之符、同無令開、○庚申、改土左國貢納調庸期、定爲正月、土左國吾川郡八鄕、各分四鄕建二郡、新郡號高岡、郡司者分元四員、各置二員、○丁卯、雨水殊甚、奠幣

○諸本及類史に據て改む
○隱沒、原本隱を厭に作る諸本及類史に據て改む
○人惟邦本云々、尙書五子之歌篇に出づ
○字育、養育さ云に同じ
○所在、原本在所に作る類史に據て改む
○掛萬、原本掛を勘に作る宮本及類史に據て改む
○推溝之懷、孟子萬章篇に匹夫匹婦有不被堯舜之澤者、若己推而內之溝中さあるに出づ
○駕輿丁町、駕輿丁は輿をかく仕丁を云拾芥抄諸司厨町に左兵衞町見ゆ駕輿丁町は其內なるべし
○失火、火字は宮本及類史百七十三に據て補ふ
○有澤眞人、貞觀十四年八月十三日辛亥紀に有澤眞人春則等姓文室眞人を賜はるこさ見ゆ
○長野親王、私記に或云野字恐衍さ云長親王さすれば天武天皇の皇子にして靈龜元年六月紀に一品長親王薨さ見え品階符合し姓氏錄に文室眞人天武天皇皇子二品長王之後也さあるにも適へり
○男孫、山崎校本に安藤氏野雁曰男疑胄さ云り

○雷震、雷字は紀略に據て補ふ
○離宮、多氣離宮なり六年十二月庚戌條に云り
○源朝臣信、信字は宮本に據て補ふ
（八月）讃良郡、倭名抄に讃良は佐良々と訓り今北河內郡に入る
○高座郡、同抄に高座は太加久良と訓り今も郡名存す
○不課、不課は不課口、課は課口をいふ戸令に詳なり
○美良布神、神名式土佐國香美郡大川上美良布神社、美良布村韮生野
○石土神、同式同國長岡郡石土神社、原本石を古に作る西本水戸校本に據て改む
○昨日所請、日字は紀略に據て補ふ
○辛亥、此條原本丙辰の次にあり干支を推して此に移す
○府曹、纂詁に曹官僚也、拔三代格大宰府有直府使部二百人散仕一百人豈謂此輩邪と云り
○天石門和氣八倉比咩神、神名式に阿波國名方郡天石門別八倉比賣神社

雨師、以祈止雨、〇無品安濃內親王薨、不遣葬使、爲彼家早葬也、親王者、桓武天皇第四皇女也、母多治比氏、參議從三位長野眞人之女、贈正二位眞宗眞人是也、〇九月戊辰朔、有洪水、漂流百姓廬舍、京中橋梁、及山埼橋盡斷絕焉、〇丙子、天皇御紫宸殿、宴公卿已下文人已上、同令賦鳩化爲鷹之題、宴訖賜祿、〇丁丑、以加賀國勝興寺爲國分寺、准和泉國寺、只置講師一員僧十口、其僧者便分割越前國々分寺僧廿口之內、〇閏九月丁酉朔戊戌、奉授正五位上丹生川上雨師神從四位下、勳八等垂水神從五位下、餘如故、〇乙巳、擇諸司史生及長上年七十已上者四人、補外國權史生、矜耆老也、〇庚戌、以河內國丹比郡驛家院倉八宇、屋二宇、遷建當郡日根野爲正倉、〇辛亥、請僧廿口沙彌廿口於常寧殿、限二箇日令讀經、謝物恠也、以從五位下石川朝臣宗益爲治部少輔、從五位下高階眞人淸上爲兵部少輔、從五位下藤原朝臣安永爲大藏少輔、〇乙卯、授无位小野朝臣篁正五位下、詔曰、篁雖期奉國、猶悔失虔、朕顧惟舊、且愛文才、故降優貫、殊復本爵、〇己未、散位從四位下笠朝臣廣庭

卒、〇甲子十八、以宮内少輔從五位下安倍朝臣濱成爲大藏大輔、從五位下藤原朝臣安永爲宮内少輔、伊勢權介從五位下菅原朝臣善主爲介、從五位下惟良宿禰貞道爲播磨權介、圖書頭如故、伯耆國八橋郡人陰陽博士正六位下春苑宿禰玉成母曾禰連家主女姉妹男女等一烟、改本居貫附右京三條一坊、

(大月次新嘗)とある是なり原本比を叱に作る神名式に據て改む
〇胡祿神、同式對馬嶋上縣郡胡祿神社、琴村
〇平神、同式同國下縣郡平神社、中村町八幡宮境内
〇勑旨間、聞上に如字あるべきか
〇長門關司、關は赤間關なり九州と中國との要衝なれば關司を特に置けり　〇開見、原本開を閇に作る閣本尾本及類史七十九に據て改む下同じ　〇途説之輩、論語陽貨に道聽而塗説德之棄也とあるに出づ　〇土左國云々、原本左を佐に作る閣本前本中本等に據て改む下同じ民部式に據るに土左は遠國なれば調庸納期は十一月卅日なるを尙緩めたるなり　〇吾川郡、倭名抄に吾川は安加波と訓り今も郡名存す高岡郡も同じ　〇雨師、此は祈雨の諸神を指せるか　〇不遣葬使、原本遣を遺に作る諸本に據て改む　〇多治比氏、名は眞宗、葛原佐味賀陽大德四親王因幡安濃二内親王を生めり正三位に進み夫人と爲る弘仁十四年六月甲午薨淳和天皇正二位を賜らる　(九月)山埼橋、既に注す（續紀下四二一頁）原本埼を崎に作る諸本に據て改む　〇鳩化爲鷹、禮記王制に鳩化爲鷹然後設尉羅とあり　〇國分寺、玄蕃式に加賀國勝興寺爲國分寺置僧十口とあり寺址は三州地理志に能美郡國分村に在りと云　〇和泉國寺、原本國寺を寺國に作る山崎校本に據て改む　(閏九月)丁酉朔、原本此三字及閏九月の三字なし宮本に據て補ふ按に九月朔戊辰にして十月朔丁卯なること本紀及紀略にて明なり之に據て干支を推すに閏九月あり丁酉朔にして戊戌二日なり故に宮本に據て之を補へり尙之に依て考ふるに九月丁丑と戊戌との間に脫簡あり閏九月の文字も自ら見えずなりしなり而して其脫簡せるは近世に非ること紀略にも丙子（九月九日）の次に戊戌（閏九月二日）を擧げ閏月あることを記さゞるに依て知るべし　〇擇諸司史生及長上、以下矜耆老也に至るまで上文六月紀に己巳條として載せたるは非なり彼を削て此を存す　〇丹比郡、今南河內郡に入る　〇驛家、兵部式に河內國驛楠葉槻本津積三驛あり楠葉は交野郡、津積は大縣郡なれば此に丹比郡驛家とあるは槻本なるべけれど其地今詳ならず　〇日根野、和泉國日根郡にあり和泉國の南部にて丹比郡と隔れる地なれば此に當郡とあるに合はず　〇正倉、官稻正稅を納むる倉なり　〇篡正五位下、篡の赦れて入京せること去年六月辛酉紀に見ゆ　〇詔曰、原本詔上に下字あり西本宮本に據て削る　〇失晨、原本晨を農に作る閣本前本中本に據て改む晨は時なり失晨は不遇なるを云　〇顧惟舊、仁明天皇東宮に坐し時篡東宮學士たり故にかく詔へるなり　〇愛文才、原本愛を受に作る諸本に據て改む　〇優貰、原本貰を貫に作る山崎校本に據て改む說文に貰貸也とあり優貸卽ち寬赦の意　〇笠朝臣廣庭卒、前官は美濃守たり七年五月癸未紀に見ゆ原本庭を延に作る水戶校本及類史六十六に據て改む　〇八橋郡、倭名抄に八橋は夜波志と訓り今東伯郡に入る　〇春苑宿禰玉成、三年三月己巳紀に出づ　〇曾禰連、錄左京神別に石上朝臣同祖神饒速日命之後也とあり

（十月）冬十月、冬字は水戸校本に據て補ふ
○延曆廿三年格、格下に偁字あるべきか、此格三代格に見えず弘仁十一年格亦同じ
○扶省掌、扶は補助の意なれば權省掌と云が如し扶省の二字は閣本前本及類史百七に據て補ふ
○詳見令條、令は賦役令なり
○朝委未允、委は任也允は當也、朝廷の委任に當らぬを云
○矯言桑麻、桑麻不良なりし故に絹布は麁惡なりと僞るなり
○請驗路次、驗は證驗なり道中にて故障ありし證左を各地にて請ひ受くるを云山崎校本驗を喚に改め又請疑託と云り
○篁爲刑部少輔、補任に刑部大輔とあり
○左右陣頭、陣の座なり左近は南殿の東日華門內に、右近は月花門內にあり原本陣を陳に作る諸本に據て改む
○中夲出、中字は尾本中本及類史卅五に據て補ふ
（十一月）丁酉朔是日、朔是日の三字宮本に據て

○冬十月丁卯朔、天皇御紫宸殿、宴于侍臣、親王已下五位以上、歌舞庭中、日暮賜祿有差、○己巳、制、延曆廿三年格、權任之人不異正任、年分全給、理合一同、又弘仁十一年格偁、令云、諸祿並依日給、京官據詔書出日、外官據籤符到給之者、今賞之所行、理無偏頗、獨給全給、事乖通猷、宜不論權正、據籤符到給之、其間公廨遍共給之、○庚午、天皇不豫、遣使誦經都下七寺及平城七大寺焉、置民部省扶省掌二人、○辛未、聖躬平復、○癸酉、勅、凡貢調之期、輸物之品、詳見令條、違期之科、麁惡之罪、亦明格文、而諸國司、朝委未允、怠慢多端、或矯言桑麻、規避麁惡、或請驗路次、巧稱逗留、是則徒設條章、曾不遵行之所致也、宜殊下知五畿內七道諸國、大宰府、改已往怠、令愼將來、又路次之國、不存公平、偏任請託、輙效逗留之狀、自今已後、不得爲然、○辛巳、正五位下小野朝臣篁爲刑部少輔、從五位下藤原朝臣菊池麿爲大藏大輔、○癸巳、聖躬不豫、分遣使者、誦經都下七寺、皇太子親王以下五位已上、就左右陣頭候之、○乙未、詔曰、天皇我詔旨止、掛畏支柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃者御病發天、惱苦比

大坐、依此天卜求禮波、掛畏支御陵乃木伐、幷犯穢流祟有利、讀經奉仕波、無咎久可有卜申、乍驚恐畏流狀乎、差使參議從四位下大和守正躬王、右近衞中將從四位上藤原朝臣助等天、申奉出、卜申我己止久、讀經毛令奉仕、又巡見撿天、犯狀乃隨爾、山陵守等乎波勘賜牟、此狀乎平久聞食天、護賜比矜賜牟爾依天之、所苦平痊天、國家無事久可有止、恐美恐美毛申賜久止申、○十一月丁酉朔、是日、朔旦冬至也、公卿上表慶賀、○壬寅、彗星見西方、○癸丑、山城國相樂郡乘陸田三町、賜橘朝臣清子、○乙卯、天皇御神嘉殿、行神事、○丙辰、詔曰、賦象不忒、九玄施仁、與物爲春、一人救世、故能功高振古、軒昊之化、允諧、事美傳遐年、勛華之業逾峻、朕以寡昧、忝臨黎萌、撫事思愆、每深懷抱、迺者有司奏言、今年十一月朔旦冬至、當天統之嘉數、發無賜之丕基、歷駕說而希聞、佇上德而演貺、夫乾鑒玄遠、必感聖荃、自顧朕非虛、何入靈睠、故今思與天下共斯休祉、自承和八年十一月廿日昧爽以前、徒罪以下、不論輕重、一從免除、但八虐、故殺人、謀殺人、强竊二盜、私鑄錢、常赦所不免、及欠負官物之類、不在赦限、若以赦前事

○補ふ類史には日の字なし

○朔旦冬至、延暦三年十一月紀(續紀下四二三頁)に始めて見ゆ公事根源に是は十一月一日の冬至に當るをいふ也廿年に一度まはる事にてめでたき祥瑞なるによりてその年は主上南殿に出御なりて旬を行はる公卿賀表を奉る事などあり云々と見え江次第に詳なり

○癸丑、此條原本本月末にあり干支を推して此に移す水戸校本に或は癸亥の訛かと云り癸亥は廿七日なり

○行神事、新嘗祭を御親ら行はせ給ふを云

○賦象不忒云々、張衡週天大象賦に賦象通犧廟之類云々とあり

○九玄、天を云

○與物爲春云々、爲春は春の草木鳥獸を生育せしむる如く仁愛を行ふを云一人は天子なり世は原本此に作る諸本及類史七十四に據て改む

○振古、太古に同じ振も亦古なり毛詩周頌小毖章に出づ

○軒昊之化、昊は原本黃に作る宮本に據て改む軒

は黃帝軒轅氏、旻は少旻金天氏なり
○事美傳遐年、事跡の遠く後に傳はるを云諸本に傳字なけれど高振古の對句なればあるべきなり
○勛華之業、勛華は放勛重華にて堯舜を云
○寡昧、原本昧を昧に作る諸本に據て改む
○黎苗、黎民に同じ
○撫事思愆云々、事は政事、愆は過也政を執りて過失あらむかと常に深く注意するなり原本思を息に作る宮本及類史七十四に據て改む
○天統之嘉數、歷數に天統地統人統の三統あり十一月朔旦冬至は天統の嘉日なり故にかく云り
○無賜、山崎校本に賜恐竆と云り纂詁は窮に改む
○駕說、揚子法言學行篇に天之道不在仲尼乎仲尼者駕說者也、注に駕傳也とあり上德と同じ意
○佇上德、上德は老子三十八章に出づ原本佇を存に作る宮本水戶校本及類史に據て改む
○乾鑒、乾は天なり
○聖荃、聖君に同じ楚辭の注に荃香草以喩君也

相告言者、以其罪々之、其門蔭久絶、及功才早著者、特加褒奬、式暢龍光、內外文武官主典以上、進爵一級、在京正六位上諸吏、及史生直丁以上、宜量賜物、庶施愷澤於萌俗、答嘉貺於旻穹、布告遐邇、俾知朕意、是日天皇御紫宸殿、宴于百官、詔曰、天皇我詔旨良万止勅大命乎、衆聞食止宣、朔旦冬至波、歷代天希爾値王者休祥奈利、朕我以不德天、今爾得値太利、朕而已夜此乎嘉備牟、卿太知百官人止毛、天下乃公民爾至万天、相賀部之止所念行須、故是以仕奉狀乃隨爾、上治賜不人毛在、氏乃中爾治賜人毛一二在、又諸司乃主典與利以上人爾、冠一階上賜比、又司々乃人止毛爾至万天爾大物賜比、又天下徒罪已下人止毛免賜久止勅大命乎、衆聞食止宣、授四品葛井親王三品、正三位源朝臣常從二位、從三位橘朝臣氏公、藤原朝臣綱繼、並正三位、從四位上文室朝臣秋津正四位下、從四位下高枝王從四位上、无位茂世王從四位下、從五位下近棟王、大川王、並從五位上、正六位上善永王、葛城王、並從五位下、從四位下和氣朝臣仲世、伴宿禰友足、橘朝臣永名、紀朝臣名虎、並從四位上、從五位上高階眞人石河、藤原

さあり
○自顧、自字は西本宮本及類史に據て補ふ西本前本中本顧下の朕字なし
○何入靈睠、原本入を可に作る閣本尾本及類史に據て改む何ぞ天の眷顧を得むやさなり
○休祉、休は慶也祉は福也
○早著、原本早を訛れるを諸本及類史に據て改む
○式暢龍光、原本式を或に作る諸本及類史に據て改む龍光は毛詩小雅蓼蕭章に既見君子、爲龍爲光、朱傳に龍寵也爲龍爲光喜其德之謂也さあるに出づ
○正六位上、正六位上は一級を進むれば從五位下なるべきを以て賜物の方に加へられしなり
○萠俗、萠は氓に通ず庶民を云
○詔曰、延暦三年十一月戊戌の詔を參看すべし
○希爾値、爾字は原本値の下にありしを類史七十四に據て改む
○休祥奈利、利は諸本リに作る下の利も同じ
○百官人止毛、毛は司々乃人止毛の例に據て補ふ

朝臣貞主、並正五位下、從五位下藤原朝臣諸成、藤原朝臣豐嗣、藤原朝臣高房、菅野朝臣永岑、縣犬養宿禰廣濱、田口朝臣房富、御船宿禰氏主、藤原朝臣良相、並從五位上、外從五位下善友朝臣豐宗、正六位上在原朝臣行平、藤原朝臣關上、藤原朝臣亮直、大中臣朝臣粟麿、秋篠朝臣五百河、藤原朝臣岳雄、橘朝臣仲村麿、巨勢朝臣康則、並從五位下、正六位上名草宿禰豐成、壹伎公氏成、多朝臣清繼、和邇部臣眞行、善世宿禰豐永、秦忌寸福代、並外從五位下、宴訖賜祿有差、○丁巳、彗星猶見、是日授正三位百濟王慶命從二位、无位阿子女王從五位下、從四位下橘朝臣井手子正四位下、无位源朝臣潔姫正四位下、從四位下當麻眞人浦蟲從四位上、從五位下飯高朝臣姉綱、无位藤原朝臣潔子、並正五位下、无位田口朝臣眞仲、菅生朝臣皆並從五位下、○十二月丙寅朔丁卯、攝津國地三百町爲後院牧、○甲戌、外從五位下興世朝臣高世爲大膳亮、從五位下善永王爲豐後守、○壬午、勅、請僧百口於八省院、限三箇日、讀大般若經、殊令內記作咒願文、同令五畿內七道諸國讀之、迄于事畢、禁

清和紀貞觀二年十一月壬辰陽成紀元慶三年十一月庚辰の宣命亦證とすべし
○氏乃中爾、氏は原本民に作る宮本及類史に據て改む貞觀二年十一月元慶三年十一月の宣命に據るに氏々さあるべきなり
○至萬天爾、原本爾を仁に作る諸本及類史に據て改む
○葛井親王、桓武天皇皇子
○高枝王、伊豫親王の子
○茂世王、仲世親王の子
○大川王、原本川を門に作る諸本及類史九十九に據て改む
○從四位下和氣朝臣仲世、從四位下の四字は閣本宮本水戶校本及類史に據て補ふ
○友足、原本此下に和氣朝臣仲世の六字あり類史に據て削る
○貞主、原本貞を眞に作る類史及下文に據て改む
○藤原朝臣豐嗣、原本諸成の上にあり閣本前本中本及類史に據て移す
○關主、原本關を闕に作る宮本に據て改む
○亮直、類史亮を高に作る

斷殺生、爲彗星屢見也、○甲申十九、修日本後紀訖、奏御、是日、攝津國請停任讀師、許之、○丁亥廿二、長門國言、渤海客徒賀福延等一百五人來著、○庚寅廿五、以式部大丞正六位上小野朝臣恒柯、少外記正六位上山代宿禰氏益、爲存問渤海客使、○辛卯廿六、置主計主税二寮々掌各二員、元興寺僧傳灯大法師位守寵卒、守寵、俗姓佐伯氏、讃岐國人、法相宗僧正護命之資流也、延曆廿四年得度具戒、能說護法之道、獨作論義、將化去時、年五十有八、

○壹伎公、伎は原本岐に作る閣本前本宮本に據て改む
○眞行、類史眞を直に作る
○正三位百濟王、原本三を二に作る諸本に據て改む
○阿子女王、世系詳ならず原本子女顚倒す宮本に據て改む
○浦蟲、原本蟲を宗に作る宮本水戸校本に據て改む
○无位藤原朝臣潔子、潔子從四位上を授けらるゝこと七年正月乙酉紀（一五八頁）に見ゆ此に无位とあるは誤なるべし
○呰並從五位下、原本呰を皆に作る諸本に據て改む原本此下に癸丑條あり干支を推て上に移せり
（十二月）攝津國地、郡名闕く
○後院牧、後院は皇太后宮を云

續日本後紀卷第十

○修日本後紀云々、左大臣藤原緒嗣等奉勅撰、延暦十一年正月より天長十年二月に至る四十二年四朝に亘る正史なり四十卷ありしが散佚して今僅に十卷を存す　○講停任讀師、諸國國分寺に講師讀師各一員を置くこと延喜式に見ゆ其讀師なるべし　○渤海、神龜四年十二月紀（續紀上二〇五頁）に出づ　○賀福延、閣本西本前本等延を近に作る　○恒柯、原本柯を河に作る宮本及類史百九十四に據て改む　○存問渤海客使、原本存を在に作る宮本及類史に據て改む　○守寵卒、元亨釋書十六にも見ゆ　○護命、元興寺の僧なり天長四年僧正に任じ承和元年九月戊午卒す上文（四八頁）に詳に見ゆ　○獨作論義云々、恐くは脫文あるべし

○承和、此の二字は宮本に據て補ふ

【承和九年】太皇太后、此下に原本宮字あり類史廿八及紀略に據て削る

○雅樂、雅原本訛れるを諸本に據て訂す

○康子、原本康を庚に作る諸本に據て改む類史紀略京に作り水戸校本及紹運錄高に作る

○更衣、後宮職員令に妃・夫人・嬪等の制ありしが桓武天皇紀乙魚を女御さなし此朝に更衣を置かれしより女御は皇后中宮に亞ぎ更衣は女御に次ぐものさなれり

○屆從五位已上、原本從下に從字あり衍なり諸本及類史に據て削る

○日曛、曛は玉篇に黃昏時さあり

○石河、下次及類史九十九に石川に作る

○春津並正五位下、原本下を上に作る諸本及類史に據て改む

○春澄宿禰善繩、原本繩を綱に作る閣本前本中本及類史に據て改む

續日本後紀卷第十一

起承和九年正月盡六月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

九年(壬戌)春正月丙申朔、天皇御大極殿、受朝賀、畢宴侍從已上於紫宸殿、賜御被、○戊戌(三)、天皇朝覲太上天皇、及太皇太后於嵯峨院、于時雅樂寮奏音樂、公卿醉中不勝感興、各起更舞、是日詔授從五位下秋篠朝臣康子正五位下、无位山田宿禰近子從五位上、並太上天皇更衣也、賜屆從五位已上祿、日曛(クレテ)歸宮、○壬寅(七)、天皇御豐樂殿、宴于群臣、詔授從三位藤原朝臣良房正三位、從四位下正躬王從四位上、正六位上眞笠王、長門王、並從五位下、從四位上平朝臣高棟正四位下、從四位下紀朝臣長江從四位上、正五位下高階眞人石河從四位下、從五位上興世朝臣書主、藤原朝臣春津、並正五位下、從五位下笠朝臣年繼、丹墀眞人門成、高階眞人清上、春澄宿禰善繩、藤原朝臣富士麻呂、紀朝臣綱雄、並從五位上、外

○外從五位下興世朝臣高世、此十一字は類史に據て補ふ
○藤原朝臣眞岑、朝臣の二字は宮本及類史に據て補ふ
○檻雄、宮本楣雄に作る
○味眞公御助麻呂、出自許ならず越前國今立郡味眞鄕あれば此に由あるべし
○崇朝之講、崇朝は毛詩鄘風蝃蝀章に出で崇は終なり終朝に同じ
○賀登子、肥前守福當麻呂の女にして天皇の宮人、原本賀字なし諸本に據て補ふ
○吉子、同じく今上の宮人
○並正六位上、並字は宮本に據て補ふ
○卅、原本卌に作る諸本及紀略に據て改む
○大津、齊明紀七年三月紀に娜大津に作る今の博多津なり
○張寶高死、東國通鑑に文聖王八年（丙寅唐會昌六年）春殺張保皐、先是王聞保皐怨其不納女據鎭叛、將討之慮或不克猶豫未定、武州人閻長告王曰朝

從五位下興世朝臣高世、正六位上藤原朝臣眞岑、坂上大宿禰當宗、藤原朝臣貞敏、三原朝臣朝主、藤原朝臣正世、橘朝臣貞町、丹墀眞人永平、甘南備眞人彌雄、大中臣朝臣檻雄、上毛野朝臣貞雄、並從五位下、正六位上菅野朝臣繼門、伊福部宿禰永氏、味眞公御助麻呂、並外從五位下、宴訖、賜祿有差、○癸卯、天皇御大極殿、聽講最勝王經、崇朝之講竟、而廻御本宮、授无位藤原朝臣賀登子、小野朝臣吉子、並正六位上、○乙巳、新羅人李少貞等卅人、到著筑紫大津、大宰府遣使問來由、頭首少貞申云、張寶高死、其副將李昌珍等欲叛亂、武珍州列賀閻丈興兵討平、今已無虞、但恐賊徒漏網、忽到貴邦、擾亂黎庶、若有舟船到彼、不執文符者、並請切命所在、推勘收捉、又去年廻易使李忠楊圓等所賚貨物、乃是部下官吏、及故張寶高子弟所遺、請速發遣、仍賚閻丈上筑前國牒狀參來者、公卿議曰、少貞曾是寶高之臣、今則閻丈之使、彼新羅人、其情不遜、所通消息、彼此不定、定知、商人欲許交通、巧言攸稱、今覆解狀云、李少貞賚閻丈上筑前國牒狀參來者、而其牒狀無進上宰府之詞、無乃可謂合例、宜

延孝聽臣計、當不欲一卒持空拳斬保皐、以獻王、許之、長伴叛投淸海、保皐愛其勇、無所疑、引爲上客、與之飲、極歡及醉、奪保皐劍斬之、召諭其衆、々不敢動、王喜賜長爵阿干とあり寶高郎ち保皐なり會昌六年は承和十三年なれば年代少しく合はず何れか誤あるべし
○李昌珍、原本李を季に作る諸本に據て改む
○武珍州、三國史記地理三に武州本百濟地神文王六年爲武珍州、景德王改爲武州とあり今の光州なり
○列賀、詳ならず纂詁に別駕の誤にて官名なりといへど確證なければ疑を存して後考を俟つ
○閭丈、原本丈を文に作る尾本前本中本等に據て改む通鑑に閭長とあり長と丈と音近ければ丈の字を充てしなるべし
○貴邦、諸本貴部に作る
○去年、原本年字なし下文に據て補ふ
○李忠、原本李を季に作る諸本に據て改む下同じ
○楊圓、原本楊を揚に作

彼牒狀早速進上、如牒旨無道、附少貞可返却者、或曰、少貞今旣託於閭丈、將掠先來李忠楊圓等、謂去年廻易使李忠等所賷貨物、乃是故寶高子弟所遣、請速發遣、今如所聞、令李忠等與少貞同行、其以迷獸、投於餓虎、須問李忠等、若嫌與少貞共歸、隨彼所願、任命遲速、又曰、李忠等廻易事畢、歸向本鄕、逢彼國亂、不得平著、更來筑前大津、其後於呂系等化來云、己等張寶高所攝嶋民也、寶高去年十一月中死去、不得寧居、仍參著貴邦、是日、前筑前國守文室朝臣宮田麻呂、取李忠等所賷雜物、其詞云、寶高存日、爲買唐國貨物、以絁付贈、可報獲物、其數不尠、正今寶高死、無由得物實、因取寶高使所賷物者、縱境外之人、爲愛土毛、到來我境、須欣彼情令得其所、而奪廻易之絁、商賈之權、府司不加勘嚴、肆令并兼、非失賈客之資、深表無王憲之制、仍命府吏、所取雜物、細碎勘錄、且給且言、兼又支給粮食、放歸本鄕、○戊申、以參議從四位上正躬王爲兼左大弁、大和守如故、參議從四位下安倍朝臣安仁爲大藏卿、參議從四位上滋野朝臣貞主爲兼式部大輔、讃岐守如故、從三位百濟王勝義爲兼相摸守、

る水戸校本に據て改む下同じ
○所賷、原本賷を賚に作る諸本に據て改む
○子弟、原本弟を第に作る諸本に據て改む
○呂系、原本系を糸に作る諸本に據て改む
○前筑前國守、筑上の前字閣本尾本前本等に據て補ふ
○以絁付贈、原本絁を絕に作る絁なること明なれば改む
○物實、原本實物に作るを西本尾本中本に據て改む
○奪廻易之絁、原本之の下に便字あれど諸本なし絁は原本絕に作れど絁の訛なること上文の例にて明なれば便を削て絕を絁と改む
○勘嚴、嚴疑覈と纂詁に云り
○并兼、原本并を弁に作る水戸校本に據て改む
○支給、原本支を與に作る諸本に據て改む
○大和守如故、原本如故を改の一字に作る尾本に據て改む
○二品秀良親王、原本二を三に作る西本前本中本

宮內卿如故、三品阿保親王爲兼上總太守、彈正尹如故、二品秀良親王爲上野太守、參議正四位下朝野朝臣鹿取爲兼越中守、從四位上藤原朝臣衞爲大宰大貳、○己酉、最勝會訖、更引名僧十餘人於禁中、令論義、畢施御被、○辛亥、天皇御紫宸殿、覽踏歌、賜侍臣等祿有差、○壬子、天皇御豐樂殿觀射、○乙卯、天皇內宴於仁壽殿、公卿及知文士陪焉、同賦春生之題、宴畢、賜祿有差、○壬戌、制、諸國貢調庸使、專當國司、名簿附計帳使、申上之後、不獲逗留相替、若人有病、差替言上、病愈之日、必命進上、如除行程之外、滿百廿日、猶有不參、依法解官、○二月丙寅朔、戊辰、地震、○己巳、遣使奉幣伊勢大神宮及諸社、祈年也、○乙亥、以從四位下高階眞人石川爲中務大輔、云云、○辛巳、第一皇子(文德)諱(田邑)、於仁壽殿加元服、諸親王藤原氏等獻御贄、酣宴及曛、賜參議已上袿衣、五位及未得解由大夫等凡一百卅人各被、○乙酉、令渤海客徒入京、○戊子、授正五位下廣井女王從四位下、云云、○甲午、地震、中納言正三位藤原朝臣吉野上表、乞解職養親、不許、以但馬國城埼郡壽永寺爲定額寺、○三月丙申朔、

等に據て改む親王は七年正月甲申紀に三品より二品に進み給へり
○朝野朝臣鹿取、此人十二月癸酉條に改宿禰賜朝臣とあれば此に朝臣とあるは追書なり
○從四位上藤原朝臣衞云云、此十四字宮本に據て補ふ
○論義、宮本義を議に作る
○同賦春生之題宴畢、原本畢を了に作る尾本及類史に據て改む纂詁に宴上春生上下恐脫字と云
○必命進上、原本上を止に作る閣本尾本前本等に據て改む
(二月)大神宮、原本大を太に作る諸本に據て改む下同じ
○新年也、四日にて恒例の祈年祭なり
○爲中務大輔云云、云々の二字は諸本に據て補ふ
○掛衣、已に注す
○大夫、五位以上の人を云
○渤海客徒入京、八年十二月丁亥紀に長門國に來著のこと見ゆ
○從四位下云々、云々の二字は諸本に據て補ふ

丁酉、勅、女官別當、雖非職員、所掌之物、不異諸司、宜准侍從廚、四年爲限、遷代之日、責解由狀、○己亥、中納言正三位橘朝臣氏公爲大納言、右近衞大將如故、○辛丑、存問兼領渤海客使式部大丞正六位上小野朝臣恒柯、少内記從六位上豐階公安人等上奏、勘問客徒等文、幷渤海王所上啓案、幷中臺省牒案等文、其啓狀曰、渤海國王大彝震啓、季秋漸冷、伏惟天皇起居万福、卽此彝震蒙恩、前者王文矩等入覲、初到貴界、文矩等卽從界末却迴、到國之日、勘問不得入覲逗留、文矩口傳天皇之旨、年滿一紀、後許入覲、彝震仰計天皇衷旨、不要頻煩、謹依口傳、仍守前約、今者天星轉運、躔次過紀、覲覿之禮、爰恐愆期、差使奉啓、任約令覲、彝震限以溟闊、不獲拜覲、下情無任馳戀、謹遣政堂省左允賀福延奉啓、又別狀曰、彝震祖父王在日、差高承祖入覲之時、天皇注送在唐住五臺山僧靈仙黃金百兩、寄附承祖、々々領將、到國之日、具陳天皇附金之旨、祖父王欽承睿意、轉附朝唐賀正之使、令尋靈仙所在、將送其金、待使復、佇付金否、而程途隔海、過期不返、後年朝唐使人却迴之日、方知前年使尋從海

却歸、到塗里浦、疾風暴起、皆悉陷沒、亦悉徃五臺覓靈仙、送金之時、靈仙遷化、不得付與、其金同陷沒、以此其後文矩入覲、啓中縷陳事由、冀達天皇、文矩不遂覲禮、將啓却歸、今再述失金事由、故遣賀福延輸申誠志、伏望體悉、又中臺省牒曰、渤海國中臺省、牒日本國太政官廳、差入覲貴國使政堂省左允賀福延、幷行從一百五人、牒奉處分、日域東遙、遼陽西阻、兩邦相去、万里有餘、溟漲滔天、風雲難可測、扶光出地、程途亦或易標、所以展親舊意、拜覲須申、每航海以占風、長候時而入覲、年祀雖限、星軺倚通、賫書遣使、爰至于今、宜遵舊章、欽修覲禮、謹差政堂省左允賀福延、令覲貴國者、准狀牒上日本國太政官者、謹錄牒上、云云、○癸卯、右京人侍醫外從五位下紀臣國守、弟從八位上同姓魚守等三人、改臣字賜朝臣、○丙午、勅、比者春雨降少、枯旱日多、百姓輟耕、不能播種、宜准弘仁九年四月廿五日格、不問王臣田、所有水之處、任令百姓耕作、降種遷種之後、各歸其主、神寺田宜同准此、又漑水養田、先賤後貴、但事權時、不得爲例、○庚戌、又勅、若非擭未然、恐班蒔失時、宜仰五畿內七道諸國、簡修

○吉野上表云々、此人の事詳に十三年八月庚午紀に見ゆ
○壽永寺、寺址詳ならず
(三月)丁酉、此條纂詁には元年三月丁酉紀に已に出づとて之を削る
○啓案幷中臺省牒案、原本幷を闕に作る閣本西本及類史に據て改む
○大彝震、唐書に渤海王仁秀卒孫彝震立とあり大は姓なり
○王文矩等入覲、弘仁十二年十一月なり類史百九十四に見ゆ
○界末、末は原本未に作る谷本に據て改む從界末却廻とは京都まで上らずして却廻せるを云
○襃旨、襃は原本哀に作るを諸本及類史に據て改む
○天星轉運驟次過紀、星は原本皇に作る狩谷氏星原作皇非嘉祥二年紀星律轉廻可證と云ふに據て改む驟次は說文に纏觀也とあり星辰の運行するをいふ所謂星霜往來りて一紀を過ぎしとなり王文矩の入覲せしより既に二十年を經て御代も亦改まれるが故に天星運轉して

行不退者二十人、於國分寺三箇日間、晝讀金剛般若、夜修藥師悔過、修善之比、禁止殺生、佛僧布施、以正稅宛之、若有天行之處、國司到境下、令防祭疫神、精進齋戒、共禱豐稔、是日遣使頒幣貴布禰、住吉、垂水、丹生、川上等諸社、同祈甘雨、○辛亥、地震、從五位上有雄王爲玄蕃頭云云、恒統親王薨、後太上天皇(淳和)第三皇子、太皇太后(正子内親王)之所產也、于時年十餘歲也、遣勘解由長官從四位上和氣朝臣仲世、治部少輔從五位上藤原朝臣菊池麻呂、玄蕃頭從五位上有雄王、右京亮從五位下林朝臣常繼等、監護喪事、○丁巳、遣使奉幣松尾、鴨御祖、鴨別雷、乙訓等名神、祈雨也、是日雨降、通宵不緩、○壬戌、渤海客徒賀福延等、發自河陽、入于京師、遣式部少輔從五位下藤原朝臣諸成、爲郊勞使、是夕於鴻臚館安置供給、○癸亥、太政官遣右大史正六位上蕃良朝臣豐持於鴻臚館、爲慰勞焉、是日渤海使賀福延等上中臺省牒、○甲子、遣侍從正五位下藤原朝臣春津於鴻臚館、宣勅曰、天皇詔旨良麻止宣久、有司奏久、彼國王乃上啓外乃別狀等事乎、存問使詰問爾、引過伏理奴、是故爾彼國使等遠波、待爾不可

年紀を經たりと云るなり
○覲覿之禮、覿も見るなり
○令覲、原本令を命に作る類史に據て改む
○溟闊、原本闊を闇に作る類史に據て改む闊は遠也廣也海の廣きを云
○不獲拜覲、原本獲を權に作る諸本及類史に據て改む
○馳戀、馳は心を馳らすことにて仰慕の誠を遙に寄せ奉るとなり
○左允、原本允を元に作る諸本及類史に據て改む下同じ
○別狀、尾本別を副に作る
○祖父王、大仁秀を云
○高承祖入覲、天長二年なり
○籙仙、原本仙を山に作る諸本及類史に據て改む
○寄附承祖々々領將、原本承祖二字なし類史百九十四に據て補ふ
○承睿意、原本睿を春に作る類史に據て改む宮本は脊に作る
○待使復佇付金否、狩谷氏は佇字可レ疑と云大日本史には文を改めて欲下待二使還一問中付上金否上とせ

以常禮止奏、然止毛守年紀氏、自遠參來留遠念行氏奈毛、殊矜免賜布止宣、又詔久、客伊自遠參來禮理、平安以不、又長門以來路間波、如何爲都都加參來志、宜相見日爾至万弖波、此爾侍天休息止宣布、

○夏四月乙丑朔、使右大史正六位上山田宿禰文雄、賜客等時服、○丙寅、渤海國使賀福延等、於八省院、獻啓函信物等、○己巳、天皇御豐樂殿、饗渤海使等、詔授大使賀福延正三位、副使王寶璋正四位下、判官高文暄、烏孝愼二人並正五位下、錄事高文宣、高平信、安歡喜三人並從五位

り　○程途隔海、諸本及類史隔海程途に作る　○途里浦、宮イ本里を黒に作る　○陷沒、原本陷を滔に作る閣本谷本及類史に據て改む下同じ

○送金之時、原本金を今に作る宮本及類史に據て改む　○將啓、將は賚也持也　○述失金事由、原本述失命事由に作る述は閣本及類史、金は類史に據て改む　○輸申誠志、原本輸を論に作る西本前本谷本及類史に據て改む輸は盡也申は致也又舒也　○太政官廳、原本廳を應に作る類史に據て改む　○行從、原本從を徒に作る閣本尾本類史に據て改む行從は一行の從者の意なり　○遼陽、即ち渤海國を云　○滔天、説文に滔は水漫大貌　○扶光、文選月賦の注に扶桑之光也とあり扶桑は日の出る處扶光は太陽を云　○展親舊意、宮本親を新に作る　○拜覲須申、申は類史に據て補ふ　○年祀、類史祀を紀に作る　○星軺、軺は使臣の乘る車即ち使臣を云　○牒上云々、云々の二字は諸本に據て補ふ　○弟從八位上同姓魚守、原本弟を第に魚を兼に作る諸本に據て改む　○枯旱、原本旱を阜に作る諸本及紀略に據て改む　○班蒔失時、原本班を斑に作る閣本中本宮本に據て改む班蒔は種子を蒔き苗を殖るを云　○天行、天行病即ち流行病を云　○疫神、此祭のこと延喜式に見ゆ　○玄蕃頭云云、云云の二字は諸本に據て補ふ　○十餘歲也、紹運錄に十三とあり　○藤原朝臣菊池麻呂、按に菊池麻呂七年六月甲寅治部大輔となり同八年五月庚午朔刑部大輔に同十月辛巳大藏大輔となれりされば此處に治部少輔とあるは大藏大輔の誤なり　○乙訓、神名式山城國乙訓郡乙訓坐大雷神社(名神大月次新嘗)　○通宵、舊唐書裴寂傳に出で通夜の意なり宵は原本訛れるを前本に據て改む　○河陽、山城國山崎の別名淀河を船にて上り此より陸路京に入る故に河陽より發して京に入ると云　○郊勞使、郊外に出て遠來の客を勞ふ使なり軍防令義解に郊勞者邑外曰郊賓至勞之於郊也とあり　○鴻臚館、東西にあり一は七條北朱雀東一は同朱雀西にあり　○賀福延、延字は宮本及上文に據て補ふ　○自遠參來留遠、來字は類史に據て補ふ　○客伊、原本伊を倍に作る纂詁に據て改む　○平安以不、原本不を來に作る閣本西本前本等に據て改む遠路無事なりしや否と問はしめらるゝなり　○宜相見日、謁見を仰付けらるゝ日なり

(四月)客等、山崎校本に客下恐脫徒字と云り　○啓函、原本函を亟に作る諸本及類史に據て改む　○高文暄、原本暄を暊に作る類史に據て改む　○烏孝愼、原本烏を鳥に作る宮本及類史に據て改む　○高文宣、原本宣を寅に

下、自外譯語已下、首領已上十三人、隨色加階焉、使右少辨兼右近衞少將從五位下藤原朝臣氏宗供食、日暮賜祿各有差、○辛未、大使賀福延、私獻方物、○癸酉、饗客徒等於朝集堂、遣從五位下惟良宿禰春道供養、宣勅曰、天皇我御命良万止詔勅命乎、客人伊聞食止宣久、國爾還退倍支日近久在爾依氏奈毛、國王爾祿賜比、幷氏福延等爾毛御手都物賜比、饗賜波久止宣布、○乙亥、天皇遷御冷然院、以修理內裏也、○丙子、遣勅使於鴻臚館、宣詔賜渤海王書曰、天皇敬問渤海國王、福延等至、得啓具之、惟王奉遵明約、沿酌舊章、一紀星廻、朝覲之期不爽、万里溟潤、賝貢之款仍通、言念乃誠、無忘鑒寐、前年聘唐使人却廻、詳知苾蒭靈仙化去、今省別狀、事自合符、亦悉付遣黃金、陷沒綠浦、雖人逝賚失、元圖不諧、而思夫轉送之勞、遙感應接之義、悠悠天際、足非可跂、予相見無由、慭焉不已耳、附少國信、色目如別、夏景初蒸、比平安好、略此還答、指不多及、太政官賜中臺省牒曰、日本國太政官牒渤海國中臺省、入覲使政堂省左允賀福延等壹佰伍人牒、得中臺省牒偁、奉處分、日域東遙、遼陽西阻、兩邦相去、万里有

作る類史に據て改む
○氏宗、宗字は諸本及類史に據て補ふ
○供食、紀略供養に作る氏宗は式に所謂共食使なるべし
○朝集堂、拾芥抄中末に朝集堂應天門內會昌門外東西堂謂之とあり大極殿に屬す
○供養、纂詁は上文の如く共食と改めたり
○客人伊、原本伊を倍に作る纂詁に據て改む
○御手都物、御手づから賜ふ物の意
○遣勅使、即ち賜勅書使
○溟潤、原本潤字を訛れり諸本に據て改む
○賝貢、賝は玉篇に賦也とあり
○鑒寐、後漢書劉陶傳注に監寐猶寤寐也とあり
○苾蒭、釋氏要覧に苾芻西天草名具五德故將喩出家人とあり
○元圖不諧、最初の希望の達せざるを云
○天際足非可跂、跂は踵をあげて望むを云西本尾本前本等足を天に作り閣本には際足の二字なし
○慭焉、慭は字書に憂也思也とあり

餘、溟漲滔天、風雲雖可難測、扶光出地、程途亦或易標、所以每航海以占風、長候時而入覲、宜遵舊章、欽修覲禮、謹差政堂省左允賀福延、令覲貴國者、福延等來修聘禮、守一紀之龍信、淩千里之鼇波、乘風便以企心、仰日光而進影、事有成規、准例奏請、被勅報曰、隣好相尋、匪亶今日、靜言純至、嘉尚于懷、宜加優矜、得復命者、今使還之次、附璽書并信物、至宜領之、但啓函修飾、不依舊例、官議棄瑕不擧、自後奉以悛之、准勅牒送、牒到准狀、故牒、勘解由判官正六位上藤原朝臣粟作、文章生從六位上大中臣朝臣清世爲領客使、是日使賀福延等歸鄕、○辛卯、天皇御武德殿、閱諸國駒、○五月甲午朔乙未、勅、五月五日、供節四衛府六位官人已下裝束、除甲冑飾之外、不得用金銀及薄泥、五位已上走馬之鞍、并馬飾不論新舊、聽用金銀、但薄泥不在聽限、○戊戌、天皇御武德殿覽騎射、○甲辰、奉授陸奧國柴田郡无位大高山神從五位下、以從五位上藤原朝臣諸成爲兼勘解由次官、○丁未、奉授信濃國諏方郡无位勳八等南方刀美神從五位下、餘如故、○庚申、勅、近有物恠、卜食疫氣告咎、宜令五畿內七

○色目、原本色一字衍す類史に據て削る
○夏景、原本景を置に作る類史に據て改む
○比平安好、此頃平安好在なりやさなり四字句なるが故に略せり
○太政官、原本大宮の二字に作る諸本及類史に據て改め補ふ
○中臺省牒併、原本省字なし宮本に據て補ひ併を稱に作るを類史に據て改む又原本併下に牒字あり諸本に據て削る
○易標、諸本易漂に作る
○龍信、信字は閣本以下諸本皆空白とす疑ふべし
○風便、原本便を使に作る西本尾本宮本及類史に據て訂す
○進影、宮本進を追に作る
○匪亶今日、亶は但に同じ原本訛れるを類史に據て訂す
○純至、私記云純疑款字訛
○閱諸國駒、五月五日節の騎射に用ふる馬を簡閱せさせ給ふなり卽ち駒牽なり
(五月)薄泥、薄は箔、泥は金銀泥なり

○大高山神、神名式陸奧國柴田郡大高山神社(名神大)、今陸前國柴田郡金瀨村平

○南方刀美神社、神名式信濃國諏方郡南方刀美神社二座(名神大)今官幣大社に列す上下に分れ上社は神宮寺村に、下社は下諏訪町にあり原本南字なく方を万に作る神名式に據て改め補ふ

○庚申、此條類史百七十三に據て補ふ又紀略にも載すれども文に少異あり宜しく考合すべし

○高階眞人石河卒、河は原本川に作る今諸本に據る高階眞人は天武天皇皇子高市皇子の後なり

○淨階眞人、弘仁四年正月辛酉紀に正六位上と見ゆ

○明年正月叙從五位下、原本從を正に作る承和二年正月癸巳紀に從五位下より從五位上に進むとあれば正五位下は誤なり故に類史に據て改む

○以富聲音也、少納言は掌宣勅奏事とあれば聲音を要すること多きなり

○時年五十九、時字は類史に據て補ふ

道諸國、及大宰府、敬祭疫神、以禦咎徵也、○壬戌、中務大輔從四位下高階眞人石河卒、從四位下淨階眞人之子也、弘仁十三年任宮內少丞、轉大丞、明年正月叙從五位下、除兵部少輔、俄遷少納言、父子相襲居斯職、以富聲音也、時論以爲稱唯之音、細而且高、猶勝於父、天長之季、頻兼常陸介出雲守、承和二年以降、累加至從四位下、卒于官時年五十九、○六月甲子朔乙丑、勅定造大井寺使員、判官二人、主典二人、歷限者以四年爲期、但使及竿師已下員、并責解由、一同前例、○丙寅、伊勢國人遠江介外從五位下飯高公常比麻呂、弟五百繼、甲斐日大初位上飯高宿禰濱永等男女廿七人、賜姓飯高朝臣、編附左京三條采女、○丁卯、以左京采女町西北地四分之一、賜右衞門權佐從五位下橘朝臣海雄、○戊辰、勅、前者令陰陽寮占物恠、奏可有疫氣、宜遣使奉幣伊勢大神宮、祈攘之、○辛未、若狹國進銅器、其體頗似鐘、是自地中所掘得也、○戊寅、地震、以攝津國嶋下郡古荒田五十二町、賜從五位下大中臣朝臣岑子、○以從五位下藤原朝臣大津爲神祇大副、○乙酉、讃岐國香河郡人戸主從六位

上秦人部永機、戸主秦人部春世等十人、賜姓酒部、〇廿三丙戌、澍雨滂沱、百姓皆喜、右京人正六位上保雄王男長宗、廣宗、高枝等王十人、賜姓淸瀧眞人、三品忍壁親王六世孫也、

續日本後紀卷第十一

(二六月)大井寺、詳ならす蓋詰は山城國葛野郡大堰郷廣隆寺ならむかと云　〇一同前例、原本同を月に作る類史百八十に據て改む　〇弟五百繼、原本弟を第に作る諸本に據て改む　〇飯高朝臣、伊勢國飯高郡あり此氏の本居なり　〇三條采女、狩谷氏は女下恐脫町字と云按に下文に左京采女町とあるによりて誤りて書加へしにて衍なるべし　〇采女町、拾芥抄中末に采女町在内膳東とあり　〇自地中所掘得、原本自を日に掘を堀に作る閣本前本中本に據て改む　〇秦人部、錄右京諸蕃に秦人太秦公宿禰同祖秦公酒之後也とあり　〇永機、原本機を職に作る諸本に據て改む　〇丙戌、原本丙辰に作る此月甲子朔丙辰なし故に類史百六十五に據て改む　〇高枝等王十人、原本王を五に作る前本中本に據て改む　〇淸瀧眞人、十年六月紀にも安繼王等七人賜姓淸瀧眞人と見ゆ淸瀧は山城國葛野郡の地名　〇忍壁親王、或は刑部に作り天武天皇の皇子、母は宍人臣大麿の女なり

續日本後紀卷第十二

起承和九年七月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

秋七月癸巳朔乙未、遣使於筑前國宗像神、竈門神、肥後國健磐龍神等諸社奉幣、緣有祟也、越前國人散位正六位上長谷連貞長、同姓貞成等、改本居貫附左京二條三坊、○丁酉、散位從三位藤原朝臣繼業薨、參議正三位式部卿大宰帥宇合之孫、贈太政大臣正一位百川朝臣之第三子也、延曆十五年、擢自內舍人敍從五位下、爲侍從、兼常陸介、改兼信濃介、尋遷大學頭左兵衞佐、兼信濃守、漸加正五位上、大同三年、敍從四位下、任大和守、俄遷右馬頭、弘仁元年、加從四位上、任近江守、尋拜兵部大輔、轉神祇伯、後出伊豫權守、自此歸第、不復仕焉、十四年、降恩加正四位下、天長三年、授從三位、以天皇外戚也、爲人質直有容儀、好射兼善琴歌、晩年不修門戶、薨于高橋里第、時年六十五、○戊戌、勅、奉幣於貴布禰、

○承和、此二字宮本に據り補ふ

[承和九年]宗像神、五年三月甲申紀に出づ
○竈門神、七年四月丙寅紀に出づ
○健磐龍神、同上
○長谷連、古事記に波多八代宿禰は長谷部君の祖とあり長谷連も同姓か考ふべし
○不復仕、原本仕を任に作る閣本前本中本等に據て改む
○天皇外戚、淳和天皇の御生母旅子は桓武天皇の夫人にて百川の女なり故にかく云り
○高橋里第、山城志に高橋在葛野郡北野西紙屋川上並とあり衣笠村の邊なるべし

乙訓、丹生川上雨師神社、令祈雨也、是夕雨降、○己亥（七）、夜中犬矢於御在所版位之上、○癸卯（十一）、以中納言正三位藤原朝臣良房爲兼右近衛大將、陸奥出羽按察使如故、從四位上藤原朝臣助爲左兵衛督、○乙巳（十三）、勅遣左右近衛中將少將等於嵯峨院、祗候太上天皇起居、○丙午（十四）、詔曰、春生夏長、聖皇流愷悌之恩、含垢藏瑕、悊后存寛大之令、矧深仁所感、神乃降於殊祥、積德攸鍾、天必貽於永福、頃者太上天皇聖躬不豫、秋景暉少、仙雲色愁、朕自苦熱痾、未陪嘗藥、於是命徒御以備駕、佇閟熱之有間、而心事不諧、晨昏推去、將恐臣子之道有闕、孝敬之至不申、終日低頭、通宵忘寢、精誠之禱、靡所不臻、而幽明之扶、猶有未應、思憑作解之施、奉致翌日之瘳、可大赦天下、自承和九年七月十四日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、强竊二盜、常赦所不免、咸皆赦除、敢以赦前事相告言者、以其罪罪之、○丁未（十五）、太上天皇崩于嵯峨院、春秋五十七、遺詔曰、余昔以不德、久忝帝位、夙夜兢兢、思濟黎庶、然天下者聖人之大寶也、豈

○犬矢、原本大失に作る西本前本宮本に據て改む
○版位、抄調度部文書具に版位唐儀制令云諸版位(俗云變爲二音)百官一品以下各方七寸厚一寸半云々とあり
○左右近衛、右字は類史に據て補ふ
○愷悌、毛詩小雅青蠅章に豈弟君子無信讒言とあり樂易也と注す、原本悌悌に作る諸本及類史に據て改む
○悊后、說文に哲或作悊とあり哲は知なり類史は往哲に作る
○秋景暉少云々、此二句上皇の不豫に喩ふ
○苦熱痾、原本熱下に宿字あり前本中本宮本及類史に據て削る
○未陪嘗藥、嘗藥は親に藥を進むるに當りて先つ其藥を嘗め試むるなり卽ち看護を云、陪は原本除に作る閣本尾本及類史に據て改む
○徒御、毛詩小雅車攻章に徒御不驚とあり車馬を扱ふ者なり、原本徒を從に作る類史に據て改む
○有間、間は病の少く癒るを云

但愚戇微身之有哉、故以萬機之務、委於賢明、一林之風、素心所愛、思欲無位無號詣山水而逍遙、無事無爲翫琴書以澹泊、後太上皇帝陛下、寄言古典、强我尊號、再三固辭、遂不獲免、生前爲傷、歿後如何、因茲除去太上之葬禮、欲遂素懷之深願、故因循故事、別爲之制、名曰遂終、曰夫存亡天地之定數、物化之自然也、遂終以意、豈世俗之累者哉、余年弱冠、寒痾嬰身、服石變熱、頗似有驗、常恐夭傷不期、禁口無言、是以略陳至志、凡人之所愛者生也、所傷者死也、雖愛不得延期、雖傷誰能遂免、人之死也、精亡形銷、魂無不之、故氣屬於天、體歸于地、今生不能有堯舜之德、死何用重國家之費、故桓司馬之石槨不如速朽、楊王孫之羸葬不忍爲之、然則葬者藏也、欲人之不得見也、而重以棺槨、繞以松炭、期枯腊於千載、留久容於一壙、已乖歸眞之理、甚無謂也、雖流俗之至愚、必將咲之、豈財厚葬者、古賢所諱、漢魏二文、是吾之師也、是以欲朝死夕葬、夕死朝葬、作棺不厚、覆之以席、約以黑葛、置於床上、衣衾飯唅、平生之物、一皆絕之、復斂以時服、皆用故衣、更無裁制、不加纏束、著以牛角帶、擇山北幽僻不毛地、葬

○孝敬、原本敬を敎に作る類史に據て改む
○低頭、低は原本傾に作る水戸校本及類史に據て改む諸本位に作るは侲の訛なり
○作解之施、易解卦の象傳に雷雨作解君子以赦過宥罪とあるに據れり
○翌日之瘳、既に注す
○天下者聖人之大寶也、易繫辭傳に聖人之大寶曰位とあるに據れり
○愚戇、戇は說文に愚也とあり
○一林之風、林は山林なり萬機に對して一林と云ふ風は風致なり
○無號、號は太上天皇の尊號なり
○逍遙、悠々自適の狀
○澹泊、恬靜無爲の貌
○因循故事、原本循を修に故を古に作る循は諸本に據り故は類史に據て改む
○日夫存亡天地之定數云々、漢書文帝紀に死者天地之理物之自然奚可甚哀とあるに同じ夫上の日字は纂詁に削れり
○弱冠、原本冠を一刻の二字に作る類史に據て改む

○服石、石は藥石なり藥を服するを云
○魂無不之、禮記檀弓に見ゆ
○桓司馬之石槨、同く檀弓に昔者夫子居於宋見桓司馬自爲石槨三年而不成夫子曰若是其靡也死不如速朽之愈也とあるを云
○楊王孫之羸葬、漢書楊王孫傳に楊王孫者孝武時人也學黄老之術及病且終先令其子曰吾欲羸葬以反吾眞死則爲布囊盛尸入地七尺既下從足引脱其囊以身親土(節略)注に羸者不爲衣衾棺槨者也とあり原本羸を爵に作る尾本及類史に據て改む諸本羸に作るは羸の誤なり
○葬者藏也云々、禮記檀弓の語なり
○松炭、炭は地中にありて朽ちざる爲に用ふ
○枯腊、腊は乾肉なり、原本腊を骨に作る閣本西本尾本等に據て改む
○久容、永久の容姿なり
○歸眞、天道の自然に歸るを云、原本歸を魏に作る閣本及類史に據て改む
○漢魏二文、漢の孝文帝

限不過三日、無信卜筮、無拘俗事、(謂諡誄飯含呪願忌魂歸日等之事、)夜刻須向葬地、院中之人、可著喪服而給喪事、天下吏民、不得著服、而供事今上者、一七日之間、得服衰絰、過此早釋、(擇其近臣出入臥内者、應著素服、餘亦准此、)一切不可哀臨、挽柩者十二人、秉燭者十二人、並衣以麁布、從者不過廿人、(謂院中近習者、)男息不在此限、婦女一從停止、穿院淺深縱横、可容棺矣、棺既已下了、不封不樹、土與地平、使草生上、長絶祭祀、但子中長者、私置守冢、三年之後停之、又雖無資財、少有琴書、處分具遺子戒、又釋家之論、不可絶棄、是故三七、七七、各麁布一百段、周忌二百段、以斯於便寺追福、(佛布施絁細綿十屯、褁以生絹、可置素机上、)一切不可配國忌、每至忌日、今上別遣人信於一寺、聊修誦經、(布綿之數同上齋、)終一身而即休、他兒不效此、後世之論者、若不從此、是戮屍地下、死而重傷、魂而有靈、則寃悲冥途長爲怨鬼、忠臣孝子、善述君父之志、不宜違我情而已、他不在此制中者、皆以此制、以類從事、是日、放弃主鷹司鷹犬、及籠中小鳥、又准據遺詔、仰百官及五畿內七道諸國司、停擧哀素服之禮、使左中弁從四位下良岑朝臣木連、率諸兵保護內裏、少納言從五位下清瀧朝臣河根率諸

衛府、警衛兵庫、遣勅使等於伊勢、近江、美濃三國、固守關門、○戊申、（十六）擇山北幽僻之地、定山陵、以商布二千段、錢一千貫文、奉充御葬料、卽日御葬畢、○己酉、（十七）解固關使等、是日、春宮坊帶刀伴健岑、但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等謀反事發覺、令六衛府固守宮門幷內裏、遣右近衛少將從五位上藤原朝臣富士麻呂、右馬助從五位下佐伯宿禰宮成、率勇敢近衛等、各圍健岑逸勢私廬、捕獲其身、于時伊勢齋宮主馬長伴水上、來在健岑廬、有嫌疑同被捕、又召右近衛將曹伴武守、春宮坊帶刀伴甲雄等、令解兵仗、幷五箇人分付左近衛左衛門左兵衛等三府、並令杻禁、仰左右京職警固街巷、亦令固山城國五道、遣神祇大副從五位下藤原朝臣大津守宇治橋、彈正少弼從五位上丹墀眞人門成守大原道、侍從從五位下清原眞人秋雄守大枝道、散位從五位上朝野宿禰貞吉守山埼橋、大藏少輔從五位下藤原朝臣勢多雄守淀渡、先是、彈正尹三品阿保親王緘書、上呈嵯峨太皇太后、太后喚中納言正三位藤原朝臣良房於御前、密賜緘書、以傳奏之、其詞曰、今月十日、伴健岑來語云、嵯峨太上皇

及魏の文帝なり何れも薄葬の遺詔あり
○夕死朝葬、類史此四字なし
○飯唅、支那の風俗葬には死者の口に珠玉を含ましむ之を飯玉或は飯琀と云琀は唅に通す
○斂、釋名に衣戸棺曰斂々藏不復見也とあり
○牛角帶、抄裝束部に革帶唐衣服令云革帶玉鈎今案革帶以共所附金玉石角等爲名云々とあり石帶には珠玉を用ふる例なれど之に換ふるに賤しき牛角を以てするなり
○（注）飯含、原本及舍に作る類史に據て改む
○（注）呪願、呪願文なり
○（注）忌魂歸日、井上賴圀翁忌恐亡字訛と云
○衰經、喪服なり
○（注）餘亦准此、原本餘を除に作る宮本に據る
○挽柩者、紼を執て柩を挽く人を云
○棺既巳下、棺字は類史に據て補ふ
○不封不樹、易繫辭傳に古之葬者不封不樹とあり土を積みて墳と爲すを封といひ樹を種ゑて標とするを樹と云

○守家、原本家を家に作る諸本に據て改む○三年之後停之、大祥訖りて之を停廢するなり○具遺子戒、原本遺を遣に作る閣本西本前本及類史に據て改む○於便寺、便寺は便宜の寺なり、原本施使寺に作る閣本西本中本及類史に據て改む○(注)絁細綿、絁字は閣本西本中本等に據て補ふ○不可配國忌、天皇の崩日を國忌と云其中に加ふべからずとなり○人信、信は使者なり○(注)上齋、上に擧げたる三七日七七日の齋を云原本齋を春に作る諸本に據て改む○宛悲冥途、細本半本宛を寔に作る○是日、原本丁未に作る水戸校本に據て改む○主鷹司、兵部省に屬す令に掌調習鷹犬云々とあり○仰百官、原本仰を作に作る類史に據て改む○從四位下良岑朝臣、十一年正月庚寅條に據るに正五位下とあるべきなり○定山陵、嵯峨山上陵是

今將登遐、國家之亂在可待也、請奉皇子入東國者、書中詞多、不可具載、○庚戌（十八）、遣參議從四位上左大辨正躬王、參議從四位上右大弁和氣朝臣眞綱於左衛門府、推勘橘逸勢伴健岑等謀反之由、日暮不得問窮、是日、冷然院西釣臺東山邊松樹一株、其高丈五尺許者、無故自折、僉以爲異、○辛亥（十九）、正躬王眞綱朝臣等窮問罪人、奏其日記、捕春宮坊舍人伴氏永、付右衛門府、以健岑從弟也、是日、掃獄免前年罪人、又於東市樓前、脫盜人鉗、各給粮放却、灾于左京工町、燔廬舍廿烟、頃者炎旱渉旬、秋稼焦枯、詢諸卜筮、伊勢八幡等大神爲祟、命神祇伯大中臣朝臣淵魚祈禱焉、○壬子（二十）、請百僧於大極殿、限三箇日、轉讀大般若經、以旱也、遣左大辨正躬王、右大弁和氣朝臣眞綱於左衛門府、拷問逸勢健岑等、右兵衛督橘朝臣永名、右衛門少尉橘朝臣時枝、右馬大允橘朝臣三冬等、解所帶兵仗自進、以逸勢近親也、是日、遣使班給失火百姓六万錢、○癸丑（廿一）、雨快降、須臾晴、更延讀經二日、○乙卯（廿三）、勅使左近衛少將藤原朝臣良相、率近衛卌人、圍守皇太子直曹、于時天皇權御冷然院、皇太子從之、喚集帶刀等、令脫兵仗、積置

於勅使前、又直曹前右兵衛陣下、張幄一宇、散禁坊司及侍者帶刀等於其中、自餘雜色諸人、散禁於左右衛門陣、又遣左衛門權佐從五位下藤原朝臣岳雄、右馬助從五位下佐伯宿禰宮成等、率近衛喚絆大納言正三位藤原朝臣愛發、中納言正三位藤原朝臣吉野、參議正四位下文室朝臣秋津、幽於院中、各異其處、是日、詔曰、現神止大八洲國所知須倭根子天皇我詔良万止宣御命乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民、衆聞食與止宣、不慮外爾太上天皇崩流爾依天、晝夜止无久、哀迷比焦禮御坐爾、春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊、隙仁乘天與橘逸勢合力天、逆謀乎構成天、國家乎傾亡无止須、此事乎波、皇太子波不知毛在女止、不善人仁依天相累事波、疵乎撥求女无事乎不欲之天奈毛抑忍太留、又近日毛或人乃云、屬坊人等毛自古利、言來留物奈利、又先先仁毛令法師等天呪咀止云人多安利、而止毛隱有謀止云、若其事乎推究波、恐波不善事乃多有无事乎、加以後太上天皇乃厚御恩乎顧天那毛、究求女无事乎不知奴、今思保佐久波、直仁皇太子乃位乎

なり山城國葛野郡嵯峨村上嵯峨にあり
○以商布二千段云々、類史以商布以下十六字なし
○帶刀、春宮式に凡坊舍人六百人帶刀舍人三十人在此中とあり舍人の中より選ばるゝなり
○從五位下橘朝臣逸勢、贈太政大臣橘朝臣清友の子なり原本下を丁に作る諸本に據て改む
○宮門、原本宮を官に作る西本及紀略に據て改む
○宮成、原本宮を官に作る諸本及紀略に據て改む
○甲雄、水戸校本申雄に作る
○杻禁、抄調度部刑罰具に杻玉篇云杻（漢語抄云天加之）械也とあり
○山城國五道、下文に見ゆ
○宇治橋、大和路に屬す
○大原道、近江路に屬す龍華越とも稱す
○大枝道、丹波路に屬す今の龜岡街道
○山埼橋、攝津路に屬す
○淀渡、河内路に屬す
○皇子、卽ち皇太子なり
○書中詞多云々、水鏡等を參考すべし
○釣臺、釣殿なり

○鉗、抄調度部刑罰具に鉗漢書注云鉗(加奈岐)以鐵束頸也とあり
○左京工町、拾芥抄中末に木工町二條南大宮東三條坊門北二町とあり
○王子、原本子を午に作る宮本及紀略に據て改む
○拷問、獄令に驗諸證信事狀疑似猶不首實者然後拷掠とあり
○橘朝臣時枝、朝臣の二字は宮本に據て補ふ
○卌人、原本卌人に作る諸本及紀略に據て改む
○散禁、獄令義解に謂不關木索唯禁其出入也と云
○岳雄、宮本丘雄に作る
○喚絆、絆は拘禁するを云
○吉野、本官を以て淳和天皇に侍す
○秋津、現任東宮大夫
○幽於院中、院は冷泉院なり
○百官人、原本官を臣に作る諸本に據て改む
○衆聞食與止、與は世の訛なるべし下文結語亦同じ
○不慮外、前本外字なし
○在女止、原本女を世に作る諸本に據て改む皇太

停天、彼此無事波善久有部之止思保之女須、又太皇太后乃御言仁毛、如此久奈毛思保世留、故是以皇太子乃位乎停退介賜不、又可知事人止爲天奈毛、大納言藤原朝臣愛發乎波廢職天京外仁、中納言藤原朝臣吉野乎波大宰員外帥仁、春宮坊大夫文室朝臣秋津乎波出雲國員外乃守爾、任賜比宥賜不止宣天皇我御命乎、衆聞食與止宣、○丙辰(廿四)、廢皇太子、劒四口納袋、付勅使右近衛少將藤原朝臣富士麻呂、進藏人所、二口納珠總袋、二口納帛袋、勅遣參議正四位下勳六等朝野宿禰鹿取等於嵯峨山陵、告廢皇太子狀曰、天皇我御命爾坐、掛畏山陵爾申賜倍止奏久、比者東宮帶刀舍人伴健岑、與橘朝臣逸勢挾懷惡心天、謀傾國家介利、掛畏山陵乃厚顧爾依天、其事發覺禮奴、搜求事迹、事緣皇太子、因茲食國法隨爾、皇太子位停退留狀乎、恐美恐毛申賜久止申、是日遣使賑贍京中、以被閉糴困飢者衆也、○丁巳(廿五)、詔授正四位下朝野宿禰鹿取從三位、正五位下豐江王、坂上大宿禰鷹主、藤原朝臣貞主、並從四位下、從五位上伴宿禰成益、藤原朝臣富士麻呂並正五位下、以正三位藤原朝臣良房爲大納言、右近衛大將陸奥出羽

子は其逆謀を知らずしておはすめれごさなり
○廢坊人等、春宮坊に屬する人等なり
○京外仁、仁は諸本之に作る
○藏人所、職原抄に嵯峨天皇御宇弘仁年中初置之、擬異朝侍中內侍等職歟、彼侍中最爲重任、內侍者宦者之任也、或有卑之代、或有貴之時云々さあり
○(注)珠總袋、原本總を縄に作る今紀略に據る、珠總袋は珠を貫き總さしたる紐を附けたる袋ならむ
○(注)帛袋、紀略には錦袋さあり
○東宮帶刀舍人、原本宮を官に作る前本宮本等に據て改む
○藤原朝臣富士麻呂並、此九字宮本に據て補ふ、嘉祥三年二月乙丑條參考すべし
○行縄、原本行綱に作る諸本に據て改む
○右衛門陣庭、拾芥抄中末に宜秋門西面三間云云、右衛門陣さあり
○春宮坊、坊字は諸本に

按察使如故、正三位源朝臣信爲中納言、左衛門督如故、正四位下源朝臣弘、從四位上滋野朝臣貞主、並爲參議、從五位上永原朝臣門繼爲縫殿頭、從五位下橘朝臣海雄爲刑部少輔、藤原朝臣行縄爲大藏少輔、正五位下藤原朝臣富士麻呂爲右近衛中將、從五位下坂上大宿禰廣雄爲少將、從四位上藤原朝臣助爲右衛門督、從四位下藤原朝臣長良爲左兵衛督、從五位下坂上大宿禰當宗爲權佐、從四位下坂上大宿禰淨野爲右兵衛督、從五位下佐伯宿禰宮成爲權佐、從五位下藤原朝臣勢多雄爲左馬頭、正五位下藤原朝臣春津爲右馬頭、○戊午、廿六集廢坊諸人等於右衛門陣庭、詔曰、今詔久、不慮外爾太上天皇崩賜比奴、此隙爾乘天、春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊、與橘逸勢合力天、國家乎傾亡止謀禮利、搜求事理爾、於皇太子天無所避之、因茲皇太子乎波其位廢退給不已止畢奴、相隨人等其罪不輕、理須法乃隨爾罪之給倍之、然而御心有所思行天奈毛、殊寬免給止之天、坊司幷品官乃佐官以上、及侍人藏人諸近仕者

據て補ふ
○品官、位階の相當ある官を云
○所乃長、原本所を司に作る諸本に據て改む
○乎乃巳、巳原本三に訛れるを改む
○仕津禮、津は諸本川に作る
○本主、廢太子を云
○不得之、纂詁に之字恐衍さ云り
○亮從五位下、十四年二月丙子紀下を上に作る
○治部少丞正八位上、八は恐くは六の訛なるべし

等、又所乃長以上乎波、皆流罪爾當給不、就中爾、自先有官留人乎波、皆配所乃員外官爾任給不、但品官乃判官以下波不在任限、又官無支人等乎波、絕蔭除位天流罪爾當給倍之、然而殊慈給止志天奈毛、其身乎乃巳流太万布、自餘乃屬仕者乎波、咸寬免給不、自今以後波、改心天公爾仕津禮、本主爾往仕己度波不得之、若猶屬仕者法乃隨爾重久罪之給波牟止宣御命乎、衆聞食與止宣、以大進從五位下藤原朝臣高直爲駿河權介、大屬正六位上山口宿禰稻床爲安房權目、左京大進正六位上紀朝臣貞嗣爲上總權掾、少進正六位上橘朝臣末茂爲飛彈權守、內舍人正七位上紀朝臣春常爲下野權掾、主殿助正六位上橘朝臣清蔭爲加賀權掾、主馬首正六位下坂上大宿禰新繼爲能登權掾、民部大丞正六位上藤原朝臣岑人爲越中權掾、亮從五位下藤原朝臣貞守爲越後權守、少進正六位上藤原朝臣貞庭爲佐渡權掾、治部少丞正八位上藤原朝臣安成爲丹後權掾、少屬正六位下朝野宿禰清雄爲權目、兵部少丞正七位上藤原朝臣正岑

○善繩、原本繩を綱に作る諸本に據て改む
○繩足、原本繩を綱に作る諸本に據て改む
○舍人正正六位上、原本正の一字を脫す諸本に據て補ふ
○壹伎權守、原本伎を岐に作る閣本尾本前本に據て改む
○防援、獄令に凡徒流囚在役者囚一人兩人防援とあり罪人の逃亡を防ぐ爲に附する看守人を云
(八月)土左權掾、原本左を佐に作る諸本に據て改む

爲因幡權掾、大進從五位下藤原朝臣近主爲伯耆權介、少納言從五位下藤原朝臣秋常爲石見權守、學士從四位下善道朝臣眞貞爲備後權守、刑部少輔從五位下藤原朝臣正世爲安藝權介、學士從五位上春澄宿禰善繩爲周防權守、民部少丞正六位上紀朝臣永直爲伊豫權掾、少屬正六位上滋原宿禰道成爲肥前權少目、肥後介從五位下橘朝臣眞直爲筑後權介、少判事正七位上丹墀眞人時永爲豐前權掾、主藏正正七位上坂上大宿禰當岑爲豐後權掾、勘解由使判官正六位上藤原朝臣粟作爲日向權掾、主殿首正六位下淡海眞人豐守爲大隅權掾、主膳正正六位上丹墀眞人繩足爲薩摩權掾、舍人正正六位上廣根王爲壹伎權守、主工首正六位上上毛野朝臣貞繼爲對馬權守、殿上雜色及帶刀品官六位已下、相連被配流者惣六十餘人、同附防援發遣于諸道焉、

○庚申、廿八罪人橘逸勢、除本姓、賜非人姓、流於伊豆國、伴健岑流於隱岐國、

○八月壬戌朔、改上總權掾正六位上紀朝臣貞嗣爲尾張權掾、改對馬權守正六位上上毛野朝臣貞繼爲土左權掾、左大臣正二位藤原朝

○周固本枝、毛詩大雅文王章に文王孫子本支百世と見え周の文王始めて天下に君となるや嫡子を天子とし庶子を諸侯に封じ嫡庶共に百世までも繁榮すべく制度を建てたるを云

○重離之業、易離卦の象傳に明兩作離大人以繼明照于四方とあるに據りて儲位を重離と云離卦は上下共に離なる故重離と云

○漢啓磐石云々、漢書文帝紀に高帝王子弟地犬牙相制所謂磐石之宗也とあるに據れり少陽は文選顏延之曲水詩序注に東宮也と云り

○三善守器云々、禮記文王世子に行一物而三善皆得者唯世子而已、注に三善謂父子之道君臣之義長幼之節とあり三善守器云々は儲君よく其位を守れば國家隆昌なりとなり

○四學宣風云々、禮記祭儀に天子設四學當入學而大子齒、疏に設四代之學當入學之時而大子齒於國人とあり太子よく學問を修むれば天下

臣緒嗣、右大臣從二位源朝臣常已下十二人上表言、周固本枝、寔資重離之業、漢啓磐石、必建少陽之宮、是以三善守器、承祧之則克隆、四學宣風、貞國之規方遠、頃者昊穹降禍、太上皇帝昇遐、山陵未乾、逆臣謀亂、推究由緒、事屬儲闈、皆賴聖明、並羅憲網、方今上嗣佇賢、前星虛位、其皇太子者、國之元基、不可暫曠、監推惟重、審諭所歸、伏望、具擧彝章、早立明兩、臣等不勝區區之至、謹上表以聞、○癸亥、詔曰、廼者遭家不造、慘結兢惶、劒舃纔存、橋山之慕彌切、天地改色、諒闇之居弗寧、而凶耶扇惑、將行不軌、宗祏降祐、覺露伏辜、事屬震宮、洊雷失耀、今群公以斷金之誠、致立嗣之請、趣由憲章、非可謙拒、然而周建季歷、木運于斯克昌、漢黜臨江、炎政藉之延祚、朕之非薄、無子賢明、宜擇神授之英徽、立玄鑒之韶遠、展也大成、則所望矣、○乙丑、公卿重上表、言應任天下之望、早立儲貳之狀、因循故事、輕用上聞、陛下遠布謙光、未定所請、特降明詔、更使疇咨、臣等道謝博聞、職忝端揆、何能對揚帝系、匡贊皇圖、但周家季歷、漢室臨江、事據權時、非必通典、其樹嫡以長、曠古之徽猷、立子以尊、先王之茂實也、今者皇子

自ら治まるべしとなり貞國とは尙書太甲に一人元良萬邦以貞とあるに據れり
○儲闈、皇太子を云、闈は原本圍に作る閣本前本に據て改む
○憲綱、法綱と云に同じ原本憲を愚に作る閣本西本谷本に據て改む
○上嗣佇賢前星虛位、上嗣は太子を云前星亦同じ漢書五行志に必大星天王也其前星太子也後星庶子也とあり皇太子廢せられ給ひて其位の虛しきを云原本星を皇に虛を唐に作る尾本前本谷本に據て改む
○惟重、原本惟を撫に作る西本水戶校本に據て改む
○彝章、常典なり、原本彝を尋に作る諸本に據て改む
○明兩、易離卦の象傳に出づ原本兩を嗣に作る諸本に據て改む
○區々、漢書師古注に區々謂小也とあり
○遺家不造、毛詩周頌閔予小子章に閔予小子遭家不造とあるに據れり造は成也

道康(文徳)親王、系當正統、性在溫恭、率土宅心、群后歸美、豈弃震方之元長、擇蕃屛之諸王、伏願、准的舊儀、立爲太子、不勝丹款之至、謹重上表以聞、是日立皇太子、詔曰、天皇詔旨勅命乎、親王諸王諸臣百官人等天下公民衆聞食止宣、隨法爾可有岐政止志天、道康親王乎立而、皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎、衆聞食宣、以右大臣從二位源朝臣常爲皇太子傅、左近衞大將如故、參議從四位下安倍朝臣安仁爲春宮大夫、從五位上藤原朝臣諸成爲亮、正五位下小野朝臣篁爲學士、是日、解警衞內裏、及固兵庫之陣、遣中使告於柏原山(桓武)陵曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏岐柏原乃山陵爾申之賜倍止申久、頃者、東宮帶刀舍人伴健岑、與橘逸勢、惡心乎挾懷天、國家乎傾牟止謀禮利、掛畏支山陵乃厚顧爾依天、其事發覺奴、事迹乎搜爾、緣皇太子、因玆皇太子位乎停退許止畢奴、食國乃隨法爾可有岐政止之天、道康親王乎立天、皇太子止定賜不、此狀乎參議從三位兼越中守朝野宿禰鹿取、散位頭正五位下楠野王

○劔舄纔存云々、列仙傳に軒轅自擇凶日與群臣辭還葬橋山、山崩棺空唯有劔舄在棺焉（史記正義所引）とあり、劔舄は原本歛寫に作る閣本前本谷本等に據て改む
○凶耶扇惑云々、今回のことを云軌は法也耶は邪に通じ用ふ
○宗祏降祐、祏は宗廟の木主を藏むる石室なり原本祏を祐に作る水戸校本に據て改む宮本には社に作る狩谷校本に祐祐歟と云り
○事屬震宮云々、震は原本宸に作る諸本に據て改む、震宮洊雷共に易に出で東宮を云
○斷金之誠、易繫辭傳に二人同心其利斷金とあり
○周建季歷云々、史記周本紀に古公亶父有長子曰太伯、次曰虞仲、太姜生少子季歷、太伯虞仲乃亡如荊蠻以讓季歷（節略）又周以木德王とあるに據れり
○漢黜臨江云々、漢書景帝紀に七年廢皇太子榮爲臨江王とあり炎政は

等乎差使天、恐美恐美毛申賜久止申。○壬申、以從五位下朝野宿禰貞吉爲中務少輔、從五位下橘朝臣宗雄、從五位下藤原朝臣岑雄並爲侍從、正五位下小野朝臣篁爲兼式部少輔、東宮學士如故、從四位下茂世王爲大學頭、從五位下廣宗宿禰糸繼爲玄蕃頭、大納言正三位藤原朝臣良房爲兼民部卿、右近衛大將陸奥出羽按察使如故、從五位下橘朝臣海雄爲兵部少輔、從四位上橘朝臣氏人爲刑部卿、尾張守如故、正四位下平朝臣高棟爲大藏卿、從五位下藤原朝臣末繼爲大炊頭、巨勢朝臣康則爲造酒正、從四位上源朝臣明爲左京大夫、從五位下橘朝臣數道爲右衛門權佐、從四位下田口朝臣佐波主爲兼武藏守、右京大夫如故、從四位下藤原朝臣貞主爲近江權守、從五位下下毛野朝臣文繼爲信濃介、從五位下藤原朝臣大津爲陸奥守、從五位下久賀朝臣三夏爲丹後守、外從五位下菅原朝臣梶吉爲兼肥後介、侍醫如故。勅、今茲百穀生長、未期收藏、不豫祈禱、何防非常、宜奉幣於伊勢大神宮、攘災未萌、必致豐稔。○甲戌、遣參議正躬王、送廢太子於淳和院、備前守從四位上紀朝

漢火德を以て王たるより云り
○英徽、原本徽を徵に作る諸本に據て改む
○玄鑒、玄字は閣本前本に據て補ふ
○展也大成、毛詩小雅車攻章に出づ箋に展誠也大成謂致太平也とあり
○乙丑、此條原本甲戌の次にあり干支を推して此に移す
○應任、應は原本無に作る纂詁に據て改む
○因循、循は原本脩に作る諸本に據て改む
○陛下、閣本宮本階下に作る
○疇咨、尙書堯典に疇咨若時、注に疇誰也とあり適當なる人物を求むるを云
○職忝端揆、端揆は上に出づ、原本職を識に作る閣本前本谷本に據て改む
○對揚帝系、對揚は尙書說命に敢對揚天子之休命とあるに據れり原本揚下に尋求の二字あり諸本に據て削る
○群后、公卿を云
○豈弃震方之元長云々、易に震を長子の卦とす卽ち長男を云蕃は藩に通す

臣長江、自院逢迎、其儀駕小車出禁中、到神泉艮角、駕牛車、先是童謠曰、天爾波琵琶乎曾打那留、玉兒牽裾乃坊爾、牛車波善氣牟夜、辛苣乃小苣之華、有識咸言、童謠不虛、于今驗之矣、○十四乙亥、地震、○十五丙子、大宰大貳從四位上藤原朝臣衞、上奏四條起請、一曰、新羅朝貢、其來尙矣、而起自聖武皇帝之代、迄于聖朝、不用舊例、常懷姧心、苞茅不貢、寄事商賈、窺國消息、方今民窮食乏、若有不虞、何用防夭、望請、新羅國人、一切禁斷、不入境內、報曰、德澤洎遠、外蕃歸化、專禁入境、事似不仁、宜比于流來、充粮放還、商賈之輩、飛帆來著、所賚之物、任聽民間、令得廻易、了速放却、二曰、交替務了、未得解由五位之徒、寄事格旨、留住管內、常好農商、侵漁百姓、巧爲姧利之謀、未覩塡納之物、望請、交替了吏、早從入京、報曰、依請許之、但勘修不與解由之日、欠負官物、灼然令塡、見贓在身、奪令塡償、其所塡之物、具錄言上、三曰、府多官舍、破損不少、例用浪人、常勤修理、而比年多依官符、被充他用、望請、一切不寄他所、將役府國修理、依請許之、四曰、邊要之地、爲有警虞、延曆年中、特立制文、不許開田、而比年頗有墾開之事、望

請依延暦三年四月廿六日符、一從停止、許之、〇乙酉、大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房抗表言、臣禀性愚蒙、聲華寂寞、陛下陳席不弃、放劒無遺、遂先時髦、頻登淸顯、未堪一職、兼帶四官、臣感先花之早零、悼前咲之後號、恐高明之瞰鬼、戒寵祿之過量、伏靑蒲而上陳、仰丹闕而懇訴、天未從願、震灼戰兢、龜組之華、則非飾身之地、蟬佩之暎、誠是焦心之機、譬猶以虎豹之文、被犬羊之質、自知不可、誰曰其宜、加之、陸奥國新任守從五位下藤原朝臣大津、此良房之叔父也、雖皇家舊儀無有明制、而遂撿行事、不異同官、嫌疑之間、實所可避、又三官以上、有司執聞、蓋忌榮聚一門、寵歸一己、伏願、停兼外秩、守拙内官、然則抜韜略於朝彥、止沸騰於輿人、無任悃欵之至、謹奉表以聞、不許之、〇戊子、詔曰、百城煙峙、振綱紀者歸乎牧、千里風行、班章條者待乎宰、是以懸衡御弁、握鏡臨圖、欲廣雍熙之功、必資循良之吏、朕以虛寡、懋惟帝績、割珪符以責成、分憂之職攸憑、紆銅墨以推寂、求瘼之寄斯在、而朝章難副、國憲易纏、躬不率正、私顧之謗滋興、職乖恪居、公方之節已墜、單

藩屏なり震は原本宸に作る前本に據て改む
〇皇太子止、止は諸本に據て補ふ
〇遣中使云々、紀略には一條にして甲戌に係く
〇中賜久止申、久は原本奴に作り諸本又に作るは久の訛なれば改む
〇巨勢朝臣康則、纂詁は巨上に從五位下の四字を加ふ
〇橘朝臣轍道、閣本前本等橘字缺く
〇送廢太子於淳和院、廢太子恒貞親王の傳は元慶八年九月丁丑紀に見ゆ
〇牛車、親王攝關等地高き人の使用する車なるが之に乘て宮門を出入することは宣旨を以て許されし故に禁中を出づる際には小車を用ひ神泉苑の附近に至て牛車に改められしなるべし
〇童謠曰云々、打さは琴の類を彈するを古は打つと云しなるべし、玉兒は若き宮人等を賛めて玉に譬へしならむ牟裾乃坊爾は美麗しき兒等が裾引て往き通ふ町にと云るなるべし裾は原本枯に作り諸

父之民、未感絃歌、淸河之吏、屢陷徽纆、劾狀盈閣已洽、斷文載車不勝、近緣大行天皇聖躬不豫、敷暢鴻恩、洗滌塵穢、而有司執奏、不在赦限、朕悲夫春枯之樹、雷蟄之蟲、或身歸農野、撫華髮而惕慮、或志在名節、望榮路而絕恩、此之可愍、畜于素懷、宜承和九年八月廿七日以前、外吏秩滿、未得解由者、已言上未言上、咸悉原免、未言上輩、所有欠負、并自借判署之類、後司據實、造會赦帳、前後官司共署言上、及未請返抄者、亦同令弁申、且專宥前人、還累後吏、論之治道、誠非平適、其承和二年以往雜米雜穀、及五年以往雜交易等之未進、並皆停留、莫責輸貢、但其本物、隨色撿納、國司實錄、別自言上、朕聞於舊時、訪之遺塵、恩雖無涯、赦亦有限、而今日之所行、先王可不放、既不依祖業、豈須貽孫謀、後代之論者、亦將知乎此、誠念欲令一躓之驪、更展足於長途、再汙之婦復無心於佳會、○己丑廿八、以從五位下永原朝臣末繼爲神祇大副、云云、○庚寅廿九、大宰府言、豐後國言、前介正六位上中井王、私宅在日田郡、及私營田在諸郡、任意打損郡司百姓、因茲吏民騷動、未遑安心、又本自浮宕筑後、肥後等國、威陵百姓、妨

本括に作れど三代實錄に玉兒引裾坊とあるに據て改む、辛苣乃小苣之華、苣は抄菜蔬部に苣孟詵食經云白苣（和名知散漢語抄用萵苣二字）寒、補筋力者也とあり一首の意は天卽ち大殿には琵琶打鳴らし樂を奏し酒宴などある中に廢太子の禁中より出賜ひて宮人の裾引往き通ふ坊の道を牛車にめして淳和院に遷らせ給ふは豈心よからむや實に淺ましく辛きことぞと云なるべし

○四條起請、一は三代格十八に二は同五貞觀九年十一月並承和十五年五月格中に出づ

○苞茅、字書に卽菁苞草名古以爲苞裹とあり卽ち贈物を云

○防天、天は原本之に作り宮本水戸校本及類史支に作る今諸本に據て改む天に災也

○爾貫之鞿、原本貫を買に作る諸本及類史に據て改む

○來著、原本著を者に作る類史に據て改む

○交替了吏、宮本吏を使に作る山崎校本も使に作

農奪業、爲蠹良深、中井尚欲入部徵舊年未進、兼徵私物、而調庸未進之代、便上私物、倍取其利、望請、准據延曆十六年四月廿九日格旨、令還本云、太政官處分、罪會去七月十七日恩赦、宜身還本鄉、

り下旬に屬せしむ　○不與解由之日、原本日を由に作る閣本前本中本及類史に據て改む　○塡償、原本償を價に作る諸本及類史に據て改む　○延曆三年云々符、續紀及三代格に載せず　○大納言正三位、原本三を二に作る上文正月壬寅紀及嘉祥二年正月壬戌、同四年十一月乙亥紀に據て改む　○聲華寂寞、名聲の揚らぬを云　○陳席不弃放劍無遺、放は故の訛なるべし故劍は前に注す遺は原本遺に作る諸本に據て改む此二句梁陸倕の文に出づ　○時髦、當時の俊秀を云　○感先花之早零云々、內經に夫木之蚤華先生葉者遇春霜烈風則花落而葉萎とあり易旅卦の上九に旅人先笑後號咷とあるに據れり號は號泣也　○高明之瞰鬼、漢書揚雄傳に高明之家鬼瞰其室と見ゆ　○青蒲、漢書史丹傳注に以青規地曰青蒲自非皇后不得至此とあり天子の御傍近くを云　○震灼戰兢、並に畏懼の貌　○龜組之華、龜組は印綬なり　○蟬佩之歎、蟬は貂蟬冠、佩は佩玉にて衣冠の意歎は映に同じ　○猶以虎豹之文云々、揚子法言吾子篇に羊質而虎皮見草而說見豺而戰とあり　○嫌疑之間、原本間を門に作る諸本に據て改む陸奧按察使と陸奧國守と行事相類するを云選叙令に凡同司主典以上不得用三等以上親とあり按察使と國司は別司なれど尙ほまぎらはしとなり　○外秩、按察使を云　○拔韜略於朝彥、韜略は軍務に通じたる人此にては按察使の適任者を云朝彥は在朝の俊髦なり　○止沸騰於輿人、沸騰は物議輿人は衆人なり止は原本上に作る諸本に據て改む　○戊子詔曰、百城煙峙以下無心於佳會に至るまで諸本云々として之を略す今類史八十六に據て之を補ふ　○百城煙峙云々、百城煙峙は王勃の乾元殿頌に見ゆ千里風行は德化の風の如くに行くを云綱紀を張り國法を遵守せしむるは牧宰卽ち國司郡領の力に待つとなり　○縣衡御弁云々、縣衡は文選顏延年曲水詩注に申子曰君必有明法正義若懸權衡以稱輕重所以一群臣也とあり弁は冠なり　○欲廣雍熙之功、人民をして和樂悅服せしむとするにはとなり　○割珪符云々、說文に圭又作珪瑞玉也以封諸侯とあり符は割符を云共に諸侯を封ずる證信とするもの成は成功なり分憂之職は地方官を云既に注せり　○紆銅墨云々、銅墨は北史魏文帝紀に詔刺史二千石銅墨已上云々とあり銅印墨綬の略にて地方官の印綬なり最は後漢書百官志考殿最の注に不稱職者爲殿其有治能者爲最とあり求瘼は南史循吏傳序に梁武踐皇極躬覽庶事日昃聽政求瘼卹隱とあるに據れり上句と共に地方官に對し官位秩祿を盛にして治績の優良を求むるは國政上重要なる職責なりとなり　○率正、眞率正直なり　○私顧、自己の利を計るを云　○恪居、官職を恪しみ守るなり　○公方、公明方正なり　○單父之民云々、說苑政理篇に宓子賤治單父彈鳴琴身不下堂而單父治とあり　○清河之吏云々、清河は漢の郡名、徽纆の纆は纏の誤なるべし說文に三股曰徽兩股曰纆皆索名とあり囚を繫ぐ繩なり此故事未だ考へず　○劾狀云々、彈劾狀は閣に滿ち斷罪文は車に載せ得ざる程に多く地方官吏の罪を鳴らせりとなり　○夫春枯之樹云々、赦に漏れたる人々を云其人々或は農夫として餘生を終り或は尙名節を磨きて榮達を希望すと雖空しく望を懷くのみにて惕れ悲しめりとなり　○欠負并自借判署、欠負并の三字は類史闕く三代格に據て補ふ自借判署は自ら借りて判署するを云　○論之治道云々、道誠の二字類史闕く三代格に據て補ふ　○雜交易等之未進、之未の二字三代格に據て補ふ　○一顚之驪、驪は三代格驥に作る是なるが如し　○再汙之婦、此後再び罪を重ねたるものには僥倖を斷念せしむとなり　○大副云云、云云の二字は諸本に據て補ふ　○日田郡、原本田を向に作る尾本に據て改む日田郡は民部式に日田とあり倭名抄には日高とす　○未進之代、之字は諸本に據て補ふ　○延曆十六年四月廿九日格、三代格十二齊衡二年六月廿五日格中に見ゆ　○令還本云、纂詁龍野本に據れりとて云を土に改む

(九月)逸勢云々身死、嘉祥三年五月壬辰紀に承和九年逸勢配流伊豆、行到遠江國板築驛、終于逆旅、便葬驛下とこ見ゆ
○孰恃、原本恃を特に作る諸本に據て改む
○悲一物失所、諸本物下に云云の二字あり
○太上天皇、原本太を天に作る諸本に據て改む
○檀林寺、嵯峨にあり今の天龍寺は其址なり
○三史、史記・漢書・後漢書を云
○融爲近江守、水戶校本に拔公卿補任源融是年任近江權守、十四年爲眞、此恐脫權字こと云
○秀良親王、原本秀を季に作る宮本及紹運錄に據て改む
○爲上野太守、本年正月戊申紀にも見ゆ何れか誤あるべし
○寛爲加賀守、六年正月甲子紀に旣に見ゆ貞觀十八年五月廿七日條に拜加賀守、頃之遷阿波守とあるに據れば其後更に加賀守に任ぜられしにや
○智夫郡、民部式に知夫とあり

○九月壬辰朔甲午、勅、配流伊豆國罪人非人逸勢孫珍令、年在幼少、未習活計、而逸勢以去月十三日身死、孰恃孰憑、雖罪人之苗胤、猶悲一物失所、宜更追還令就舊閭、○乙未、修太上天皇七七御齋於檀林寺、○丙申、勅令相摸、武藏、常陸、上野、下野、陸奧等國寫進三史、○己亥、以正四位下源朝臣融爲近江守、二品秀良親王爲上野太守、從四位上源朝臣寛爲加賀守、從四位上源朝臣明爲兼播磨守、左京大夫如故、散事從三位百濟王惠信薨、○壬寅、遣散位從五位下雄豐王、神祇少副從五位下大中臣朝臣礒守等、奉幣於伊勢大神宮、例也、○乙巳、隱岐國智夫郡由良比賣命神、海部郡宇受加命神、穩地郡水若酢命神、並預官社、○辛亥、勅、去四月四日御卜曰、來年春夏間、可有疫氣、宜奉幣於伊勢大神宮、兼奠幣於天下名神、防災於未然、○戊午、冷然院大垣西北角、無故頽壞二許丈、○冬十月辛酉朔壬戌、奉授安房國從五位下安房大神正五位下、无位第一后神天比理刀咩命神、信濃國无位健御名方富命、前八坂刀賣神、阿波國无位葦稻葉神、越後國无位伊夜比古神、常陸國无位筑波女

大神、並從五位下、○[四]甲子、以從五位下藤原朝臣勢多雄爲右少弁、云云、○[九]己巳、奉授和泉國從五位下大鳥神從五位上、无位穴師神、无位積川神、並從五位下、○[十三]癸酉、烏入外記廳、咋破大納言座、○[十四]甲戌、勅左右京職東西悲田並給料物、令燒斂嶋田及鴨河原等髑髏、惣五千五百餘頭、○[十五]乙亥、但馬國氣多郡山神、雷神、戶神、蜀椒神、城埼郡海神等五前、並預官社、○[十七]丁丑、文章博士從三位菅原朝臣清公薨、故遠江介從五位下古人之第四子也、父古人儒行高世、不與人同、家無餘財、諸兒寒苦、清公年少、略涉經史、延曆三年、詔令陪東宮、弱冠奉試、補文章生、學業優長、擧秀才、十七年對策登科、除大學少允、廿一年任遣唐判官、兼近江權掾、廿三年七月、渡海到唐、與大使俱謁天子(德宗)、得蒙顧眄、廿四年七月歸朝、叙從五位下、轉大學助、大同元年、任尾張介、不用刑罰、施劉寬之治、弘仁三年秩滿入京、補左京亮、遷大學頭、四年任主殿頭、五年拜右少辨、轉左少弁、迁式部少輔、七年加從五位上、兼阿波守、九年有詔書、天下儀式、男女衣服、皆依唐法、五位已上位記、改從漢樣、諸宮殿院堂門閣、皆著新額、又肄百官

○由良比賣命神、神名式隱伎國知夫郡由良比女神社(名神大元名和多須神)浦郷に浦郷
○海部郡、郡字は尾本宮本に據て補ふ
○宇受加命神、神名式同國海部郡宇受加命神社(名神大)海士郡海士村宇受賀
○水若酢命神、同式同國穩地郡水若酢命神社(名神大)五箇村大町にあり國幣小社に列す、酢は原本咋に作る諸本に據て改め神字は宮本に據て補ふ
○去四月四日御卜曰云々、四月紀に此事を載せず
○防灾、灾は原本失に作る諸本及類史に據て改む
(十月)冬十月、冬字は宮本に據て補ふ
○安房大神、三年七月甲申紀に見ゆ
○后神天比理刀咩命神、神名式安房國安房郡后神天比理乃咩命神社(大元名洲神)所在洲崎村或は洲宮なりとも云
○健御名方富命、五月丁未紀に見ゆ
○八坂刀賣神、諏訪の后神に坐す

○葉稻葉神、式外の神板野郡大山村神宅、葦は原本葦に作る閣本尾本宮本等に據て改む
○伊夜比古神、神名式越後國蒲原郡伊夜比古神社(名神大)西蒲原郡彌彦村に祀り國幣中社に列す
○筑波女大神、同式常陸國筑波郡筑波山神社二座(一名神大・一小)同郡筑波町に祀る祭神二座は筑波男神筑波女神なり
○右少弁云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
○大鳥神、神名式和泉國大鳥郡大鳥神社(名神大、月次新嘗)今泉北郡鳳村大鳥、官幣大社に列す
○穴師神、同式和泉國和泉郡泉穴師神社二座、今泉北郡穴師村豐中、穴は原本六に作る宮本及神名帳に據て改む
○積川神、同式同國同郡積川神社五座今泉南郡山直上村積川
○鳥、原本島に作る閣本西本に據て改む
○悲田、悲田院の事天長十年五月丁酉紀(一八頁)に出づ參看すべし
○嶋田、久世郡嶋田村あり是か

舞踏、如此朝儀、並得闘説、十年正月、加正五位下、兼文章博士、侍讀文選、兼參集議之事、十二年叙從四位下、轉式部大輔、尋任左中弁、有不適意、求遷右京大夫、上從容問京職大夫官品、淸公朝臣對曰、正五位官、卽日改爲從四位官、左亦同之、十四年除彈正大弼、天長元年、出爲播磨權守、不異左貶、時人憂之、二年八月、公卿議奏、國之元老、不合遠離、更使入都、兼文章博士、三年三月、亦遷彈正大弼、兼信濃守、復轉左京大夫、文章博士如故、八年正月授正四位下、承和二年兼但馬權守、侍讀後漢書、六年正月叙從三位、老病羸弱、行步多艱、勅聽乘牛車到南大庭梨樹底、斯乃稽古之力、非徇求所致、其後託病、漸絶入內、仁而愛物、不好殺伐、造像寫經、以此爲勤、恒服名藥、容顏不衰、薨時年七十三、○庚辰、西市司言、依承和二年九月符旨、錦綾、絹、調布、絲、綿、紵、染物、縫衣、續麻、針、櫛、染革、帶幡、油、土器、絹冠、牛塵等類、與販於西市、而東市司論云、撿承和七年四月符、依弘仁十一年四月式、件等色物、兩市共可興販、不可更度、今百姓悉遷於東、交易件物、仍市廛既空、公事闕怠者、去承和二年、彼此中折、施行既訖、而

承和七年四月、班式之日、遺漏不改、勅、宜依前格、不可據式、○壬午、彈正尹三品阿保親王薨、遣從四位上藤原朝臣助、從四位下田口朝臣佐波主、從五位下藤原朝臣宗成、從五位下路眞人永名等、監護喪事、葬日遣參議從四位上和氣朝臣眞綱等、贈位曰、天皇大命良万止、阿保親王爾宣久、徃者逆人結黨天、不善留事謀利、而乎親王乃至誠有天、白顯留爾依氐、伏罪天國家不亂奈理爾太里、依此氐、伊都志賀參入坐牟冠位上賜牟止念行支、而間爾、不慮外爾、忽爾朕我朝廷乎置天罷坐奴止聞食天奈毛、驚賜比悔賜比哀賜比都都大坐、然毛治賜比授奉牟止所念之位止爲天奈毛、一品贈賜比治賜布、又遺留禮留親母并子等乎毛殊矜治賜牟、罷坐留道間波、平久幸久宇志呂毛輕久罷坐止詔不天皇我大命乎宣、親王者、皇統彌照天皇(桓武)之孫、而天推國高彦天皇(平城)之第一皇子也、母葛井氏(藤子)焉、大同之季、天皇禪國於皇太弟(嵯峨)、遷御平城宮、弘仁元年、太上天皇心悔、而有入東之謀、親王坐此倉卒之變、出大宰員外帥、經廿餘年、至天長之初、特有恩詔、令得入京、稍歷治部兵部卿彈正尹、兼上野上總等太守、親王素性謙退、才兼文武、有

○山神、神名式但馬國氣多郡山神社(名神大)今城崎郡八條村佐野
○雷神、同式同國同郡雷神社(名神大)今城崎郡八條村佐野
○戸神、同式同國同郡戸神社(名神大)今城崎郡清瀧村十戸
○蜀椒神、同式同國同郡欟椒神社(名神大)今城崎郡三椒村欟
○海神、同式同國城埼郡海神社(名神大)同郡港村小嶋
○古人、菅原氏系圖に遠江介侍讀天平元年賜菅原姓、弘仁十年正月十日卒とあり
○東宮、廢太子早良親王
○秀才、選叙令及學令に見ゆ
○劉寛之治、後漢書劉寛傳に劉寛桓帝時遷南陽大守、温仁多恕、雖在倉卒、未嘗疾言遽色、吏人有過、但用蒲鞭罰之、示辱而已とあり、劉は原本刈に作る宮本に據て改む
○天下儀式云々、皆依唐法、紀略に弘仁九年三月丙午、其朝會之禮及常所服者、又卑逢貴而跪等、不論男女、改依唐法、云々

膂力一、妙二絃歌一、春秋五十一而薨也、○癸未[廿三]、太政官充二義倉物於悲田一、令ㇾ聚二
葬鴨河髑髏一、

さあり　○諸宮殿云々、其名稱は二中歴拾芥抄大内裏圖考證等に見ゆ　○如此、原本此を故に作る尾本前本谷本等に據て改む　○闕說、闕は通也　○文選、梁昭明太子選三十卷　○兼參集議之事、原本議を謹に作り之字なし議は宮本に據り之字は諸本に據て補ふ　○従容、原本容を客に作る中本に據て改む　○京職大夫官品、京職大夫正五位上の官たりしを從四位下に改めし事弘仁十三年正月廿六日なり三代格五及類史百七に見ゆ　○三月亦、亦恐復さ山崎校本に云　○侍讀後漢書、二年七月丁巳紀に見ゆ　○多艱、多は原本無に作り山崎校本有に作り水戸校本當ㇾ作ㇾ甚さ云今姑く纂詁に據る　○牛車、原本車を馬に作る宮本に據て改む　○稽古、稽は考也古道を稽考するを云　○徇求、字書に徇與ㇾ徇通行示也さあり自ら求めて獲しにあらすさなり　○承和二年九月符、格に見えす　○染革、類史及延喜式革を草に作る　○牛塵、原本塵を壓に作る尾本に據て改む　○興販、賣買するを云興は水戸校本典に作る下同じ　○前格、二年の格、○不可據式、七年の式　○阿保親王、平城天皇の皇子に坐す　○佐波主、原本波を渡に作る閣本宮本及上文に據て改む　○従五位下藤原朝臣宗成、七年五月癸未紀に從五位上さす　○闕食天奈毛、食は原本念に作る閣本前本宮本に據て改む　○哀賜比都都、哀賜比の三字西本尾本前本に據て補ふ　○親母井子等云々、親王に四王あり仲平行平業平守平なり並に在原の姓を賜ふ　○葛井氏、名は藤子、正五位下葛井宿禰道依の女、後改めて蕃良朝臣の姓を賜ふ　○禪國、國疑位さ山崎氏云り　○兼上野上總等太守、兼は閣本尾本前本等に據て補ふ　○義倉、賦役令義解に分ㇾ富賑ㇾ貧其情合ㇾ義故曰二義倉一也さあり

○十一月辛卯朔、天皇不豫、○戊戌、以從五位下良岑朝臣長松一爲二侍從一、云云、三品仲野親王爲二彈正尹一、云云、勅制、講讀師以二己職一讓二他僧一者、令ㇾ終二前人之餘歷一、莫ㇾ更經二一任一、又同講讀師解任之後、未ㇾ經二六年一、即復補任者、取ㇾ歷一同、俗官六位之法、並去年以往被ㇾ任之輩、同准二此例一、自今以後、立爲二恒式一、○甲辰[十四]、地震、延二五十九僧於本宮禁中一、三箇日令ㇾ轉二讀大般若及金剛般若經一、爲ㇾ可二遷御一、先以鎭謝、○丁未[十七]、遷ㇾ自二冷然院一、御二于本宮一、○辛亥[廿一]、坤天雷聲、○乙卯[廿五]、讚岐國粟井神預二之名神一、○十二月辛酉朔、乙丑[五]、天皇

（十一月）爲侍從云々、云々の二字は諸本に據て補ふ　○爲彈正尹云云、云云の二字は諸本に據て補ふ　○恒式、原本恒を但に作る諸本に據て改む　○於本宮、於字は尾本前本及類史に據て補ふ　○遷自冷然院、遷御のこさ四月乙亥紀に見ゆ　○粟井神、神名式讃岐國苅田郡粟井神社(名神大)今三豐郡粟井村粟井、原本粟を栗に作る水戸校本に據て改む
（十二月）辛酉朔、朔字

○は諸本に據て補ふ
○始御紫宸殿、諒闇後始めて朝に臨ませ給ふなり
○淳和太皇后剔落、太皇后は皇太后とあるべきなり剔落は紀略剃落に作る
諱は正子嵯峨天皇の第二皇女に坐す陽成紀元慶三年三月癸丑條に承和七年五月淳和天皇崩皇太后落髮爲レ尼とあり此に記す所と二年の差あり
○才華、原本華を花に作る閣本前本及類史に據て改む
○諸司、恐くは誤あらむ
○有所干、干は犯なり
○發一問、問は原本門に作る閣本尾本前本に據て改む
○倶云、原本云を心に作る宮本及類史に據て改む
○去劇、劇は劇職なり
○豐永爲介云云、云云の二字諸本に據て補ふ
○朝野宿禰、本姓忍海原連なりしが承和二年二月庚辰改めて朝野宿禰の姓を賜はる
○襲津彦之後云云、云云の二字諸本に據て補ふ
○爲伊勢介、善主は去年閏九月甲子紀に伊勢權介より介に進みしこと見ゆ

始御紫宸殿、嵯峨太皇太后遷御于冷然院、淳和太皇后剔落入道、○戊辰、伯耆守從四位上笠朝臣梁麿卒、梁麿、弘仁二年叙從五位下、十二年正月加從五位上、十四年叙正五位下、天長三年任兵部大輔、遷民部大輔、八年正月授從四位下、承和之初、出爲丹波守、入補勘解由長官、五年加從四位上、雖無才華、以辨了稱、承和二年拜左中弁、此時諸司有秭本安永者、利口之人也、自憑口佞、屢有所干、官喚其身、詰問數矣、巧避百端、不曾諸伏、梁麿纔發一問、安永卷舌而退、同僚倶云、不及之遠焉、年老去劇、遙授伯耆守、六十五而終、○庚午、從五位下石川朝臣越智人爲兵部少輔、從五位下丹墀眞人貞岑爲刑部少輔、從五位下路眞人永名爲大判事、從五位下紀朝臣野長爲出雲守、外從五位下善世宿禰豐永爲介、云云、○壬申、地震、○癸酉、右京人參議從三位兼越中守勳六等朝野宿禰鹿取男女惣十九人、改宿禰賜朝臣、(孝元)國牽天皇三世孫、武內宿禰第六男、葛木襲津彦之後、云云、○甲戌、從五位下菅原朝臣善主爲伊勢介、○乙亥、坤角雷響、○丁丑、勅制、護持國家、利益群生、妙法最勝、尤居其先、

因レ茲自二去延暦年中一以降、一十二人分二配五宗一、使三之得度一、於レ是天台華嚴、分レ轡並馳、三論法相、擧レ翅競飛、演說者衆、諳案者寡、宜下承二前十二人之外一、妙法蓮華經、最勝王經諳誦之人、經別一人、每年聽レ度、隨レ業各入中近江國妙法寺幷寂勝寺上、夫試定者、始レ從二序品一、至二于竟軸一、咸令二諳讀一、若一句半偈不二分明一者、並爲二不第一、縱二業中無二及第者一、闕如待二後歲之能者一、自今以後、立爲二恒例一、○庚辰、獻二楯列山陵神寶一曰、天皇我詔旨良麻止、掛畏支神功皇后御陵爾申給閉止申久、御心爾念行須事有爾依天、御寶弓劍等設備天、吉日良辰乎擇天、參議從四位上式部大輔兼讃岐守滋野朝臣貞主乎差使天奉出、此狀乎聞食天、御心爾念行我如久爾、國家乎平久護賜比矜賜閉止、恐美恐美毛申賜久止申、

此に再び爲レ介とあるは疑はし
○去延暦年中、延暦二十五年(大同元年)正月辛卯紀(後紀七五頁)及三代格二に見ゆ
○三論、中論・百論・十二門論の三論によりて成る宗旨、印度に起りて支那に傳り隋の嘉祥大師吉藏に至て大成せる三論宗これなり、邦土へは推古天皇の卅三年高麗僧慧灌これを傳ふ、所謂宗旨として佛敎の我が國に傳來せしは此三論宗を以て嚆矢となす
○法相、唯識宗を謂ふ解深密經一切法相品に據て此宗名を立つ、本朝にては白雉四年元興寺の僧道昭入唐し玄奘に就て本宗を學び歸朝して弘めしを第一傳とす
○五宗、華嚴・天台・律・三論・法相の五宗を云ふ
○諳案者、三代格案を諳に作る類史は本紀に同じ
○十二人之外、之字は格に據て補ふ
○妙法寺并最勝寺、淸和紀貞觀九年六月戊子條に詔以二近江國滋賀郡比良山妙法最勝兩精舍一爲二官

寺とあり其址今同郡秈邇村粟原に最勝寺野あり又此に接して父母原白毫原と云ふあり妙法寺址ならむかと云
○二業、原本二を三に作る椿に據て改む二業は法華經及最勝王經なり
○念行我如久爾、我如の二字は宮本及類史三十六に據て補ふ
○恐美恐美毛、上の恐美の二字は尾本宮本に據て補ふ
○續日本後紀、紀は原本記に作る前本中本に據て改む

續日本後紀卷第十二

續日本後紀卷第十三

起承和十年正月盡十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

十年春正月庚寅朔、廢朝賀、諒闇也、甲午、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表乞骸骨、優詔不許之、散位從四位上伴宿禰友足卒、友足、延曆廿二年任內舍人、弘仁之初、除左衞門大尉、弘仁五年敍從五位下、拜右兵衞佐、天長六年兼加賀守、遷遠江守常陸介、十月任左衞門佐、十年授從四位下、友足爲人平直、不忤物情、頗有武藝、最好鷹犬、與百濟勝義王同時獵狩也、但其用心各不同耳、勝義王獲鹿不必分其肉、友足獻御贄、餘偏遺諸大夫、一臠不留、由是諸大夫之戲言、至閻樂王、縱以友足配惡趣、我等救之、必令脫出、謬以勝義赴淨刹、我等亦陳訴、擠墜泥黎、友足年六十六卒、自知屬纊之期、沐浴束帶、無病而終、有識異之、僉曰、生處可識之人也、○丁酉、皇太子參大極殿最勝會、但不擧音樂、以遏密之內也、勅、如聞、

○屬纊之期、禮記喪大記に屬纊以俟絶氣、注に纊今之新綿易動搖置口鼻之上以爲候とあり死期を云ふ
○生處可識、法華經に現世安穩後世生善處とあるを指して云
○過密、尙書舜典に遏密八音とあるに出づ諒闇を云
○夭死者衆、原本衆を多に作る宮本及類史に據て改む諸本無に作るは衆の訛なり
○名神等寺、名神祭に預る諸社に屬する神宮寺を云
○般若經、原本此下に丁酉上野國云々の廿六字あり下文丁酉條に重出す此を削て彼を存す
○上表云々、云々は表文を略したるなり紀略之を致仕に作る諸本にはなし
○安倍朝臣安正橘朝臣時枝、原本安正を甥麿、橘朝臣を齋部臣に作る閣本前本宮本及類史九十九に據て改む
○甥麿、原本麿を磨に作る宮本及類史に據て改む
○文雄、原本文を父に作る閣本前本宮本及類史に作る

疫癘間發、夭死者衆、加之、狂花發兮示不祥、宜始自來二月迄于九月、每八日令十五大寺、及七道諸國國分二寺、幷定額寺、名神等寺、講仁王般若經、○戊戌、左大臣藤原朝臣緒嗣重上表云云、勅猶不許、○庚子、授正六位上春枝王、外從五位下御輔朝臣眞男、正六位上藤原朝臣世數、安倍朝臣安正、橘朝臣時枝、常道眞人兄守、安倍朝臣甥麿、齋部宿禰木上、並從五位下、正六位上山田宿禰文雄、山代宿禰氏益、並外從五位下、皆欲遣治國及任要官、特所叙也、○辛丑、以從五位下紀朝臣野長爲少納言、從四位下豐江王爲中務大輔、從五位上長田王爲民部大輔、從五位下安倍朝臣甥麻呂爲主計頭、外從五位下多朝臣淨繼爲山城介、從四位上紀朝臣長江爲大和守、外從五位下山田宿禰文雄爲介、從五位上丹墀眞人門成爲河内守、從五位下有雄王爲攝津守、從五位下布瑠宿禰高貞爲伊賀守、正五位下長岑宿禰高名爲伊勢守、從五位下常道眞人兄守爲尾張介、從五位下丹墀眞人石雄爲駿河介、從五位下橘朝臣時枝爲甲斐守、從四位下藤原朝臣長良爲兼相摸權守、左兵衛督如故、

從五位下林朝臣常繼爲武藏介、外從五位下御春宿禰清庭爲安房守、從五位下文室朝臣眞室爲下總守、從五位下藤原朝臣世數爲上野介、從五位下愛宕王爲若狹守、從四位上源朝臣生爲加賀守、從五位上石川朝臣永津爲介、從五位下春枝王爲能登守、從五位上佐伯宿禰利世爲兼越後守、左近衞少將如故、正五位下宮道朝臣吉備麿爲因幡守、從五位下齋部宿禰木上爲伯耆守、從五位下安倍朝臣安正爲出雲守、從五位上佐伯宿禰春海爲安藝權守、從五位上藤原朝臣良相爲兼阿波守、內藏頭左近衞少將如故、從五位上清原眞人遠賀爲土左守、外從五位下山代宿禰氏益爲豐前介、○左大臣正二位藤原朝臣緒嗣上表言、跼蹐暮景、側足重泉、仰堯闕而待終、顧衰朽以知止、而孔光之杖、不聽遊於戶庭、廣德之車、不得懸於私館、此則聖皇叡思無窮、議及胡耇、臣數年臥疾、不自支持、天命未除、免先泡露、然而氣力咸盡、恐公鼎之折足、恩流既盈、悔廟器之致攲、乃再三表奏、生死在斯、陛下猶纏印綬而在位、因爲優老之賜、請釋朝衣而就第、將爲終焉之賞、不堪蒙昧之至、頻觸天聽、○癸

據て改む○任要官、任要の二字は原本空白させるを水戸校本及類史に據て補ふ○從四位上紀朝臣、原本上を下に作る九年正月壬寅紀に據て改む○長江、長は原本若に作り諸本には無し九年正月壬寅紀に據て改む○從五位上丹墀眞人門成、原本上を下に門を外に作る上は九年正月紀に據り門は宮本及前後の文に據て改む○高貞爲伊賀守、伊は原本加に作る閣本前本谷本に據て改む○林朝臣常繼、繼は原本及前本谷本等空白とす宮本及八年四月丁巳紀に據て補ふ○御春宿禰、春は閣本前本等空白とし下文二月紀に野に作る野の誤ならむ○宮道朝臣吉備麿、原本朝臣以下五字脫し前本中本水戸校本に四字闕さあり宮本には朝臣の二字を存し名を缺く七年正月甲申紀に據て補ふ○木上、木字は宮本に據て補ふ○遠賀、原本遠を東に作

る宮本に據て改む
○土左守、原本左を佐に作る閣本前本に據て改む下同じ
○踟躕暮景云々、此二句老至りて終焉の近けるに喩ふ
○堯闕、堯恐嶢と纂詁に云嶢闕は皇居の門なり
○孔光之杖云々、致仕を許されざるを云徐陵爲王儀同致仕表に孔光之杖截游戸庭廣德之車方懸私館とあるに據れり
○孔光廣德共に漢書に見ゆ、孔は原本礼に作る閣本に據て改む
○胡耇、老人を云左傳に見ゆ
○免先泡露然而、閣本前本等免以下四字空白とし然而を而然に作る
○恐公鼎之折足、易鼎卦に鼎折足覆公餗とあるに出づ職責缺くる所あるを恐るとなり
○悔廟器之致敧、荀子に孔子觀於魯桓公之廟有敧器焉孔子問守廟者曰此爲何器守者曰此爲宥坐之器孔子曰吾聞宥坐之器者虚則敧中則正滿則覆顧謂弟子曰注水焉中而正滿而覆虚而敧孔子歎

卯、最勝會竟、引名僧十餘口於紫宸殿、令論義、訖施御被、命婦從四位下大宅水取朝臣繼主卒、○甲辰、(十五)中務省言、案令條、京職畿内七道諸國、庚午年籍、(天智九年)應在省中、而不載年終帳、遠遷代前司等、无心言上、久致遺漏、若不申顯、恐有後責者、令左右京職五畿内七道諸國寫進焉、右京職言、近江國坂田郡人尾張連繼主祖父比知麿、三條三坊人也、而父秋成、偏隨母居、已附外籍者、繼主一人、男一人、删改邊籍、貫附三條三坊、○丁未、(十八)勅報曰、省表具之、深以悲感、朕自在大哀、荒衿迷謬、雖迫遺制、不能自勉、是以政無小大、聽于冢職、然則恩信之勤、須倍常日、託委之情、當在此時、而認意褫服、致誠懸車、前後累上、確乎不移、俗將依請、則具瞻之寄、闕之於國、縱不遂望、則高養之求、損之於公、畢景終宵、思服成疾、然義不在餝、信終歸誠、哉頻抑冲祈、恐永傷乃懷、故屈朕懇慕、申公謙退、望朝端而空座、辭宸階以生塵、徘徊于此、心無所厝、但至道不限、大忠无終、公家之有无、王室之利害、而言之不諱、議而不盡、復猶相累、幸勿金玉乃音、是卽所以相共終始之大望也、春寒、想强加飡、指不多及、○庚戌、(廿一)勅、左丞相藤原

公、先朝之元勳、而朕之舊德也、近功成名遂、老歸於第、朕以几杖禮優之、不敢負公之故、然政之資賢相、猶病之待良醫、永言于此、戀慕彌深、夫鬼神有智、體清愼者、壽命永保、福祿無主、履忠孝者、子孫□昌、正五位下右馬頭藤原朝臣春津、是公之孝子、特可授從四位下、以慰目前、○壬子、授從四位上紀朝臣名虎正四位下、正六位上伴宿禰善男從五位下、○丙辰、左京人位子從八位下役連豐足等二人賜姓弘村連、纒向日代宮役民之長、□鳥之枝別也、故以役爲焉、美濃國山縣郡少領外從八位上均田勝淨長等九人賜姓中臣美濃連、中臣氏祖津速魂命之苗裔也、

日呼怨有滿而不覆者哉(節略)とあるに據れり　○印綬、原本綬を緩に作る宮本に據て改む　○癸卯、原本此條及甲辰條を丁未の次に收めたるを干支を推して此に移す　○年終帳、勘解由式太政官式等に見ゆ　○遠遷代前司、遠は原本字體不明宮本遙に作る今閣本前本谷本等に據る矢野翁は遙當作遙遠二字と云　○遺漏、原本遺を遣に作る諸本に據て改む　○母居、原本母を丹に作る諸本に據て改む　○已附外籍、閣本尾本谷本等已字闕く　○勅報曰、辛丑紀の緒嗣の表に報ぜさせ給へるなり　○大哀、諒闇を云　○荒衿迷謬、大御心のすさび迷はせ給ふとなり　○遺制、原本遺を貴に作る宮本に據て改む制は宮本例に作る　○家宰、論語憲問篇に君薨百官總己以聽於家宰三年とあるに據れり家は大也大宰也　○託委之情、論語泰伯篇に可以託六尺之孤可以寄百里之命とあるに據れり原本託を記に作る閣本尾本谷本等に據て改む　○認意斑服云々、頻りに退官せむとするを云　○俗將依請、原本俗を殆に作る今諸本に據る玉篇に俗竭戟切倦也とあり字形相似たるより誤れるなるべし　○具瞻之寄、毛詩小雅節南山章に見ゆ衆庶の瞻仰するを云　○高養之求、養は原本矣に作り閣本尾本谷本等夫に作る矣は養の省文なり今之に據る、高養は身退して老を養ふを云　○畢景終宵云々、畢景終宵は終日終夜なり思服は毛詩周南關雎に寤寐思服、傳に服思之也とあるに出づ　○哉類狎沖祈、纂詰に哉を西本に據れりとて或に改めたれど未だ證を得ざれば疑を存じて後考を俟つ祈は求なり　○勿金玉乃音、毛詩小雅白駒章に毋金玉爾音而有遐心とあるに據れり　○左丞相藤原公、原本公を緒嗣に作る諸本及類史に據て改む左丞相は左大臣の唐名なり當時の內記は專ら彼に摸倣することを勉めしより詔勅に斯の如き文字を用ふるに至れり　○近功成名遂、老子に出づ　○公之故、故は楚語の注に猶意と云　○以几杖禮優之、禮記曲禮に大夫七十而致事若不得謝必賜之几杖とあるに據れり　○壽命永保、原本に保字なく閣本尾本谷本に永字を缺けり今類史九十九に據て補ふ　○子孫□昌、原本子孫昌に作る類史に據て□を加ふ　○從四位上紀朝臣名虎、原本上を下に作る上文及類史に據て改む　○役連、錄河內神別役直高魂命孫天神立命之後也　○□鳥之枝別也、原本□なし尾本谷本に據て補ふ枝は閣本中本になし　○以役爲焉、狩谷校本に爲恐名とあり　○美濃國云云、原本美上に丙辰の二字あり衍な

り故に削る美濃國以下下文三月丙辰條に重出す水戸校本には此を削て彼を存し山崎校本には彼を削て此を存す今之に從ふ　○均田勝淨長、均田の二字宮本及下文に據て補ふ

（二月）脫屣、原本屣を履に作る中本谷本及類史に據て改む
○猶留、類史猶下に以字あり
○十一月、一の字は水戸校本及類史に據て補ふ
○贈與、原本贈を惟に作る類史に據て改む
○藤原朝臣助、朝臣の二字は類史に據て補ふ
○私退去、原本私を和に作る閣本尾本谷本等に據て改む
○綴喜第、原本望憙弟に作る宮本及類史六十六に據て改む
○至齡迫崦嵫頓以供養、原本齡迫を若自に作り崦以下四字なし前本谷本等迫を白に作り以下四字空白とす今類史に據て補訂す崦嵫は山海經に鳥鼠同穴山西南曰崦嵫下有虞泉日所入處とあり以て齡の西に傾きて老耆の至るに譬ふ
○後家、原本後を復に作り家一字衍れり諸本及類史に據て改訂す

○二月庚申朔、日有蝕之、○壬戌、外從五位下味眞公御助麻呂爲越中介、散位從四位下勳七等大野朝臣眞鷹卒、左近衛中將從四位上勳五等眞雄之子也、弘仁元年、任春宮坊主馬首、漸歷左兵衞右衞門少尉、十二年叙從五位下、至散位頭大監物左兵衞佐、淳和天皇踐祚、天長之初、任右近衛權少將、以舊臣也、尋授正五位下、轉中將、九年授從四位下、天皇脫屣、御閑之日、猶留眞鷹身於公家、是歲（天長十年）冬十一月、供大嘗會、陣畢自褫兵仗、贈與權中將藤原朝臣助、私退去、隱于綴喜第、爾後不復出仕焉、眞鷹雖素无文學、且好鷹犬、而砥礪從公、夙夜匪懈、又平生抽割俸分、寫經造像、不使人知、至齡迫崦嵫、頓以供養薰修、令後家无追福之煩、父子武家、而同此行迹、觀者歎息、惡我不如、厥後被拜紀伊權守、未之國卒、時年六十二、○己巳、以從四位上藤原朝臣助爲參議、從四位上南淵朝臣永河爲刑部卿、參議從四位下安倍朝臣安仁爲兼彈正大弼、春宮大

○從四位上橘朝臣氏人、上は原本下に作る九年八月壬申紀に據て改む
○叩綿麻呂、叩はサケビと訓むべし景行紀五十一年八月壬子紀に日本武尊所獻神宮蝦夷等晝夜喧嘩出入無禮云々則進上朝廷、仍令安置御諸山傍、未經幾時悉伐神山樹叫呼隣里云々是今播磨讃岐伊豫安藝阿波凡五國佐伯部之別祖也とあるが如く叫は喧しく叫びしより起れるなり

(三月)爲山城守、原本此下に丙辰美濃國云々の四十二字あれど上文正月丙辰の條に已に出でたれば之を削る
○出雲權守云々、秋津卒去の事紀略には辛卯に係く丙辰云々四十二字攙入の文を除けば自ら辛卯に屬す
○大原王之第、原本王字なく第を弟に作る宮本に據て改め補ふ

夫下野守如故、從四位上橘朝臣氏人爲兼神祇伯、尾張守如故、從五位下在原朝臣行平爲侍從、從五位下百濟王忠誠爲大監物、從五位上春澄宿禰善繩爲文章博士、外從五位下紀宿禰福善爲造兵司正、從五位上丹墀眞人門成爲刑部大輔、從五位下善友朝臣豐宗爲大炊頭、從五位下安棟王爲内膳正、從五位下興世朝臣高世爲右京亮、從五位下藤原朝臣常永爲勘解由次官、從五位下淡海朝臣眞伴爲左兵庫頭、從五位下百濟王永仁爲右兵庫頭、外從五位下山代宿禰氏益爲山城介、從五位上淸原眞人遠賀爲河内守、外從五位下叵瑳宿禰末守爲安房守、從五位下伴宿禰善男爲讃岐權介、從五位下御輔朝臣眞男爲土左守、外從五位下御野宿禰淸庭爲豐前介、○(十五)甲戌、播磨國餝磨郡人散位正七位下叩綿麻呂賜姓春永連、元夷種也、○三月庚寅朔辛卯(二)、從五位下橘朝臣海雄爲彈正少弼、從四位下藤原朝臣長岡爲山城守、出雲權守正四位下文室朝臣秋津卒、大納言正二位智努王之孫、從四位下勳三等大原王之第四子也、弘仁七年叙從五位下、明年除甲斐守、後任武藏

○左兵衞、類史左を右に作る
○六年、補任には七年とす
○丈夫、原本大夫に作る谷本及類史に據て改む
○丁酉、此條正月に重出す彼を削りて此を存す
○眞虎、原本虎を處に作る諸本に據て改む
○楠野王、原本楠を南に作る諸本に據て改む
○如聞、原本如を加に作る谷本宮本及類史に據て改む
○適向戒所、原本適を廻に戒を戊に作る諸本及類史に據て改む
(四月)夏四月、夏字は宮本紀略に據て補ふ
○楯列、原本播州に作る閣本前本及類史三十六に據て改む
○食時、拾芥抄上本に食時は辰と見ゆ今の午前八時なり
○指離、離及兌は易の卦名方角に配すれば離は南兌は西なり
○指兌、原本兌を先に作る宮本及類史に據て改む

介、天長之初、補左兵衞權佐、二年加正五位下、遷左近衞中將、八月敍四位、六年拜參議、七年兼右大辨、九年兼武藏守、遷左大辨、十年兼春宮大夫、承和元年上表、乞停左大辨左近衞中將等職、勅停左大辨、二年遷右近衞中將、七月任右衞門督、監察非違寔是其人也、亦論武藝、足稱驍將、但在飮酒席、似非丈夫、毎至酒三四杯、必有醉泣之癖故也、九年秋七月、連坐伴健岑等謀反之事、左降出雲員外守、遂終于配處、時年五十七、○[八]丁酉、上野國新田郡人勳七等犬養子羊、弟眞虎等二人賜姓丈部臣、○[廿二]辛亥、以縫殿頭正五位下楠野王爲左兵庫頭、○[廿三]壬子、相摸國大住郡大領借外從五位下壬生直廣主授外從五位下、以去承和七年國司褒擧、今依格所授也、○[廿五]甲寅、令義倉物賑給東西悲田病者及貧窮者、勅曰、如聞、頃年之間、得度之輩、裹粮遠路、適向戒所、而依無定限、徒引數旬、論之物意、頗背穩便、今須度者勘籍、三月卅日以前、勘定申畢、起自四月一日、七箇日之間、依例修懺悔、始從八日、即令授戒、授戒之後、會集同寺、俾修安居、自今以後、立爲恒例、○夏四月己未朔、楯列陵守等言、去月十八

○楉木、シモトなり小木を云
○便卽、原本便を使に作る隱本宮本水戶校本に據て改む
○正五位下酒解神、六年四月甲子紀に從五位下とあり此と合はず
○大若子神、及小若子神共に三年十一月壬申紀に見ゆ
○自玉手祭來酒解神、六年四月甲子紀に見ゆ、原本自を白に手を牛に作る宮本及式に據て改む
○壬戌、此條原本丁丑の次にあり干支を推して此に移す
○祭廣湍龍田二神例也、廣瀨龍田祭は四月及七月四日を例日とす天武紀四年四月の條を參看すべし
○山崎神、神名式山城國乙訓郡自玉手祭來酒解神社(名神大月次新嘗)、大山崎村大山崎
○陸奧國言云々、以下修理城隍許之に至る三條は原本廣湍龍田祭の條に次げり源義公曰廣湍龍田祭是日發務例也不以可行他事類聚國史職官部載承和十年四月十九日符言補坊舍人事其

日食時、山陵鳴二度、其聲如雷、卽赤氣如飄風、指離飛去、申時亦鳴、其氣如初、指兌飛亘、遣參議正躬王加撿察、伐陵木七十七株、至楉木等不可勝計、便卽勘當陵守長百濟春繼上奏矣、坐梅宮正五位下酒解神、從五位下大若子神、從五位下小若子神三前、並奉授從四位下、從五位下自玉手祭來酒解神一前正五位下、並預名神、○壬戌、遣使祭廣湍龍田二神、例也、○乙丑、從五位下伴宿禰清貞爲縫殿頭、○壬申、授正四位下平朝臣高棟從三位、○丁丑、山崎神預之名神、陸奧國言、諸團軍毅等欵云、兵士年役六十箇日、分結六番、以旬相代、口食私糧、身直城塞、而道路遼遠、頗疲往還、家居少日、何濟產業、因茲逃散者多、民不安堵、望請、更加一千人、與本幷八千人、分結八番、延彼番程、以息弊兵、唯不更置團、周加諸團者、許之、式部省言、承前之例、以諸勘籍人、補諸司番上、諸衞府舍人、靜言事由、尤爲出身、夫出身之難、自古而久、當今之世、動易脫屣、望請、先立限之外、悉經一還補他色、奏可之、但外考補坊舍人、同舍人遷他色、及依理解却之類、每年卌人特聽出入、中宮后宮亦同此例、自今以後、立

爲恒例、陸奥鎭守將軍從五位下御春朝臣濱主言、健士元勳位人也、既脱調庸、亦无課役、承前之將、撰其武藝、特號健士、給粮免租、結番直戍、而勳位悉盡、無人充行、仍任格旨、差行白丁、全給公粮、兼免調庸、人同役異也、請射下健士、准兵上下兵、同令役修理城隍、許之、○（廿二）己卯、使參議從四位上藤原朝臣助、掃部頭從五位下坂上大宿禰正野等、奉謝楯（タテナミ）列北南二山陵、依去三月十八日有奇異、搜撿圖錄、有二楯列山陵、北則神功皇后之陵、（倭名大足姬命皇后、）南則成務天皇之陵、（倭名稚足彦天皇、）世人相傳、以南陵爲神功皇后之陵、偏依是口傳、每有神功皇后之祟、空謝成務天皇陵、先年緣神功皇后之祟、所作弓劔之類、誤進於成務天皇陵、今日改奉神功皇后陵、○（廿三）辛巳、參議正四位下三原朝臣春上、上表致仕、許之、○五月己丑朔、日赤无光、終日不復、非雲非霧、黑氣亘天、至于午後、時時日見、其色黃赤、○（三）辛卯、令神祇官陰陽寮解謝之、是日午刻、日色明潔也、○（五）癸巳、停馬射節、諒闇也、○（八）丙申、又爲鎭內裏物恠幷日異、屈百法師、限三箇日、讀藥師經於清涼殿、修藥師法於常寧殿、轉大般若於大極殿、諸司醋食、兼禁殺

文奉與此同丁丑十九日也據此陸奥國言以下當繫山埼神預之名神之下と云り今之に從て改め移す
○濟産業、原本濟を齊に作る閣本前本中本に據て改む
○周加諸團、陸奥國には六團を置けり初めに名取玉造の二團弘仁六年に白河安積行方小田の四團を加置けり承和十五年に至り磐城團を增して七團となる
○坊舍人、東宮坊舍人なり
○卌人、原本冊人に作る閣本前本谷本等に據て改む
○濱主、七年正月將軍に任す
○健士、弘仁六年八月始て健士を置く三代格十八に見ゆ其數二千人何れも有勳者なり
○射下健士、山崎校本に一本にありとて下を丁に改む兵士下兵の下も亦同じ
○神功皇后之陵、諸陵式に狹城盾列池上陵、今生駒郡平城村大字山陵谷字宮谷

○（注）倭名、宮本傍注に倭御歟といひ山崎校本は尾本考語に據て御名に改む
○成務天皇之陵、諸陵式に狹城盾列池後陵、今生駒郡平城村大字山陵字御陵前
○先年、去年十二月庚辰紀に出づ
（五月）亘天、紀略散天に作る
○午後、原本午を市に作る宮本及紀略に據て改む
○又償鎭、紀略類史に又字なし恐くは衍
○美濃郡、今も同じ
○鹿足郡、倭名抄に鹿足をカノアシと訓り今も郡存す
○其職員者准小郡云々、當時の制戶令に廿里以下十六里以上を大郡、十二里以上を上郡、八里以上を中郡、四里以上を下郡、二里以上小郡とす又職員令に大郡大領少領各一人主政主帳各三人上郡大少領各一人主政主帳各二人中郡大少領主政主帳各一人下郡大少領主帳各一人小郡領主帳各一人と見ゆ
○那珂郡、今兒玉郡に入る

生。石見國美濃郡、分割爲兩郡、本郡依舊、爲美濃郡、新郡取邑號、爲鹿足郡、其職員者准小郡、折元四員、分取一人、更加一員、惣置二員、本郡則准下郡、置三員、武藏國那珂郡、元來小郡、官員約少、而今戶口增益、結定四鄕、政多職少、不堪須行、據准令條、誠裕下郡、改小爲下、更增一員、又讃岐國大內郡小郡、只有領帳、領則領調入京、帳猶留國釐務、非常移病、无人從公、加之鄕戶田數、既堪下郡、改小爲下、加領一員焉。一品式部卿葛原親王、遣男從三位大藏卿平朝臣高棟、詣朝堂抗表曰、倦禽知暮、自是反林之時、老馬傷羸、亦爲稅駕之日、遠取諸物、近喩於身、鳥物之情、人亦不殊、臣才識空虛、駈馳駑怯、猥以瓊樹之葉花、銀潢之涓滴、出宗室之先、位次人臣之上、誠當償德之期、生死無終、記恩之處、魂魄有遺、豈取欽斯獨善、尙彼高冲、然而年隨日積、病與老和、一日伏枕、四支委廢、漸以過日、彌覺衰耗、縱有殘喘、知非全身、夫吏部者、人物之衡錘、吏職之淸要、塡案盈几、何須暫曠、伏願、還於天工、以利王職、臣聞、天道禍滿、人道福謙、儻因一退、時得再生、則庶曁留泡露、重瞻闕庭、不許之。○十三辛丑、地震。○十四壬寅、犬

登殿上御座前參議以上座邊、反吐幷遺尿、○癸卯、文章得業生正六位下和氣朝臣貞臣對策、判之爲不第焉、楯列山陵守丁聽隨闕差京戸幷浪人、以當土無人差課也、○辛亥、奉授從五位下酒解子神從四位下、○甲寅、勅、宛油一斛正稅三百束於故京本元興寺、六月十五日万花會、十月十五日万燈會、以此兩日、每年修之、立爲恒例、○六月戊午朔、令知古事者散位正六位上菅野高年、於內史局、始讀日本紀、○辛酉、制、去弘仁四年二月勅、僧尼有身死幷還俗、其度緣戒牒、早令進省、省卽年終申官毀之、宜諸國國分二寺僧尼度緣、死闕之日依前令進、但請補國分二寺僧尼之闕、先進度緣、然後補之、若乖此旨、科違勅罪、○甲子、右京人六世長谷王、鳥嶋王、池子女王、七世小長谷王等四人、賜眞春眞人姓、始置主計主稅二寮寮掌各二人、（進勘解由使及京職、以雜出身人堪事者補之、）○乙丑、肥後國阿蘇郡從三位勳五等健磐龍命神社神主、河內國河內郡從二位勳三等平岡大神社神主等、永預把笏、○戊辰、參議從三位勳六等兼越中守朝野朝臣鹿取薨、鹿取者、元大和國人、正六位上忍海原連鷹取之子也、叔父從六

○約少、原本少を小に作る下文に據て改む
○四鄕、那珂・中澤・水俣・弘紀なり
○政多、原本政を收に作る閣本前本宮本等に據て改む
○須行、須は山崎校本頒に作り纂詁は恐衍字之訛と云
○大內郡、倭名抄に大內を於布知と訓り今寒川郡と合して大川郡となる
○稅駕、史記李斯傳注に稅駕猶解駕言休息也とあり駕は玉篇に馬在軛中也とあり軛は轅端橫木駕馬領者と注しクビキなり
○鳥物之情、鳥は原本島に作る諸本に據て改む
○瓊樹之葉花云々、此二句は皇胤なるを云銀漢は天河なり又天潢とも云、葉は原本業に作る尾本水戶校本に據て改む
○位次人臣之上、原本次字なし諸本に據て補ふ
○有遺、遺は宮本譴に作る
○吏部、式部省の唐名
○人物之銜鏈云々、職員令に式部省卿一人掌內外文官名帳考課選敍禮儀

販位記校定勤績論功封賞云々とあるなど云
○泡露、餘命幾くもなきに喩ふ
○反吐并遺屎、原本吐下に土字あり閣本尾本に據て削る
○酒解子神、梅宮に祀る四座の一
○故京本元興寺、故京は舊京なり元興寺は七大寺の一にて上に屢見ゆ靈龜二年五月辛卯に左京六條四坊に移す
(六月)令知古事、令は原本今に作る類史紀略に據て改む
○菅野高年、宮本菅野の下朝臣の二字あり
○始讀日本紀、釋日本紀に承和六年六月一日博士散位菅野朝臣高年建春門南腋曹司講之とあり
○長谷王、及鳥嶋王池子女王、及小長谷王の系は詳ならず
○眞春眞人、眞春氏は他史に見えず
○平岡大神社、大は原本太に作る諸本に據て改む
○朝野朝臣鹿取薨、鹿取の傳は補任天長十年の條を參看すべし此に書す所と異同あり

位上朝野宿禰道長爲子出身、延曆十一年自言歸父戶、追賜父鷹取姓宿禰、即入京、少遊大學、頗涉史漢、兼知漢音、始試音生、任相摸博士、後登科爲文章生、自此累遷遣唐准錄事、大宰大典、式部錄、左大史、左近衞將監等職、弘仁二年恩勅、叙從五位下、以帝昔在藩之日侍講也、二月補左衞門佐、十二月服解、三年奪情除近江介、五年遷左近衞少將、七年兼主殿頭、十二月兼因幡介、八年加從五位上、兼任內藏頭、上野守、少將如故、十年加正五位下、遷兵部大輔、相摸介、少將、尋授從四位下、五月復除兵部大輔、十二年遷中務大輔、五月遷民部大輔、六月復中務大輔、十四年遷左中弁、天長四年加從四位上、二月除大宰大貳、上表乞解大貳、不許、十一年六月、拜參議、十一月兼式部大輔、承和元年七月停式部大輔、遷左大弁、七年加正四位下、九年授從三位、兼越中守、立性謹愼、臨事明了、以吏幹稱、能收人譽、至小藝善大歌、薨時年七十、○(廿五)壬午、伊賀、尾張、參河、武藏、安房、上總、下總、近江、上野、陸奧、越前、加賀、丹後、因播、伯耆、出雲、伊豫、周防等十八國飢、勅加賑恤、○(廿八)乙酉、從五位下橘朝臣貞根爲中務少輔、

藤原朝臣宗吉爲大監物、從五位上御船宿禰氏主爲兼越中守、大學博士如故、〇丙申、（七月九日）左京人從五位下春枝王之子六世岑正王、是子女王、貞子女王、正六位上秋枝王之子六世原雄王等四人、賜姓高階眞人、淨廣壹高市皇子後也、右京人五世正六位上令根王之子安繼王、淸淵王、易野女王、五世正六位上永根王之子良長王、良雄王、良氏王、瀧子女王等七人賜姓淸瀧眞人、三品忍壁親王之別也、〇秋七月戊子朔、丁酉、（十）奉幣於天下名神、令祈百穀、是日勅、會去年七月十四日、八月廿七日兩度恩赦、諸國未得解由之輩、或訴新司偏緣洪恩、只放解由、至于造會赦帳、令加其名、寄事彼此、拒以不署、此則乖詔書所指、復似隱舊疵、須彼帳進官之後、乃與解由、但後司所勘、事有不平、准不與解由狀、加所執、亦前被放許之類、紆遁不署、修解言上、未署之間、五位已下、不論京官外任及散位、惣奪位祿、六位已下、同沒季祿公廨、無職之人、不預敍用、〇辛丑、（十四）修嵯峨太上天皇周忌齋會、先是有司奏言、周忌齋日、的在七月十五日壬寅、伏按朝章、至行凶事、三宮本命之日、猶且忌避、而況重于太皇太后及

〇忍海原連、原字は弘仁三年六月紀及承和二年二月紀に據て補ふ
〇延暦十一年自言歸父戸云々、弘仁三年六月辛丑紀（後紀一八二頁）に見ゆ
〇音生、職員令に大學寮音博士二人掌レ教レ音、義解に音博士元レ生者とあれば音生は定まれる名にはあらず
〇相摸博士、國の博士なり
〇大宰大典、原本典を武に作る諸本に據て改む
〇常昔、原本昔を菩に作る水戸校本に據て改む
〇遷左近衞少將、左は原本右に作る後紀弘仁五年正月紀及補任に據て改む
〇上野守、宮本守を介歟と傍注すれども補任にも上野守とあり
〇正五位下、下字は宮本及補任に據て補ふ
〇相摸介少將、上下に脱字あるべし纂詁は相の上に兼字を將の下に如レ故十一年五月依レ病上表辭レ職許レ之の十五字を加ふ
〇善大歌、歌は原本歎に作る閣本前本等に據て改む

○丙申、山崎校本に丙申七月九日也按恐丙戌歟丙戌廿九日甲申廿七日也未知孰是姑從舊本不改と云り
○春枝王、原本枝下に之字あり衍なり宮本に據て削る
○岑正王、王字は閣本尾本前本等に據て補ふ
○是子女王、王字は宮本に據て補ふ
○原雄王等四人、以下右京人五世に至る廿六字は閣本尾本に據て補ふ
○易野女王、纂詁に易野疑葛野訛と云
○清瀧眞人、九年六月丙辰紀に見ゆ
(七月)或訴有司、原本或を式に新を諧に作る類史八十及三代格に據て改む
○不署、原本署を暑に作る諸本に據て改む
○進官之後、官は原本なし格に據て補ふ
○修解、格には錄狀に作る
○外任及散位、原本及を乃に作る前本谷本中本及格に據て改む
○辛丑、此條原本庚戌の次にありしを干支を推し

聖上御本命乎、伏請、齋會之期、却取十四日辛丑也、有司所奏、僉以爲宜、太皇太后亦許之、而中納言源朝臣信、參議源朝臣弘等執奏言、臣等奉遵顧命、期不違失、今如斯議、乖遺誥、何者遺誥曰、勿拘俗事、然則何須拘忌、又曰、送葬勿過三日、縱當彼時、三日之內有寅者避之耶、又後年周忌、或有寅日、亦猶避之耶、上因熱發、不能面議、勅令大納言藤原良房朝臣與諸公卿議定、奏曰、本命之日、不擧凶事、復古之蹤、非無所據、謹案遺詔、勿拘俗事、蓋謂鄉曲所忌碎事、非指朝家行來舊章、又當彼時、三日之內、如有可避、則避之無疑矣、周忌齋會、臣子縞素、凡厥擧動、惣是不祥、是以忌之耳、後年國忌、豈可與同乎、偏守一隅、不是通論、源朝臣等無復駁議、仍停壬寅、一取玆辛丑焉、○庚戌、致仕左大臣正二位藤原朝臣緒嗣薨、依例遣使監護喪事、遺言不受焉、詔曰、念功惟深、懷德卽舊、惣天工之綱紀、爲人臣之重望、況乎自歎幼沖、翊比王室、志同鷹隼、摻均松筠、夫哀以悼往、榮以餝終、宜崇寵贈、用光幽壤、可贈從一位、緒嗣者、參議正三位式部卿大宰帥宇合之孫、而贈太政大臣正一位百川之長子也、桓武

天皇延曆七年春、喚緒嗣於殿上、令加冠焉、其幞頭巾子、皆是乘輿之所徹也、卽授正六位上、補內舍人、賜劒、勅曰、是汝父所獻之劒也、汝父壽詞、于今未忘、每一想像、不覺淚下、今以賜汝、宜莫失焉、尋賜封百五十戶、十年春授從五位下、時年十八補侍從中衞少將、兼常陸介內厩頭、俄遷衞門佐、十六年秋七月、叙正五位下、未及浹辰、授從四位下、時年廿四尋轉衞門督、兼出雲守、造西大寺長官、右衞門督、廿一年六月、行幸神泉苑、是日有宴、令緒嗣彈和琴、帝喚神大臣、耳語良久、帝乃流涕、更召皇太子親王等、令陪殿上、卽詔曰、徵緒嗣之父、予豈得踐帝位乎、雖知緒嗣年少爲臣下所恠、而其父元功、予尙不忘、宜拜參議以報宿恩、大臣奉勅、便起引唱、時年廿九尋兼山城但馬守、大同二年加從四位上、爲山陰道觀察使、兼左大弁、是歲刑部卿、遷東山道觀察使兼陸奧出羽按察使、冬十月加正四位下、弘仁年中遷右兵衞右衞門等督、停按察使、頻兼美濃近江等守、辭脫武官、遷宮內卿、兼河內守、尋叙從三位、拜中納言、俄授正三位、遷民部卿、轉大納言、授從二位、兼皇太子傅、天長二年拜右大臣、返上封千戶、九年轉左大

て此に移す
○的、字書に明也又實也
○三宮、原本宮を官に作る諸本に據て改む
○遺諾、諾は玉篇に告也以文言告曉之也又告上曰告發下曰誥とあり卽ち遺詔なり、宮本誥を詔に作る下同じ
○無疑矣、矣は諸本失に作る狩谷氏の考按に據て改む
○駁議、駁は原本駿に作り閣本中本等駮に作る水戶校本に據て改む
○停壬寅、原本寅下に又寅字あり諸本に據て刪る
○取玆辛丑焉、此下に原本及諸本所帳の二字あり水戶校本に所帳未詳といひ狩谷氏は所帳の下恐脫文ありと云疑なきにあらねど宮本山崎校本に據て刪る
○庚戌、此條原本丁酉の下に在るを干支を推して此に移す原本戌を成に作る今諸本に據て改む
○藤原朝臣緒嗣薨、此人致仕の事本年正月庚戌紀に出づ又叙任の年月は詳に補任に見ゆ
○遺言、原本遺を遣に作

臣、弘仁以降、辭職之表、已過十上、三朝優詔不許之、緒嗣朝臣、曉達政術、臥治王室、國之利害、知無不奏、但有兩人說一事、其一人先所談是漫語也、一人後所道乃眞實也、而霍信先談、不容後說、有茲偏執、爲人所刺、薨時年七十、○是日遣使奉幣於伊勢大神宮、爲祈秋稼也、○丙辰、是晦日也、公卿率百官、祓于朱雀門、始就吉禮也、○八月丁巳朔、釋奠、○癸亥、天皇御大極殿、遣使奉幣帛於伊勢大神宮、○甲子、信濃國言、瑞雲見、○辛未、月有蝕之、○是日詔曰、无位橘朝臣奈良麻呂、倚伏難測、既屆夜臺、悼福祿之不長、悲忠貞之未遂、宜寬典、式賁幽壤、可贈從三位、○乙亥、宗康親王加元服、親王已下、五位已上、賜祿有差、○戊寅、大宰府言、對馬嶋上縣郡竹敷埼防人等申云、從去正月中旬、迄于今月六日、當新羅國、遙有鼓聲、傾耳聽之、每日三響、當俟巳時、其聲發動、加以至于黃昏、火更見矣、勅曰、夫不忘亡亂、古人明戒、將驕卒惰、兵機所忌、縱雖无事故、不可不愼、大宰府言、對馬嶋司言、去延曆年中、以東國人配防人、後又筑紫人配防人、而並停廢也、當國百姓、去弘仁年中、疫癘多死、急有寇賊、何堪防禦、望

る諸本に據て改む
○卿舊、狩谷校本に舊一本篤に作るとあれど證を得ず
○幼沖、原本冲を郁に作る水戸校本に據て改む矢野翁は郁恐弱字之譌と云り
○翊比王室、原本翊比を比翊に作る尾本前本谷本等に據て改む字書に翊は輔也比は輔也親也とあり
○志同鷹隼、左傳の語
○摻均松筠、禮記禮器に禮在人也如竹箭之有筠如松柏之有心也とあるに據れり原本摻を慘に作るは訛也玉篇に摻は取也一曰執也又史記吳淑校理古樂府中有摻字多改作操とあり摻即ち操也
○寵贈、原本贈を增に作る水戸校本に據て改む
○襆頭、冠なり抄裝束部冠帽類に冠奩名苑注云冠黃帝造也辨色立成云襆頭（加字布利）
○巾子、同に辨色立成云巾子襆頭具所以揷髻者也とあり
○乘輿之所徹也、乘輿は至尊を云徹は撤に同じ除き去る意にて撤下の御品なり

請准舊例、以筑紫人爲防人者、聽之、○庚辰、請百僧於大極殿、轉讀大般若經、亦分卌僧於眞言院修法、五箇日間、諸司潔齋、爲攘物恠也、○九月丙戌朔、庚寅、奉授陸奧國從五位下多久都神正五位下、勳九等石波止和氣天神、无位玉造溫泉神、无位伊佐須美神、並從五位下、○甲午、是重陽節也、天皇御紫宸殿、宴群臣及文人、同賦白露爲霜之題、宴訖賜祿、○丙申、內裏犬產焉、諸司行事、奉幣於伊勢大神宮例也、○戊戌、奉授從四位下丹生川上雨師神從四位上、○辛丑、從五位下朝野朝臣貞吉爲中務少輔、從五位下橘朝臣貞根爲侍從、從五位下清岑宿禰門繼爲縫殿頭、從五位下伴宿禰清貞爲備後守、○正三位藤原朝臣愛發薨、大納言正二位眞楯之孫、贈左大臣從一位內麻呂朝臣第七子也、大同年中爲文章生、屢獻應詔之詩、弘仁六年叙從五位下、九年任近江介、尋遷民部少輔左右少弁、累加正五位下、轉右中弁、天長元年叙從四位下、三年拜參議、兼中務大輔、遷大藏卿、五年正月兼下總守、三月罷大藏卿、爲春宮大夫、七年五月遷式部大輔、六月加正四位下、任左大弁、九年六月兼

○補中衞少將、十二年正月なり衞は原本將に作る諸本に據て改む
○遣西大寺長官、十七年二月なり大字は補任に據て補ふ
○右衞門督、補任に廿年九月停衞門督爲右衞士督とあり纂詁は之に據て文を成せり
○喚神大臣、神字は閣本前本中本に據て補ふ
○大同二年、補任には元年四月とす
○山陰道觀察使、補任は山陽に作りて大同元年五月とす
○是歲刑部卿、補任に三年三月とす
○東山道觀察使云々、五月五日に任ぜられ六月刑部卿を辭す觀察の二字は補任に據て補ふ
○千戸、原本千を十に作る閣本尾本に據て改む
○優詔、原本優を憂に作る閣本中本に據て改む
○奉幣、原本奏幣に作る中本谷本宮本に據て改む
○就吉禮、嵯峨太上天皇の服を除くを云
(八月)信濃國言、言字は類史百六十五に據て補ふ

左兵衞督、十一月授從三位、拜中納言、兼民部卿、爲人和柔、不妄發忿、在於政塗、許爲通熟、承和七年任大納言、至九年秋、連遠伴健岑謀反事、出于京外、在山城國久勢郡別墅而薨焉、時年五十七、賜紀伊國名草郡人紀臣廣人廣成等朝臣姓、○甲辰(十九)、始置陸奧國鎭守府掌一員、令帶刀把笏也、對馬嶋无位雷命神、豐後國无位健男霜凝并比咩神、無位早吸咩神、日向國無位高智保皇神、無位都濃皇神、並奉授從五位下、○丙午(廿一)、天皇御紫宸殿、皇太子侍焉、左右諸衞府共有奉獻、親王公卿列立中庭、謝座謝酒、同節會儀、奏音樂、宴訖賜五位已上祿、○甲寅(廿九)、肥前、豐後、薩摩三箇國、壹岐對馬兩嶋並飢、賑給之、

○倚伏難測、倚伏は禍福の互に倚り伏して來ること老子五十八章に出づ　○既局夜臺、夜臺は沈約傷美人賦に忽淪軀夜臺と見え墓穴を云ふ局は閉づるなり卽ち測らざる禍に陷りて死せしとのこと　○幽墳、墳墓なり原本幽憤に作る宮本に據て改む　○宗康親王、仁明天皇第二の皇子に坐す　○竹敷埼、竹は原本行に作る閣本前本に據て改む竹敷は對馬國下縣郡竹敷村なりされば二こゝに上縣郡とあるに合はず上縣或は下縣の誤ならむか　○不忘亡亂、亡字は閣本前本等は字體不明なり　○延曆年中云々、三代格十八に延曆十四年十一月太政官謹奏令聞防人交替一周爲期久倦戍場自廢家事加以防人爲費觸事尤多臣等望請專廢防人各差當土兵士配其常戍とあり　○當國百姓、原本國字なし宮本に據て補ふ　○寇賊、原本賊を賦に作る諸本に據て改む　○眞言院、拾芥抄中末に眞言院在八省北僧綱人候勤御修法念誦等とあり　(九月)多久都神、神名式に載せず原本久を允に作る宮本に據て改む　○石波止和氣天神、神名式陸奧國白河郡伊波止和氣神社、闕明神是なり、石は伊の訛れるか　○玉造温泉神、同式同國玉造郡温泉神社、今陸前國同郡温泉村鳴子　○伊佐須美神、同式同國會津郡伊佐須美神社(名神大)岩代國大沼郡高田町、國幣中社に列す　○門繼、三年閏五月壬辰紀に宿禰を改めて朝臣を賜ふ、此に宿禰とあるは疑はし　○內麻呂朝臣、原本內の上に藤原朝臣の四字あり麻呂の下に朝臣の二字なし閣本前本谷本等に據て改め訂す內麻呂叙位の年月補任に詳なり　○大同年中、四年なり　○久勢郡別墅、山城志に藤愛發別墅は久世郡藤和田村に其蹟ありと見ゆ　○紀臣廣人、原本紀下に朝字あり閣本尾本前本等に據て削る　○鎭守府掌一員、府下に府字あるべきかと狩谷氏云り三代格十五貞觀十一年二月廿日太政官符には准國置府掌二員とあり　○雷命神、神名式對馬嶋下縣郡雷命神社、阿連村　○豐後國、原本に早吸咩神の上にあり宮本及神名式に據て此に移す　○健男霜凝并比咩神、神名式豐後國直入郡健男霜凝日子神社、嫗嶽村神原　○早吸咩神、同式豐後國海部郡早吸日女神社、北海部郡佐賀關村關　○日向國、都濃皇神の上にありしを宮本及神

名式に據て此に移す　○高智保皇神、神名式に載せず神祇志料に臼杵郡知舗郷三田井村槵觸峯上神社なりと云三田井村は今高千穂町に入る　○都濃皇神、四年八月紀（一〇八頁）に見ゆ　○共有奉獻、原本共を其に作る諸本及類史に據て改む　○謝座謝酒、延喜雜式に凡公宴賜酒食親王以下皆列庭中再拜謂之謝座訖行酒人把空盞授貫首人跪受盞再拜謂之謝酒と見ゆ

○冬十月丙辰朔、天皇御紫宸殿、曲宴于皇太子已下侍臣已上、賜祿有差、○壬申、（十七）梅宮從四位下酒解子神一前、平野社一前、預之名神、○癸酉、（十八）遠江國濱名郡猪鼻驛家、廢來稍久、今依國司言、遣使檢其利害、更令興復、是日、遣使奉幣於香椎廟、爲令寶位無動國家太平也、是日公卿封祿復舊、下詔曰、朕道昧司牧、富教之風仍虧、政乖雍熙、人乏九載之貯、往者亢旱爲害、秋稼不登、顧賑給之不周、暫損服御之費、而卿等志叶退食、功深權宜、分折封祿、以助公用、是救弊之緩急、興邦之變通焉、朕雖答匪躬之誠、猶懷屯膏之愧、適屬兼秋之頗熟、知資用之稍支、宜所減祿封一復舊貫、可存悉意副朕思焉、○甲戌、（十九）始賜諸陵、圖書、雅樂、園池、正親寮司、印各一面、○十一月乙酉朔、癸巳、（九）地震、以大僧都泰景爲僧正、少僧都明福爲大僧都、律師延祥爲少僧都、大法師實敏爲律師、大法師眞濟爲權律師、○丙申、（十二）遣參議左大弁從四位上正躬王奉幣帛於賀茂神社、爲

（十月）曲宴、孟冬の旬宴なり、原本曲を內に作る諸本及類史に據て改む　○梅宮、三年十一月壬申紀（九五頁）に見ゆ　○平野社一前、神名式山城國葛野郡平野祭神四社（並名神大月次新嘗）、一前は蓋今木神　○猪鼻驛家、兵部式に見ゆ驛址は洪浪によりて地形變じたれど濱名郡白須賀町の邊なるべし　○無動、原本動を勳に作る閣本前本に據て改む　○仍虧、原本虧を戯に作る諸本に據て改む　○乏九載之貯、淮南子主術訓に十八年而有六年之積二十七年而有九年之儲又北史に古先哲王積儲九年謂之太平と云　○亢旱、亢は原本冗に作る宮本水戸校本に據る　○退食、毛詩召南羔羊篇に出で減膳するを云　○懷屯膏之愧、易屯卦象傳に屯其膏施未光也とあり屯は吝也膏澤を下に施すこと能はざるを云

〇司存、原本有司に作り存字なし閣本前本中本に據て改訂す
〇正親察司、察字は纂詁に據て補ふ
（十一月）秦景、傳詳ならず、原本泰を秦に作る閣本前本中本等に據て改む
〇明福、嘉祥元年八月終二興福寺一壽七十一
〇延祥、仁壽三年九月丙申紀に傳見ゆ
〇實敏、齊衡三年九月癸卯紀に傳見ゆ
〇眞濟、清和紀貞觀二年二月丙午紀に傳見ゆ
〇親子內親王、仁明天皇皇女
〇時子內親王、同上
〇借外從五位下、原本借を備に作る諸本に據て改む下同じ
〇磐城臣雄公、七年三月紀に公益に盡せるを以て外從五位下を假されたること見ゆ
〇書生、矢野翁曰書生二字恐衍
〇從五位上丹墀眞人門成、原本上を下に作る九年正月紀に據て改む門成は二月己巳紀刑部大輔に任ず後彈正少弼に任ぜら

令國家昌泰也、〇丁酉（十三）、以丹波國氷上郡空閑地廿町、賜親子內親王、〇己亥（十五）、攝津國嶋上郡古荒田十八町八段、賜時子內親王、陸奥國磐城郡大領借外從五位下勳八等磐城臣雄公、書生黑川郡大領、外從五位下勳八等靫伴連黑成、並授從五位下、褒公勤也、〇庚子（十六）、任挍畿內田使、以參議從四位上滋野朝臣貞主、爲大和長官、國守從四位下紀朝臣長江、彈正少弼從五位上丹墀眞人門成爲次官、參議從四位下安倍朝臣安仁爲河內和泉長官、河內守從五位上清原眞人遠賀、和泉守外從五位下菅野朝臣繼門爲次官、參議從四位上藤原朝臣助爲攝津長官、國守從五位下有雄王爲次官、參議從四位上正躬王爲山城長官、國守從四位下藤原朝臣長岡爲次官、是日勅、爲護國家、於東寺、令定眞言宗傳法職位、幷修灌頂、宜告諸寺、嚴加捉搦、若有違犯者、一依養老六年七月十日格、科罪、陸奥國白河郡百姓外從八位上勳九等狛造智成戶一烟、改姓爲陸奥白河連、同國安積郡百姓外少初位下狛造子押麻呂戶一烟、改姓爲陸奥安達連、〇十二月乙卯朔、下野國那須郡大領外從六

れしにや
○嚴加提搦、矢野翁は嚴加上蓋有脫文歟と云り
○狛造、錄山城蕃別に狛造見ゆ此族なるべし原本狛を柏に作る諸本に據て改む下同じ
○陸奧安達連、民部式頭注に延喜六年正月分安積郡置安達郡とあり安達鄕は當時安積郡に屬せしかば舊居に依て安達連を賜ひしなるべし
（十二月）丈部益野、原本丈を大に作る諸本に據て改む
○能登國郡內、郡は部の誤なるべし
○大興寺、玄蕃式にも能登國大興寺爲國分寺とあり其遺趾は三州志來因概覽に今鹿島郡國分村あり古の寺跡とて田間に礎猶存すと云り
○河邊郡、今羽後國の郡となる
○淨永、原本永を水に作る尾本前本中本に據て改む
○阿刀連、錄攝津神別阿刀連神饒速日命之後也とあり右京山城和泉等にも亦同氏あり、原本阿を河に作る閣本中本宮本に據

位下勳七等丈部益野、勸課農田一千五百七十一町、增益戶口二千四十一人、國司褒擧、借外從五位下。以能登國郡內定額大興寺、始爲國分寺。出羽國河邊郡百姓外從五位下勳八等奈良己智豐繼等五人、賜姓大瀧宿禰。其先百濟國人也。○戊午、攝津國豐嶋郡人左衞門府門部正八位上迹連繼麻呂、式部位子從八位下勳八等迹連成人、武散位正六位上迹連淨足、式部位子少初位下迹連淨永等七十人、除迹字賜阿刀連姓。高祖從七位上阿刀連生羽也。祖父從七位上乙淨、天平年中誤以迹一字爲姓矣。撿庚午年籍、復本姓焉。奉授從五位下稻荷神從五位上。○辛酉、從五位下雄豐王爲宮內大輔。○癸亥、入唐留學天台宗僧圓載之弟子仁好、順昌、與新羅人張公靖等廿六人、來著於長門國。奉授從五位下貴布禰神正五位下。○庚午、山城國正月吉祥悔過、自弘仁十三年、依官符旨、於國廳修焉。始自是歲、復舊例、令修於國分寺。○甲戌、制、彈正京職、巡撿之日、下馬之法、相爭日久、須當彈行事大夫及亮揖馬請勘當。至于進屬、並依致敬。忠幷巡察撿挍之日、進屬進退、一進彈亮相

て改む下同じ
○稻荷神、神名式山城國紀伊郡稻荷神社三座（並名神大月次新嘗）深草村稻荷、官幣大社に列す
○吉祥悔過、神護景雲三年紀に於國分寺行吉祥天悔過法とみゆ
○舊例、例字は類史百七十八に據て補ふ
○令修於國分寺、玄蕃式に凡諸國起正月八日迄十四日請部内諸寺僧於國廳修吉祥悔過其法服并布施料物並用正稅とあり
○陽侯氏雄、錄左京諸蕃揚侯忌寸出自隋煬帝之後也云々とあり
○藏人所、拾芥抄中末に藏人所在校書殿とあり
○左衛門府、紀略左を右に作る
○木連、原本木を本に作る諸本に據て改む
○難波、閣本尾本前本難破に作る下同じ
○反具、卽ち兵具なり
○胡籙、抄調度部征戰具に周禮注云籙（夜奈久比）唐令用胡籙二字盛矢器也とあり
○六十隻、原本隻を雙に作る諸本に據て改む

對之儀、史生坊令不論位階、惣納下馬、○丙子、散位從五位上文室朝臣宮田麻呂之從者陽侯氏雄、告宮田麻呂將謀反、遣內豎喚宮田麻呂、卽副使參於藏人所、卽禁宮田麻呂于左衛門府、分遣勅使左中弁正五位下良岑朝臣木連、右中弁正五位下伴宿禰成益、少納言從五位下淸瀧朝臣河根、左兵衛大尉藤原朝臣直道等於京及難波宅、搜求反具、是日諸門禁固焉、○戊寅、禁告者氏雄于左近衛府、勅使等所搜得宮田麻呂京宅兵具、弓十三枝、胡籙三具、箭百六十隻、劍六口、難波宅兵器、冑二枚、零落甲二領、劍八口、弓十二張、胡籙十具、桙三柄、斧置于右近衛陣、○庚辰、遣參議滋野朝臣貞主、左衛門佐藤原朝臣岳雄推問宮田麻呂、○辛巳、山城國宇治郡白田一町五段賜大中臣朝臣東子、○癸未、謀反文室宮田麻呂罪當斬刑、宥降一等配流於伊豆國、其男二人內舍人忠基於佐渡國、無官安恒於土左國、從者二人和邇部福長於越後國、并於枚麻呂於出雲國、連坐僧神叡與枚麻呂共流同處、告者陽侯氏雄特授大初位下、任筑前權少目、以所告有端也、元興寺傳燈大法師守印卒、和泉

國人、俗姓土師氏、勝虞大僧都之門徒也、延曆廿四年、年分具戒、法師、性骨聰敏、心神精明、一經耳者諳而不忘、暫觸目者記而不漏、精練法相、兼悟俱舍焉、論議之座、相敵者希、六根之中、鼻根最奇、守印他去聞、有人入其房、守印歸來問之云、向來何人入吾房、又見童子云、汝食其飯、驗之知實焉、鼻之遙聞、皆此類也、惜未昇朝家之講、空化一房之內、于時年六十一、

續日本後紀卷第十三

○岳雄、原本岳を兵に作る、閣本に據て改む
○井於枚麻呂、倭名抄に河内國志紀郡井於郷を爲乃倍と訓めり此人の本居なるべし、枚は原本牧に作る閣本前本宮本に據て改む下同じ
○守印卒、傳は釋書三に見ゆ
○六根、法華經科註に以六識緣六塵徧染六根こと出て眼耳鼻舌心意を云
○問之、閣本前本等問を聞に作る
○其飯、其字は閣本前本谷本等空白とす

○承和、此二字は宮本に據て補ふ

【承和十一年】大雪、左傳注に平地盈レ尺曰二大雪一さあり
○宴侍從已上、宴字は紀略に據て補ふ
○葛野川、大堰川なり
○基貞親王、淳和天皇第四皇子
○宗康親王、仁明天皇第二皇子
○基枝王、原本枝を伎に作る宮本及類史に據て改む下文には基兄さあり
○從四位上橘朝臣、原本上を下に作る八年正月癸巳紀に據て改む
○長良、良字は宮本及類史に據て補ふ
○木連、木は原本本に作る閣本尾本前本等に據て改む
○藤原朝臣大津、藤は原本在に作る九年七月己酉紀、同八月乙酉紀及類史に據て改む
○大岡、類史大岳に作る

續日本後紀卷第十四

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

起承和十一年正月盡十二月

(甲子)十一年春正月甲申朔、廢朝賀、大雪也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○丙戌、天皇朝覲太皇太后於冷然院、讌樂終日、賜扈從五位已上祿有差、○己丑、山城國上鑛甲一領云、件甲裹布袋、流著葛野川、○庚寅、天皇御紫宸殿、宴群臣、詔授无品基貞親王三品、无品宗康親王四品、從四位下安倍朝臣安仁從四位上、无位基枝王從四位下、從五位上長田王正五位下、正六位上並山王、鎌倉王、並從五位下、從四位上橘朝臣氏人正四位下、從四位下田口朝臣佐波主、藤原朝臣長良、並從四位上、正五位下藤原朝臣輔嗣、良岑朝臣木連、並從四位下、從五位下藤原朝臣安永、藤原朝臣大津、紀朝臣野長、路眞人永名、坂上大宿禰正野、百濟王善義、清瀧朝臣河根、並從五位上、外從五位下大岡宿禰豐繼、伴宿禰眞足、

○恒柯、原本柯を村に作る宮本及類史に據て改む○高丘、類史高岳に作る○宇治宿禰、宇は原本成に作る水戸校本及類史に據て改む○並外從五位下、外字は宮本及類史に據て補ふ○(注)諱某、女御藤原順子、左大臣冬嗣の女、五條后に坐す○從三位云々、原本三を二に作り云々の二字なし三は下文に據て改め云々は前本谷本宮本等に據て補ふ○戸口廿四人、此下に男十四人女十人とあるを纂詁は分注とせり下同じ○緣被授、緣は原本給に作る閣本前本谷本等に據て改む○從四位下橘朝臣岑繼、從四位下の四字は七年正月甲申紀に據て補ふ○右大弁如故云々、云々の二字は閣本尾本前本に據て補ふ○上春詞、詞は原本詠に作る宮本及紀略に據て改む○內教坊、職原抄に內教坊別當知女樂事とあり(二)一月從五位上路眞

豐岡宿禰眞黑麻呂、正六位上藤原朝臣有貞、藤原朝臣三藤、菅原朝臣是善、淸原眞人淸海、藤原朝臣菅雄、紀朝臣筑紫麻呂、藤原朝臣松影、藤原朝臣貞道、道眞人繼足、小野朝臣恒柯、秋篠朝臣氏永、中臣朝臣逸志、高橋朝臣安雄、飯高朝臣永雄、橘朝臣高成、大和眞人吉直、丹墀眞人博太麿、並從五位下、正六位上高丘宿禰貞雄、阿保朝臣永善、名草宿禰安成、宇治宿禰丹生麻呂、並外從五位下、宴竟賜祿有差、○八辛卯、於大極殿修最勝會、授正六位上高階眞人三嶋麿從五位下、從四位下藤原朝臣諱某、太皇太后、從三位云云、陸奧國磐城郡大領外從五位下勳八等磐城臣雄公戸口廿四人、男十四人、女十人、磐城臣貞道戸口十人、男七人、女三人、磐城臣弟成戸口四人、男三人、女一人、磐城臣秋生戸口三人、男二人、女一人、賜姓阿倍磐城臣、○九壬辰、皇(文德)太子入覲於淸涼殿、拜舞、緣被授所生女御藤原氏從三位也、○十二甲午、從四位上藤原朝臣長良、從四位下橘朝臣岑繼、並爲參議、正四位下紀朝臣名虎爲刑部卿、參議從四位上和氣朝臣眞綱爲美作守、右大弁如故、云云、○十四丁酉、最勝會竟、更引名僧於內

裏、令論義、訖施御被。○己亥、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、覽踏歌、畢賜祿有差。○庚子、天皇內宴於仁壽殿、公卿及知文士五六人陪焉、同賦上春詞之題、別有勅、令三品基貞親王預宴、日暮賜祿有差。是日叙內教坊妓女石川朝臣色子從五位下。○二月甲寅朔、日有蝕之。○乙卯、除按田使從五位下笠朝臣數道爲山城國次官、從五位上路眞人永名爲攝津國次官。○丙辰、能登國言、依去年十月十七日官符、以定額寺爲國分寺訖、望請、停讀師、被給講師者、勅、依請許之。○辛酉、授外從五位下阿保朝臣永善、正六位上安倍朝臣氏主、並從五位下、從五位下並山王爲齋宮頭、正五位下長岑宿禰高名爲兼權頭、伊勢守如故、云云○壬戌、行幸水成瀨野、賜扈從群臣侍從已上、及攝津國司等祿、日暮乘輿廻宮。○丁卯、釋奠、公卿就大學行事。○戊寅、行幸交野、賜扈從群臣侍從已上、及河內攝津等國司祿、日暮車駕還宮。○己卯、參河國言、永停任讀師、以其布施物充用造寺料、其法會之時、以國分僧臈次將行之者、勅、依請許之。○庚辰、掌侍從四位下大和朝臣舘子爲典侍。○三月甲申朔戊子、外從五位

人、上は原本下に作る正月庚寅紀に據て改む
○十月十七日官符、本史此事を十年十二月乙卯朔に係く官符と月日合はず
○伊勢守如故云云、云云の二字は閣本前本宮本に據て補ふ
○交野、桓武紀延暦十八年十月壬申の條（後紀三六頁）に見ゆ
○臈次將行之、將は原本第に作る閣本前本宮本に據て改む
（三月）田舍麿、原本舍を曾に作る閣本宮本に據て改む
○帽子、抄裝束部冠帽類に烏帽兼名苑云帽一名頭衣唐式云庶人帽子皆寬大露面不得有掩蔽と見ゆ
○革鞋、原本草鞋に作る閣本尾本谷本及紀略に據て改む
○鎌刀子、鎌字は紀略に據て補ふ
○体様卑小、紀略様を極に作る
○傔仗、戸令義解に謂短人とあり
○流著歟、原本著下に者字あり閣本及紀略に據て削る

○備後國權守、國字は衍なるべし
○眞貞、七月左遷せらる
○正六位上內藏忌寸、正は原本從に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
(四月)建國任人、原本建國を選人に作り閣本前本谷本等□國に作る類史百七十八及格に據て改む
○除災、格には災を禍に作る
○如今比國、原本如を方に比を北に作る諸本及類史に據て改む
○夥多、原本顆多に作る宮本及格に據て改む
○綱維、僧官なり
○部內僧、僧字は宮本及格に據て補ふ
○齋會、原本齋を看に作る閣本尾本谷本等に據て改む
○三月十七日格、十七日の三字は格に據て補ふ
○以國分僧、山崎氏分下に寺字を補ひたれど脫字にはあらず省略せるにて前にも例あり
○請之、原本請を講に作る諸本に據て改む

下下毛野朝臣田舍麿爲造酒正、○[十五]戊戌、但馬國上帽子、單衣、腰帶、革鞋、鎌、刀子等一櫃、其体樣卑小、不似此間之物、疑佅儞國物流著歟、○[廿二]乙巳、有勅、召備後國權守從四位下善道朝臣眞貞令入京、○[廿六]己酉、天皇朝覲太皇太后於冷然院、宴侍從已上、賜祿有差、○[廿七]庚戌、授從五位下惟良宿禰春道、橘朝臣貞根、並從五位上、正六位上內藏忌寸雄繼外從五位下、

○夏四月癸丑朔、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜祿有差、○[十]壬戌、大宰府言、管大隅薩摩壹岐等國嶋建國任職、大小是同、除災祈福、彼此不異、如今比國皆有講讀師之職、修正月安居等事、而件國嶋既無講讀之職、還失鎭護之助、加以國分二寺雜物、觸類夥多、既無綱維、令誰撿領、望請准諸國之例、置講讀師者、府司商量、所陳有理、望請准管內諸國博士醫師之例、府司於觀音寺、與彼講師、共簡試部內僧精進練行、智德有聞、堪任講筵、終始無變者、將補任之者、勅、講師者、依請補任、讀師者莫更置之、但安居齋會之日、依延暦廿五年三月十七日格、以國分僧次第請之、○[十五]丁卯、從五位上三嶋眞人岡麻呂爲散位頭、○[廿八]庚辰、天皇御武德殿、覽諸牧

駒馬及騎射、〇壬午、參議式部大輔從四位上滋野朝臣貞主、以在西寺南居宅一區、捨爲道場、仍言、私建道場、是格之所禁也、雖是舊宅、事似新建、但此家之爲體、前臨淵水、後隔佛地、去寺迫近、殆同伽藍、凡寺邊二里、本禁殺生、而家人奴婢、動事漁網、近寺之弊、還犯憲法、望請便入西寺、令爲別院、號其名曰慈恩院、東大寺僧傳燈住位圓修永爲別當、三綱在別、又自此以後、別當三綱、隨檀越願、令宛行之者、勅聽之、〇五月癸未朔、丁亥、天皇御武德殿、覽四衞府騎射、〇戊子、御武德殿、覽中衞府騎射種種馬藝、〇丙申、甲斐國言、山梨郡人伴直富成女、年十五、嫁鄕人三枝直平麻呂、生一男一女、而承和四年平麻呂死去也、厥後守節不改、年已卌四、而攀號不止、恒事齋食、敬於靈床、宛如存日、量彼操履、堪爲節婦者、勅、宜終身免其戶田租、卽標門閭、以旌節行、〇戊戌、越前國飢、遣使賑給之、〇己亥、參議從四位下正躬王爲兼遠江守、左大弁如故、〇辛丑、淡路國言、他國漁人等三千餘人、賚王臣家牒、群集濱浦、寃淩土民、伐損山林、雲集霧散、濫惡不休、又官舍驛家、皆在海邊、而接居波間、譬猶魚鱗、縱有火災、

〇駒馬、類史馬字なし
〇便入、便は原本使に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
〇令爲別院、原本令を命に作る類史に據て改む
〇又自此以後、又は原本人に作る閣本尾本前本に據て改む
（五月）癸未朔、此三字宮本及紀略に據て補ふ
〇騎射、騎は尾本及類史に據て補ふ
〇中衞府騎射、類史七十三には此五字なし
〇年已卌四、已は原本也に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
〇火災、火は原本大に作る宮本及類史に據て改む
〇決罸、決は原本史に作る諸本及類史に據て改む
〇早速言上、原本此下に壬寅の一條あり十三年五月壬寅紀に重出す然るに

可難撲滅、勤加禁斷、國力不足、望請、官符皆悉禁制、官宣、宜嚴加禁止、勿令更然、如不遵制旨、尚致濫猾、立加決罰、以懲將來、但所犯之罪、杖罪已上者、勘錄所犯及姓名、早速言上、○甲辰、奉授山城國水主神從五位下、○六月癸丑朔、天皇御紫宸殿、宴侍臣、賜祿、○丙辰、奉授伊勢國正五位上多度神從四位下」、若狹國飢、遣使賑給之、○己未、大宰府獻白烏一隻、○丁卯、日本紀讀畢、○戊寅、主水司言、司家之政、觸類繁多、而本自無印、只用白紙、事涉輕疎、未免嫌疑、望請准內膳采女等司、被給件印者、勅、宜宛之、○庚辰、正五位下伴宿禰成益爲兼左中弁、大藏大輔如故、○秋七月壬午朔癸未、任左右大臣、詔曰、天皇我詔旨良万止宣大命乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食止宣、食國乃法止定賜比行賜倍留國法隨爾、先立止、從二位源常朝臣乎左大臣官爾任賜布、又宣久、正三位橘氏公朝臣波於朕天近親爾毛在、又可仕奉倍支次爾毛在爾依天奈毛、右大臣官爾治賜久止、勅不天皇大命乎衆聞賜止宣」、又勅曰、在唐天台請益僧圓仁、留學僧圓載等、久遊絕域、應乏旅資、宜附圓載傔從僧仁好

類史亦此記事を十三年五月(五十四)に係く故に此れを削りて彼を存す
○水主神、神名式山城國久世郡水主神社十座(並大月次新嘗就中同水主坐天照御魂神水主坐山背大國魂命神二座預二相嘗祭一)、寺田村水主
(六月)正五位上多度神、上に出づ原本上を下に作る六年十二月丁巳紀に據て改む
○白烏一隻、原本烏を鳥に、隻を双に作る烏は閣本及類史紀略に據り隻は水戸校本及類史に據て改む宮本には烏を馬に作る
○日本紀讀畢、去年六月紀に戊午朔令三菅野高年一於二內史局一始讀中日本紀上とあり此に至て讀み畢りしなり
○大藏大輔如故、原本此下に甲申の條を係く、干支を推すに七月三日なり依て下に移し改む
(七月)先立止、原本先立先立止に作る宮本に據て一の先立を削る
○正三位、三は原本二に作る紀略に據て改む氏公は十二年正月七日從二位に叙す此時正三位なり

○近親、氏公は清友の子にて天皇の外舅なり
○圓仁、慈覺大師と賜號
○圓載、天台の僧なり唐より歸國の時海に溺死す宋高僧傳廣僧傳に見え唐詩鼓吹五に皮日休送圓載上人歸日本國詩あり
○二百小兩、小字は閣本尾本及紀略に據て補ふ
○如前云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
○甲申、此條原本七月壬午朔の上にありしを干支を推して此に移す紀略に甲申任官とあれど本紀に其事は見えず
○爲少納言云云、云云は閣本前本宮本等に據る
○甘雨、原本甘を耳に作る閣本從本に據て改む
(閏七月)賜祿、原本祿を錄に作る閣本前本及類史に據て改む
○林邑樂、林邑國の樂なり天平寳字七年正月庚申紀(續紀七十三頁)に出づ
○優詔不許、紀略には辭封戶不許之とあり
○甲戌、此二字紀略に據て補ふ
○堂高則階遠、晉書劉寔傳に出づ
○與卿昆季、天皇は嵯峨

還次、賜各黃金二百小兩者、所司准勅、分付如前云云、○甲申出羽國最上郡人外從八位上勳七等伴部道成、男外少初位上勳九等繼益、白丁吉繼、秀益、繼守、同姓勳九等福尊等七人、賜姓吉彌侯、○辛卯、從五位下鎌倉王爲少納言云云、○癸巳、請百僧於八省院、轉讀大般若經、祈甘雨、是日雨降、○閏七月壬子朔、天皇御紫宸殿、四衛府獻物、宴五位已上、賜祿有差、○戊午、天皇御仁壽殿、令奏林邑樂、未曾覽此樂故也、○辛酉、左大臣從二位兼行左近衞大將皇太子傅源朝臣常上表曰、云云、優詔不許、○壬申、奉幣伊勢大神宮、祈防風雨災、○癸酉、左大臣源朝臣常重上表曰、云云、○甲戌、勅書於左大臣曰、所表具之、堂高則階遠、爵貴則祿優、二者之來、一定之道、而卿深鑒損挹、固守冲虛、減封之請、前後累通、朕與卿昆季、義兼家國、偏行則公議不聽、兩遂則私情難忍、雖賞輕德重、自免害盈之嫌、而派分枝連、欲益福謙之利、故屈之于此、申之于彼、以允來望、宜知此意、○八月辛巳朔、天皇御紫宸殿、覽芳宜花宴、老臣皆有復古之歎、日暮賜五位已上衣被有差、○乙酉、文章博士從五位上春澄宿禰善

繩、大内記從五位下菅原朝臣是善等、被大納言正三位藤原朝臣良房宣偁、先(嵯峨)帝遺誡曰、世間之事、每有物恠、寄祟先靈、是甚無謂也者、今隨有物恠、令所司卜筮、先靈之祟明于卦兆、臣等擬信、則忤遺誥之旨、不用則忍當代之咎、進退惟谷、未知何從、若遺誡後有可改、臣子商量、改之耶以否、由是略引古典證據之文、曰、昔周之王季、既葬後有求而成變、文王尋情奉之也、先靈之祟不可謂無、又有幽明異道、心事相違者、如北齊富豪梁氏是也、臨終遺言、以平生所愛奴爲殉、家人從之、奴蘇言、忽至官府、見其亡主、主曰、我謂、亡人得使奴婢、故遺言喚汝、今不相關、當白官放汝、汝謂家人、爲我修福、云云、又春秋左氏傳、魏武子有嬖妾、無子、武子疾、命其子顆曰、必嫁、病困則更曰、必以爲殉、魏顆擇之、從其治也、(謂病未至困也)遂得老夫結草之報、尙書曰、女則有大疑、謀及卿士、謀及卜筮、白虎通曰、定天下之吉凶、成天下之亹亹、莫善於蓍龜、劉梁辨和同論曰、夫事有違而得道、有順而失道、是以君子之於事也、無適無莫、必考之以義、由此言之、卜筮所告、强不可信、君父之命、量宜取捨、然則可改改之、復何疑也、朝議從之、

天皇第一子にして常は第三源氏に坐す
○義兼家國、親は兄弟にして義に於ては天皇と大臣となり故に家國を兼ぬと云
○自免、免は原本先に作る尾本前本に據て改む
○害盈之嫌、易に出づ福謙亦同じ
○亢來望、原本亢を元に作る纂詁に據て改む亢は抗に同じ拒也
(八月)有復古之歎、芳宜花讌は承和元年八月紀に見え其後見えざるは停廢せしなるべし然れば今復興せるを見て老臣此歎ありしならむ
○善繩、繩は原本綱に作る尾本前本宮本に據て改む
○周之王季、出典未だ考へず
○北齊富豪梁氏云々、太平廣記卷三百八十二及法苑珠林冥報拾遺記に出づ
○遺言、原本遺を遺に作る諸本及類史に據て改む
○我謂、原本謂を惟に作る諸本及類史に據て改む
○故遺言、原本故を於に作る類史に據て改む
○放汝汝謂家人、原本一

の汝字なし閣本尾本前本に據て補ふ
○春秋左氏傳、宣公十五年に見ゆ
○遂得老夫結草之報、得は原本待に作る閣本前本及類史に據て改む左傳に魏顆敗秦師于輔氏、獲杜回、秦之力人也、顆見老人結草以亢杜回、杜回躓而顚、故獲之、夜夢之曰、余而所嫁婦人之父也、爾用先人之治命、余是以報
○女則有大疑云々、尙書洪範に見ゆ
○覺璽、原本覺を璽に作る宮本及類史に據て改む
○劉梁辨和同論、劉は原本列に作る類史に據て改む劉梁は後漢書に傳あり辨和同論も載せたり
○有順而失道、此五字水戶校本及類史廿五に據て補ふ後漢書には道を義に作る
○無適無莫云々、論語里仁篇に君子於天下也無適也無莫也義之與比とあるに據れり
○强不可信、類史に不可不信に作る
○可改改之、下の改字は閣本尾本前本及類史に據て補ふ

○癸巳、幸北野、駐蹕於雲林院、閲覽池塘、錫宴群臣、日暮還宮、○乙未、紀伊國名草郡人右兵衞從六位下紀堤臣清繼賜姓紀朝臣、○丁酉、奉授陸奥國无位勳九等刈田嶺神、无位鼻節神、並從五位下、緣有靈驗也、○庚子、嵯峨太皇太后不豫、遣中使奉問起居、○癸卯、丹波國多紀郡人齋院主典從七位上常澄宿禰成主、改本居貫附左京一條二坊、○九月辛亥朔、雨快降、先是不雨已久、井泉涸竭、故今人人以爲嘉澍、○己未、天皇御紫宸殿、宴重陽節、公卿已下、至六位文人、同賦問秋光之題、訖賜祿有差、○庚申、外記曹司廳前白虹見、○丙寅、近江權守從四位下藤原朝臣貞主卒也、南朝參議從三位大藏卿楓麿之孫、從五位上園主之子也、弘仁十三年、叙從五位下、頻經內外官、所在必著治迹、屬承和九年近江國闕門警固時、貞主居其國介、被叙四位、便任權守、立性溫慧、莅政幹濟、雖案牘成堆、庶務猥積、而飲酒之興、不曾休廢、醉後彌明、剖斷如流、故吏民不敢欺之、卒于官、時年七十、○戊寅、從五位下長岑宿禰秀名爲豐前介、○冬十月庚辰朔、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜祿有差、左京人玄蕃助從

○雲林院、已に上に出づ原本雲を墨に作る諸本及類史に據て改む
○右兵衞、此下脫字あるべし
○紀堤臣、紀堤は複姓なり他書に見えず
○刈田嶺神、神名式陸奥國苅田郡苅田嶺神社（名神大）、磐城國刈田郡宮村、嶺は原本領に作る諸本に據て改む
○鼻節神、同式陸奥國宮城郡鼻節神社（名神大）、今鹽竈神社末社として同郡七ケ濱村七ケ濱に祀る
○齋院、原本看院に作る尾本前本に據て改む
○常澄宿禰、出自詳ならす
（九月）辛亥朔、亥は原本丑に作る紀略に據て改む
○嘉尌、澍は澗に同じ、嘉は原本喜に作る尾本谷本宮本に據て改む
○藤原朝臣貞主、朝臣二字は類史紀略に據て補ふ
○南朝、奈良朝を云嘉祥三年三月紀に南朝右大臣大中臣清麻呂、又藤原繼繩續日本紀を上る表に廢帝受禪南朝登祚さある皆同じ

六位上日置宿禰眞淨、造輪田使主典大初位上繼、大初位上益繼、无位淨里、淨海等、賜姓三統宿禰、○[三]壬午、除班田使、參議從四位上滋野朝臣貞主爲大和國長官、刑部大輔從五位下丹墀眞人門成爲次官、參議從四位上安倍朝臣安仁爲河內和泉兩國長官、參議從四位上藤原朝臣助爲攝津國長官、是日從五位下笠朝臣數道爲丹後守、云云、○[四]癸未、左京人太政官史生從八位下楊津連弟主、內豎无位楊津連繼吉、賜姓恒世宿禰、○[六]乙酉、天皇御八省院、發遣奉幣伊勢大神宮使、○[九]戊子、攝津國言、依去天長二年正月廿一日、承和二年十一月廿五日兩度勅旨、定河邊郡爲奈野、可遷建國府、而今國弊民疲、不堪發役、望請、停遷彼曠野、便以鴻臚館爲國府、且加修理者、勅聽之、○[十八]丁酉、行幸水沼野及芹河、山城國司獻御贄、賜扈從侍從已上及國司祿有差、日暮車駕還宮、○[廿三]壬寅、越前守從四位下岑成王犯罪、官當解任、岑成王初赴任之後、乞暇入京、隱居不上、所司奏劾之、

○楓麻呂、楓はカツラと訓めり楓麻呂は房前の七子光仁天皇寶龜三年四月參議に任じ同七年六月薨ず　○關門警固時、伴健岑謀反の時なり　○溫慧、溫は原本濕に作る閣本尾本前本に據て改む　○雖案牘成堆、雖は原本雜に作る類史に據て改む　○剖斷、剖は原本割に作る閣本尾本前本に據て改む　○卒于官、官字は閣本前本に據て補ふ　○秀名、原本名を石に作る閣本尾本前本に據て改む　(十月)左京人、原本左京上庚辰二字あるは衍なり故に刪る　○支蕃助、蕃は原本番に作る閣本前本に據て改む　○造輪田使、三年五月紀に注す輪田は務古水門兵庫津の別名なり　○大初位上繼、繼の上に脫字あるべし　○淨里、淨里の二字閣本前本に據て補ふ　○三統宿禰、姓氏錄に載せず　○壬午、山崎校本に壬午以下至壬寅凡六條原在本卷最末壬寅之下係十一月者非是、按壬午正躬王爲山城國長官滋野貞主爲大和國長官藤原助爲攝津國長官公卿補任係十月又乙酉云々類史三係十月丁酉云々同書卌一及紀略並係十月可以徵矣据之蓋壬午以下舊本破裂錯亂而在卷尾者乎又坂上鷹主卒紀略在本年最尾亦可備一證今斷而移于此といへるに從ひて以下此に移す　○班田使、持統紀に班田大夫見え天平四年紀に左右京畿內班田使を任ずること見ゆ班田は六年に一度之を行ふ　○爲丹後守云云、云云は諸本に據て補ふ　○楊津連弟主、錄右京諸蕃に楊津連唐左衞郞將王文度之後也とあり楊津は攝津國河邊郡の鄕名なり、弟は原本第に作る今水戶校本に據る閣本前本には弟に作る　○恒世宿禰、後見えず　○於伊勢大神宮使、使字は原本於上にあり前本谷本及類史に據て改む　○鴻臚館、館址は眞田山の北一丁許にありと云　○水沼野、水沼はミヅヌと訓り今綴喜郡美豆村一體の地なるべし　○芹河、城南神社の南五町許の處を流れし川なりと云　○官當解任、官當は官を以て徒に當つるを云名例律に見ゆ原本官當を當官に作れり諸本に據て改む

(十一月)志摩神、神名式紀伊國名草郡志磨神社(名神大)、今海草郡中嶋村中嶋　○伊達神、同式同郡伊達神社(名神大)、今海草郡有功村園部　○靜火神、同式同郡靜火神社(名神大)、今海草郡三田村和田　○壬子、以外從五位下に至る十五字は閣本尾本前本等及類史に據て補ふ　○歟、原本疑に作る閣本前本に據て改む　○經二神社、經は原本從に作る類史及紀略に據て改む　○王臣家人、人字は閣本

○十一月己酉朔[三]辛亥、奉授紀伊國從五位下志摩神、伊達神、靜火神、並正五位下。○[四]壬子、鴨上下大神宮禰宜外從五位下賀茂縣主廣友等歎云、所謂鴨川、經二神社、指南流出、而王臣家人及百姓等、取鹿宍於北山、便洗水上、其末流來觸神社、因茲汚穢之祟屢出御卜、雖加禁制、曾無順愼者、勅、宜仰當國、迄于河源、嚴加禁斷、若違犯者、禁其身申送、國郡司并禰宜祝等許容之者、必處重科。○[十四]壬戌、參議從四位上滋野朝臣貞主爲兼勘解由使長官、式部大輔讚岐守如故、云云。○[廿九]丁丑、行幸水成瀨野、山城攝津河內等國司獻御贄、還離宮、賜扈從臣及國司等祿、日暮車駕還

前本及類史紀略に據て補ふ
〇取腐𨾗於北山、𨾗は豕也北は類史此に作る恐くは非
〇曾無顚憤者、原本曾無を不曾に作り者字なし閣本前本及類史に據て改め補ふ
〇勅宜仰當國、原本勅宜仰を宜自に作り仰字なし閣本宮本及類史紀略に據て改め補ふ
〇重科、重字は三代格に據て補ふ
〇讃岐守如故云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
（十二月）十二月己卯朔、此六字は宮本に據て補ふ
〇末使主逆麿、錄山城諸蕃に末使主百濟國人津留牙使主之後也（和泉神別にもあれど別なるべし）、主は宮本に據て補ふ
纂詁に逆恐道字之譌さ云
〇三條□□、□□は谷本に據ゐ某坊の二字ありしなるべし
〇稻荷神、去十二月戊午紀に見ゆ
〇勳七等、勳は原本動に作る諸本に據て改む
〇鷹主、田村麻呂の弟

宮、〇十二月己卯朔[八]丙戌、山城國紀伊郡人末使主逆麿、改本居貫左京三條□□、〇[九]丁亥、奉授從五位上稻荷神從四位下、〇[廿四]壬寅、散位從四位下勳七等坂上大宿禰鷹主卒、

續日本後紀卷第十四

續日本後紀卷第十五

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

起承和十二年正月盡十二月

〔乙丑〕十二年春正月戊申朔、廢朝賀、大雪也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○[四]辛亥、從四位上藤原朝臣濱主卒、贈左大臣正一位園人朝臣之長子也、弘仁元年十一月叙從五位下、累加至正五位下、補侍從、尋叙從四位下、拜神祇伯、天長四年授從四位上、除阿波守、濱主身長六尺、容儀可觀、但託以漳濱、罕有朝謁、名家之胤、而餘烈不聞、是可恨者也、卒時年六十一、○[七]甲寅、天皇御豐樂院、宴于群臣、詔授正三位橘朝臣氏公從二位、從五位上石作王正五位下、從五位下安宗王從五位上、正六位上豐井王、仲嗣王、并從五位下、從四位上南淵朝臣永河正四位下、從四位下坂上大宿禰淨野、无位源朝臣安、並從四位上、正五位下小野朝臣篁、伴宿禰成益、藤原朝臣富士麻呂、並從四位下、從五位上清岑宿禰門繼、藤原

○承和、此二字宮本に據て補ふ

○藤原朝臣、朝字は閣本宮本に據て補ふ

【承和十二年】園人、贈太政大臣房前の孫參議楓麻呂の長子なり右大臣に至り弘仁九年十二月十九日薨

○託以漳濱、文選劉公幹贈答詩に余嬰沈痼疾竄身清漳濱とあり清漳は水名にて山海經に見ゆ疾に託するを云、原本託を記に漳を障に作る託は諸本に據り漳は類史六十六に據て改む

○不聞、不は原本可に作る類史に據て改む

○坂上大宿禰淨野、淨野の二字宮本及類史九十九に據て補ふ但し類史は淨を清とす

○利世、世は原本也に作る閣本尾木宮本及類史に

據て改む
○百濟宿禰河成・大日本史方技傳に出づ、七年六月丙寅紀に余河成余福成等三人賜姓百濟朝臣とさ見え文德紀仁壽三年八月壬午紀また然り此に宿禰さあるは誤なり原本河な阿に作る宮本に據て改む
○藤原朝臣直世、朝臣の二字は宮本及類史九十九に據て補ふ
○齊之、齊は原本齋に作る閣本に據て改む
○中臣丸朝臣石成、丸は閣本尾本宮本及類史に據て補ふ類史は石な氏に作る
○宗我繼、原本我繼な成の一字に作る閣本尾本前本に據て補訂す
○頴主、頴は原本類に作る諸本及類史に據て改む
○氷宿禰、錄左京神別冰宿禰神饒速日命之後也さあり、氷は原本水に作る類史及下文に據て改む
○從五位上伴宿禰友子、以下朝宗宿禰厨子外從五位下に至る九十一字は某文庫祕本に據て補ふ纂詁には大江漁夫校寫本に據るさあり
○於大極殿、於は閣本尾

朝臣岳守、佐伯宿禰利世、並正五位下、從五位下笠朝臣數道、百濟王慶世、橘朝臣千枝、久賀朝臣三夏、惟良宿禰貞道、並從五位上、外從五位下菅原朝臣梶吉、百濟宿禰河成、无位源朝臣興、正六位上橘朝臣清蔭、藤原朝臣直世、良岑朝臣宗貞、紀朝臣宗弟、菅野朝臣高年、藤原朝臣雄瀧、橘朝臣友雄、紀朝臣眞主、和氣朝臣齊之、紀朝臣道茂、橘朝臣岑範、吉備朝臣全繼、中臣丸朝臣石成、石川朝臣宗我繼、高橋朝臣清野、伴宿禰益雄、並從五位下、正六位上善友朝臣頴主、津宿禰良友、氷宿禰繼麿、並外從五位下、日暮賜祿有差、○乙卯八、授无位順子女王、正五位下藤原朝臣潔子、並從四位下、從五位上伴宿禰友子正五位下、從五位下安倍朝臣家子、无位橘朝臣潔子、田口朝臣繼子、並從五位上、外從五位下飯高朝臣永刀、從六位上甘南備眞人伊勢子、无位笠朝臣兄笠、並從五位下、從八位下朝宗宿禰厨子外從五位下、於大極殿修最勝會之初也、是日外從五位下尾張連濱主於龍尾道上舞和風長壽樂、觀者以千數、初謂、鮐背之老、不能起居、及于垂袖赴曲、宛如少年、四座僉曰、近代未有如

此者、濱主本是伶人也、時年一百十三、自作此舞、上表請舞長壽樂、表中載和歌、其詞曰、那那都義乃、美與爾萬和倍留、毛毛知萬利、止遠乃於支奈能、萬飛多天萬川流、○丁巳、天皇召尾張濱主於淸涼殿前、令舞長壽樂、舞畢、濱主卽奏和歌曰、於岐那度天、和飛夜波遠良無、久左母支毛、散可由留登岐爾、伊天弖萬吡天牟、天皇賞歎、左右垂淚、賜御衣一襲、令罷退、○戊午、天皇御紫宸殿、以正五位下藤原朝臣岳守爲左近衛少將、從五位下良岑朝臣宗貞爲左兵衛佐、參議正四位下源朝臣弘爲兼尾張守、從五位下藤原朝臣雄瀧爲參河守、從五位下安倍朝臣氏主爲遠江守、外從五位下神服連淸繼爲伊豆守、從五位下紀朝臣高爲爲相摸介、正五位下佐伯宿禰利世爲武藏守、從五位下藤原朝臣菅雄爲常陸介、從五位下藤原朝臣有貞爲權介、正四位下南淵朝臣永河爲近江守、從五位下秋篠朝臣氏永爲出羽介、從五位下藤原朝臣直世爲越後守、參議從四位上藤原朝臣助爲兼加賀守、治部卿如故、從五位下安部朝臣甥麻呂爲兼越後介、主計頭如故、從五位上滋野朝臣貞雄爲丹波守、從五位

木及類史に據て補ふ
○龍尾道、大極殿の前にあり
○鮐背之老、釋名に九十曰鮐背、背有鮐文也とあり老人は皮膚に鮐卽ち河豚の斑文の如きものゝ現るゝより譬へて云なり
○伶人、毛詩北風簡兮章序傳に伶官樂官也伶氏世掌樂官而善焉故後世多號樂官爲伶官とあり
○那那都義乃、七繼のにて七代なり濱主は聖武天皇天平年中に生れて仁明天皇まで凡十代を經たれど稱德天皇より仁明天皇まで七代の間舞樂を以て仕奉りし故に云り
○美與爾萬和倍留、萬和の和は波の誤にて舞へるの意かといひ一に萬和は豆加の誤寫にて御代に仕奉るの意かとも云
○於支那度天云々、老翁なりとてわびつゝやは居るべき草も木も榮ゆる時には出てゝ舞ふであらうとなり、牟は原本弁に作る尾本宮本に據て改む此事體源抄にも見ゆ
○正五位下藤原朝臣岳守、正は原本從に作る上文に據て改む

〇從五位下藤原朝臣雄瀧、以下路眞人永名爲土左守に至る二百四十七字は秘本に據て補ふ
〇左大弁如故、此五字は原本上文兼尾張守の下にあり九年正月戊申紀及補任に據るに正躬王に係くべきなり故に改め移せり
〇從五位下仲嗣王、以下良友爲介に至る二十三字は秘本に據て補ふ
〇倡女、女樂人なり
〇灼立條章、公式令に凡給驛傳馬皆依鈴傳符尅數、親王及一位、驛鈴十尅、傳符卅尅云々と見ゆ
〇熊膏、抄毛群部獸體に熊白本草云熊脂一名熊白（久万乃阿布良）熊背上膏とあり閣本前本熊下に一の字あり
〇昆布、抄菜蔬部藻類に本草云昆布（比呂米一云衣比須女）味鹹寒無毒生東海とあり
〇使宛、使は原本使に作る尾本前本宮本に據て改む
〇四度使、大帳・調庸帳・税帳・朝集帳の使なり
〇食封、祿令に左右大臣二千戶とあり

下吉備朝臣全嗣爲石見守、從四位上源朝臣生爲備後守、從五位下高橋朝臣清野爲長門守、從五位上路眞人永名爲土左守、參議正四位上正躬王爲兼讃岐守、左大弁如故、從五位下仲嗣王爲豐前守、外從五位下津宿禰良友爲介、四品宗康親王爲大宰帥、〇（十六）癸亥、天皇御紫宸殿、觀踏歌、宴侍從已上、訖賜祿有差、〇（十七）甲子、天皇御建禮門、觀射也、〇（二十）丁卯、天皇內宴於仁壽殿、公卿之外、文人恩昇者不過五六人、同賦香出衣之題、宴畢賜祿、是日有勅、授內教坊倡女宍人朝臣貞刀自從五位下、〇（廿五）壬申、美濃國言、凡上下諸人、隨其位階、乘用人馬、灼立條章、而貢御鷹、馬、熊膏、昆布、并沙金、藥草等使、或以遷替之國司、使宛綱領、或差浮遊之輩、令得公乘、而公物有限、私荷無數、使等偏假威勢、不憚憲法、驛子無由告訴、運送山谷、人馬斃亡、職此之由、望請、除非貢御鷹馬并四度使之外諸使等、以初位已下子弟、被差宛之者、勅、依請、宜仰陸奥出羽兩國、及東山道諸國、令知此制、〇（廿七）甲戌、右大臣從二位橘朝臣氏公上表、請返食封一千戶、天皇賜勅書聽之、事具公卿傳、〇（廿八）乙亥、山城國公田一町二段、賜亮子內

（二月）戊寅朔、朔字は宮本に據て補ふ

○賜姓大枝朝臣、枝は原本坂に作る尾本前本宮本に據て改む

○左坊城主典、左右修理宮城使を坊城使とも稱すればかく書せるなり

○弟主稅、弟は原本第に作る諸本に據て改む

○榎井朝臣、榎井は原本復中に作る狩谷氏考語及山崎校本に據て改む十五年正月戊辰紀證とすべし錄和泉神別に榎井部饒速日命四世孫大矢口根大臣命之後也とあり

○辛巳、此條祕本に據て補ふ

○時康人康親王、共に今上の皇子、時康親王は後の光孝天皇

親王、○二月戊寅朔、天皇御紫宸殿、賜侍臣酒、於是攀殿前之梅花、插皇太子及侍臣等頭、以爲宴樂、令近衞少將錄親王以下侍從以上見參、賜御被褁子等、河內國讃良郡人相撲權掾從六位下廣江連乙枚賜姓大枝朝臣、永山之子也、未編籍帳、其父死亡、由是冐母氏姓、貫河內國、父族憐之、依實上請、乃蒙歸本、枝朝臣、貫右京一條四坊、乙枚者從五位下大枝朝臣永山之子也、未編籍帳、

○己卯、和泉國日根郡人戶主正六位上春世宿禰嶋公、兄左坊城主典從七位上春世宿禰嶋人、弟主稅大允正六位上春世宿禰嶋長等、賜姓榎井朝臣、貫右京二條一坊、○辛巳、山城國言、停置讀師、許之、○壬午、大納言正三位兼行民部卿右近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣良房上表、請解民部卿右近衞大將陸奥出羽按察使等職、天皇不許之、事具公卿傳、○丁亥、釋奠也、公卿就大學行事、○辛卯、天皇幸水成瀨野、攝津國司獻御贄、賜扈從臣及國司等祿、日暮乘輿還宮、○癸巳、天皇喚時康、人康親王等於清涼殿、令加元服、此日至于非侍從及未得解由大夫等、預宴賜祿、○丁酉、散位從四位下善道朝臣眞貞卒也、眞貞、右京人也、故

○伊與部連、錄右京神別伊與部火明命五世孫武礪目命之後也
○賜姓善道朝臣、令義解の序に朝臣を宿禰に作る
○承和五年、原本承和の二字なし宮本に據て補ふ
○三傳三禮、三傳は春秋左氏傳・公羊傳・穀梁傳・三禮は周禮・儀禮・禮記なり
○四聲、平上去入を云
○跡駁、乖舛駁雜なり莊子に共道跡駁とあり原本跡を蹐に駁を䮼に作り諸本字體明ならず跡は前本中本谷本に據り駁は莊子に據て改む
○爲備後權守、權字は九年七月戊午紀に據て補ふ
○庸布、原本庸を唐に作る宮本及類史に據て改む
○河陽宮、上に出づ宮は類史に據て補ふ
○忠良親王、嵯峨天皇第五皇子

伊賀守從五位下伊與部連家守之男也、年十五入學、數年之間、諸儒共推其才行、補得業生、大同四年課試登科、任山城國少目、尋遷播磨少目、弘仁四年兼任大學助教、十年授外從五位下、轉任博士、十一年以明經、改授從五位下、兼任越前大掾、相摸權介等、天長之初、遷大學助、歷陰陽頭、尋授從五位上、五年上表、賜姓善道朝臣、七年授正五位下、八年遷阿波守、是時有識公卿一兩人依詔旨、與諸儒等修撰令義解、眞貞亦參其事、不赴任所、承和五年授正五位上、明年授從四位下、眞貞以三傳三禮爲業、兼能談論、但舊來不學漢音、不辨字之四聲、至於教授、惣用世俗跡駁之音耳、情在進取、不能沉審、比及懸車、被拜東宮學士、遭皇太子廢、出爲備後權守、十一年聖王憐其國老、喚令入京、諸儒言、當代讀公羊傳者、只眞貞而已、恐斯學墜焉、廼命眞貞、於大學講之、後卒于家、時年七十八、

○廿三庚子、皇太子於禁中射場、有奉獻之設、緣是折紫宸殿前梅花也、承和錢廿貫以爲御賭物、庸布三百段以爲群臣料、

○廿五壬寅、行幸河陽宮遊獵、兵部卿四品忠良親王及百濟王等獻御贄、賜扈從侍從以上祿、日暮乘

○從五位下橘朝臣眞直、以下河根爲近江介に至る百十六字は祕本に據て補ふ

（三月）

○從五位下文室朝臣海田麻呂、以下爲土左守に至る三十一字は祕本に據て補ふ

○國分寺、武藏國多磨郡國分寺村に其址あり

○男衾郡、倭名抄に男衾乎夫須萬と訓り今埼玉縣大里郡に入りて村名に其名存す

○福正申云、原本申云を之の一字に作る祕本に據て改む

○吉野、九年七月左遷せらる

○駿河國言官牧牛云々、兵部式に駿河國岡野馬牧蘇蜷奈馬牧あれど牛牧なし誤あるべし

與還宮、○廿七甲辰、從五位上路眞人永名爲少納言、從五位下橘朝臣眞直爲中務少輔、從五位下藤原朝臣松影爲式部少輔、從五位上藤原朝臣行道爲刑部大輔、從五位上丹墀眞人門成爲宮內大輔、從五位下小野朝臣千株爲彈正少弼、從五位下飯高朝臣永雄爲左京亮、從五位下紀朝臣道成爲左衞門佐、從五位上清瀧眞人河根爲近江介、○三月丁未朔、五辛亥、從五位下菅原朝臣是善爲文章博士、從五位下文室朝臣海田麻呂爲彈正少弼、從五位下小野朝臣千株爲土左守、○六壬子、請名僧百口、限以五箇日、於紫宸、清涼、常寧等殿及眞言院、轉讀大般若經、兼修陀羅尼法、以有物恠也、○十一丁巳、讀經事竟、衆僧却歸、勅施度者各一人幷物、○廿三己巳、武藏國言、國分寺七層塔一基、以去承和二年爲神火所燒、于今未構立也、前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正申云、奉爲聖朝欲造彼塔、望請言上、殊蒙處分者、依請許之、○廿五辛未、有勅、召大宰員外帥正三位藤原朝臣吉野、遷配山城國、但不聽入京、○廿七癸酉、駿河國言、官牧牛百頭、放飼多煩、望請依數賣却、其直者混合正稅、永爲出擧、以其息利、年

○火仁壽殿東廂、火字類史には廂下にあり

(五月)蝱虫、抄蟲豸部蟲名に文字集畧云蝱(今案卽是蚊虻之虻字也見下文)比々流　また說文云蝱(字亦作蝱阿夫)嚙人飛虫也とあり

○北行、北は原本比に作る諸本に據て改む

○樺井社、神名式山城國綴喜郡樺井月神社(大月次新嘗)、今久世郡寺田村寺田

○丙辰、丙は原本壬に作る閣本尾本及紀略に據て改む

○將燋、燋は原本燵に作る閣本前本宮本に據て改む

粁御牛買備民間、依例貢上者、許之、○[廿九]乙亥、火仁壽殿東廂、人衆撲滅、○夏四月丁丑朔[五]辛巳、近江國荒廢田十四町爲後院開田、○[廿七]癸卯、奉幣於畿內名神祈雨、○五月丁未朔、請百僧於大極殿、限以三箇日、轉讀大般若經、以祈甘雨、○[三]己酉、緣雨未降、更延讀經二箇日、○[五]辛亥、停五日節、亦更延讀經二箇日、○[六]壬子、澍雨快降、○[七]癸丑、雨猶不休、讀經事畢、衆僧却廻、布施有差、○[九]乙卯、山城國言、綴喜相樂兩郡境內、始自去三月上旬、蝱虫殊多、身赤首黑、大如蜜蜂、好咬牛馬、咬處卽腫、相樂郡牛斃盡無餘、綴喜郡病死相尋、郡司百姓求之龜筮、就于佛神、隨分祓禳、曾無止息、移染之氣、于今北行者、令卜其由、綴喜郡樺井社及道路、鬼更爲祟、卽遣使祈謝之、兼賜治牛疫方并祭料物、○[十]丙辰、勑、比者涉旬不雨、新苗將燋、時當播殖、恐妨農業、而今嘉雨稍降、井邑赴農、不知畿外之國、如渥潤何、宜仰五畿內七道諸國、奉幣於名神、兼每社雩、令祈甘雨、若有雨降過度、應致淫害、復須奉幣祈止如初儀、○[十二]戊午、聖躬不豫、皇太子及群臣皆侍衞、遣使七寺誦經、以綿爲布施、○[十六]壬戌、聖躬平復、○[廿三]己巳、授正六位上伴宿禰

(六月)丙子朔、此三字宮本に據て補ふ
○壬午、原本癸午に作り癸未の次に係く、壬字は前本谷本に據り、次序は山崎校本に據て移し改む
○壹伎嶋、伎は原本岐に作る閣本前本宮本に據て改む
○蕨野勝眞吉、類史五十四に豐前國下毛郡擬大領蕨野勝宮守あり
○癸未、原本壬未に作り直に六月に接す壬は癸の誤なり前本谷本及類史紀略に據て改む
○門成、門は原本間に作る閣本前本宮本に據て改む
○月輪半虧、月食なり
(七月)從五位上惟良宿禰、以下圖書頭如故に至る二十字は祕本に據て補ふ
○右兵衞督如故、此下纂詁は類史に據りて從五位下藤原朝臣豐中爲右近衞少將の文を補へり
○中務少錄正七位下、七は原本五に作る閣本前本に據て改む
○巫部宿禰、錄右京神別に神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也

全成從五位下、○廿四庚午、奉レ授從四位上勳二等松尾神正四位下、餘如故、○六月丙子朔壬午、七大宰府言、撿二案內、去弘仁六年七月廿五日格云、博士醫師、敎授之勞、良有二殊別、遷代成選、幷以二六考一爲レ期、今前壹伎嶋醫師外大初位下蕨野勝眞吉辭狀云、謹案二格式、內番上者、以二六考一爲二選限、外番上者、以二八考一爲二選限、眞吉在レ任之日、全得二六考、至二于叙レ位被レ賜レ階、准二據格式、恐有二訛舛一者、府加二覆審、非二唯眞吉、以往之人、亦尙然也、望請、眞吉位記、換賜二內位、自今以後、大隅、薩摩、日向、壹岐、對馬等國嶋博士醫師同准二此例一者、聽レ之、○八癸未、勑、令下齋宮寮頭幷助撿中挍大神宮幷多氣度會兩神郡雜務上、自今以後、立爲二恒例一、此日從五位下丹墀眞人門成爲二武藏權守、○十一丙戌、神今食也、天皇熱悶、不レ御二神嘉殿一、所司行レ事、○十五庚寅、丑剋、月輪半虧、質明稍滿、○秋七月丙午朔、日有レ蝕之、○三戊申、從四位下基兄王爲二宮內大輔、從五位上惟良宿禰貞道爲二兼武藏介、圖書頭如レ故、從四位上坂上大宿禰淨野爲二兼因幡守、右兵衞督如レ故、○四己酉、神祇伯正四位下橘朝臣氏人卒、○十四己未、右京人中務少錄正七位下巫部宿禰公成、大和

○神饒速日命、速は原本連に作る閣本尾本宮本に據て改む
○大長谷稚武天皇、原本稚を桓に作る閣本前本に據て改む
○眞椋大連、天孫本紀に物部眞椋連公伊莒弗宿禰子巫部連之祖なりとあり
○出雲神、神名式丹波國桑田郡出雲神社(名神大)南桑田郡千歲村千歲に祀り國幣中社に列す
○出石神、同式但馬國出石郡伊豆志坐神社八座(並名神大)出石郡神美村宮内に祀り國幣中社に列す
○養父神、同式但馬國養父郡夜夫坐神社五座(名神大二座小三座)同郡養父市場村養父市場
○粟鹿神、同式朝來郡粟鹿神社(名神大)同郡粟鹿村粟鹿
○厚見郡、原本厚を原に作る諸本に據て改む
○伊奈波神、式外、神祇志に社舊在岐阜稻葉山椿原天文中遷于山下即今所在也とあり
○秋常、以下繩足貞繼等皆伴健岑謀反に連坐配流せらる九年七月紀に見ゆ

國山邊郡人散位從六位下巫部宿禰諸成、和泉國大鳥郡人正六位上巫部連繼麻呂、從七位下巫部連繼足、白丁巫部連吉繼等、賜姓當世宿禰、公成者、神饒速日命苗裔也、昔屬大長谷稚(雄略)武天皇時、公成始祖眞椋大連奏迎筑紫之奇巫、奉救御病之膏肓、天皇寵之、賜姓巫部、後世疑謂巫覡之種、故今申改之、○辛酉(十六)、丹波國桑田郡无位出雲神、但馬國出石郡无位出石神、養父郡无位養父神、朝來郡无位粟鹿神、美濃國厚見郡无位伊奈波神等、並奉授從五位下、依國司等解狀也、○甲子(十九)、有勅、召配流人石見權守從五位下藤原朝臣秋常、薩摩權掾正六位上丹墀眞人繩足、尾張權掾正六位上紀朝臣貞繼、又配京外人從四位下橘朝臣永名等、同聽入京、○丙寅(廿一)、大宰府言、謹案去神龜五年八月九日格云、博士者、惣三四國一人、醫師每國一人、又寶龜十年六月七日格云、去閏五月廿七日奏偁、博士醫師兼國者、學生勞於齎粮、病人困於救療、望請、每國各一人、並以六考遷替、立爲恒式、晝聞已訖者、夫醫師無兼國之任者、爲有救療之急也、今筑後、肥前、肥後、豐前、豐後等五箇國、去府之程、二日以

○綱足、原本網足に作る諸本に據て改む
○從四位下橘朝臣永名、橘逸勢に緣坐せること九年七月紀に出づ八年十一月從四位上に叙す下は上の誤なり
○晝開、勅裁を云公式令に詳なり
○無兼國之任、原本之を乏に作り兼字なし之は閣本前本及格に據り兼は三代格(前田本)に據て補ふ
○肥後、尾本前本谷本及格に據て補ふ
○去府之程二日以上云々、公式令に凡程行程馬日七十里歩五十里車三十里とし此時の一里は今の六丁弱なり
○途路、原本路を蹄に作る閣本尾本前本に據て改む
○勞受、原本營受に作る格に據て改む
○天殞、原本天殃に作る閣本尾本谷本に據て改む
○鹿嶋大神宮、大は原本太に作る閣本前本に據て改む
○祭祀、原本祭礼に作る閣本尾本宮本及類史に據て改む
○奉授、奉字は尾本前本

上、七日以下、雲山重疊、途路艱澁、吏民之中有頓病者、遂著府下、勞受醫藥、命在呼吸、且不及夕、往還之間、旣致夭殞、是則無醫師之所致也、望請、國別減史生一人、置醫師一人、加以、元來此府有得業生四人、准大隅、薩摩、日向、壹岐、對馬國嶋之例、監試得業及第之輩、以將宛補一切不任他人、然則巷無短折之愁、國有戶口之益者、勅、宜停減史生、以典藥學生及第者補之、○丁卯、常陸國言、依去年二月廿七日符、補任鹿嶋大神宮權宮司、庶務之勤、不異正任、而奉幣朝使、只給正任當色、不給權任、祭祀之場、同官異色、望請、准據正任、將預給例者、聽之、立爲恆例、○辛未、奉授常陸國無位大國玉神從五位下、○壬申、遣民部大輔正五位下長田王等、奉幣於伊勢大神宮、令祈止雨也、此月雨降、數數雖晴、故有此祈也、○癸酉、山城國飢、賑給之、

○八月乙亥朔丙子、有勅、召配流人從五位下橘朝臣田舍麻呂、正六位上清原眞人岑越、正六位上三善宿禰氏吉、從七位上橘朝臣忠宗、御船宿禰蓑繼、下野權掾正六位上紀朝臣春常、丹後權掾正七位下藤原朝臣安成、伊豫權掾正六位上紀朝臣永直、豐前權掾從六位下丹墀眞人

宮本に據て補ふ
○大國玉神、玉は原本主に作る閣本前本谷本に據て改む神名式常陸國眞壁郡大國玉神社、大國村大國玉
○長田王、田は原本因に作る宮本及十四年正月甲辰紀に據て改む
○令祈止雨也、也字は諸本に據て補ふ
○(注)數數、山崎校本數日に改め作る
○癸酉山城國云々、此條紀略には己酉に係け上に擧ぐ是非決し難し
(八月)正六位上紀朝臣春常、九年七月戊午紀六を七に作る
○正七位下藤原朝臣安成、同紀正八位上に作る
○伊豫、豫は原本輿に作る諸本に據て改む
○從六位下丹墀眞人時永、九年七月戊午紀正七位上に作る
○就大學、原本就を詣に作る閣本に據て改む
○學生、原本學士に作る紀略に據て改む
○淡路國、山崎校本此下に石屋濱與播磨國を補ひ石以下七字原无今依本居氏國史異本所引契沖

時永等、令入京。○丁丑（三）、釋奠也、公卿就大學行事。○戊寅（四）、天皇御紫宸殿、召大學博士學生等令論義、了賜祿有差。此夜地震。○辛巳（七）、淡路國明石濱、始置船幷渡子、以備往還。○辛卯（十七）、從四位上源朝臣寬爲兼神祇伯、阿波守如故。○癸巳（十九）、毀外從五位下中臣丸朝臣氏成位記、授從五位下。先是氏成錄先祖之閥閲、愬履外之告身、故改之。○己亥（廿五）、正五位下佐伯宿禰利世爲但馬守。是日地震。○庚子（廿六）、攝津國請停廢讀師、只置講師。聽之。

○九月乙巳朔、奉授越中國婦負（ネヒ）郡從五位下鵜坂神從五位上、新川郡无位日置神從五位下。○癸丑（九）、是日重陽節也。天皇御紫宸殿賜宴、令賦九日洗蘭之題。宴了賜祿有差。○甲寅（十）、相摸國言、依承和九年六月九日格、勸造青苗簿帳、毎年進上。今商量、有損之年、有用勘會、無損之歲、未見其用。望請、當有損年、勘造進上、自此之外、將從停止者。依請、自餘諸國、亦准此者。○乙卯（十一）、天皇御大極殿、遣使奉幣於伊勢大神宮、例也。○癸亥（十九）、仰河內攝津兩國、令苅掃難波堀川所生草木、爲引石川龍田兩河諸流、令通西海也。○乙丑（廿一）、暴雨大風、拔樹發屋。是日始定撿五畿內七道諸國

損田不堪佃田使等穟限、事在別紙、○(廿六)庚午、筑前國宗形郡人權主工從八位上難波部主足、改本姓賜美努宿禰、貫河内國若江郡、請五十僧於紫宸殿讀經、爲息灾也、○(廿七)辛未、竟事有施有差、○(廿八)壬申、下野國芳賀郡人大麻續部總持、男足利郡少領外從八位下大麻續部嗣吉、改本姓賜下毛野公姓、

之識加之と云り尚よく尋ぬべし
○明石濱、播磨國明石郡明石鄕にあり
○以備徃還、纂詁に類史に依れりさて此下に從五位上安棟王爲中務大輔云々の九十一字を補ひ私記に一云として引けるも所據明ならず故に取らず
○癸巳、以下己亥、庚子の三條は祕本に據て補ふ
(九月)鵜坂神、神名式越中國婦負郡鵜坂神社、鵜坂村に坐す　○日置神、同式同國新川郡日置神社　○甲寅、此條類史八十に據て補ふ　○自此之外、類史自上に日の字あり衍なれば刪る　○癸亥、此條紀略に據て補ふ　○難波堀川、仁德紀十一年十月紀に見ゆ　○石川龍田兩河、石川は河内國に屬す南河内郡高向村藏王嶺に源を發し道明寺村に於て大和川に會す、龍田川は大和國生駒郡(舊平群郡)北生駒村に源を發し龍田村を經て龍田川となり大川に會して大和川となる　○乙丑、此條は祕本に據て補ふ　○穟限、穟は字書に與穗通禾穗とあり毛見の期限を云纂詁は權限に改む　○權主工、大宰府に大工一人少工二人掌城隍舟檝戎器諸營作事とあれば之をいへるなるべし　○美努宿禰、錄河内神別美努連角凝魂命三世孫天湯川田奈命之後也とあり天武紀十三年に三野縣主に姓連を賜はることと見え寶龜元年紀に美努連財刀自姓宿禰を賜はること見ゆ　○請五十僧云々、爲息灾也まで十四字は紀略に據て補ふ　○辛未、此條は祕本に據て補ふ　○大麻續部、續は水戶校本績に作る　續績古へ通用す　○足利郡、抄國郡部下野國郡名足利(阿志加加)と訓り　○下毛野公、錄左京皇別に下毛野朝臣崇神天皇皇子豐城入彦命之後也、天武天皇十三年紀に下毛野君賜姓曰朝臣と見え天平神護元年紀に吉彌侯根麻呂等四人賜姓下毛野公と見えたり

○冬十月乙亥朔、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、日暮賜祿有差、○(十四)戊子、聖躬不豫也、親王公卿、皆候陣頭、○十一月甲辰朔(二)乙巳、毀越前守從四位下岑成王四位位記、緣有犯罪也、○(十四)丁巳、勅、鴨河悲田預僧賢儀所養孤兒、清繼、清成、清人、清雄等十八人、並賜新生連姓、貫左京九條三坊、卽以清

(十月)冬、冬字は宮本に據て補ふ
○十月乙亥朔、此條類史七十五及紀略に據て補ふ
○戊子、此條類史三十四及紀略に據て補ふ
(十一月)悲田預、悲田院の預なり
○賢儀、儀は原本義に作る閣本前本等に據て改む

○清繼清成、清成は閣本尾本前本等に據て補ふ
○新生連、新に設けられし姓なるべし
○新嘗會也、以下戊辰に至る十一字は類史九及紀略に據て補ふ
(十二月)戊寅、此條原本庚辰の下にあり干支を推して此に移す
○侍醫、侍字は閣本尾本宮本に據て補ふ
○從五位下橘朝臣、以下豐後守に至る廿七字は秘本に據て補ふ

繼爲戸主、○辛酉[十八]、參議正四位下三原朝臣春上卒、○丁卯[廿四]、新嘗會也、天皇御神嘉殿、曉後廻本宮、○戊辰[廿五]、天皇御紫宸殿、宴于百官、日暮賜祿有差、○十二月甲戌朔、戊寅[五]、大宰府馳驛言、新羅人賚康州牒二通、押領本國漂蕩人五十餘人來著、此日外從五位下物部首廣泉爲兼內藥正、侍醫如故、從五位下橘朝臣枝主爲左京亮、從五位下清原眞人澤雄爲豐後守、○庚辰[七]、從四位下稻荷神預名神例、○戊子[十五]、月有蝕之、

續日本後紀卷第十五

續日本後紀卷第十六

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

起承和十三年正月盡十二月

十(丙寅)三年春正月癸卯朔、天皇御大極殿受朝賀、畢廻御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被。○(三)乙巳、天皇朝覲太皇太后於冷然院。○(四)丙午、烏含傳漏之籤、飛去墮于春興殿上。○(七)己酉、天皇御豐樂殿、宴于群臣、詔授无品時康(平孝)親王四品、從四位上安倍朝臣安仁正四位下、從四位下正行王從四位上、无位房世王從四位下、從五位下弘宗王從五位上、正六位上全世王、益吉王、並從五位下、從四位上源朝臣明、田口朝臣佐波主、並正四位下、從四位下藤原朝臣長岡從四位上、正五位下藤原朝臣良相、藤原朝臣岳守、並從四位下、從五位上伴宿禰雄堅魚、橘朝臣百枝、滋野朝臣貞雄、藤原朝臣諸成、並正五位下、從五位下藤原朝臣貞本、文室朝臣海田麻呂、藤原朝臣氏範、石川朝臣越智人、在原朝臣行平、並從五位上、外從五位

○承和、此二字宮本に據て補ふ

○臣、原本臣字を脫す閣本前本尾本等に據て補ふ

【承和十三年】侍從、原本從を臣に作る類史七十一に據て改む

○烏含傳漏之籤、原本烏を鳥に作る閣本前本及紀略に據て改む漏は漏刻なり說文に漏以銅壺受水刻節晝夜百刻とあり籤は竹札也時刻を書きたる札なり此籤を以て時を仲に報ずるならむ

○春興殿、拾芥抄中末春興殿日華門南

○房世王、仲野親王の子

○益吉王、吉は下文善に作る

○佐波主、主は原本王に作る宮本及類史九十九に據て改む

○從四位下藤原朝臣長岡、原本下を上に作り長字缺く下は諸本及類史に據て改め長は宮本及類史に據て補ふ

○正六位上藤原朝臣良仁、正六は原本從五に作り諸本空白とす今類史に據る
○安立、立は原本仁に作り諸本空白とす今類史に據る
○龍男、原本益雄に作り諸本二字空白とす今類史に據る
○藤原朝臣行人、原本朝臣の下二字を空白とす類史に據て補ふ
○廣友、友は原本缺く類史に據て補ふ
○眉刀自、原本眉を履に作る閣本尾本前本等に據て改む
○伊賀臣、錄右京皇別伊賀臣大稻輿命男彦屋主田心命後也とあり
○葛木□、下□、閣本前本も亦之に同じ纂詁葛木日下連に作れど所據明ならず
○相摸守如故、補任に承和十三年二月兼二相摸守一とあり此に相摸守如レ故とあるは誤か

下有道宿禰氏道、正六位上藤原朝臣良仁、安倍朝臣安立、伴宿禰龍男、滋野朝臣善蔭、橘朝臣氏雄、藤原朝臣行人、紀朝臣今守、高階眞人岑緒、橘朝臣春成、坂上大宿禰清河、藤原朝臣秀雄、大枝朝臣直臣、田口朝臣仲根、伴宿禰御園、賀茂朝臣江人、嶋田朝臣貞繼、佐伯宿禰眞持、大宅朝臣年雄、並從五位下、正六位上都宿禰貞繼、淸内宿禰園繼、縣連氏益、伊福部宿禰廣友、並外從五位下、宴訖賜レ祿有レ差、○庚戌（八）、於二大極殿一修二最勝會一、是日、授二四品賀樂内親王三品一、從四位下大和朝臣舘子從四位上、正五位下橘朝臣枝子從四位下、无位大中臣朝臣海子從五位上、无位藤原朝臣瀧子、橘朝臣是影、田口朝臣全子、並從五位下、正七位上太秦公宿禰眉刀自、伊賀臣眞廣、葛木□下□鳳子、並外從五位下、○乙卯（十三）、以二參議正四位下源朝臣弘一爲二兼左大弁一、尾張守如レ故、參議正四位下安倍朝臣安仁一爲二兼右大弁一、彈正大弼春宮大夫下野守如レ故、參議從四位上藤原朝臣助一爲二兼治部卿一、加賀守如レ故、參議從四位下橘朝臣岑繼一爲二兼右衞門督一、相摸守如レ故、正四位下源朝臣明一爲二刑部卿一、從五位下藤原朝

○右京大夫、天安二年七月己巳紀には左京大夫に作る
○從五位上惟良宿禰、原本上を下に作る十二年正月甲寅紀に據て改む
○三品基貞親王、淳和天皇の皇子、三は原本無に作る十一年正月庚寅紀に據て改む
○興道、興は原本空白さす宮本及下文に據て補ふ
○直臣、原本眞臣に作る閣本前本谷本等に據て改む
○從五位下大岡宿禰、五位下の三字は閣本前本谷本等空白さす
○益善王、善は上文吉に作る
○宗貞、貞は閣本宮本に據て補ふ

臣良方、從五位下源朝臣興、並爲侍從、從四位上正行王爲右京大夫、從五位上惟良宿禰貞道爲兼伊勢介、圖書頭如故、從五位下橘朝臣本繼爲武藏介、三品基貞親王爲上總太守、從五位下藤原朝臣行人爲介、從五位下藤原朝臣豐仲爲兼美濃介、右近衞少將如故、從五位下伴宿禰御園爲信濃介、三品仲野親王爲上野太守、從五位下高階眞人岑緒爲下野介、從五位下小野朝臣興道爲陸奥守、從五位下安倍朝臣安立爲出羽守、從五位下豐岡宿禰眞黑麿爲若狹守、從五位下良岑朝臣長松爲丹波守、從五位下良岑朝臣宗貞爲備前介、從五位上春澄宿禰善繩爲兼備中介、文章博士如故、從五位下大枝朝臣直臣爲備後守、從五位下大岡宿禰豐繼爲安藝介、從五位下伴宿禰龍男爲紀伊守、從五位下山田宿禰古嗣爲阿波介、從五位下紀朝臣今守爲筑前守、從五位下益善王爲筑後守、從五位下大和眞人吉直爲肥後守、從四位下藤原朝臣良相爲兼左近衞中將、內藏頭阿波守如故、從五位下藤原朝臣仲統爲少將、從五位下良岑朝臣宗貞爲兼少將、從五位上在原朝臣行平爲左

兵衛佐、從五位下橘朝臣眞直爲右兵衛佐、從四位下藤原朝臣岳守爲左馬頭、○十四丙辰、最勝會竟、殊引名僧十餘人於禁中令論義、訖施御被、○十六戊午、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、覽踏歌、訖賜祿有差、○十七己未、天皇御豐樂殿、觀射也、○二十壬戌、天皇內宴於仁壽殿、公卿及詞客預宴者五六人、同賦百花酒之題、宴竟賜祿、○廿六戊辰、召外從五位下尾張連濱主於淸涼殿前、令奏舞、于時年百十四、帝矜其高年、授從五位下、是日、亦授正六位上賀茂朝臣乙本從五位下、乙本、造琴之良工也、○二月壬申朔八己卯、伊勢國言、鈴鹿郡枚田(ヒラタ)郷戶主川俣縣造繼成戶口、役茂麻呂妻川俣縣造藤繼女產男、其體自胸以上、兩頭分裂、二人相對、四手相具、面貌美麗、頭髮甚黑、自腹以下、同共一體、生而一日死焉、○十一壬午、從五位下橘朝臣岑範爲中務少輔、從五位下藤原朝臣春岡爲宮內少輔、從五位上藤原朝臣安永爲大膳大夫、從五位下伴宿禰益雄爲鼓吹正、從五位上丹墀眞人門成爲武藏守、從五位下陸奥介坂上大宿禰正宗爲兼鎭守將軍、從五位下安倍朝臣甥麻呂爲播磨介、○廿三甲午、太政官隨僧綱牒處分、從儀之

○預宴、原本宴を事に作る諸本及類史七十二に據て改む

○尾張連濱主、十二年正月乙卯條を參看すべし

(二月)枚田郷、抄郡郷部伊勢國鈴鹿郡枚田(比良多)とあり、枚は原本牧に作る閣本尾本前本及紀略に據て改む今も枚田村あり

○川俣縣造繼成、儀式帳に鈴鹿小山宮に坐し時川俣縣造等遠祖大比古神御田井に神戶を進るさ見ゆ成は祕本に據て補ふ

○役茂麻呂、役は原本保に作る閣本前本谷本に據て改む役氏は十年正月丙辰紀に見ゆ

○正宗、坂上系圖に當宗に作る田村麻呂の孫

○從儀之僧、拾芥抄中末に從儀師八人弘仁十年格爲定數とあり從儀師は威儀師に次ける僧職なり

僧、宜依其本數、以八人爲定、其餘皆從停止、○戊戌、地震、○己亥、從五位下益善王男興岑、忠道、忠棟、忠主等王九人、正六位上藤坂王男豐助、將兄、諸山等王五人、正六位上御藤王男藤主、藤宗、有宗等王三人、賜姓清原眞人、○庚子、從五位下紀朝臣松永爲主計頭、從五位下菅原朝臣善主爲主稅頭、從五位下陸奧守小野朝臣興道爲兼下野權介、從五位下菅原朝臣是善爲兼越後介、文章博士如故、百濟宿禰河成爲安藝介、○三月壬寅朔己酉、從五位下大神朝臣宗雄爲大監物、○庚戌、勘王世所言、氏姓之中、身住外處者、或未被人知、至於對問、以能說家譜者、卽爲是眞、鎭言系譜者、因謂之僞、无人證引、只據文書、伏恐、姧濫之輩、冒入宗枝、愚惷之人、空漏皇胤、望請、仰所々司、若有如此之色、速令言上、更加搜索、以糺眞僞者、依請、仰五畿內諸國、令言之焉、○丙辰、播磨國揖保郡人散位正八位上百濟公清永、幷男一人女一人、改本居貫附左京三條二坊、又同郡人散位正八位上佐伯直宅守、大初位下佐伯直仲成等、改本居貫附右京六條二坊、○庚申、大和國言、居住山邊郡長屋鄕京戶左京三

○從五位下陸奧守、原本下を上に作る正月乙卯條に據て改む
○兼越後介、介は原本助に作る閣本前本等に據て改む
○河成、原本河を阿に作る閣本前本宮本に據て改む十二年正月甲寅紀に據るに百濟の上に恐くは從五位下の四字を脫す
(三月)勘王世所言、纂詁に謂勘錄諸王世系之所也猶撰國史所記錄所皆臨時所置と云
○鎭言、字書に鎭は重也とあり能に對して云へるか山崎校本には錯に改め從堀本考語と云り
○冒入、原本冒を妄に作る閣本に據て改む諸本冑に作るは冒の訛なり
○愚惷、原本愚を豈に作る山崎校本に據て改む
○空漏、漏は原本滿に作る山崎校本に據て改む
○所々司、所の一字恐らくは衍
○丙辰、此條庚申の次に重出す彼を削りて此を存す
○佐伯直、直は原本眞に作る閣本前本に據て改む
○貫附右京六條二坊、附

○は山崎校本に據て補ふ
○長屋郷、倭名抄に見ゆ
○犬甘、甘は原本耳に作る閣本前本宮本に據て改む
○(四月)琵琶、原本琵琵に作る谷本宮本及類史七十五に據て改む
○知音者、管絃を能くするものを云
○彈琵琶、紀略に據て補ふ
○歌謠、催馬樂朗詠の類を云
○丁亥、及己丑の條は某文庫秘本に據て補ふ纂詁に慶長二年寫本とするは非なり
○(五月)壬寅、此條十一年五月紀にも出でたれど類史五十四に據て彼を削りて此を存す
○狛江郷、原本狛を猪に作る狩谷校本に和名抄多磨郡有狛江郷(古万江)今有駒井村蓋狛江之轉訛也此作猪江恐誤といひ山崎校本に之に據て改む今之に從ふ
○眞刀自咩、眞に原本直に作る閣本及類史五十四に據て改む下同じ
○從五位下菅朝臣高年、以下常永爲美濃守に至る

條一坊戸主犬甘千麻呂牛産三足犢、下唇長於上唇、行歩不便、動則顚仆、○夏四月辛未朔、天皇御紫宸殿、皇太子入覲、恩盞頻下、群臣具醉、殊召從四位下藤原朝臣雄敏、令彈琵琶、後令諸大夫知音者、遞吹笙笛、彈琵琶、更奏歌謠、日暮賜祿有差、○癸未、十三典侍從四位上大和朝臣館子卒也、○丁亥、十七常陸國那賀郡從五位下勳八等吉田神預之名神、○己丑、十九依大宰府解、置大隅國桑原郡主政一員、○五月辛丑朔、壬寅、二武藏國言、多磨郡狛江郷戸主刑部直道繼戸口、同姓眞刀自咩、爲同郷刑部廣主妻、生四男三女、經廿一年、夫乃死矣、眞刀自咩居喪有禮、事死如生、墳側結廬、晨昏悲泣、推移歳月、終始不渝、見其操行、可謂節婦者、勅、宜特授位二階、兼終身免同戸田租、○戊申、八奉授美濃國不破郡從五位下中山金山彦神正五位下、○癸丑、十三請百僧於八省院、限三箇日讀經、以祈雨也、從五位下菅朝臣高年爲造酒正、外從五位下縣連氏益爲勘解由使次官、從五位下橘朝臣眞直爲右近衛少將、從五位下紀朝臣最弟爲右兵衛佐、從五位下藤原朝臣常永爲美濃守、○癸亥、廿三從四位下東宮學士小野

七十二字は秘本に據て補ふ菅朝臣は下文に菅原朝臣とあり
○權右中弁、原本右を左に作る下文九月壬子紀に爲二左中弁一とあるに據て改む
○外從五位下春江宿禰、外字は類史九十九に據て補ふ
○從五位下大枝朝臣氏子、從五位下の四字は水戶校本に據て補ふ原本子下に並字あり閣本前本に據て削る按に文德紀仁壽三年正月己亥紀に無位大枝朝臣氏子を從五位下に叙すとあるは同名異人か考ふべし
○典侍、以下尙藥尙殿尙掃典水典膳尙酒尙縫典縫何れも後宮職員令なる十二司中の內侍司に屬する女官なり
○益野女王、女字は宮本に據て補ふ
○小子部連諸主、部字は宮本に據て補ふ堀本に子を野に作るさ纂詁に云り
(六月)庚午朔、纂詁は乙本(慶長二一年寫本)に據れりさて此下に癸未敕令二齋宮寮頭檢二挍大神宮氣多度會兩郡雜務一云々

朝臣篁爲兼權右中弁、〇丁卯[廿七]、授外從五位下春江宿禰安主從五位下、從五位下大枝朝臣氏子、從五位上、從四位下菅野朝臣人數爲典侍、從五位下益野女王爲尙藥、從五位下路眞人氏子爲尙殿、從五位下紀朝臣岑子爲尙掃、外從五位下飛鳥部稻子爲典水、正五位下伴宿禰友子爲典膳、從五位下田口朝臣全子爲尙酒、從四位下橘朝臣枝子爲尙縫、從五位下小子部連諸主爲典縫、〇己巳[廿九]、出羽國飢、遣使賑給、〇六月庚午朔、甲申[十五]、圖書寮雜色生等、停經式部省監試、緣本司定、令預勘籍例、〇甲午[廿五]、左京四條四坊戶主正六位上廣田王戶口長田、田吉、豐田、次田等王卌七人、並賜姓清原眞人、〇秋七月庚子朔辛丑[二]、正五位下岑成王男永安、安良、安基、正五位下長田王男基雄、內舍人正六位上惟岳、常名、正六位上長統王男玄瞻、正文等王卌九人、賜姓清原眞人、〇己酉[十]、從五位下永原眞人貞主爲散位頭、從五位下藤原朝臣氏雄爲兵部少輔、從五位下石川朝臣越智人爲遠江守、從五位下佐伯宿禰眞持爲介、從五位上清瀧朝臣河根爲近江介、從五位下橘朝臣海雄爲備前守、〇己未[二十]、授

の一條を補へり
〇戸口長田云々、長田王賜姓の事嘉祥二年十一月王子紀に再出す
〇田吉、田字は閣本尾本谷本等に據て補ふ山崎校本に恐當レ作ニ吉田一と云
〇卅七、原本卅七に作る諸本に據て改む
（七月）安良、安は原本闕く諸本に據て補ふ
〇玄瞻、原本瞻を贍に作る閣本谷本に據て改む
〇從五位下石川朝臣越智人、以下備前守に至る五十四字は秘本に據て補ふ
〇岑成王正五位上、原本上を下に作る宮本及下文に據て改む
〇據法條降一等、名例律に凡免所居官及官當者其月年之後降ニ先位一等一敍とあり
〇從五位下橘朝臣、以下左馬頭に至る百五十八字は秘本に據て補ふ
（八月）不耻下問、及見賢思齊は論語公冶長及里仁篇に出づ
〇子弟、原本弟を第に作る諸本に據て改む
〇昔王徽之云々、王徽之字子猷晉の人なり晉書王徽之傳に此故事見ゆ

正五位下岑成王正五位上、岑成王、去年緣レ犯レ罪、毀ニ從四位下位記一、今據ニ法條一、降ニ一等一敍レ之、〇丙寅[廿七]、從五位下菅野朝臣高年爲ニ圖書頭一、從五位下橘朝臣清蔭爲ニ雅樂頭一、外從五位下出雲朝臣全嗣爲ニ造酒正一、從五位下藤原朝臣仲統爲ニ兼伊勢介一、左近衞少將如レ故、從四位下藤原朝臣富士麻呂爲ニ陸奧出羽按察使一、從五位下御長眞人近人爲ニ陸奧守一、從四位下藤原朝臣岳守爲ニ右近衞中將一、從五位上在原朝臣行平爲ニ少將一、從五位下藤原朝臣春岡爲ニ右衞門權佐一、從五位下清原眞人秋雄爲ニ左兵衞佐一、從五位上久賀朝臣三夏爲ニ左馬頭一、〇八月庚午朔、辛巳[十二]、散位正三位藤原朝臣吉野薨、參議從三位勳二等大宰帥藏下麻呂之孫、致仕參議正三位兵部卿綱繼之男也、少年遊學、不レ恥ニ下問一、性寬大能容レ衆、見レ賢思レ齊、手不レ釋レ卷、敎ニ誨子弟一、尤是柔和、雖レ視ニ過失一、未ニ嘗白眼一、至ニ于執論一、不ニ必違一レ法、寄ニ住之處一、好常種レ樹、昔王徽之寄ニ居空宅一、便令レ種レ竹、人問ニ其故一、徽之指レ竹曰、何可ニ一日無一レ此君一邪、可レ謂千古猶有レ隣矣、尊ニ事二親一、在レ堂定省溫凊、造次無レ虧、忠孝之道、與爲レ多焉、先レ是、父兵部卿聞レ有ニ鮮肉一、遣ニ人索一レ之、遇ニ朝謁

○無此君邪、此字は宮本に據て補ふ
○尊事二親、原本事を年に作る宮本に據て改む
○造次、急遽苟且の時なり
○庖人靳固、庖人は料理人なり靳固は吝みて之を祕するなり
○分遺、原本分遣に作る閣本前本に據て改む
○除駿河守、原本此下に任參河守の四字あり閣本尾本前本等になし公卿補任に據るに吉野は參河守に任ぜしことなし故に削る
○二年兼伊豫守、補任には三年とす
○右近衞大將、衞は水戶校本に據て補ふ
○九年十一月、九年の二字は補任に據て補ふ
○辭脫宿衞之職、天長十年三月壬寅紀に出づ
○七年五月、七は原本六に作る七年五月紀に據て改む
○朞年、原本暮年に作る閣本宮本に據て改む
○廁朝端、廁は雜なり朝端は朝班に同じ
○琛宮、琛は原本珠に作り類史瑤に作る今閣本前

未歸、庖人靳固、不以分遺、後乃聞之、向庖人責讓涕泣、終身不復肉食、弘仁四年、自主藏正、任美濃少掾、七年春遷春宮少進、十年正月、叙從五位下、除駿河守、强濟諸事、所部肅清、十四年夏四月、東宮(淳和)受禪登寶位、五月以吉野拜中務少輔、尋任左近衞少將、天長元年加從五位上、二年兼伊豫守、爲畿內巡察使、八月叙正五位下、四年授從四位下、任皇后宮大夫、五年閏正月兼右兵衞督、五月拜參議、兼式部大輔、七年五月、遷春宮大夫、八月叙正四位下、爲右近衞大將、春宮大夫如故、九年十一月授從三位、任權中納言、十年三月、東宮(仁明)受讓卽帝位、(深草)授正三位、厥後辭脫宿衞之職、追從後太(淳和)上天皇、承和元年、改權爲正、七年五月、後太上天皇宮車晏駕、朞年之內、絕而不宦、上表辭職、至于再三、不見聽許、中使頻徵、强廁朝端、未幾、九年七月、緣坐伴健岑事、左貶大宰員外帥、十二年正月、遷配山城國、薨時年六十一、○丙戌(十七)、勅曰、琛宮瓊室、帝王之都、未出塵籠、紫府丹臺、神仙之窟、終言爂宅、居之軼掌於龍圖、栖之辛勤於鶴背、道之囚、眞之俘、可以出、可以去、朕翹(アゲ)誠(チ)道素、住思(チ)眞玄、已因少日之久情、更益中年

之篤志、問達士、曰、謀傳法之由、案名山記、覓建祠之處、於是遇彼幽爽、副斯勤求、高岑東峙、耆闍山之形勝匪殊、懸徑西通、王舍城之風煙相接、此則天台之上界、銀地之道場也、松柏數步隔墻、雲霞一色連院、經行同徑、盥嗽共泉、德也不孤、歸斯隣之有仁、道之將開、遇此山之無主、爰鏟爰薙、乃正乃平、役人於嶮高、勸之則如來之力、伐木於幽邃、運之則菩提之功、不日而成、蓋在茲乎、爾乃土木之細工終焉、金檀之晬容畢矣、所配之人、禪定之十仙、所行之道、般若之一乘、事息境幽、三業之言行律全、地高風動、六時之鐘梵聲遠、夫利己者、利他之根、自邇者、及遠之本、近則上護國家、下覆人民、比常樂之樂邦、等壽仙之壽土、遠則庿主宗靈、有識無識、三惡趣、一闡提、共始于因、同終于果、嚱呼不誑語者也、實語者也、朕此心誓、必不唐捐、其寺家流例、檀施色目、別有勅旨、下於所司、唯記來由、貽之于後、先是、天皇建定心院於延曆寺、故今日有此勅、○辛巳、奉授上野國群馬郡無位甲波宿禰神從五位下、

本宮本等に據て改む
○未出塵籠、俗塵を免るること能はずとなり塵籠は塵れたる籠なり
○終言燬宅、言は思燬は烈火也燬宅は火宅に同じ法華經に三界無安猶如火宅とあり
○翹誠道素云々、道素眞玄は並に佛教を云
○幽爽、奥深くして爽かなる場處、比叡山のこと
○耆闍山之形勝云々、法華經に一時佛住王舍城耆闍崛山中とあり耆闍崛山は靈鷲山なり以て比叡山に比し王舍城を京都に比す、原本徑を遂に作る類史百八十に據て改む
○道場也、也は塙本及類史百八十に據て補ふ
○隔墻、隔は原本楊に作り諸本攝に作る今類史に從ふ
○經行、慈恩解に西域地濕疊甎爲道於中往來如布之經故曰經行とあり
○德也不孤、論語里仁篇に出づ
○爰鏟爰薙、鏟は損削也薙は除草也
○不日而成、毛詩大雅靈臺章に庶民攻之不日成之とあり　○晬容、晬は廣韵に潤澤貌とあり類史には睟容に作る　○禪定之十仙、佛と論義し終に歸伏して阿羅漢果を證せる闍那首那梵志以下の十仙を云　○般若之一乘、大乘義章に言般若者此方名慧於法照達故稱爲慧また法華經に十方佛土

中唯有一乘法無二無三とあるに據れり原本一を二に作る閣本前本宮本及類史に據て改む　○三業之言行律全、僧徒の戒律全きを云三業は身口意の所作なり　○自邇者云々、中庸に君子之道辟如行遠必自邇とあるに據れり　○廣主、原本廣王に作る類史に據て改む　○有識無識・有情無情なり　○三惡趣、地獄餓鬼畜生なり　○一闡提、涅槃經五に一闡提者斷滅一切諸善根本心不攀緣一切善法とあり成佛し難き者を云　○誑語、語字は類史に據て補ふ　○唐捐、唐は空なり　○檀施、布施に同じ　○辛巳、此條山崎校本及墓誌は上文辛巳條に併せ收む然れども紀略にも辛巳に作りて此に在り或は癸巳の誤か姑く舊に從て後考を俟つ

(九月)薩都神、神名式常陸國久慈郡薩都神社、佐都村里野宮
○寒河神、同式相摸國高座郡寒川神社(名神大)今寒川村宮山に祀り國幣中社に列す原本寒を塞に作る閣本前本等宮本に據て改む
○從五位下藤原朝臣關主爲左衛門佐、此十五字に某文庫秘本に據て補ふ
○咎人、原本咎を皆に作る尾本に據て改む
○從五位下豐前王、以下彈正大弼に至る四十一字は秘本に據て補ふ
○從五位下都長眞人、以下陸奧守如故に至る二十一字は同じく秘本に據て補ふ
○石上內親王、紹運錄に伊勢朝臣繼子高岳親王同母妹とあり
○從四位上、原本四を五に作る類史百七十九及紀略に據て改む

○九月己亥朔丙午、奉授常陸國勳十等薩都神、相摸國无位寒河神並從五位下、○丁未、是重陽節也、天皇御紫宸殿、宴于親王以下至六位文人、同賦九日侍宴詩、韻用平字、宴訖賜祿、○辛亥、參議從四位上藤原朝臣長良爲兼讃岐守、左兵衛督如故、從五位下藤原朝臣關主爲左衛門佐、河內國河內郡人式部位子從六位下額田首咎人、改本居貫附右京五條三坊、○壬子、從四位下小野朝臣篁爲左中弁、從四位下藤原朝臣嗣宗爲右中弁、從五位下藤原朝臣松影爲左少弁、從五位下橘朝臣伴雄爲侍從、從五位上藤原朝臣氏宗爲式部少輔、從五位下豐前王爲大藏大輔、從五位下滋野朝臣善蔭爲宮內少輔、從四位上橘朝臣永名爲彈正大弼、從四位下藤原朝臣富士麿爲相摸權守、陸奧出羽按察使如故、從五位下都長眞人近人爲兼下野權介、陸奧守如故、從四位下藤原

○稟性、原本性を姓に作る諸本に據て改む
○延暦廿三年云々、補任に延暦廿三年五月十七日任内舍人とあり寛政版本三を二作るは非なり
○三代、嵯峨淳和仁明天皇を申せり
○平章事、參議を云
○天台眞言兩宗云々、釋書最澄傳に弘仁六年秋八月因和氏請於大安寺塔中院闡揚妙法また弘法大師傳上に天長六年和氣朝臣眞綱和氣仲世以神願寺奉付屬空海僧都作納涼房爲住所云々とあり
○眞綱及、原本及を乃に作る諸本に據て改む
○廣世、原本世を瀬に作る閣本前本及類史百七十九に據て改む
○厨家、近衞府の厨家
○簞醪投河、三略に良將之用兵有饋簞醪者使投諸河與士卒同流而飲夫一簞之醪不能味一河之水而三軍之士思爲致死者以滋味之及己也とあるに出づ攝津の良田を買得の事は政事要略二十八所引吏部王記に承平元年十二月十九日依左

朝臣岳守爲兼美作守、右近衞中將如故、○甲子[廿六]、无品石上内親王薨也、日本根子天推國高彥尊(平城)之皇女也、○乙丑[廿七]、參議從四位上和氣朝臣眞綱卒也、故民部卿從三位淸麻呂之第五子也、眞綱稟性敦厚、忠孝兼資、執事之中、未嘗邪枉、少遊大學、頗讀史傳、弱冠補文章生、延暦廿三年始預官班、任内舍人、大同四年、遷治部中務丞、弘仁六年、叙從五位下、爾來三代、經歷内外官、惣是卅餘員、左右大中少弁、左右中少將、凡厥淸要之地、莫不涉踐、爾乃爵止於從四位、官登於平章事、加以道心有素、佛乘是歸、天台眞言兩宗建立者、眞綱及其兄但馬守廣世兩人之力也、又爲左近衞次將時、割留俸分、兼添私物、買得攝津國良田、納之厨家、有簞醪投河之義、士卒補疲、于今賴之、情切助公、於爲可見、但禍福糾纆、倚伏難量、至當年春夏際、法隆寺僧善愷、告少納言從五位下登美眞人直名所犯之罪、官欲任理聽其訴訟、而同僚中有援引直名者、翻以傍官誣爲許容違法之訴、先令明法博士等斷許容之罪、博士等有所畏避、不曾正言、箕星畢星、所好各異、公罪私罪、其論不同、於是眞綱自謂、塵起之路、行人掩

相公消息、參內裏御佛名、先至左近陣、左衞門督恒佐卿先在陣、羞甘糟目因栢梨、余問其故、督云昔府中將和氣眞綱以攝津國栢梨莊寄府、郎以其地利充官人以下酒醪料、于今傳其風、故目之云見ゆ
〇糺經、原本糾を紀に作る、閣本尾本に據て改む
〇不曾正言、十一月壬子の條を參看すべし
〇箕星畢星、尙書洪範孔傳に箕星好風畢星好雨、人各好惡あるに喩ふ
(十月)冬十月、冬字は紀略に據て補ふ
〇散位、前に注す
〇繼枝王、王字は宮本及紀略に據て補ふ
〇伊豫親王、桓武天皇の皇子
〇佛名懺悔、五年十二月己亥紀に見ゆ
(十一月)贖銅、官人罪ありて刑を受くべきを銅を出して贖はしむるなり名例律に該杖一百者贖銅十斤とあり
〇御輔長道、山崎校本は宮本に據れりとて朝臣二字を加ふれど類史にもなし故に採らず

日、枉判之場、孤直何益、不如去職、早入冥冥、固閉山門、無病而卒、時年六十四、〇冬十月己巳朔丙子、外從五位下高丘宿禰貞雄爲攝津介、〇癸巳、白鷺集建禮門上、須臾降集大庭版位、〇乙未、散位從四位下繼枝王卒、贈一品伊豫親王之第二子也、勅、仰五畿內七道諸國、限以三箇日、令修佛名懺悔事、其布施者、三寶穀七斛、衆僧各六斛、供養准例、並用正税、自今以後、立爲恒式、〇十一月己亥朔壬子、太政官下符所司、令徵前參議左大弁正躬王、前參議右大弁和氣朝臣眞綱等贖銅、其符偁、太政官符、刑部省、應徵贖銅事、從四位上正躬王應徵十斤、從四位上和氣朝臣眞綱身卒、不徵、從四位下伴宿禰成益應徵十斤、從五位上藤原朝臣豐嗣應徵十斤、從五位下藤原朝臣岳雄應徵十斤、右大判事讃岐朝臣永直、明法博士御輔長道、勘解由主典川枯勝成等斷文云、右弁官宣、法隆寺僧善愷以違法訴狀、告少納言登美眞人直名、并受推官人等罪、勘申者、今撿訴狀、直名强賣賤物、過取之差直錢、准贓布廿二端三丈、據職制律、准枉法論、合遠流、是所告之罪、鬪訟律云、告人罪、皆須明注年月、指陳

○川枯滸成、姓氏錄和泉神別川枯首とあり首姓なれど之も略してしるさず
○過取之差直錢、差は原本屋に作る山崎校本に據て改む
○准贓、原本贓を賍に作る類史八十七に據て改む
○布廿二端三丈、二は宮イ本及類史一に作る三は原本二に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○減所告罪一等、告は原本造に作る宮本及類史に據て改む
○諸辨、左右辨官を云
○私曲、原本曲を典に作る閣本谷本及類史に據て改む
○減一等云々、徒以下十三字原本なし某文庫秘本に據て補ふ
○伴良田連、嘉祥二年二月壬子紀に見ゆ
○受訴狀、訴は原本新に作り其下に收字あり類史に據て改刪る
○權俗之法、權に俗衣を著けしむるを云僧尼令に凡僧尼有私事訴訟來詣官司者權依俗形參事とあるは是なり
○又同執云、原本云を之に作る宮本及類史に據て

實事、不得稱疑、官司受而爲理者、減所告罪一等、今撿諸辨所執、彼此異論、公私難辨、然尋犯由緒、此緣公事致罪、可無私曲、仍須從公坐法、自流上減一等、徒三年、身帶五位以上、請減一等、徒二年半、卽罪輕不盡其官、聽贖銅五十斤者、左大史伴良田連宗斷文云、諸辨須議善惟申訴者、依令先令著俗衣、然後受訴狀、而正躬王等所執云、僧尼令雖設權俗之法、而元來未施行者、其庶務皆以法令爲本、今旣設權俗之法、何更稱元來未施行、又同執云、爲備禁固、處於閑奧、防其逃逸、理非資助者、凡禁人之體、庶人皆知、寧處於閑奧、可謂禁固乎、又同執云、直名於國爲奸賊之臣、於家爲貪戾之子者、又云、直名爲道發覺、望下僧綱、自恃利口、求當訥舌、正躬等審其奸計、不許白牒者、凡設官分職、各有司存、理須任法付所司、何稱訥舌之有司、破法奪他人之職、其鞫獄之官、須置情平直、無有愛憎、而妄搆異端、鍛錬成罪、斯所謂屈法申情者、又右少弁伴宿禰善男出牒、具示違法之由、而成盆等所執云、於辨官推訴訟、是往古之舊貫、非昨今之新意、是以申上官、蒙處分、所問者其稱舊貫、事是實也、但元不識法意、

改む
○閑奥、閑は間と同じく安也奥は室西南隅所人安息也
○爲道、山崎校本に堀氏曰道恐遁
○鞫獄、鞫は原本鞠に作る閣本前本谷本及類史八十七に據て改む
○置情平直、平は原本乎に作る類史に據て改む
○所執云、閣本尾本前本云を之に作る
○承循、原本循を脩に作る類史に據て改む
○名例律之私罪、之は類史旨に作り宮本に云歟と云り
○私罪者、者字は類史に據て補ふ
○須依盜贓、原本依下に渉字あり贓を賊に作る諸本及類史に據て改め削る
○從加役流上、加役流は刑名なり名例律に凡犯流應配者三流俱役一年本條稱加役流者配遠處役三年とあり遠流中流近流共に役一年なるを加へて三年とするを云
○如有左大臣宣、原本右左を左右に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
○松長曰、原本於長道に

從舊例有違失者、須隨教喩之旨改正不可承循違法之舊貫、而確執不移、可謂知意故犯法、名例律之私罪謂不緣公事私自犯者、雖緣公事、意渉阿曲、亦同私罪者、理須依盜贓五十端已上、從加役流上減一等、處徒三年、身帶五位已上、請減一等、處徒二年半、五位已上一官當徒二年、餘徒半年、贖銅十斤、令解官者、彈正大疏漢部松長斷文云、今撿成益岳雄等所執、事緣公論、情無私曲、雖所行違法、猶是公罪、但餘弁所執、尋其論緒、頗渉私曲、稽之律條、可謂私坐者、以前法家所斷如右、左大臣宣、奉勅、明法博士等斷辨官罪之公私、彼此異論、科斷不同、宜覆問執申者、仍覆問、永直等皆稱、撿諸辨所執、可謂有私、雖然未有所曲、仍處公坐、何者、准律、私曲相須、仍成私罪之故者、又問松長曰、成益岳雄同爲受推之官、而爲公坐如何、松長申云、今加覆勘、前斷有失、失錯之罪、更無所避、何者、右少弁善男牒狀、雖論律令數條、不合受推之理、而無引明法年月指陳實事之律、若有引此律、諫彼諸辨、而猶不承者、自從私罪之法、而撿諸所執、既無此文、又永直等勘僧善愷訴狀、辨官應受推將否之日、正躬王等執

論曰、善愷元進訴狀之日、副手實結解、就此等狀、年月實事、既是明白也、而永直等猶稱不明、遂斷違法、以此觀之、勘發之興、唯在永直等、非是善男意、然則於此一事、善男幷諸辨俱涉誤失、非緣故犯、據撿律條、可爲公罪、但自餘違法之事、雖緣公事、意涉阿曲、准法而論、皆是私罪者、官議云、今案所答、皆稱有私、加以問僧善愷處笞卌之由、永直長道等申云、猶合處笞卌、何者、案所執辨官申上、不令俗形者、然則辨官許容、不令俗形、准律、官人百姓共犯罪、以官人爲首、仍許容之辨官爲罪首、合處笞五十、從減一等合處笞卌者、既之許容、豈非挾私、然則有私之說、彼此一同、唯以未有所曲、猶稱爲公罪、仍更詰難、公私之律、上下失所、相須之文、飽注倒義之由、永直等覺悟、更無駁議、以此論之、既非公罪、何者、名例律云、公罪謂緣公事致罪而無私曲者、注云、私曲相須、卽是欲顯公罪之理、更起私曲之文、私曲二字、其義猶隱、故承私曲之下、設相須之注、然則相待於私曲二事、全無一者、乃名爲公罪、既云無私曲、若此二事、互有一者不合入公坐、其文已顯明、且不公爲私、背私爲公、是公私之不雜、猶白黑之自異、

作る松は宮イ本及類史に據り円は閣本前本及類史に據て改む
○有失、原本失字なし類史に據て補ふ
○明注、明字は諸本及類史に據て補ふ
○受推將否之日、原本將字なく之下に狀字あり將は閣本前本宮本に據て補ひ狀は閣本前本及類史に據て削る
○元進訴狀、元は原本先に作る類史に據て改む
○手實結解、政事要略所引闘訟律に告人罪皆須明注年月指陳實事不得稱疑とあり訴狀に犯罪の事實を手づから詳に記したるものを副ふるを云
○所答、原本答を笹に作る諸本及類史に據て改む所は宮本前本に作る
○笞卌、原本笞冊に作る諸本及類史に據て改む下同じ
○從減一等、從は原本僧に作る類史に據て改む
○既之許容、之は原本容下にあり閣本尾本前本に據て改移す宮本類史には云に作る
○挾私、原本挾を狹に作

る閣本前本に據て改む類史は挿に作る
○詰難、詰は原本詰に作る諸本に據て改む
○簏注、簏は類史庶に作る
○駁議、駁は原本駿に作る類史に據て改む
○名例律云公罪、公は類史に據て補ふ
○私曲相須云々、以下十八字類史八十七に據て補ふ
○若此二事互有一者、原本此下に之字互下に在字あり者を事に作る類史に據て改め削る
○公私之不雜、之字は類史に據て補ふ
○有私無曲、私は原本和に作る諸本及類史に據て改む
○又云、原本又を其文の二字に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○乃成私罪、閣本前本及類史乃を仍に作る
○綱例、綱は原本細に作る類史に據て改む
○當時之惑、原本或を戒に作る類史に據て改む字彙に惑古作或後加心以別之とあり即ち惑の字
○疑辭、原本疑を起に作

然則公坐之中、何得有私、私罪之中、亦宜無公、而長道等云、有私無曲、或有曲無私、仍爲公坐者、文義倶亂、其誣已甚、又云、私曲相須、乃成私罪者、仍案私罪之條、終無相須之句、何以無據之傳說、輙亂不疑之成文、上下失所、公私混義、是亦不通也、後經數日、永直等更進所答不盡之狀云、私曲者謂私之曲也、相須之句者、合私曲二字爲一義、連讀之意也、今如此說者、私曲是一事、若是一事者、相須之律、終成空文、加以、衞禁律云、弓箭相須、若云私之曲者、豈是弓之箭乎、擧此一謬、餘隨可知、凡相須與不相須、皆是法律之綱例、且史書之中、多有此文、彼此同例、更無異義、忽出新意、强亂舊文、非但當時之惑、當貽後代之疑、加以長道等、初云私與曲二者相須乃成私罪、其後乃變爲私之曲、既云明法、豈有疑辭、而前後殊論、向背異執、斯而不正者、恐涉於弄法、又松長所答、理不可然、何者、諸辨所受訴狀、多乖法式、而復推問之日、頻致違犯、尋其意緒、皆不過資助於訴人以左右其事、然則資助之情、本末理須一同、受推之咎、故失復何殊別、而松長前後殊言、公私變斷、遂云、受推一條、當稱誤失、自餘諸事、應爲阿

曲、生節目於一事、分輕重於同意、欲辨公私、還增曲直、又同答云、正躬王等執論曰、善愷元進訴狀之日、副手實結解、就此等狀、年月實事既是明白者、仍撿諸辨問狀、善男問中、已有不注指年月實事之條、然則正躬王等、須當彼時悔悟所受訴狀已違法式、而其後、明法博士等、申返訴狀之日、正躬王等、猶亦以手實結解、執爲明白之證、明是故犯、何得爲失、卽是松長自賊吏人之辭也、又以同問狀、付永直等令決是非、其後永直等申云、諸辨問狀、彼此異執、有疑勾勘、因依訴狀勘申者、然則善男所問、固爲先覺、何稱勘發之興在永直等乎、謬妄如斯、准的何據、夫理有一途、法無二孔、今明法之家、公私異論、輕重殊執、各是自心、遞非人說、遂使視聽多疑、取捨無准、今之評議、實罄愚管、謹案名例律、私罪謂不緣公事私自犯者、雖緣公事、意涉阿曲、亦同私罪、准據此律、諸辨等自始受訴狀、至于推問之日、其所違犯、已涉私曲、然則處私之斷、誠得其情、所見如此、不敢隱欺者、左(源常)大臣宣、奉勅、依官議行之者、仍准所犯、以所帶一官、當徒二年、其餘如半年徒贖銅如件、省宜承知依件徵納、○十二月戊辰朔(八)乙亥、參議

る纂詁に據て改む
○而復、而は原本面に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○違犯、原本建犯に作る類史に據て改む
○其事、事は原本受に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
○本末、原本末を來に作る諸本及類史に據て改む
○故失、故は原本放に作る類史に據て改む
○元進訴狀、元は原本无に作る閣本前本及類史に據て改む
○已違法式、已違は原本也建に作る閣本尾本及類史に據て改む
○吏人、吏は原本夫に作る類史に據て改む
○以同問狀、同字は類史に據て補ふ
○固爲先覺、固は原本因に作る類史に據て改む
○謬妄、妄は原本忘に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○法無二孔、禮記中庸の疏に孔穴所出事有多塗今唯曉一孔之人不知二餘孔通達唯知守一處也とあり
○推問之日、之字は類史

に據て補ふ○隱欺、欺は原本勘に作る類史に據て改む○如半年、類史には如字なし○省宜云々、省は刑部省なり

（十二月）一時與熛燼共盡、共盡の二字は類史百七十三及紀略に據て補ふ○豐繩、繩は山崎校本に繩原無空欠一字今依堀本旁書加さあるに據て補ふ○豐宗豐方、天長十年十二月己丑紀に左京人六世王豐宗豐方等七人賜姓清原眞人こと見ゆ此に再出したるは何れか誤あるべし○安宗、此二字は閣本尾本に據て補ふ○物部宮守、尾張國愛智郡物部郷あり此人の本居なるべし○貫、纂詁此下に附字を補へり○拾人、拾は原本十に作る閣本前本及類史に據て改む○其料割正稅云々、主稅式に近江國延曆寺定心院料稻三萬束さあり○未納、未は原本國に作

正四位下源朝臣弘爲山城田使長官、從五位上藤原朝臣氏宗爲次官、從五位下豐前王爲班大和田使次官、正五位上岑成王爲班河內和泉田使次官、從五位上路眞人永名爲班攝津田使次官、○戊寅、火燒西大寺講堂、佛像一時與熛燼共盡、○甲申、左大臣從二位兼左近衞大將皇太子傅源朝臣常上表、請解左大將、不許之、○丁亥、左京人六世王豐繩、豐宗、豐方、豐道、潔河、清雄、貞永、濟宗、氏吉、貞宗、吉宗、安宗等王十二人、賜姓清原眞人、○甲午、尾張國山田郡人內藏少屬正六位上物部宮守、改本居貫左京六條四坊、○丙申、勅、延曆寺定心院三寶幷梵王帝釋供養料、毎日白米壹斗伍升伍合、僧拾人、毎日白米陸斗肆升、燈分油毎日貳合、宜仰近江國永令支辨、其料、割正稅參萬束出擧、以其息利充之、若有未納、以正稅利先塡此色、事須毎年計日支度春運、其功債准例亦充之、燈分油以米交易、歲終惣送、細注用度幷遺數、長官勾當、周匝祇濟、長官不在、次官亦同、毎季取領狀、即申官、如致遺怠、不預節會、自今以後、立爲恒式、

る宮本及類史に據て改む
冥語は闕恐闕字誤と云り
○許は莫歴、閣本類本に
は日字を空しとす
○功作、類史債を續に作
る
○遺類、遺は類史色に作
る
○遺京、原本遺を遠に作
る類史百八十に據て改む

續日本後紀卷第十六

○承和、此二字宮本に據て補ふ

〔承和十四年〕礒江王、礒は原本雄に作る閣本尾本前本及類史に據て改む

○穎守、穎は原本顯に作る閣本前本及類史に據て改む

○眞臣、眞は原本貞に作る類史に據て改む

續日本後紀卷第十七

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

起承和十四年正月盡十二月

(丁卯)十四年春正月戊戌朔、廢朝賀、大雪也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○庚子、天皇朝覲太皇太后於冷然院、宴五位已上、賜祿有差、○甲辰、天皇御紫宸殿、宴于群臣、詔授三品仲野親王二品、正四位下源朝臣弘從三位、從四位下橘朝臣岑繼從四位上、正五位下長田王從四位下、從五位上有雄王正五位下、從五位下豐前王從五位上、无位礒江王、正六位上高叡王、並從五位下、無位源朝臣勤從四位上、正五位下興世朝臣書主從四位下、從五位下藤原朝臣氏雄、永原朝臣末繼、藤原朝臣仲統、伴宿禰善男、並從五位上、外從五位下物部首廣泉、正六位上南淵朝臣穎守、橘朝臣安吉雄、伴宿禰直統、紀朝臣眞丘、坂上大宿禰貞守、橘朝臣直繼、紀朝臣全吉、藤原朝臣冬緒、紀朝臣好雄、高橋朝臣祖繼、藤原朝臣

○潔雄、雄は原本椎に作る水戸校本及類史に據て改む
○豐住朝臣、住は原本任に作る閣本尾本及類史に據て改む
○伴良田連、十五年五月丙戌紀良田を吉田に作る
○高作、原本爲作に作る類史九十九に據て改む
○源朝臣定云々爲參議云云、補任に源定去承和七年辭參議本更又任とあり云云の二字は諸本に據て補ふ
○爲右少弁云云、云云は諸本に據て補ふ
○治部卿如故云云、同上
○並藤、並字は閣本尾本宮本に據て補ふ
○刑部卿如故云云、云云は諸本に據て補ふ
○庚子、諸本及類史紀略何れも同じけれど辛亥(十四日)とあるべきなり此月庚子なし
○敎坊奏態、敎坊は内敎坊、奏態は歌舞を奏するを云
(二月)駿河國、原本河を何に作る閣本前本宮本に據て改む
○高直、高は原本亮に作る上文に據て改む

安雄、笠朝臣出羽麻呂、安倍朝臣忠雄、百濟王安宗、藤原朝臣潔雄、大中臣朝臣眞主、淡海朝臣豐庭、丹墀眞人善雄、石川朝臣貞成、佐伯宿禰屋代、並從五位下、正六位上豐住朝臣永貞、伴良田連宗、春日部雄繼、三統宿禰眞淨、讃岐朝臣高作、並外從五位下、宴竟賜祿有差、○八乙巳、於大極殿修最勝會、○十二己酉、從三位源朝臣定、從四位下小野朝臣篁、並爲參議、云云、從四位下藤原朝臣嗣宗爲左中辨、從五位上伴宿禰善男爲右中弁、從五位下藤原朝臣冬緒爲右少弁、云云、正四位下源朝臣融爲近江守、參議從四位上藤原朝臣助爲兼下野守、治部卿如故、云云、從五位下藤原朝臣並藤爲兼加賀守、陰陽頭如故、正四位下源朝臣明爲兼越中守、刑部卿如故、云云、○庚子、最勝會竟、更引名僧十餘人於禁中、令論義、訖施御被、○十六癸丑、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、覽踏歌、訖賜祿有差、○十七甲寅、天皇御豐樂殿觀射、○二十丁巳、天皇内宴於仁壽殿、敎坊奏態、公卿獻詩如常、竟賜祿有差、○二月丁卯朔十丙子、有勅、召配流人前駿河國權介從五位下藤原朝臣高直、前越後國權守從五位上藤原朝臣貞守、前伯耆

○從五位上藤原朝臣貞守、九年七月戊午紀上を下に作る
○六十二人令入京、伴建岑の謀反に連坐せし人々なり九年七月紀に見ゆ
○從四位上田口朝臣、去年正月叙正四位下と見え本年閏三月戊子紀にも正四位下とあり從四位上といふは疑はし
○善友朝臣頴主、原本朝臣を宿禰に頴を額に作る宮本及上下の文に據て改む
○基兄王、上文兄を枝に作る
○齊之、原本齊を齋に作る閣本宮本に據て改む
○鑄錢使長官、使恐司と狩谷氏云り從ふべし

國權介從五位下藤原朝臣近主、前安藝國權介從五位下藤原朝臣正世、幷諸國六位以下人等六十二人令入京、○丁丑[十二]、從四位上田口朝臣佐波主爲神祇伯、從五位下藤原朝臣春岡爲少納言、從五位下橘朝臣海雄爲左少弁、從五位下紀朝臣筑紫麿爲大監物、從五位下菅野朝臣高年爲內匠頭、從五位下安倍朝臣忠雄爲圖書頭、外從五位下善友朝臣頴主爲大學博士、從四位下時宗王爲治部大輔、從五位下藤原朝臣貞斂爲雅樂頭、從四位下基兄王爲民部大輔、從五位下丹墀眞人貞岑爲少輔、外從五位下都宿禰貞嗣爲主計頭、外從五位下清內宿禰園繼爲主稅頭、從五位下大和眞人吉直爲兵部少輔、從五位下和氣朝臣齊之爲刑部少輔、從五位上藤原朝臣貞本爲大藏大輔、從五位下文室朝臣助雄爲少輔、從五位上坂上大宿禰正野爲宮內大輔、從五位下滋野朝臣善蔭爲掃部頭、從五位下清原眞人清海爲典藥頭、外從五位下出雲宿禰全繼爲造酒正、從四位上源朝臣寛爲右京大夫、從五位下安倍朝臣錫麿爲兼鑄錢使長官、周防守如故、從五位上藤原朝臣氏宗爲兼

○監護喪事、護は原本譜に作る閣本前本に據て改む
○皇女也云云、也云云の三字は閣本尾本前本に據て補ふ
○壬午、此條は宮本及類史百七に據て補ふ
○望請、請字は狩谷氏の瞥下惡脱請字と云るに據て補ふ
○甲申、原本庚申に作る此月庚申なし山崎校本に據て改む纂詁は庚辰に改めて庚原作申是月無庚申今推長暦訂と云り
○定心院十禪師、定心院は去年八月紀及十二月紀に見ゆ十禪師は內道場の十禪師に倣へるなるべし
○宮中最勝會、毎年正月八日より十四日に至るまで大極殿にて行はる
○周防國鑄錢司、令外の官なり弘仁九年三月長門國司を以て鑄錢司となし後周防に徙す
○瀉上山、周防國吉敷郡鑄錢司村の內なるべし新史百七には潟上山に作る
○逐伐、逐は原本遂に作るを閣本に據て改む、伐字尾本前本には無し
（三月）家令、職員令に

右衛門權佐、式部少輔如故、外從五位下山代宿禰氏益爲山城介、從五位上路眞人永名爲備前守、○戊寅（十三）、無品時子內親王薨、遣兵部大輔從四位下豐江王、彈正大弼從四位上橘朝臣永名、兵部少輔從五位下大和眞人吉直、左京亮從五位下飯高朝臣永雄等、監護喪事、親王者、天皇之皇女也、云云、○壬午（十七）、春宮坊言、內外考舍人一百人、隨闕補替、歷代行來、而考承和十年四月十九日符偁、外考補坊舍人、同舍人遷他色、及依理解却之類、每年卌人、特聽出入、被拘此格、不得補替、望請卌人之內、因循舊例、隨闕遞補者、勅許之、○甲申（十九）、擇有智行者、於延暦寺、始置定心院十禪師、勅曰、僧等每日各轉大般若經二卷、共盡一部、終而復始、六時亦如法修行、其預宮中最勝會、幷臨時公請者、廻到之後、隨日追塡轉經之數、十禪師若有闕、擇才行共備、人衆所推者、申官補之、○乙未（卅）、周防國鑄錢司言、遷立司家東方瀉上山者、許之、逐伐樹木也、○三月丙申朔、肥後國飽田郡人從三位大藏卿平朝臣高棟家令正七位上建部公弟益男女等五人、賜姓長統朝臣、貫附左京三條、○丙午（十一）、請僧六十四口沙彌六

從三位家令一人掌知家事とあり
○弟盆男女等、弟は原本第に作る諸本に據て改む等字は盆下にあるべきなり
○左京三條、此下に某坊の二字あるべし
○分僧十七口、分は原本否に作る諸本及類史に據て改む
○物氣、氣は類史紀略祚に作る
○直廬、直は原本火に作る諸本に據て改む
○北野、禁野なり
○遠去云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
○己卯、閏三月十四日なり干支を推すに乙卯の誤なるべしと思へど類史紀略共に同じく己卯とあれば姑く舊に從て改めず
○大神宮云云、云云は諸本に據て補ふ
〔閏三月〕閏三月丙寅朔、此六字は山崎校本に據て補ふ
○群鳥、群は原本郡に作る諸本に據て改む
○呪願文、釋氏要覽上に見陳今呼心誦邇施也丁蘭僧云佛言應爲施主種種呪願若上座不能

十四日於淸涼殿、轉讀大般若經、分僧十七口沙彌廿一口於常寧殿、修眞言法、爲鎭物氣也、○戊申、雄雉自東方飛來、集主殿直廬前、從渠西走入閤門中、右近衛六人接得視之、體中無傷、羽毛全整矣、○己酉、放佐雉於北野、高飛遠去、云云、○辛亥、讀經畢、施度者各一人及御被、○甲寅、阿波國言、停讀師者、聽之、○己卯、天皇御八省院、奉遣幣於伊勢大神宮、云云、○閏三月丙寅朔己巳、天有鳴聲、餘響殷殷、良久而止、○戊寅、群鳥億萬、繞日上下、自日中到黃昏、仰看空中、不知何鳥、○庚辰、請僧八百口於城中、講仁王經、其咒願文曰、夫識之所識曷嘗非識、知之所知、未始不知、是故、能行而所行兼空、則攝受之理廢、自性而無性不異、則執取之念忘、唯斯仁王護國般若波羅蜜經者、施慈敷愛之奇法、避難安利之神符、頒之有用、則人鬼調和、廢而不行、則龍神怨怒者矣、聖朝罪身尅己、常慮天下不召之灾、憂國思民、猶恐四海莫來之咎、卽會百官、先申齋禁、高座開百、僧徒及千、一日二時、於王城中、演說此大乘、擣褰紫極、暫爲香花之四廬、灑掃靑宮、更作涼燠之二殿、上林羽獵之苑、今惟歡喜、昆明漁釣之池、

○郞次席能者作とあり
○知之所知未始不知、知は原本如に作る類史に據て改む
○安利、原本利を刹に作る山崎校本に從ふ堀本考語こさあるに據て改む
○頒之、頒は原本領に作る尾本中本及類史に據て改む
○不召之災、召は原本名に作る類史に據て改む
○郞會百官、郞は原本節に作る閣本尾本桐本及類史に據て改む
○齋禁、齋は原本齊に作る宮本及類史に據て改む
○僧徒及干、徒字は類史に據て補ふ
○擡褰紫極、擡は擧也褰は搴なり凡帳帷幕などさりかたづくるを云原本擡を擡に作る諸本及類史に據て改む
○靑宮、神異經に（藝文類聚所引）に東方有宮靑石爲牆云々門有銀牓以靑石碧鏤題曰天地長男之宮こさあるを取れり紫極の對句さす
○涼燠之二殿、二は原本三に作る山崎校本に據て改む
○上林羽獵之苑、苑は原

皆是阿耨、微音漸振、如象池之今日新來、妙義初披、似龍宮之昔時未秘、伏願、十方諸聖、八部靈祇、向仁王之寶鏡、以護國爲身謀、推梵帝之金輪、以除災爲己任、縱有含寃衆鬼、不義群神、變風雨而爲逆、起木石而作恠、而猶感此汪汪之化、從彼浩浩之權、反咎爲休、應時草靡、然則宸階絕秋毫之警、玄廡無露寢之勞、玉燭長懸、與仙豫而無蔽、神珠在握、將聖慮而彌照、環丘之鵠、投穗彰於有年、楚庭之羊、銜粟表於豐歲、禍何在而不消、福何之而不至、諸天共歡、衆民倶樂、久爲帝王之人、同入仁壽之境、左京人戶主御友王男无位廣野、大野、戶主武藏王男福雄、春雄、眞野、安野等王六人、賜姓淡海眞人也、右京人右少史從六位下山口忌寸豐道、薩摩目大初位下山口忌寸奥道、散位從八位上山口忌寸貞道、婦人山口忌寸周子、恒子等五人、並改忌寸賜朝臣焉、豐道等、後漢靈帝曾孫阿知王苗裔也、左京人正五位下豐峯眞人廣龍言、贈淨廣壹高市親王之孫岡屋王、娶大納言從二位文室淨三眞人女、生正六位上次田王、男河上王娶從五位下文室眞人正嗣女、生廣龍、須尋因生之義、同賜文室姓、而

兄廣永等、不㆑認㆓祖宗㆒、以㆓去延曆廿四年㆒、賜㆓豐岑眞人姓㆒、今據㆓彼世數㆒、改賜㆓姓文室朝臣㆒、許㆑之、○戊子、（廿三）神祇伯正四位下田口朝臣佐波主卒也、詔贈㆓從三位㆒、以㆓嵯峨太皇太后（嘉智子）之外戚㆒也、是月、數數有㆓群鳥㆒、遲明自㆓西方㆒度㆓東方㆒、其多覆㆑天、終始不㆑見、訪㆓諸故老㆒、皆云、未㆓曾聞㆒㆑之者、

○夏四月乙未朔、宴㆓侍從已上於紫宸殿㆒、賜㆑祿有㆑差、○庚子、（六）鑾輿臨㆓于神泉苑㆒、賜㆓侍臣祿㆒有㆑差、○癸卯、（九）近江國蒲生郡俘囚外從七位下爾散南公

本花に作る閣本水戶校本及類史に據て改む漢舊儀に上林苑中廣長三百里苑中養㆓百獸㆒天子遇㆓秋冬㆒射獵（節略）とあり　○歡喜、歡喜園の略にて一に喜林苑と云帝釋の居城善見城外の四庭苑の一なりと云　○昆明漁釣之地、漢書武帝紀元狩三年に發㆓謫吏㆒穿㆓昆明池㆒、注に昆明國有㆓滇池㆒、今欲㆑伐㆑之故作㆓昆明池㆒象㆑之以習㆓水戰㆒、在㆓長安西南㆒周回四十里と見ゆ、釣は原本鈞に作る諸本及類史に據て改む　○阿耨、阿耨達池の略にて天竺の池名無熱惱又清涼と譯す香山の南大雪山の北にありて金銀瑠璃頗胝の四寶を以て岸とし周八百里龍王此に住みて清涼なる水を出し瞻部洲に給すと云　○象池、詳ならず或は象駕の誤か閣本前本に池を化に作る　○龍宮云々、佛滅後教法の龍宮に隱沒する由の傳說、摩訶摩耶經及蓮華面經等に見ゆ　○十方諸聖、諸乘法數に東西南北四維上下謂㆓之十方㆒　○八部靈祇、八部は同に天衆・龍衆・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦謂㆓之八部衆㆒　○仁王之寶鏡、仁王は佛に歸依して國土安穩を願ひし十六國王を云仁王經の仁王なり　○梵帝之金輪、梵帝は梵天王、金輪は輪寶の最上のものなり之を轉ずれば諸の怨敵を摧すと云　○汪汪、汪は深廣也又大貌　○浩浩、大水の貌　○玄廡、宸階に對して宮闕を云　○露寢之勞、露寢は屋外に寢ぬるなり宮禁を警衛するの勞を云　○玉燭、原本玉を王に作る類史に據て改む　○仙豫、聖慮の對語にして天機と云が如き意なり　○環丘之鵲云々、拾遺記に員嶠山一名環丘上有㆓方湖㆒周廻千里多㆓大鵲㆒高一丈銜㆓不周之粟㆒粟穗高三丈粒皎如㆑玉鵲銜㆑粟飛㆓於中國㆒故世俗間往々有㆑之其粟食㆑之歷㆑月不㆑飢とあり　○楚庭之羊云々、廣州記（圖書集成所引）に廣州廳事梁上畫㆓五羊像㆒又作㆓五穀囊㆒隨㆑像懸㆑之云　昔高固爲㆓楚相㆒五羊銜㆓穀萃㆒於楚庭㆒故圖㆓其像㆒爲㆑瑞六國時廣州屬㆑楚とあり　○左京人、原本此上に庚辰の二字あり衍なり故に削る　○御友王、友は原本支に作る宮本に據て改む御友王及武識王は世系詳ならざれど淡海眞人の姓を賜るを見るに大友皇子の後なるべし　○興道、水戶校本興道に作る　○阿知王、知は閣本智に作る　○贈淨廣壹、贈は原本賜に作る閣本尾本前本等に據て改む　○親王之孫、孫は原本子に作る閣本尾本前本に據て改む　○淨三、淨は原本澤に作る閣本尾本前本に據て改む　○河上王、河は原本阿に作る諸本に據て改む　○兄廣永等云云、兄は原本況に作る纂詁に據て改む後紀延曆廿四年二月乙卯條に廣永王等四人豐岑眞人を賜はりしこと見ゆ　○許之、此二字は山崎校本に原无今依㆓堀本㆒補書加とあるに據て補ふ　○其多覆天、多は原本夕に作る諸本に據て改む

（四月）近江國蒲生郡俘囚、主稅式に近江國俘囚料十萬五千束見ゆ此國に俘囚あるに因れり　○字漢米公、後紀弘仁三

延多孝、外從八位下宇漢米公阿多奈麿、並授外從五位下、以勳功之苗裔也、○乙巳、(十一)親子內親王初笄、宴親王已下侍從已上於內裏、并侍從及未得解由大夫、皆預飮蓮宴、訖賜祿、○丁巳、(廿三)以從四位下小野朝臣篁爲彈正大弼、從四位上橘朝臣永名爲神祇伯、權律師眞濟爲律師、大法師眞紹爲權律師、○五月乙丑朔己巳、(五)天皇御武德殿觀馬射、○甲戌、(十)以從四位下時宗王爲大學頭、從五位下菅原朝臣是善爲兼東宮學士、大內記如故、○乙亥、(十一)於淸涼殿行莊子竟宴、先是帝受莊子於文章博士從五位上兼備中守春澄宿禰善繩、是日引善繩宿禰殿上、殊酌恩杯、行束脩之禮、令左右近習臣、各賦莊子一篇、管絃交奏、酣暢爲樂、庭燎晰晰、賜善繩宿禰御衣二襲、自外之物、亦稱是也、賜近臣祿各有差、當代儒者、共以爲榮、○辛巳、(十七)散位從四位下藤原朝臣豐主卒、○壬午、(十八)賑給左右京飢民、以雨久不止也、○丙戌、(廿二)授白丁膳臣立岡正七位上、立岡若狹國百姓也、代窮民輸鹽五斛、庸米百五十二斛、准稻四千六百八束、○辛卯、(廿七)皇帝引文章博士春澄宿禰善繩於淸涼殿、始讀漢書、是日、毀前左大辨從四

年正月紀に宇漢米公邑男見え備中國賀夜郡に有漢鄕あり宇萬さ訓り今上房郡に有漢村あり此氏さ由あるべし米は原本未に作る類史に據て改む

○初笄、抄裝束部冠帽具に釋四聲字苑云簪(加左之)揷冠釘也蒼頡篇云簪笄也さあり男子の元服に同じ

(五月)時宗王、王字は二月丁丑紀及宮本に據て改む

○束脩之禮、學令に凡學生初入學皆行束脩於其師各布一端、義解に謂束脩脩脯卽十束脯也さあり

○令左右近習臣、類史令下に在字あり

○膳臣立岡、膳臣は阿部朝臣同祖大彥命の後なり纂詁に履仲帝時膳臣余磯賜姓稚櫻部臣稚櫻讀云和加佐國造本紀允恭帝以荒礪命爲若狹國造荒礪卽余磯也立岡貫于若狹蓋其裔也さ云り

○岳雄、岳は原本兵に作る閣本前本及類史に據て改む

○位記各一階云々、事由は去年十一月壬子條に見

と猪谷氏は按明年十二月庚戌正躬王伴成益藤原豐嗣降先位一等叙之此云毀位記各一階即與明年降一等叙相同蓋一階之一之字疑有誤歟と云ふ
（六月）甲戌、類史又同じ干支を推すに此月甲戌なし甲辰の訛なるべし
○三村部、出身詳ならず
○月暈、抄天地部景宿類に暈郭知玄切韻云暈（此間云日月賀佐）氣繞日月也とあり
○紀朝臣名虎卒、名虎は木莬宿禰の後なる大納言船守の孫中納言梶長の子承和十一年正月刑部卿に任ぜられて致仕せしかど其年月及亨年詳ならず
○左相撲司、左右相撲司は天長四年始めて置く
○葛野郡郡家、原本郡の一字なし紀略に據て補ふ
○作大鼓有祟、本朝月令四月松尾祭事に深草天皇之御時伐葛野郡家前槻木作相撲司之大鼓明神忿怒託宣云此樹者我時々來遊之木也而伐取不可然云々其伐木四人多死去也行事官人墜馬傷身（中略）遣奉幣被謝遣神社云々とあり

位上正躬王、左中弁從四位下伴宿禰成益、右中弁從五位上藤原朝臣豐嗣、左少弁從五位下藤原朝臣岳雄等四人位記各一階、縱受推法隆寺僧善愷違法訴狀也、○六月甲午朔、丙申、大風、發屋折木、雨亦降、入夜彌猛、○丁酉、遣使奉幣於松尾大神祈之、○甲戌、常陸國新治郡人三村部綿女一產二男一女、賜正稅稻三百束、乳母一人、○乙巳、暴雨如懸河、此夜、月暈之外、有白氣繞之、○己酉、散位正四位下紀朝臣名虎卒、○甲寅、霖雨止息、先是左相撲司伐葛野郡郡家前槻樹作大鼓、有祟、由是奉幣及鼓於松尾大神以祈謝、用鼓牛皮十二張、一面六張、○秋七月甲子朔、從五位下淡海眞人豐庭爲若狹守、○乙丑、賜左相撲司印一面、○丙寅、置春宮坊監署六司史生各二員、○丁卯、修造攝津國大依羅社、肥後國阿蘇郡國造神社爲官社焉、減省日向國俘囚祿料稻一萬七千六百束、以俘囚死盡、存者員少也、○辛未、天台留學僧圓載傔從仁好、及僧惠蕚等、至自大唐、上奏圓載之表狀、唐人張友信等卌七人同乘而來著、○壬申、加安房國大神、并從神祭、正稅穀一百斛、○戊寅、太上天皇之國忌也、天皇延名僧

於清涼殿、講法華經、事竟施御被、〇甲申、右京人六世賀我王、七世眞藥王等十三人、賜御高眞人姓、忍壁親王後也、〇丙戌、奉白馬幣帛於丹生川上雨師、令祈止雨、〇己丑、奉授正四位下勳二等松尾大神從三位、餘如故、致仕參議正三位藤原朝臣綱繼薨、綱繼者、參議正三位勳二等式部卿兼大宰帥宇合之孫、參議從三位勳二等大宰帥藏下麿之第五子也、延暦廿二年正月、叙從五位下、弘仁元年、授正五位下、五年四月、叙從四位下、職歷內外、兵部大輔、右京大夫、左兵衛督、武藏相摸守、天長之初、拜參議、任兵部卿、五年叙正四位下、七年授從三位、致仕閑臥山井里第、承和八年、叙正三位、年八十五而終、〇八月癸巳朔、宴侍從已上於紫宸殿、賜祿有差、〇丙午、始置施藥院史生四員、〇丁未、越前國丹生郡人大學助教外從五位下春日部雄繼等二人、刊部字爲春日臣、兼除邊籍、貫左京、山城國愛宕郡人散事從五位下山代宿禰祖繼等五人、改本居貫左京六條、〇己酉、遠江國蓁原郡人秦黑成女一產二男一女、賜正稅稲三百束、及乳母一人、〇癸丑、西京衛士町災、燒百姓廬舍卅餘烟、〇九月

(七月)秋七月、秋字は紀略に據て補ふ
〇春宮坊監署、職員令に春宮坊管監三署六こあり監は舍人監主膳監主藏監署は主殿、主書、主漿、主工、主兵、主馬なり
〇丁卯、此條原本戊寅の條下に錯在せるを干支を推して此に移す
〇大依羅社、神名式攝津國住吉郡大依羅神社四座(並名神大月次相嘗新嘗)大阪市住吉區庭井町、大は原本天に作る宮本及神名式に據て改む
〇國造神社、同式肥後國阿蘇郡國造神社、古城村手野、社字は山崎校本に據て補ふ
〇官社、官は原本宮に作る諸本に據て改む
〇一萬七千六百束、一は原本十に作る類史に據て改む主税式に日向國俘囚料稲一千一百一束とあるは此時減省せしに因れり
〇圓載、十年十二月癸亥紀及十一年七月癸未紀に出づ
〇僧惠蕚、釋書卷十六に傳あり
〇卅七人、原本卅七人に作る閣本前本宮本に據て

癸亥朔丁卯、以散位從五位上藤原朝臣宮房爲中務大輔、○辛未、是重陽之節也、天皇御紫宸殿、宴于親王已下侍從已上、但召非侍從諸司綠衫知文者如常、同賦草木言之題、宴訖賜祿有差、○庚辰、入唐求法僧慧雲獻孔雀一、鸚鵡三、狗三、○庚寅、山城國愛宕郡空閑地一町八段賜散位正六位上讃岐朝臣永成、○冬十月癸巳朔、授正六位上安倍朝臣長谷從五位下、上野國那波郡人左近衛府將監正六位上檜前公綱主賜姓上毛野朝臣、兼貫左京四條、○甲午、遣唐天台請益僧圓仁及弟子二人、唐人卅二人、到自大唐、○丁酉、詔贈大納言從三位橘朝臣奈良麿、更贈太政大臣正一位、崇帝戚也、○己酉、從五位下藤原朝臣高直爲班山城田使次官、從五位上笠朝臣年嗣爲大和次官、從五位上藤原朝臣貞守爲河內和泉次官、從五位下藤原朝臣直世爲攝津次官、○辛亥、授雙丘東墳從五位下、此墳在雙丘東、天皇遊獵之時、駐蹕於墳上、以爲四望地、故有此恩、○壬子、雙丘下有大池、池中水鳥成群、車駕臨幸、放鷂隼拂之、左大臣源朝臣常山莊在丘南、因獻御贄、賜扈從臣等饌、○甲寅、奉授

改む
○安房國大神、安房神社なり原本大を火に作る閣本宮本に據て改む
○從神祭、原本從祭神に作る閣本尾本に據て改む從神は神祇志料に蓋后神已下五座をいふに似たりと云
○天皇延名僧、纂詁に天皇二字恐衍と云
○御高眞人、他史に見す
○忍壁親王、天武天皇の皇子
○雨師、山崎校本は一本に據て師下に神字を補ふ
○正三位藤原朝臣綱繼、三は原本二に作る閣本前本宮本に據て改む叙任年月は補任に詳なり
○兵部大輔、纂詁は兵上に爲字を補ふ
○天長之初、二年七月
○山井里第、拾芥抄中末に山井殿三條坊門北京極西とあり
○承和八年、八年十一月廿日なり八は原本七に作る補任に據て改む
（八月）丙午、此條類史百七に據て補ふ
○丁未、丁は閣イ本西本乙に作る乙未は三日なり
○貫左京、京下に某條某

備中國无位吉備津彥命神從四位下。〇乙卯(廿三)、以從五位下橘朝臣仲村麿爲紀伊介。〇戊午(廿六)、二品有智子內親王薨。遺言薄葬、兼不受葬使。內親王者、先太上天皇(嵯峨)幸姬王氏所誕育也。頗涉史漢、兼善屬文。元爲賀茂齋院。弘仁十四年春二月、天皇幸齋院花宴。俾文人賦春日山莊詩。各探勒韻。公主探得塘光行蒼。卽瀝筆曰、寂寂幽莊水樹裏、仙輿一降一池塘、栖林孤鳥識春澤、隱澗寒花見日光、泉聲近報初雷響、山色高晴暮雨行、從此更知恩顧渥、生涯何以答穹蒼。天皇歎之、授三品。于時年十七。是日天皇書懷、賜公主曰、忝以文章著邦家、莫將榮樂負煙霞、卽今永抱幽貞意、無事終須遣歲華。尋賜召文人料封百戶。天長十年叙二品。性貞潔、居于嵯峨西莊。薨時春秋四十一。〇己未(廿七)、鷺集春興殿上。

坊の四字あるべし　○散事、事は原本位に作る閣本前本に據て改む　○左京六條、六は原本三に作る閣本尾本前本に據て改む　○秦原部、倭名抄に秦原は波伊八良と訓り今も郡存し榛原と書けり　○奏黑成女、黑字は類史五十四に據て補ふ

(九月)綠衫、衫は原本杉に作る前本宮本及類史七十四に據て改む綠衫は六位の服なり　○宴訖、訖は原本記に作る諸本に據て改む　○孔雀、抄羽族部に兼名苑注云孔雀(俗云音宮尺)とあり推古天皇六年紀に新羅貢孔雀一隻と見ゆ　○鸚鵡、抄羽族部に山海經云青羽赤喙能言名曰鸚鵡(鸚、母二音)とあり

(十月)冬十月、冬字は宮本及紀略に據て補ふ　○安倍朝臣長谷、倍は原本陪に作る閣本前本及類史に據て改む　○那波郡、那は原本郡に作るを閣本前本に據て改む那波は今佐波郡に入る　○圓仁、諡慈覺なり　○唐人卌二人、卌は原本卅に作る閣本前本宮本に據て改む　○帝戚、奈良麻呂は今上の外祖父にして檀林皇后の父清友の父なり　○直世、直は原本眞に作る諸本に據て改む　○雙丘東墳、山城志に葛野郡雙丘在仁和寺南三丘纍々また五位墳在雙丘東法金剛院界內と見え今花園村に屬す　○大池、雙池と稱す妙心寺の西にあり今埋れて田となる　○水鳥、水字は諸本及類史に據て補ふ　○車駕、原本乘駕に作る諸本及類史に據て改む　○山莊、莊は原本庄に作る水戶校本及類史に據て改む下同じ庄は莊の俗字　○吉備津彥命神、神名式備中國賀夜郡吉備津彥神社(名神大)今吉備郡眞金村吉備中山に祀り官幣中社に列す、彥は原本產に訛れるを神名帳に據て改む　○王氏、交野女王　○元爲賀茂齋院、山崎校本には齋院記に依ると云ひて屬文の下に天皇愛之以の五字を補ひたれど諸本及紀略原本に同じ　○公主、帝王の女をいふ　○書懷、懷は思也又胸臆也聖慮を云　○遣歲華、遣は原本遺に作る閣本前本に據て改む　○性貞潔、性は原本姓に作る閣本宮本に據て改む

○十一月癸亥朔丙寅、奉授陸奥國無位宇奈己呂別神從五位下、○己巳、尚藏從二位緒繼女王薨、女王、能有妖媚之德、淳和太上天皇殊賜寵幸、令陪宮掖、薨時遺命、不受葬使、于時年六十一、○辛未、天北有聲、如雷、○癸酉、奉授尾張國无位大縣天神、眞清田天神二前、並從五位下、○己卯、分遣使京師及畿內大寺卅六所、誦經修福、○壬午、人定之時、有如流星者、自西殞東、其光芒廣二町餘、長十許丈、○癸未、屈五十僧於清涼殿、日轉金剛般若、夜修十一面法、兼令十四口僧修息災法於眞言院、並以三箇日爲限焉、○十二月壬辰朔癸巳、以律師傳燈大法師位長訓爲少僧都、大法師道雄爲律師、○癸卯、奉授河內國丹比郡无位丹比神從五位下、○乙巳、從五位下紀朝臣全吉爲主殿頭、從五位上百濟王慶世爲齋院長官、○庚戌、右大臣從二位橘朝臣氏公薨、遣中使於第、詔贈從一位、遣參議從四位上行式部大輔兼勘解由長官滋野朝臣貞主、從四位下行治部大輔房世王等、監護喪事、氏公者、贈太政大臣正一位清友朝臣之第七子也、弘仁之初、任左衞門大尉、六年叙從五位下、尋轉佐、八年

（十一月）宇奈己呂別神、神名式陸奥國安積郡宇奈己呂和氣神社（名神大）、穗積村八幡別は原本列に作る宮本に據て改む
○緒繼女王、系詳ならず
○大縣天神、神名式尾張國丹羽郡大縣神社（名神大）今樂田村に祀り國幣中社に列す
○眞清田天神、同式同國中島郡眞墨田神社（名神大）一宮町に祀り國幣中社に列す
○人定之時、亥刻今の午後十時
○光芒、芒は原本赤に作る閣本前本に據て改む
（十二月）丹比神、神名式河內國丹比郡丹比神社（鍬靫）今南河內郡丹比村多治井
○第七子、補任は三男に作る
○弘仁之初、補任に四年正月とあり
○加從五位上、此五字閣本尾本に據て補ふ
○十年、原本年を月に作る閣本前本に據て改む
○任參議、以下十二年正月に至る三十二字閣本尾本前本に據て補ふ水戶校本に按公卿補任正月當

加従五位上、十年加正五位下、任但馬守、十一年叙従四位下、頻加階級、十四年至正四位下、天長十年授従三位、爲右近衞大將、六月任參議、承和五年遷中納言、八年十月加正三位、九年三月轉大納言、十二年正月加従二位、任右大臣、移病居第、不親世事、以太后弟、歷此顯要焉、薨時年六十五、○（廿五）丙辰、勅、大和國城上郡長谷山寺、高市郡壺坂山寺、元來靈驗之蘭若也、宜付所司編爲定額、永以官長令撿挍也、

續日本後紀卷第十七

作七月と云
○居第、井手の山莊なり山州名跡志に井堤左大臣館石垣村の南上村の東山麓に跡あり石垣礎石等今尙所々殘れりと云今綴喜郡井手村井出にあり
○太后弟、弟は原本第に作る閣本前本宮本に據て改む
○長谷山寺、三代實錄に貞觀十八年五月廿八日律師法橋上人位長朗申牒偁大和國長谷山寺是長朗先祖川原寺修行法師位道明寶龜年中率其同類奉爲國家所建立也靈像殊驗遐邇仰止云々とあり今磯城郡初瀨町初瀨にあり
○壺坂山寺、大和志に高市郡南法華寺在淸水谷村東壺坂山とあり今高取町壺坂にあり
○蘭若、釋氏要覽上に蘭若梵云阿蘭若或云阿練若唐言無諍とあり佛寺を云
○付所司編爲定額、司編は原本由綸に作る閣本尾本に據て改む

○承和、此二字宮本に據て補ふ

【承和十五年】廻御、大極殿より紫宸殿におはしませるなり

○貞貞親王、淳和天皇皇子

○人康親王、今上天皇皇子

○善繩、原本善綱に作る諸本及類史七十一に據て改む下同じ

○豐住朝臣永貞、原本住を任に貞を眞に作る閣本及類史に據て改む

○諸數、宮本及類史諸た

續日本後紀卷第十八

起承和十五年正月盡嘉祥元年十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

（戊辰）十五年春正月壬戌朔、天皇御大極殿、受朝賀、皇太子不朝、緣病也、廻御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○四乙丑、聖躬微不調適、尋乃安豫、是日、仰七道諸國、貢身長六尺已上者、○七戊辰、天皇御紫宸殿、饗百官、詔授無品良貞親王、人康親王並四品、正五位上岑成王從四位下、從五位下嶋江王從五位上、正六位上永直王、久須野王、並從五位下、從四位下藤原朝臣嗣宗從四位上、正五位下長岑宿禰高名、淸岑朝臣門繼、藤原朝臣諸成、從五位上伴宿禰善男、並從四位下、從五位上春澄宿禰善繩、藤原朝臣氏宗、並正五位下、從五位下丹墀眞人諸氏、平朝臣春香、並從五位上、外從五位下善友朝臣穎主、豐住朝臣永貞、正六位上源朝臣慖、无位源朝臣舒、正六位上橘朝臣常蔭、良岑朝臣正直、橘朝臣主雄、巨勢朝臣河守、

緖に作る
○淡海朝臣弘岑、下文に朝臣を眞人に、岑を峯に作る
○繩主、繩は原本綱に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○與我業、原本興成に作る下文二月甲辰紀及類史に據て改め補ふ
○安倍朝臣眞栬、原本倍を陪に栬を艳に作る倍は閣本尾本に據り栬は類史に據て改む栬は梔に同じ
○東守、東は原本束に作る類史に據て改む
○神門臣當繼、錄右京神別神門臣天穗日命十二世孫鵜濡渟命之後也とあり出雲國神門(加無止)郡あり此氏の本土なるべし類史百七十七に天長七年四月以出雲國正稅稻五百束給采女神門臣富繼とさ見ゆるは同人か閣本は富繼に作れり
○源朝臣信、信字は閣本尾本に據て補ふ
○從三位行左大辨、行字は狩谷校本に據て補ふ
○勘解由長官如故、篁を以て勘解由長官とすること下文四月壬辰紀に見ゆ公卿補任、古今目錄亦同

藤原朝臣諸數、橘朝臣高宗、淡海朝臣弘岑、藤原朝臣秀道、丹墀眞人繩主、紀朝臣與我業、佐伯宿禰雄勝、安倍朝臣眞栬、笠朝臣潔主、賀茂朝臣東守、八多朝臣安嗣、大枝朝臣音人、並從五位下、正六位上高村宿禰武主、榎井朝臣嶋公、豐階公安人、安墀宿禰豐額、朝原宿禰良道、神直虎主、並外從五位下、宴訖賜祿有差、○己巳、於大極殿、修最勝會、是日、叙從五位下藤原朝臣泉子從五位上、橘朝臣鎭子、藤原朝臣指南、文室朝臣近子、出雲臣成子、並從五位下、神門臣當繼外從五位下、○辛未、天皇御紫宸殿、勅授參議正四位下安倍朝臣安仁從三位、以大納言正三位藤原朝臣良房爲右大臣、右近衛大將如故、中納言正三位源朝臣信爲大納言、參議從三位行左大辨源朝臣弘、參議從三位行右大弁春宮大夫安倍朝臣安仁、並爲中納言、左近衛中將從四位下藤原朝臣良相爲參議、○甲戌、天皇御紫宸殿、以參議從四位下小野朝臣篁爲左大弁兼信濃守、勘解由長官如故、中納言從三位安倍朝臣安仁爲兼民部卿、春宮大夫如故、參議從四位上藤原朝臣長良爲左衛門督、參議從四位上

じければ下文を以て正さすべし
○彈正大弼下野守如故、助は四月壬辰紀に爲二彈正大弼一とあり補任亦同じければ此にあるは誤なるべし
○高村宿禰武主、村は原本[illegible]に作り閣本前本空白とす水戸校本及上文に據て改む
○嶋公爲介、介は原本脫す宮本に據て補ふ
○源朝臣定、定は原本之に作る閣本前本に據て改む
○和氣朝臣、氣字は水戸校本及下文三月紀に據て補ふ
○縣連氏益、氏は原本代に作る上文に據て改む
○綱雄、綱は原本納に作る諸本に據て改む
○豐前王爲伊豫守、豫は原本勢に作る宮本に據て改む讃岐介と土左大目との間にあれば必ず豫とあるべきなり
○秦忌寸福代、桓武平氏系圖に高見王は葛原親王の第三子母は土左大目秦福代の女と見ゆ
○土左大目、左は原本佐に作る前本谷本宮本に據

藤原朝臣助爲二兼左兵衛督一、彈正大弼下野守如故、從五位下佐伯宿禰雄勝爲二右馬頭一、外從五位下高村宿禰武主爲二山城介一、從五位下藤原朝臣關主爲二攝津守一、外從五位下榎井朝臣嶋公爲レ介、參議從三位源朝臣定爲二兼尾張守一、中務卿如レ故、從五位下藤原朝臣高直爲二駿河守一、外從五位下氷宿禰繼麿爲レ介、四品時康(光孝)親王爲二常陸太守一、從五位下和氣朝臣豐永爲二安房守一、從五位上藤原朝臣宮房爲二美濃守一、從五位上藤原朝臣安永爲二越中守一、外從五位下安墀宿禰豐額爲レ介、從五位下淡海眞人弘峯爲二丹後守一、外從五位下縣連氏益爲二播磨權介一、從五位下橘朝臣高宗爲二美作介一、從五位上藤原朝臣貞守爲二備中守一、從五位上紀朝臣綱雄爲二安藝守一、正四位下源朝臣明爲二兼阿波守一、刑部卿如レ故、從五位下安倍朝臣忠雄爲二讃岐介一、從五位上豐前王爲二伊豫守一、從五位上在原朝臣行平爲二兼介一、右近衛少將如レ故、外從五位下秦忌寸福代爲二兼土左大目一、一品葛原親王家令如レ故、○乙亥、(十四)最勝會訖、更引二諸宗名僧十餘人於內裏一、令レ論レ義、畢、施二御被一、○丁丑、(十六)天皇御二紫宸殿一、宴二侍從已上一、覽二踏歌一、訖賜レ祿、○戊寅、(十七)

右大臣奉勅、率百官、觀射禮於豐樂院、○己卯（十八）、天皇御内裏射場、閲覽四衛府賭射、○辛巳（二十）、上幸神泉苑、放隼、獲水鳥百廿翼、日暮賜侍從已上祿、○壬午（廿一）、上御仁壽殿、内宴如常、殿前紅梅、便入詩題、宴訖、賜祿有差、○癸未（廿二）、正三位守右大臣兼行右近衛大將藤原朝臣良房上表、請退右大臣職曰、臣同綿蠻疊翮、長謝垂天之遊、類款段兼行、遂非逐日之用、是知、力所不逮、不可假之以名、才所不通、不可責之以效、臣以非磷、本謝聲華、幸藉時議、早參藩邸、聖主加其簪屨之恩、採其錐刀之末、使位均龍作、議接台衡、深恩靡際、淺效無酬、竊位素飡之慚、未嘗一日忘心、不悟朝奬數覃、榮忝更甚、端右之重、忽委愚臣、竊以、百揆務殷、三臺任切、惣彼多士、弼茲萬機、自非山濤雅量、樂廣淸規、猶亦懼不克堪、況於淺中浮植者乎、臣欲碎破頭顱、欽戴國命、義在捐身、衆謗非辱、但懼秉鈞非器、具瞻失望、則鬼瞰得便、人指歸咎、伏願垂察丹懇、曲留皇揆、時收渙汗、更擇賢才、則上有成物之慈、下無貪榮之累矣、不任荒悚之至、謹拜表以聞、天皇不聽、○乙酉（廿四）、右大臣重上表曰、臣良房言、臣前表陳誠、仰希哀察、而宸居冲邈、天顧不

て改む
○右大臣奉勅、右字は山崎校本に據て補ふ
○賭射、賭は原本諸に作る諸本及類史に據て改む
○上御仁壽殿、上は類史主上に作る
○同綿蠻疊翮云々、綿蠻は毛詩小雅綿蠻章に綿蠻黃鳥とあるより黃鳥の意に用ふ疊翮は文選射雉賦注に雨翮也とあり羽翼の意、臣の力は黃鳥の羽翼に等しければ天高く翺翔することは能はずとなり、原本垂を乘に作る閣本前本宮本に據て改む
○類款段兼行云々、款段は後漢書馬援傳に御款段馬、注に款猶緩也言形段遲緩也とあり歩遲き馬の意逐日は洞冥記に修彌國有馬如龍騰虛逐日とあり駑馬の如何に日を併せ行を兼れて急ぐとも日を逐ふ用に立たざるが如く臣の無能は用ふるに要なしとなり
○所不逮、逮は原本隶に作る宮本細本安本に據て改む閣本前本建に作るは逮の訛なるべし
○以名、原本以を多に作る宮本に據て改む

廻、同飛鳥之遺音、未知攸集、似焦原之徃跟、空自阽危、臣聞、器小而滿、其覆不遲、墻隙而高、其隤必疾、臣才能無紀、績用罕聞、素沐鴻漸、累塵榮序、丘丘之恩徒積、涓涓之効靡酬、常慙濫吹、若陷塗炭、況亦端揆之任、惣貳天下、苟非其器、則家國招累、若臣之庸流、何用堪此職、臣猶知其不可、物其謂臣如何、懼伐檀之刺更興於聖時、濡翼之非亦出於昌運、臣雖不敏、猶識天恩、庶竭丹愚、以蒙玄化、豈敢逡巡、有所飾讓、實以揣分量力、非所克堪、伏願矜其不逮、察其深誠、特廻虛授之恩、賜許知足之分、則補袞之美、更便英賢、負乘之災、免鍾愚劣、不任惶窘之至、重拜表以上聞、屢驟旒聽、伏增兢悚、天皇不聽、〇庚寅、有狂人、欲闖入陰明門、門衞捕之將去、

○非礴、非も礴も共に薄なり薄才を云　○藩邸、東宮の意　○簪履之恩、簪履はなほ衣冠と云が如し官吏に任ぜらるゝを云履は原本履に作る前本宮本に據て改む　○錐刀之末、左傳昭六年に出づ物の數ならぬを云　○龍作、我邦にて中納言の唐名とす　○台衡、台は三台卽ち三公、衡は阿衡卽ち宰相なり原本衡を御に作る山崎校本に據て改む宮本には鼎に作る　○端右之重、右大臣を指せり　○山濤雅量云々、山濤樂廣並に人名晉書に見ゆ原本山濤を博の一字に作り規下に求字あり山濤は閣本尾本前本に據て改め求字は諸本に據て刪る　○於淺中浮植者乎、心識淺浮なるを云　○戴國命、戴は原本載に作る閣本尾本前本に據て改む　○揖身、揖は原本損に作る尾本前本谷本に據て改む　○秉鈞、原本稟鈞に作る山崎校本に據て改む國政を執るを云　○具瞻、毛詩節南山章に出づ既に注す　○鬼瞰、既に注す　○人指、禮記大學に十手所指其嚴矣乎　○丹翹、中心よりの翹望なり　○皇揆、原本皇を白に作る諸本に據て改む　○時雍渙汗、時は特の誤なるべし渙汗は原本漁汚に作る渙は宮本に據り汗は閣本前本に據て改む　○成物之慈、易繫辭傳に乾知大始坤作成物とあるに據れり　○無貪榮之累、原本累を異に作る閣本尾本前本に據て改む　○右大臣重上表、閣本前本等上字なし　○飛鳥之遺音、易小過卦の象傳に飛鳥遺之音不宜上宜下とあり遺は原本遺に作る閣本尾本前本に據て改む　○焦原之徃跟、張衡思玄賦に阽焦原而跟止とあり已に注せり徃は原本狂に作る閣本前本に據て改む　○阽危、阽は原本陪に作る水戶校本に據て改む　○小而滿、滿は原本禰に作る閣本前本宮本に據て改む　○素沐鴻漸、鴻漸の文字易漸卦に出づ象に漸之進也進得位往有功也とあり漸は原本漸に作る山崎校本に據て訂す　○丘丘之恩、丘丘之の二字閣本前本等空白とす堀本には丘を壑に作る　○涓涓、堀本涓埃に作る　○物其、物は山崎校本に可疑といふ　○伐檀之刺、毛詩伐檀章序伐檀刺貪也在位貪鄙無功而受祿君子不得進仕爾と云り伐は原本代に作る閣本前本淀本に據て改む　○濡翼之非、王融拜祕書丞謝表に畏翹

車一両必讓識濡冒之顯「辭とあり　○以蒙玄化、以蒙の二字閣本前本には空白とす書紀に尾本に據ると云ひて蒙を扶に改む　○諭讓、諭は山崎校本可「疑と云　○特廻、特は原本時に作る宮本に據て改む　○補袞之美、毛詩大雅烝民章に袞職有闕維仲山甫補之、注に袞職不敢斥王之言とあり　○貞乗之災、已に注す貞は原本眞に訛れり閣本に據て改む　○類旒纊、類は原本點に作る閣本尾本前本に據て改む　○青雲情、原本青を惜に作る山崎校本に據て改む　○陰明門、拾芥抄中末に陰明門三間云右兵衛陣「謂之宮西南内門「宜秋内とあり　○門衛、衛は原本衛に作る閣本尾本に據て改む

○二月辛卯朔壬辰、勅、以從四位下伴宿禰善男爲參議、○癸巳、參議從四位下小野朝臣篁爲班山城田使長官、散位從五位下文室朝臣有眞爲次官、參議從四位下伴宿禰善男爲班河内和泉田使長官、散位從五位下藤原朝臣近主爲次官、○甲午、散位從四位上藤原朝臣雄敏卒、○丁酉、左大臣正二位源朝臣常、上表、請辭所帶左近衛大將之職、天皇不許之、○庚子、上總國馳傳、奏俘囚丸子廻毛等叛逆之狀、登時勅符二通發遣、一通賜上總國、一通賜相摸上總下總等五國、令相共對議、○壬寅、上總國馳驛、奏斬獲反叛俘囚五十七人、○癸卯、左大臣上表、重請解大將、不許之、○甲辰、以參議從四位下伴宿禰善男爲右大弁、從四位下藤原朝臣諸成爲右中辨、從五位下並山王爲中務大輔、從五位下大枝朝臣音人爲大內記、從五位下橘朝臣高成爲圖書頭、從五位下中臣朝臣逸

（二月）

○左大臣、原本左を右に作る水戸校本に據て改む

○馳傳、原本傳を傅に作る類史に據て改む

○一通、通は原本道に作る宮本類史百九十に據て改む下同じ

○對議、類史討伐に作る

○馳驛、類史馳傳に作る

○藤原朝臣諸成、朝臣の二字は宮本に據て補ふ

○從五位下大枝朝臣、大上に原本行字あり閣本前本宮本に據て刪る

○從五位上藤原朝臣貞守、上は原本下に作る上

文に據て改む下同じ
〇三品賀陽親王、天長十年三月三品を齊衡二年正月二品を授く
〇從五位上坂上大宿禰、上は原本下に作る閣本前本宮本及上文に據て改む
〇年嗣、原本嗣を訓に作る閣本前本副に作る、堀本考語及上文に據て改む
〇春宮坊亮、坊字は衍なるべし
〇永貞、永は原本求に作る閣本前本に據て改む
〇相摸守、相上恐らくは兼字を脫す
〇興我業、原本我を茂に作る閣本前本に據て改む
〇右近衞少將、山崎校本に堀氏曰右近衞少將當作右兵衞佐とあり
〇及清涼殿、及字は原本爲に作る宮本及類史百八十七に據て改む
〇負笈、抄調度部文書具に笈唐韻云笈負書箱也和名不美波古とあり原本負を員に作る閣本及類史に據て改む
〇杖錫、同僧房具に錫杖經云錫杖亦名智杖彰顯聖智也云々とあり
〇聽得度者以延字、原本度延二字を脫し得を侍に

志爲內藏頭、從五位下良岑朝臣長松爲縫殿頭、從五位上藤原朝臣貞守爲式部少輔、三品賀陽親王爲治部卿、從五位上坂上大宿禰正野爲大輔、從五位下藤原朝臣正世爲少輔、從四位下房世王爲宮內大輔、從五位上笠朝臣年嗣爲大膳大夫、從五位下高叡王爲內膳正、正五位下藤原朝臣氏宗爲春宮坊亮、從五位下豐住朝臣永貞爲齋宮頭、外從五位下伴吉田連宗爲勘解由使次官、正四位下源朝臣融爲兼右近衞中將、美作守如故、從五位下文屋朝臣有眞爲左衞門佐、參議從四位上橘朝臣峯繼爲相摸守、右衞門督如故、從五位下紀朝臣興我業爲武藏權介、從四位下藤原朝臣岳守爲近江守、從五位下巨勢朝臣河守爲丹波介、正五位下春澄宿禰善繩爲兼備中守、文章博士如故、從五位下藤原朝臣近主爲介、從五位下橘朝臣眞直爲兼安藝介、右近衞少將如故、〇十五乙巳、請百僧於紫宸殿及清涼殿、轉讀大般若經、其由不詳、〇十六戊申、讀經事畢、施物如常、更有勅、施百僧度者各一人、亦遣中使於八省院、別試持經持咒抜萃者、於是負笈(フミハコ)杖錫、自四方至者數百人、就中及第者七十餘人、並

字を宗に作る閣本前本及類史百八十七に據て改め補ふ
○天佐自比古命神、神名式隱岐國知夫郡天佐志比古命神社、知夫村知夫に坐す自は原本目に作る宮本に據て改む
○御戸代田、神田なり
○望請、望字は本朝月令所引の文に據て補ふ
○吉備彥命神、備下に津字脫せるか
○如雷、類史雷字なし
○丈部宗成、丈は原本大に作る諸本に據て改む
○特給職田、田令に郡司職分田大領六町少領四町
○視民有方云々、考課令に見ゆ
(三月)朝原宿禰、二年十月戊戌紀に見ゆ
○河邊郡、河は原本阿に作る閣本宮本に據て改む
○□□益人、閣本前本等益上二字空白とす姓氏を脫せるなるべし未考得ず
○永安門、承明門の西
○近衞及今良、原本及字空白とし今を夸に作る及は宮本類史百七十三今は閣本前本谷本及類史に據て改む今良はイマキ又はイマヽキリと訓み延喜式

聽得度、皆以延字居名上、○己酉、奉授隱岐國天佐自比古命神從五位下、○辛亥、正一位勳一等賀茂御祖大社禰宜外從五位下鴨縣主廣雄等欵云、去天平勝寶二年十二月十四日、奉充御戸代田一町、自爾以降、未被奉加、因茲年中用途乏少、請准別雷社、加增御戸代田一町、勅許之、奉授備中國吉備彥命神從四位上、○壬子、地震、聲如雷、群犬驚吠、陸奧國磐瀨郡權大領外從七位上丈部宗成等、特給職田、以視民有方、公勤匪懈也、○丙辰、聖躬不豫也、大臣以下陪候陣頭、是日、宮城坤角垣瓦無故頽落、其響如雷、○三月庚申朔、河內國河內郡人大初位下秦宿禰世智雄賜姓朝原宿禰、○甲子、攝津國河邊郡人從八位下□□益人等七人、依漏姓字、加賜連字、是日、永安門西廊有火、近衞及今良等、競捷水沃之卽滅、初是作物所治師行火之所延也、○乙丑、神泉苑東垣瓦八丈餘、無故頽落、聲不異雷、○丁卯、大地頗震、○壬申、勅奉充山城國乙訓郡山埼明神御戸代田二町、○伊豆淡路兩國飢、遣使賑給、○己卯、從五位下藤原朝臣秀道爲安房守、從五位下和氣朝臣豐永爲越中守、○辛

今來と互用せり
○遷水、遷は玉篇に負擔也擔運ゝ物也とあり類史百七十三は運に作る
○作物所、ツクモトコロと物語書に見ゆ拾芥抄中末に作物所在進物所西
○山埼明神、式內酒解神なり已に出づ埼は原本崎に作る今閣本宮本に據る
○通計前歷、此時の符は三代格に載せたり
○圓仁歸朝、圓仁は承和五年六月出帆渡唐し同十四年唐大中元年閏三月彼國を發し九月二日赤浦より渡海同月十九日鴻臚館に入りしこと求法巡禮記に見え嘉祥元年春入京の事慈覺大師傳に見ゆ
(四月)夏四月、夏字は閣本前本に據て補ふ
○第二皇子二品長親王、紹運錄及纂輯御系圖には第三皇子と見ゆ
○左兵衞督、兵は原本近に作る上文及補任に據て改む
○兼勘解由使、兼字は閣本尾本前本に據て補ふ篁を以て勘解由使長官とせしこと上文に見えたれば衍なるべし
○百枝、原本百技に作る

已制、自外國官遷任京官未預參前、更任外職、通計前歷、○乙酉、天台宗入唐請益僧圓仁、將弟子僧性海惟正等、去年十月、駕新羅商船、來著鎭西府、是日歸朝、遣中使慰勞、各施御被、○丁亥、地震、○夏四月庚寅朔、上御紫宸殿、皇太子侍焉、公卿及侍從已上、鐘鼓歌舞、日暮賜祿有差、五世无位春常王、六世正六位下田上王、正六位下春世王等三人、賜姓文室朝臣、並天渟中原瀛眞人(天武)天皇第二皇子、二品長親王之後也、○壬辰、地震、以參議從四位上藤原朝臣助爲彈正大弼、左兵衞督如故、參議從四位下小野朝臣篁爲兼勘解由使長官、左大弁信濃守如故、○甲午、上幸神泉苑、轉御冷然院、次幸北野、○壬寅、授正五位下橘朝臣百枝從四位下、正六位上倉橋部直氏嗣外從五位下、○癸卯、本康親王、及源朝臣冷、於清涼殿冠焉、並天皇之遺體也、本康親王同產柔子內親王亦初笄焉、是日賜近習臣及侍從已上祿有差、○甲辰、遣內竪七人、誦經諸寺、○丙午、上幸冷然院、賜扈從親王及侍從祿、○丙辰、上御武德殿、閱覽諸牧細馬、兼令四衞二府驍才者騎射、○五月己未朔、日有蝕之、○辛酉、勅、

賜兵部卿四品忠良親王御劔、○癸亥、天皇御武德殿、觀馬射、○甲子、四品良貞親王俄薨焉、淳和太上天皇第五皇子也、由是天皇不御武德殿、○乙丑、聖體不豫也、須使七寺同時誦經、○戊辰、上御武德殿、閱覽種種武藝、警蹕侍衛同六日儀、○辛未、奉授陸奧國從五位下勳九等刈田嶺名神正五位下、餘如故、陸奧國白河郡大領外正七位上奈須直赤龍、磐瀨郡權大領外從七位上勳九等丈部宗成、磐城團擬少毅陸奧丈部臣繼嶋、權主政外從七位下丈部本成、信夫郡擬主帳大田部月麻呂、標葉郡擬少領陸奧標葉臣高生、伊具郡麻續鄕戶主磐城團擬主帳陸奧臣善福、色麻郡少領外正七位上勳八等同姓千繼等八烟、賜姓阿倍陸奧臣、○壬申、從五位下橘朝臣安吉雄爲侍從、從五位下橘朝臣友雄爲宮內少輔、○癸酉、紀伊國在田郡爲上郡、以戶口增益課丁多數也、無品崇子內親王薨、淳和太上天皇之皇女也、母橘氏(船子)云、遣兵部大輔從四位下豐江王、幷五位三人、監護葬事、○己卯、有勅、賑給飢民、匪亶城中、特覃城外、阽危之伍、莫不慶賴、○庚辰、上幸冷泉院、避暑、是日地震、奉授武

閣本前本に據て改む
○倉橋部、錄未定雜姓に椋椅部首吉備津彦五十狹芹命之後者不見とあり
○本康親王、紹運錄に今上第五子號八條宮
○源朝臣冷、今上第十九子
○天皇之遺體、之字は前本宮本に據て補ふ
○同產、同母妹を云
○親王及侍從、類史從下に等字あり
○細馬、厩牧令義解に細馬者上馬也とあり
(五月)忠良親王、嵯峨天皇第五子
○刈田嶺名神、已に出づ
○奈須直赤龍、國造本紀に那須國造纏向日代朝御代建沼河命孫大臣命定賜國造とあり赤龍は其族なるべし赤は原本亦に作る閣本尾本に據て改む
○磐瀨郡、二月壬子紀に據て補ふ
○外從七位上丈部宗成、原本上を下に作る上文に據て改む
○磐城團、磐は原本船に作る閣本前本に據て改む
○權主政、纂詁は權上恐くは磐城郡三字を脫せりと云

○大田部月麻呂、類史に相摸國人大田部直守宅賣あり同族なるべし
○標葉郡、倭名抄に標葉は志米波と訓り今雙葉郡となる
○標葉臣高生、他に見えず阿倍氏を賜はるを見れば大彦命の後なるべし生は卜本主に作ると云
○主帳、帳は原本張に作る水戶校本に據て改む
○友雄、友は原本與に作る宮本に據て改む
○在田郡爲上郡、今有田郡と書く本郡は吉備以下五郷を管すれば戶令に依るに上は下の誤なるべし
○崇子内親王薨、紀略壬申に係るは誤なるべし
○橘氏云、山崎校本に云は云々に作るべしと云
○覃城外、外字は山崎校本に據て補ふ
○阽危之伍、玉篇に伍は五人爲伍又與衆雜處曰伍とあり阽危上に注す原本危下に因字あり伍を俗に作る閣本前本谷本に據て改め削る
○慶賴、尙書呂刑一人有慶兆民賴之とあるに據れり
○冷然院、然は原本泉に

藏國无位杉山名神從五位下。○壬申。大宰府獻白龜。○丙戌。外從五位下伴吉田連宗爲大判事。從五位下藤原朝臣秀道爲大炊頭。外從五位下山田宿禰文雄爲勘解由次官。外從五位下壬生忌寸永嗣爲河內權介。從五位上藤原朝臣氏範爲遠江權守。從五位下善友朝臣豐宗爲上總權介。○六月戊子朔。連雨不停。雨勢如建瓶水。○己丑。奉幣雨師神社。以祈止霖雨。○庚寅。越中國飢。賑給。正三位守右大臣兼行右近衞大將臣藤原朝臣良房上表曰。臣先對鶴書。自羞鵜翼。一心憂結。比表歸閒。而皇天不仁。遂收慈於辭職。王事靡盬。空耻□於濫吹。臣聞。有非常之功。受非常之福。臣過以頑魯。深沐聖恩。官已崇而又重。位已極而更加。遂居三獨坐之尊。當食二千戶之邑。此榮也非臣本望。此祿也但臣新意。在樹爲再實之裁。在禽爲翰音之象。顧此盈滿之咎。不寒自慄。臣雖無深謀遠慮。而猶知懷德戴恩。冀以端愨畏愼。百身壹心。上全大恩。下守微志。長飡雍穆之和。終奉告成之禮。豈敢坐安尸素。多食封邑。陷于招損之禍。貽以不節之嗟乎。伏願。天聽不遠。皇鑒照微。殊降鴻謙之恩。許還封戶之半。然

作る今類史三十一に據て改む
○杉山名神、神名式武藏國都筑郡杉山神社
○壬申、已に上に出づされど白龜を獻ずること類史紀略並に壬申とすれば輙く改め難し
○伴吉田連、去年正月紀には吉を良に作る
○永嗣、原本嗣を副に作る嘉祥二年正月戊辰紀に據て改む
(六八月)如建瓴水、漢書高帝紀に譬猶居高屋之上建瓴水也と見ゆ建は覆也原本建を走に瓴を瓶に作る建は諸本に據り瓴は閣本尾本に據て改む
○大將、此下臣字衍なり
○對鷁書白羞鴉翼、梁簡文帝表に跪對鶂書俯羞鴉翼とあるに據れり
○靡鹽、鹽は原本鹽に作る宮本に據て改む
○空耻口於濫吹、口は纂詁に據て補ふ私記にも恐有脫字と云へり
○三獨坐之尊、後漢書宣秉傳に建武元年拜御史中丞光武特詔御史中丞與司隸校尉尚書令會同並專席而坐故京師號曰三獨坐とあり

則重載之少減、沉舟乍浮、至盈而稍挹、欹器更正、不任惶窘征營之至、謹昧死再拜以陳乞、天皇不許、是日、左大臣從二位兼行左近衞大將皇太子傅臣源朝臣常、正三位守右大臣兼行右近衞大將臣藤原朝臣良房、大納言正三位臣源朝臣信、中納言從三位臣源朝臣弘、中納言從三位兼行民部卿春宮大夫臣安倍朝臣安仁、參議從三位行中務卿兼尾張守臣源朝臣定、班大和國田使長官參議從四位上式部大輔臣滋野朝臣貞主、班攝津國田使長官參議從四位上行左兵衞督兼彈正大弼下野守臣藤原朝臣助、參議從四位上行左衞門督臣藤原朝臣長良、參議從四位上行右衞門督臣橘朝臣岑繼、班山城國田使長官參議從四位下守左大弁兼勘解由長官行信濃守臣小野朝臣篁、參議左近衞中將從四位下臣藤原朝臣良相、班河內和泉國田使長官參議從四位下守右大弁臣伴宿禰善男等上表言、臣聞、潛化既兆、理至則形、玄感雖昧、在幽必顯、德之所極、靈祇不能祕其福、道之所格、川岳無愛其寶、故盛水衡符之瑞、跡昇軒壇、嫣淵負圖之祥、光浮堯渚、伏惟皇帝陛下、德冠神表、道

○二千戸之邑、祿令に左右大臣食封二千戸
○臣新意、山崎校本に堀氏曰意當作恩さあり
○再實之栽、後漢書馬皇后紀に富貴之家祿位重疊猶再實之木其根必傷さあり
○翰音之象、易中孚卦に翰音登于天貞凶、本義に雞曰翰音云々雞非登天之物而欲登天信非所信而不知變亦猶是也さあり
○戴恩、戴は原本載に作る山崎校本に據て改る
○雍穆、穆は原本惶に作る閣本に據て改む
○告成之禮、毛詩大雅江漢章に經營四方告成于王さあり
○招損之禍、尚書大禹謨に見ゆ
○不節之嗟、易節卦に不節若則嗟若、象に不節之嗟又誰咎也さあり節は原本郎に作る閣本前本に據て改む
○重載之少減、之は前本谷本に據て補ふ
○欲器、上に見ゆ
○惶營征營、漢書王莽傳注に正營惶恐不安之意也さあり正は征に同じ

軼帝光、握金鏡而照臨、惣環瀛而富有、惇睦辨章之意、昃食兢懷、寧人濟俗之心、夕惕興慮、垂仁愛於万物、施慈育於群生、寰寓無虞、表裏清謐、伏見大宰大貳從四位上紀朝臣長江等奏傳、所管豐後國大分郡擬少領膳伴公家吉、於同郡寒川石上獲白龜一枚、經千里之荒徼、入九重之宸闈、出自籠匱、放于庭堦、既在眄睠、豈因敷奏、質類凝霜、形同搏雪、天憑異物而致瑞、欲蟄還出、地假殊形而見符、在涅而不緇、實曠古之嘉貺、希代之偉觀、謹案禮含文嘉云、外內之制、各得其宜、則山澤出靈龜、孝經援神契云、王者德澤洽、則神龜來、孝道行則地龜出、熊氏瑞應圖云、王者不偏不黨、尊用耆老、不失故舊、德澤流洽、則靈龜出、後魏書曰、冀州獻白龜、王者不私人以官、尊耆任舊、無偏無黨之瑞也、陛下帝德王功、巍巍如彼、靈符嘉應之光如此、千歲一至之祥、沓前王之矩、邈古惟新之會、重列聖之規、依據圖諜、實合大瑞、加以、龜生於金、而遊於火、今生得其正、白金方而來輪、遊不愆時、在火候而入貢、未有色將方叶、時與正符、如此之奇也、諸天之氣、食土之毛、莫不魚躍鳥飛、抃舞皇極、況臣等叨竊纓冕、忝列台衡、

荷恩既深、情異凡百、不任誠慶之至、謹詣闕庭、奉表賀聞、○壬辰、勅曰、靈心演貺、佇休曆而必臻、神道効禎、在至仁而斯感、是以遊蓮瑞質、表呂化於堯壇、戲藻奇姿、契禎期於軒浦、朕嗣膺寶曆、恭纂瑤圖、道謝鴈行、風慙雉飲、宵衣禹室、空契納隍之心、旰食堯宮、未致可封之化、而今卿等表賀如斯、朕之菲虛、何以克任、況復神無常祐、惟德是依、瑞無常臻、因化呈象、故寶祚之慶、在道不在神、天下之平、惟人在惟瑞、但使內富騶虞之相、非求水伯之榮光、朝盈鴻漸之英、何用波臣之耀彩、卿等宜叶濟匡、以助薰風、嘉祥之美、情所未恃、是日太政官牒、送在唐天台宗留學問僧圓載、其辭曰、奉勅、省圓載表欵、容服變更、心事艱阻、然自强不息、乞留數年、凡人心也、皆戀鄕土、非敦求法、詎樂遠偏、事須遂其實歸、不厭年深、又風潮萬里、賷獻遠臻、物豈在奇、唯嘉乃情、宜因于遠成等還次、令知此意、裁賜金物、以充振資者、准勅、聽更住數年、兼賜黃金一百小兩、宜領之、○甲午、右大臣藤原朝臣(良房)重上表請減食封、天皇許之、○乙未、大臣以下重詣朝堂、上表曰、臣常等言、臣聞、皇乾韞瑞、以不虛見爲珍、后土藏祥、以不妄應

○橘朝臣岑繼、橘は原本源に作る尾本宮本及上文に據て改む
○善男、原本男を曾に作る宮本及類史に據て改む
○潜化旣兆、原本旣字なく兆を非に作る旣は山崎校本に據て補ひ兆は閣本前本に據て改む
○理至則形、原本理下に物字あり尾本谷本に據て削る
○無愛其寶、無上恐くは可字を脫す
○盛水衡符之瑞、水經注に黃帝東巡河過洛受龍圖於河龜書於洛赤文篆字とあるを云るかなは竹書紀年にも見ゆ
○嬀淵負圖之祥云々、龍魚河圖に堯與群臣賢智到翠嬀之川大龜負圖來投堯とあり渚は原本堵に作り閣本前本諸に作る狩谷氏の語に從て改む
○淸謐、淸恐静と山崎校本に云り
○大分郡、倭名抄に大分は於保伊多と訓り
○荒徼、徼は玉篇に邊徼也塞也以木爲蠻夷界とあり
○宸閣、原本宸を震に作る宮本水戸校本に據て改

む

○籠匱、匱は原本遺に作る山崎校本に據て改む

○朦朧、原本朦朧に作る閣本前本宮本等に據て改む

○凝霜、色の白きを云、凝は原本疑に作る閣本前本に據て改む

○搏雪、搏は團也同じく色白きを云

○欲蟄、此下纂詁而字を補へり

○不緇、緇は原本淄に作る宮本に據て改む

○禮含文嘉、已に出づ、嘉は原本喜に作る閣本前本宮本に據て改む

○得其宜、宜は閣本前本水戸校本に據て補ふ

○王者云々、神龜元年（續紀上一八一頁）詔を參看すべし

○熊氏瑞應圖、景雲二年九月（續紀下一七九頁）に注す熊は原本能に作る宮本に據て改む

○冀州獻白龜云々、北魏書靈徵に世祖神䴥三年七月の事とす

○沓前王之矩、沓は字書に重也合也とあり

○遂古、原本古を占に作る水戸校本に據て改む

爲貴、聖人觀之以開曆、哲后奉之而乘命、命不可以乖、道不可以曠、龔行之典、千古無愆、交際之謨、百王不易、伏惟皇帝陛下、推功不宰、應物爲心、簡庶事於人謀、順逆必取、引四時於己任、德刑同施、仁以泣辜、義以斷恩、飛沉所樂、玄盛急於置郵、幽明所符、神物切於推轂、今循其所感、神龜自臻、藏采千載、獻狀一朝、上天既不違陛下、陛下何不奉天時、而情存損挹、推而不居、志執鳴謙、抑而不當、臣等以爲、日中則昃、時至則行、務當在於及時、事安俟於終日、豈使祥符顯慶、沒而無聞、應會昭彰、廢而不記、實恐、天謝致貺、有時不來、地倦至符、自我而絕、稽天之命、失民之望、臣等區區、深所未喩、不任悾款之至、重詣闕拜表以聞、復式部省及僧綱等、抗表賀白龜瑞、○丁酉、勅曰、陰陽寮申云、今茲秋雨應爲害者、若不豫防、恐損年穀、宜令五畿內七道諸國、奉幣於名神、以防止雨害、○庚子、改承和十五年、爲嘉祥元年、下詔曰、玄枵丹軸、通上靈以凝禎祥津、伯鱗宗魚、暢潜貺以發祉、庸虛名爲巨瑞、千載而稀一遭、謂爲四靈、百王之所同貴、近有大宰府獻白龜、所管豐之後國大分郡擬少領膳伴公家吉、於寒川石上

○圖諜、諜牒通す
○龜生於金云々、典據未だ考へず但し遊於火は郭璞の龜讃に見ゆ龜卜には之を火にて灼く故かく云るなり
○諸天之氣、諸は原本皆に閣本前本等は背に作る山崎校本に據て改む
○金方、西方なり
○火候、夏なり
○台衡、衡は原本衞に作る水戸校本に據て改む
○謹詣閤庭、原本謹下に而字ありて庭なし閣本前本谷本に據て而を削り庭を補ふ
○遊蓮瑞質、史記龜策傳に龜千歲乃遊蓮葉之上とあり龜を云
○戯藻奇姿、遊蓮と相對して同じく龜を云、姿は原本恣に作る諸本に據て改む
○雉飲、莊子養生主篇に澤雉十步一啄百步一飲不蘄畜乎樊中と呂注に澤雉飲啄自如心與天遊而適其性命之譬也とあり
○禹室、及堯宮は皇宮の意
○納隍之心、隍は原本阬に作る閣本に據て改む

得之、公卿上表曰、孝經援神契云、王者德澤洽、則神龜來、孝道行、則地龜出、熊氏瑞應圖云、王者不偏不黨、尊用耆老、不失故舊、德澤流洽、則靈龜出、後魏書云、冀州獻白龜、王者不私人以官、尊耆任舊、無偏無黨之瑞、依據圖牒、實合大瑞、朕自君臨赤縣、子愛蒼甿、勞尫體於萬機、空成腒腊、而被薰胑於億兆、遂慙勛華、何以副上玄之神契、應幽贊之冥符、故抑而不宣、勅斷慶賀、而同稱靈應、重表慇懃、朕不忍閇拒、反覆念之、昔王仲任、貶儒言以爲隘、猶謂麟鳳之類難萃、唐太宗嫌瑞物以爲謙、仍令龜龍之流依舊、況皇天之意、唯欲愛人、介福之臻、豈獨在予、當是上賴宗祧之冥祐、下緣台輔之懿誠、使蠢蠢含生、同驤首於壽域、茫茫率土、共開懷於仁風、宜播茲雷雨、與天下惟新、其改承和十五年、爲嘉祥元年、自今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、未發覺、已發覺、未結正、已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但犯八虐、故殺謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦例、令天下無輸今年田租之半、又復徭役十日、若已役者、宜折來年、大分之郡、嘉瑞攸出、令免今年田租、其獻龜人叙正六位上、給物准例、内外文武官、主

典已上加位一級、但正六位上者、廻授一子、若無子者、宜量賜物、五位已上子孫年廿已上者、亦叙當蔭之階、天下老人及僧尼八十已上者、節級賜物、鰥寡孤獨、不能自存者、量加賑恤、孝子順孫、義夫節婦、旌表門閭、終身勿事、早先青衣而施、莫致掛壁之譏、大臣就八省院、奉幣帛於伊勢大神宮、及賀茂上下、松尾社、並告依瑞改元、兼令祈防水沴也、○(廿四)辛亥、地震、是日、聖躬苦熱、誦經諸寺、○(廿五)壬子、地震、○(廿七)甲寅、聖體平復、○(廿八)乙卯、以權律師眞紹爲正、大法師眞雅爲權律師、右衞門南町民家失火、延燒數十烟、

○可封之化、漢書王莽傳に明聖之世國多賢人故唐虞之時可比屋而封とあるに據れり　○表賀、賀は原本駕に作る閣本前本宮本に據て改む　○惟人在惟瑞、在字は閣本前本谷本に據て補ふ　○騶虞、毛詩召南騶虞章注に騶の虞義獸也白虎黑文不食生物有至信之德則應之とあり　○水伯、山海經に朝陽之谷神曰天吳是爲水伯とあり　○鴻漸、上に出づ原本鳴漸に作る諸本に據て改む　○濟匡、匡は原本臣に作る山崎校本に據て改む　○薫風、史記五帝本紀に南風之薫兮可以解吾民之慍兮とあるに出で仁政に譬ふ　○未侍、侍は原本時に作る堀本及紀略に據て補ふ　○太政官牒云々、十一年七月癸未紀(一一七六頁)を參看すべし　○共辭曰、曰字は紀略に據て補ふ　○表欵、原本攸歎に作る山崎校本に據て改む閣本前本に衣歎とある衣は表の訛　○容服、容貌服裝なり容は原本客に作る閣本前本に據て改む　○詎樂、詎は原本誰に作る諸本に據て改む　○在奇、奇は原本寄に作る山崎校本に據て改む　○振贇、振は賑に同じ　○更住、住は原本任に作る閣本に據て改む　○一百小兩、雜令に凡權衡廿四銖爲兩十六兩爲斤、注に三兩爲大兩一兩また凡量銀銅者皆用大此外官私悉用小者、義解に文唯擧銀銅不言金鐵金貴於銀鐵賤於銅即貴者用小賤者用大とあり小は原本廿に作る閣本前本谷本に據て改む　○右大臣、右は原本左に作る宮本に據て改む　○大臣、堀本及紀略に左大臣とあり　○皇乾、天を云原本乾を乹に作る閣本宮本に據て改む　○哲后、哲は原本悊に作る宮本に據て改む　○乘命、纂詁は尾張本に據れりさて命を運に改む　○襲行之典、襲は恭也　○交際之謨、易習坎の疏に六四之柔與九五之剛兩相交際而相親とあり原本際を除に謨を誤に作る閣本前本宮本に據て改む　○泣辜、禹王の故事說苑に出づ既に注せり　○義以斷恩、禮記喪服に門內之治恩揜義門外之治義斷恩とあり　○飛沉、鳥魚を云　○玄盛、纂詁に玄盛恐玄德と云り是なるが如し　○急於置郵、孟子公孫丑篇に德之流行速於置郵而傳命とあり郵は原本𨛗に作る水戶校本に據て改む　○推轂、車轂を推して車を馳らするを云ふ轂は原本穀に作る諸本に據て改む　○今循、循は原本脩に作る堀本に據て改む　○日中則暳、暳は嘒に同じ星光の微なる貌　○侯於終日、於字は前本谷本に據て補ふ　○至符、至は恐くは呈の誤なるべし　○惟欵、欵は原本歎に作る諸本に據て改む　○復式部省、原本復を

後に作る宮本に據改む　○改承和十五年、改は類史八十六に據て補ふ　○嘉祥、後漢書周擧傳に示之以災異訓之以嘉祥さあり　○女枵玄枵、玄枵は星宿の名なり原本枵を揖に作る諸本に據て改む　○凝禎祥津、原本凝を疑に祥を羊に作る凝は宮本水戸校本に據り祥は尾本細本に據て改む　○伯鱻宗魚、龜を褒めて云　○四靈、禮記禮運に麟鳳龜龍謂之四靈さあり　○豐之後、類史には之字なし　○熊氏、原本熊を能に作る閣本宮本前本に據て改む　○腒腊、乾肉を云　○薫腴、原本薫を葷に作る閣本前本尾本安本に據て改む　○不宜、宜は原本宜に作る谷本宮本に據て改む　○閒拒、原本拒を距に作る宮本に據て改む　○王仲任云々、後漢書に王充字仲任好論說以俗儒守文多失其眞著論衡八十五篇云々さあり仲は原本件に作る水戸校本に據て改む　○爲隘、隘は原本溢に作る水戸校本に據て改む　○唐太宗嫌瑞物云々、張說大唐封祀壇頌に我后以人瑞爲心不以物瑞爲意さあるに據れり　○賴宗祧之冥祐、原本賴を類に、冥を宜に作る賴は閣本谷本に據り冥は前本谷本宮本に據て改む　○播茲雷雨、易解卦彖傳に天地解而雷雨作雷雨作而百果草木皆甲拆さあり　○赦例、類史例を限に作る　○令免、類史令免に作る　○五位已上子孫、原本子字なく爲字あり水戸校本に據て改む　○老人及僧尼、及は原本爲に作る水戸校本に據て改む　○旌表、旌は原本旗に作る前本宮本に據て改む　○先靑衣而施、已に注す靑は原本替に作る閣本前本宮本に據て改む　○掛壁之譏、唐書陳子昂傳に下詔書必待刺史縣令謹宣而奉行之不得其人則委棄有司掛牆屋耳百姓安得知之さあるに出づ　○大臣就八省院云々、以下水沴也に至るまで原本七月甲子の次に丁卯云々さし別に一條さして收めたるを類史十一に據て此に移す但し大臣就八省院の六字は原本なし類史に據て補ふ紀略には七月に收めたれど庚子さあり七月に庚子なければ類史を正しさすべし　○水沴、沴は原本旱に作る堀本に據て改む類史殄に作り諸本深に作るは沴の訛なるべし　○聖躬、閣本前本及類史皇躬に作る　○右衞門南町、拾芥抄中末に右衞門町土御門南西洞院東近衞北室町西さ見ゆ

（二七月）秋七月戊午朔、秋は宮本及紀略に據て補ひ戊午は原本壬午に作る諸本及紀略に據て改む　○東市司印、司は閣本尾本前本に據て補ふ　○颱風、抄天地部風雨類に文選詩云迴颱卷高樹注云颱者暴風從下而上也さあり（和名豆无之加世）兼名苑

○炬屋、抄居處部屋宅類に辨色立成云助鋪（和名古夜一云比多岐夜）如衞士屋也さあるヒタキヤ

○秋七月戊午朔己未(二)、奉幣帛於松尾、賀茂上下社、貴布禰、雨師社、以祈甘雨。勅准西市司、賜東市司印一面。○辛酉(四)、右京人蔭孫正六位下豐野眞人澤野兄弟姉妹十人、賜姓高階眞人。天渟中原瀛眞人天皇(天武)之苗裔也。○壬戌(五)、從五位下藤原朝臣秀雄爲大監物。從五位下大神朝臣宗雄爲安房守。○癸亥(六)、請百僧於八省院、轉讀大般若經、以祈甘雨。○甲子(七)、有颱風起自春興殿庭、轉至紫宸殿東北頭(ホトリ)、更經清涼殿東、便向右近衛

卽ち是なり
○丁卯、丁は原本缺く諸本に據て補ふ
○奉幣畿內名神云々、奉幣以下十字は紀略に據て補ふ原本此下に奉幣帛伊勢大神云々の三十字あり類史十一に據て六月庚子の下に移す
○是太上天皇、水戶校本に是下疑脫日字とさ云
○設齋於高雄山寺、原本設齋を齊祝に高を廣に作る設齋の二字は紀略に據り高は山崎校本に據て改む
○奠幣五畿內七道云々、神名式に載する所の諸神を云
○冥報、原本冥報に作る水戶校本及紀略に據て改む
○十二諸陵、陵名未詳
○合殿比咩神、合は原本今に作る山崎校本に據て改む承和三年十一月庚午紀（九十四頁）に注す
○棲鳳樓閣道、棲鳳樓は拾芥抄中末に栖鳳樓東謂之應天門外東極一方四間とあり道は原本空白とせるを諸本に據て補ふ
○宇倍神、神名式因幡國法美郡宇倍神社（名神大）

陣、簸揚炬屋、離地數尺、到版位前、披靡悉摧、○丁卯、奉幣畿內名神、令祈甘雨、○壬申、是太上天皇國忌日也、令公卿已下設齋於高雄山寺、兼請律師實敏、大法師願勤、道昌、光定等於淸凉殿、令講法華經、竟施物有差、○甲戌、勅曰、頃者大宰府進白龜、撿之圖典、實合大瑞、自非神明靈應之佐、豈獨致希代之貺、宜奠幣五畿內七道諸國天神地祇、賀彼冥報、○丙子、遣公卿等、告白龜瑞於十二諸陵焉、○壬午、奉授正四位上今木大神從三位、從五位上古開神、久度神、並正五位下、无位合殿比咩神從五位下、○癸未、棲鳳樓閣道有死人枯骨之連綴、不辨男女、工匠修理之次、登閣上而見著矣、○甲申、因幡國法美郡无位宇倍神奉授從五位下、卽預官社、以國府西有失火、隨風飛至、府舍將燔、國司祈請、登時風輟火滅、靈驗明白也、○乙酉、出雲國飢、賑給之、○丙戌、雷電非常、震于東西二京、凡十一處、木工寮倉、東市司樓、治部卿賀陽親王家屋、伊都內親王家屋、中務卿源朝臣定家屋、右馬頭藤原朝臣春津家屋、近江守藤原朝臣岳守家屋、弘文院屋、自餘三處、小民宅者不足具記、○八月丁亥朔己丑、雨降、

岩美郡宇倍野村宮下に祀り國幣中社に列す
○國府、法美郡にあり
○震于東西二京、原本震を二字に分けて干支（丙辰）とし更に災字を加へたり蓋校訂者の私意に出づ今紀略に據て改め削る
○春津家屋、屋字は宮本に據て補ふ
○弘文院、拾芥抄中末弘文院和氣氏諸生別當爲荒廢之地在勸學院北清麻呂卿建立之云々とあり
（（八月））雨勢如倒井、李白玉眞公主別館苦雨贈衛張卿詩に秋霖劇倒井と見ゆ
○河陽橋、山城國乙訓郡山崎にあり山崎橋とも云ふ
○潰絕、潰は原本隤に作る宮本に據て改む
○倍于大同元年水云々、大同元年八月癸亥（後紀一〇一頁）の詔を參看すべし
○左大弁、弁は原本臣に作る山崎校本に據て改む纂詁には慶長二年寫本及宮本二本に依れりとて此下に舍人二字を補へり
○養父郡、倭名抄に養父

通宵不止。○庚寅、雨勢如倒井、終日不息。○辛卯、洪水浩浩、人畜流損、河陽橋斷絕、僅殘六間、宇治橋傾損、茨田堤往往潰絕、故老僉曰、倍于大同元年水、可四五尺。○壬辰、遣左大弁、撿非違使、及看督近衛等、巡察京中被水害者、兼復遣左衛門佐從五位下紀朝臣道茂、齎米鹽賑恤之。肥前國養父郡人大宰少典從八位上筑紫火公貞直、兄豐後大目大初位下筑紫火公貞雄等、賜姓忠世宿禰、貫附左京六條三坊。○甲午、遣使攝津、河內兩國、巡撿於被水災者、開便近倉庫、賑給之。○壬寅、勅、伯耆國會見郡路下十一條荒廢田百廿町、去天長十一年賜有智子內親王家、宜割八十町賜親子內親王。○甲辰、紀伊國言、牛一產三頭牛。○庚戌、大僧都傳燈大法師位明福遷化、法師俗姓津守宿禰氏、右京人也、故大僧都傳燈修行賢大禪師賢璟之門徒也、天性聰悟、訪道不倦、延曆十年得度、住興福寺、唯識之宗、法相之理、無疑不決、罔義不窮、昔維摩會、及八省講師等忽然有病、不能昇座、大衆僉推法師而爲座主、於是法師敷揚義理、辯折衆疑、闔坐悅伏、稱爲法將、復嚫施之物、元來不蓄、巾鉢之外、咸以分

は夜不と訓り今三養基郡となる

○筑紫火公、原本火公を公文公の三字に作る細本及纂詁に據て改む、火君は録右京皇別に多朝臣同祖神八井耳命之後也とあり

○忠世宿禰、此以外に見えず

○路下十一條、原本十一を士に作る閣本以下土に作り或は十一とも見ゆ宮本書入にも土カ十一カ不明ナリとあれど姑く纂詁に據る

○天長十一年、原本十一を七に作れど天長十一年即ち承和元年なれば改む

○親子内親王、今上皇女に坐す

○修行賢大禪師、纂詁修行位大法師と改訂す

○賢璟、釋書賢憬に作る

○敷揚、揚は原本楊に作る閣本前本に據て改む

○稱爲法將、稱は原本禰に作る閣本前本宮本に據て改む

○賻施、釋氏要覽上に嚫錢梵語達嚫拏此云財施今略達拏但云嚫とあり布施なり嚫嚫通す

○巾鉢、三衣一鉢なり

散、天長承和之間、頻經擢拔、登大僧都位、其後終于所居寺、時年七十一、○壬子(廿六)、以從五位下南淵朝臣穎守爲大炊頭、從五位上清瀧朝臣河浪爲大和權守、從五位下文室朝臣有眞爲近江介、從五位下佐伯宿禰雄勝爲信濃介、從五位下橘朝臣春成爲能登守、○甲寅(廿八)、奉授下野國正五位上勳四等二荒神從四位下、餘如故、○九月丁巳朔、戊午(二)、靑鷺集紫宸殿南庭版位下、○乙丑(九)、重陽節也、天皇御紫宸殿、宴于公卿及文人、如常、是日、同賦雨洗白菊、以應製、宴訖賜祿、○乙亥(十九)、令鑄新錢、下詔曰、觀夫洞八連三、重規疊矩、莫不交易以强國、代遷以利民、故鷹揚神文、立九府之圜法、龍相天人、施五銖之異制、象乾坤之方圓、同川岳之流積、無遠不徃、無深不臻、便用輕通、家國同利、但輕重有異、子母相通、影入星楡、形圖水荇、用捨之端無定、小大之變隨時、今者天賜嘉祥、曆改年號、若使鋳文貨制、仍舊不悛、恐乖變通之規、或罹流弊之咎、宜改舊貫於梟錙、磨新彩於金刀、文曰長年大寶、一以當舊之十、新之與舊、並用雜行、將令用而不倦、既富之而敎之、是日、遣左中弁從四位下藤原朝臣嗣宗、治部少輔從

○河濵、濵は宮本根に作る　○二荒神、已に出づ　○(九月)應製、詔に應ずるを云凌雲集に神泉苑雨中賦應製一首文華秀麗集に侍二嵯峨山院一探二得迴字一應製一首など其例多し　○乙亥、原本己亥に作る是月己亥なし山崎校本に據て改む　○觀夫洞八連三云々、詳ならず夫は原本大に作る山崎校本に據て改む　○鷹揚神文、周の文王を云なるべし鷹揚は鷹の飛揚するが如く勢あるを云　○九府之圜法、原本圜法を圓經に作る漢書食貨志に太公爲レ周立二九府圜法一とあるに據て改む圜は錢なり　○龍相天人、漢武帝を云漢書武帝紀に元狩五年罷二半兩錢一行二五銖錢一とあり　○川岳之流積、之は原本而に作る宮本に據て改む　○影入星楡云々、星楡は白楡星をいひ以て錢形の楡莢の如きに喩ふ水荇は洞冥記に漢宮太一池有二連錢荇一などと見え葉形錢に似たるよりかく云り　○濯渧幣之咨、原本濯を曰惟の二字に作る狩谷氏考語に據て改む　○改舊貫於烏鏹云々、鏹は繦に同じ錢貫なり刀は刀布の刀にて錢を云新錢を改鑄せむと云なり　○長年大寶、拾芥抄下末に長平永寶に作り嘉祥元九月日とあり長年大寶に二種あること泉彙に見ゆ　○直世、直は原本眞に作る谷本宮本に據て改む　○築茨

五位下藤原朝臣直世、外從五位下山代宿禰氏益、六位判官四人、主典四人等、令レ築二茨田隄一、○丙子、以二少僧都延祥一爲二大僧都一、律師實敏爲二少僧都一、權律師眞雅爲二律師一、大法師安戒爲二權律師一、○辛巳、從五位下坂上大宿禰當宗爲二陸奥介一、鎭守將軍如レ故、○冬十月丁亥朔、天皇御二紫宸殿一、宴二侍從已上一、賜レ祿有レ差、讃岐國言、三野郡人從四位上丸部臣明麻呂、年卅、戸主外從八位上己西成男也、齡十八歲入レ都從レ官、遂効二勞績一、被レ任二當郡大領一、即讓二己職於父一、自守二子道一、孝二養二親一、己西成年老致仕、親母亦耄、各居二別宅一、相去十里、明麻呂朝夕往還、定省年久、眷二其孝行一、在昔曾參不レ可二獨賢一、望請、准二據法式一、以被二貢擧一者、勅宜レ叙二爵三階一、終身免二戸內田租一、○辛卯、行二幸神泉苑一、○癸巳、地震、○丙申、上御二內裏射場一、賜レ錢有レ差、○己亥、地震、○庚子、聖躬不豫、遣レ使誦二經於京城七箇寺一、○丙午、地震、○戊申、行二幸神泉苑一、轉幸二北野一遊獵、○壬子、幸二雙岳一、臨レ池放隼、

田隄、八月辛卯決潰せるを以てなり　○延祥、釋書に傳見ゆ　○當宗、承和十四年紀正宗に作る　(十月)從四位上丸部臣、郡の大領を四位に叙せられたりといふは疑はし　○年老、年は前本谷本に據て補ふ　○致仕、原本仕下任字あり閣本前本に據て削る　○各居別宅、居字は閣本前本に據て補ふ　○皆參、孔子の弟子至孝の人　○内裏射場、拾芥抄中末に弓場殿清涼殿南、殿上前と見ゆ　○己亥地震、此四字は類史百七十一に據て補ふ　○庚子云々、此條類史(三十四)には聖躬不豫遣内竪等誦經諸寺各以綿一連爲布施に作る　○戊申、原本申を午に作る宮本及類史三十一紀略に據て改む　○幸北野、拾芥抄中末禁野の中に北野有別當と見ゆ

(十一月)高良玉垂神、已に上に注す　○櫟谷神、神名式山城國葛野郡櫟谷神社、官幣大社松尾神社境外攝社、松尾村上山田　○藥師寺、今河内郡藥師寺村龍興寺は其別院なりといへど本寺は廢址詳ならず　○資財亦巨多矣、天平勝寶元年七月紀に下野國藥師寺賜墾田五百町と見ゆ矣字は類史百八十に據て補ふ　○坂東十國、公式令義解に坂東謂駿河與相摸界坂也とあり足柄以東を云、十國は坂東八ヶ國及陸奥出羽なり　○咸萃、此下に原本之字あり類史に據て削る　○觀音寺、原本音を青に作る諸本に據て改む　○授戒、原本授を受に作る格に據て改む　○智行兼備者、兼字は格

○十一月丁巳朔戊午、奉授筑後國正五位下高良玉垂神從四位下、山城國无位櫟谷神從五位下、○己未、下野國言、藥師寺者、天武天皇所建立也、體製巍巍、宛如七大寺、資財亦巨多矣、坂東十國得度者、咸萃於此、而只有別當、无講讀師、令國講師勾當雜事、求諸故實、未覩所由、望請、准大宰府觀音寺、簡擇戒壇十師之中、智行具足、爲衆所推者、充任講師、便爲授戒之阿闍梨、勅、講師依請任之、但讀師臨事、次第充用彼寺僧中智行兼備者、別當之職、早從停止、○辛未、大和國吉野郡大領吉野連豐益、依政績有聞、借授外從五位下、○壬申、隱岐國伊勢命神、預明神例、緣屢有靈驗也、○十二月丙戌朔、散位從四位上長岡朝臣岡成卒、○丁亥、地震、○己丑、刑部少輔和氣朝臣齊之、依犯大不敬、當絞刑、勅減一等、流伊豆國、○丁酉、制、權任國司、并史生、博士、醫師、秩滿不待下符、直令去任、唯

に據て補ふ
○吉野連、錄左京神別吉野連加彌比古尼之後也とあり
○伊勢命神、神名式隱伎國穩地郡伊勢命神社（名神大）五箇村人見
○明神例、延喜式には名神とあれど或は明神とも書きしなるべし
（十二月）大不敬、八虐の一なり名例律に見ゆ
○羅疎網、羅は原本惟に作る山崎校本に據て改む
○星曆已周、原本周を用に作る山崎校本に據て改む
○遣使、使字は類史五に據て補ふ
○和氣齊之事、上に見ゆ
○土左國、左は原本佐に作る諸本及類史八十七に據て改む
○渤海國、傳は大日本史に見ゆ
○王文矩、矩は原本姫に作る宮本及類史十九に據て改む

獨爲長官者、待受領之人、○（廿五）庚戌、勅、從四位上正躬王、正五位下伴宿禰成益、從五位下藤原朝臣豐嗣等、先羅疎網、下于秋官、憲法所當、理存不忍、今星曆已周、恩波蕩滌、宜脩舊典降先一等敍之、正躬王可從四位下、成益從五位上、豐嗣從五位下、○（廿九）甲寅、遣使奉幣香椎廟、其由不詳 ○（三十）乙卯、大判事外從五位下讚岐朝臣永直、坐和氣齊之事、配流土左國、是日能登國馳驛奏、渤海國入覲使王文矩等一百人來著矣、

續日本後紀卷第十八

○閏十二月、閏は下文に據て補ふ
○臣、諸本に據て補ふ
【嘉祥二年】客公、姓氏錄に載せず靈龜二年九月（續紀上一一二頁）に山背甲作客小友等廿一人改賜客姓と見ゆ共同族なるべし
○貫附、原本附を內に作る宮本に據て改む
○從四位上橘朝臣岑繼、從は原本正に作る閣本前本及類史九十九に據て改む
○高枝王、桓武天皇第四皇子伊豫親王の子、閣本前本枝を枚に作る
○貞內王、內は八月丙戌紀に両に作る
○有雄王、舍人親王の孫父は貞代王
○源朝臣勝、嵯峨天皇皇子
○源朝臣多、仁明天皇第九皇子

續日本後紀卷第十九

起嘉祥二年正月盡閏十二月

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

(己巳)嘉祥二年春正月丙辰朔、廢朝賀、緣去年天下有洪水害、秋稼不登也、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○戊午、山城國愛宕郡人散位正八位下客公成人、改本居貫附右京六條三坊、○壬戌、天皇御紫宸殿、覽靑馬、宴群臣、詔授無品恒貞親王三品、无品本康親王四品、正三位藤原朝臣良房從二位、從四位上橘朝臣岑繼從三位、從四位下小野朝臣篁從四位上、從四位上高枝王正四位下、无位貞內王從四位下、從四位下豐江王從四位上、正五位下有雄王從四位下、從五位下並山王從五位上、无位安原王、正六位上利見王、並從五位下、无位源朝臣勝、源朝臣多、並從四位上、從五位上藤原朝臣行道正五位下、從五位下藤原朝臣常永、伴宿禰諸野、橘朝臣眞直、高階眞人岑緒、並從五位上、外從五位下秦忌寸

○榎井朝臣嶋公、本姓春世宿禰承和十一年二月(一八七頁)今姓を賜ろ
○在原朝臣業平、平城天皇皇子阿保親王の第四子
○藤原朝臣直道、直に原本眞に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
○當麻眞人、麻字は宮本及類史に據て補ふ
○綱主、綱は類史繩に作る
○高守從五位下、下は原本上に作る閣本前本及類史九十九に據て改む
○正六位上壹志公、正六位上の四字は閣本前本及類史に據て補ふ
○聲姬、嵯峨天皇皇女
○武藏子、紹運錄に嵯峨天皇宮人、源貞姬幷端姬の母とあり
○從三位橘朝臣岑繼、三は原本二に作る諸本に據て改む
○直道爲相摸介、堀本介上に權字を補ふ

福代、榎井朝臣嶋公、无位在原朝臣業平、正六位上良岑朝臣淸風、藤原朝臣吉備雄、藤原朝臣長基、藤原朝臣虎主、田口朝臣岑永、紀朝臣全法、笠朝臣岑雄、藤原朝臣直道、橘朝臣數岑、橘朝臣岑緒、丹墀眞人弟梶、賀茂朝臣弟岑、文室朝臣甖田麿、大春日朝臣眞野麿、縣犬養宿禰氏河、當麻眞人鴨繼、御春朝臣眞濱、並從五位下、正六位上蕃良朝臣豐持、高岳宿禰宗雄、上毛野朝臣綱主、百濟宿禰康保、大秦公是雄、並外從五位下、宴竟、賜祿有差、○癸亥[八]、於大極殿、修最勝會、是日、授正六位上內藏朝臣高守從五位下、正六位上壹志公吉野外從五位下、无位源朝臣聲姬從四位下、无位大中臣朝臣東子、布勢朝臣武藏子、並從四位上、无位坂上大宿禰定子、田口朝臣美濃子、並從五位下、○戊辰[十三]、四品宗康親王爲兼中務卿、大宰帥如故、從三位橘朝臣岑繼爲權中納言、從五位下橘朝臣海雄爲右少辨、外從五位下壬生忌寸永嗣爲河內介、從五位上藤原朝臣仲統爲兼伊勢守、左近衞少將如故、從五位下藤原朝臣冬緒爲介、外從五位下菅野朝臣繼門爲參河守、從五位下藤原朝臣直道爲相摸

○直臣爲備後守、後は原本前に作る閣本尾本宮本に據て改む
○菅原朝臣是善、原本原を野に作る尾本前本宮本に據て改む
○十餘人、餘は原本四に作る閣本前本及類史百七十七に據て改む
○左右大臣、源常・藤原良房
○源朝臣冷、仁明天皇第十皇子
○從二位百濟王慶命薨、二は原本三に作る上文及一代要記に據て改む同記に慶命鎭守將軍敎俊女さあり
○美志眞王、原本美直王に作る承和七年正月甲申八年閏月丁巳嘉祥三年正月丙戌紀等に據て改む

介、從五位下橘朝臣本繼爲武藏守、從五位下紀朝臣全法爲常陸介、從五位上藤原朝臣高房爲越前守、從五位下出雲朝臣岑嗣爲越後守、從五位下賀茂朝臣弟岑爲介、從五位下紀朝臣道茂爲兼但馬守、左衞門佐如故、從五位下坂上大宿禰河內麻呂爲因幡守、從五位下菅野朝臣高年爲介、從四位下有雄王爲出雲守、從五位下藤原朝臣松影爲石見守、從四位下藤原朝臣諸成爲備前守、從五位下大枝朝臣直臣爲備後守、外從五位下三統宿禰眞淨爲介、從五位下丹墀眞人弟梶爲周防守、從五位下紀朝臣眞丘爲長門守、從五位下菅原朝臣是善爲兼讃岐權介、文章博士東宮學士如故、從五位下藤原朝臣眞岑爲土左守、從五位下藤原朝臣正世爲肥後守、外從五位下山宿禰池作爲介、○〔十四〕己巳、最勝會竟、引諸宗名僧十餘人於內裏、令論義、訖施御被、○〔十七〕壬申、左右大臣奉勅、行射禮於豐樂院、百官共觀之、○〔二十〕乙亥、天皇御仁壽殿、內宴如常、是日叙无位源朝臣冷從四位上、○〔廿二〕丁丑、尙侍從二位百濟王慶命薨、有勅、贈從一位、遣從四位上豐江王、從五位下美志眞王、從五位下藤原朝臣

○法雲寺、多度神社の東愛宕山にあり資財帳に天平寶字七年僧滿願延承和六年命爲天台別院七年停之とあり
○（二月）二月丙戌朔、二は原本三に作る類史百九十四及紀略に據て改む
○正七位上縣犬養、上は下次下に作る
○正六位上山口、下文從六位上に作る
○伊波比神、神名式武藏國横見郡伊波比神社、比企郡西吉見村黒岩、波は原本陂に作る諸本に據て改む
○（注）于時年廿一、類史六十六に本文とす
○過差、過失に同じ
○弘仁二年、二は類史三に作る
○補駿河介、補は叢輯の誤
○五年正月加從五位下、五年正月の四字は類史九十九に據て補ふ
○稱病、稱は原本移に作る類史六十六に據て改む
○七月任大和守、承和十年十一月庚子紀に尙は山城國守とあり此と合はず
○便隱居、便は原本更に作る類史に據て改む

緒數、從五位下飯高朝臣永雄、監護喪事、○辛巳（廿六）、傳燈大法師位壽寵言、以伊勢國多度大神宮法雲寺、爲眞言別院、即爲護國家、兼奉餝大神者、依請許之、○二月丙戌朔、以少內記正七位上縣犬養大宿禰貞守、直講正六位上山口忌寸西成等、爲存問渤海客使、發遣於能登國、○庚寅（五）、奉授武藏國伊波比神從五位下、○辛卯（六）、散位從四位上藤原朝臣長岡卒、大納言正二位眞楯朝臣之孫、贈左大臣從一位內麻呂朝臣之第六子也、大同二年任陸奥大掾、（于時年廿一、）九月遷左兵衛少尉、最長武藝、五箇年間、供歩騎兩射之節、无有過差、弘仁二年除出羽介、不之國留京、尋補駿河介、十年正月叙從五位下、拜播磨介、轉長官、天長元年任山城守、五年正月加從五位上、累遷治部宮內大輔、木工頭、八年正月除但馬權守、兼右衛門佐、承和之初遷右馬頭、授正五位下、拜越前守、尋叙從四位下、所在以清幹稱、十年春亦任山城守、稱病不出焉、秋七月任大和守、固辭不免、白頭莅職、十三年正月叙從四位上、秩滿便隱居宇智郡山家而終矣、時年六十四、○壬辰（七）、勅、從三位松尾大神社禰宜祝等、預把笏之例、○戊（十三）

○宇智郡山家、大和志宇智郡古蹟の條藤原長岡宅址在小嶋村と見ゆ
○禰宜祝等、類史十九に等下に並字あり諸本及本朝月令所引にはなし
○所噬、原本噬を啞に作る閣本前本に據て改む
○大宅內親王、平城天皇妃となり四品に叙し弘仁三年罷む後三品に進む天長五年五月薙髮入道此に無品とあるは入道の後之を辭せられしにや
○常子、紀略に平城帝崩常子出家爲尼弘仁八年薨年卅とあり
○阿野郡、阿野は倭名抄に綾と訓めり今綾歌郡となる阿原本河に作る諸本に據て改む
○內膳掌膳、掌は原本常に作る諸本に據て改む
○外從五位下綾公姑繼、原本五の字闕く閣本尾本宮本に據て補ふ姑繼は嘉祥三年七月辛丑仁壽元年十一月乙未紀に據るに女子なり
○護防之恃、原本防を訪に恃を特に作る閣本前本及類史百七十三に據て改む
○呈靈感、呈は類史有に

戌、狐入內裏、犬逐出、自月華門逃、昇南殿上、遂爲犬所噬、○己亥、無品大宅內親王薨、天皇不視事三日、親王者、桓武天皇第八皇女也、母橘氏、正五位下嶋田麿之女、從三位常子是也、○戊申、讃岐國阿野郡人內膳掌膳外從五位下綾公姑繼、主計少屬從八位上綾公武主等、改本居貫附左京六條三坊、○庚戌、大宰府言、對馬嶋司解偁、此嶋居海中、地近新羅、若有機急者、何以備不虞、望請、停史生一員、置弩師一員、依請許之、陰陽寮言、今年疫癘可滋、又四五月應有洪水者、勑、頃來染疫之人、往往夭亡、夫護防之恃、實賴冥威、存濟之方、亦期梵力、宜令五畿內七道諸國、奉幣名神、兼復於國分二寺及定額寺、一七箇日、晝轉經王、夜禮觀音、如法修行、必呈靈感、此日、奉授丹後國籠神從五位下、○壬子、正四位下源朝臣明爲參議、刑部卿阿波守如故、參議從四位下伴宿禰善男爲兼右衞門督、右大弁如故、正五位下藤原朝臣氏宗爲右中弁、從五位下佐伯宿禰屋代爲大監物、從五位下橘朝臣數岑爲內匠頭、外從五位下伴吉田連宗爲兼明法博士、大判事如故、從五位下藤原朝臣松影爲治部少

輔、從五位下藤原朝臣關雄爲刑部少輔、從五位下藤原朝臣本雄爲大判事、外從五位下蕃良朝臣豐持爲大炊頭、從五位上丹墀眞人石雄爲彈正少弼、外從五位下豐階公安人爲東宮學士、從五位下藤原朝臣良仁爲東宮亮、外從五位下山代宿禰氏益爲勘解由次官、從五位下長岑宿禰秀名爲山城介、從五位下藤原朝臣正世爲河內權守、外從五位下高村宿禰武主爲伊豆守、從五位下紀朝臣興我業爲武藏介、從五位下藤原朝臣世數爲越後介、從五位下清瀧朝臣藤根爲出雲守、從五位上文室朝臣海田麿爲石見守、從五位下安倍朝臣長谷爲伊豫權介、從四位下有雄王爲肥後守、外從五位下高丘宿禰貞雄爲介、○癸丑、奉授讃岐國田村神從五位下、○三月乙卯朔己未、行幸水生瀨野、山城攝津河內等國司獻御贄、賜扈從臣幷國司已上祿有差、日暮車駕還宮、○壬戌、大宰府言、豐前國解偁、長官若次官一人、任中一二度、被聽取海路入京、以辨濟雜務者、勅依請、但令任用之官堪事者入京、自餘管內諸國亦准之、○癸亥、攝津國節婦土師衣富女、特授位二階、終身免同戶田租、○甲

作る
○籠神、神名式丹後國與謝郡籠神社、名神大月次新嘗、同郡府中村六垣、國幣中社に列す
○壬子、原本王子に訛れるを諸本に據て訂す
○藤原朝臣良仁、良仁は原本常道に作る諸本及前後の文に據て改む
○春宮亮、原本春を東に作る尾本谷本等に據て改む
○從五位上文室朝臣、上は原本下に作る閣本尾本に據て改む
○高丘宿禰貞雄、貞は原本眞に作る閣本前本宮本に據て改む
○田村神、神名式讃岐國香川郡田村神社（名神大）一宮村一宮、國幣中社に列す
（三月）扈從臣、紀略臣下に等字あり
○堪事者、堪は原本甚に作る諸本に據て改む
○土師、土原本士に作る諸本及類史五十四に據て改む
○同戶、同は原本國に作る諸本及類史に據て改む

○刓失、刓は字彙に剸也齊也圓削也刓角とあり刓失は磨滅せるを云、原本刓を割に作る宮本に據て改む
○縣犬養大宿禰、大宿禰の三字は宮本卜本及二月丙戌紀に據て補ふ
○萬福、福は原本差に作る類史百九十四に據て改む水戸校本善に作り纂詁之に倣ふ
○卽此、卽は類史に據て補ふ
○修聘使還、原本使を便に作る閣本前本及類史に據て改む
○未紀、紀は十二年を云未だ一紀に至らすさなり
○憑禮、原本禮を札に作る類史に據て改む
○星律、原本星を皇に作る宮本及類史に據て改む
○永寧縣、文獻備考に黃海道永寧縣あり是を云か
○王文矩、矩は原本姫に作る類史及上下の文に據て改む
○中臺省、省字は宮本に據て補ふ
○太政官廳、廳は原本應に作る類史に據て改む
○和好、和は原本知に作る宮本及類史に據て改む

子、地震、伊賀國言、國印文歷年代、文字刓失、行用不明者、勅、宜鑄造充之、○戊辰、聖躬不豫、遣內竪等、誦經諸寺、各以綿一連爲布施、是日遣能登國存問渤海客使少內記縣犬養大宿禰貞守等、馳驛奏上客徒等將來啓牒案、彼國王啓曰、彝震啓、季秋漸冷、伏惟天皇起居萬福、卽此彝震蒙恩、修聘使還、筭年未紀、今更遣使、誠非守期、雖然自古隣好、憑禮相交、曠時一歲、猶恐情疎、況茲星律轉迴、風霜八變、東南向風、瞻慕有地、寧能恬寂、罕續音塵、謹備土物、隨使奉附、色目在於後紙、伏惟體鑒、溟漲阻遙、未由拜覲、下情無任馳係、謹差永寧縣丞王文矩、奉啓不宣、謹啓、復中臺省牒倂、渤海國中臺省、牒日本國太政官廳、差入覲貴國使永寧縣丞王文矩、幷行從一百人、牒奉處分、遼矣兩邦、阻茲漲海、契和好於永代、寄音書於使程、一葉飄空、泛積水之遐際、雙旌擁節、達隣情之至誠、往復雖遙、音耗稀傳、戀懷空積、所以勿待紀盈、申憑舊准、謹差永寧縣丞王文矩、令覲貴國者、准狀牒上日本國太政官者、謹錄牒上、謹牒、○癸酉、宴公卿及近習於內殿、賜衣被、叙无位粟田朝臣貞嶋從五位下、○乙亥、行

○寄音書、寄は原本寄に作る諸本に據て改む　○一葉飄空、一葉は船を云　○積水、荀子儒效篇に積水爲海とあり海を云　○雙旌擁節、唐書百官志に節度使並觀察使は辭日賜雙旌と見ゆ節は節旄にて使臣の執るものなり　○申憑舊准、申は原本中に作る閣本前本に據て改む　○譁牒、牒は閣本前本及類史に據て補ふ　○乙亥、原本乙丑に作る類史卅一及紀略に據て改む　○客徒、原本客從に作る閣本前本宮本に據て改む　○問答文等、原本此の下に壬申條あり類史百九十四及紀略に據て壬午に改め下に移す　○爲奉賀天皇寶算、矢野翁曰、或云壽賀雖本於天保九如之頌至香山九老之會始盛自初度毎十年賀其初度者蓋昉於明人我邦壽賀皆先西土者實數百年矣　○滿于其卅、其字は閣本尾本に據て補ふ　○聖像卅軀、聖像は觀音

幸雙岳、廻幸冷然院觀魚。是日、存問使等馳驛、奏詰問客徒等違例入覲之由問答文等。○庚辰、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿于其卅、奉造聖像卅軀、寫金剛壽命陀羅尼經卅卷、卽轉讀四萬八千卷、竟更作天人不拾芥子、天衣罷拂石、翻擎御藥、俱來祇候、及浦嶋子、暫昇雲漢、而得長生、吉野女眇通上天、而來且去等像、副之長歌奉獻、其長歌詞曰、日本乃、野馬臺能國遠、賀美侶伎能、宿那毗古那加、葦菅遠、殖生志津津、國固米、造介牟與利、瀛津波、起津每年爾、春波有禮度、今年之春波、每物爾、滋榮弖、天地乃、神毛悅比、海山毛、色聲變志、梅柳、常與理、殊爾、敷榮、咲万比開天、鶯毛、聲改弖、八千種爾、奇事波、茜刺志、天照國乃、日宮能、聖之御子曾、瓠葛、天能梯建、踐歩美、天降利、坐志々、大八洲、天日嗣能、高御座、萬世鎭布、五八能、春爾有氣利、我國之、聖乃皇波、尊毛、御坐加、日宮能、聖之御子能、天下爾、御坐天、御世御世爾、相承襲弖、每皇爾、現人神止、成給、御坐世波、四方之國、隣皇波、百嗣爾、繼云止毛、何弖加、等久有牟、所以爾、神毛順比、佛左倍、敬給布、益益爾、今我帝波、往古爾毛、不御坐

の像なり卌は原本卅に作る閣本前本宮本に據て改む下文卌卷の卌も同じ
○金剛壽命陀羅尼經、大日經に佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經唐金剛智共二知識一譯とあり
○天人不拾芥子、子は類史廿八に據て補ふ
○天衣罷拂石、原本衣を女に罷を羅に作る閣本前本及類史紀略に據て改む
○浦嶋子、雄略紀廿二年（紀上二八五頁）及浦嶋子傳に見ゆ
○吉野女、吉野栢媛の事萬葉集三及懷風藻に見ゆ
○日本乃云々、日本は倭の枕詞、野馬臺の文字は東鏡碑銘の下學集に鵠林玉露に見ゆと云後漢書東夷傳には邪馬臺あり
○賀美侶伎能云々、神祖の少彦名神がなり
○葦菅遠云々、少彦名命大已貴命と兄弟となりて葦菅を殖ゑ生しつゝ此國土を修理し給ひしを云津々は閣本前本及類史川川に作る
○瀛津波起川毎年爾、瀛津波は起つさいはむ枕詞川は原本空白とせるを閣本及類史に據て補ふ

志、將來毛、何申牟、釋迦之法、弘米給比弖、出家之人、法乃族遠、罪有度、赦賜都、咎有止、宥米賜都、无譬岐、御惠乃、異廣久、御坐世波、出家人、法族波、御世遠、恒爾惜牟度、年月遠、堰加倍留天、不過須弖、鎮牟止許曾、誓願比、禱申勢、然禮度毛、世之理度、歡之、春爾有介利、何志弖、帝之御世、萬代爾、重禰飾弖、奉令榮度、栢之枝乃、由求禮波、佛許曾、願成志多倍、聖而已、驗波伊萬世、所以爾、帝遠鎮布爾、驗万須、陀羅尼乃御法、卌卷乎、寫志繕倍、護成須、聖之御像、卌軀、奉造弖、卌之師乃、悟開介天、行布、人遠調倍弖、誠乎致志、四萬爾、八千卷添弖、誓願、奉讀利、餝祈、鎮申世利、行倍留、此之所爲乃態乎、何爾志天、陳倍聞江牟止、茜刺須、終日須加良爾、烏玉乃、狭夜通左右、時日經天、思忖爾、落湍乃、堰倍毛賀禰天、世中乃、伊須賀志態遠、添餝利、申志曾上留、就中爾、大海乃、白浪開弖、常世嶋、國成建天、到住美、聞見人波、萬世能、壽遠延倍津、故事爾、云語來留、澄江能、淵爾釣世志、皇之民、浦嶋子加、天女、釣良禮來弖、紫雲泛引弖、片時爾、將弖飛往天、是曾此乃、常世之國度、語良比弖、七日經志加良、無限久、命有志波、此嶋爾許曾、有介良志、三吉野爾、有志熊志禰、

天女、來通弖、其後波、蒙レ譴天、毗禮衣、著弖飛爾支度云、是亦、此之嶋根乃、人爾許曾、有岐度云那禮、五種乃、寶雲波、大悲者乃、千種乃御手乃、人乃世遠、萬代延留、一種乎、別爾莊天、萬代爾、皇乎鎭倍利、磯上之、綠松波、百種乃、葛爾別爾、藤花、開榮弖、萬世爾、皇乎鎭倍利、鷺波、枝爾遊天、飛舞弖、囀歌比、萬世爾、皇乎鎭倍利、澤鶴、命乎長美、濱爾出弖、歡舞天、滿潮乃、無二斷時一久、萬代爾、皇乎鎭倍利、薫修法之、力乎廣美、大悲者之、護乎厚美、萬代爾、大御世成波、如二八十里一、城爾芥子拾布、天人波、攀手弖、不レ拾成奴、如二八百里一、磐根爾、毗禮衣、裾垂飛波志、拂人、不レ拂成天、皇乃、護之法乃、藥乎、擎持、來候布、如レ是、鎭倍留事者、毎レ事、雖レ劣、毎レ物、非レ數禰度、旅人爾、宿春日奈留、山階乃、佛聖乃、奉、獻布奈里、大御世乎、萬代祈利、佛爾毛、神爾毛申、上流、事之詞波、此國乃、本詞爾、逐倚天、唐乃詞遠不レ假良須、書記須、博士不レ雇須、此國乃、云傳布良久、日本乃、倭之國波、言玉乃、富國度曾、古語爾、流來禮留、神語爾、傳來禮留、傳來、事任万爾、本世乃、事尋者、歌語爾、詠反志天、神事爾、用來利、皇事爾、用來利、本乃世爾、依遵弖、佛爾毛、神爾毛、申、擧陳天、禱里志誠波、

○滋榮弖、弖は原本惠に作る類史に據て改む
○色聲變志、海に起つ浪の音も山に生ふる草木の色も此春は殊に變りて悅の色を現すとなり狩谷氏は類史聲下闕二一字一恐當三塡以二乎字一變疑交假字といひ色聲を交す意とせり
○數榮、繁く榮えてなり柳葉の張廣れるを云
○咲万比開天、梅花などの咲くを云
○囀毛聲改弖、鶯の囀聲も例年に變りて芽出度しとなり囀は類史鶯に作る下同じ
○奇事波、此句下の五八能春爾有氣利に係る
○薦刺志、日の枕詞、刺志と云るは天照に續ける故なるべし
○天照國、高天原を云
○聖之御子曾、瓊々杵尊を申奉る
○瓠葛、天の枕詞
○天能梯建云々、梯建は天上と國土と通行する梯なり天孫降臨の時の狀を云
○天日嗣能、天の字は宮本日上に天歟と旁書せるに據て補ふ
○萬世鎭布、大御世の萬

丁寧度、聞許志食弖牟、嬰兒乃、咳語仁、折箸乃、本末不知、亂絲乃、亂天有禮度、九重能、御垣之下爾、常世鴈、率連天、狹牡鹿乃、膝折反志、候、聞曾言須、何爾以聞容牟、汗流志、兢恐留、何爾以聞容牟」者、夫倭歌之體、比興爲先、感動人情、最在玆矣、季世陵遲、斯道已墜、今至僧中、頗存古語、可謂禮失則求之於野、故採而載之、於是大法師等寓居右大臣(良房)家、遣右近衞少將橘朝臣貞直、宣勅慰之、卽施御被、賜雜色卅餘人調布各有差、○壬午(廿八)、以存問使少內記正七位下縣犬養大宿禰貞守、直講從六位下山口忌寸西成、爲兼領渤海客使、

歳を言壽ぎ奉るなり ○五八能、四十のなり ○春爾有氣利、以上を一段とす ○四方之國、四方にある外國を云 ○隣皇波、唐國の王を云 ○所以爾、ソコユヱニと訓べし、所は原本取に作る閣本前本宮本及類史に據て改む ○神毛順比、神も納得し給ふとなり ○徭谷爾、下の何申牟に係る ○往古爾毛、古字は閣本尾本宮本に據て補ふ ○弘米給比弖、比は類史に據て補ふ ○无譬岐、原本岐を波に作る閣本前本宮本及類史に據て改む ○御惠乃、惠は原本專に作る閣本前本宮本に據て改む ○御世遠、原本遠を世に作る類史に據て改む ○恒爾惜牟度、かゝる芽出度き大御代なれば年月の過ぎ行くを常に惜むとてなり ○堰加倍留天、塞き留めてなり ○禱申勢、勢は上の許曾の結びなり ○重禰飾弖、天皇の御稜威を重ね〳〵天下に飾りかゞやかすを云 ○奉令榮度、タテマツルは物を獻上する意にて此に適へる訓には非ず然れども句調調はざるを以て後世の訓みざまに從ひかく訓り ○柘之枝乃云々、昔吉野の味稻といふ者吉野川に梁を打ち鮎を漁るを業とせしが梁にかゝりし柘の枝を拾取り家に持歸りしに麗はしき女と化せり聽て夫婦の契を結び老ず死ずして共に住しが遂に常世國に飛去れりといふ古傳說に採りて云るにて柘枝の傳說の如き目出度からむ由緣を求むればとの意 ○佛許曾、許は原本計に作る宮本及類史に據て改む ○所以爾、久老本に所上に其字ありと云 ○卌卷、原本卅卷に作る諸本及類史に據て改む下同じ ○誠乎致志、纂詁は此上に丹心乃三字を補ふ ○四萬爾八千卷添弖、天皇寶算の數に取りたるなり ○此之所爲乃態乎、乃字は衍にて所爲態の三字をシワザと訓べしと荒木田氏云り聖像を作り佛經を讀て寶算を鎭び申せる種々の所行を云 ○烏玉乃、夜の枕詞 ○狹夜通左右、終夜の意 ○思忖爾、忖は原本付に作る前本及類史に據て改む ○塞倍毛賀禰天、倍毛は閣本前本及類史に據て補ふ、天皇の御壽を祝ひ奉る赤心を聞え上げむと思ふ心をせき留めかねての意 ○伊須賀志隱遠、解し難し一に伊須はいしくも言へるもの哉等のイシ、賀志は急がし等のカシにていみじき大事と云義なるべしと云、そは下に擧る種々の事をいしき事と讃稱るなり、態は原本熊に作る閣本前本宮本及類史に據て改む ○申志曾上留、種々の賀詞を申上るなり、曾は原本氏に作る閣本前本宮本及類史に據て改む ○就中、此下恐くは一句脫ちたるか

〇常世鳴、常世は常住不變の意　〇國成建天、國土をつくり成してなり　〇天女釣良禮來弖、天女は丹後風土記に女娘答曰天上仙家之人也とある是なり浦嶋が魚を釣らむとせしに却て靈龜に誘はれて常世に至りしを釣られたりと巧に云るなり　〇雲泛引弖、雲をたなびかしめてなり泛は原本之に作る類史に據て改む　〇將弖、率ゐてなり　〇七日經志加良、唯七日程經しものをとなり　〇有志熊志禰、熊志禰は味稲なり、禰は前本及類史に據て補ふ　〇毗禮衣、毗禮は領巾なり　〇有岐度云那禮、岐は原本波に作る閣本前本に據て改む　〇五種乃寶雲、五色の雲　〇大悲者、觀音を云

〇一種乎別爾莊天、觀音の像は左右合せて四十二手ありて手毎に名あり第廿八手を五色雲手と云此手人の齡を述ぶる仙道の手なれば殊更にとなかざりて奉ると云なり　〇礒上之云々、以下は海礒の形に松藤を飾り鶴を添へたる、また洲濱の形に舞鶴を翔せる等の造物を獻りしを歌へるならむ上文には省きて記されしなるべし　〇百種乃葛爾云々、多くの葛中に殊に秀れて藤花の榮えたる由なり容は原本幕に作る閣本前本及類史に據て改む　〇皇乎鎭倍利、乎は類史に據て補ふ　〇滿潮乃、無斷時の枕詞　〇萬代爾大御世成波、天皇の聖代を萬世に護り成し給へばとなり　〇如八十里城爾云々、祇庭事苑卷五芥城注に智度論云如經有一比丘向佛言幾許名劫佛言我雖能說汝不能知當以譬喻可解有方百由旬城溢滿芥子有長壽人過百歲持一芥子去芥子都盡劫猶未盡云々とあるに據れり　〇舉手弖、手を拱くこと　〇不拾成奴、芥子は拾ひ盡すとも天皇の大御世の數には盡じとて拾はすなりぬる由なり上文に天人不拾芥子とある是なり、奴は原本好に作る閣本前本宮本及類史に據て改む　〇磐根爾、前本宮本及類史爾を乎に作る　〇毗禮衣、毗は原本吼に作る諸本に據て改む　〇拂人不拂成天、菩薩瓔珞本業經に八百里石方廣亦然以淨居天衣重三銖即淨居天千寶光明鏡爲日月歲數三年一拂此石乃盡故名一大阿僧祇劫とあり此磐根は拂盡すとも天皇の大御世は盡じとて拂ふことを罷めたりとなり上文に天衣罷拂石とある是なり　〇護之法乃藥乎、天皇の大御世を護る不老不死の仙藥なり　〇旅人爾宿春日、宿までは春日の序なり　〇山階乃、興福寺を云興福寺一名山階寺と云　〇佛聖、僧徒の私の獻上ならで佛聖の獻るなりとなり　〇佛爾毛神爾毛、原本佛下の爾を介に作り神爾毛の三字なし諸本及類史に據て改め補ふ　〇本詞爾云々、梵漢語を交へざる皇國の純粹の語に從てなり逐は原本遂に作る諸本及類史に據て改む　〇云傳布良久、久は原本牟に作る類史に據て改む　〇言玉乃、言靈乃なり　〇富國、サキハフクニと訓むべし富は原本當に作る卜本山崎校本に據て改む　〇本世乃、上古の事跡を尋ぬればなり　〇歌語爾、歌の詞になり　〇詠反志天、梵漢等の語を歌の詞に翻譯してなり　〇神事爾用來利、神に申す祝詞の義に用ひ來れりとなり纂詁神事を神語と改む　〇皇事爾用來利、皇以下六字は類史に據て補ふ皇事は神事に對して云　〇申擧陳弖、申は久老の說によりて補ふ

〇咳語、咳は字類抄にアギトフと訓めり之に據るべし宮本には㗛に作り類史には啘に作り水戸校本には孩に作る　〇折箸、本末不知の枕詞、箸は原本著に作る閣本宮本及類史に據て改む　〇亂絲乃、亂るの枕詞　〇常世鴈、鴈は遠き國より來るものなれば常世雁といへるを之に不老不死の國の鴈といふ賀意を含めたるなり又鴈は已が友を率ゐ來るものなれば率の枕詞とせり　〇率連天、僧徒の引率連れて內裏に參るを云　〇候、サモラヒと訓むべし　〇聞曾言須、原本聞を開に作り曾下に止字あり聞は類史に據て改め止は閣本前本及類史に據て削る　〇何爾以聞容牟、いかに天皇の聞食し給はむとぞとなり容は原本幕に作る閣本前本及類史に據て改む下同じ　〇比興爲先、毛詩關雎序に詩有六義三曰比四曰興、疏に比者比託於物不敢正言似有所畏懼また興者興起志意讚揚之辭とあり　〇禮失則求之於野、文選劉歆書に見ゆ　〇壬午、原本壬申に作り庚辰の上にあり類史百九十四及紀略に據るに壬午は廿八日、干支を推して此に移す　〇縣犬養大宿禰、二月丙戌紀に正七位上とあり山口西成も同紀には正六位上とあり

（四月）甲申朔、申は原本子に作る紀略に據て改む

〇夏四月甲申朔乙酉[二]、奉授阿波國天日鷲神從五位下、〇戊子[五]、勅、去承

○天日鷲神、日字は神名式に據て補ふ同式阿波國麻殖郡忌部神社（名神大月次新嘗或云天日鷲神）今國幣中社にして徳島市富田浦町二軒屋町に遷祀る
○宜改前直、宜は類史八十に據て補ふ
○稻村神、神名式常陸國久慈郡稻村神社、佐竹村天神林に祀る
○沽價、沽は字書に賣也とあり
○艱苦女利止、女は原本世に作る閣本前本宮本及類史百九十四に據て改む
○侍也、原本也を巴に作る閣本前本及類史に據て改む
○家令文學、職員令に親王、文學一人掌執經講授、家令一人掌總知家事とあり
○諸牧駒、諸國にある官牧の名は左馬寮式に見ゆ

和七年、定二諸國穀直一訖、而今如聞、穀價踊貴、錢幣差賤、而猶守二舊程一、不レ隨時宜、宜下改二前直一、一依中當時上、仍須下隨二陸海之貢輸一、取二定數於京師一、准中其沽價上、以爲中穀直上、自今以後、立爲二恒例一、○庚寅、常陸國久慈郡稻村神、預二之官社一、縁二水旱之時、祈必致レ感、○癸巳、天隕レ霜焉、風景之寒、宛似二二月一、○丙申、地震、○癸卯、周防守從五位下丹墀眞人弟梶爲二兼鑄錢使長官一、○辛亥、領客使等、引二渤海國使王文矩等一入レ京、遣二勅使左近衞少將從五位上良岑朝臣宗貞一慰勞、安二置鴻臚館一、宣レ命曰、天皇我詔旨良万止宣久、有司奏久、彼國乃王、一紀乎爲レ期天、朝拜乃使進レ度須倍志、然乎此度乃使等、違レ期天朝來禮利、如常爾波不レ遇之天、自レ境還遣天牟止奏利、然禮止毛、遠渉二荒波一天、悪處爾漂著天、人毛物毛損傷禮、艱苦女利止聞食天、矜賜比免給布止宣、又宣久、熱時爾遠來弖、平安爾侍也、相見无日爾至万弖波、此爾侍天休息止宣、大和國添上郡人從七位下紀朝臣核繼、正六位下紀朝臣核主、大宰帥親王家令文學從七位下紀朝臣核吉、越中博士從七位下紀朝臣生永、從八位下紀朝臣實等、改二本居一貫二附左京六條一坊一、○壬子、天皇御二武德殿一、閲二諸牧駒一、

乘覽騎射、〇癸丑、賜渤海客徒時服、〇五月甲寅朔、日有蝕之、〇乙卯、渤海國入覲使大使王文矩等、詣八省院、獻國王啓函幷信物等、〇丙辰、天皇御豐樂殿、宴客徒等、宣詔曰、天皇我詔旨良万止宣不勅命乎、使人等聞給倍與止宣、久、國乃王差王文矩等進度之、天皇我朝廷乎拜奉留事乎、矜賜比慈賜比弖奈毛、冠位上賜比、治賜波久止宣布天皇我勅命乎、聞食倍與止宣、大使已下首領相共拜舞訖、授大使王文矩從二位、文矩去弘仁十三年叙正三位、故今增位、叙從二位、副使烏孝愼從四位上、大判官馬福山、少判官高應順、並正五位下、大錄事高文信、中錄事多安壽、少錄事李英貞、並從五位下、自餘品官幷首領等、授位有階、〇戊午、天皇御武德殿、覽馬射、六軍擁節、百寮侍座、有勅、令文矩等陪宴、宣詔曰、天皇我詔旨良万止宣布勅命乎、使人等聞給止宣、久、五月五日爾、藥玉乎佩天飮酒人波、命長久福在止奈毛聞食須、故是以藥玉賜比、御酒賜波久止宣、日暮乘輿還宮、〇癸亥、遣公卿於朝堂、饗客徒、宣詔曰、天皇我詔旨良万止宣布勅命乎、使人等聞給與止宣波久、皇朝乎拜仕奉天、國爾還退倍支時近在爾依天奈毛、國王爾祿賜比、文矩等爾毛、御手都物賜比、饗賜波

（五月）朝廷、原本朝庭に作る宮本水戸校本に據て改む〇聞食倍與止、與は原本支に作る類史百九十四に據て改む〇（注）文矩云々、此二十字原本本文とす閣本前本等及類史に據て分注とす〇烏孝愼、烏は原本鳥に作る閣本前本宮本及類史に據て改む〇多安壽、多は前本宮本及類史に據て補ふ〇李英貞、原本學並眞に作る閣本前本及類史百九十四に據て改む〇六軍、六衞府を云〇令文矩、令は原本命に作る閣本前本及類史に據て改む〇宣久、類史宣布に作る〇藥玉、儀式五月五日節儀に續命縷此間謂藥玉、訓久須陀麻、風俗通に五月五日以五綵絲繫臂避兵及鬼令人不病瘟疫、一名長命縷一名五色縷一名續索と見ゆ〇使人等、人字は上詔に據て補ふ〇拜仕奉、仕字は尾本前本宮本及類史に據て補ふ〇藤原朝臣春岡、朝臣の

宣、○乙丑、遣參議從四位上小野朝臣篁、右馬頭從四位下藤原朝臣春津、少納言從五位下藤原朝臣春岡、右少弁從五位上橘朝臣海雄、左少史正六位上大窪益門、少內記從七位下安野宿禰豐道等於鴻臚館、賜勅書并太政官牒、此日客徒歸却、勅書曰、天皇敬問渤海國王、入貢使文矩等至、省啓具之、惟王敦志欽仁、宅心懷德、飛颿不斷、望日域而忘遐、貢篚相尋、想遼陽而如近、眷其勤苦、良嘉乃誠、但修聘之期、一紀爲限、先皇明制、國憲已成、故有司固請責文矩等、以背彝規、自邊還却、朕閔其匪躬之故、遠踏重溟、船破物亡、人命纔活、使得入奉朝覲、拜首軒墀、祿賜榮班、准憑恒典、斯乃一切之恩、難可再恃、王宜守舊章而不失、照明德以有恒、唯存信順之心、誰嫌情禮之薄、夏熱、比淸適也、文矩今還、略申往意、并寄王信物、如別、太政官牒曰、日本國太政官、牒渤海國中臺省、入覲使永寧縣丞王文矩等壹佰人牒、得中臺省牒偁、道矣兩邦、阻茲漲海、契和好於永代、寄音書於使程、頃者兩邦通使、一紀爲期、音耗稀傳、戀懷空積、所以勿待紀盈、申憑舊准、謹差永寧縣丞王文矩、令觀貴國者、小之事大、

二字は閣本前本及類史百九十四に據て補ふ
○大窪益門、養老五年正月甲戌紀に唱歌師大窪史五百足見ゆ同族なるべし
○懷德、水戸校本に懷當作惠云字書に悳同惠順也とあり
○飛颿、颿は帆なり
○貢篚、尙書禹貢に出づ注に錦綺之屬盛之筐篚而貢焉とあり
○勤苦、苦は原本若に作る諸本に據て改む
○匪躬之故、易蹇卦の六二に王臣蹇蹇匪躬之故とあり
○纔活、纔は原本終に作る類史百九十四に據て改む
○使得、使は原本便に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
○軒墀、殿階の上を云墀は階上の地なり
○一切之恩、非常の恩なり漢書平帝紀注に一切者權時之事非經常也とあり
○比淸適也、比は原本此に作る閣本前本及類史に據て改む
○申憑舊准、申は原本中に作る閣本及類史に據て

理難自由、盈縮期程、那得在彼、事須在所却還、戒其愆違、官具狀奏聞、奉勅、文矩等孤舟已破、百口纔存、眷其艱辛、義深合宥、宜特賜恩隱、聽奉入覲、爵賜匹段、准據舊章、但權時之制、不可通行、詳告所司、莫令重違者、准處分、覲禮云畢、仍造舟船、及時發遣、附勅璽書幷國信、今以狀牒、牒至准狀、故牒、○戊辰、於淸涼殿、令講四卷金光明經、晝則演說、夜則禮懺、○辛未、講經事畢、○戊寅、幸神泉苑、公卿集美福門、終日宴樂、召大學博士文章生等、令賦詩、其題曰、陪美福門、便得陶暑、是日獻詩者十四人、○壬午、丹波國言、停讀師者、依請許之、○六月癸未朔、遣使巡撿京城飢民、開倉廩以賑恤、緣霖雨也、奉授豐後國宇奈岐比咩神、火男火咩神、並從五位下、○丙午、聖躬不豫、遣內竪七人、誦經諸寺、○庚戌、越前守從四位下良岑朝臣木連卒、故大納言贈從二位安世朝臣第一男也、容儀閑雅、聲價有藹、初除大學助、以父憂去職、天長八年正月叙從五位下、除下野介、秩滿入京、任式部少輔、承和三年叙從五位上、拜陸奧守、五年三月叙正五位下、八年正月除左中弁、十一年正月叙從四位下、任越前守、木連自恃

改む
○小之事大、原本事之小大に作る閣本前本宮本及類史に據て改む
○恩隱、恩蔭に同じ除陵文に如雲如雨天下蒙其恩蔭とあり
○金光明經、聖教目錄に金光明經四卷北涼曇無讖譯とあり
○美福門、壬生御門と號し神泉苑北西に在て距離相近し、此に集りて宴樂す
○令賦詩、原本令を合に作る宮本に據て改む
（六月）宇奈岐比咩神、神名式豐後國速見郡宇奈岐日女神社、北由布村川上
○火男火咩神、同式同郡火男火賣神社二座
○丙午、原本丙子に作る水戶校本に按是月癸未朔無丙子蓋丙午之訛とあるに據て改む
○安世、桓武天皇第十六皇子にして延曆中姓を賜はる
○叙從五位下、原本叙下に位字あり水戶校本及類史六十六に據て削る
○自恃、恃は原本特に作る閣本宮本及類史に據て改む

良家子、而齡且少壯、欲立功名、好施異治、爲諸神戶、所行之政、不據舊例、殊是察察、同寮禁之、距而不肯、遂因此失、立受其咎、悔而改之、無有効驗、卒時年四十六、○秋七月壬子朔、從五位上清瀧朝臣河根爲大和守、外從五位下高丘宿禰宗雄爲介、從四位下岑成王爲美濃守、○乙卯、地震、○庚申、從五位下縣犬養宿禰氏河爲少納言、從四位下岑成王爲彈正大弼、從五位下橘朝臣時枝爲左衞門權佐、從五位下藤原朝臣春岡爲右衞門權佐、從五位上田口朝臣房富爲美濃守、○庚午、地震、○癸酉、美濃國池田郡養基神預官社、緣有靈驗也、○戊寅、近江國栗太郡人本工大工正七位下小槻山公家嶋、賜姓興統公、幷改本居、貫附左京五條三坊、○八月壬午朔、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜祿有差、○甲申、右京人右衞門少志從七位上臺忌寸善氏賜姓清江宿禰、○乙酉、大宰府馳驛言上、大唐商人五十三人、多賫貨物、駕船一隻來著、○丙戌、左京人六世善淵王、善水王、常名王、貞固王、有道王、永城王、有敏王、岑雄王、岑行王、弘岑王、忠臣王、正臣王、常影王、茂影王、有統王、有助王、有基王等賜姓清原眞人、○

○察察、煩碎なり老子に其政察察其民缺缺とあり
○不肯、肯は原本旨に作る閣本前本に據て改む
○立受、立は原本之に作る閣本前本及類史に據て改む
（七月）從五位上清瀧朝臣、上は原本下に作る元年八月壬子紀に據て改む
○養基神、神名式美濃國池田郡養基神社、今揖斐郡養基村田中
○栗太郡、栗は原本粟に作る閣本宮本に據て改む宮本は栗本に作る抄に久留毛止と訓り
○大工、纂詁大允に改む
○興統公、他書に見えず
（八月）臺忌寸、錄右京諸蕃臺忌寸漢孝獻帝男白龍王之後也とあり
○清江宿禰、元慶三年正月七日紀に清江宿禰貞直見ゆ
○一隻、隻は原本雙に作る閣本前本卜本に據て改む
○有助王、助は原本明に作る閣本尾本前本に據て改む
○清原眞人、紹運錄を按るに舍人親王の後なり
○參河國守、閣本國字な

壬辰、參河國守從五位下安倍朝臣氏主獻白馬四十疋、牛四十頭、支子四十斛、爲是奉賀天皇寶算滿于四十也、○辛丑、授正六位上橘朝臣仲宗從五位下、從五位下藤原朝臣貞道爲美作介、右近衞少將從五位上橘朝臣眞直爲兼安藝守、從五位下八多朝臣安繼爲介、從五位下橘朝臣高宗爲大宰少貳、從五位下登美眞人直名爲豐後權守、○丁未、美濃國方縣郡前權大領外正八位下美縣貞繼賜姓善根連、○九月辛亥朔、從五位下中臣朝臣逸志爲兼神祇權少副、內藏頭如故、○丁巳、遣左少弁從五位上文室朝臣助雄等、奉神寶於伊勢大神宮、是廿年一度所奉例也、○己未、是重陽節也、天皇御紫宸殿、賜宴如常、命文人同賦託附之題、宴竟、賜祿有差、○辛酉、天皇御八省院、奉幣帛於伊勢大神宮、例也、○丙寅、奉授山城國葛野郡大辟神從五位下、緣屢有靈驗、所祈必應也、○丙子、參議從四位下藤原朝臣良相爲兼右大弁、左近衞中將相摸守如故、參議從四位上滋野朝臣貞主爲兼宮內卿、尾張守如故、參議從四位下伴宿禰善男爲兼式部大輔、右衞門督如故、○冬十月辛巳朔乙酉、近江國

し

○支子、抄調度部染色具に梔子唐韻云梔（音支今案、醫家書等用支子二字）久知奈之）梔子木實可染黃色者也とあり

○四十斛、斛は原本解に作る宮本及類史廿八に據て改む

○美縣、美は方の訛か纂詁には疑美努縣主之訛歟と云り

○善根連、他に見えず

（九月）中臣朝臣逸志、大神宮例文に嘉祥二年九月逸志祭主に任すと見ゆ

○左少辨、少は原本中に作る類史三に據て改む

○廿年一度云々、大神宮例文に嘉祥二年內宮造營自天長六年及二十一年とと見え此の制延暦儀式帳に詳なり

○大辟神、神名式山城國葛野郡大酒神社（元名大辟神、太秦村太秦

○藤原朝臣良相、朝臣の二字は宮本に據て補ふ

○從四位上滋野朝臣、上は原本下に作る閣本宮本前本等に據て改む

（十月）愛智郡、倭名抄に愛智は衣知と訓り

○彌範、彌は原本弘に作

る閣本宮本前本に據て改む
○忌浪神、原本忌を治に作る神名式に加賀國江沼郡忌浪神社あり治は忌の訛なるべし山崎校本に據て改む忌浪神社は作見村弓波にあり
○卌卷、原本卅卷に作る閣本宮本に據て改む
○嵯峨太皇太后、今上の御母橘嘉智子なり
○平文廚子、平文は蒔繪に對して云、白木に胡粉を以て畫くものなり地の平面なるより然云るにや江次第抄には謂以白鑞彩唐花也とあり
○御挿頭、抄術藝部に挿頭花楊氏漢語抄云頭花賀佐之俗用挿頭花とさあり
○和琴、既に出づ
○六基、基は原本前に作る類史廿八及前後の文に據て改む
○中取、抄器皿部木器類に唐韻云槃（音盤今案俗所謂中取是也）承食器也さあり儀式帳に見え延喜式には大案さす
○（注）折櫃、木を折曲げて作れる故に云り缶、抄器皿部に爾雅云

愛智郡人音博士從六位下物部彌範、散位從六位上物部弘範等、改本居貫附左京六條二坊、○丁亥、從四位下菅野朝臣人數爲尚侍、○庚寅、奉授加賀國忌浪神從五位下、是日、藥師寺僧等、繕寫藥師經卌卷、盛之高机献之、爲奉賀天皇寶算滿卌也、施僧等御被及襖子、○辛卯、近江國淺井郡荒廢田九町、賜從五位上橘朝臣清子、○癸卯、嵯峨太皇太后、遣使奉賀天皇卌寶算也、其獻物、黑漆平文廚子十基、（盛綵帛）机二前、就中一前、御挿頭、（造沉香山、以純金爲鶴、令銜挿頭花）一前、居和琴二面、黑漆廚子六基、（盛御菜）赤漆韓櫃八十合、（納衾并掛衣）櫃飯八十合、中取五十二前、（各居折櫃食廿合）缶四百口、（酒魚菜等）黑漆棚廚子卌基、（廿基盛菓子唐餅、廿基盛鮮物乾物）凡厥山海珍味數百捧、既而天皇御紫宸殿、音樂遞奏、歡樂終日、賜諸大夫祿、是日、太皇太后復以錢五十萬、賑恤京中飢民、又以新錢四十貫文、誦經七大寺、及梵釋、崇福、延曆寺等、爲復祈冥助也、○丙午、有勅、賜非人逸勢男龍、叙實山等本姓、聽入京、○十一月辛亥朔壬子、武藏國播羅郡奈良神、播磨國佐用郡佐用津姫神、並預官社、左京人讃岐守從四位下長田王、彈正大弼從四位下岑成王、賜姓清原

笑謂之缶（音不訓保度岐）説文に缶瓦器所以盛酒漿とあり
○四十貫文、原本十四貫文に作る注本に據て改む
○冥朔、朔は輔也
（十一月）奈良神、神名式武藏國播羅郡奈良神社、大里郡奈良村中奈良
○佐用津姬神、神名式播磨國佐用郡佐用都比賣神社、佐用村本位田
○從四位下菅野朝臣、下原本上に作る水戸校本及十月丁亥紀に據て改む
○三十而立、論語爲政篇に出づ
○曰壯、禮記曲禮に三十曰壯とあり壯は原本狀に作る閣本宮本前本及類史廿八に據て改む
○生知、論語季氏篇に生而知之者上也とあるに據れり
○端玉藻云々、端は正也玉藻は冕冠の飾にて禮記玉藻に天子玉藻十有二旒とあり衣冠を端正にするの意總章は禮記月令に天子居總章左个注に大寢西堂南偏とあり寢殿を云
○寶寓、天地四方を云寓は宇に同じ原本環寓に作る寶は類史に據り寓には闇

眞人、○己巳、敍從四位下菅野朝臣人數從三位、正六位上田口朝臣箭子從五位下、○壬申、皇太子（道康）上表、奉賀天皇卌寶算、其辭曰、臣諱言、臣聞、三十而立、加之十年、德行可以治邦家、機事可以无疑慮、卽知三十九前、而通曰壯、聖人冀聽其名聲、四十以往、而所謂中、先哲欲得其善理者矣、伏惟皇帝陛下、生知睿哲、誕稟聖靈、端玉藻而御總章、懸金鏡而臨寶寓、握七百八十代之皇曆、獨富春秋、推三萬六千歲之仙齡、唯盈五八、況思下濟、滿玄澤而無涯、方略傍宣、截遐荒而有裕、斯乃一人有慶之日、兆民共賴之年、凡百臣下、歡心如一、況臣位爲諸子之長、虔奉皇慈、職爲群臣之首、祇居鴻緒、信可以顯君父之懿德、薦臣子之純誠、仍表延祚之情、設獻壽之禮、採紫珠之嘉實、用供挿頭之祥、調玉琴之薫絃、以充垂手之慶、肴核敦陳、恐其非饌、金石間奏、且將率舞、伏願中和所樂、德廣彌彰、保萬壽之無疆、懷百神之多福、人稱有道、我乃無爲、使群臣成鹿苹之歡、六方致鳧藻之感、其獻物、机二前、（一前居御挿頭花、一前置純金御杖、）御厨子四前、（二前以薫香作之、納琴四面、二前以蘇芳作之、納琴譜八十卷、）御裝束机十前、黑漆棚厨子四基、（納御菓子、）赤漆韓櫃卌合、（納衾、掛衣、）樋飯卌合、

本前本宮本に據て改む
○盈五八、卽ち四十なり
○下濟、易謙卦の彖傳に天道下濟而光明とあり
○滿玄澤、滿は原本潚に作る前本に據て改む
○一人有慶之日云々、尙書呂刑に一人有慶兆民賴之とあるに據れり共に御賀を行はせ給ふ年とて萬民共に喜ぶを云
○居鴻緒、鴻緒は後漢書順帝紀に出て皇太子たるを云
○薦臣子、薦は原本慶に作る類史に據て改む
○玉琴之薰絃、孔子家語辯樂解に舜彈五絃之琴造南風之詩其詩曰南風之薰兮可以解吾民之慍兮とあるに出づ
○垂手之慶、尙書武成に垂拱而天下治と云に同じ
○金石間奏云々、尙書舜典に於予擊石拊石百獸率舞とあり金石は鐘磬の類を云間は雜なり
○鹿苹之歡、鹿苹は毛詩小雅鹿鳴章に呦々鹿鳴食野之苹とあるに出づ序に鹿鳴燕群臣嘉賓也云々とあり鹿苹之歡は宴飲を云なり原本苹を萍に

折櫃食八十合、酒八十缶、魚菜各卌缶、水陸雜物數百捧、既而天皇御紫宸殿、音樂遞奏、歡樂終日、賜諸大夫祿、○廿四甲戌、授從四位上橘朝臣永名正四位下、從五位上石川朝臣永津正五位下、從五位下橘朝臣枝主、安倍朝臣長谷、並從五位上、正四位下笠朝臣繼子從三位、正五位下秋篠朝臣京子從四位下、從五位上大原眞人全子正五位下、○廿五乙亥、皇太子入覲、於清涼殿獻御贄百餘捧、兼設熟饌、右大臣藤原良房朝臣、及宰相兩三人、近習臣等、得陪宴席、夜深賜殿上侍臣祿、此夜、叙春宮亮從五位下藤原朝臣良仁從五位上、大進正六位上藤原朝臣正岑從五位下、雅樂權允正六位上和邇部嶋繼外從五位下、○廿七丁丑、今上皇子十九人、源氏二人、相共獻物於清涼殿、御贄熟食、充庭溢閣、音樂終日、賜祿如例、○廿九己卯、左中弁從四位上藤原朝臣嗣宗卒、故肥後守從五位下永貞之長子也、少遊學舘、從此立身、天長九年正月叙從五位下、任宮內少輔、承和二年八月遷中務少輔、四年除散位頭、八月遷民部少輔、十月任少納言、六年補右中弁、嗣宗不避寒暑、夙夜在公、天皇照其忠勤、特垂優寵、承

和五年正月七日、天皇將レ御二豐樂院一於二紫宸殿南階一欲レ駕二御輿一嗣宗以二少納言一祇二候鈴奏一趍二立大庭一天皇更駐二御輿一令レ書二嗣宗正五位下位記一供奉諸司不レ知二誰告身一相共恠レ之、至二于踏印一嗣宗預レ之、乃知二自分一不レ勝二感悅一不レ覺淚下、又至二七年八月一叙二從四位下一拜二越前守一秩滿歸來、與二伉儷一相談云、我之仕進、窮二盡於此一今則棲二遲田舍一耳、于時傍人應レ言嘔焉、嗣宗大驚自恃矣、俄叙二從四位上一拜二左中弁一此兩般榮進、銘レ肝不レ忘、豈非二至忠攸一レ感、天鑒高懸乎、每稱二此語一以爲二口實一卒時年六十二、

作る水戸校本に據て改む　○鳧藻之感、後漢書杜詩傳注に言二歡悅一如二鳧戲一藻とあるに出で其の所を得て欣和するを云　○（注）純金御杖、杖は原本枝に作る前本及類史に據て改む　○卅合、原本卅合に作る諸本に據て改む下同じ　○（注）褂衣、褂は原本御に作る諸本に據て改む　○卅領、原本卅領に作る諸本に據て改む　○繼子　嵯峨天皇宮人大日本史に源生の母と見ゆ　○京子、同天皇の更衣にて源清を生めり承和九年正月戊戌條には康子に作る　○大原眞人全子、同天皇の宮人にて源融、同勤、同盈姫を生めり眞は原本貞に作る諸本に據て改む　○宰相、參議の唐名　○十九人、類史二十八には十一人に作る水戸校本に據二三代實錄紹運錄一仁明皇子止二十四人一除二皇太子一則十三人與二國史所一レ載數合九字疑有レ誤と云　○學舘、勸學院なり　○承和二年八月、承和の二字は下文六年の上にありしを此に移せり共は下文に據るに承和五年正月既に少納言たりし事明なれば補右中弁の上にあるべきに非ず故に改め移す　○祇候鈴奏、北山抄九行幸の條に少納言奏レ鈴訖候二御輿於南階上簀子敷一とあり鈴は鈴印なり祇は原本訛れるを諸本に據て訂す　○告身、位記なり告字は閣本前本及類史六十六に據て補ふ　○與伉儷相談、伉儷は左傳成十一年に出で伉は敵也儷は偶也夫婦相敵偶するをいひ妻女の意なり　○棲遲、毛詩陳風衡門章に衡門之下可二以棲一レ遲傳に棲遲遊息也とあり　○嘔焉、嘔は原本嚾に作り閣本前本喔に作るは何れも訛なるべし今宮本及類史に據て改む嘔は集韻に音樞怒聲とあり叱する意なるべし　○銘肝不忘、原本肝を服に作り忘を忈に作る肝は類史、忘は宮本及類史に據て改む

○十二月庚辰朔、丙戌（七）、天西北有二電光一數十度、○丁亥（八）、三品上總太守基貞親王上表曰、臣基貞言、臣近披二肝膽一遠叫二彤闈一九重隔深、未レ蒙二矜許一臣

（十二月）基貞親王、淳和天皇第四皇子　○遠叫彤闈、彤は赤き飾闈は宮門なり原本彤闈を船闈に作る彤は水戸校本

に據り闕は尾本前本に據て改む
○人心所欲上天或從之云々、尙書泰誓上に民之所欲天必從之とあるに出づ
○皮冠云々、高士傳に堯讓天下於許由、由於是遁耕於中岳潁水之陽箕山之下、由沒葬箕山之巓、亦名許由山(節略)とあるに據れり皮冠は微者の冠服なり
○漢祖風高云々、後漢書逸民傳に嚴光與光武同遊學及光武卽位思其賢、乃令以物色訪之、後齊國上言有一男子、被羊裘釣澤中、帝疑其光、遣使聘之(節略)とあるに據れり羊裘も微者の服にして槩は氣慨なり
○齒簪紱、齒は列なり簪紱は已に出づ
○苦嵇生之不堪、文選嵇康與山巨源絕交書に吾直性狹中多所不堪とあるに採れり
○攸鍾、原本鍾を鐘に作る宮本水戶校本に據て改む
○飛帝、飛行皇帝の略にて轉輪聖王の別名なり轉輪王能く空中を飛行する

閭人心所欲、上天或從之、以仁、物性攸偏、明主不強之、以化、故唐堯道洽、皮冠未妨箕嶺之遊、漢祖風高、羊裘猶全富春之槩、臣幼有厭俗之志、綠叨聖主之恩、矯性勵心、強齒簪紱、欲盡忠勤而獻効、猶苦嵇生之不堪、至今已沉痼疾、不復全人、即知、天授之攸鍾、遂難以人事矯激、伏惟、聖主陛下、仁超飛帝、德駕輪王、既有鑒因果而不疑、冀賜感宿業之攸速、又臣幸以頑質、厚被聖恩、知在此身、終難報答、但望出家功德、念佛勝利、雖戒行不全、而或補萬一、若更裹頭髮、再塵印章、則生爲失志之具臣、死爲含恨之愚鬼、不任慊切之至、重亦拜表以聞、許之、○壬辰、大宰府馳驛、奏上豐後權守從五位下登美眞人直名謀叛之狀、○甲午、奉授伴馬立天照神伴酒著神從五位下、○乙巳、右大臣藤原良房朝臣獻物於淸涼殿、水陸珍味、莫不咸萃、日暮、賜殿上侍臣祿有差、○閏十二月庚戌朔戊午、四品人康親王爲上總太守、從四位下淸原眞人岑成爲左中弁、○己未、乘輿巡省京城、以錢米賑給窮者、比至囚獄司前、天皇問曰、是爲誰家、右大臣藤原良房朝臣奏言、囚獄司、於是殊降恩詔、皆免獄中罪人、群臣欣悅、俱呼

萬歲。○癸亥(十四)、叙從四位下橘朝臣御井子從三位。○庚午(廿一)、公卿已下、於侍從所、宴飲歌舞、特有勅、賜侍從已上、幷內外諸大夫等祿、各有差。先是紀伊守從五位下伴宿禰龍男、與國造紀宿禰高繼不快、於是不忍怒意、輙發兵捕高繼幷黨與人等、仍可勘申狀、官符下知已畢、而今日掾林朝臣並人馳來申云、守龍男分遣徒僕、各帶兵仗、暗中放鏑、威脅衆庶、或被執囹圄、日夜叫呼、或東西奔走、中途流離、並人諫曰、百姓有犯過者、雖云長官、須委之傍吏、任理勘決、而躬捕前人、事乖物情、龍男固拒不聽、仍脫身入京者、又高繼所進之國符偁、國造紀宿禰高繼犯罪之替、擬補紀宿禰福雄者、勅、國造者、非國司解却之色、而輙解却之、推量意況、稍涉不臣、宜停釐務、任法勘奏。此日、四品安勅內親王入道、上表還爵品、許之、

續日本後紀卷第十九

を以てなり
○輪王、轉輪聖王なり
○既有鑒因果、閣本尾本前本有を熊に作り宮本原本に同じ
○厚被、厚は原本原に作る前本宮本に據て改む
○褁頭髮云々、褁頭髮とは冠を戴くこと塵印章とは官職を帶ぶるを云
○爲失志之具臣、說苑に安命貪祿不務公事庸々與世浮沈此具臣也とあり爲すことなく徒らに官祿を食むをいふ
○含恨之愚鬼、後漢書朱浮傳に浮責彭寵曰生爲世笑死爲愚鬼とあるに據れり
○伴馬立天照神伴酒著神、神名式攝津國嶋下郡新屋坐天照御魂神社三座(並名神大月次新嘗)の內の二座なり貞觀元年五月辛巳紀參看すべし
○乙巳、原本已巳に作る此月庚辰朔、蓋乙巳の訛なること明かなれば改む

(閏十二月)人康親王爲上總太守、嘉祥三年五月甲午條重出是非決め難し　○岑成、美能王なり天長十年賜姓の事紹運錄に見ゆ　○囚獄司、拾芥抄中末に左獄近衞南西洞院西とあり　○御井子、桓武天皇の女御　○特有勅、特は原本殊に作る類史七十七に據て改む　○幷內外、幷字は閣本尾本前本及類史に據て補ふ　○徒僕、原本從僕に作る閣本前本に據て改む　○威脅、威は原本戚に作る宮本及類史に據て改む　○捕前人、原本捕を補に作る前本宮本に據て改む前字恐くは罪の訛なるべし　○高繼、狩谷氏云高繼恐衍、纂詁は一本に據るとて龍男に改む　○意況、原本意志に作る諸本及類史十九に據て改む況は狀態也近況景況の況に同じ　○安勅內親王、桓武天皇皇女、齊衡二年九月薨原本王を主に作る諸本に據て改む

○嘉祥、此二字は宮本に據て補ふ
［嘉祥三年］御被、原本被を袚に作る閣本前本に據て改む
○切吹、類史廿八に快吹に作る
○白雪、原本雪を雲に作る宮本及類史・小野宮年中行事に據て改む
○須眼下登輿、須眼の二字原本訖階に作り閣本以下空白とす類史紀略及小野宮年中行事に據て改む
○禮敬而已、禮記樂記に禮者殊事合敬者也とあり
○北面而跪、易說卦傳に聖人南面而聽天下嚮明而治とあり之を北面するは自ら其尊に居らざるなり
○羞鳳輦、羞は原本寄に作り閣本以下諸本空白とす今類史及小野宮年中行事に據る
○達庶人、孝經庶人章に夫孝者自天子至庶人云々とあり

續日本後紀卷第二十

起嘉祥三年正月盡三月廿一日

太政大臣從一位臣藤原朝臣良房等奉　勅撰

（庚午）三年春正月庚辰朔、終日雨降、先是去月廿九日亦大雨焉、因停朝賀、天皇御紫宸殿、宴侍從已上、賜御被、○（三）壬午、地震、○（四）癸未、北風切吹、白雪紛紛、天皇朝覲太皇太后於冷然院、親王以下、飲宴酣樂、賜祿有差、須臾天皇降殿、於南階下、端笏而跪、召左大臣源常朝臣、右大臣藤原良房朝臣、勅曰、被太后命偁、吾處深宮之中、未嘗見我帝御輦之儀、今日事、須眼下登輿、使得相見者、朕再三固辭、遂未得命、於卿等意如何、大臣等奏云、禮敬而已、如命而可、天皇卽登殿、至御簾前、北面而跪、于時羞鳳輦於殿階、天皇下殿、御輦而出、左右見者、攬淚僉曰、天子之尊、北面跪地、孝敬之道、自天子達庶人、誠哉、○（六）乙酉、聖躬不豫、○（七）丙戌、不御紫宸殿、勅命左右大臣行事、不奏女樂、詔授四品忠良親王三品、正四位下源朝臣融從三位、

〇橘朝臣海雄、去年五月乙丑紀に右少辨從五位上橘朝臣海雄と見え良岑朝臣宗貞も同四月辛亥紀に左近衞少將從五位上良岑朝臣宗貞と見えたるが此に從五位上を授くとあればト文恐くは誤ならむ
〇伴宿禰宗、上文伴良田連宗に作る
〇橘朝臣信蔭、橘は原本杼に作る諸本及類史九十九に據て改む
〇橘朝臣三夏、朝臣二字は類史九十九に據て補ふ
〇彌繼、彌は原本弘に作る諸本及類史に據て改む下同じ
〇穎基、原本穎を顯に作る諸本及類史に據て改む
〇清村宿禰、錄左京諸蕃に淨村宿禰陳袁濤塗之後也とあり寶龜九年十二月紀に袁晉卿淸村宿禰を賜はること見ゆ
〇西漢人宗人、宗は原本宿に作る類史及仁壽二年十二月庚午紀に據て改む
〇原福、堀本考語原を厚に作るべしと云
〇從四位上藤原朝臣長良、上は原本下に作る富本に據て改む長良は承和三年正月從四位下同十一

從四位下藤原朝臣良相從四位上、從五位下美志眞王從五位上、正六位上並野王、嗣岑王、並從五位下、正五位下滋野朝臣貞雄、藤原朝臣氏宗、並從四位下、從五位上藤原朝臣貞守、橘朝臣眞直、並正五位下、從五位下藤原朝臣並藤、文室朝臣眞室、橘朝臣海雄、良岑朝臣宗貞、並從五位上、外從五位下山代宿禰氏益、伴宿禰宗、春日臣雄繼、讃岐朝臣高作、正六位上源朝臣穎、橘朝臣信蔭、橘朝臣三夏、藤原朝臣北雄、橘朝臣末茂、橘朝臣門雄、百濟王教福、春原朝臣末繼、紀朝臣貞守、丹墀眞人棟臣、田口朝臣統範、南淵朝臣彌繼、文室朝臣雄道、藤原朝臣穎基、伴宿禰圭雄、桑田眞人虎吉、粟田朝臣碓雄、山口朝臣春方、並從五位下、正六位上淸村宿禰是嶺、桑田連安岑、西漢人(カフチノアヤヒト)宗人、並外從五位下、宴竟、賜祿有差、〇丁亥(八)、於大極殿、修最勝會、敍無位伊勢朝臣與子從五位上、無位平朝臣可賀子、藤原朝臣原福、並從五位下、〇甲午(十五)、外從五位下名草宿禰安成爲大外記、從五位下桑田眞人虎吉爲造酒正、從四位下淸原眞人長田爲彈正大弼、從五位下紀朝臣貞守爲左馬助、參議從四位上藤原朝

年正月從四位上に進む

〇源朝臣安、嵯峨天皇々子
〇源朝臣多、仁明天皇々子
〇源朝臣冷、同上
〇嗣岑王、王字は宮本及丙戌紀に據て補ふ
〇踏歌也、也字恐らくは衍か

臣長良爲兼伊勢守、左衞門督如故、從五位下南淵朝臣年名爲尾張守、從五位上丹墀眞人石雄爲武藏守、從五位下丹墀眞人棟臣爲上總介、從五位下紀朝臣好雄爲美濃介、四品本康親王爲上野太守、從五位下藤原朝臣北雄爲下野介、從五位下藤原朝臣世數爲越後守、從五位下當麻眞人鴨繼爲兼介、侍醫如故、從五位上安倍朝臣長谷爲丹波守、從五位下坂上大宿禰貞守爲但馬介、從五位下笠朝臣岑雄爲石見守、從四位下長岑宿禰高名爲播磨守、從五位下出雲朝臣岑繼爲介、正五位下藤原朝臣貞守爲兼備前介、式部少輔如故、從四位上源朝臣安爲備中守、從五位上文室朝臣眞室爲紀伊守、從四位上源朝臣多爲阿波守、從五位下橘朝臣岑雄爲介、從四位上源朝臣冷爲讃岐守、從五位下橘朝臣安吉雄爲伊豫權介、三品葛井親王爲大宰帥、從五位下南淵朝臣彌繼爲肥前守、從五位下常道眞人兄守爲豐前守、外從五位下出雲朝臣全嗣爲介、從五位下賀茂朝臣弟岑爲豐後守、從五位下嗣岑王爲日向守、〇十六乙未、垂御簾覽踏歌也、宴侍從已上、賜祿有差、〇十七丙申、天皇不御

豐樂院、勅遣大臣行射禮、○己亥、此日內宴也、緣聖躬不豫、不御仁壽殿、於清涼殿、垂御簾覽舞妓、大臣已下、文人已上陪宴、日暮、賜祿有差、○辛丑、奉授攝津國豐嶋郡阿比太神從五位下、○壬寅、地震、○乙巳、勅、如聞、頃來盜賊爲群、黎甿被害、或暗中放火、或白晝掠人、宜令左右京職、及五畿內諸國司、申明舊章、速搜捕、若致稽懦、准法科責、○丙午、勅、鎭國家、攘疫癘、佛力賴之、宜令五畿內七道諸國、修灌頂經法、○己酉、有如流星者、經天落東、其大如月、光色赤青、○二月庚戌朔、聖躬不豫、皇太子侍殿上、公卿盡候、○辛亥、勅、四品安勅內親王依願令入道、宜封戶及帳內資人品田、收公、但无品、本封、帳內資人、依舊行之、○壬子、分遣六衞府佐已下、覘捕京中群盜、又令左右近衞各十人巡撿東西二市、有勅、封戶百烟、特給源朝臣良姬、○甲寅、御病殊劇、召皇太子及諸大臣於床下、令受遺制、遣四衞府及內竪等、或賚御衣、或賚綿布、分散四方、誦經諸寺、左右馬寮御馬六疋、奉鴨上下、松尾等名神、放諸鷹犬及籠鳥、唯留鸚鵡、又下知近江國、禁諸殺生、緣梵釋寺修延命法故也、請僧綱十禪師、及有驗者、於御簾

○舞妓、內教坊に屬す
○阿比太神、神名式攝津國豐嶋郡阿比太神社（大月次新嘗）今豐能郡箕面村櫻、太は原本大に作る
○黎甿、甿は原本眦に作る前本中本宮本に據て改む
○掠人、掠は原本椋に作る諸本に據て改む
○搜捕、此下恐くは之字を脫す
○疫癘、類史癘を痢に作る
○灌頂經、大藏目錄に佛說灌頂經十二卷東晉帛尸梨蜜多羅譯さあり
(二月)安勅內親王云々、去年十二月庚午紀に見ゆ
○壬子、子は原本午に作る紀略に據て改む
○分遣、原本分を介に作る諸本及紀略に據て改む
○覘捕、原本捕を補に作る諸本に據て改む
○左右近衞、右字は紀略に據て補ふ
○特給、原本特を恃に作る諸本に據て改む
○良姬、嵯峨天皇々女
○遺制、原本遺を遣に作る諸本及類史紀略に據て改む

外、令奉加持、以絹十二疋、爲續命幡、懸十二大寺刹、左右馬寮各調走馬十疋、候於八省東廊下。是日、諸衛府警固。○乙卯、御體疲殆、衆僧入於御簾中、繞御床而奉加持。○丙辰、遣使告御病狀於柏原山陵、（桓武）宣命曰、天皇我詔旨止、掛畏支柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃者御病發天、惱苦比大坐須、掛畏御陵乃、護助賜波无爾依天之、平久御坐倍之止所念行天奈毛、參議左兵衛督從四位上藤原朝臣助、從四位下右馬頭藤原朝臣春津等乎差使天、申奉出須此狀乎聞食天、御體平安爾、寳祚無動久、護賜比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申。是日、大法師眞頂與北山近士觀善、特入御簾中奉加持、觀善誓曰、御病不除、不更起坐、不復飲食。○戊午、分遣内竪、誦經諸寺、各綿一連爲布施。○己未、遣使賑郵京中貧民。○壬戌、以綿七十屯、誦經京邊七箇寺。○甲子、請名僧六十口於紫宸殿、限三箇日、轉讀大般若經、又請天台宗座主前入唐請益傳燈大法師位圓仁、及定心院十禪師等於仁壽殿、令修文殊八字法。○乙丑、陸奥出羽按察使從四位下藤原朝臣富士麻呂卒、高野天皇（稱德）參議從三位式部卿巨勢麻呂朝臣之

○改む
○梵釋寺、寺は原本等に作る尾本中本谷本及類史に據て改む
○請僧綱、請は原本諸に作る中本谷本及類史に據て改む
○續命幡、勝寶六年十一月紀（續紀上四〇一頁）に出づ
○十二大寺刹、寺名不詳
○遣使、遣字は類史紀略に據て補ふ
○柏原、原本柏を栢に作る諸本に據て改む下同じ
○中奉出須、申は諸本及類史に據て補ふ
○平安爾、原本平を乎に爾を不に作る平は類史に據り爾は前本中本に據て改む類史は爾を久に作る
○眞頂、頂は宮本雅に作り類史紀略並に原本に同じ
○北山近士、北山に住める優婆塞なるべし名義集卷一に優婆塞西域記云二鄔波索迦一唐言二近事男一言二近事一者親二近承事諸佛法一とあり山崎校本は堀本に據れりとて近を道に改むるは非なり
○定心院十禪師、承和十三年八月丙戌紀に見ゆ

○令修、修は原本候に作る諸本及類史百七十八、百八十七に據て改む
○高野天皇、山崎校本は堀本考語に依り皇下に朝字を補ふ
○赴任、原本赴を起に作る諸本及類史に據て改む
○疝、抄疾病部に說文云疝久癖也、一名發背と見え懸瘡なり
○卌七、卌は原本卅に作る諸本及類史に據て改む
○實敏、釋書三に傳あり
○明詮、同書二に傳あり
○光定、上に出づ
○圓鏡、傳詳ならず
○大德、釋氏要覽に僧輝記云行滿德高因大德と見え高僧を云
○翹楚、毛詩周南漢廣篇に翹々錯薪言刈其楚とあるに出で衆中のすぐれたるものなり原本楚を堯に作る類史に據て改む
○親王者、此三字紀略に據て補ふ、
○今上之同産也、今上卽ち仁明天皇は檀林皇后の所生なり然るに紹運錄一代要記には母は大原氏とあり此と合はず

曾孫、從五位上眞作之孫、正五位下村田之第二子也、少遊大學、頗涉史漢、天性溫雅、兼便弓馬、天皇在東宮之時、稍蒙恩遇、天長十年正月任少進、尋遷右近衞權將監、同年二月天皇受禪踐祚、卽叙從五位下、轉任少將、承和四年正月兼阿波介、九年正月叙從五位上、七月叙正五位下、轉任中將、十二年正月叙從四位下、久在宿衞、能得士卒之歡心、天皇謂有將帥之才、十三年出爲陸奧出羽按察使、赴任日、天皇引於淸涼殿、恩詔鄭重、賜被衣幷綵帛有數、嘉祥二年冬、有勅還京、三年春疝發背卒、人皆悲惜之、時年卌七、○丁卯(十八)、讀經竟、布施有差、又施度者各一人、○戊辰(十九)、太皇太后憂念天皇之餘、悶絕數數、中使問起居者、相望於道、○庚午(廿一)、地震、

○辛未(廿二)、以三論宗少僧都實敏、法相宗大法師明詮、天台宗大法師光定、摠持門大法師圓鏡等爲座主、於淸涼殿、限三箇日、講法華經、諸宗大德翹楚者三四人預席、發揚大義、各持矛楯、天皇隔御簾而聽之、○甲戌(廿五)、无品秀子內親王薨、親王者、嵯峨太上天皇之皇女、今上之同產也、遣兵部大輔從四位上豐江王、木工頭從四位下興世朝臣書主、右京亮從五位

上橋朝臣枝主、左京亮從五位下飯高朝臣永雄等、監護喪事、○丙子、遣使誦經京城及平城四十九寺、各綿一連爲布施、又以續命幡四十旒、各懸刹柱、限三箇日、修延命之法、又於豐樂院、令眞言宗修護摩法、勅、攝津國荒廢田陸拾壹町爲冷然院田、○三月己卯朔辛巳、散位從四位上大中臣朝臣淵魚卒、故南朝右大臣正二位淸麿朝臣之孫、正五位下繼麿之第三男也、大同四年有勅、以功臣之後、叙從五位下、弘仁六年任神祇大副、厥後稍經階級、登于四位、卽轉伯、尋兼攝津權守、天長十年叙從四位上、承和十年上表致仕、立性謹密、諳練神事、自弘仁六年、至承和九年、都廿八箇年、兼掌伊勢大神宮祭主、自臥家園、不廁人物、幽閑送日、藥餌待終、時年七十七、○癸未、地震、請名僧百口於紫宸殿、限三箇日、轉讀大般若經、○丙戌、百僧歸却、布施各有差、又施度者各一人、遣使誦經兩京及畿內、近江、丹波等國一百寺、各綿一連爲布施、又圖畫帝釋像百鋪、安置件百箇寺、各以承和錢一千文爲燈料、此日、織部司言、元來無印、行事有妨、勅、鑄造充之、○戊子、遣使誦經京城七箇寺、○己丑、令大

○京城及平城、及平城の三字は閣本前本谷本及類史卅四に據て補ふ
○令眞言宗、原本令を命に作る類史に據て改む
○護摩、大日經疏十五に護摩是燒義也由護摩能燒除諸業と出て智慧の火を以て煩惱の薪を燒くを云卽ち火を焚きて佛に祈る法なり
○冷然院田、太皇太后の供御料に充てられしなり
(三月)南朝、承和十一年九月紀に見ゆ、宮本朝下に臣字を補へり
○諳練、原本諳を暗に作る山崎校本に據て改む
○布施各有差、各字は類史卅四に據て補ふ
○請戒、山崎校本に請恐受と云り

法師道詮等請戒、主上口受永不殺生、復修理破壞寺百院、復遣使誦經十三大寺、○庚寅、鈴印櫃鳴、聲如振、膳部八人之履、共爲鼠嚙、又內印之盤褥、爲鼠喫亂、○壬辰、卜食、申柏原山陵告祟、仍遣使奉宣命曰、天皇我大命止、掛畏支柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃間物恠在爾依天、卜求禮波、掛畏御陵爲祟賜倍利止申利、因茲恐畏己止无極、若久波御陵內爾、犯穢世留事毛也在止、令巡察无止爲天奈毛、參議從四位上行左兵衞督藤原朝臣助、從四位下行宮內大輔房世王等乎差使天、奉出須此狀乎聞食天、御體平安爾、寶祚无動久、護賜比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申、○甲午、復奉宣命曰、天皇我大命止、掛畏岐柏原乃御陵爾申賜倍止申久、頃間御占申爾、爲祟賜倍留爾依天、使臣乎奉出天、令巡察留爾、御陵內爾斫樹留事在氣利、此乎午聞食、恐畏万利天、御陵司等乎波、法隨爾勘賜比、御陵守等乎波、替退賜己止訖奴、是以參議從四位上行左兵衞督藤原朝臣助、民部大輔從四位下基兄王等乎差使天、申謝奉出、此狀乎聞食天、天皇朝廷乎

○受永不殺生、不殺生は釋氏要覽に五戒一不殺二不偸盜云々と見ゆ原本殺生を倒置し不字なし類史卌四及紀略に據て補ひ改む
○鈴印、職員令に大主鈴二人掌レ出二納鈴印傳符飛驛函鈴一少主鈴二人掌同二大主鈴一とあり
○膳部、大膳職に屬し員數百六十人あり
○內印之盤褥、公式令に天子神璽內印方三寸五位以上位記及下二諸國一公文則印と見ゆ原本之を印に作る宮本及類史卌六に據て改む
○卜食、神祇令義解に謂凡卜者必先墨畫レ龜然後灼レ之兆順食レ墨是爲二卜食一とあり
○大命止、止字は類史卌四に據て補ふ
○掛畏岐、岐は原本空白とす今諸本及類史に據る
○申利、利の上世字を脫せるか類史は利字もなし
○无極、極は原本波に作る諸本及類史に據て改む
○无動久、原本動を動に作る諸本に據て改む
○恐美恐美毛、原本恐美二字なし類史に據て補ふ

○綿綿、素問方盛衰論注に綿々乎謂動息微也とあり
○屬纊、禮記喪大記に疾病男女改服屬纊以俟絕氣とあり
○持呪、呪は原本見に作る諸本及類史に據て改む
○五輪、地水火風空なり五體をいふ
○左右非違、撿非違使を云山崎校本は宮本卜本及堀本考語に據れりとて非上に撿字を違下に使字を補へり
○除盗之外、同本に意を以て改むと云て盗上に强字を加ふ何れも私意なり
○貞守、類史卌四眞守に作る
○卌餘襲、原本卌を卅に作る諸本に據て改む
○齊之、伊豆國に流されしこと元年十二月己丑紀に見ゆ
○永直、土佐に流されしこと同年同月乙卯紀に見ゆ
○直名、謀叛のこと去年十二月壬辰紀に見ゆ
○龍男、去年閏十二月庚午紀に見ゆ
○七佛藥師法、叡山四箇大法の一にて藥師瑠璃光

御體平安爾、實祚无動久、護賜比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申。此日御體綿綿、事極屬纊。諸名僧等、持呪誓願、五輪投地、不暫休息。左右非違、獄中人除盗之外、悉從放免。○乙未、遣固關使。右中弁從四位下藤原朝臣氏宗、散位從五位下御春朝臣眞濱爲近江國使。散位從五位下藤原朝臣菅雄爲美濃國使。右衛門權佐從五位下藤原朝臣春岡、散位外從五位下上毛野朝臣綱主爲伊勢國使。正五位下行式部少輔兼備前介藤原朝臣貞守爲左右兵庫使。殊令賚御衣卌餘襲、綿三百屯、馳使誦經諸寺。○丙申、配流人和氣朝臣齊之、讃岐朝臣永直、特聽入京。餘並配近國。豐後權守從五位下登美眞人直名、紀伊守從五位下伴宿禰龍男等、皆從放免。○丁酉、於清涼殿、修七佛藥師法。畫七佛像、懸御簾前。七重輪燈立於庭中。復於紫宸殿南庭、新度十人。先是有詔、度五百人。是日、天皇落飾入道、誓受清戒。四品中務卿宗康親王、從四位上阿波守源朝臣多、同時入道。並天皇之皇子也。時人莫不悲之。○己亥、地震。帝崩於清涼殿。時春秋卌一。諸衛府禁衛嚴密、左右近衛少將各一人、率近衛等、陣

於皇太子直曹、參議從四位上左兵衞督藤原朝臣助、率左右近衞少將將曹等、齎天子神璽、寶劔、符節、鈴等、奉於皇太子直曹、從四位下藤原朝臣衞監左馬寮、從四位下清原眞人瀧雄監右馬寮、散位從五位下小野朝臣千株、少納言從五位下縣犬養宿禰氏河監鈴印櫃、皇太子御輦車、廻於東宮、左右大臣已下導從、六衞府陣列、如行幸之儀、○庚子、（廿二）任御葬司、（事具長案）○辛丑、（廿三）左右近衞陣著鎧甲、嵯峨太皇太后依病入道、○癸卯、（廿五）奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、遺制薄葬、綾羅錦繡之類、並以帛布代之、皷吹方相之儀、悉從停止、帝叡哲聰明、苞綜衆藝、寂耽經史、講誦不倦、能練漢音、辨其清濁、柱下漆園之說、群書治要之流、凡厥百家、莫不通覽、兼愛文藻、善書法、學淳和天皇之草書、人不能別也、亦工弓射、屢御射場、至皷琴吹管、古之虞舜、漢成兩帝不之過也、留意醫術、盡諳方經、當時名醫、不敢抗論、帝嘗縱容謂侍臣曰、朕年甫七齡、得腹結病也、八歲得臍下絞痛之痾、尋患頭風、加元服後三年、始得胸病、其病之爲體也、初似心痛、稍如錐刺、終以增長、如刀割、於是服七氣丸、紫苑、生薑等湯、初如有

七佛本願功德經に見えし藥師瑠璃光如來以下の七佛を祀りて祈禱する御修法なり
○源朝臣多、纂詁に多を明に作りて明原作多按明嵯峨第十皇子至此改名素然居横川仁壽二年寂稱横川宰相入道以曾拜參議也明與多筆畫相近本書故誤耳と云り
○卅一、原本卅一に作る諸本及紀略に據て改む
○陣於皇太子、陣は原本陳に作る紀略に據て改む
○右馬寮、原本右を左に作る諸本に據て改む
○縣犬養宿禰、原本縣犬を縣太に作る諸本に據て改む
○如行幸之儀、狩谷校本に一本に此下但無警蹕の四字ありと云
○（注）長案、矢野翁曰長案按或稱曹案及草案符宣抄可案色葉字類抄云寫官符宣旨爲長案又云省符官史生所抄進府宣旨長案抄符事也と云
○近衞陣、陣は原本陳に作る諸本に據て改む
○著鎧甲、非常を警備するなり
○深草山陵、諸陵式に深

効、而後雖重劑、不曾効驗、冷泉聖皇(淳和)憂之、勅曰、予昔亦得此病、衆方不効、欲服金液丹、幷白石英、衆醫禁之不許、予猶强服、遂得疾愈、今聞所患、非草藥之可治、可服金液丹、若詢諸俗醫等、必駮論不肯、宜喚淡海海子細論問、隨其言説服之、虔奉勅旨、服玆丹藥、果得効驗、兼爲救解古發、設自治之法、世絶良醫、倉卒之變、可畏故也、今至晩節、熱發多變、救解有煩、世人未知朕躬之本病、上皇之勅旨、必謂妄服丹藥、兼施自治而敗焉、宜記由來、令免此謗、恭遵詔旨、記而載之、帝自從少小、聖體尫羸、然而負扆之年、既登十八、仙齡之算、亦踰四十、求諸中古、應无慙德、蓋由修善行仁、服食補養之力者歟、

續日本後紀卷第二十

草陵平安宮御宇仁明天皇在山城國紀伊郡と見え同郡深草村深草にあり
○鼓吹方相、喪葬令に凡親王一品方相轜車各一具鼓一百面大角五十口小角一百口幡四百竿金鉦鐃鼓各二面楯七枚義解に謂方相者蒙熊皮黄金四目玄衣朱裳執戈揚楯所以導轜車者也とあり
○柱下漆園之説、史記老莊申韓傳に老子周守藏室之史也、注に老子爲柱下史即藏室之柱下因以爲官名、また莊周嘗爲蒙漆園吏とあり老莊道家の説を云なり柱は原本桂に作る閣本尾本淀本に據て改む
○雑書治要、五十卷唐魏徴撰
○書法、法字は尾本前本宮本等に據て補ふ
○亦工弓射、原本亦を並に作る閣本尾本に據て改む
○古之虞舜、家語に舜彈五絃之琴とあり ○漢成、或は漢元の誤にあらざるか漢書元帝紀贊に元帝鼓琴瑟吹洞簫云々と見ゆれども成帝好樂の事は未だ考へず ○縱容、從容に同じ縱従通す ○七氣丸、抄香藥部に七氣丸治七氣病七氣者寒熱氣之類其狀各異也とあり ○紫苑生薑、抄香藥部に紫苑丸生薑湯あり ○金液丹、抄香藥部に金液丹一名玉液丹又靈景丹神化丹玄應丹又不老不死丹とあり ○俗醫、原本醫上醫字あり堀本に據て削る ○淡海海子、原本淡海を海淡に作る水戸校本に據て改む內藤氏曰蓋當時之尚藥也と ○古發、狩谷校本に本朝醫考古作石とあり ○施自治、施は原本絶に作る卜本宮本谷本に據て改む ○此謗、原本謗を榜に作る諸本に據て改む ○恭遵、原本遵を適に作る諸本に據て改む ○帝自從少小、自は紀略に據て補ふ諸本帝下一字空白とす ○負扆之年、淮南子に負扆而朝諸侯とあるに出で即ち在位なり

○寛文八年、明暦四年に後るゝこと十年なり

續日本後紀二十卷、是仁明帝之實錄、而忠仁公之所撰也、茲書一繙之、則上世之善政、往昔之殊行、可坐見焉、好古之士、不可以不窺之、往者有薦紳先生、以此書屬余、請以點竄之、余思之、本朝之古典、非啻殘衍、蠹魚亦害之、殆非集會群籍、參考同異者、奚得爲其完好、以故雖固辭不饒、遂交朱墨、頗以按之、然而其書偶轉寫於書林、仍今書林氏欲命之新鍥、再請余訂正、余亦辭不措、乃草草看過、聊以加毫、間有脫簡重出、庶乎君子改焉、

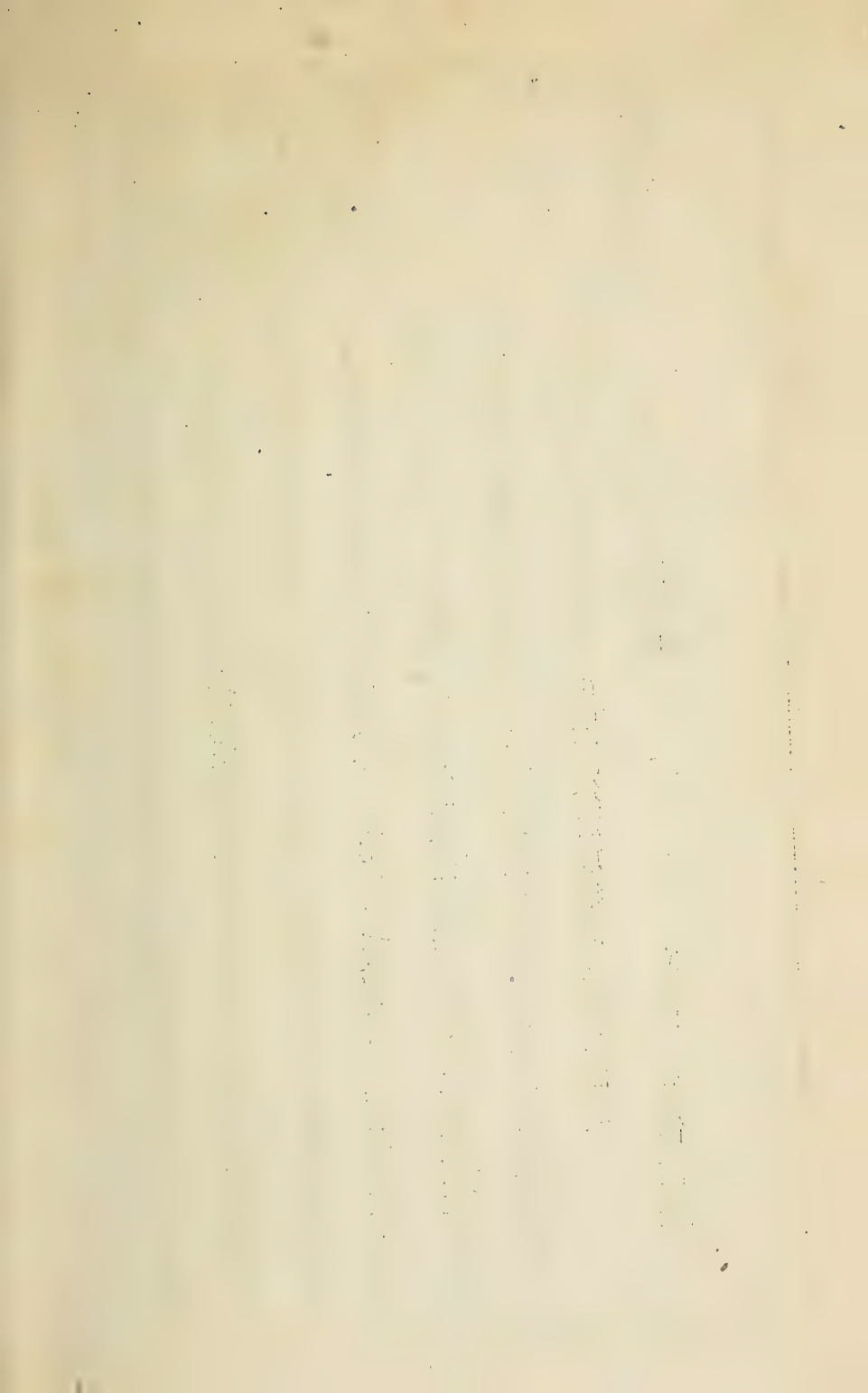
寛文八戊申孟冬穀旦　　立野春節識

○山崎校本に此文一篇原无今以端本加とあり此及序寛文八年の序文を參考するに、立野氏寛文本の出版に先ちて既に此書を校訂し、好書家の間に愛藏せられしが、後書肆林和泉掾の手に依て刊行せられしものなり、其間の消息は此序文に徴して明かにすることを得、故に今山崎校本に據て此に加ふ

○戊戌、明暦四年即ち萬治元年にて續紀上木の翌年なり

書續日本後紀後

頃年所出坊間之續日本紀、以余嚮點之、今亦有薦紳先生、偶以斯書相示曰、凡觀本朝之古典、率皆無不殘衍、仍有之蠹魚亦害之、殆非沈潛參考者、烏有得其梗概、吾日者見子所點之國史、乃知其辛勤、此書也、吾家之金匱、而雖未嘗不外見、庶幾子一撿之、少加點竄可矣、余固辭不克、且喜其先政往行之可觸眼、而遂諾之、雖然余愁以靑囊之務、似世事無監、是以草草看過、不弗熟覽、且點且訂、略以終之、實可比之燕泥、何爲答君子之命哉、雖間有脫簡重出、强不爲之取捨、而俟來哲而已、

明暦戊戌孟陬穀旦　立野春節謹識

昭和十五年七月二十七日印刷
昭和十五年七月三十一日發行

増補 六國史
卷七
（續日本後紀）

豫約頒價 金二圓

編纂者 佐伯有義
東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地

發行者 櫻木俊晃
東京市麴町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社

印刷者 小坂孟
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 東京 大阪 朝日新聞社